
I n f i n i t e ・ S ・ D e s t i n y ～怒れる瞳～

泉海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I n f i n i t e ・ S ・ D e s t i n y 怒れる瞳

【Nコード】

N 8 2 7 6 W

【作者名】

泉海斗

【あらすじ】

白騎士事件・・・、その元にて日本の危機を救ったとされる一人の騎士をまるで射殺すようにしていた少年がいた。

彼は事件で家族を失い、残されたのは父親の研究の試作品だけ。だが、彼はそれを持ってIS学園に入学する。

怒れる瞳に映るものとは一体・・・。

第三章『惑える二人』を執筆中!!

*自身のホームページでも記載しています。

*タイトル再度変更しました。

PHASE00 プロローグ（前書き）

不定期更新ですが、よろしくお願いします。

O P l ↓ i g n i t e d < T . M . R e v o l u t i o n >

PHASE 00 プロローグ

また夢を見ている。もう二度と見たくないと思っている夢だ。

あの日はとても楽しい日になるはずだった。そう・・・、なるはずだったのだ。だが、その楽しい日・・・久しぶりの家族旅行で行った場所で・・・、家族を失った。

しかし、その家族は周りの観光客や現地人たちとともに走っていた。何故走っていたかというと、この日本のまさに少年たち家族がいる場所に向かってハッキングされた基地からミサイルが2000発以上放たれたというのだった。

その犯人は父よりも早く世界に対して宇宙に進出するためのマルチスーツ・・・『インフィニット・ストラトス』通称『IS』というものを開発した篠ノ之束だという。

何故彼女がこのような行動に出たのかは分からないが。後になって考えたことは、彼女が世界に対してISの理論書を提出したが、全く相手にされなかったと言うことに対して、強引にでもその可能性を示したかったのだということだった。

だが、どうして自分たちが人質に取られなければいけないのだろうか。幼いながら少年は考えた。周りからは悲鳴や泣き叫ぶ声が聞こえる。

我先にと前を走る者たちを突き飛ばして走っていく。突き飛ばされた人はその場に倒れ、後続の人たちに罵詈雑言を吐き捨てられたり、ふまれたり悲慘な状態になっていた。

少年はそんな倒れた人を見て何も使用としない自分が情けなく思った。こんな小さなからだで向かっていったら確実に人の波にさらわれ家族とも逸れてしまう。彼は怖かったのだ。そして、何もできない自分が嫌で仕方がなかった。

「もう少しだ！！もう少しで安全圏内だ」

ミサイルが落ちてくるだろう場所を特定し、それによって警察が避難誘導し行っていた。彼らだって逃げたいだろう。しかし、使命があるのだ、そして覚悟があった。そんな彼らを見て少年は流れに乗って進んでいく。

「お母さん、もう疲れたよー」

「朱雀、もう少しだから頑張って！！」

母親の手に引っ張られている妹の朱雀が疲れた顔をして言う。まだ6歳という小さなからだでここまで走ってきたのだ。疲れないわけがなかった。体力に自信がある少年はそこまでではないが、いい加減着かないのかとイライラを募らせていた。

「飛鳥、お前は大丈夫か？？」

「ん？？ああ、心配要らないよ、父さん」

「もう少しだ、もう少しだけ頑張ってくれ」

両肩にたくさんの荷物を持って走る。重い荷物のベルトが肩に食い込んで痛みが走る。だが、必死に歯を食いしばり、走る、走る。すると誰かが空を指差して叫ぶ。

「み、ミサイル！！」

その瞬間誰もが悲鳴を上げ、早くいけと前の者たちを急かす。少年・・・飛鳥の家族もその波に飲まれながらも先を進む。口が渇く、胸が痛い、足が重い、揺れる度に食い込む荷物のベルトが痛い。

「お父さん、お母さん!!」

「ああ、早く行くぞ!!」

「朱雀、もう少しだからね。飛鳥、大丈夫??」

「な、なんとか」

飛鳥は乱れる息を整えながら再び走り出す。ちらりと肩越しにミサイルが飛んできている方向を見ると、一機の白い騎士がたった一本の刀で次々とミサイルを打ち落としていったのだ。

必死に走る。ただただ生き残るために。死んでたまるかという気持ちで必死で走る走る走る。足がまるで無限に稼動するかのごとく、ものすごい速さで動いていく。これが火事場の馬鹿力というものだろうか。

必死に逃げるものたちをあざ笑うかのように、次々と遠くのほうにミサイルが落ちていく。

人々の悲鳴が響き渡る。近くで着弾した爆音が耳から一瞬であるが聴覚を奪っていく。平衡感覚を失いかけるがすぐさま体勢を立て直し走り出す。

更に後方で爆発が起きる。徐々に近づいてきているミサイルに対してアスカは恐怖に身を震わせる。どうしてこうなった。どうして自分たちはこうして逃げ惑わなければいけないのか。どうして自分たちはこうやって命の危険にさらされなければいけないのか。

どうしてどうしてどうしてっという疑問に対して、酸素の少なくなり、ずきずきと痛む頭で考えようにも分からなかった。

爆発するミサイル。吹き飛んでいく人たち。地面に叩きつけられ、あるものは木っ端微塵にされ、あるものは建物に叩きつけられ、それぞれ命を散らしていく。見ているわけではない、それでもそんな嫌な音が後ろから聞こえてくるのだ。そして聞こえてくる、まるでゾンビのように地を這って来るような感覚で助けて・・・痛いっど・・・

飛鳥は頭を振って無理やり忘れようとした。

そして、更に進んでいく途中。激しい揺れで人々の恐怖がピークとなる。われ先と列を作っていたものを崩して周りの者たちは関係無しと走り出していく。当然アスカたちの家族もその波に巻き込まれる。すると、朱雀の小さな悲鳴のような声上がる。

「あ、朱雀の携帯!!」

「え?」

朱雀の手を伸ばす砲口にからからという音を立ててかわいらしい携帯電話が転がっていく。飛鳥はそれを見て、そして、朱雀を一瞥する。

誕生日にねだりにねだってようやく買ってもらったものだ。こんな小さな子どもが持つのはどうかという考えもあるが、防犯携帯ということで許しを得ていたのだ。

たくさん友達との通話をしては母親にしかれる姿を何度も見て

いた。そのたびにふと笑みを浮かべてしまっていた自分を思い出す。

「いいから行くわよ！！携帯だったらまた買ってあげるから！！」

「いーやー。あれがいいの！！」

「朱雀！！」

「やだー！！」

駄々をこねる朱雀。あたりから人がなだれ込んできて、からだにぶつかるたびに罵倒される飛鳥。言い返したくともその権利は自分にはなかった。突っ立っている自分たちが悪いのだ。

とうとうしゃがみこんでしまった朱雀。このままだと間に合わない。取りに行こうとしている朱雀を母親が必死に引きとめている。

飛鳥は意を決してこう言う。

「俺が取ってくるよ」

「ちょっと待て、飛鳥！！」

「危険よ、やめなさい！！」

飛鳥は走り出していた。後ろから両親の声が聞こえたが、真っ直ぐに朱雀の携帯の方へと向かっていく。

走ってくる人たちにぶつかるたびに怒声を浴びせられるが我慢して携帯電話を探していく。どうやら走ってくる人たちに蹴り飛ばされて相当と浮くに言ってしまったようだ。

いつの間にかかなりとおくまで来ていたからそう感じられた。そしてようやく見つけたときには人の波から少し離れてしまったところにポツリとかなりぼろぼろになったかわいらしいピンクの携帯電話

話があった。

蹴り飛ばされていたためかなり汚れていたが、画面などのデータは無事なようだった。そしてそれを胸ポケットに入れて戻ろうかと立ち上がった瞬間だった。

突然周りが光に包まれた。眼を開けていられないくらいの閃光。そして、耳を劈くような轟音が響くと思ったら、突然吹き荒れる爆風。小さな飛鳥のからだは投げ飛ばされるようにして地面に叩きつけられた。

高いところから地面に叩きつけられ、そのまま地面を滑っていく。かなりすりむいたようで体が半分激痛の襲われている。

「ぐ……。い、一体何が……」

苦悶の声を漏らしながら痛む半身を抱く感じでゆっくりと体を起こす。ゆっくりと赤い瞳を開けていくとそこに映ったのは、死体死体死体……。炎が燃え上がり、地面がめくりあがり、えぐられ、蹂躪されている。

四肢が吹き飛ばされ、脳がぶちまけられ、内臓がまるで虫のように体から這い出ているように見えた。首がない死体もあった。胴体が真っ二つになっており、半身がどこかに吹き飛んでいるものもある。更に近くにあった木に突き刺さっている死体もある。

「オエエエエエー!!」

思わず胃から急激に上がってきたものを吐き出してしまった。びちゃびちゃと手をついた周りに胃液とともに食べたものが吐き出さ

れていた。異臭がする。思わず鼻を押さえてしまった。

立ち上がり、ふらふらとした足取りで家族の待つ場所へと戻っていく。

「あははは・・・、なんだよこれ」

あたりには先ほどまで逃げ惑っていた人たちの死体でいっぱいであつた。踏み歩く場所もなく。死体をふんでいくしかない。柔らかくなった肉がぐしゃりぐしゃりと奇妙な音を立ててつぶれていく。

変な感覚が足から背筋を突き刺していく。まるで自分が皆を殺しているような感覚に襲われた飛鳥。ごめんなさい、ごめんなさいと呟きながらその道を歩いていく。

ミサイルが未だ全機落とされていないように向こうでは爆発が起きている。しかし飛鳥には今はそんなことはどうでも良かったのだ。ただ妹に携帯を渡して早くここから逃げようと両親に言いたかった。

まだ旅行が残っている。旅行のお土産や楽しかった思い出話を皆に話すつもりだったから。飛鳥はただ歩いた。大きくまるで悪魔が爪で地面を抉り取ったかのように大きな段差ができており、そこにも死体が積み重なるようになってあつた。

まだ生きているような人も奇跡的にいたが、飛鳥は見捨てた。手を伸ばしてきた人がいた。目は見えていない。多分わずかな音を聞いて手を伸ばしてきたのだろう。飛鳥はそんな人の上も歩いた。小さく悲鳴を上げ、事切れた・・・。

「ごめんな・・・、ごめんな・・・」

小さな女の子を庇うようにして死んでいる母親がいた。少女もぐったりとしており、握っていた熊のかわいらしい人形の目が取れかかっていた。

そして、皆が目印になるように立っていた電柱が見えてきた。大きく折れ曲がり、熱で幾分か溶けている。だが、そこには確かに家族がいた。家族だったものがあったと言ったほうが良いだろうか。

父の、母の、そして妹の朱雀の体があらぬ方向に折れ曲がり、四肢は引きちぎられ、内臓が飛び出している。

「ア・・・アア・・・アアアアアア！！」

ガクリとひざをついて崩れ落ちてしまう飛鳥。ポロリと手を着いた地面に落ちる朱雀の大切な携帯電話。パカリと開いて、そこに待ち受け画面が移る。家族全員で写った集合写真がそこにあった。

もう二度と戻ることのない過去・・・もう二度と戻ることのない日常・・・もう戻ることはない暖かな生活・・・もう二度と戻らない・・・家族。

抱き寄せたのは手元に転がっていた朱雀の片腕であった。かわいらしかったワンピースは土ぼこりで汚れてしまい、爆炎で所々焼けてしまっている。そんな朱雀の腕と携帯電話を抱き寄せ、空を見上げた。

そこには次々とミサイルを切り落としていく白い騎士の姿があった。その騎士の背中にある翼から、まるで天使のように見えた。だが、このときの飛鳥からすれば、自分から大切なものを奪って言った。

た悪魔にしか見えなかった。

喉元に何かがこみ上げてくる。怒り、悲しみ、恨み、憤り……どの言葉でも決して形容することができないほどの激情というものがあつた。それはまるで紅月飛鳥という小さなもろい檻を破壊しようとして中から出てくる猛獣のようであつた。

「ウワアアアアアアアアアアアアア！」

飛鳥は吼えた。まるで猛獣の雄叫びのごとくその形容しきれない感情というものが飛鳥の小さなからだを食い破って出てきたのだ。今まで出したことのないようなその叫び声に、飛鳥自身が驚いていた。

空に舞う天使の姿をした悪魔の騎士と、更に上空で見ているだろう神になったつもりであろう篠ノ之束。その姿がまるで血のように怒りに染まった真っ赤な瞳に焼き付けられる。その圧倒的なまでのISの……『白騎士』の力の前に、10歳という小さな飛鳥はあまりにも無力であつた……。

ふと明るい光が眼に差し込んできて思わず眉間にしわを寄せるようにして唸る。ごろりと寝返りをうつそこはベッドの上。ゆっくりと眼をあけるとその赤い瞳に入ってきたのは二人の少女の姿だった。

「あ、起きたんだ」

「おはよう、アーちゃん」

クールを装っているがそこには優しさがある簪の声といつものほんとして暖かな本音の声が聞こえてきた。

「おはよー。もう、おねーさんおなかペコペコだよ。アツくん、早く食堂に行きましょう」

「お嬢様、もう少し声を抑えてください。周りに迷惑です」

人当たりのよさそうな声の楯無とそんな彼女を諫めるようにいるクールな虚。飛鳥はゆっくりと体を起こし、立ち上がる。

「分かったよ」

そう言った飛鳥の手に嵌められた赤いブレスレットが証明の光に反射して紅く不気味に、美しく輝いた。

——俺は力を手に入れた……。

あの時10歳だった無力な自分。家族が殺されるまま、何もできずにその場に座り込むしかできなかった自分。

あれから6年……。飛鳥はすでに、無力な子どもではなかったのだ。

PHASE00 プロローグ（後書き）

誤字脱字・ご感想がありましたらよろしくお願いします。

ED1↓遠雷 〈遠くにある明かり〉<HIGH and MIG
HTY COLOR>

PHASE 0・5 キャラ設定&機体設定1（前書き）

OP↓ignited<T.M. Revolution>

PHASE 0・5 キャラ設定&機体設定1

名前 紅月飛鳥

年齢 15歳

容姿 髪は赤茶色で瞳は赤色。髪型は寝癖型で、顔立ちは上の中。

性格 一見して雰囲気的に冷たそうで怒りを露にすると怖い印象があるが、人を見下すようなものに対して陰悪している。

身長 170センチ

体重 60キロ

使用機体(MS) ヴェステイージ

家族関係 父・母・紅月飛鳥・妹・紅月朱雀

趣味 読書

学歴 一般小学校↓短期軍事学校↓IS学園

友人関係 更識姉妹、布仏姉妹とは親友で幼馴染

使用武器 小型ナイフ、ハンドガン

備考 もともとロボット工学系の大学教授であった父と専業主婦の母、妹の朱雀との一般的な4人家族。父が宇宙進出可能なマルチス

1ツの試作としてMSを開発した。家族旅行先にて待っているときに白騎士事件に巻き込まれ、ミサイルが空港に着弾両親と妹を失いただ一人生き残る。その後小学を卒業するとともに中等部のある短期軍事学校に通う。その後MSの使用が認められ、父親の遺留品であるMSを使用した任務に出動する。軍学校を首席で卒業し、IS学園に入学し、数少ない教官を破る。入学の理由はMSの性能実験。家族を奪った篠ノ之束と白騎士のことを恨んでいる。ISは扱えない。

名前 ヴェステイージ

由来 身も心も傷だらけという意味から。

機体イメージ ガンダムSEED・DESTINYのインパルス。

配色 赤とダークグレーのツートン。

世代部類 第1世代

動力源 電力

待機状態 紅いブレスレット

武装 ・C I W S×2

・フォールディングレイザー対装甲ナイフ×2

・高エネルギービームライフル×1

・アンカー付き巨大シールド×1

- ・折りたたみ式レーザー対艦刀×1
- ・誘導ミサイルポッド×2
- ・バズーカ×1
- ・ワイヤーブレード×1

備考 ロボット工学系の大学教授だった父が作り出した宇宙進出のためのマルチスーツの試作品。ISのような絶対防衛の他に、実体武器の攻撃には耐えられるように装甲は強化され操縦者の安全も守られている。ISのようにコアはあるがISとは全く違う。特殊装甲のおかげで実体による攻撃は通用しない。またシールドエネルギーではないので戦いによってはISよりも長時間戦える。防護服としてはパイロットスーツを着用。またデュートリオンビームによってエネルギーを回復することも可能。

PHASE 0・5 キャラ設定&機体設定1（後書き）

ED1↓遠雷　　く遠くにある明かりくHIGH and MIG
HTY COLOR>

ある程度話が進めば人間関係図なども作りたいと思います。たぐさ
んのお気に入り登録ありがとうございます。

ご感想をくれた読者様、ありがとうございます。

PHASE 01 Girls（女子）（前書き）

OP↓i gnited<T・M・R evolution>

たくさんのお気に入り登録ありがとうございます。それだけで執筆がはかどるというものです。

少しでも楽しんでいただける作品にしていきたいと思っておりますのでよろしく願います。

加筆修正完了・11月25日。

PHASE 01 Girls（女子）

1

4月に入り、季節の始まりとともに人々にとっては新しい生活の初めとも言っているだろう。世間でいえば学校では新しい学期が始まり、それぞれが新しい環境にて勉強や部活、友達関係に対して期待と不安を胸に抱く時期である。

そして、ここはIS学園の一年一組である。

新しい学期が始まり、生徒教師とも新鮮な気持ちで今日に臨んでいる。そして、この教室でも入学式が終わり教卓の前に女性教員が立って喋っている。

「私は副担任の山田真耶です。どうか皆さん、一年間よろしく願いますね」

そう言っているのは、紹介にもあったようにこの一組の副担任である山田真耶。自己紹介をしているように、現在はSHRが取り行われていた。

そのクラスには当然の如く、世界で1人だけしかないISを動かしてしまった男子の姿があった。

織斑一夏である。

そして、そんな織斑一夏をその斜め後ろから見ている人物もまたこのIS学園では珍種とも言える男という性別を持つ人物であった。

紅月飛鳥。奇しくも、彼の家族を奪っていったISという存在に囲まれたこのIS学園へと足を踏み入れていた。しかし、彼自身は織斑一夏とは違ってISを起動させることはできない。

なら何故この場所にいられるのか、それは彼の手首にある紅いブレスレットがあるからであった。それは死んでしまった彼の父親がロボット工学系の大学教授をしていたそのときまで、何時か宇宙で人間が単独で動けるようにというマルチスーツを作っていたのだ。

そして、完成していた試作品こそ彼の今待機状態でいる紅いブレスレットなのだった。あの事件の後に遺留品として生前大学の研究室で使っていたものと、手紙とともに手渡されたのがそれであった。

ただ残された遺産と家、ISとは違うマルチスーツであるMS。モビルスーツだが、その性能ははるかにISよりも劣り、第0世代・・・、動かし、更にブレスレット状態にする事ができるだけでも奇跡であったのだ。

しかし、とある事件でそれが解決の鍵となったためにIS学園へと強制的に送り込まれていた。その理由としてはMSの性能を確かめるためだということ。もしそれがISと同等、それ以上ならば女性にしか扱えないISに取って代わるものになるかもしれないというわずかな希望があったのだ。

そんな飛鳥がこうして一夏と同じクラスにいるというのは、突然このようなことが起き、ましてや女子しかないこのIS学園に、まさに猛獣の中に生贄として放り込まれた草食動物の兎のような存在である一夏に対する政府からのせめてもの配慮ということだったらしい。

もし二人が離れていたらどうなっていただろうか。最悪一夏はおろか、飛鳥もまたこのIS学園ではたった二人だけの男であるために精神力を抜き取られているかもしれないのだから。

そんなIS学園1年1組にいる飛鳥であるが、斜め前、まさに教卓の万前にいる織斑一夏に視線を向ける。女性から見れば世間一般に言うイケメンの部類に入るのだろう。

そんな一夏であるが、先ほどから挙動不審で回りにちらちらと視線を向けている。飛鳥に対しても何度か視線を向けてきた。そのとき正直飛鳥も耐えられるわけもなく、いらいらしていたこともありにらみつけてやるとすごすごと視線を外してしまった。

——なんだあいつ……。

飛鳥は一夏ほど挙動不審ではないが、さすがに周りの視線を一身に浴びるのは耐えられない。イライラがたまる一方である。一夏がそうである様に、こんな誰も知り合いのいないところに放り込まれたら逃げ出したくもある。

だがしかし、飛鳥はここに望んできた。世界をおかしくしたISに対抗しうる存在……、MSの性能を確かめるために……。

ただ数少ない飛鳥の心の助けになるのは——

「アーちゃん、また一緒の学校だね」

小声で話しかけてきたのほほんとした調子の女子生徒——布仏本音が隣の席だということか……。

織斑一夏は男である。

そんな彼は今現在というよりも、今日一日を通してかなり緊張していた。高校の入学式、そして新しい学校、新しい教室、新しい生活の始まりである、今日この日。

そのようなことで緊張するのは当然なのだが、それは些細なものに過ぎなかった。一夏を最も緊張し醒める大きな要因というのは、一夏とそして理由は違うが一緒に入学してきた飛鳥を除いてクラスメイトが全員女なのだ。

「えっとそうですね・・・、それでは最初のSHRは皆さんに自己紹介をしてもらいましょう」

そう言われても一夏は何を言えいいのか分からない。唯一二人の男の一人として、何か気の聞いたことを言えればいいのかもしれないが、今この状況で何を言えればいいのか分からないし、更にさすがに滑ってしまい、引かれるのもさすがに嫌だという気がしていた。

得意なことといえば家事全般とマッサージぐらいであり、それも勝手に身につけてしまったスキルなのであるが。

「……くん、……くん、織斑一夏くん」

「は、はい！」

突然声をかけられたために上ずった返事をしてしまう一夏。

すると周りからは小さくくすくすという笑い声が聞こえてくる。
やってしまったと少し恥ずかしさを感じる。

すると教卓に立つ真耶がその一夏の声に少々驚きながらも話しかけてくる。

「ひゃ!? あ、あの……、お、大声出しちゃってごめんなさい。
お、怒ってるかな? もしそうなら、ごめんね、ごめんね!」

一夏が返事をするに次に返ってきたのはどういうわけか謝罪であった。どうすればいいのだろうかこの場の状況に困惑するしかできない。

「いや、その、あの、そんなに謝らなくても……、ていうか、自己紹介しますから! 先生、落ち着いてください! 本当に落ち着いてください!」

一夏がそういうまで懇願するようにぺこぺこ頭を振り続けている真耶。この人物が自分たちのクラスの副担任だというのだから、飛鳥も含めた生徒たちは少々不安になってきていた。

「ほ、本当……? 本当にですか!? 本当にすね!? や、約束ですよ? 絶対ですよ!」

もはや立場が逆転しているようにしか見えず、一夏は最終的に押し付けられた形になってしまった。

仕様が無いと思いながら、立ち上がる。

世界にたった1人しかいない男のIS操縦者。それも一夏は世間

一般に言うイケメンなのである。

だからこそ、一つ一つの動きに女子たちは敏感に反応する。

それもただ立ち上がっただけで、その視線を一夏のほうに向けるのだ。一夏も一夏でクラス中の視線が自分に集まっていることに緊張感が増す。

そして、ゆっくりと息を吐く。落ち着こうという仕草である。

「お、織斑一夏です」

無難に名前を言う。周りからすれば、すでに有名すぎるために知っているというものだ。

「よろしくお願いします・・・」

無難である。

至極無難である。

周りに対して先ほどの真耶同様に頭を下げては上げ、また下げては上げとまるで腰の低い平社員みたいである。

そんなことをしている間、女子生徒たちから伝わってきたのは、もっと何か喋ってよとか、それだけ??という、一夏に対する話題の期待であった

何よりこの雰囲気は、まさかこれで終わりじゃないよねっと言う無言の圧力みたいなものであった。

——どうしよう……。

すでに緊張からか頭が回らない一夏。助けよ求めようにも周りは知らない女子ばかりであり、もう一人の別の意味で入学してきた男子である飛鳥を見る一夏であるが、鋭い目で睨まれ、これは助けを求めるのは無理だと判断した。

そして、意を決して一夏はこう言うのだ。

「以上です!!」

あまりにも堂々とした声で言ったために、周りで期待していた女子生徒たち全員が椅子から転げ落ちるという状態になっていた。

「え？ あれ！？ これじゃあ、ダメでした!？」

一夏は周りで女子生徒たちが一夏に対してありえないという視線をぶつけてくるのに少々気後れしつつ言う。

さすがにいきなりの自己紹介を以上ですで絞める人間がどこの世界にいるのか。一夏もやってしまったということで少々落ち込んでいる様子である。すると突然後ろから人影が一夏に迫る。

しかし、その人物が近づくことに一夏はまったく気がついていない。

「お前は、ろくに自己紹介もできないのか、織斑」

そう一夏の後ろに立っていた女性が、突然持っていた出席簿にて

一夏の頭を問答無用で叩く。ものすごい音が教室中に響き渡った。一夏は頭からたんこぶと煙を出して、机に突っ伏している。

一夏は後ろから聞こえてきた声がどうも聞き覚えのあるものだったために恐る恐る後ろを振り向く。そして、そこにいた女性を見た瞬間に飛び出した言葉・・・。

「げえっ！ 関羽!？」

一夏がそこに立っていた女性に対して叫ぶ。ひどく驚いているのは当然だった。そして、案の定、二発目の出席簿による制裁が一夏の頭に降りそそぐ。先ほどよりもひどく鈍い音が響いた。

「ぐふあ……」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者が」

「……」

そこにいたのは織斑千冬。嘗て第一世代IS操縦者にして元日本代表。現役時代は、公式戦無敗の記録を残したまま、ある日突然、引退し、それ以後、その舞台から姿を消したのだ。

一夏は姉として、そしては憧れの人物として彼女のIS操縦者時代のことを良く知っていた。しかし、一夏は彼女の仕事についてよく知らされていなかったし、彼自身知らなかったみたいである。それにしても何故彼女がここにいるのだろうかというのが一夏にとっての一番の疑問だった。

彼女は制裁を与えると前に立つ。堂々としているその姿にはあの頃と変わらない威厳があった。

そんな彼女のことを、飛鳥は睨みつける様にして見ていた。

「聞いているのか？ 織斑」

一夏は相も変わらず千冬の事を見ながら啞然とした表情である。

「な……、なんで？」

「あ、“織斑先生”もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君……、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

真耶は確かに言った。

“織斑先生”

「大丈夫です、これも副担任の仕事ですから」

しかし、二人はそんな真耶と千冬の会話を聞いていなかった。織斑先生という言葉聞いて一夏はこう思った。

——まじかよ……。

そして、教壇前に立つ千冬がじろりと教室内にいる生徒たちを見渡してから口を開く。

「諸君、私が織斑千冬だ！ 君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。出来ない者には、出来るまで指導してやる。逆らってもいいが私の言うことは聞け、いいな？？」

何というまるで暴君じみた言葉であるが、そこには消して見捨てないという、確固たる自信を持っているから言えるのだろう。それ

が嘗て世界で無敗を誇った彼女だからいえるのか、それとも何か別の理由があるのか。

——むかつくな……。その言い方。

しかし、飛鳥にとって知冬のような存在はむしろ嫌う部類に入っていた。上から押さえつけるような、そんな高圧的な言い方、自分が正しいというような言い方。例えそれが正しいことであっても、言い方が気に入らなかったのだ。それは中等部を軍事学校で過ごしていたころも変わらなかった。

——いくら世界最強だからって……。

しかし、その時飛鳥を含め、一夏も失念していた。女子というのは特に女子高生というのは珍しいものや有名人が大好きなのだ。

「きゃあああああ！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

そんな彼女の歓喜の悲鳴に続いて次々と少女たちの声が上がる。

「ずっとファンでした！」

教室中の女子生徒たちがざわざわと騒ぎだした。一夏は突然のことに驚いて周りをききよろと見ている。騒いでいるのは飛鳥と一夏以外の女子全員であるが……。それにこのクラスだけでなく、ここにいる二人以外、この学園の敷地内にいる人間はすべて女性である。

正直慌てて耳をふさいでいたために一夏のように混乱することはなかった飛鳥。だが、そんな状態であっても十分耳がおかしくなる

ような声量であつた。正直言つて怒鳴り散らしたかつた。

「ど〜ど〜」

「俺は馬か！」

そんな飛鳥の隣りで、まるであやすようにしてくるだぼだぼの制服を着ている本音がいた。邪険に扱えないそんな雰囲気を持っている。

だが、彼女自身も昔からの幼馴染であるから飛鳥の扱い方を良く知っている。彼は怒っているのではなく照れているのだ。

「うふふ。相変わらず、アーちゃんは面白いね」

「何が面白いんだよ！」

やや声が大きかったが、それ以上に周りの女子生徒の声が大きかったので周りには聞こえていなかった。

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

——よくそんな遠くから来たな……。

ここにくるためにどれだけの労力がかかったか。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

——……。

嘗ての最強のIS操縦者に直接教えてもらえるのだ。こんなこと、めったにない。

「私、お姉様のためなら死ねます!」

——はあ!? こいつ何言ってるんだ。

それだけ千冬を慕っているということだろう。しかし、その当人はというと、かなりうつとうしそうな表情をしている。言われて嫌なわけではないが、さすがにここまですごいと、逆に引いてしまう。

「……、毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か? 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか?」

そうあきれたような言葉を吐くが、それでも鍛えがいのあるという意味ありげな笑みを浮かべているのを見た飛鳥の眼は狂ってはいないだろう。

「きゃあああああ! お姉様! もっと叱って! 罵って!」

「でも時には優しくして!」

「そしてつけあがらないように躰をしてええええええ!」

ここまでくればあきれを通り越して感心せざるを得ない。

するとそんな女子生徒たちを落ち着かせ、再び一夏を睨む。

「で? 織斑、挨拶も満足に出来んのか?」

「いや、千冬姉、俺は……」

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

怒られている一夏は相変わらずだと内心苦笑いの飛鳥。

「え……？ 織斑くんって、もしかして、あの千冬様の弟……？」

もしかしてもしなくても、彼女と彼は血のつながった正真正銘の姉弟である。

「それじゃあ、世界で初めて男でISを使えたっていうのもそれが関係して……」

「それはない」

ぱっさりと切る千冬。その質問した女子生徒は慌ててすいませんと訂正を入れて座る。

「まあいい、織斑、続けろ」

「え？ ああ……」

一旦座っていた一夏は再び、千冬の言葉でその場に立たざるを得なくなってしまった。当然あんな挨拶では駄目だと思われたのだろう。そして再び周りの生徒たちが一夏に注目の視線を向ける。すると、その生徒たちからの視線の中に、見知った懐かしい顔を見つけたのだった。

「箒？」

そこには6年ぶりに合うのだろうか。幼馴染であり、小学校時代に突然転校してしまった篠ノ之箒がそこにいた。一夏が名前を呼ぶが、プイッと顔を横に逸らしてしまう。

——あ、あれ？ 嫌われたのか？

そんな風に一夏が考えていると、千冬の出席簿による肅清が飛んでくる。

「痛っ！」

「お前は、自己紹介もまともに出来んのか？」

「いや、だから千冬姉……、俺は……」

「学校では、織斑先生と呼べ……。まったく何度言ったら学習するのだ、馬鹿者」

——確かにそれは言える。

あきれた様子で千冬。一夏はそれから無難な自己紹介を何とか終わらせ、男では二人しかいないので当然のように順番は飛鳥へと来る。

「次、紅月」

「……、はい」

出席簿を見て名前を言う千冬の言葉に返事をして立ち上がる。

一夏同様に男だということで少女たちの視線を一身に浴びる。さすがにこれはきつい。

「紅月飛鳥です」

無難に名前を言う。

やはり周りからは期待の視線を向けられている。

「趣味は読書。得意なことは料理。一般中学には通わず短期で軍事学校に通っていました」

飛鳥は小学を卒業するとともに、そのまま一般の中学校に通うことはなく短期の軍事学校に通うことにしていたのだ。普通であればそのまま高等部……、そして軍へと向かうはずであったのを蹴って、飛び級で卒業してきたのだった。

開発部門は壊滅的であった飛鳥であるが、戦闘部門においては圧倒的な強さを誇り、更にそのときの教官が女性であり、あまりに高圧的であったために喧嘩をふっかけてばこにしてしまったのだ。

あまりに中等クラスの枠からはみ出ていたためにそのまま短期で高等クラスへと進み、そのまま卒業していた。だが、あのまま軍に入ってもおそらく飛鳥には居場所はなかっただろう。

ほとんどの軍の兵力というのはISである。現代兵器であるミサイルなどがあの時白騎士に通用しなかったようにISには通用しないのだ。そのためにくら飛鳥にその力があるうとも、ISを起動させられない彼は不要だったのだ。それを知っていたし、もともとそれ以上軍に進もうとは思っていなかった。

更に大きなきっかけとしてはあの時、IS強奪事件に巻き込まれ、始めてISとMSで戦った時だ。それがあったからこそ、重かった鉛のこの足を一步前に踏み出すことができたのだ。

「よろしく願います」

一応一夏のようなへまをしまいと考えておいた普通の自己紹介をする。ここであえて言えば紅月飛鳥の容姿というのは一夏のような

純粹にかっこいいイケメンとは違い、雰囲気的に怖い、冷徹そうだという印象を与えるがイケメン……簡単に言えばかっこいい不良のような感じなのだ。

赤茶色の髪の毛に赤色の瞳はイライラが募っていたのかやや不機嫌そうに釣り眼になっている。そんな彼に睨まれるような形になっている。普通は怖がるなどするだろうが、生憎ここにいる女子生徒たちはほとんどが女子中学校などと、ほとんど男に対する免疫のない。

「きゃあああああ！」

「ええ!？」

突然の悲鳴に近い歓声。思わず後ずさりしてしまうくらいに衝撃を受けてしまった。彼女たちは怖がるどころかむしろ好意的であった。

——な、何が起きてるんだ……。

飛鳥は突然のこの状況に戸惑っていた。自分はかなりいらだっていたのを自覚していた。だが、それを表に出さないという基本的なことを忘れ、かなり顔に出ていただろう。だから、かなり目つきは睨むようなものだった。それなのに彼女たちは関係ないとむしろそれがいいなどという風に高評価を受けた。

「な、何がどうなって……」

「アーちゃん、人気者だね」

などと本音がさらに周りのテンションを上げるような発言をする。それは何か。彼女の飛鳥に対する呼び方である。

「何何！ 今布仏さん“アーちゃん”って呼んでたよね」

「キヤー！ 何々二人はどんな関係？」

「まさか……」

「ねえねえ、教えてよー！」

女子たちがそれを聞き逃すはずがなかった。更にボルテージが上がったこのクラスの熱気はすさまじいものだった。

「アーちゃんと私は、幼馴染だよ」

「おい本音！」

このときにそんなことを言ってしまったら更に事態が悪化するの
は目に見えている。そのことを鈍感な飛鳥が知るはずもなく。その
時本音に対してそう言ったのは恥ずかしいからであり、決してそれ
がこの後更に事態を悪化させることになるなど思っても見なかつ
たのだ。

本音の幼馴染という言葉に更に悪化したクラスの熱気。周りでは
勝手に恋人同士などという捏造を始めているものもいた。

さすがにこれはまずいと思ったのだろう。おどおどしている真耶。
隣に立っていた千冬のいい加減にしろという一括でその騒ぎはぴた
りと収まったのだった。

それから現在は休み時間である。あれから色々と質問攻めにあつ
たが飛鳥はめんどくさそうにであるが律儀に一つ一つ質問に答えて
いた。なんとなく答えなければ隣に座る幼馴染がついうっかり口に

しそうだと感じたからだった。

正直言って飛鳥にとって居心地はかなり悪かった。なぜなら周りからの女子の視線が尋常ではないくらい痛みを伴っているからだった。

ここIS学園は他の高校とは違って、入学式当日から授業があるらしい。さりげなく一夏と共に視線をずらすとこのクラスだけではなく、一組に飛鳥と一夏というパンダのような存在がいるために他のクラスの女子生徒たちも集まっていた。

その中には二年生や三年生もいるのだからたまったものではない。中には品決めをするように舌を舐めている人もいるので、飛鳥は自分の身の危険性を感じていた。

女子は皆二人を見てひそひそ話をしている。二人が注目されているのは当然のことながら、一夏の場合は唯一世界でISを男のみで起動させた存在であるからだ。飛鳥はそのISに代わるMSというものをもって立った二人だけの男の一人だからだった。まさに客寄せパンダの状態であり、この学園に男がいるとなれば当然なのだ。

4

「・・・ちよっといいか??」

一夏がだれていると突然後ろから凜とした女子の声がした。一体誰だろうと思いいながら振り向く。

「ん?」

するとそこには同年代の女子高生よりも発育がいい胸を持ち、長い黒髪をポニーテールにしている女子がそこに立っていた。

「箒」

そこにいたのは一夏にとっては幼馴染である、篠ノ之箒がいたのだ。一夏はまさに6年ぶりの再会であった。

「着いて来い」

「あ、おう……」

箒に連れられて一夏は引っ張られるようにして、教室を出て行く。後ろから2人の関係を示唆する声が上がっていた。

屋上につく廊下と階段を進んでいき、ドアを開けるとそこには真っ青な青空が広がっていた。太陽の光がまぶしかった。

「いい天気だ」

まさに新学期にもってこいの快晴であった。

「そういえば」

屋上について二人は手すりに体を預けながら空を見ている。すると最初に口を開いたのは一夏だった。

「なんだ？」

一夏の視線の先にいたのが箒であったために、箒も自分に何かを言いたいのだろうかと思ったのだろう、返事を返す。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」
「……」

一夏の言葉に箒は何も言わずに黙っている。しかし顔を赤らめていることからうれしさと照れがあるのだろう。彼女がどんな感情を一夏に対して持っているのかは、朴念仁である彼には分かるはずもないのだ。

しかし、褒めたつもりだった一夏はというと、箒の様子を見て、何で怒っているのだろうか、不思議がっている表情をしていた。彼はかなり鈍感であり、箒の今の状態をまったく別に捉えてしまっているようだ。彼女の気持ちが届くのはまだまだ先になりそうだ。

「なんでそんなこと知ってるんだ」

慌てるような口調で言ってくる。一夏はそんな彼女の剣幕に押されながらも。

「なんでって、新聞でみたし……」

情報源を言う。

「なんで新聞なんて見てるんだ」

「ええ！？ 俺だって普通に新聞くらいは読むぜ」

あまりの理不尽な言葉に一夏はあきれを含ませた表情で言う。

「あー、あと」

「な、何だ!？」

一夏は思い出したように、何か言いにくそうであるように、指で頬をぼりぼりと掻く。

一呼吸をいてから言う。

「久しぶりだな、箒。箒ってすぐ分かったぞ」
「え……」

あまりの突然の言葉に箒は呆気にとられてしまう。それと同時にうれしかった。

「ほら、髪型一緒だし」

「よ、よくも覚えているものだな……」

自身のことを褒めてくれているので、素直にうれしかった。照れているのか、その髪をいじりながら言う。

「いや、忘れないだろう、幼馴染のことくらい」
「……」

一夏がそういう言うとき、つかういい雰囲気になっていたところで、箒がぎろりと一夏が気づかないところで睨みつけている。

すると突然チャイムが鳴る、そろそろ教室に戻らなければいけないと思い、二人は屋上を後にするのだった。

篠ノ之箒は内心歓喜で満ち溢れていた。

なぜなら彼女と同じクラスに幼馴染であり、思い人の織斑一夏がいたからであった。

彼が自己紹介で立ったとき、こちらを向いたが恥ずかしさで思わず顔を背けてしまった。それをした後やってしまったと言う後悔が彼女を襲っていた。一夏がこちらを向いたのは、ただ自己紹介に困って助けを求めただけだったのだ。

だが、どうしても彼の前になると心臓が早く鼓動し、素直になれないのだ。だからこうして本当は力になりたいという気持ちとは逆のそっけない態度を取ってしまう。

彼と同じ男でここに入學してきた飛鳥もいるが、彼女にとっては関係のないことだった。そう思っていた。しかし、彼女は知らなかったのだ。彼が自身の姉によって大切な家族を奪われていたことを。彼女は関係なくとも、篠ノ之の性を名乗る彼女に対しても、その矛盾がちらついていることをまだ、彼女は知らなかった。

自己紹介を含めた最初の時間が終了した。ちらりと教卓前の彼の姿を見ると、すでに疲れきったようにぐったりと机に突っ伏していた。別のほうの席に座っている飛鳥の周りには他の女子生徒たちが集まって質問をしているのが見えた。彼女は今はただ一夏に話しかけたい、久しぶりに二人きりになりたいと言う気持ちでいっぱいだったのだ。

そんな筈の眼には一夏の姿しか映っていなかったのか、あまりの近寄るなというオーラが話しかけようとしていた女子を退散させていた。そして、一夏の机のそばに来る。対して一夏はそれに気づいていないのか、相変わらず突っ伏したままである。まさか寝ている

のではないかと思ったので、少し強めに言う。

「ちょっといいか」

「ん？」

一夏が顔を上げる。そして、腕を掴んで無理やりに歩き出す。後ろから一夏が何かを言っているが、このときの筈にはまったく聞こえていなかった。

嬉々として彼の腕を引っ張り屋上へと向かっていった。その時周りに向けられる視線など彼女には関係なかった。

そして、目的地の屋上に着いたわけであるが、ここで筈は一体どう話を切り出せばいいのか全く考えていなかった。いや、一応色々と話したいことがあった。だが、いろいろありすぎて、取捨選択ができなかったのだ。

「いい天気だ」

一夏も話の切り出したうまくいかないようだ。まあ、確かに新学期にもってこいの快晴であった。

「そういえば」

二人は手すりに体を預けながら空を見ている。最初に口を開いたのは一夏だった。

「なんだ？」

内心どきどきしながら一夏の言葉を待つ。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」
「……」

一夏の言葉に箒は何も言わずに黙っている。しかし、そんな優勝したことを褒めてくれる一夏の言葉を聞いて、喜びをかみ締めていた。しかし、箒がどんな感情を一夏に対して持っているのかは、朴念仁である彼には分かるはずもないのだ。

「なんでそんなこと知ってるんだ」

そんな彼女から出てきたのは、慌てるような口調での言葉だった。ありがとうと一言簡単に言えない。彼に何かを言おうとするたびに心臓の鼓動が早くなるのだ。ましてや今は立った二人っきりの状態。更に、久しぶりの再会ということで、嬉しさが最高潮にありながら、当然のことながら口から出てくる反対の態度の言葉も言われるほうからすれば意味の分からないことだった。

「なんでって、新聞でみたし……」

「なんで新聞なんて見てるんだ」

「ええ！？ 俺だって普通に新聞くらいは読むぜ」

あまりの理不尽な言葉に一夏はあきれを含ませた表情で言う。対する箒も自分で何を言っているのか。こんなことを言いたいのではないと分かっている、心臓が張り裂けそうな状態の彼女の口はまったく違うことを言ってしまう。

「あー、あと」

「な、何だ！？」

一夏は思い出したように、何か言いにくそうであるように、指で頬をぽりぽりと搔く。

一呼吸をいってから言う。

「久しぶりだな、箒。箒ってすぐ分かったぞ」
「え……」

あまりの突然の言葉に箒は呆気を取られてしまう。それと同時に嬉しかった。自分の事を見てくれたことが、何よりも嬉しかったのだ。

「ほら、髪型一緒だし」

「よ、よくも覚えているものだな……」

自身のことを褒めてくれているので、素直に嬉しかった。照れているのを隠し切れず、その髪をいじってしまう。

「いや、忘れないだろう、幼馴染のことくらい」
「……」

一夏がそう言うとき、つかういい雰囲気になっていたのが台無しになってしまった。もう少し何か別の言葉がなかったのだろうか。そう物足りなさを感じていた箒は、無意識の内にそれが表情に出ていたのか、一夏のことを睨みつけていた。

すると突然チャイムが鳴る、そろそろ教室に戻らなければいけないと思い、二人は屋上を後にするのだった。

その時不意に吹いた風が箒の長いポニーテールをゆする。箒の表

情は、前を歩く思い人を見て幸せそうなのであった・・・。

PHASE 01 Girls（女子）（後書き）

ED1↓遠雷　　く遠くにある明かりく<HIGH and MIG
HTY COLOR>

基本的にオリ主の視点でいきますが、イベントなどで他視点から見
たほうがいい場合はそれも書いていくつもりです。そのため文字数
が多くなり、不定期になることもありますので、そのときは気長に
お待ちください。

誤字・脱字やご感想がありましたらよろしく願いします。

追記 同作者の『魔道新世紀リリカルガンダム』もぜひご覧になっ
てください。

加筆修正 11月25日

PHASE 02 Refusal (拒絶) (前書き)

OP1↓ignited<T.M. Revolution>

たくさんのお気に入り登録感謝感謝です。やや進行は遅いですが、楽しんでいただければ幸いです。

ご感想お待ちしております。

加筆修正 11月25日 完了

PHASE 02 Refusal (拒絶)

1

IS学園は入学式の日でも授業があり、今は二時間目の真っ最中であつた。

「……、であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ――」

教壇に立つて、教科書を片手にすらすとそれを読んでいく真耶。教室内でも静かに授業を聞いている。それは新学期であり、皆が気を引き締めているからであることと共に、それ以上に後ろに千冬が出席簿を片手に腕組みをして立っているからであつた。

さすがにこの状況で不真面目にしていたらどんなことをされるかわかつたものではない。そんな中、飛鳥はというと、同じく教科書とノートを広げて、必要なところは書き取って、マーカーで印をつけるなど、いたって普通に授業についていく。

一応事前に貰っていた参考書を頭に叩き込んでいるために、基礎的な部分は理解できる、他の女子生徒たちはというと、このような範囲は一応中学までで習っているのだろうと思う。

中学でもISの授業を取り入れているところがあり、それは大抵女子中学であるのだが……。それはそうと、もう一人の男である一夏の事をちらりと見てみると、教科書と真耶を交互に見ては、ぱらぱらと教科書を行ったり来たりさせている。

——何やってるんだ？ アイツ……。

飛鳥はそんな傍から見れば、授業の内容が分からないと、付いていけない一夏の事を見て退屈そうに見ていた。まさに、焦りで顔が真っ青になっている様子が見えた。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

するとそんな一夏の様子に気がついた真耶が一夏に対して話し掛けて来た。

一夏ははっと顔を上げて、どう言えがいいのだろうかとあたふたしている。

「あ、えっと……」

「分からないことがあったら何でも聞いてください。なんせ私は先生ですから！」

はちきれんばかりの胸が更に強調される。男である一夏の視線は教科書からそんな彼女の胸に向いてしまっていた。

飛鳥も同様に男である。思わず教科書から眼を離しそれを凝視してしまう。すると側頭部に何かが当たる。なんだと思ったら床に落ちたかわいらしい消しゴム。

「消しゴム？」

それを拾いチラリと横を見る。そこにいるのは幼馴染の一人である布仏本音。

「っ！」

そこには相変わらずのほほんとした笑みでこちらを見ている彼女がいた。だが、眼が一瞬光ったような気がした。思わず背筋に悪寒が走った。なんとなくだが、これ以上凝視しない方がいいと、彼女の家柄を含めて考え、そう思った。

「アーちゃん、ありがとう」

「え、あ、いや」

簡単な言葉がまともに喋れない。昔からそうだ。彼女だけではないが、どうしても邪険に扱えない。

取りあえず本音に落とした消しゴムを手渡し、授業に向かう。

「……、せ、先生」

「はい、織斑くん！」

一夏はどこか申しわけなさそうな声で真耶に対して言う。真耶はというと、ドンと来いというように身構えている。先生として、ここで意地を見せておかなければと、朝方の失態というわけではないが、威厳を取り戻そうとしているのだろう。

「ほとんど全部分かりません！」

すばらしく元気のいい声で言うのだが、その内容があまりにも情けないというか、稚拙というのか。

「え……？　ぜ、全部、ですか……？」

さすがの真耶も全てが分からないといわれるとは思わなかったらしい、大きすぎる眼鏡がかけてあったところからずり落ちていた。

飛鳥もあきれた様子で一夏の事を見ている。同じ男として、少々恥ずかしい思いを感じていた。そんなあきれた視線の先にいる一夏は周りの静まり返った状態に焦ったようにきよろきよろと周りを見ている。

「え、えっと……、織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

まさかと思ったのか、真耶はクラスに対して挙手を求める。しかし、周りにいるものは誰も手を上げることがなく、静かなままである。

もちろん飛鳥も彼女たち同様に理解している。当然のように、参考書を入学する前に読んでいたことと、軍事学校でも当然のように現代において最強と言われているISもまた、将来は兵器として使われる可能性もあるということとで授業で扱われていたのだ。

「……」

まさかというように顔色を悪くする一夏は最後の砦であろう、同じく男である飛鳥に恐る恐る視線を向ける。

「何だよ？」

「あ、悪い。でもお前、これ理解できるのか？」

「当たり前だろ。これくらい予習しておけば簡単だ」

飛鳥の……、一夏はまさかの裏切りの言葉に頭を抱えてしまう。ここには自分を味方してくれる人はいなかった。そんな会話をしていると、一夏の後ろに現れたのは、教室の後方で見ていた千冬であった。

「……、織斑、入学前の参考書は読んだか？」

千冬が言っている参考書というのは飛鳥も貰ったものであり、まさに昔の分厚い電話帳のようなものであった。あれを覚えるのははつきり言っ骨が折れるだろう。

ある程度は軍事学校にて習っていたこともあったので覚えるのはそれほど苦勞することはなかった。むしろ飛鳥にとってはISというのは敵のようなものである。敵のことを良く知らなければいけないということも、覚えることに対する拍車になっていたのかもしれない。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

やっちまったぜという感じでわるびも無くそう言う一夏。

——馬鹿じゃないか？

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者！」

すると案の定、一夏の頭には制裁といわんばかりの出席簿による攻撃が炸裂する。頭に大きなたんこぶを作って机に突っ伏す。もう何回になるのだろうか、今日に入って……。

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

有無を言わせぬ彼女の言葉。しかし、さすがにそれを一週間で全てを覚えきるのは難しいだろう。それでもこの結果を招いてしまったのは一夏の自業自得である。無理だというが、それでもやれと言われると何も言えない。

「やれと言っている」

「……、はい。やります」

さすがに姉であっても逆らえない一夏はどうとうあきらめたのか、そんな表情をして言うのだった。そうして授業は続く。

2

先ほどの授業は終わり、現在は休み時間に入っていた。飛鳥は授業が終わるや否や、突然話しかけてきた一夏と話をしながら自分の席に座っていた。

何故彼がここにいるのかというと。突然自分以外の男がいるからということであり心細いのだろう、話しかけてきたのだ。

自己紹介ですでに名前は知っていた。そして、千冬に対しても『千冬姉』と言うように、彼女とは姉弟の関係なのだということも知っていた。

そして、何よりこの織斑一夏という少年は馬鹿なのだという事とも。なぜなら最初の自己紹介においてもとんでもない終わり方をしたり、更には先ほどの授業において、内容としては一般常識であるところすらも分からないと言い、更に極め付きにはあの分厚い参考書を古い電話帳と間違って捨てたということだ。

そんなとんでもないことをしたら、軍事学校ではぶっ飛ばされているだろう。ここは確かにISという兵器をオブラートに包んでスポーツ競技と呼ぶその操縦者を育成するところである。

そのためにそういう教師はいないと思っていたのだが、如何せん。一夏の姉である織斑千冬という人物は、はっきり言って、軍で教官をやっているように暴力を普通に使ってくる。それで良いのかIS学園と当然のように思った。

飛鳥は織斑一夏という少年の人間像を先ほどの情報である程度作り出していたが、話してみると、はっきり言ってお人よしの塊だと思った。それがプラスに傾くか、マイナスに傾くか、そんなことは関係なく自分の思ったことを言う性格なのだろうと思った。

やや目つきの鋭い飛鳥のややめんどくさそうな喋り方にも、それを気にせずに普通に話している。気づいていながら気にしていないのか、それとも全くの鈍感なのか。

「あー、1週間であれを覚えろだなんて」

「自業自得だろ？　っていうかあれをどう見れば電話帳なんだよ」

「し、仕方ないだろ。あの時は色々掃除が大変で慌ててたから」

ああ言えばこう言う。まるで自分が望んでここに来たわけではないといっているようなものである。確かに、一夏にしてみれば突然人生設計を狂わされたといってもいい。だからといって、そう思っていないかといえばそうでもない。はっきり言って今の世の中弾性が女性から下に見られている以上、初めての男性のIS操縦者として彼は世界からいろんな意味で注目されているのだ。

研究対象として、希望の光として……。少しはそのことも考えて、自らの今の立場を理解した方がいいと思った。それにしても、周りからの相変わらぬ視線の数はものすごい数であった。正直きつい。

「ちょっと、よろしくて？」

「はい？」

「ん？」

する突然二人に対して、一人の女子生徒が話し掛けて来た。金髪にやや縦ロールの髪型。確か名前はセシリア・オルコットであっただろうかと飛鳥は一応ここIS学園に来る前に各国の動きは一通り知っていた。

それは彼の幼馴染たちの協力のおかげである。

——セシリア・オルコット……。イギリスの代表候補生で、名門のオルコット家の現主。IS学園の入学試験においては主席で唯一“女子生徒で”教官を破った生徒。IS適正A。使用IS『ブルーティアーズ』、射撃性能に特化している。

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

飛鳥がセシリアの情報を頭の中で反芻していると。あからさまに信じられないというようなオーバーリアクションをみせるセシリア。それを誰だというようにしてみている一夏と、またかというようにして、あからさまに敵意を向ける飛鳥。

彼女のような女性がでてきたのはISが世界の国防の要になっ

てからである。国々はこぞって女性優遇策を打ち出していった。そしてISが出来た約10年前から男と女の立場が変わったのだ。

“女尊男卑”

ISが女性にしか反応しないということから、女性＝偉いという構図が生まれ、その風潮が世界にそして社会にすぐに浸透したのだ。

そのための彼女のような男性を見下すようにした言動をとる女性がいってもおかしくなかった。

「悪いけど。俺、あんたが誰か知らないし」

一夏が一々相手にしてはめんどくさいことになりそうだということで、さっさと終わらせたいということで、そう言う。

おそらく一夏が彼女のことを知らないのは、女子生徒からの視線によってそんな余裕がなかったからだろう。

「わたくしを知らない!? このセシリア・オルコットを? イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!?’」

セシリアはそんな一夏の発言を聞いて心外だといわんばかりに言う。

——むかつく奴だ……。

はっきり言って飛鳥はこの手の人間が嫌いである。力をただ闇雲に振りかざし、それによって他者を従わせるような人間を……。

「あ、質問いいか？」

そんな飛鳥のことに気づいていない一夏は、突然質問があると聞く。

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

一々癪に障る言い方に、いよいよ握る拳に力が込められる。手が真っ白になるのではないかといわんばかりに握り締められた拳……。

「それで代表候補生って、何だ？」

その瞬間に一夏の言葉に対して聞き耳を立てていた女子生徒たち、セシリアを含めたほとんどがずっこけたのだ。

さすがにその質問は無いと、呆れを隠せない飛鳥は眉間を指で押さえている。

「あ、あ、あ……」

「あ？」

言葉にならないセシリア。一夏に対して指を指しながら口をパクパクと開け閉めしているしかできない。

そんな彼女に対して、一夏は首を傾げる。

「あなた……、本気でおっしゃっていますの！？」

「おう、知らん」

驚愕という言葉がまさに当てはまるセシリアの表情。それに対して一夏は堂々と自身のISに関する知識のなさを露呈していた。

「馬鹿か一夏。お前、それくらい小学生でも知ってるぞ」

飛鳥はあまりの一夏のISに関しての無知さに脱帽していた。参考書を捨てて読まなかったために、授業に追いつけないというのは彼の自業自得であり仕方がない。だが、『代表候補生』というような、単語のその並んでいる文字を見れば誰でもわかるものを堂々と分らないというのだから、もはやその馬鹿さ加減は救いようのないところまでできているのだろうか。

「いいか？ 世界大会——つまりはモンド・グロッソに出場するのは『国家代表』と呼ばれる人たち」

「それくらい俺だって知ってるぞ。だって俺は千冬姉の弟だからな」

確かに一夏と千冬が姉弟関係であることは苗字と一夏の彼女に対するプライベートでの呼び方からして分かる。だが、そんな元国家代表……、更には世界最強である彼女を姉としてもっているにも関わらずこの発言はないだろう。

彼がISの知識にここまで疎いというのは彼が一般常識に眼を向けていないのか、それともともとISには興味がなかったのか……。いや、自身の姉がISの操縦者として国家代表なのだから興味が無いというのはありえない。だとしたら千冬の方が意図的に彼をISから遠ざけた生活をさせていたのか。いや、それでも最低限のISに関する一般常識は知っているはずだ。なら答えはただ一夏は馬鹿だからなのか。

などと飛鳥はふと考えた。説明の途中だったことを思い出し、す

ぐさま答える。

「そのお前の姉が出場したモンド・グロッソの大会に将来、イギリス代表としてももしかしたら出場するかもしれないってことだ」

あくまでもしかしたらである。彼女が今いくら代表候補生だからと言ってその下にはいくらでも交代要員がいるのだ。彼女がここまでの実力をつけたのにはかなりの時間と努力があったからであろう。だが、今の彼女の態度ははっきり言ってそれらを全て否定することになる。それをまだ分かっていないセシリア。

「確かに言われてみればそうだな」

ようやく理解したような一夏が、そう言う。

「んんん。よろしいのです？ 本来ならわたくしのような選ばれた人間とはクラスを同じくするだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……、バカにしていますの？」

「いや、その言い方は普通に馬鹿にしてるだろ……」

青筋を浮かべたセシリアが怒りを抑えつつ言う。確かに一夏の言う言葉を真に受けていればそう取ってしまうのかもしれない。一夏は一夏で馬鹿正直なのだ。

「君がそう言ったんじゃないか」

「大体、そちらの方は少しはお詳しいと見ますが、あなた、ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを

感じさせるかと思っていましたが、期待はずれですわ」

まさに期待をして損したという感じを表している。まるで買ってみた玩具が意外とつまらないものだったという子供のようだ。

「俺に何を期待されても困るんだが……」

そう言われて困ったような顔をする一夏。だが、彼が世界中から注目されるのは仕方のないことなのだ。前例のない、ありえないイレギュラーであるのだから。

確かにここにいる飛鳥もまた、ISという存在から見ればイレギュラーであることには変わりはない。しかし、彼の乗っているMSはISとひどく酷似しているが製作者が違う……。

それに飛鳥自身はISを起動させられない。MSというISに対抗しうるかもしれないというものをもっているから別の意味で注目されているが、それは一夏に比べて微々たる物だ。

やはり功績が少ない分MSが注目されることはほとんどないのだ。

「いい加減にしろよ……。こいつが望んできたかどうかは知らないけど、そんな人を見下すような言い方、やめろよな。むかつくんだよ」

「なんですって！」

いい加減にイライラが沸点に達しようとしていた飛鳥が睨みつけるようにして言うために、更に目を細めるセシリア。

「ふん、まあいいですわ。わたくしは優秀ですから、あなたたちの

ような人間にも優しくしてあげますわ。そうですね、ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてよくてよ。何せわたくし、入試で“唯一”教官を倒したエリート中のエリートですから」

さりげなく唯一という言葉を強調する。明らかに彼女は自身が皆の上に立つものだということを知らしめたいらしい。

「入試って、あれか？ ISを動かして戦うってやつ？」

一夏が思い出したように言う。飛鳥も自身はMSを使用した
が、相手教官と戦ったことを思い出す。もともときっかけがなければそこを受験することも絶対に叶わなかっただろう、笑ってあしらわれるのが関の山だった。だが、あの時の事件において、ISの強奪犯たちを撃退したということが知らされたらしく、受験しないかという誘いがきたのだ。

というよりもそのMSのデータも取りたいという欲望があったのだろう。それはISに対抗するものだということに対する危機感だろうか。それについて簡単に見抜くことはできたが……。幼馴染たちの後押しもあり、それに参加して、その結果——ここにいるように合格だった。

試験での戦闘は圧倒的だったとだけ言っておこう。ISに唯一対抗する事ができるかもしれない。ただ名もなき大学教授が生み出した試作品——MSという存在。それが織斑一夏とともに世界に対して何かしらの変革を齎すのか……。

一気に現実世界に意識を戻す。

「あれだよな。俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

一夏の言葉にセシリアは先ほどまで腰に手を当てて優雅なポーズをとっていたそれが一瞬にして崩れた。飛鳥も驚いたような表情になる。失礼かもしれないが、まさか一夏が勝ったとは、今日ここまでの彼の姿からは想像もできなかったからだ。

「なんだか突っ込んで来たから、慌てて横に回避したらそのまま壁に激突して……、勝ったっていうのかな。教官が自滅したんだ、あ、確か山田先生」

——や……、山田先生。あんた一体何をしているんだ。

自身の副担任でもある山田真耶に対して突っ込みを入れる飛鳥。まさか、自らの自滅で負けるとは……。いくらドジ要素の塊でありながら、それはさすがにないだろうと思えた。

「一夏。それを勝ったとは言わない。っていうか、そんなめっちゃな結果でよかったのか？ まあ、あれは倒す倒さないじゃなくて、どの程度の実力があるのかを図るものだろうけどな」

「そうなのか？ あ、だったら飛鳥はどうだったんだよ。ていうかお前、IS動かせないよな……」

一夏がそう聞いてくるのに対して、飛鳥はすっと自らの右手首に嵌められているブレスレットを見せる。それこそ飛鳥に対して父親が残したISとはまた違う、宇宙進出のためのマルチスーツであるMS……ヴェステイージの待機状態であった。

「俺も勝ったぞ」

セシリアを放っておいて、二人で話をしていた。

「わ、わたくしだけと聞きましたが……?」

飛鳥たちの言葉に、自分だけだと自負していたセシリアは、それが気に食わないのか、相当驚いた表情で見ている。

「どうせ“女子”ではってオチだろ?」

「そうだな」

飛鳥の言葉にうんうんと頷いている一夏。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……?」

セシリアの表情が先ほどよりも怖いものになっていた。ありえないという驚愕とありえないという怒りの交じり合った表情だ。

「だからそう言ってるだろ。耳が聞こえないのか?」

「なんですって!?! それに、あなた! あなたも教官を倒したって言うの!?!」

「え? うん、まあ。多分……」

近くにいた一夏に猛然と迫りながら問い詰めるセシリア。かなり距離が近い。傍から見れば、彼女から問い詰められている、情けない彼氏である。

——こいつ、大胆だな……。

「多分!?! 多分ってどういう意味かしら!?!」

「お、落ち着け」

「これが落ち着いていられ……」

もの凄い剣幕で一夏に迫るセシリア。突然のことに、その剣幕に押されて一夏は慌てている。落ち着かせようともおそらくプライドが許さないのだろう、彼女はまったく引く気はないようだ。

すると突然三人を遮るようにしてチャイムが鳴る。

「っ！ またあとで来ますわ！ 逃げないことね！ よくって!？」

——二度と来るな。

そんな風にして飛鳥たちに対してビシッと効果音が鳴るのではないかと思うような指を向けて言いながら、ずんずんという音が鳴るのではないかと思うような優雅なのであるが怒っているのが目に見えて分かるような足取りで戻っていった。

3

それからして次の授業に入っていた。

教壇には先ほどまでの二時間立っていた真耶ではなく、千冬であった。生徒たちもこれははじめに聞かなければあの出席簿が飛んでくると思っているのだろう、それに後ろに立っている真耶もまた、憧れの千冬の授業だということで自身もノートを取り出すなどの真面目さを発揮していた。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

とそれについて説明を始めようとした千冬であるが、途中で何かを思い出したようにいったん授業を切る。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

などと彼女が言うようにクラス対抗戦に出る代表者を決めなければいけないらしい。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……、つまりは、まあ、クラス長だな」

一旦開いたその間合いはなんだろうかと思ったが、気にしないことにした。

「ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいるように」

つまりは代表になったならば、皆の上に立つということであるから、その自覚と責任を持って行動するということだ。

かなり責任重大な役である。

「それで誰か立候補者はいないか？ 推薦でも構わないぞ？」

教壇で腕組みをしながらクラスを眺めながら言う千冬。彼女の言葉に静かであったクラスの中が急にざわめきだした。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

すると突然一人の生徒が手を上げ一夏を推薦するような発言をした。

「私もそれがいいと思います！」

「私もー！」

その発言に乗っかる形で次々と一夏を推薦するような発言が出る。党の一夏はというと最初は織斑って誰だと言う表情であったが、自身が織斑であることに気づき、慌てて立ち上がっていた。

「お、俺!？」

すると案の定、黙れと言いたいのだろう。目の前にいる千冬からの出席簿による攻撃を受けて沈黙する。

「では候補者は織斑一夏……ほかにはいないか？ もう一度言うが、自他推薦は問わないぞ。それと織斑。いい加減に席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか？」

再度尋ねる千冬。するとまた別の女子生徒が挙手をして言う。飛鳥はちらりとその女子生徒を見る……。まさかと思ったが布仏本音であった。

「私はアーちゃんを推薦します」

「な!？」 おい、どういうことだ!」

まさかの本音の推薦に思わず立ち上がり反論してしまう。おそら

く彼女の策略だろう。彼女なら指示しかねない。だが、逆に考えてこれはいい機会かもしれないと思った。

それはクラス代表戦……、1年生だけとはいえ、IS操縦者たちに対してMSの性能を見せられるのだから。性能自体は現在各国がこぞって開発に走っている第三世代と比べれば見劣りするかもしれないが。

だが、そこは飛鳥にとっては力強い幼馴染たちの力も借りて今まで改良を重ねてきた。当然試験のときよりも戦闘能力は上がっている。

いきなり推薦されたことで、焦ってそう言ってしまったが、ぐさま静かにしろと千冬に言われ、席につく。

「はいはい、私も飛鳥くんに一票いれまーす」

「私も飛鳥くんを推薦しまーす」

「俺もだ!」

何故かその推薦する声の中に男の——一夏の声も混じっていたがそこは敢えて無視した。

「候補者は紅月飛鳥と織斑一夏。他にいなければこれで締め切るぞ」

そう言って締め切ろうとした時だった。突然後ろの席のほうで机をものすごい音を立てながら叩くものがいた。

「待ってください! 納得がいきませんわ!」

振り向くとそこにいたのは先ほどの休憩時間に飛鳥たちに対して、

癪に触る言い方にて話し掛けて来た、イギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットであった。

案の定誰からの推薦も受けなかったことに腹を立てているのだろう。かなりプライドが高いから仕方のないことだろう。

「待ってください！ そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリアの口から飛び出してきた言葉というのはまさに先ほど推薦された二人を見下すような言葉であった。

——こ、こいつ……。

前方の席にてそう言っているセシリアに対して睨みつけるような視線をぶつける飛鳥。怒りからか小刻みに体が震えている。握られた拳が真っ赤になっていた……。このような考えを持つものとははつきり言って一緒にいたくない。虫唾が走る。いくら、嘗ての日本だけでなく世界において男尊女卑があったからといって、それをまた繰り返すような人間につくづく嫌気がさしていた。

以前、ここに来る前に通っていた軍事学校の中等部においても、訓練をするというときにそういう女子もいた。たちが悪い女性教官もいて、むかついたのでもぼこにしてやったこともあった。さすがにここではそれをやるわけにもいかず、曲がり形にも彼女は代表候補生。つまりは国の代表としてここに来ているのだ。とは言え、彼女の発言や行動というのは著しくイギリスの評価を下げているようにしか思えない。更にセシリアの独論が続く……。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術な修練に来てるのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

もはや誰もが何も言わずに、セシリアの独論を聞いていた。担任である千冬も何も言わずに黙っている。言いたいことは言わせておけ、そんなもの自分には通用しないと無言の彼女から伝わってきた。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！ ISの知識もろくにない極東のサルや、ISも使えないくせに玩具でISに対抗しようとしている極東のサルがクラスの代表になるなんてありませんわ！」

とうとう周りに対してもオーバーな振る舞いを見せる。

そう言うのなら自推すればよかっただろうにと飛鳥を含めた周りの生徒たちが思うのは当然である。どうやら彼女はそんなことをしなくても自分が選ばれるのだろうと鷹を括っていたのだろう。それなのに彼女ではなく選ばれそうになっているのはISではなくMSを操縦する飛鳥と唯一男子の操縦者である一夏であった。

いよいよ怒りの沸点を超えそうになっている飛鳥。セシリアがいった言葉……。ISを使えないのはこの際どうでもいい。むしろ使えなかったことは幸運であったと思っていた。誰があんな家族の仇であるものを操縦したいなどと思うだろうか。MSは形こそISと似ているが作り主が違う。

それを造り、残していったのは紛れもなく飛鳥の父親だ。それを玩具呼ばわり……。あの日怒りを灯した赤い瞳が再びそこにあった。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で……」

しかし、セシリアの言葉はそこで切られた。突然バァンツというものの凄い音を立てながら立ち上がったのは飛鳥であった。

一夏も立ち上がりとしていたのだが、先に立ち上がった飛鳥に気づいて、途中で止まっている。

クラスの視線は突然立ち上がった飛鳥に向けられている。もの凄い音が鳴った元は机であり、殴りつけられた拳は真っ赤になっており、机は軋んでいる。

「さっきから聞いていれば言いたいことごちゃごちゃといいやがって！ そんなに日本が気に入らないのならイギリスに帰れよ！」

「な！？」

突然もの凄い音を立てて立ち上がった飛鳥が何をしようというのかと思っていたら突然帰れというのだからセシリアは最初は理解が追いつかなかった。

「なんだよさっきからいくらお前が代表候補生だからって、いいいいことと悪いことがあるだろ！」

「あ、あなたこのわたくしに口答えを……」

「黙れよ！」

「くっ！」

セシリアも言われるだけでは気がすまないので何とか言い返そうとするものすごい剣幕で怒鳴られたために思わず一步下がってしまった。自分が男に遅れをとったことになんか悔しいのか、それが表情に出ている。

「お前が見下している極東の猿が……、俺だって言いたくないけど IS を造ったんだろ？ お前がこうしてここにいられるのだって IS があるからだろ！」

IS、ISなどと口にするたびに更にイライラが募る。自分の人生をめちゃくちゃにしたそれを口にするのは不愉快だったからだ。だが、ここでそれを言わないわけにはいかなかった。今にも暴れなくなるこの衝動を何とか押さえ込んでいる飛鳥。

「それに文化に先進も後進も関係ないだろ！ いい加減な考えでものを言うんじゃないぞコノヤロウ！」

確かに彼女がここまで流暢に日本語が喋れるのは相当勉強をしたからであろう。だからといって彼女に文化で否定される筋合いはないのだ。飛鳥だって別段文化を逐一全て覚えているような日本文化マニアではないが、それでも最低限のことは知っている。対してイギリスのことで何を知っているといってもほとんど興味もないので知らない。ここでお互いの文化に対して文句を言っても意味はない。ただの幼稚園児の喧嘩である。

「く！ IS にも乗れないあなたにとにかく言われる筋合いはありませんわ！」

IS に乗れない＝弱い存在。

そうセシリアは言っている。確かにこの学園内では立場的には飛鳥は一課よりも弱いかもしれない。一夏は国から守ってもらうような、そんな貴重な立場にいるが。ISを操れない飛鳥は別にどうでもいいというわけではないが、希少価値は低い。物として見られているようであるが、はつきり言ってIS協会の者たちからすれば飛鳥も一夏も物同然なのだ。

「それになんですの？ あなたもしかして、MSなどという玩具でこのわたくしに対抗しようとしてもお思いで？」
「玩具だと……？」

セシリアの言った言葉露骨に反応を示す飛鳥。一步その場からセシリアに近づく。お互いに睨み合ったまま動かない。まさに一発触発がおきそうな状態とその雰囲気がこのクラスを包み込んでいた。

完全に出遅れた一夏は立ち上がることも、何かを口にする 것도できずに黙ってそれを見ているしかできない。それを善しとさせない二人からの無言の威圧があったからだ。

これ以上長く続けば何がおきるかわからない。そんな雰囲気立ち込め始めていた。すると教室に響き渡る数回の乾いた手を叩く音。生徒たちが視線を向けた先には鋭い視線を向けている千冬がいた。

これ以上口論を続けさせて何かがあつては遅いと予想した彼女はそろそろ収拾をつけるためということで無理やり視線を集めさせていた。その有無を言わせぬ視線に黙らざるを得ない。それ以上は言葉ではなく拳が出そうだ。

「自推他推から、候補者は紅月飛鳥、織斑一夏、セシリア・オルコットの三人とする。この三人による模擬戦を来週第3アリーナにて

執り行うことにする」

つまりは最も勝利数が多いものが、クラスの代表となるわけである。

「決闘ですわ!」

再び机を叩くセシリア。その指が向けられているのは飛鳥と一夏である。

「ああ、いいぜ。やってやるさ!」

千冬の言葉に便乗し、勢いを取り戻したセシリアが再び堂々とした態度で二人に言ってくる。しかし空元気であることを知っている二人は気にしていない様子である。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い……、いえ、奴隷にしますわよ」

まったくここまでくると女尊男卑も末期である。

「わざと負けるほど、俺達は馬鹿じゃない」

いい加減に我慢ならない一夏も席から立ち上がって言う。

「そう? 何にせよ、ちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわね!」

「そうだな……、どのくらいハンデをつける?」

「あら、早速お願いかしら?」

一夏の言葉に笑みを作るセシリア。まさに女王様気分である。

「いや、俺がどのくらいハンデをつければいいのかわかってはなしなんだが……」

するとクラスの中にどっと笑い声が広がる。一夏は一体何が起きたんだという表情である。

「織斑君、それ本気で言ってるの？」

すると一夏の後ろに座っている生徒が笑いをこらえながら言うてくる。

「男が女より強かったのは大昔の話だよ」

「織斑君もISを使えるけど、それは言い過ぎよ」

「ISを使えない飛鳥くんは……、MSだけ？ ISに勝てるの？」

みんなが飛鳥たち二人に対して本気で笑っている。それは当然であった。今の時代、男は女よりも圧倒的に弱いのである。更に世間にもほとんど知られていないMS。功績もないそれが一体ISに通用するのだろうか。いくら試験において教師を破ったとは言え、それはマグレかもしれないというものもある。実際にあの時は明らかに相手教師が気を抜いていたということもある。あの時は未だ完成の域をいっていないMSにおいてどこまでいけるかわからなかったが、今ならやれると思っていた。

それに彼女たちが言う女が男より強いというのは高々権力であり、地位である。その理由は男がISを使えないからだ。しかし、

現に彼女たちの目の前には織斑一夏と言う男が何故かISを使える。

とは言え相手は曲がり形にも代表候補生。稼動数秒しかない一夏にとっては自らの立場とセシリアの立場を考えて発言しなければいけないだろう。むしろ普通はハンデをつけてもらうべきなのだから。

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデをつけなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

先ほどの激昂の面影すら見せないセシリアのこの様子。嘲笑を二人に向かってその顔に浮かべていた。代表候補生である彼女にとって、飛鳥たち二人は戦闘に関しては全く興味はなかった。片やISに乗れるというだけの馬鹿、片やISに乗れずにそれに無謀にも対抗するようなものに乗る馬鹿。彼女のはすでに自らの勝ちを確信していた。

「ねー、紅月くん、織斑くん。今からでも遅くないよ？ セシリアに言って、ハンデ付けてもらったら？」

更に声をかけてくる女子。彼女からすれば二人を気遣っての言葉なのだろう。しかし今の二人にとってははつきり言って逆効果である。女の彼女が男の二人を馬鹿にしているようにしか感じられないからである。

「だったらハンデはいらない……」

「「えっ？」」

セシリアを含む女子生徒たちは同時に呟く。

「いないって言ってるんだよ」

「で、でも紅月くん……？ セシリアは代表——」

後ろの女子が何かを言おうとしたとき。

「だから、なんだよ？」

まるで関係ないというニュアンスで言う。

「結局そういう奴がクラス代表になるんだから、いまさらハンデも何もない。それにハンデをつけて、それで負けたときの口実にされたらたまらないからな」

「ISに乗れない、玩具乗りのあなたが何をできるというのですの？ まさかわたくし、セシリア・オルコットを倒せるとでも？」

もはや眼中に無いという様子のセシリア。

「倒せる倒せないじゃない……。倒す！ ただそれだけだ。その伸びきった鼻……、へし折ってやる！」

するとこれ以上話し合いをさせるときりが無いと感じた千冬は再び手を叩いて区切りを入れる。

一夏もセシリアに対してやる気満々の視線をぶつけながら机に座る。飛鳥はまだイライラをその体に纏いながらも、ゆっくりと座る。セシリアも千冬に対しては逆らえないのか、席につく。

「さて、話は纏まったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。それぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

そうして授業が再開された――

PHASE 02 Refusal（拒絶）（後書き）

ED ↓ 遠雷 〈 遠くにある明かり 〉 < HIGH and MIG
HTY COLOR >

加筆修正完了 11月25日

PHASE03 Childhood・Friend（幼馴染）（前書き）

OP↓i gnited＜T・M・R evolution＞

二人の口調はこれでよかったのか、ちょっと不安です。

なんとかPHASE03。今回はシリアスよりもほのぼののです。

ご感想、お気に入り登録どうもありがとうございます。

PHASE 03 Childhood・Friend（幼馴染）

1

「終わった……」

腕を伸ばして伸びをするのは飛鳥である。ようやく一日が終わったことを表すように、その体からバキバキッというこりにこった音がした。

「身体的より、精神的にきつかったな」

「ああ、それは言えてる……」

飛鳥はそう言いながらも帰りの支度をしている。それに対しては一夏も同感だと言う。気が付けば、教室には飛鳥と一夏しかいなかった。教室の外にはまだ二人のことを見ようという女子生徒達がいるが。

まさかここまで初日からバタバタするようなことになるとは思っても見なかった。飛鳥は近くのホテルから、一夏は自宅からそれぞれ通うことになっている。そろそろ帰ろうかということ、二人は立ち上がり、鞆を手に掴んだ。すると同時に教室の扉が開けられた。

「ああよかった、まだいました」

そこにいたのは担任の千冬と真耶であった。扉を開けたのは先頭で入ってきた真耶であり、相変わらぬのぼわぼわとしたスマイルである。

「二人の部屋割が決まりましたよ」

その言葉に二人はえっという驚いた表情になる。

一応 I S 学園は全寮制である。それは I S 学園が国など関係なく中立なものであるためにさまざまな思惑と、一元管理できる手軽さによるための全寮制であった。

今までは女子しかいなかったためにその管理は簡単であったが、今年は違う。飛鳥という I S に対抗しうるかもしれない M S というものを操縦するイレギュラーと一夏という男の操縦者というイレギュラーがいるからであった。

そうなると女子とは微妙に違った設備や風紀、道徳などから、一気に管理が大変になる。それ等が整うのに約一週間はかかると言われ、それまで二人は例外として自宅通学を言い渡されていた。

「え？ 俺は確か一週間は自宅通学って言われてたんですけど？」

一夏がそう言われ、聞き返す。すると千冬があきれたように言うてくる。

「お前は自分の立場を理解しているか？」

その言葉に一夏が言う。

「つまり、俺達に危険が及ばないようにつてことか？」

「だろうな。俺の場合は M S の強奪、お前に関してはお前の体自身。ふらふらと外を出歩いていたら誘拐されてモルモット行きだな」

「紅月、もう少しオブラートに包んだ言い方はないのか？」

「でも、事実でしょ？」

取りあえず部屋割りがどうなっているのかを聞く。基本的に男同士になるはずであるが、真耶から飛び出した言葉はそれぞれ別々だということだった。一夏に『1025』、飛鳥に『1034』と書かれた鍵と、寮生活についての注意事項が書かれた紙を手渡した。

「お前達の荷物は必要最低限な物だけ……、代えの衣服と携帯の充電器で十分だろう、すでに部屋に送っている。残りの必要な物は休日取りに帰るんだな」

確かにそうだが、男としての生活必需品がないことは二人にとっては少し寂しいものであった。

2

それからして、二人は教室を出て部屋を探していた。

「……、1024、1025と。ここだ」

飛鳥と一夏は鞆を肩から提げて部屋を探していた。取りあえず番号が若い一夏の部屋が先に見つかった。とりあえず、夕食に行く前に部屋の中にある少ない荷物を整理するということになった二人はそれぞれの部屋へと入っていく。飛鳥も自身の部屋である1034号室を目指す。

取りあえず中に誰かがいるかどうか分からない。ノックを一応してみた。すると中からなんだか聞いたことのある声色でどうぞくと言うのが聞こえた。取りあえずドアノブを引き、中へと入る。

そして最初に眼に入っただのは――

「ピカ○○ウ……？」

「ん？　アーちゃんだ〜」

「え？　なんで……？」

そこにいたのは黄色の狐の寝巻きをした同じクラスであり、隣に座っている幼馴染の布仏本音であり、その横にあるベッドにラフな格好で寝そべっていたのは4組にいる同じく幼馴染である更識簪の姿があった。

何故か無理やりに取り付けられたようなベッドがあり、その上には二つほどの中くらいのダンボールがガムテープにて閉じられた状態で置かれていた。

そんなことよりもどうして彼女たちがここにいいのか。飛鳥にとってはそれが大きな疑問であった。

「な、何でお前たちがここに？」

「え〜、だってここが私たちの寝泊りする部屋だから〜？」

「何で疑問系？」

思わず尋ねてしまった飛鳥であるが、本音は何故か疑問系の語尾で答える。思わずつつこんでしまうのは致し方がない。

そして、今度は本音の隣り、廊下側のベッドに寝そべてこちらを見ていた簪を見る。女子同士の部屋だからか、かなり身軽でラフな格好である。最初こそ二人の幼馴染が自身がこれから寝泊りするはずの部屋にいたために内心驚いていたのでほとんど気づいていな

かったが、落ち着いた今もう一度見るとちらちらと下着のようなものが見える。

思わずそこに眼を向けてしまい、すぐさま眼をそらす。

「あ！」

簪自身も自分が今どんな服装でいて、そこに立っている飛鳥の性別が自分たちとは違う男性だということにようやく気づき、慌てて足元にあった薄い掛け布団で身体を隠す。

「……」

「な、なんだよ」

胸の高さまで掛け布団を持ってきて、眼鏡の奥の瞳が飛鳥を睨みつけていた。怒っているというよりも、恥ずかしいというのだろう。とは言え鈍感な飛鳥が気づくはずもなく。怒っているのだろうと思いつつも、思わず強めに言い返してしまう。

「見た……？」

「……」

何をと聞き返すほど、飛鳥は馬鹿ではない。眼が泳いでいることから、簪は見たのだと確信する。

当の飛鳥はこれ以上突っ立っていても、簪から向けられる視線に耐えられる自身がなかったので話題を戻すことにする。

「え、えっとなんだ？ お前らもここで寝泊りするんだな？」
「そうだよ」

「うん……」

と言う事はと、飛鳥はただ一つの答えに帰結した。ここにいるのは男子である自分一人と女子二人の本音と簪。ベッドの数は二人が座っているのとダンボールがぼつねんと置かれているのを合わせる。と三つ。なら残っているベッドは誰が使うのか。当然のことながら突っ立っている飛鳥しかない。

「てことは、お前らと相部屋ってこと？」

「そういうこと。また一緒だね」

「そうだね」

相変わらずのほほんとしたマイペースな口調で言う本音と、淡々とクールに話してくる簪。とは言え彼女たちも内心気恥ずかしさを感じつつも、小さい頃はよく並んで寝たことを思い出し、懐かしさと嬉しさを感じていた。

取りあえず荷物の整理をしようとベッドに近づく。そこには発送者がかかれており、書かれていたのは『更識楯無』。おそらく家に置かれているのを従者に頼んで自分の名を使って遅らせたのだろう。素直にここにいない幼馴染に対して感謝した。

「それにしても、すごいな……」

とりあえず部屋の中に入ってそれを見た率直な感想がそれだった。まるで豪華な高級ホテルなのではないかと思えるような造りであった。

衣服などが入ったしたダンボールが、有り得ないくらい、その空間に不釣り合いな存在感を放っていた。

ベッドに腰掛けてみるとものすごい弾力に驚いた。子どもであつたらここを飛び跳ねて遊ぶだろう。とりあえずダンボールの中の着替えや、勉強道具を整理しようと思い、立ち上がる。

豪華な部屋であるために、色々と整備がなされている。本棚やら勉強に使うテーブルやは当然のこと、最新式のテレビや、更にはパソコンなども置かれているなどどこまで金をつぎ込んでいるのだと思うくらいであつた。

それにしても男にとっての生活必需品がどうして入っているのか。こつそりと買ってきては見つからないようにとかくしていたにもかかわらずダンボールの中に入っていた。家には自分一人しか住んでいないために絶対に有り得ないのにと思い、少し引きつった笑みしかできない。

さすがにそれを出すわけにも行かず、後ろでは小首を傾げている本音と黙ってこちらに読んでいたものから目を離し、ちらりちらりと視線を向けている簪がいる。

いくらなんでも異性に対して、さすがにこれの類を見せるのは気恥ずかしさが勝る。仕方ないとダンボールに封印したままベッドの下へと滑り込ませた。内心幼馴染——この学校では学年が一つ違っているが、彼女に対してやってくれたなという思いを向けていた。

3

それからしばらくして、三人はそれぞれのベッドの上に座って話をしていた。話題は飛鳥が相手の代表候補生に喧嘩をふっかけたということだ。飛鳥の席の隣にいる本音がその話題を出したのだ。

「何してるの……」

「ぐっ！」

あきれたように言ってくる簪。その言葉と細められた目で見られ、思わずどもってしまふ。更識簪は現在の日本代表の候補生としての立場にいる。そのため、他の国の代表候補生についてのことも知らないというわけではなかった。そのためにセシリアのことも全く知らないというわけではない。

第三世代のIS『ブルーティアーズ』のイメージインターフェースとしての特徴的なのは青い涙と形容されるようにビットによるオールレンジの攻撃であった。はつきり言っ一対多において真価を発揮するような後方支援型のISである。一応の知識で知っていたためにふと思ひ出していた。

「代表候補生に喧嘩を振るって……」

「し、仕方ないだろ。アイツ、むかついたから」

昔から兄妹同然に過ごしてきたために普通にタメ口である。ここまで簪が話しに乗っかってくるとは珍しいと思った。もともと口数が少ないのだ。とは言え少しずつ変わろうとしているのかと思うと嬉しく思えた。

「アーちゃんはセシリーに勝てる？」

「せ、セシリー……？」

おそらくセシリアだからセシリーといったのだろう。彼女の言うニックネームは時々良く分からないものがある。

「勝てる勝てないじゃなくて、勝つ……、だな。あそこまで馬鹿にされて、悔しくないわけがない」

彼女がISを操縦できるということで相手を……、主に男を見下すのは今に始まったわけではない。ISを使えるわけじゃないのに、理不尽な要求をされたことだってある。だからと言って、自分の親を馬鹿にされて我慢できるわけがなかった。すでにこの世にいない使者を愚弄されたのだ。あそこで言葉より先に手が出なかったのは今までの飛鳥からすれば賞賛されるべきことなのかもしれない。

それにMSがただ父だけ残したものであるわけではなかった。すでにISが世界に広がり数年が経っていた。家柄のこともあってかISの技術もこちらに流れていた。更に幼馴染の姉妹が揃って国の代表やら代表候補生やらになっている。彼女たちの助力もあり、このIS学園に入ることができたのだ。父親だけではなく、彼女たちの協力すらも否定されたのだ。飛鳥がキレルのは当然の結果であった。

「俺のことだったらここに来る前だって普通に言われていたさ。だけど、父さんやお前たちのことを馬鹿にされたら我慢できるわけない」

また思い出しただけに腸が煮えくる思いだった。あそこまで自分の大切な存在を馬鹿にされたのは初めてだった。だからこそ決闘を受け入れた。代表候補生とか、そういう立場というのは無視して、ただ紅月飛鳥という一人の人間としてそれを受け入れた。

「それにおりむーも一緒だよね」

「おりむー?」

「織斑一夏。あの世界で始めての男の操縦者の奴だよ」

本音のその独特なニックネームの人物が誰なのか聞いてきた簪。飛鳥以外にも無謀にも代表候補生に挑む馬鹿がいたのかと思ったのだろう。飛鳥はそのニュアンスから一夏のことだと分かった。

「……」

簪はその一夏の名前が出た瞬間、表情が強張る。それに気づいていたのは本音くらいだろうか。またぶり返していた怒りで周りを見ていなかった飛鳥がそれに気づくことは不可能だ。

「アーちゃんは今日、おりむーと喋ってたけど。どうだった？」

本音が聞いてくる。確かに二時限目が終わってから同じ男として交流しておいても良いだろうということと話していたが。

「馬鹿だな」

二人は揃って？を頭に浮かべていた。とはいえそう言いたいという理由は同じクラスである本音も分からないわけではないだろう。

色々あったがあれはその言葉で尽きるだろう。確かにお人よしなところもあり、それは評価に入るかもしれない。だが、総合して飛鳥から言えるのはその一言だった。

そこでようやく冷静にもものを見れるまでに落ち着いていた。ふと先ほどよりも表情が良くない簪を見てようやく察する。彼女の胸のうちに持っている感情やそれに関係することを考えれば分かることだった。

思わずこの話をするのはまずかったかと思う。完全に失念していた。

「う……、まあ。なんだ。1週間後の決定戦……、勝つしかない」

そう呟いて見つめる先にある紅いブレスレットの待機状態であるヴェステイージが照明の光で怪しく輝いていた――

PHASE 03 Childhood・Friend幼馴染（後書き）

ED1↓遠雷　　く遠くにある明かりく<HIGH and MIG
HTY COLOR>

誤字・脱字、ご感想がありましたらよろしくお願いします。

加筆修正完了。　　11月26日

PHASE04 Vestige（傷跡）（前書き）

OP1↓ignited<T・M・Revolution>

たくさんのお気に入りのご登録ありがとうございます。

ご感想や、誤字脱字がありましたらよろしく願います。

加筆修正完了 12月1日

PHASE 04 Vestige（傷跡）

1

IS学園入学二日目、暖かな光が、窓際のベッドを使用している飛鳥の顔にダイレクトに降りそそぐ。どうやらカーテンの隙間から溢れ出していたらしい。とはいえ軍事学校の中等部に行っていた頃と変わらない時間であるために目覚めはそれほど悪くない。むしろ普通であった。

ゆっくりと日差しが目差し込んできて、ゆっくりと開けられる赤い瞳。しばらくぼんやりと真っ白な天井を眺めていた。そして、不意に自分の体が動かないことに気づいた。

いや、これは動かないというよりも動けないといったほうがいいのか。何かが身体にのしかかっており、不意に何か柔らかく、暖かい何かが自分の身体に触れているのを感じ取った。

その柔らかいものが何なのか。理解できないにも関わらず、体が熱くなるのを禁じえない。慌てて顔を動かし隣の二つあるベッドに寝ているだろう二人を見る。変わらずやすやすと眠っている二人の姿があった。

ならどうして飛鳥の使っている布団が異様に盛り上がっているのだろうか。恐る恐るであるがゆっくりと布団をめくり上げる。

「あは♪」

「な……」

そこにいたのは簪と同じ、水色の綺麗な髪をした少女。飛鳥よりも一つ学年が上の幼馴染である現更識家当主である更識楯無その人だった。

「あ、あんた一体何を……」

「おねーさんも人肌恋しいときがあるのよ」

「だ、だからって……」

何もこんなことをする必要もないだろうと言いたかったが、言ったところで言い包められるのでやめておいた。

それにしても思わず目が一点を向いてしまうのは飛鳥も男だから仕方がない。頬に赤みが差している。にゅっと伸びてきた細く、雪のように白い手がその頬を指でつつく。

「や、やめろ……」

「あははは、アツくん照れてるね♪」

顔をのけぞらそうにも体が動かせないために更につつかれる。ちらちらと見える豊かな谷間が視線に入るたびに更に顔が熱くなるのを感じる。それを見逃すような彼女ではない。むしろ見せているといわんばかりの薄着である。

ようやく解放され、起き上がる飛鳥はベッドの端に座る。着崩れた服装を直す。その横に布団をかぶった楯無が座っている。

「で……?」

ジト目で隣にいる彼女を見る。きょとんとした瞳で飛鳥を見ている楯無を見て尋ねる。

「あんたは何をしにここに来たんだよ……」

「むゝ。また昔のように『お姉ちゃん』って呼んでくれないのかな？」

「なっ!?!」

自身の恥ずかしい過去。純粹無垢な子どもであった時、それは素直に近所であった彼女との交流が当然にあった。家柄からなかなか近づきがたい雰囲気があったがふとしたきっかけで遊ぶことになったのだ。

今も通じて楯無が飛鳥のことをアツくんと呼んでいるように、小さい頃は今こそ気恥ずかしく『あんた』としか呼べない飛鳥も『お姉ちゃん』と呼んで慕っていた。

「無理だ……」

「えゝ」

「無理なものは無理だ。恥ずかしい」

「私はむしろ嬉しいのだけどね」

そんなことを言っている二人であるが昔のように楽しく話をしていたときのようにスムーズに口が動いていた。飛鳥が家族を失ってから、更識家にお世話になったのは2年ほど。そしてすぐに普通中学校ではなく短期の軍事学校中等部に編入していった。その二年の間にも飛鳥は彼女たちと混じって武道などを通じて自らを鍛えた。

はつきり言って彼女たちに手も脚も出ずにやられる毎日であった。情けなく、人知れず涙したこともある。それでも腐らなかったことの大きな割合を占めていたのは篠ノ之束及び白騎士への怨みであった。

ふとそれを思い出し、思わず握り拳に力が入る。それをそっと包み込む楯無の柔らかな手。何も言わないが、あの時と同じように、無理はしないでほしいと言っているような気がした。

ちらりと横を見るとすぐ近くに座り変えていた彼女の横顔が見える。そこにはからかうような様子はなく、ただ純粹に嘗てのように幼馴染、姉として心配している楯無がいた。

「あんまり無理しないでほしいな。何かあったらおねーさん悲しいから」

体が密着し、お互いの鼓動が感じられる。どきどきとした心臓の鼓動が知られていると思うと、落ち着くばかりか更に加速する。ふわっと香ってくる女性特有の甘い香り。それが鼻腔をくすぐり、もっと、もっとという欲を掻きたてる。飛鳥にとっては使ったことはあるわけがないが、まるで麻薬のようなものであった。

「わ、わ、分かった。分かったから」

「なに？ どうしてそんなに焦ってるのかな？」

すると変わり身の早い彼女はすぐに悪戯っ娘のような笑みを浮かべてくる。助けを呼ぼうにも二人はまだ夢の世界に旅立っているようで無理やり起こすのはかわいそうだ。時間はまだ早いというのにどうして彼女は来たのだろうかという疑問もあったが今はそれどころではないのだ。

「だから、離れろ！」

「やっだ♪」

離れるどころか更に体を密着させる。小さい頃ならお互いに姉弟のような感じで、友達感覚でいられたかもしれない。しかし、お互いにもうそういう年齢ではない。男は女を、またその逆に女は男を意識する。後ずさる飛鳥を追いかけるようにして這うようにして近づく。すらりと布団が床に滑り落ち、薄い服装から白い肌が見える。

がりがり削られていく理性。今まで彼女を女として見なかったかどうかと言われれば、魅力的な女の子だと思う。だが、これはまづい。非常にまづかった。理性が警報を発している。顔が赤い、心臓の鼓動が早い、緊張で口の中が乾いていく。

誰か助けてくれ。そう心の中で叫んでいた。いよいよ理性という防波堤が瓦解しそうになったとき。突然部屋の扉が勢い良く開かれた。思わず二人はその方向へと視線を向ける。

そこには起きたばかりですぐに來たのだろう、まだ寝巻き姿の女子生徒がいた。いつもは三つ編みにしている長髪そのまま流し、綺麗な顔立ち、そして、眼鏡を掛けた彼女はずんずんと部屋に入ってきて、飛鳥と楯無の前に立つ。

「あははは……」

「お、おはよう……」

「「虚」」

そこに現れたのは飛鳥よりも2つ年上であり幼馴染、隣にいる楯無にとっては自身に仕えている人物であった。そんな虚は目の前にいる二人を見て小さくため息をついている。

「おはようございます……。とりあえず、お嬢様」

「な、何かしら虚……」

一応の挨拶に対する返事を済ませた虚はすぐに飛鳥の隣にいる楯無に視線を向ける。苦笑いで答える楯無。するとグイッと腕を掴まれ立ち上がられる。

「にゃ!?!」

まるで首根っこをつままれた猫のような声をあげて立たされる楯無。そのまま腕を引っ張る形でずると連れて行かれる。助けてなどとまるで連れてかれるヒロインのように演じているが、そのときの飛鳥にとってはむしろ虚はヒーローのように見えた。

「全くお嬢様は……。目が覚めてみてみたらベッドがものけの空とは」

「エヘヘヘ、やっぱり虚には敵わないな」

まだやや肌寒いという朝なので虚が持ってきた上着を着ている楯無。どうやら彼女たちは同室らしい。まあ、二人の関係を考えれば当然なのであるが。この部屋に最初にいた簪と本音もまた同じような関係である。

「すみません、飛鳥くん。こんな朝早くからお嬢様が迷惑をかけてしまい」

「え、いえ。あ、あと助かったよ」

専属のメイドであるために謝罪を入れている。飛鳥にしてみれば彼女が来なかったら、これから何をされていたかと思うとむしろ感謝しても仕切れない。内心かなり緊張していたし、雰囲気飲み込まれるところでもあったのは否めない。

「もー。虚が来なかったらもう少して楽しいことができたのに」

「お嬢様？」

「ひいっ！」

口を尖らせて言う楯無であるが、虚が静かに、それでも怖い笑顔で言うために思わず小さく悲鳴をあげてしまう。

「とりあえず戻りましょう、お嬢様。これ以上の長居はお互いに悪いです」

「そうねー。残念だけど、これ以上いるとここの寮長さんに怒られちゃうわ」

この寮を管理している寮長は一夏の姉である織斑千冬である。確かに彼女に見つかったりしたら大変なことになるということで、虚が楯無のことを連れ戻しにきたのは賢明な判断だ。

「何か助けが欲しかったら、いつでもおねーさんの所に来るのよ。いつでも力になるから」

「ああ、分かった」

「あと、クラス代表決定戦、頑張ってね」

「え、何で知って……」

「うふふふ、おねーさんに隠し事は……」

「会長権限で知ったのですよ」

「何で真実を言っちゃうのよー！」

「それっていいのかよ……」

最後は頼りになる姉としての言葉を残していきたかったのだろうが、最後の最後で彼女の行動力の凄まじさを知らせることになってしまったのだった。とりあえず、軍学校での生活が見に染み付いてしまっていたので早朝のトレーニングをするべく、着替えを済ませ

外へと向かうのだった――

2

あれから1時間ほど後。飛鳥は、同室の簪と本音とともに食堂にて朝食を採っていた。あれからトレーニングを終えて戻るとすでに二人は起きており、着替えも終わっていた。更に食堂では彼ら3人の他にも、そこに向かう途中で会った女子生徒も一緒であった。

はじめは簪は一人でいいといていたが、これから三年間子の学園で生活をしていくのだから少しは交流関係を広めておいた方がいいとも言い、本音の後押しもあってか一緒の席に座っていた。離れて座ればいつの間にかいなくなるのも考えられたので、隣に一緒に座っていた。飛鳥の簪と反対の席には本音が座っている。

とりあえず朝食は和食である。

このIS学園、世界各地から生徒が来るので食事も生徒の要望に応えるために多国籍料理が網羅されている。更にその料理の味は有名ホテルを貼るかに凌駕する美味である。しかし、そこで働いているのは、どう見てもパートのオバサンなのであるが、人は見かけで判断するべきではないなと思ひ知らされた。

周囲からの視線は相変わらず凄いものである。昨日から彼女たちの行動や視線がぶつかっている。どうやって話しかけたらいいか、どうやって話しかけるきっかけを作ればいいのか、それらを実行するのに勇気が無いという理由でなかなか近づけないらしい。

どうやら彼女達の大半は小・中と女子校出身であるらしい。ISの授業は女性は必須であるけど、操縦できない男には必要ない。共

学校でもISの授業が取り入れられていないというわけではないが、それでも女子校の方が俄然力の入れようは違う。

それに、小さい頃からの英才教育を施す学校も多いために、男との交流がない彼女たちはほとんど男に対する免疫がないのだ。

つまり、彼女たちは箱入り娘、お嬢様達なのだ。

女尊男卑の世の中で、この学園でISは操縦できないが、それに取って代わるかもしれないMSを操縦する飛鳥と唯一男性としてISを操縦できる一夏はある程度尊重されている。それでも昨日のセシリアのように、まだ二人を見下しているものも少なくはない。

それに四方八方からの視線である。はっきり言って監視されているようにしか思えず、気分が悪い。

「ああ、私も早く声をかけておけばよかった……」

「まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「昨日の内に部屋に押しかけた子もいるって話だよ」

確かに飛鳥たちの部屋にも一年生だけではなく二年生や三年生の上級生も訪問に来た。危うく中に入ってくる生徒もいた。それを救ってくれたのは千冬であった。彼女の声一つで慌てて自室に戻り始めた女子生徒たち。

そして、現在に至る。飛鳥の周りで食事をする女子生徒たちは自分たちのトレーに載っているお皿にある量と飛鳥のを比べて言う。

「うわ、飛鳥くんって朝すっごい食べるんだねー！」

「お、男の子だね」

「そうか？　取りあえずこれくらいは当たり前だと思うけど」

色々な事情があるということを男である飛鳥が理解し切ることにはできない。例えそのような知識があろうとも、鈍感な飛鳥がすぐに理解できるわけではないのだった。

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか？」

飛鳥ははそんな彼女たちのトレイの上を見ながら言う。確かに飛鳥の摂っている食事量比べても少なすぎる。

「わ、私たちは……、ねえ？」

「う、うん……、平気かな？」

「お菓子よく食べるし」

「それは駄目だろ」

そんな風に言う女子生徒たち。さすがに最後の発言には突っ込みを入れておいた。良くそれだけで持つものだとはつきり言って感心してしまう飛鳥。真実を知るのは彼が鈍感から脱却したときだろうが、それを口にするのはデリカシーがないだろう。

「お前達、いつまでチンタラ食べている！　食事は迅速に、効率良くだ！　遅れた者はグラウンドを10周させるぞ！」

すると突然女性の声が食堂に響いた。視線をその方向に向けると1組の担任教師である千冬が白いジャージに身を包み仁王立ちしていた。和やかな雰囲気の中で食事をしていた生徒たちは千冬のその言葉に慌てて食事を流し込んでいくのだった。

「織斑、お前のISだが、予備がないため学園が専用機を用意することになった。到着するまで、しばし待て」

朝食からしばらくしてからの一時間目の授業にて、開始してすぐに千冬がそう言った。専用機という言葉に反応してか、クラスがざわついた。

「一年こんな時期に専用機？」

「ていうことは、国から支援が出たってこと？」

「いいなー、私も早く専用機欲しいなー」

そのように一夏が専用機を支給されることについて女子生徒たちの会話はヒートアップする。専用機が支給されるのはほとんどが国家代表や代表候補生、その実力に見合うものでしかない。だが、一夏のように全くのど素人に対して国からの援助が出るということははっきり言って帰結する答えは一つしかなかった。

しかし、そんなクラスメイトを尻目に、一夏はというと首を傾げている。

「なんで俺に専用機が？ それに、専用機ってそんなにすごいのか？」

そんな一夏は自身がどれだけ貴重な存在なのか理解していないようである。そんな一夏の言葉を聞いてクラス中の女子生徒が思わず机に頭を打ち付けてしまう。飛鳥はそんな一夏に対してもはや呆れを通り越した視線を向けていた。あれがかの世界最強と呼ばれる織斑千冬の弟なのだから。セシリアの言う期待はずれという言葉はまさに当て嵌るかもしれない。

とはいえ一夏の専用機を作っているのが倉持技研ということを隣の席である本音がこそつと教えてくれた。それを聞いてふと思いついたことがあった。代表候補生である四組の幼馴染、更識簪の専用機が以前作られていたのがそこであることだった。

以前というのは本音が教えてくれたように倉持技研が一夏の専用機を作るためということで、簪の専用機の製造が止まったのだった。もちろん一夏の専用機が完成すればすぐさま取り掛かるということだったらしいが、彼女の性格というのか、姉である楯無に対するコンプレックスからそれを自身の手だけで完成させると決めたらしいのだ。

もちろん彼女の専用機は未だ完成には至っていないらしい。とはいえ彼女はもともと自分から話をすることが少ない性格であるために、代表候補生ということから四組のクラス代表になったらしい。彼女にとってはクラス対抗決定戦が間近であるが、全く興味はないようだという。

ふと思ったがISを操縦できるわけではない飛鳥であるが、MSははつきり言ってISと原理上は同じである。そのため一夏のような全くのど素人のような操縦者が専用機を持ってもいいのだろうか。操縦する本人が乗りこなせなくてはただの宝の持ち腐れになるのではないかと思った。

話しは戻るが、さすがに一夏の言葉には千冬も頭を抱えていた。専用機の重要性くらいISを知っている人間なら誰でも分かる。それを知らない彼は一体なんなのか。さすがに女子生徒たちもものはリアクションを取るのもやめている。

「それに関する話はここまで。それでは授業を始める。織斑、教科書六ページだ。音読しろ」

そしてすぐに話を切ると、授業に入り、一夏に教科書を音読するように指示する。

「あ、はい。えーと……」

一夏は言われたページを探して、立ち上がる。

「『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるISは467機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』」

音読し終わると、ほっとした様子で胸をなでおろし、席に座る。

「昨日も話したが、つまりそういうことだ。本来ならIS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。だが、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

ISの根幹を成すコアというものは世界中に467個しかあらず、それは専用機用と研究用にそれぞれ分けられている。更に国ごとに配給される数も全てIS協会が荒らすか条約にのって決めて決めら

れているのだ。

ならそのコアを複製すれば良いというが、その製造複製する過程のコア自体の構成が全くのブラックボックス化されているために不可能なのだ。更に唯一コアを作り出せるのは、ISというものを世に送り出した元凶であり、飛鳥の家族を奪って言った一人である篠ノ之束だけなのである。しかし、元凶の彼女はというと、姿を隠して世界中を逃げ回っている。彼女の腕が確かなのか、世界がただ間拔けなのか。

ISと簡単に一言で言ってもさまざまな世代わけが成されている。第一世代は兵器としてのISの完成を目指した機体。現在はほぼ退役している。

第二世代は後付武装によって、戦闘における用途の多様化に主眼が置かれた世代であり、現在最も多く実戦配備されている。代表的なものを上げるとすると純国産である打鉄とフランス産のラファール・リヴァイブである。

第三世代は操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載を目標とした世代である。未だ実験機の域を出ない。そのためか、どの機体も燃費が悪く、新たな課題となっているようだ。

飛鳥の使用するMS……。ここで言えばISと似ているのは防護服のようなスーツを着て、そこに待機状態になっている装甲を纏う。完全な全身装甲である。

しかし、第二世代のように後付武装などの換装することによってさまざまな状況に対応できるようになるものでもなければ、操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器も装備されているわ

けではない。

今はIS自体をこの待機常態である赤いブレスレットにできているが、武器を粒子変換するなどということは飛鳥の父親はさすがに解明できなかったし、開発もできなかったようだ。だが、それに取って代わる武器のほうでの開発は進んでいたようだった。

簡単に言えば飛鳥のMSは見た目的にはISで言う第1世代くらいなのだ。だが性能的に言えばどうなるかは未知数である。自己進化していくISといわれているが、果たしてMSはどのようなのだろうか……。

「安心しましたわ」

すると突然、そんな微妙に重い空気をものともせず高飛車な喋り方な透通った声が響く。もちろんその声の主はセリア・オルコットであった。いつものごとく腰に手を当てて、上品なポーズをとっている。

「わたくしと同じく専用機持ちならば、容赦はいりませんわね?? あとここではつきり言いますわ。あなた方に勝利はありませんことよ。イギリス代表候補生である、セリア・オルコットと戦おうだなんて、片腹痛いですわ。むしろ手合わせできるだけでも、貴重な体験ですわ」

ニヤニヤと見下すような言い方である。そんな彼女の言い草が気に入らなかった一夏は立ち上がり叫ぶ。

「ふざけるなよ。まだ試合もしてないのに、決め付けるだなんて、ふざけるな!」

「一々突っかかってくるなよコノヤロウ。何か言っていなきや不安なのか？ そんなのだとお前の実力の程度が知れるぜ」

「な、なんですって！」

確かにセシリアの操縦技術と機体の性能と比べれば雲泥の差があるかもしれない。彼女にそれで勝ちたいのであれば、最低限でも代表候補生レベルの力あたりは必要になるのではないかというのが、クラスの生徒たちの見解であった。そう思うとむしろ、勝負は目に見えているのだから、無駄なのではないかというのが当然のように思われていた。

「あなた、本気で言ってますの？ そんなろくに動かしたこともない機体ならましも、全く実績のない玩具でわたくしに傷の一つでも付けられるとでも、お思いですか？」

「だったら傷一つついたらどうだって言うんだよ！ 自分の言っている言葉に少しは責任を持てよな！」

当然そう言っている飛鳥自身もイギリスの国を背負ってここに来たセシリアに対する言葉も少しは控えなければいけないのであるが、そんなことを一々気にするような性格をしている飛鳥ではない。

「ふん。せいぜい最後まであがくのですわね。まあ、何をしようとこのわたくしセシリア・オルコットの勝ち揺るぎませんわ」

セシリアも興が醒めたといわんばかりに、鼻を鳴らして座り込む。クラスの中に重苦しい空気が立ちこめる中、ふと一人の女子生徒が質問があると手を上げる。千冬がそれを許可したためにおずおずと立ち上がりその視線を黒い髪をポニーテールにしている篠ノ之箒に向けて言う。

「あ、あの先生。篠ノ之ってことは、篠ノ之さんは東博士の関係者なのですか？」

その女子生徒は若干緊張間を漂わせながらそう質問した。誰もがその疑問を持っただろう。なぜなら篠ノ之東と篠ノ之箒は苗字が同じなのだから。その質問に対して、千冬はあいまいに流すように言おうとした。それは当然だろう、もしそれが正しいことなら小さな騒ぎでは済まされないのだから。しかし、その篠ノ之箒というのは何を血迷ったのか――

「あの人は関係ない！」

かなり真剣な表情で、鋭い視線を向ける箒を見て、質問をした女子生徒は体を小さく震えさせ、小さく悲鳴をあげ、ゆっくりと席に座る。周りの生徒たちもそんな箒の横顔を見てすぐに視線を逸らした。

そんな風に叫んでしまっでは、せっかく話を流そうとしていた千冬のさりげない気遣いが水の泡である。こうもなっではいくら教師が否定しようにも放棄自身がそれを認めてしまっていることになるためにどうしようもない。

仕方ないと千冬が授業を始めようとしたときだった。突然ものすごい音とともに立ち上がったものがいた。

「一体なんだ、紅月？ 質問があったらまずは挙手をしろ」

千冬が目を細めて睨むようにして言う。だが、そんな彼女の視線も言葉も無視して黙って前のほうの席にいる不機嫌だという雰囲気をかもし出している篠ノ之箒の元へと行く。

「なんだ？」

あからさまに敵意——不機嫌オーラを理不尽にも飛鳥にぶつけてくる。しかし、飛鳥の睨む視線を受け、一気にその不機嫌オーラは吹き飛んでいた。彼女はこのような瞳を知っているからだ。まるで何かを憎んでいるような瞳。そう自分の姉のせいで生活などを全てめちゃくちゃにされた両親が姉に向けているような瞳だった。いや、それと比べるのには足りない。もはや殺すことも厭わないと思うくらいの殺意や憎悪、怒りなどが瞳にあった。

「言え……」

「な、なに……？」

飛鳥の剣幕に押されてやや遅れを取る形で聞き返す。

「言えって言ってるんだよ！ お前の姉！ 篠ノ之束はどこにいる

！」

「し、知らない……」

「言え……、言え！ どこにいるんだ！」

とうとう胸倉を掴み、軍事学校で鍛えられた腕力で座っていた箒を軽々と持ち上げる。それを見て慌てて飛び出してきたのは一夏だ。さすがに幼馴染がやられるのは見ていられなかったのだろう。箒を飛鳥から引き離すようにして自身の後ろに庇うようにして立つ。そのまま飛鳥に対して拳を作り、思いつき殴りつける。

机にぶつかりながら床を転がる飛鳥。ものすごい音がして、生徒たちは悲鳴をあげる。鼻から血を流した飛鳥が睨みつけるようにして立ち上がる。殴られた頬は赤く腫れているが、その眼光は鋭いま

までである。

流れる血を甲で拭い取る。ゆっくりと立ち上がり。足を踏み出そうとする。だが、それを後ろからとめるように抱きつく存在があった。

「っ！」

飛鳥は無意識の内にそれを邪魔だと振りほどこうとした。怒りに支配された飛鳥の視界に入るのは親の敵であるものの妹とそれを庇うようにして立ちほだかる邪魔者だけだったのだ。

しかし、それができなかった。背中に抱きついて、わきの下からその人物の手が出ているが、制服がだばだば、その特徴的な制服を見て、振りほどこうとした力が一気に失せた。

「何するんだよ……」

「アーちゃん駄目だよ」

「本音……」

布仏本音が後ろから飛鳥のからだを捕まえていた。男の力を使えばすぐにでも投げ飛ばせるくらいの軽さである彼女。その手を振りほどく琴だつて少し力を入れればできたことである。

「皆怖がつてるよ」

そう言われて周りをゆっくりと見渡す。飛鳥の目つきが相当鋭くなっているのだろう。クラスの女子生徒たちは小さく悲鳴をあげたり、後ずさったり周りにいる生徒は涙も見せていた。

「あ……」

ゆっくりと込み上げていた怒りが醒めていくのが感じられた。それを感じ取ったのかどうかは知らないが、ゆっくりと飛鳥の体から自身の拘束を解く本音。どこから出したのか分からないが、用意周到にハンカチでその血で汚れたところを拭いてくれる。

「すみません……」

「ハア、全くお前もお前だが、織斑。お前もやりすぎだ」

「で、でも千冬姉……」

「織斑先生だ、馬鹿者」

ハンカチを貸してくれた本音に一言礼を言い、それで傷口を押さえつつ、周りの生徒に対して謝罪する。とはいえ、さすがに殴られたことと篠ノ之束に対する怒りというのは胸の中でくすぶっていた

4

相変わらず睨む目からは怒りの炎は小さく燃えており、その視線の先には一夏と箒の姿がある。

「せんせー。アーちゃんのことを保健室に連れて行っても良いですか？」

終わりが見えないこの状況で本音の声が教室に響く。一夏に殴られた後が紅く染め上がっており、腫れているのが遠目でも見えた。更に借りたハンカチも流れる鼻血で白から赤へと変わっていた。

「悪化するのは避けたいからな。いいだろう、布仏。お前が連れて

行け。他の生徒だと今は少し荷が重いだろうからな」

「はい」

千冬が生徒の様子を見て、明らかに飛鳥に対して怯えているのが見えた。確かに冷たそうな雰囲気を持っていたが、暴力に走るくらいに怒ることもあるというのがかなりショックの大きな出来事だったのだろうと思う。

更に、飛鳥だけではなく一夏の行動も原因であった。たった二人だけの男子生徒の喧嘩。ほとんど男子に対する免疫のない彼女たちからすれば、かなり恐怖の対象に映っただろう。もろにその拳が入ったのだから当然であろう。

胸倉を掴まれ、一夏に助けられていた筈ですら、そんな一夏の行動に驚きを隠せていなかったのだから。取りあえず千冬自身が止めにはいる前にそれ以上の殴り合いが起らなかっただけでもラッキーと思わなければいけないのだろうか。

とりあえず最初の原因を作ってしまった飛鳥をこの場から一旦離れた方がいいと思い、保健室へと連れて行くことを許可する。付添い人として、他の女子生徒であればおそらくともにこなせないと思います、至って普通に行っている本音が自身で立候補したので頼むことにした。

ふといい忘れていたことを思い出す。さすがに新しい学校生活が始まって2日目で暴力沙汰になるとはまさか想定しているはずもなかったのだ、今後のことも考えて罰を与えておかなければいけないと思った。

「それと、紅月。放課後に職員室に来い。さすがに今回の荒事は見

過ごせないからな」

「……、分かりました」

さすがにここは大人しく従ったほうがいいと、少々気に食わないが飛鳥は返事を返す。その時の表情は相変わらず不機嫌そうであり、その真っ赤な瞳は恨みの炎でいつも以上に真っ赤になっていた。飛鳥たちが教室から出て行くと、一気に緊張感が嘘のように消えていた。大きくため息をつく生徒、机に突っ伏してしまう生徒などが見受けられた。

「あと、織斑。お前も来るように」

「な、なんで!？」

「そうです。一夏は私のことを……」

「口答えは許さん。私が来るようにと言ったら来るんだ。分かったな？」

「はい……」

当然のように一夏にも来るように言う千冬。本人は分かっているようにだが、さすがにあそこで殴るのは軽はずみであり、やりすぎである。引き離すくらいであれば目をつぶるが、その殴る行為で更に相手を怒らせることを考えていなかった一夏もあの雰囲気を作り出した原因の一人でもあるのだ。

とはいえもともと原因の発端は箒の千冬がせっかく話を流そうとした行為を無碍にする発言だったのだが……。

とにかくにも、授業は再開された。

「いててて！」

「はい、男の子なんだから我慢して」

「くそ……、あいつ本気で殴りやがって」

保健室に來た飛鳥と本音。本音は治療される飛鳥の代わりに証明書に色々と書き込んでいる。養護教諭の女性も飛鳥を椅子に座らせ、真っ赤に晴れ上がった頬と、口の中の切れたところなどを診察し、手当てをしていた。

書き終えた本音は養護教諭から手渡された氷袋を持って飛鳥の後頭部に当てている。

「ひゃい！」

「あははは、おもしろい」

大きくできたたんこぶに本音が持っている氷袋を当ててる。もしかするとそのだばだばな制服は冷たさから直接手を守るためにあるのではないかとふと思ってしまった。

殴り飛ばされたときに吹き飛ばされ、机に思いっきりぶつけてしまったのだ。そのときにできたこぶであるが、相当強く打ち付けたのだろう。かなりの大きさであり。氷袋の変わりに本音がわざと遊ぶようになでりなでりとされて思わず痛みで小さく悲鳴をあげてしまう。

当然氷袋はかなり冷たく、思わず悲鳴をあげてしまうくらいにそれに滲みた。取りあえず冷やしておけばそれは大丈夫だとはちまきで無理やりに固定される。思わず何でと呟いてしまった。

殴られた衝撃で口の中を切ってしまったが、それはあまり深

くはなく、少しばかり塗り薬程度で数日もすれば治ると言われた。鼻血はすでに止血されているために大事には至っていない。

それと比べて思いっきり殴られた頬は反対と比べて酷いように晴れ上がっていた。殴ったときの力とともに、おそらく一夏の思いが込められているのだろう。守りたいという正義感、そして怒り。

「まったく新学期早々男の子はやってくれるわね」

「しょうがないだろ……。俺にだって色々あるんだよ」

「でも、まあいいわ。私も養護教諭だけどほとんど暇してるのよね」
「仕事しろよな」

あきれたように言ってくる養護教諭の女性。どうやらここを利用するのよほどのことがない限りはないらしい。そのために今もまたがらんとして静かな雰囲気漂っている。

元が女子高であるためか、かなり綺麗な空間である。とはいえ今も女子高であり、飛鳥と一夏は完全なイレギュラーなのであるが……。

清潔感溢れたこの空間。薬品のおいがわずかに香ってくる。

「はい、動かないで」

「いででで……」

「こら動くな。ちゃんと治療できないでしょ」

そんな空間にまた医者と患者の声が響く。はれた頬に塗り薬をつけ、処置を施している。わずかな刺激でもかなり刺す様な痛みが走るために、飛鳥は顔を顰める。

しかし、顔を背けることはできない。

「動いちゃ駄目だぞ」

「ぐぎぎぎ……、痛い痛い！」

後ろから本音が両手で頭を固定しているのだ。そのほっそりとした腕から考えられないような力で固定されているために、治療の痛みよりも頭を掴まれている痛みで悲鳴をあげている。

「はい、これでおしまい」

「おしまーい」

「お、終わった……」

ようやく治療が終わったが、どうしたわけか、治療しに來ただけでこんなに疲れるとは思わなかった。とにかく握られていた頭が変形したのではないかと不安で確かめる仕草をしている。

「頭のほうはこぶがひけばいいけど、今日はあまり激しい運動はしないほうがいいわね。誤ってぶつけたらとんでもないわ」

「まじかよ。代表決定戦の練習しなきゃいけないのに」

「体を大事にするのも大切よ？ 先生の言うことを聞きなさい」

「ええ……」

「返事は？」

「……、はい」

ぶつくさと文句を言う飛鳥であるが、さすがに健康など身体の状態を完全に把握するほど医学などに精通しているわけではないので、しぶしぶと従うしかなかった。

とりあえず一言礼を言って保健室を出て行った。暇なら話し相手

になって欲しいとも言われ、気が向いたらと返しておいた。

そんな治療を終えた二人は教室へと戻っていた。時間はそれほどたっていないが、完全に授業を一つ捨てることになる。他の人にノートを借りて移すしかないと思った。

「ところで……」

「なあゝに？」

隣とことごと歩く本音を横目に飛鳥は口を開く。

「何である時、俺を止めたんだよ」

あの時というのは飛鳥が一夏に殴り飛ばされ、お返しに殴ろうと立ち上がり、歩き出したときだった。それをとめたのが本音であったのだが彼女に聞いてみても。

「なんでだろうねえ？」

疑問系で返されてもこちらが困るのだがと呆れたような表情で彼女を見る。とはいえ、これ以上聞いてもおそらく彼女ののほほんとやり過ごされるだけだと思ったので止めておいた。

そして、廊下の角を曲がろうとしたところで何者かの気配を感じた。向こうに誰かがいる。いそうでいない気配。絶妙なところで自分のことを試しているのだろうか。

思わず嘗めるなと思ってしまった。そして、そこにいるだろう人物の名前をいう……。

「何してるんだよ、楯無」

「ピンポーン♪ さすがにこれくらいは読めるようになってるね、アックくん」

「馬鹿にするな、俺だってあの時のままじゃない……」

扇子を口元に当てながらにつこりと笑みを浮かべた女子生徒――
―I S 学園2年の更識楯無がそこにいた。

「ちょっと小耳に挟んだことがあったからね」

「なんだよ……、それ」

楯無の言葉に飛鳥は尋ね返す。するとその扇子の先を飛鳥のおでこにつきたてながら言う。

「アックくんが織斑一夏くんと喧嘩をしたっていう噂をね」
「っ！」

思わず目を見開いてしまう。あれは確かに激しい音を立ててしまった。だが、すぐに納得した。おそらくあの時見ていなかったが、他のクラスの生徒たちも思わず興味を持って見に来ていたのだろう。彼女の扇子がバツと開かれ口元を隠している。飛鳥が見ている部分には何故か青春の文字が書かれていた。

「いつの時代の物語だよ……」

「あら、殴りあうことでお互いを理解できるんじゃないの？」

「どこの不良の友情物語だよ……」

何故かいつの間にかそんな文字が書かれていることに関しては以前からのことなので一々つつこむことはしない。とはいえ彼女の言う言葉は古すぎる。

その話しは別として、今こうしてのらりくらりと校内を散策している彼女がどんな立場の人間かを考慮すれば簡単なことだった。

「それにしても一方的にやられたようね。軍人なのに」

「殴り返せばよかったか？ たぶん全治何ヶ月かになってたぞ」

からかうように言う楯無に対して、少々物騒な言葉で返す飛鳥。
冗談よと言って流すようにする。

「殴ったら殴ったでその後が怖かったかしら？」

「さあね。あの先生がそう見逃すとは思えないけどさ」

廊下の窓から顔を出して外を見る。晴れ渡った春の日差しが校庭に差し込んでいる。木々が緑色にきらめき、青空が広がり、装飾のようにして白い雲が流れている。

「ところで」

そう話を切り出す飛鳥。

「あんたはこんなところで油を売って何をしたいんだ？」

「もう、最近の子はすぐに答えを求める傾向にあるわね。もっとゆとりを持ったほうがいいわよ？」

「俺がそんな人間に見えるかよ？」

「うふふふ、そうね。でも、少しはゆとりも必要よ？ そんな四六時中復讐や力ばかり考えていても、疲れるだけよ？」

「そういうあんたも、四六時中狙われている立場だろ？」

そういうと確かにと気にしていない様子の笑みを浮かべる。絶対

強者の自信の現れであろうか。あのイギリス人の代表候補生とは全く違うオーラ。比べるのも失礼だろう。

「簡単に言えば、アツくんの怪我の程度を見に来たって言うのが妥当かな」

「別に……、何ともない」

ややどもる飛鳥。

「えー、だってさっき」

「い、言うなよ！」

「にゅっ!？」

ニコニコしながら何かを口にしようとした本音の口を慌てて手をかざしてふさぐ。いきなりだったのでさすがの本音もいつもは半目の瞳も全開まで見開かれていた。

「それだけ元気なら大丈夫なようね。心配のしすぎかしら？」

「これくらい別に」

目の前の彼女が小さい頃に良く怪我をしてしまい、泣いていた飛鳥を慰めてくれたときの優しい姉の姿に見えた。今はそんなに甘えられないし、そんな気もない。そういうと彼女は悲しそうな表情をかすかに漂わせるのだが。

「ならそろそろ教室に戻ったほうがいいわよ。授業こんな時期から遅れるわけにはいかないでしょ？」

「誰が引き止めてたと思ってんだよ」

「うふふふ、なら頑張ってね」

そう言って再び角を曲がっていく。急いで後を追うが、すでに楯無の姿はそこにはなかった。小さくため息をつく飛鳥。まだまだ彼女には遠く及ばない。そう思った。

『あのね、僕大きくなったらお姉ちゃんのこと守ってあげるんだから』

『そっか、ならアツくんには簡単には負けられないよ』

『絶対にすぐ追い越すんだから』

『楽しみにしてるね』

何で今頃こんな幼い頃の記憶が蘇ったのだろう。そう思ったその次の瞬間には頭から霧散していた――

7

それから一週間が経っていた。とうとう、クラス代表決定戦の日が来てしまったのだ。正直時間が経つのが早いと思う。

すでに一週間前に負った怪我などは感知していた。あの子の放課後千冬からの説教を受け、一夏との仲直りを果たした。とは言っても一応という形である。なぜなら飛鳥にとって箒は篠ノ之の姓を持っている。

彼女が篠ノ之東の居場所を特定することができる何かを持っているかもしれないので、無理やりにも聞きだすかもしれないと、一夏は警戒しているのだ。その手もあるが、はつきりいって別の意味で飛鳥は捕まる気はない。

一夏が箒との間でなにやらラッキースケベがあったらしいが、そんなことをして捕まりたいなどとは毛頭ない。とはいえ姉的存在で

ある楯無が連日布団に侵入して来ていたので、その度に驚かされる一週間であった。

箒の中ははっきり言ってあれっきり変わっていない。とはいっても話したこともないし、話すこともない。接触するたびに飛鳥は理不尽と言われるかもしれないが、彼女に対して怒りをぶつけてしまいそうなのだ。

篠ノ之束の居場所が分かればおそらくそのまま白騎士にもつながるだろう。その時は……、と思うと思わず握り拳に力が入る。そのために力を求めた。あの時人生に二度とないかもしれないくらい絶望を味わった。

周りを見れば皆笑顔で生活をしている。それは平和で幸せで素晴らしいことだ。だが、ふと飛鳥の体の中に今もその時をじっと待っている猛獣はそれを嫌っていた。もう一つの飛鳥とも言っているのだろうか……。

自分たちだけ平和に浸りやがって……と、飛鳥の心の奥底に押し込められている怒り、悲しみ、憤怒、激情、憎悪。さまざまな負のエネルギーであり、復讐のための支えでもある。それが今にも彼女たちをかみ殺さんとして身構えることもある。どうして自分だけ……、などと被害者のような思考に陥ることもある。

「いよいよって感じだな」

ISスーツに着替えて、アリーナの控え室にいる一夏がそう言う。ふとその声が聞こえたために飛鳥は思考の海から現実へと帰還する。隣にいる一夏が何故か一緒にいる箒に対して言う。

「でもなんだ……？」

「ど、どうした？ 一夏」

一夏の言葉を聞いて箒はやや戸惑いを隠せない様子で聞き返す。一体何があったのだろうかと思う。ふとここ一週間の一夏の動向を思い出してみる。放課後になるといつもすぐに彼女——隣にいる箒に鞆とともに引きずられて教室から姿を消していた。

ちらちらとその動きを見ていた楯無曰く、箒が部員としている剣道部の道場を使つての訓練らしい。とはいえこの一週間、飛鳥が訓練場を借りて、他の目を気にせず訓練していたが彼らの姿を見たのは一度もない。

「俺なんにもISについて教えてもらってないんだが……」

「……」

「なあ、箒。俺この一週間、剣道しかやってないんだけど……。それは間違いないよな？」

「あ、ああ……」

一夏が責めるまでは行かずとも、ジト目で箒を見ながらそう言っている。箒も視線を泳がせながらごまかそうとしているが、はっきり言ってバレバレである。挙動不審がそう伝えている。

——て言うか、こいつ……。

飛鳥は目を細め、やや睨むようにして二人を見ている。二人が今日までやってきたのは今日のクラス代表決定戦のためであった。しかし、種目は剣道ではなくISによる戦闘。

一夏は全くISを動かすための基礎知識も学ばず、尼知さえ、一

度もISを起動させることなく、はっきり言ってぶっつけ本番の形で試合に望むことになっていた。

飛鳥からすれば一夏は子の戦いに対して嘗めてかかっていると思わざるを得ない。話を聞いているとどうやらもともと一夏は箒の実家である篠ノ之道場の門下生であつたらしい。

入門当初は彼のほうが弱かったがもともとその才能があつたのかどうか、彼女よりも強くなつて言つたらしい。しかし、中学に上がるころにあの飛鳥にとっては強欲な悪魔のようにしか見えない篠ノ之束がISを開発し、あまつさえあの事件を。

その後ISの性能の高さを世界に見せ付け、それが世界を震撼させた。ISが各国に渡されたはいいが、当の本人は姿を消してトンずらしてしまった。ISが彼女にしか作り出せないといわれる以上彼女の居場所を特定できるものは確保、監視下に置かれなければならない。

そんな理由で彼らはその頃に別れてしまつたらしく、箒が転校せざるを得なかったのだ。その後一夏はというと、中学では三年間皆勤賞の、帰宅部だったなどとそこは胸を張つて言うところじゃないだろうと、飛鳥は内心思った。

彼がそんな生活をしていたのは、職業不詳の姉である千冬に少しでも楽をしてもらいたいためであつたらしい。そのために剣道から手を引き、バイトに明け暮れていたらしい。

両親の話がないということから何かあつたのだろうか、ふと思つてしまった。とはいえ今はクラス代表決定戦において、かつことを考えなければいけない。ゆっくりと深呼吸をして、体に走る緊張

感をほぐしている。

「あっいました！」

すると向こうから声がしたと思ったら、真耶を先頭に千冬と二人でやってきたのだ。

「どうしたんですか？ そんなに慌てて」

相当息を弾ませている真耶。逆に普段どおりに歩いてきた千冬。二人が三人の前に立つと、真耶が口を開く。

「すいません、織斑くんのISが到着するのがもう少しかかるそうなので……」

「ええ！？」

真耶の言葉に一夏は思わず声を張り上げてしまう。目の前でそうであったので、思わず真耶は身をびくつと震わせていた。

「馬鹿者、こんな至近距離で騒ぐ馬鹿がいるか」

「い、痛。だ、だって千冬姉……」

「織斑先生だ。なんと言ったら理解するのだ。それができなければ人間をやめるか、死ね」

「ひ、酷い……」

さすがに彼女が言えば上段に聞こえないのは、彼女のその雰囲気があるからであろうか。どう見ても姉弟の会話ではないのは確かである。彼女にも色々と思うところがあり、こう対応するしかないのであろうが、いつも回りにいる幼馴染の姉妹を見ていると、その仲が非常に疑いたくなるのだった。

「織斑のISが来ていない以上、予定していた最初の試合、織斑対オルコットの試合を変更して紅月対オルコットにする。紅月、IS……、じゃないな、例のものは準備できているのか？」

「ええ、まあ一応は」

「なら早く行け。オルコットが待ちくたびれているだろうな。それにアリーナの使用時間は限られているのだから」

腕を組んでそう言う千冬。飛鳥はというと、誰のせいでこんなに遅くなったんだよと、内心毒づいていた。口にすればどうせ理不尽な攻撃が来るのでやめておいた。

飛鳥のMS用の防護スーツは赤であった。胸部から肩部の辺りが白となっている防護スーツを着て、その手首には当然のように待機状態のブレスレットのMSであるそれが嵌められていた。

とうとう来てしまったのだ。望まぬ……否、まさに心待ちにしていたのかもしれないこの瞬間。この時以前にも何度かISとの戦闘を繰り返している。それが知られているか知られていないかだけである。

飛鳥は身も心もボロボロである。それは6年前のあの白騎士事件……公にはされていないが、篠ノ之束によるテロ事件。それによって家族を失い、自らの無力さを白騎士から突きつけられた。

だが、それももう終わり。もう自分はあるときのような無力な存在ではないから。そう思いながらゆつくりとピットのほうへ歩を進めていく。ゆつくりと、そして確実にその床の感触を確かめるように。

そしてカタパルトデッキへと到着する。

「システム、起動」

『General
Unilateral
Neuro-Link
Dispersive
Autonomic
Maneuver——Synthesis System』

そのシステムの文字の羅列が目の前に現れるモニターに映し出される。頭文字を取って『GUNDAM』。ただ一振りの飛鳥に残された剣であった。守るために、過去とのけじめをつけるために。ただそのためににその剣を振るう。

その姿は到来のISとは違い、全身装甲であり、肌の露出はない。

その機体の色は胸部が赤である以外はすべてがダークグレー。顔を覆っている4本のV字型アンテナは白と金色、更に睨みつけるような双眼は緑色であった。まさに飛鳥自身……赤き怒りの炎とどす黒い恨みの黒が反映されていた。

「こ、これが……」

「MS……」

目の前に現れたISと似ているが、そこから感じられる威圧感というのは違っていた。教師二人は入学試験において、すでに目にしているためにそれほど大きく驚いた様子ではないが、始めてみる一夏と箒は驚きに目を見開いていた。

「これがISと同じ、宇宙進出を基に作られたマルチスーツ」
「ISとあまり変わりはないさそうだが」

見た目的にはマルチスーツということなので、行き着く先は似たようなものだったらしい。だが、肝心の中身は全く違う。動力も違う。

飛鳥は全長3メートルほどのMSを纏い、ゆつくりとカタパルトデッキに足を固定させる。あの日から6年がたっていた。あの時絶望の淵にいた、怒りの炎を宿した瞳に映ったのは無数のミサイルの弾頭とそれを破壊していく白騎士。

無力だった自分は何もできずに無様にそこに座り込むしかできなかった。あのミサイルを破壊することも、篠ノ之東を殺すことも、白騎士を殺すこともできず。ただ小さく無力な虫のようにその場に這い蹲るしかできなかった。

長い時間を幼馴染の彼女たちに心配をかけ、ずっと守られるように過ごしていた。そればかりも嫌だということで自らを鍛え、あまつさえ軍事学校にまで通ったりもした。

ただもう二度と手が届くところにいる大切な人を失いたくない。それを目の前で失った飛鳥だからこそ・・・、失ったものだからこそ分かる痛みであった。きっとハイパーセンサーから見える全方位の様子をモニターで確認する。そして前方の信号が赤から青へと変わった。

飛鳥の双眼に移るのはまるで彼を待っているかのように広がるアリーナと空から降りそそぐ太陽の日差しとそれを包み込む大空。ぐ

っと軽く膝を曲げ、その右手にビームライフル、左腕にはアンカー付き巨大シールドを構え発進を待つ。

「紅月飛鳥、“ヴェステイージ”。行きます!!」

PHASE 04 Vestige 傷跡 (後書き)

ED ↓ 遠雷 遠くにある明かり < HIGH and MIG
HTY COLOR >

加筆修正完了 12月1日

PHASE 05 青き涙／ブルーティアーズ（前書き）

OP1↓ignited<T・M・Revolution>

いよいよクラス代表決定戦が始まりました。前後に分けて投稿したいと思います。最初はセシリアとブルーティアーズとの試合です。

セシリアとのフラグは・・・立ちません。

PHASE 05 青き涙／ブルーティアーズ

飛鳥が上空に飛び上がる。そこにはすでにアリーナにいたセシリアがそこに待っていた飛鳥が現れたことに気づいて声をかけてくる。

「あら、最初は織斑さんだと聞いておりましたけど??」

「アイツのISがまだ届いていないんだ。だから急遽俺に変わったんだよ」

彼女の様子からして相当待たされていたようだ。いらいらした様子が見て取れた。

「全くレディーを待たせるとは、男性として恥ずかしくありませんの??」

「悪いけど、そう言う経験は生憎ないんでね」

お互いに軽口を交わす。すでに試合は開始されている。

「まあ、いいですわ。それにしても、よく逃げずに来ましたのね?? わざわざ負けて惨めな姿を晒すためにご苦労なことですよ」

相変わらず見下すような口調で飛鳥に言ってくる。その手に握られているレーザーライフルの銃口はしっかりと飛鳥に向けられている。

「今ここで謝るというなら許してあげないこともなくてよ」

そう言うセシリアであるが飛鳥はそれを鼻で笑って拒否する。

「あらあら残念ですわね。なら、お別れですわね!!」

そういうや否や、突然セシリアは握っていたレーザーライフルを飛鳥に向かって放つ。銃口から狙いを見定めた飛鳥はとっさの回避行動にてその攻撃を川した。

「かわした！？少しはできるようですわね」

不敵な笑みは相変わらずのセシリアはライフルを再び構える。飛鳥も負けじとビームライフルを構える。

お互いがライフルを構え、アリーナの上空を所狭しと飛び回る。第三世代であるセシリアのブルーティアーズのスピードについていく。MSを知らないものたちからすれば、ありえない光景であった。

セシリアの表情からすっかり余裕というにも字は消え去っていた。縦横無尽に動き回る目の前にいる飛鳥に対して全くレーザーが当たらないのだ。

「く、ちょこまかと・・・」

歯噛みしながらも狙いをつけてレーザーを放つがまるで先を読まれているかのように、トリガーを引いた瞬間にはそこに飛鳥の・・・ヴェステイージの姿はなかった。

「く、どこに・・・！！」

数メートル横に移動していた飛鳥はすぐさまライフルを放ち、ブルーティアーズの方を貫く。ビームの熱で溶かされた青い装甲がえぐられたような後がセシリアの目に入り、それがプライドを傷つけられたように見えた。

「よくもこのわたくしに傷を!!!」

傷一つ着けられまいと思っていたセシリアであるが、予想以上にMSと何より飛鳥の操縦がよかったためにダメージを確実に受けていた。対する飛鳥はというと巧みな操縦でセシリアの射撃武器であるスターライトMK?のレーザーを回避したり、対ビームコーティングの巨大シールドにて防ぐためにダメージは0に等しかった。

「このままでは恥さらしですわ……。行きなさい、ブルーティーズ!!!」

セシリアが歯噛みしながらもそう宣言すると、背中 of 翼と思われる部分から四基のアンロックユニットであるビットが飛び出した。それがセシリアを囲むようにして浮いている。

「あれが……。第三世代の特徴であるイメージ・インターフェースを用いた武器か」

その四基のビットがまるでそれだけに意志があるかのように自在に動き出し、飛鳥の周りを飛行する。いくらハイパーカメラがあるといっても、見えるだけで反射するのはその操縦者本人の反射神経にかかってくる。

「わたくしとブルーティーズの奏でるワルツで踊りなさい!!」
「へ、ワルツか阿波踊りか知らないが、そんなのに付き合ってもらるか!!!」

青き涙を形容するように、四基のビットが次々と確実に飛鳥の死角に回り込み、豪雨のようなレーザーを放ってくる。それを微妙な

操縦裁きでかわしていく。だが、そのビットに襲われている飛鳥は防戦一方である。まさにワルツを踊らされているというものだった。

「何ですのその無様な踊りわ。少しは嗜みもお勉強なさったほうがいいですよ」

「く・・・、面倒な武器だ」

右に左に、更には上にしたにと機体をスラスタの強弱によって操作し、火弾を免れている。だからといってこのまま逃げ回っていても勝負にはならない。とはいえビットも一撃離脱とそのまま滞空しているなどというおろかなことはしていない。

「こんのお!!」

「!!きゃ!!」

飛鳥は再び降りかかるレーザーを回避していくところ、体勢を崩す、何とか正面から放たれたレーザーを構えたシールドで受け止めたが、ぐらりと斜めになった体勢のまま攻撃を掻い潜り、強引な体勢のままでライフルを放つ。

そのビームが狙ったわけではないが、真っ直ぐと飛んで行き、セシリアの、ブルーティアーズの足を貫き、爆発する。腕部や、脚部は人間のそれよりも延長されているために、一応大丈夫であるが、バランスを取るという意味では、難しくなる。滞空していたセシリアも失った右側にぐらりと傾き、すぐさま体勢を立て直す。

「く、これくらいなんともありませんわ!!」

強がるセシリアとは反対に、飛鳥は疑問を持つような表情でその場から離脱していた。いつの間にかビットは再びセシリアの回りに

戻っていた。何故あの時避けられるビームを回避せずに受けたのだろうか。

まさか来るとは思わなかったときを抜いていたとも考えられる。だが、反応はしたものの、全く体が動いていなかった。そう疑問を感じつつ、移動しながら肩越しに装備しているファイヤビー誘導ミサイルを計16発セシリアに向かって放つ。

「そんな攻撃!!」

四散したブルーティアーズがそこから次々とレーザーを放ち、まるでレーザーのカーテンを引くようにミサイルの着弾を防ぎ、撃墜していく。しかし、全てを打ち落とすことはできず、数発が動かないセシリア本人に着弾する。

「きゃあああ!!」

「また・・・」

爆発に巻き込まれ、女性特有の悲鳴が上がる。そんなことは飛鳥の耳には入ってこず、むしろ更に彼女のミサイル着弾が疑問を広げる結果となっていた。何故かわさなかったのか、全て落としきる自信があったのかどうかは同として、最悪を常に想定して動いておかなければいけないというのというのが飛鳥の見解である。

「まさか・・・」

「く、嘗めないでほしいですわね。これくらい、どうってことありませんわ」

そう叫び、セシリアがスターライトMK3を構える。それに対してビームライフルですばやくそれを打ち抜く。破壊されたスターラ

イトが爆発し、余波で右手も破壊される。

苦悶の表情を見せながらもセシリアは再び四基のブルーティアーズを飛鳥に向かわせる。まるで蜘蛛の巣を張り巡らすかのようにして、先ほどよりも激しいレーザーの嵐が降りそそぐ。

それを回避していくが、シールドで受け止めたときに逆方向から放たれたレーザーがライフルを貫いた。慌てて手を話したために余波を受けることはなかったが、射撃武器を失った。後退した近くにビットが一機あるのが後方も映るハイパーカメラにて視認する。セシリアが指示するのよりも先にすばやく右腰にある柄を掴みそこからビーム刃を展開、逆手にとってそのビットを切り裂いて、破壊した。

「そこですわ!!」

「甘いんだよ!!」

すばやく順手に持ち替えた飛鳥はすぐにスラスタを全開にして、高機動を生かして、次々とレーザーを掻い潜り一基、また一基とビットを破壊していく。背中越しに現れたそれに対して、頭部に装備されているCIWSを連射し、破壊する。

「そ、そんな・・・」

セシリアは自らの機体であるブルーティアーズの特徴であるビットを全て叩き落されるのを見て、啞然とした表情で目前に浮いている飛鳥を見ている。

セシリア自身、自らの機体であるためにその性能も、そして自らの弱点も知っている。だが、それがこの試合の中で看破されるとは

思わなかったので動揺が隠せないでいる。

すでに主戦の射撃武器を失った今、彼女に残されているのは隠し武器と今残った左手に出現させた近接用の武器だけである。

スラスターを再び全開にしてつつこんでくる飛鳥。目前に迫るセシリアであったが、その瞬間セシリアの表情は先ほどまでの啞然としたようなものではなく、勝ちを確信したような笑みであった。そしてその瞬間に腰辺りからビットのようなクリスタルの先端を持つミサイルがこちらに向かって真っ直ぐ飛んできたのだ。

目前に迫る前に突然出現した熱反応。まさかと思っていたが突然放たれたミサイルに対してバレルロールを描くようにして動き、ミサイルをかわす。振り下ろしたビームサーベルをとっさに差し出した近接用のインターセプトとぶつかり合い、火花が散る。

しかし、もともと射撃が専門であるセシリアにとってインターセプトは万が一のときの武器であり、それほど接近戦に特化しているわけではない。そのために鏖迫り合いになったところで一気に押し込められている。

「このまま一気に!!」

「甘いですわ!!」

「なに???. . . が!??」

突然の衝撃がスラスターのある背中に入った。それとともにモニターに映し出されるのはこう機動性を高めるためのバックパックが壊れたということだった。これではつきり言って機動性を失ったヴェステイージュはビーム兵装を使える第一世代と変わらない機体になる。

はつきり言ってまずい状態である。先ほどバレルロールで置いてきたと思ったミサイルは誘導つきだったらしく、そのまま向きを変えて再び飛鳥へと戻ってきていたのだ。それが運悪くスラスターク突きのバックパックに命中し、大幅にダメージを追っていた。衝撃自体はVPS装甲によって装甲のほうに大したダメージはないが、明らかに性能ダウンは否めなかった。

「こ、これで権勢逆転ですわね!!」
「ちー!!」

セシリアが満面の笑みで言うてくる。思わず歯噛みせざるを得ない。自身に残っているエネルギーは半分ほど。実際の着弾は先ほどの一度だけ、後は飛行しているのでエネルギー消費でそこまで減っていたのである。

セシリアのインターセプトでの戦闘でこちらが負ける割合は少ない。だが、彼女にはまだミサイル兵装が残っており、その着弾数やこれからのエネルギー消費によっては危険であった。

「一気に終曲ですわ!!」

そう言うのと更に数発のミサイルが飛び出してきた。脚部に装備されている穂場リングすらスターも使用して地面をすべるように高速移動する。向かってくるミサイルに対して、頭部のCIWSを打ち込んで次々と撃墜する。

次々とミサイルが打ち落とされ、煙が舞い上がる。その中から打ち落とされなかったミサイルが飛鳥に向かってくる。小さくした内をしてそれを回避していく。地面に着弾したミサイルが爆発を起

こし、更に視界が悪くなる。

一気に上空に飛び上がる、その煙から飛び出した瞬間にアラート音になる。おそらくセシリアが接近しているのだろう。案の定煙を抜けると向こうも察知していたのかインターセプトを構えて接近戦に向かってきた。おそらくミサイルの数も残り少ないのだろう。

展開したビームサーベルで受け止め鏖迫り合いになる。激しい閃光が二人の間で駆け巡り、力を込め、後退する。残っていたミサイルを次々とは成ってくるセシリア。それを残り段数の少ないCIWSで撃墜する。

「く!!」

「くそ!!」

お互いに遠距離での実弾兵器が尽きたようだ。お互いに牽制しあうようにして空中を一定の距離を保ちながら牽制しあっている。だが、このままの状態を続けていても、最初にエネルギーが切れるのは飛鳥・・・ヴェステイージであるのは見て取れた。残り半分のエネルギー。無効のセシリアの表情もかなり厳しさを物語っている。すっかりと笑みが消え、残りの慣れない近接先頭でどう戦うか、ぎりぎりの思考をしているのだろう。

「一気にカタをつける!!」

左腕に装備されたシールドを首に巻きつけるように体を捻ると、大型のシールドに付属されていたアンカーをセシリアに向かって射出する。セシリアは突然の警戒音に驚いた表情で猛スピードで迫り来るアンカーに反応しきれずに左腕をそのクロウが絡みとる。

「きゃあ!!」

「終わりだ!!」

そのクローのワイヤーを思いっきり引っ張る。急に引っ張られたセシリアは驚きの悲鳴をあげる。飛鳥の右手にはすでにビームサーベルが握られている。

「これで!!」

「まだですわ!!」

「なあ!？」

ワイヤーアンカーによって思いっきり引っ張られたセシリアであるが、まだあきらめないという、今までの彼女の口からは到底考えられない言葉が飛び出してきた。

引き寄せられる力を利用し、思いっきり体当たりを繰り返してきたのだ。まさかそんな攻撃を彼女がするとは思っていなかったと、自分の浅はかさを怨んだ飛鳥。VPS装甲によって傷はないが衝撃を耐えるということでエネルギーを消費した。セシリアがシールドを耐えるという事で、そのカタの装甲が完全に壊れた。

「つうう・・・、なんて硬い装甲なのですよ!!」

砕けた肩の装甲を見て驚愕のあまりに叫んでいるセシリア。おかげで彼女の左肩の肌が見えている。おそらくそこを狙えば強制的に絶対防御が発動するだろう。

飛鳥にとってはセシリアの行動そのものが信じられなかった。彼女のプライドの高さからして、こんな泥臭い行動などするとは思えなかったからだ。腕を掴んでいたワイヤーアンカーのワイヤーをす

でインターセプトで切っている。

逆転に次ぐ逆転。観客の生徒たちはいつの間にかアリーナ全席に埋まるくらいになっていた。エネルギーが残る半分を切った飛鳥とヴェステイージ。もはや虫の息であるセシリアとブルーティアーズ。

「これが最後の攻撃ですわね……。あなたのそれを見ると、どうやら動いたびにエネルギーが減るようですわ」

「それがなんだって言うんだよ」

「いいえ、良くそのようなものでISに対抗しようと思いますわね」
「お前にとっては玩具じゃなかったのかよ」

「それは撤回しますわ。まさか、わたくしセシリア・オルコットとブルーティアーズに対してここまでやれるとは思っても見ませんでしたの。誇ってもよろしいことよ」

「そうかよ!!」

再びスラスターを吹かせ、接近する。お互いにすでに接近戦用の武器しかない。更に接近戦では何枚も飛鳥のほう为上である。そのためにセシリアは一方的に防戦である。

だが、一向に下がろうとせずに、徹底的に粘ってくる。確かに下手に特攻をかけてカウンターを受けるよりだったら、攻撃している間にもエネルギーを消費していくMSを相手にしている今、その作戦が一番かもしれない。

「こんのおおおお!!」

「くう!!」

振り下ろされる渾身の攻撃で弾き飛ばされたセシリア。その衝撃でインターセプトが破壊される。無防備な状態で滞空している彼女

に対して、ビームサーベルの切っ先を向ける。

まさか目の前の男・・・紅月飛鳥がここまでできるとは思わなかったセシリア。MSなどと知らない兵器をここIS学園に持ち込むなどと、なんて恥知らずだろうと思った。だが、こうして今時分はその自らが玩具だと見下したMSに破れようとしている。

更に、その操縦者が彼女が嫌っている男が操縦しているにもかかわらずである。はつきり言って試合中圧倒されている自分が歯がゆかった。何度危険な状況になったか。それでも逆転の状況を作り出したものの、こうして今時分はやられようとしている。

しかし、不思議と男に負けるというような惨めな気持ちはなかった。むしろこのように自分に対して負けじと向かってくる男は初めて見るというような新鮮な気持ちを感じていた。

ヴェステイージのスラスターが再び全開に噴く。機動性は落ちていくといっても全力であった。そして、その瞬間に一瞬でセシリアの前にヴェステイージの姿が現れる。

“ 瞬時加速 ”

爆発的な加速を一瞬で起こし、接近する技術である。鋭いビームサーベルによる突きがセシリア・・・ブルーティアーズに突き刺さる。装甲を突き破り操縦者に直接触れようとしたその瞬間、絶対防御が発動し、ブルーティアーズのシールドエネルギーは完全の0となった。

大きく息をはく飛鳥。モニターに映し出されているエネルギーの残り残量は0に等しかった。それでも自身の突き出した刀身は確か

に彼女に届いたのだ。イギリスの代表候補生という、はつきり言うて一般人の飛鳥にとっては立場が違うものに対して……。

そして、6年前に亡くなった父が残していったたった一振りの剣となるもの。尖れていない、ただの鉄の棒であったそれが、何度も打ち直されることでこうして一振りの剣と成ってここにいた。

『勝者……紅月飛鳥!!』

確かに傷だらけの戦士（飛鳥とヴェステイージ）が一振りの剣としてそこにあった……。

PHASE 05 青き涙／ブルーティアーズ（後書き）

ED1↓遠雷　く遠くにある明かりく＜HIGH and MING
HTY COLOR＞

原作どおりであればここで恋愛フラグというものが立つのでしょうが、私の考えからすれば安価すぎると思われるので立っても友情フラグです。

。 次回はいいよオリ主にとっては悪夢に近い存在との戦いです・・・

PHASE 06 悪夢再び（前書き）

OP1↓ignited<T・M・Revolution>

たくさんのご感想、お気に入り登録ありがとうございます。

いよいよ原作主人公とのクラス代表をかけての戦いになります。飛鳥にとってはトラウマ的なフォルムをした一夏の専用機・・・白式。

これは運命の悪戯なのか・・・。

傷ついた戦士の瞳に映るのは一体・・・。

PHASE 06 悪夢再び

一夏と箒は揃って管制室にて監督としていた千冬と真耶とともにモニターに映る試合を見ていた。

そこに映っている赤とダークグレーの機体は自分たちが使うようなISとは違う、まさに人型に近く、かなり露出の少ない全身装甲。

確かにそれだけ見れば、十分驚かされるし、ISとの戦闘も十分すぎるくらいである。

だが、二人にとってそれ以上に、飛鳥が代表候補生であるセシリアを破ったことに驚きを隠せなかった。いくら最初はセシリアが気を抜いていたとはいえ、途中からはしっかりと代表候補生としての力を発揮していたと思う。はつきり言って自分たちでは勝てないだろう。

しかし、流れは確実に飛鳥に会った。途中傾きかけていた流れもすぐに戻し、心象ではあったが、あの代表候補生を破ったことは賞賛に値するものであった。次はいよいよ一夏の試合であった。

「これは・・・」

「ハア、やりすぎだな」

真耶と千冬がそろって小さなため息を吐いていた。一体どうしたのだろうかと耳をそばだてていると、どうやらセシリアの専用機であるブルーティアーズが先ほどの戦闘で大きく破損してしまい、補給だけでは到底試合にならないという状態だという。

確かに一夏たちの目から見ても、あれはISの初心者の戦いではなくまさしく真剣勝負であった。そこまでやるかと思うところもあるが、見ていたときにぶつかり合う二人にはとてもそうは言えなかった。

「それにオルコットさんも気を失ってしまっていますからね」

「そっとしておいてやれ。無理をさせて、機体と操縦者を壊したとなったらイギリス本国から何を言われるかわからないからな」

「そ、そうですね。なら、また大幅に変更ですかね」

「そうなるだろうなと・・・ようやく来たのか」

「あ、そうですね。ようやく来ました！！織斑君の専用IS」

「へ？？」

「ピットに搬入してあります。時間ありません！！急いで」

「取りあえず織斑は事がだからぶっつけ本番で物にしなければならん」

そう言いながら歩く千冬。そしてピットを開けた一夏の前に現れたのは真っ白なISだった。

「はい！！これが織斑君の専用IS『白式』です」

それを見た瞬間一夏は思わず目を奪われてしまった。それはまさらかな白であった。何者をも浄化する白。そして、一夏は、直ぐに”白式”を起動し纏った。

「背中を預けるようにしろ・・・」

意地を出す千冬の言葉を聞きながら一夏は白式に自身の身を預ける。

「あとはシステムが最適化してくれる」

そして千冬が最適化前の白式を纏った姿を眺めて確かめるように見ている。

「ハイパーセンサーは問題なく動いているな・・・一夏、気分は悪くないか??」

「大丈夫、千冬姉いける」

やはり姉なのだ。弟に何かがあつては困る。だからこそ、自分ができる最低限のことはしておこうと思つての行動なのだろう。一夏も千冬の言葉に答え、そしてピッドのカタパルトに乗る。そして一度箒のほうを見る。

「それじゃあ、箒、行ってくる」

「・・・ああ、勝ってこい」

そう言つて一夏はピットから飛び上がり、アリーナで待つていたセシリアの元まで飛んでいく。見ているしかできない千冬たちは、管制室のモニターからその戦いを観戦するのであった。

飛鳥は現在破損した部分と失った武装の補充をしていた。それほど大きな破損部分はなく、予備のライフルはあったので後は必要なエネルギーを補充するくらいであった。

手を見れば震えている。それは勝利の歓喜であつた。初めてISに買ったときのことをもい下。あの時は本当に無我夢中であつたためにほとんど覚えていないが、今だから分かる。これはようやく自分が一步前に進めた証なのだ・・・。

「次はアイツか・・・」

織斑一夏。女性にしか扱えないはずのISを男で始めて起動させてしまったという謎の人物。姉の織斑千冬は第一回モンド・グロツソ大会で優勝。公式戦では無敗の最強を誇る。そんな彼女を姉にも疲れがどこまでISを知っていたかというところの入学してからの授業の理解度を見てかなり低いと見ていいだろう。

とはいえ彼はどうかやら篠ノ之箒と剣道をしていることと、幼馴染の力を借りて知った経歴からして剣道を習い、それなりの実力はあったらしい。過去形なのは彼の中学での動向を知れば一目瞭然であった。

この一週間何をしていたかという剣道だけというようにISについては全く訓練している様子はなかった。馬鹿にしているつもりはないのだろう。別段向こうの責任であるために気にする気もない。ただ、倒すだけ。そう、それだけだった。

気を抜いてしまったらセシリのように足元をすくわれる。もともと飛鳥には気を抜くなどということは微塵もない。いつだって飛鳥は地面にはいつくばってでも上を目指してきたのだから、それ以外の歩み方を知らない。

「システム、起動」

『General Unilateral Neuro-Link
Dispersive Autonomic Maneuver
——Synthesis System』

一瞬の光に包まれ、再び完全に修復されたヴェステイージを纏っ

た飛鳥がそこにいた。右手にライフル、左腕に巨大シールドを装備し、カタパルトデッキに足を固定する。

今日二度目の発進。きつと真剣な表情を射出口に向ける。信号が赤から青へと変わる。発進可能な合図だ。

「紅月飛鳥、ヴェステイージ。行きます！！」

誰に対して言うわけでもなく、飛鳥は飛び出していく。そして、向こうのピットから飛び出してきたのは白だった。白、白、白……。白い翼の形をしたスラスター、白い四肢、その姿はまるで騎士。そして、その操縦をしている人物は織斑一夏……。

『これより、紅月飛鳥対織斑一夏の試合を始める』

アナウンスで試合開始が伝えられる。飛鳥はただ呆然と目を見開いた状態で目の前の一夏を見ている。一夏はおそらく予め武器を確認しておいたのだろう。すでにその手には刀剣が握られており、こちらに向かって飛び出してきた。

「うおおおおお！！」

上段から切り下ろすようにして振り下ろされる刀剣。それをはつと気づいて横にからだをずらしてかわす。一夏はいきなりのトップスピードを扱いきれなかったのか、かわされて前につんのめる。

「おわつととと！！」

それを管制室で見ていた筈ははらと見ている。自分が鍛えなおすといっているながら一緒にいられることがあまりにもうれしいこ

とと、あまりにも一夏が弱くなっていたために剣道だけに構っていたので、一夏のISの操縦が未熟なのは否めない。その原因が自分にもあるので、申し訳なさでいっばいだった。

「な、なんだか織斑くんの操縦、見ていてハラハラしますね」

「一週間何をしていたのか・・・とは言わずともわかるがな」

あえて離れたところにいる筈に聞こえるように行っているのかは分からないが、それを聞いてシュンとなってしまう筈。ただここにいる自分にはただ一夏が勝つことを祈るしかできないのだ。

一夏に対して無思考のまま飛鳥はライフルからビームを放ち、白式の肩の装甲を打ち抜く。爆発し、肩の装甲が半分吹き飛ぶ。

「く、シールドエネルギーが」

一撃でかなりもって行かれた白式のシールドエネルギー。ライフルによる射撃だけではなく、肩の装甲を打ち抜いたときに起きた爆発による余波が体を襲ったためであった。

再び正面に構える刀剣。ゆっくりと対面する飛鳥は刀剣を構える一夏をただにらみつけている。初めは呆然としてしまった。なぜならいきなり飛び抱いてきて、自分の目の前に現れたのがあの時飛鳥の家族と幸せを奪って行ったISに似ていたからだ。

そうしてしばらく呆然としてしまったが、はっと現実思考を戻し、冷静に落ち着いたその瞬間に沸いてきたのはその冷静さをはるかに上回るようなただ怒りであった。何故こんなところにいるのかと、何故こんなところにそれがあるのかと。

飛鳥は次々とライフルを打ち込んでいく。一夏も回避しようとして白式の機体を動かしていくが、全く回避できずに次々と装甲を抉り取られていく。次々とモニターに映し出されるエネルギーの残量を見て一夏は焦りの色が色濃く見えてくる。だが、その瞳の中の負けないという炎は更に激しく燃える。

飛鳥は一夏が突っ込んできて横一線に振りぬいてきた刀剣を大型のシールドで受け止め、ライフルの銃口で殴る。がんというものすごい衝撃が一夏の頭部を襲う。一瞬視界が真っ白になった。しかし、観客の悲鳴を聞いて、はっと意識を取り戻した一夏は、自らが地面に向かって落下していることを知り、慌てて体勢を立て直し、何歩かつんのめったが無事に着地を終える。

「一夏!!」

「きゃあ!!」

「む!!」

飛鳥が一夏の側頭部をライフルで渾身の力で殴り飛ばしたのを見て思わず身を乗り出してしまふ。普通ならば頭が吹き飛んでもおかしくない力であったために、思わず真耶は手で顔を覆ってしまった。さすがの千冬もそれを見て立ち上がらざるを得なかった。

「つう・・・、まさかライフルを鈍器に使ってくるだなんて・・・」

一夏はまさかのライフルの用途に戸惑いながらも殴られた側頭部を撫でる。まだずきずきと傷むが、そこまでというわけではないので、再び刀剣を構えて上空へと飛ぶ。

再び飛鳥は上空へと上ってくる一夏に対して打ち込んでいく。何とか回避したいという必死さは伝わってくるが、まったく交わすこ

とができず、よくてかする程度、次々と白い騎士の装甲がぼろぼろになっていく。

一夏も負けじと刀剣を振るう。しかし、シールドにふさがれ、何閃もの剣閃はまったく飛鳥に、ヴェステイージに傷をつけられない。次々と打ち込まれるライフルを何とか刀剣で弾こうとするも、衝撃で後方に飛ばされる。

その後方に飛んだ一夏に対してすばやくシールドに付属しているワイヤーアンカーを射出し一夏の右腕を絡め取る。しまったというように一夏はそのつかまれた腕を見るが、力を抜いてしまったその瞬間に、飛鳥はそれを見逃さず、スラスターを全開に、ハンマー投げの要領でアリーナに張られているシールドに向かって一夏を投げ飛ばす。

「があああ!!」

鋼鉄と同等であろうシールドに叩く付けられた一夏はいくらIS装甲だからといって衝撃はすさまじいものだろう。背中から叩きつけられ、強制的にはいから酸素を吐き出させられる。

「千冬さん!! あれはやりすぎだ。今すぐやめさせるべきです」

箒が飛鳥の一夏に対する攻撃を見て叫ぶ。ぼろぼろになっていく弟の一夏を見て千冬だって教師という立場が泣ければ今すぐにでも向かいたいのである。確かに戦いにおいては回りのフィールドを使うことも作戦の内であり、飛鳥の戦い方は理にかなっている。だが、ここまで相手を傷つける必要はないのではないかと思った。

荒々しさだけが感じられ、あまつさえ怒り、更にはそれを昇華さ

せた感情である憎悪、その上を行く殺気さえも感じられ、攻撃の一撃一撃に込められている。彼女には分からなかった、どうしてそこまでするのが。そして、箒にあの時突っかかっていった・・・自身の親友である天災に対してかなり敏感に反応していた。

MSというISと似て非なるマルチスーツを持ってIS学園に来たのも何か大きな理由があるのかもしれない。更に裏ではあの対暗部のための暗部とのつながりがあるというのだから、只者ではないと思った。

この情報を伝えてくれた天災には今回ばかりは感謝せざるを得ない。いつもは心労ばかりを送りつけてくるというのにとため息が出る。とはいえそれ以上の情報はさすがに引き出せなかったらしい。

飛鳥の経歴を見たところ、なんら珍しくないものであった。軍事学校を首席で卒業しているのはすごいことであり、女でISを乗るのであればそこに残っていてもよかっただろうが、彼は生憎男でありISに乗れない。更にMSといっても全く世間では認識は0である。

何はともあれ・・・。

「山田先生・・・一応打鉄の使用許可を取っておいてくれませんか??」

「え・・・??」

カメラから視線を動かさずに隣に座っている真耶に対して静かに呟く千冬。それを聞いて真耶はどういうことだろうかと怪訝そうな表情で千冬を見る。そこには教師としての千冬の顔と、そして弟を心配する姉としての千冬の顔が見え隠れしていた。

「分かりました」

その表情を見て真耶はその千冬の思いを理解し、すぐに使用許可を取り付けるように急ぐ。

「すぐに取ります」

「すまないな・・・」

そう呟き、何もなければいいがと不安を胸にモニターに映る二人の戦闘を見ていた・・・。

一夏は激痛で視界がかすむ。何とか目を細めて前方を見る。その瞬間に背中に装備されているバックパックのミサイルポットからファイヤビー誘導ミサイルの計16発が一夏と白式に対して向かってくる。

「くそ・・・」

逃げようにもダメージが多く、更にアンカーでつかまれているためにすぐにまたシールドに叩きつけられる。そして逃げる暇もなく、全弾ミサイルが一夏と白式のからだを飲み込んでいった。

だが、立ち込めていた一夏のいる場所に変化が起き始めた。そして突然何かが展開されたと思われる音と共に、倒したと思っていた一夏が姿を現したのだ。一体何が起きるのかと飛鳥は訝しげな表情をフェイスの裏で見せていた。

「な、あれは!？」

驚いている飛鳥の瞳に映るは今までと形の違うIS『白式』を纏った織斑一夏の姿であった。

＞初期化と最適化が終了しました。確認ボタンを押して下さい＜

煙の中から現れた一夏に聞こえたのは、今まで初期化。及び最適化を行っていた白式からの作業完了メッセージであった。

その様子を見ていた千冬は、そんな一次移行を完了させたい地価と白式の姿を見ながら言う。

「フン、機体に救われたな馬鹿者め」

その言葉とは裏腹に、口端を吊り上げて笑っていた。

同時に最適化の終わり姿形の変わった自身が握っていたブレードを見て一夏は何かを思い出していた。

「この刀・・・雪片」

そう手元に現れた刀を一夏は見た事があったのだ。それは、最も自身が尊敬している姉が日本代表だった頃に使っていた唯一の武器なのだから。

それを感慨深そうに見つめて、しっかりと握り締める。それだけで姉がそばにいてくれるような気がした。

「つくづく最高の姉さんを持ったよ 俺は・・・」

しっかりと握り締められた刀・・・雪片二型を構えて、一夏はセ

シリアに向かって叫ぶ。

「さあ、こっからが本番だ!!」

腕に絡まっていたアンカーのワイヤーを雪片式型の刀身で切り裂き、ようやく自由にからだを動かせるようになった一夏。

「さっきより動きが速い!! 一次移行が完了したのか」

先ほどのぎこちなさは幾分か抜け、その名称が付いた刀剣・・・雪片を構えて迫ってくる一夏。先ほどもまでの戦いを、目の前の男・・・織斑一夏とそのIS『白式』初期化と最適化が終わっていない状態でなしていたのだ。

そして一夏の方も変化した自身のISから力を感じ取っていた。

——見える・・・!! さっきまでとはまるで違う。

一つ一つの動きを確認しながらそれを実感していた。

——機体・・・白式がまるで自分の手足のように動く!! 俺専用になった。

そして握り締めている手元の刀に再び視線を向ける。雪片・・・それは一夏の姉の千冬と同じ武器である。そう、ずっと彼女が一夏を守るために振るってきた武器。

それが今、自身の手にある。

「俺も俺の家族を守る!!」

そして一夏は内心でこう思った・・・もう、守られるだけの関係は終わりにしよう・・・と。

「とりあえずは千冬姉の名前を守るさ」

その一夏の言葉を聞いた瞬間、飛鳥は後頭部を鈍器で殴られたようなものすごい衝撃を感じた。実際に攻撃を受けたわけではないのだが、ものすごい衝撃を受けた。

そして、思った・・・心の仲で、そう宣言した一夏に対して叫ぶ。

——ふざけたことを・・・。

雪片を腰高に構えてトップスピードでつつこんでくる一夏に対してビームライフルを腰にマウントし、ビームサーベルの柄を掴んでビーム刃を展開し、迎え撃つようにして構える。

振り切られる刀身をビームサーベルを振り下ろして受け止める。スラスターを前回に、罅迫り合いとなる。そのとき真正面に見える一夏の表情・・・笑っていた。

——なんでそんなに笑ってるんだ・・・。

飛鳥には理解ができない。そして、思う。こんな甘ったれた奴に負けられるかと。自分で望まずにISを起動させ、流されるままにここIS学園へと無理やりに入学させられるなどと人生設計をめちゃくちゃにされ、まるで望んできたわけではないという様子で、授業中においても参考書を捨てるやら、一般常識であるISの知識も知らない。そして、今日の決定戦まで全くISに手をつけずに戦って

いる。

そして、何より気に入らないのはそうやって簡単に力を手に入れて
いることだ。どれだけ手を伸ばしても決して手に入らなかったその
力を織斑一夏は手に入れたのだ。

あの日、家族や大切な日常を失ったとき。あの場所で・・・あの
全ての仇である篠ノ之束と白騎士を見たとき、自分に力がないこと
を、心臓をえぐられるような痛みとともに突きつけられた。上空を
見上げ、悪魔のごとき強さを見せ付ける白騎士から、自分がどれだ
け無力化、情けないか、ちっぽけな存在か・・・思い知らされた。

今の飛鳥になるまで・・・どれだけの月日と努力が必要だったか。
ただ残されていた一機のMS。まだ打たれていない剣になる前の熱
を持ったただの鉄の棒だったのだから。

なのに目の前の一夏はそんな力を流されるだけで手にした。そして、
笑みを浮かべてその刀剣・・・雪片式型を振るってくる。それをサ
ーベルで受け止め、弾き返す。

何度かの鏖迫り合い。いくら剣道をしていたからといって6年のブ
ランクとともに、軍事学校での訓練、更には幼少期からの訓練のお
かげで一夏の剣筋はほとんど見切れていた。

剣から伝わってくるのは守りたいという気持ち、それが姉であり、
親友であり、幼馴染であったり・・・。

——だからって・・・。

『僕ね、もっと強くなってお父さんとお母さんと朱雀を守るんだ』

『あら?? 皆のことはお父さんが守ってくれるわよ??』

『あははは、そうだな。俺だってまだまだ守られる年じゃないぞ』
『そんなわけないだろ??この前おねえちゃんに投げ飛ばされてたじゃないか』

『あ・・・、あれはだな・・・』

『あら、あなた。楯無ちゃんに負けたの??』

『お父さんよーい』

『う・・・。言わないでくれよ、結構へこむんだから・・・』

『僕、みんなのこと守るんだ。だからもっと稽古頑張るよ』

『あらあら、なら楯無ちゃんたちはどうするの??もしかして守られるほうなのかな??』

『ち、違う。俺が皆を守るんだ!!』

——お前に・・・。

『強くなるんだ・・・』

『アツくん、今日はもうやめようよ。みんなと遊ぶ約束・・・』

『まだ一本も決めてない・・・』

『何でそんなに意地を張るの??』

『僕が、僕がみんなを守るって決めたから』

『へへ。私や簪ちゃん、本音ちゃんに虚に勝てないの??』

『!!う、うるさい』

『うーん。だったらおねーさんが一肌脱ごうかしらね』

『え／＼／』

『ん??アツくん何かいかがわしいことでも考えたのかな??』

『そ、そんなわけないだろ／＼』

『なくんだ。残念ね。なら、おねーさんと特訓しよっか。そうすればアツくん強くなれるよ』

『それって、お姉ちゃんも強くなるんじゃない??』

『四の五の言わず、始めるわよ!!』

『う、うわー!!』

——大切なものを守れなかったときの思いが・・・。

『お父さん・・・、お母さん・・・、朱雀・・・。うわあああああ』

あ!!！」

「分かるのかよオオオオオ!!！」

その瞬間飛鳥の頭の仲で何か種子のようなものが弾けとんだ感じがした。その瞬間にあらゆる方向に対して視界が広がった、あらゆる感覚が研ぎ澄まされ、周囲のものがまるで指先で触れられるような精密な感覚。まるで時を止めるスイッチを押したかのように、回りの動きがあまりにも緩慢に止まって見えた。怒りにとらわれているはずなのに、何故か頭はすっきりとし、視界はクリアである。

前方から勇ましくも声をあげて飛ぶ込んでくる一夏の姿が見える。刀剣である雪片式型の刀身がビームサーベルのように輝いている。防ごうとビームサーベルを構え・・・ようにとした。

——あれは危険だ!!！」

全感覚が飛鳥の思考に対して警報を鳴らす。あの光る雪片をサーベルで受け止めてはいけないと言っていた。横なぎに振るおうとしたサーベルからビーム刃を解除する。それを見た一夏は一瞬驚いた表情になるが、これはチャンスだと思い、更に加速して飛び込んできく。

剣道に忠実に、更に掛け声までも上げながら振り下ろしてくる。それに対して左腕に装備している大型のシールドで思いっきり殴りつける。受け止めるではなく、真正面からぶつけ合ったのだ。

「な!？」

「この、甘ったれやろうがアアアアア!!！」

スラスターを全開にし、その雪片を殴りつけて押し合いの状態に

なっていたのを、いなし、一夏は勢いアマって前につんのめる。ここでISに乗っていないかった付けが回ってきた。体勢を大きく崩す。そんな一夏の腹に対して思いっきり蹴りを打ち込む。

「が!!」

からだを句の字に曲げながら広報に吹き飛ばされる一夏は咳き込みながらも何とか体勢を立て直す。雪片を構え睨みつけるようにしている。

「お前が・・・」

飛鳥はすばやくシールドとサーベルの柄を投げ捨てると、左の腰に装備してあった、折りたたみ式の対艦刀を両手で構える。ビーム刃も展開できるが、光っているあのビームサーベルのような雪片に對してそれは危険だという警報が、それを押しとどめていた。実体剣だけでもISの装甲であれば十分な脅威である。

「守るなんて言葉を・・・」

スラスターを噴かせ、一夏へと接近する。一夏も一瞬驚いた様子を見せるがすぐに表情を真剣なものにして雪片を振るう。剣と剣がぶつかり合い、ものすごい音が響く。お互いに鍔迫り合いの状態で押し合う。

「簡単に言うなあああああ!!」

「なんなんだよ!!」

戸惑いの声をあげる一夏。徐々に押されていく。どんなに力を入れてもまるで壁を押しているように全く意味を成さない。むしろ押

されており、打つ手がない。

「く!!」

「逃がさない!!」

右腕の手首のあたりから飛び出した別のワイヤーブレード。それが足にからみつき、再び戻される形になる。勢い良く引っ張られ、体勢が崩れた状態になる。戻ってくる一夏に対して、対艦刀を構える。

「お前に・・・お前に守れなかったものの気持ちがかかるか!!」

「何をいきなり!? 何を言われようと・・・俺は!!」

体制が悪くとも、対艦刀を雪片で受け止める。だが、勢いは殺せず、叩き込まれた勢いのまま、地面に叩きつけられる。小さくうめくも、すぐにまた足に絡まったワイヤーブレードが一夏を上空に引きずり上げ、中吊りの状態でスラスタ部分に今度はビーム刃を展開して叩き込む。きるといっても叩き壊すといったほうがいいだろうか。あまりの衝撃にワイヤーブレードが引きちぎれ、その勢いのまま向こうのシールドに叩きつけられる一夏。

「があ!!」

すでに握られていた雪片式型も握力を失われた手から滑り落ちるようにして光を失いアリーナの地面に突き刺さる。ずるずるとシールドをすべるようにしてゆっくりと地面に落ちていく一夏に対して、その対艦刀を突く形に構える飛鳥。

「守ると言って・・・」

両手で構えるその対艦刀は禍々しいほどに美しく光を反射している。

「守ると誓って・・・」

抱いた小さな腕はとても軽く、命というのは失われるとあっけない。

「守れなかったときの気持ち・・・」

ただ呆然と幼馴染の家が行ってくれた葬式で並んでいるまだ幸せであった頃の家族のそれぞれの写真。写真の仲では笑っているのに、二度と笑い返してくれない。

「分かるわけがないお前が、守るという言葉を軽々しく使うなアアアアア！！」

もはや限界を超えた加速を見せる。二重瞬時加速・・・。もはや姿を肉眼で捕えることはほぼ皆無である速度で白い騎士に向かって傷だらけの戦士が刃を向く。

やられる・・・。そう思った一夏。だが、体は動かず、白式のモニターに映るエネルギーはすでに底を尽き0を示していた。向かってくる飛鳥の・・・ヴェステイージの姿はひどく傷だらけの戦士のように見えた・・・。

やれる・・・。そう思った飛鳥。だが、その刃は突如として現れた刀の一閃によって崩れ落ちる一夏の真横のシールドに突き刺さり弾かれるのに終わる。その瞬間気を失った一夏が重力に従ってアリーナの地面へと落ちていく、それを抱きかかえるようにして現れた

人物がいた・・・。

「試合は終了だ。これ以上の攻撃を続けるなら・・・」

カチリとここに現れた女性が打鉄の装備されている刀をこちらに向ける、それを見て無言でビーム刃を展開し、構える。

「容赦はないぞ・・・」

打鉄を起動させた織斑千冬が飛鳥を見てにらみつけていた。

『しょ、勝者・・・紅月飛鳥!!』

慌ててアナウンスが聞こえるが、そこには歓声や拍手というものは皆無であった・・・。

PHASE 06 悪夢再び（後書き）

ED1↓遠雷　　く遠くにある明かりくHIGH and MIG
HTY COLOR>

かなり長くなりましたが読んでいただけてうれしいです。

誤字脱字やご感想がありましたらよろしく願います。

SEEDネタとして、あれが発動しました。換装システムネタとして残り三つほど登場させるつもりです。いつなにが飛び出してくるか、お楽しみに。

PHASE 07 それぞれの思い（前書き）

OP1↓ignited<T・M・Revolution>

ヒロインたちとの会話が少ない。もう少し話に華を持たせたいのですが……。またこの後にもイベントがありますので、そのとき에도……。

PHASE 07 それぞれの思い

「良くもまあ持ち上げてくれたものだ・・・」

そういうのは千冬である。あそこまで言っておいて結局負けてしまった一夏は羞恥と申し訳なさで落ち込み気味である。現在二人がいるのはIS学園に設けられている保健室である。一夏はあの試合の後完全に気を失ってしまったために、保健室に運ばれたのだ。

ただの疲労であり、初めての激しい戦闘で体のほうがついていかなかったのだろうという診断がでた。とりあえず大事には至らなかったなのでそれを聞いたここにいない箒と真耶ともどもほっとした。

ようやく目を覚ました一夏。とりあえずひと言言おうとした千冬であったが最初に出た言葉がそれだった。あからさまに落ち込ませってしまった。内心しまったと思う。

「あ、いや。だが、初めての試合にしては頑張ったほうだったぞ。取りあえず・・・無事で何よりだ」

「ああ・・・」

一夏もあの試合のことを思い出し。ただそう呟くだけだ。

「アイツ・・・なんであんなに怒ってたんだ?？」

「怒っていた・・・?？」

千冬が聞き返すと一夏は頷く。一夏は戦っている間、飛鳥から投げかけられたさまざまな言葉を思い出していた。

“この、甘ったれやろうがアアアアア!!”

“お前が・・・、守るなんて言葉を・・・、簡単に言うなああああ
ああ!!”

“お前に・・・お前に守れなかったものの気持ちが分かるか!!”
“守ると言って・・・、守ると誓って・・・、守れなかったときの
気持ちが・・・分かるわけがないお前が、守るという言葉を経々し
く使うなアアアアア!!”

どれもまるで一夏の思いを否定するようなものであった。そのた
めに思い出すだけでも気に入らないというような思いがわいてきた。
自分がどんな思いで今までを過ごしていたか、飛鳥は知らない。

だから、そんな飛鳥に何かをとやかく言われたくないと思ったの
だった。自分にも自分なりの思いがある。当然このIS学園にIS
を使えるということできてからそう思ったのだ。とはいえ、覚悟が
決まったのは白式をまとったときだ。ようやくこうして自分も戦え
る。何かを守るために、力を振るえるのだと思ったのだ。

「でも、負けたんだよな・・・」

「まあ・・・今回はぶっつけ本番という悪条件もあって機体の特性
を掴み切れない部分もあっただろうからな。そこは仕方がないだろ
う・・・」

それから千冬からの説明が始まる。

ISによる戦いの勝敗のつけ方というのは相手のシールドエネル
ギーをゼロにすることである。シールドを突破した攻撃だけがIS
自体にダメージを与えられるのだ。そのときに操縦者が死なないよ
うに、ISには絶対防御というものがそうなえられている。

そこまでは一夏も勉強していたので知っている。そして、その絶対防御というのは極端に大量のシールドエネルギーを消費する。それにIS自体が破損したとしても、危険だと判断されない限りはそれは発動されないのだ。

そして何より、一夏の唯一の武器である雪片式型にはとある特殊な能力があるらしい。それはバリア無効効果。

「バリア・・・無効効果??」

一夏はそれを聞いても分からないという表情をしている。

それは相手のエネルギー残量に関係なく、シールドエネルギーそのものを切り裂いて、ISと操縦者本体に直接ダメージを与えるというものらしい。

そして、相手の絶対防御が発動する為に大幅にエネルギーを削ぐことができる。

「かつて私が世界一の座にいたのも雪片の特殊能力によるところが大きい」

「・・・ていうことは、その攻撃を与えられれば俺にも勝機はあったのかな??」

一夏は恐る恐る聞いている。

「ISならな・・・」

「どういう意味だよ、千冬ね・・・じゃなかった、織斑先生」

「今はいつもどおり呼んでいい。ISなら、その装甲が破壊され、生身にダメージが行かないように、絶対防御が発動するが」

「飛鳥の使う・・・MSっていうのは・・・」

「一応上空から落ちた場合や、強い衝撃を受けた場合に保護するISで言うシールドのようなものがあるらしいが。ISのように零落白夜を受け、直接機体にダメージを与えたところで、傷はついてもエネルギーはISほどは期待できないだろうな」

「それと『白式』は自身のシールドエネルギーを攻撃に転化する機体なんだ」

「ああ！！なるほど」

一夏はようやく納得する。そして追い討ちをかけるように千冬が言う。

「つまり欠陥機だ」

「え？？ええええええ！？」

欠陥機という言葉にあからさまに反応する一夏。

「ああ、いや・・・言い方が悪かったな。そもそもISというものは未完成の段階だ。欠陥も何もない。『白式』は純粹に攻撃特化の機体というだけだ。通常は複数の武器を装備できる処理能力をこの『白式』は雪片一本に集約させているということだ」

落ち込む一夏に対してねぎらいの意味をこめて言ったのだろう。

『その威力は私が知る中でも全IS中トップクラスだ』と。

その言葉を聞いて一夏は過去の千冬のことを思い出していた。彼女が世界一になったときも、同じようにその手には雪片という一本の刀しかなかったのだ。そして同じスタートラインに立ったと思った一夏であるが、まったくかなわない。姉と自分との差が、見えないくらいある、格が違いすぎることを突きつけられた。

だからこそ思える・・・凄いと。

「なあに・・・、余計な事を考えて戦うより一つの事を極める方がお前には向いているさ。なにせ・・・私の弟だ」

少し恥ずかしがりながらもそう言う千冬に対して一夏は元氣良く、返事をするのだった。

あれから部屋に戻ってもいいという許可を貰ったために一夏は部屋に戻ろうと保健室を出ると、そこには箒の姿があった。やや目が赤くなっていたのは心配で少し泣いてしまったためであった。だが、それに一夏が気づくはずはない。

「ほ、箒・・・。どうしたんだよ」

「どうしたんだよじゃないだろ、一夏。その・・・、大丈夫なのか??」

「え??」

本当に心配していたと思わせるように必死な表情で聞いてくる。最初はどうしてなどと思っていた一夏であるが、さすがに泣いていたのだろう涙のあとを見て、心配させたんだなと反省した。

「ああ、大丈夫だ。体中がちょっと筋肉痛みたいに痛む位かな・・・。やっぱりなれていないことをいきなりやったから相当負担がかかったみたいだ」

「そ、そうか・・・」

二人は無言で歩いている。

「なあ箒?? どうしたんだ・・・」

無言で何かを考えているように見えた箒に一夏が話しかける。すると箒から返ってきた言葉は・・・。

「負け犬」

「ぐあ!？」

まさに一夏の心にKOパンチを入れる威力のある言葉であった。箒からすればメンを奪うものであろうか。一夏はその言葉を聞いて完全にノックアウトしていた。

そして一夏も一週間あったこといろいろと声に出さずに考えていると突然それを察したように箒が言ってくる

「とは言わん。ていうか今、私のことを何か馬鹿にしたか??」

「シテナイ」

「なんだ そのおかしい喋り方は」

「オカシクナイ、コレ中南米デハ普通・・・」

一夏はまるで箒に心を読まれたように言葉をかけられたために、片言になってしまっていた。そんな一夏に対して、箒は持っていた市内にて、思いっきり一夏を叩く。乾いたいい音が廊下に響き渡る。

「いってえっ!! 何すんだよ!？俺は今重症患者だぞ!!」

「馬鹿がいたので叩いただけだ」

突然竹刀にて叩かれる一夏は、頭を撫でながら、その殴った本人である箒に対して怒りの声をあげる。しかし箒は別段、して当然だ

という顔である。

「お前は肉切り包丁か何かか!! そんなに日常的に暴力振るっていいと思っくんのかよ!? お前は一体何の恨みがあつてそんなことをするんだよ!!」

一夏が激情に駆られながらそう叫ぶが、箒は再び竹刀を構えたために一夏はだまらずを得なかった。そして一夏が黙ると箒はやや頬を赤く染めて言う。

「一夏・・・その、なんだ・・・先ほどの戦い、負けて悔しいか?」

突然箒から一夏に投げかけられた言葉は負けて悔しいかというものだった。一夏は当然即答した、自分の力のなさと、自分の思いを否定されたのだから。だからといってそこであきらめる一夏ではない。

「悔しいさ・・・」

箒はその一夏の言葉を聞いて満足そうだった。これで、もしそうでなかったら再び竹刀を振り下ろす覚悟でいたからだ。そこまで腑抜けているようではなかったのほっとしていた。

「そ・・・そうか、それならいい。そうだな、明日からはISの訓練もしっかり入れないといけないな」

さすがに動かさずに戦いを挑んだというのは、飛鳥に対して失礼だったかもしれないと一夏は思った。それに全く齒が立たなかったということも悔しく思えた。

「え？？箒ISの操縦を教えてくれるのか？？」

「やっど、一夏の専用機も届いたしな。あ、む、無理にとは言わないぞ。なんなら千冬さんに教えて貰った方が・・・」

もごもごという箒であるが。一夏は自分が頼んだら身内最員のように見られるかもしれないということで箒に頼もうかと思った。

「箒がもし嫌なら他をあたるけど・・・」

「嫌とは言ってない！！」

そう声を荒げて言う箒。さすがに目の前で叫ばれて一夏も驚かざるを得ない。

「いいい、一夏が、私に・・・教えて欲しいなら教える。そう、直々にな！！」

そして、放課後は空けておくのだぞと念を押しながら言った箒であるが、どうしても一夏にものを言うたびにもしもじしていたために、一夏がいぶかしんでもしかしてと思い、言った言葉がトイレに行きたいのかというデリカシーのないものであった。

当然廊下には竹刀の乾いた音が響き渡った。

一夏が箒と共に部屋に戻っている時と同じくして、とある場所・・・飛鳥と戦ったイギリス代表候補生セシリア・オルコットの部屋。

その本人は自室にあるシャワーを浴びながら汗を流しつつ、先ほどの戦いを通して思ったとあることについて考えていた。

——今日の試合・・・あんな戦い方をしたのは初めてでしたわ・・・。それにあんな気持ちになるだなんて・・・。

飛鳥との試合。あの試合での出来事を考えていた。

「ふう・・・」

シャワーのノズルを回してお湯を止める。滴る雫と共に、口から出てくるのはため息だけだ。セシリアは自分の勝利に絶対の自信があった。それは代表候補生だからであり、それに見合うだけの努力をしてきたからであった。ぼっと出の男の操縦者、更には全く知られていない兵器を持ち込んだ男に負けるわけがないと思っていた、自負していた。だが、結果は明らかのように負けた。相手もぎりぎりであつたが、自分は確かに負けたのだ。

それにセシリアは常に、イギリスの貴族であることと、代表候補生であることに誇りを持ち、戦い方にもまさに華を美しさを求める。だが、先ほどの自分の戦い方は一体なんだろうか。まさに、この日本における古い殴り合いのような戦い。まさか自らの機体を傷つけてまでも飛鳥に立ち向かっていくとはやった自分でさえ、信じられない。

体当たりには蹴り・・・。セシリアとして、そんな美しくもない、ましてや野蛮な闘い方を自らがしたこと、数時間前の自分をしかってやりたい気持ちだ。だが、あの時は何としてでも勝ちたかった。負けたくなかった。ただ、そんな純粋な思いがあつた。

相手が男だから？？相手がISでないものだから？？

——紅月飛鳥・・・誰にも媚びることなく、あえて流れに逆らうような生き方・・・そして、まっすぐな強い眼差し・・・。あんな男性は初めて見ましたわ。

飛鳥のことを考えながら、ふと自身の父親のことを思い出していた。セシリアの母親は現在の『女尊男卑』の風潮が起こる前からいくつもの会社を経営して成功を収めていたキャリアウーマンであった。そして当然同じ女性として、彼女は母親にあこがれた。

しかし、対して父親に対しては違っていた。セシリアの父親は母親の名家に婿入りしたせいかな常に母の機嫌とりにしていていたのだ。まるで現代の女性に対して怯えている男性のように。

そのことを思い出していたらため息が出る。女尊男卑の風潮やI Sが発表されてから、さらに男性の立場が危うくなると、その父親もまた、以前にも増して、母親に対しての態度が小さくなっていった。セシリアだけでなく、そんな夫に対して、セシリアの母もいい加減に鬱陶しいと思うようになっていたようだ。

「もう三年も経つんですのね」

そして今から3年前に起こった鉄道の横転事故で二人は一緒になくなった。そしてその事故において死者の数が100人を超えると、いう大規模なものであった。そして独りぼっちになってしまったセシリアに残されたのはそんな大好きであった母が残してくれた遺産と、その遺産に群がる金の亡者たちだった。

そんな亡者たちから自身の両親が残してくれたものを守るために必死に勉強したのだ。そしてI Sの適正試験を受けたときにAという成績をたたき出し、政府から国籍保持、いくつもの好条件を提示

された。セシリアはイギリスの代表候補生として選ばれたのだったのだ。

——そして・・・第三世代装備ブルーティアーズの操縦者として稼働データと戦闘経験値を得る為に日本へとやって来た・・・。

そしてIS学園へと入学したのだ。そこで知ったこと・・・。

「まだ男性にもそんな強い意志を持つお方がいらっしやったのですわね・・・」

自分がどれだけものを見ていなかったのか。イギリスという狭い檻を出て、新しく広がった視野。貴族間でしか男を見ていなかったセシリアにとって、飛鳥や一夏という二人の男はまた違って見えたのだ。だからこそ、もう一度始めなければいけないと思った。

「セシリア・オルコットはまだ始まったばかりですわ」

そう硬く決心した彼女のIS学園での生活はまだ始まったばかりである。

「終わった・・・」

飛鳥は机に持っていたシャープペンシルを投げ捨てる。机に跳ね返り、ころころと紙の上を転がる。その紙にはびっしりとなにやら文字が書かれており、彼の左横には山積みになった同じような原稿用紙があった。

最初の題の部分には、反省文と書かれていた。うんざりしたよう

に、伸びをしてから、腕を頭に組むようにして椅子にもたれかかる。まさか原稿用紙100枚に描けと漫画の世界だけだとおもっていたことを千冬は飛鳥に対して言い渡したのだ。

あの試合のあと、すぐさま待機状態にしたヴェステイージを取り上げられ、それを真耶に預けた千冬は飛鳥の腕を引っ張るようにして会議室へと投げ込んだ。お互いに椅子に座り、すぐさま千冬からの説教が始まった。

まず最初に言われたのは、やりすぎだということだった。セシリアを気絶させるまで身体的なダメージを与え、更にはイギリスの第三世代型ISのブルーティアーズを中破させた。

あれでコアまでダメージが言っていたら、彼女だけではなく、それを破壊した飛鳥までもどんな処罰がくらかわからない。いくら外からの干渉を受け付けないIS学園だとしても完璧ではないのだ。

何とかすぐに修復できるとはいえ、あれははっきり言ってやりすぎだ、何度もそういわれた。思わずイライラを越して殴りかかるころだった。それくらいにイラついていた。

セシリア自身にも大事までは至らず、ただ気絶しただけだと言われ、後で謝罪するようにといわれた。

そして、次に一夏との試合でのことについて言われた。

『お前は一体何をしようとした??』

きつく睨みながら言われた。そこには教師としての彼女の顔と、弟を思う姉としての顔が見え隠れしていた。ただのブラコンかよと

内心思っていると鋭い拳が脳天に直撃した。かなり痛い……。

『何すんだよ!!』

『私はからかわれるのが嫌いだ』

『だからって殴るのかよ!!』

『口の利き方に気をつけろよ、紅月』

『ふん』

『まあいい、もう一度聞く……、何故あんな危険戦いをした』

どうやら彼女は教師として、あんな危険な戦い方……、つまりはあわや殺しかけた飛鳥の戦いを見過ごせないというのだった。更には、姉としては許せないという感情があるのだろう。

いたって冷静そうに振舞っているように見えるが、対暗部の家系の訓練を友だって受けていた飛鳥としては、内心の彼女はかなり怒りを持っている、そう読み取っていた。それ以上は流石に最強といわれたものであるために、詮索されないように感情コントロールをされている。

それに対して飛鳥もまた、彼女に対して怒りを向けていた。それは彼女とは違い、睨みつけるような目つきであることから表面にでている。いくら訓練をつんだからといって、どうしても彼は正直なのか顔に感情が出てしまうのだ。

そして、心の中で叫ぶ。よかったな、死ななくて……っと。

『なんのことだよ。俺はただ戦っただけだ。目の前に敵がいた……、だから倒そうとしただけだ』

それが何か悪いのかと。睨みつける視線のまま言う。負けじと睨

みを強める千冬。彼女が言うにはISというのは“スポーツ”だと言う。このIS学園は最終的にIS関連の職業に生徒たちがつけるように教育する現場であると。整備科の生徒たちは研究や企業に就き、他の生徒たちは将来モンド・グロッソなど、世界の舞台に出て行くかもしれないのだ。

飛鳥の考えている“兵器”とは違っていた。しかし、ISというのは誰が何と言おうと、現代のあらゆる兵器の性能を超えた兵器だということだ。そのためにいくらスポーツ競技だというオブラートにつつもうと、あの時起こった事件同様に、ISを何かの悪巧みに使おうとしている者たちもいるのだ。

今はアラスカ条約によって、それを表立って兵器として使用することはできないでいる。だが、それはもろすぎる鎖でしかない。何か突発的な何かが起これば、すぐさまISによる戦争が起きるだろう。

世界最強も、舞台を降りてからすっかり腑抜けてしまったのだろうか、腕のほうではなく・・・、ISの存在意義というものに対する認識能力が。

『お前のヴェスティージがISではないからといって、ISの法律が通用しないわけじゃない。ここがIS操縦者を教育する場である以上、それにしたがってもらう』

『・・・』

『返事はどうした!!』

『・・・ち。はい・・・』

面倒くさそうにしていやいや返事をする。それが更に彼女の機嫌を損ねたのか、その部屋の引き出しの仲から取り出したのは山積み

にされた原稿用紙であった。ざっと見100枚はあるだろうか。にやりと笑った千冬は言う。

『反省文だ。原稿用紙100枚。明日中に提出するように』

『な、なんだって!?!』

悪魔のような笑みを浮かべた千冬に対して食って掛かる飛鳥。だが、いくら言ってもそれは覆されることはなく、結局それをふらふらとさせながら持っていかなざるをえなかったのだ。

「くそ・・・、あいつ、なんだって言うんだよ!!! いくら世界最強だからって、いい気になってるんじゃないか」

いくらここで飛鳥が叫んでも意味はない。もう因るも遅く、すでに後ろのベッドで眠っている二人は全く飛鳥がイラついていることを気にしていない様子である。

原稿用紙を持って帰ってきたあと、二人からはそれぞれ呆れと面白いのを見たというような視線を双方から受けた。本音が試合を見ていたのは知っているが、まさか簪も、合間を縫ってみてくれたとは思わなかった。

てっきり整備室にこもっているとかばかり思っていたからだ。単なる息抜きだといっていたが、気にかけてくれたことはうれしかった。少しだけ、胸が温かくなる感じがした。

『でも、反省文はありえない』

『しょ、しょうがないだろ。あいつがやれってうるさいから・・・』
『馬鹿なの??! 口答えすれば、織斑先生の性格からしたらそうなるでしょ』

簪から鋭いツツコミを入れられ、千冬に対して向けていた怒りが徐々に小さくなる。正論であるために何も言い返せない。とりあえずそう言い終えると、簪はきびすを返して、自分の机に座り、手元に空中投影ディスプレイを出して専用機の製作を始めた。

『アーちゃん頑張れ〜』

『人事のように言うなよな・・・』

相変わらずの本音からのエールを受け、仕方ないと、夜遅くまで反省文を書くことになったのだった。そして、ようやく完成した反省文。今度は明日、これを持って行かなければいけないのだからめんどくさいと言ったらありやしないのである。

ふと後ろの眠っている二人を見る。今頃夢の世界に言っているのだろう。いつもどおりの幸せそうな表情をしている本音と、いつもは感情を表に出さず、クールな簪の表情も、このときばかりは幸せそうなものであった。

「俺は・・・」

そんな二人の寝顔を見て、それから自分の手首にある赤いブレスレットである待機状態のヴェステイージを見る。ようやく戻ってきたヴェステイージは元あるべき場所に戻ったことを喜ぶかのように赤く光を反射させる。

あの笑顔を守りたい……。そのための力なのだから……。

「そのためだったら戦ってやるさ……。どんな敵とだって」

それが例え、友達だとしても・・。

PHASE 07 それぞれの思い（後書き）

ED1↓遠雷 〽遠くにある明かり〽<HIGH and MIG
HTY COLOR>

ご感想や誤字脱字がありましたらよろしく願います。

次回は第一章のエピログです。ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

PHASE 08 エピローグ（前書き）

OP1↓ignited<T・M・Revolution>

第一章のエピローグです。ここまで読んでいただきどうもありがとうございます。

原作ではまだ一巻は続きますが、イベント的にここで第一章を区切らせてもらいます。第二章は・・・。

というのは置いておいて、たくさんのご感想、お気に入り登録ありがとうございます。いつでもお待ちしておりますのでよろしく願います。

PHASE 08 エピローグ

そして翌日。1年1組では昨日の件を含めてのクラス代表が決定していた。

「はい、という訳で・・・一年一組代表は試合結果より・・・紅月飛鳥くんに決定です！！」

教壇に立つ真耶が黒板に飛鳥の名前を書く。クラスからは賛成の声が上がった。昨日の試合内容を考えると嚴重注意が言い渡されるが、実力的にはこのクラスにおいてはトップレベルだということが示されていた。

一夏とセシリアの試合がなかったのは、どちらも試合後に気を失ってしまい、更に機体が危険レベルまで破損させられていたので早急に決めなければいけなかったクラス代表はこの時点で2勝していた飛鳥に決定したのだ。

一夏としてはようやく来たばかりの白式を危険レベルまで破損させてしまったので、それを整備するものたちからすればもっと丁重に扱ってほしいとも言われて、すいませんと謝っていた。

そこまで破損させたのは飛鳥であるが、破損させないようにするのは一夏の操縦の腕であるからどっちもどっちなのである。取りあえず白式もブルーティアーズも現在は修復中ということだ。

そして、ガタツという机の音とともに、ゆっくりと窓際に座る飛鳥が立ち上がる。教卓に立つ真耶の他クラスメイトたちの視線がそこに集まる。昨日のような恐怖心を掻き立てるような怒りはない飛

鳥。昨日の試合、誰もが見ても異常なほどの戦闘を見せたのだ。一夏は初心者であるから分かるが、代表候補生のセシリアまでも打ち破ってしまったその実力と・・・ISに対抗できるというMSの性能の高さを見せ付けられたのだ。

更にはこの学園に二人しかいない珍しい注目を集める男同士の戦い。だが、内容は一方的に近いもので、最後には強制的にとめるために教員である千冬自身がISを使って止めにするなど波乱があった。

そのために少々距離がきつあった飛鳥と他の生徒たち。彼があそこまで怒る理由を知っているものはこの学校には4人しかおらず。周りからすれば理解ができないことだっただろう。

「ええっと・・・」

立ち上がった飛鳥が口を開く。やや寝癖頭の髪をかき上げて、恥ずかしそうに、緊張している様子が伺える。昨日の恐怖心を掻き立てるような飛鳥とは打って変わって、女性が元来持ち合わせている母性というものをくすぐるそんな雰囲気をもし出している。

「一組のクラス代表になった・・・ええっと、頑張るから応援よろしく!!」

言い切ったと目をつぶり勢い良く椅子に座る。かなり恥ずかしかったのか机に突っ伏してしまう。その後かわいいなどという歓声上がる。男がそう言われてもうれしくない。

「そこで!!」

すると突然立ち上がったのはセシリアである。歓声がぴたりと止まり、皆の視線がセシリアへと向かう。

「私のように優秀かつエレガント華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げればクラス代表戦に十分通用するまで飛鳥さんも一夏さんもみるみる・・・」

セシリアが飛鳥と一夏に対して訓練及びISの操縦を教えるという、突然机を叩いて、箒が立ち上がったのだ。

「生憎だが一夏の教官は足りている。私が直接頼まれたからな」

腕を組んでセシリアに対してその役は必要ないと言つてのける、それも堂々と一夏からのラブコールがあつたことも添えてだ。するとクラスメイトたちは、キャーキャーとはしゃいでいる。二人きりの男女、ちょっとしたことで発展するかもしれないという期待もあったのかもしれない。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さんではないですか。Aの私に何かご用かしら??」

「え???箒、ISランク、Cだったのか???」

一夏が、ランクの高い人から教えてもらったほうがいいのかと思いついて始めている様子を見て、箒は慌てる。

「ら・・・ランクなどは関係ない!!私が頼まれたと言っているんだ!!いい、一夏がどうしても懇願するから・・・」

最後は尻すくみしてしまうが、箒は自分の言いたいことを言つてやった。一々ランクにこだわる二人に突然割って入ったは一組の担

任織斑千冬。

「ランクなど15歳そこらのお前らになど関係ない。私から見ればお前らは皆ひよっこだ」

と言うことでセシリアと箒の口論を止める。

「クラス代表は紅月飛鳥。依存はないな!!」

と言うように千冬が強制的にしめると、クラスメイトたちは団結することはいいことであるように返事はOKであった。

こうして飛鳥のIS学園での波乱の日がまた始まったのだった。

(完)

PHASE 08 エピローグ（後書き）

ED1↓遠雷　　く遠くにある明かりく<HIGH and MIG
HTY COLOR>

ここまで読んでいただきどうもありがとうございます。

今後とも泉海斗とインフィニット・ストラトスく怒れる瞳くをよろしく願います。

第二章インフィニット・ストラトスく怒れる瞳く　怒れる剣

ご期待に沿えるよう頑張りますのでよろしく願います。

PHASE 8・5 キャラ設定&機体設定2（前書き）

今日は新章の設定を載せたいと思います。

本編は明日から投稿しますので、よろしくお願いします。

PHASE 8・5 キャラ設定&機体設定2

名前 紅月飛鳥

年齢 15歳

容姿 髪は赤茶色で瞳は赤色。髪型は寝癖型で、顔立ちは上の中。

性格 一見して雰囲気的に冷たそうで怒りを露にすると怖い印象があるが、人を見下すようなものに対して陰悪している。

身長 170センチ

体重 60キロ

使用機体(MS) ヴェステイージ

家族関係 父・母・紅月飛鳥・妹・紅月朱雀

趣味 読書

学歴 一般小学校↓短期軍事学校↓IS学園

友人関係 更識姉妹、布仏姉妹とは親友で幼馴染

使用武器 小型ナイフ、ハンドガン

備考 もともとロボット工学系の大学教授であった父と専業主婦の母、妹の朱雀との一般的な4人家族。父が宇宙進出可能なマルチス

1ツの試作としてMSを開発した。家族旅行先にて待っているときに白騎士事件に巻き込まれ、ミサイルが空港に着弾両親と妹を失いただ一人生き残る。その後小学を卒業するとともに中等部のある短期軍事学校に通う。その後MSの使用が認めらる軍学校を首席で卒業し、IS学園に入学し、数少ない教官を破る。入学の理由はMSの性能実験。家族を奪った篠ノ之束と白騎士のことを恨んでいる。ISは扱えない。

名前 ヴェステイージ

由来 身も心も傷だらけという意味から。

機体イメージ ガンダムSEED・DESTINYのインパルス。

配色 赤とダークグレーのツートン

世代部類 第1世代

動力源 電力

待機状態 紅いブレスレット

武装 ・CIWS×2

- ・フォールディンググレイザー対装甲ナイフ×2
- ・高エネルギービームライフル×1
- ・アンカー付き巨大シールド×1
- ・折りたたみ式レーザー対艦刀×1
- ・誘導ミサイルポッド×2
- ・バズーカ×1
- ・ワイヤーブレード×1

換装シルエット*それぞれにエネルギーが貯蔵されているために、換装のたびにエネルギーは回復する。

・フォースシルエット*白式との戦闘データからヴェステイージ自身が生み出した新しい換装シルエット。高機動を生かした中近距離の戦闘を得意とする。配色が赤から青に変わる。

・ブラスターシルエット*ブルーティアーズとの戦闘データからヴェステイージ自身が生み出した新しい換装シルエット。機動性は若干劣るが、圧倒的な火力が持ち味。中遠距離での戦闘を得意とする。配色が赤から暗緑に変わる。

備考 ロボット工学系の大学教授だった父が作り出した宇宙進出のためのマルチスーツの試作品。ISのような絶対防御の他に、実体武器の攻撃には耐えられるように装甲は強化され操縦者の安全も守られている。ISのようにコアはあるがISとは全く違う。特殊装甲のおかげで実体による攻撃は通用しない。またシールドエネルギーではないので戦いによってはISよりも長時間戦える。防護服としてはパイロットスーツを着用。またデュートリオンビームによってエネルギーを回復することも可能。ISのコアのように自立進化の兆しがある。新たに二つの換装シルエットが増えたために戦略が大幅に広がった。

<新OP&ED

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

ED2↓REASON>玉置成実<

*もう少し幅があればいいのですが、自分の知っている音楽からすると・・・。

<以下は予告編です。

新しい生活が始まって数週間。

飛鳥たちの元に新たな問題がやってくる。・・・中国から。

「宣戦布告しにきたわよ!!」

「なんだ・・・こいつ??」

「俺のセカンド幼馴染の鳳鈴音だ」

嫉妬に燃える女子生徒たち。しかし、それに気づくことはない唐変朴オブ唐変朴。

「おい一夏、こいつとはどんな関係なんだ!!」

「どんなって・・・ねえ」

「ただの幼馴染だ」

「・・・」

気に食わない態度と決闘。

「こんなガキっぽい奴がクラス代表??」

「なんだって・・・こいつ!!」

「なら決闘よ!!」

突然の乱入者と無責任な行動・・・。

「なんだよあれ・・・」

「IS・・・ていうか全身装甲のISだなんて見たことないわよ!!」

その未確認のISが狙いをつけるは、幼馴染たちがいる観客席。

「俺はまた守れないのか・・・??俺は、俺はああああ!!」

思考は一気に過去へと遡る・・・。

降りそそぐミサイル・・・。耳に突き刺さる悲鳴、爆音・・・。
見捨てた命と、自らがその灯火を消した命・・・。目の前に転がっている家族であつた肉片・・・。手に取った妹の腕はまだ温かく、それが体温か、それとも爆発の熱なのか・・・。

見上げた先にいるのは・・・。

その時弾ける種子・・・。

守りたい者を背にし、その攻撃を受け、煙につつまれる。

だが、そこから現れるは聖剣を握みし戦士。

「全部叩き切ってやる!!」

PHASE 8・5 キャラ設定&機体設定2（後書き）

読者様方に楽しんでいただけるように頑張りますので、応援よろしくお願いします。

PHASE 09 プロローグ? (前書き)

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

キャラ&機体設定を先に投稿してしまいましたが、本編開始です。
新しいOP&EDとともに、それを聞きながら楽しく執筆していきます。

少しばかり飛鳥の過去を覗いてみました。

たくさんのご感想、お気に入り投稿ありがとうございます。

このような作品ですが、今後ともよろしく願います。

早速間違えていたので修正しました。何をしていたのか・・・すみません。

PHASE 09 プロローグ？

飛鳥がクラス代表になったその日の夕方。IS学園の校門に一人の少女が立っていた。

小柄で、その眼は活発で元気な女の子であることを示している。ツインテールにしているのはツンデレを示すトレードマークであるうか。

「ふう〜ん」

少女はIS学園を見渡す。

「ここがIS学園か……。ここにアイツがいるのね……。」

恋する乙女の表情である。

母国に帰らなければいけなくなったために離れ離れになってしまった少年。しかし、その少年が突然女性しか扱えないはずのISを起動させたのだ。

丁度自身も国の代表候補生であったために、最初に行く気がなかったIS学園にその少年が通っていると聞いて、急遽転校することを決めたのだ。

まさか姉弟共にISの操縦者になるとは思わなかった。好きな少年のほかにもイレギュラーが存在していることは知っているが、彼女には関係なかった。

ただ少女の頭には、あの時の約束を覚えていてくれているだろうかという期待と不安、そしてこの気持ちがその少年に伝わるかということだけだった。

「待ってなさいよ一夏・・・、今すぐ会いにいつてあげるから」

その少女の転校を皮切りに、新たな展開を迎えることになるのだった。

ここはどこだろう・・・。飛鳥はふと自分の体がふわふわと浮いているような感覚を感じていた。

自分が今一体何をしているのか、立っているのか、座っているのか、どちらが上でどちらが下なのか、左右さえ分からない。

手を伸ばそうにも、自分の手がある感覚すらない。あまりの衝撃的なことに、驚きを隠せない。しかし、そんな表情を作っているのかもわからない。

「どこだ、どこなんだよここは!!」

声に出して叫んでみる。だが、そこに無情に響くだけで、ゆっくりと視界が開けてくる真っ暗な世界に響くだけである。

そして、突如としてその奥から更に黒で塗りつぶされた濁流のようなものが押し寄せてきた。

「な、なんだよあれ!!」

驚く飛鳥。慌てて逃げる。

しかし、逃げているのかも分からない。足勝ちを踏みしめている感じが無い。足が動いている感じもない。腕を振っている感じが無い。

「う、うわあああああ！！！」

その瞬間飛鳥はその濁流に飲み込まれた・・・。

あれからどれくらいの時間がたったのだろうか。ゆっくりと飛鳥は目を覚ました。しかし、すぐに何かおかしいことに気づく。自身に違和感があるのだ。眼には色々なものが映っているのに、自分が動いているつもりがなくとも、その周りをまるで子どものようにはしゃいで走り回っている。

うれしそうに声をあげているのも聞こえる。まるで声変わりをする前の自分のものにひどく似ていた。

すると突然視界が上に上がる。誰かに抱きかかえられたようだった。それが一体誰なのか、目を動かそうにも何故か動かない。

何故だという疑問が生まれる。きよろきよろと眼が動いていたが、ようやくその抱きかかえている人物の顔を映し出した。

「！！！」

飛鳥は息を呑んだ。そこにいたのは、飛鳥のことを抱きかかえていたのは、もう会えないと思っていた父親だった。あの日の父親よ

りも少しばかり若いように見えた。白衣姿で、研究室にいるときの格好だと飛鳥は理解した。

『こらこら飛鳥。ここは遊び場じゃないんだぞ』

『ごめんなさい』

飛鳥ではない飛鳥がそう言う。これは記憶・・・、もう飛鳥が遠い昔に忘れてしまっていた、過去の記憶だった。

どうしてこれが今になって蘇ったのだろうか。飛鳥には分からない。ゆっくりと体を下ろされ、また飛鳥は走りだす。

あまりはしやぎすぎるなど言われた。どんどん奥へと走っていく。ようやく行き止まりかと思ったそこには、鉄の扉が異様な雰囲気を醸し出し、佇んでいた。

『なんだろう・・・??』

子どもらしい、好奇心に溢れた疑問であった。手を伸ばし、ゆっくりとその扉を開いた。

『誰かな??』

『あ、ごめんなさい』

『何だ、飛鳥くんじゃないか。どうしたのかね。ここは君が繰るようなところじゃない。遊ぶものだってないはずだが??』

『なんだか気になって・・・』

そこにいたのは端正な顔立ち、やや長い黒髪を持つ男性であった。彼もまた白衣姿ということで、父親の助手か、それとも協力者なのだろうかと思った。

名前は・・・忘れた。

やや薄暗い部屋であり、埃っぽさが目に付く。辺りの机にはさまざまな機器が設置され、今もせわしなく稼動している。

それを見ても飛鳥にはちんぷんかんぷんであり、あまり手に触れないようにさせるためであろう。男性は飛鳥をそこから引き離すようにした。

『ここ、父さんたちの研究室だよね』

『ああ。私と君のお父さんの夢は、何時か人が、自力で宇宙にいけるようになることなのだよ。もちろん、そこで新しい生活の場を得られるようにもね』

そのの第一歩として、これが足がかりとなってくれればうれしいのだけどねと視線を一点に向ける。

『こ、これは・・・』

そこに佇んでいたのは鉄の巨人。小さな飛鳥からすれば、3メートルのそれはまさに巨人といっても差し支えなかったのだ。

そこにあったのはまだダークグレー一色のそれであるが、飛鳥が見まごうはすがない・・・それであった。

「ヴェ、ヴェステイージ・・・」

感慨深く、その機体の名前を言う。この時はまだ、名前も付けられていなかったのだ。

『か、かつこいい!!』

飛鳥がそう叫ぶ。もう遠い昔のことであるし、一言一言覚えていくわけでもない。だが、微かにそんな興奮があったのかもしれないという、胸に溢れるこの暖かさがあった。

すると後ろのドアの向こうから声が聞こえた。一人は父親の声だ。しかし、更にもう一つ女性の声も聞こえた。

『まあ、そういわないで一度見てくれないか??』

そこに現れたのは先ほどと同じく白衣姿の父親。そして、その後ろからぴよこんと飛び出ている何故かうサギ耳。

そして、その後ろから姿をあらわしたのは、一人のまだ年若い女性であった。薄紫色の長い髪をし、何故か某アリスの服とウサギ耳という特異な格好のまま現れたのだ。

『東さんはこんな玩具に付き合っているほど暇じゃないんだよ』
「!!」

そうだ……。飛鳥はまるで鈍器で殴られたような衝撃を受けた。ガンガンと頭が痛む。小さい頃の飛鳥は一体誰だろうという目で彼女を見て、成長した飛鳥はそんな彼女を……。篠ノ之束を……。父を、母を、妹の朱雀を殺した仇を睨みつけていた。

『早く白騎士の調整をしなきゃだめなんだからね。■■■ちゃんを待たせるわけにはいかないよ』

聞こえない、聞こえない……。何故聞こえなかったのだ。そう
必死に動くはずのない手を伸ばし、聞こえるはずのない声で叫ぶ。

そう、自分は……。飛鳥はこの時確かに会っていたのだ。

『ん?? 誰だい君は。君のような子に、束さんは興味はないよ』

まるでそこらに転がっているような石ころを見るような目で見られて
いる。こうやってあの時も、死に行く人たちを見ていたのかと思
うと更に憎悪が掻き立てられる。

殺してやる。そう叫ぼうとした瞬間、背中を何か暖かなもので包
まれたのを感じ、意識を落とした……。

PHASE 09 プロローグ? (後書き)

ED2↓REASON>玉置成実<

原作で言う第一巻の後半部分。今作品で言えば第二章に当たるものです。新しい原作キャラの登場。クラス代表としての初めての試合。オリジナルを組み込みつつ、主人公である飛鳥が活躍できればと思っています。

PHASE 10 訓練と祝い（前書き）

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

いよいよ第二章が始まります。

感想お待ちしております。

PHASE 10 訓練と祝い

飛鳥がクラス代表になった日の翌日。アリーナでは千冬による実技訓練が執り行われていた。一組の生徒たちは全員が集まり指導を受けている。

「それではこれから急上昇、急停止の実技を行ってもらおう。専用機持ちは前に。あと、紅月もだな」

ISの専用機をすでに持っている一夏とセシリアはもちろん。もはや専用機と遜色ない性能を見せているMS。そのために、飛鳥もこうして待機状態のブレスレットをして前に出ていた。

「何で俺達だけ??」

一夏が疑問の色を顔に見せながら言う。

「そりゃ、知識だけじゃ分からないことを、俺達専用機持ちが見せてやることで勉強するんだよ」

「飛鳥さんの言うとおりですわ。結局頭で分かっているも具体的イメージがなければなりませんし、逆に知識もなしの感覚でやってもいけませんわね」

「へへ」

理解しているようでしていない様子の一夏。そんな一夏の様子を無視して千冬が指示を出す。

「それではISを展開しろ」

そう指示されて飛鳥は右腕の赤いブレスレットを、一夏は何故か白いガントレットを、セシリアは青いイヤークアスを。それぞれ起動させるイメージを膨らませる。

二人に挟まれている一夏は何度も唸りながら起動させようとして
いるがなかなかうまくいかない。対して隣の二人は数秒もかからず
に展開できている。それを横目に更に焦る一夏に対して頭出席簿
が落ちてくる。

「遅い!!」

「す、すいません。でも、難しくて・・・」

「一流の操縦者だったら数秒もかからずに展開できる。考えるより
も慣れろ」

「はい・・・」

ようやく展開に成功したのか光に包まれ、ISスーツであった一
夏のからだに機械装甲が纏われていた。白い何者にも染まりそうで、
浄化する白い装甲。浄化の白い騎士の姿でそこに立っていた。

隣には青い装甲のブルーティアーズを展開したセシリアがいる。
そしてまた逆隣には灰色のヴェステイージを展開した全身装甲姿の
飛鳥がいた。顔までも全て覆われているために表情は分からない。

その機体からは騎士というよりも狂戦士と取ったほうがいいだろ
うか。更には背中のバックパックが以前とは違うものに成っていた。
それに気づいたセシリアが尋ねる。

「あら?? 飛鳥さん。そのスラスタ部分にあるものですが・・・」
「あ、本当だ。前とは違ってる」

セシリアの言葉に一夏も気づいたようでそう言ってくる。それはこの前のクラス代表決定戦の後、ヴェステイージの根幹を成すコアがどうやらISと同様に学習し、武器を生み出したらしい。らしいというのは未だIS同様に良く分かっていないMSであるために、断定はできないのだ。それにMSに関して詳しいものはおらず、その開発の中心だった父はすでに他界している。

「新しい武器・・・って言えばいいか??」

「なあ、そうでしょうね。スラスターが大きくなっているってことは、機動性が上がったのですの??」

「軽くシミュレーションでは到来の3倍以上。ISに加算すれば第三世代にも見劣りしない速さだった」

「そ、それってすごいこと??」

当然だとセシリアが代弁してくれた。その途中千冬の静かにしろという声が聞こえたためにこれ以上はやめたほうがいいと判断し。口を閉じる。

「それでは三人にはまず急上昇をしてもらう。いけ!!」

指で上をさす千冬。取りあえず上に上ろうということでもまずはセシリアがトップバッターで飛んでいく。さすがに手馴れているとうか、手本を見せる上ではやはり代表候補生はいい見本である。

スムーズに空に上昇していく。それをハイパーセンサーで見ていた飛鳥。すぐにVPS装甲を起動させる。灰色だった装甲に色が付く。まるで命を吹き込まれるかのようにして、眠っていた狂戦士がそこに立つ。

「え??? 色が変わった」

「すごいね、一体どういう構造してるんだろう??」

「見た目はちょっと怖い雰囲気だけどね」

後ろで見学をして言う女子生徒たちはそのヴェステイージの変化を見てそれぞれの意見を言う。

“VPS装甲”

飛鳥にもどうやって父がこれを生み出したのかは分からないが、機体の装甲に対して電流を流し、実体の武器による攻撃を無力化できるという、まだビーム兵器などに遅れのあるISにとってはかなりの天敵である。

膝を軽く曲げ、呼び動作を加えながらスラスターを全開にし、飛び上がる。

「!!」

予想以上の速さであった。もともとぎりぎりまで機体の軽量化が図られていたヴェステイージであるが、この新バックパックのスラスターの数が増えたことと対艦刀とビームサーベルを一本排除しているためかなりの速さになっていた。

それは先に前を飛んでいたセシリアも同じだった。あっという間に追いついたその速さに目を見開いているのが見える。

「お、お速いのですね・・・」

「ああ、これなら機動性の高いISにだって対応できる」

飛鳥は確かな新しい力を感じていた。すると下のほうから声が聞

こえてきた。すでにぎりぎりまで上空に飛んでいた二人であるが、一体なんだろうと視線を向ける。そこには白式を展開し、よろよろと専用機持ちとしては情けない姿で上ってくる一夏の姿があった。

「ま、待ってくれ」

「な・・・」

「一夏さん・・・」

よろよると上ってくる一夏。以前の試合で見たような動きは影を潜め、まるであれは火事場の馬鹿力からともいえるようなものに感じられる。おそらく何も意識せず、ただ任せるようにして動いていたのだろう。当然意識してやろうとしてもできるはずもない。

>遅い！！スペック上ではヴェステイージュやブルーティアーズよりも上だぞ！！<

下からインカム越しに千冬の叫ぶ声が聞こえてくる。一夏はそういわれても素人にいきなりやれと言うのは刻だと反論したかったが、さすがにそういえば黙れと一蹴されるだけだと、自身の姉の理不尽さを考えるとそれはやめざるを得なかった。

「とは言われても・・・」

いくら最新悦の専用機だからと言って、乗り手がこうも初心者であればその力は半分も発揮されない。この前の試合でだって、全く機体の性能や特殊能力を把握せずに戦ったために、最悪の機体損傷という形で惨敗してしまったのだ。はつきり言ってしまうえば今の一夏にとって白式というのは宝の持ち腐れなのだった。

「確かイメージは、ぐっと力を入れて、ドカーンってそれを爆発さ

せるようにする・・・だったかな」

「な・・・、なんだよそれ」

一夏がようやく追いついてから、なにやらぶつぶつ言っているのが聞こえ、それを聞いた飛鳥は思わず聞き返してしまった。とんでもない抽象的で擬音語が多いイメージの仕方であったためにそう疑問に思った。

「ああ、これか??」

どうやら一夏は昨日の内にすぐに修復が完了して戻ってきた白式を使って訓練を下らしい。そのとき一緒にいた幼馴染の篠ノ之箒が教えてくれたらしいのがそれである。はっきり言って、何を言いたいのかまったく分からない。取りあえず言えることは、彼女にはものを教えるスキルはないということだ・・・。

「一夏さん?? イメージは所詮イメージですわ。自分に合う方法を模索することが最も建設的かと」

「そうだな。というか、最初に乗ったとき、それをイメージしたのかよ」

「いや・・・。特に何も」

その様子だと、おそらく感覚で、取りあえずこうかもしれないというあやふやな状態で飛んでいたのだろう。確かにISの機能がある程度は制御してくれるが、基本はその操縦者にかかっている。セシリアの言うとおり、自分なりの方法を見つけていくしかないだろう。

「ていうか、これなんで浮いてるんだ?? さっぱり分からないぞ?」

などといっている一夏であるが。そんなことを逐一説明していると時間がいくらあっても足りないくらいである。

セシリアはイギリスで代表候補生として、ずっと訓練していたために自分なりのイメージを浮かべる事が出来るのであるが、一夏は今までISに触れたこともないのだからイメージがまだ掴めていないのも無理は無いのだ。

「どうやって浮いてるか説明よろしいですけど、長くなりますわよ?? 反重力力翼と流動波干涉の話とか・・・」

「いや、やっぱり説明はいい」

一夏は聞きなれない単語を聞いただけで意味不明なのだ、さらに詳しくされたら更に混乱してしまい、イメージどころではない。

「一夏!!! いつまでそんな所にいる!!! 早く降りて来い!!!」

「なんだ??? あいつ・・・」

飛鳥は突然インカムによる大きな声が響いてきたのに対して顔をしかめながら言う。

「箒だ・・・何してるんだ??? あいつ・・・」

一夏は突然箒の声が聞こえたのでハイパーセンサーで地上を見れば、真耶からインカムを奪い取って一夏を睨んでいる箒の姿が見えた。ただ、すぐに千冬に頭を叩かれてインカムを真耶に返していたが・・・。

「でも、すげえなISって・・・こんなに離れてるのに箒の睫毛ま

でくつきり見える」

「いや、それは当たり前だろ・・・」

ISはもともと宇宙空間での活動を想定して作られたものである、当然宇宙空間では何万キロも離れた星の位置でその居場所を確認しなければいけないということだ。つまりはハイパーセンサーからすればコレくらいの距離、どうということではないのだ。

というか一体なにを見ているんだとあきれながら一夏のことを横目で見る飛鳥。すると私語が長かったためか千冬が出席簿で叩き、奪い取ったインカム越しに叫んで指示を出す。

「紅月、織斑、オルコット、いつまで私語をしているつもりだ!!」
次は急降下と完全停止だ! 目標は地表から10cm」

千冬からの指示が来た。

次の指示が来て3人は「はい」と返事をする。最初にセシリアが自ら最初に行くといって地上へと向かっていく。

「それでは飛鳥さん、一夏さん。お先に失礼しますわ」

真っ直ぐな軌跡を描いて地上へと向かい、ぴたりと10センチの所で完全停止をして見せた。

「すごい」

「さすがセシリアさん」

「やっぱり代表候補生だからね。慣れてるよ」

「いえいえ、これくらいは当然のことですわ」

クラスメイトたちに褒められ、まんざらでもなさそうなセシリアがハイパーセンサーで見えた。入学当初こそあの高飛車な言動で少し距離をとられつつあった彼女であるが、あの一戦の後、自分や一夏に対して謝罪し、少々貴族出の所があるが、いたって普通の女子生徒として振舞っていた。

それを見ていた他の生徒たちも、セシリアに対しての見方を変えて、普通に接する事ができるようになっていた。まだまだ、以前のような態度で接してくる人も少なくはないが、一組に関してはそう言う人はいなくなっていた。

「なら、先に行くぞ」

「あ、ああ。分かった」

飛鳥は一度一夏に視線を向け、断りを入れる。スラストスターを前回にし、トップスピードにて地上へと真っ直ぐと降下を始める。ものすごい速さで地面との距離が縮まる。

以前のバックパックもまた機動性を高めるものであったが、スラストスターの数や、武装を最低限のものを装備させたこともあってかさらに早くなっていた。体にかかるGもまた大きくなっているが、これは慣れていくしかないと思った。

そしていよいよというところで。

———今だ!!

すぐさま急停止に入る動作を行い、セシリア同様に10センチの所でぴたりと止まることができた。それを見て、クラスメイトたちは同様に褒める言葉をかけてくれた。

「すごい」

「飛鳥くんってもしかして操縦慣れてるの??」

「私にも教えてー」

「え／＼あ、いや／＼」

女子生徒にたかられて思わず赤面する飛鳥。普通の学校であればまだ大丈夫だっただろう。しかし、ここIS学園は普通の学校ではない。ISを使う際に着るのははっきり言ってからだのラインが丸分かりのISスーツというものであり、男子である二人はお互いのものを見ても何も感じないが、女子のそれを見ればはっきり言って反応してしまうのは仕方のないことである。

思わずたじろいでしまう。更には顔が熱くなるのが感じられ、恥ずかしくてしようがなかった。

その頃、一夏は先日に行った、箒との訓練のことを思い出していた。

「ええっと・・・、確か急降下と急停止のときは・・・」

『いいか一夏。急降下と急停止のときは、まず“ギューン”と降りてだな、止まるときにこう・・・“クイツ”という感じに止まればうまくいくぞ』

『うう・・・ん、なんだか良く分からないがやってみるか』

『よし、やれ』

『よし、いくぞ。まずは急降下の時には“ギューン”という感じで・・・』

『よしそのままいけ、一夏』

そのことを思い出し、まずは急降下のときの感じ”ギューン”というようにして白式のスラスタをふかして降りる。白式の速さは他

よりも抜きん出たものがあるためにアツという間に地上が見えてきた。

『そこまではいい、後は“クイツ”という感じで止まればいい』
『な、なるほど……。 “クイツ”という感じだな。うおおおおお！――』

『おい、箒……。その“クイツ”という感じ……』

「わからねええええええ！」」

「馬鹿者・・・グラウンドに穴を開けてどうする！！誰が地面に激突しろと言った？？」

とはなかったので大事には至らなかったようだ。何処か落ち込んでいる様に見えるのは気の所為ではないだろう。

「何してるんだ?? あいつ」

「さ、さあ・・・、まさか一夏さんは自殺願望者じゃないとは思いますが・・・」

飛鳥とセシリアは揃って頭をつっこんでいる一夏を見て言う。大丈夫だろうかと近くによる。どうやら目立った怪我はないようである。絶対防御のおかげで首も無事であるが、あんな高度から落ちたらISやMSでなかったら普通に即死である。

「大丈夫なのかよ??」

「あ、ああ。悪い。大丈夫だ」

飛鳥が手を差し出し、それに捕まって立ち上がる一夏。ISスーツについたほこりを落とす。

「本当に大丈夫なのですか、一夏さん?? 保健室に一応行ったほうがよろしいのでは??」

「それは必要ない」

セシリアが一夏に対してそう言っていると、後ろから突然それを遮るようにして声が聞こえてきた。その声のしたほうを向くと、そこには腕を組んで一夏のことをにらんでいる箒の姿があった。

「一夏、あれだけ言ったのにどうしてそれができない」

「そ、それはだな箒・・・」

取りあえず一長一短でできるように簡単にはISというのはでき

ていない。とはいえ起動数秒の一夏があの時普通に戦闘できていたのだから、飛べてもおかしくはないのであるが……。

「ちょっと篠ノ之さん??その話しはまた後でもできますでしょ?」

「オルコット……」

一夏のことをにらんでいると、その二人の間に入ってきたセシリアが言う。割って入ったのは一応一夏のことを保健室に連れて行ったほうがいいのではないかということだった。

先ほど箒がいらなかったが、さすがにあの高さから落ちたのだ、いくら絶対防御が発動したからといって、衝撃を全て受け止められるとは限らないのだ。

「そうだな、一夏を一旦保健室に連れて行ったほうがいい。何かあったら、大変だからな」

飛鳥もそれに同意する。親友というわけではないが、数少ない男であり、クラスメイトである。何かあったら大変だということで、そう進言する。

「必要ない」

再びそう切り捨てる箒の言葉。それを聞いて飛鳥とセシリアはあきれたような若干怒りを込めた視線を箒に向けていた。箒はそれをまったく意に返していない様子である。

「それはどういう意味だよ、篠ノ之」

「ISには絶対防御がある。それくらいでは怪我はしない。だから

必要ないといっているのだ」

それくらいは知っているだろうというような視線を二人にぶつけてくる。幼馴染とは思えない言葉である。

「勉強不足なのは篠ノ之さん。あなたではなくて??」

「なんだと??」

セシリアがフンと小さく笑い、箒に言う。

「ISの絶対防御は確かに優秀ですわ。ですが、何も完璧というわけではないでしょう??」

「お前こそ何も分かっている。一夏はこれくらいではなんともない」

「あなたは一夏さんではないでしょう??」

「黙れ猫かぶりが。そうやって優しく近づけば一夏が振り向くとも思っているのか??」

「関係ありませんわ。わたくしはただ一人のクラスメイトとして接しているだけです」

「ふん、なら言うておく。私は一夏の幼馴染だ。だから一夏のことなら何でも知っている。その私が言うんだ、一夏はなんともない」

「はぁ・・・。さあ、篠ノ之さんは無視して保健室にいきましょう一夏さん。わたくしじゃなくても、保健委員の方に頼んだほうがいいでしょうか??」

「だから必要ないといっているだろう!! 関係の無いものは引っ込んでいてもらいたい」

そう叫んでいる箒とあくまでスタイルを変えずにいるセシリアの会話を無視して、飛鳥はそんな様子を遠目で見ている千冬と慌てている様子の真耶のもとへと向かう。見ているくらいなら早く止める

よと、内心想っていた。

「あいつら何とかしたほうがいいんじゃないか??」

親指で一触即発状態の二人を指差す飛鳥。真耶もそうですよと言っているが、あんたも教師だと飛鳥は内心あきれていた。小さく嘆息し、仕方ないと呟いた千冬はそんな二人の元へと歩み寄る。

「いつまで喋っているんだ馬鹿者どもめ。今は授業中だということを忘れたか」

「「痛ったー!!」」

相変わらずの容赦のない出席簿による攻撃が二人の頭に直撃した。かなり大きな音が響き、二人は叩かれた部分を抱えて膝をつき、悶絶している。千冬はあきれたように二人を見下ろし、それから一夏へと視線を移す。

「織斑、何もないとは思うが・・・、一応保健室で見てもらって来い」

「あ、はい」

「それと一つ言い忘れていたことがある・・・」
「??」

一夏が身を翻し、保健室へと学校のほうに戻ろうとしたところで、地冬が何かを思い出したかのように一夏のことを引きとめる。一体なんだろうかと疑問を表情に表しながら聞く。

「特に異常がなかったら、このグラウンドに開いた穴を埋めておくように。分かったな??」

「な・・・、はい」

そこには一夏の等身大の跡がくっきりと残っていた。なんとも情けないものをグラウンドに残しておくわけにも行くまい。後々使うもの太刀に対しても、邪魔になろうということで、処理しておくようにといわれ、がっくりと肩を落とすのだった。

一夏が保健委員に付き添われて保健室へと向かった後、授業はいつもどおり進められた。再び専用機持ちであるセシリアとMSを持つ飛鳥が前に呼び出されていた。すでに二人はそれぞれを起動させている。セシリアは武装は何も持っていないが、大して飛鳥はすでに武器を展開させている。というよりも最初から全てが装備された状態になるのだ。

「では紅月とオルコットの二人とも武装を展開しろ」

そう千冬が飛鳥とセシリアの二人に指示をする。二人はそれに従ってそれぞれビームライフルとスターライトMK3を武装する。

セシリアは粒子変換をして自身の右手にライフルを出現させる。さすがに代表候補生というわけあって早いものである。飛鳥はすばやく腰にマウントされているライフルを手に取り構える。

「オルコットは流石に代表候補生といったところか」

千冬に褒められたからか、いつもの気品のある態度ではなく、普通の年頃の少女のようにうれしそうな表情になるセシリア。

「ただし」

セシリアが千冬に褒められて礼を言おうとしたのだが、その言葉は

途中で遮られてしまった。

「そのポーズはやめろ。真横に銃身を展開して誰を撃つ気だ??」

千冬がそう指摘するように、セシリアが展開していたスターライトMK3は正面ではなく、まったく誰がそこにいるかも分からない横に展開されていたのだ。それが戦場であつたなら、正面に展開されずに早撃ちができずに殺されることだったある。

「で・・・ですがこれは私のイメージを纏める為に必要な・・・」

などとにかくように展開する理由を述べているが、千冬相手にはそれは言い訳にしかならず、すぐさま直すように念押しされると、さすがのセシリアでも彼女には逆らえないのか承諾するしかない。

「紅月は状況に応じてすばやく武装を展開できるようにしろ」

「分かってますよ」

「返事は“はい”だ」

「・・・はい」

こうして授業は進んでいくのだった。

それから数時間後。

「というわけでっ！紅月くんクラス代表決定おめでとう!!」

「「おめでと〜!!」」

「あ、ああ。ありがとう」

次々とクラッカーが乱射され、中の紐などが飛鳥の頭上に降りそそぐ。今は夕食後の自由時間で、場所は寮の食堂。一組のメンバー

は全員そろっていた。各自飲み物を片手にやいのやいのと盛り上がっていた。

壁にはデカデカと『紅月飛鳥クラス代表就任パーティー』と書かれた紙がかけてあった。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

そういつている女子生徒たちがいるのであるが、彼女たちは二組である。それに明らかに数が合わない。クラスにいるメンバー以外にもいるために三十人以上は埋まっているように見えた。

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、紅月飛鳥くんに特別インタビューをしに来ました!!」

突然の新聞部の登場に彼女たちのテンションも更に上がる。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

そう言われて彼女から手渡された名刺を受け取る。

「ではでは、まずはずばり紅月くん!!」

「え??? な、なんだよ」

「クラス代表になった感想を、どうぞ!!」

飛鳥は突然質問されて戸惑っている。周りを見ても期待の視線を

一心に向けている女子生徒たちと、目の前にはボイスレコーダーから延びているマイクを飛鳥に向けている二年生の黛薫子がいる。

「えーと・・・、いきなりそう言われてもな。まあ、なんというか、がんばるっていうしかないのか」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ。『俺に触れるとヤケドするぜ』とか『俺の女に勝利を捧げる』とか!!」

「そ、そんな恥ずかしい台詞言えるかよ!! ていうかなんだよ二つ目の台詞!!」

「あれ?? 楯無ちゃんから聞いたけど、同室に住んでいるのが・・・」

「なあ! ? 言うなよ／／／」

「お?? 食いついてきたね。どんな関係なの?? 恋人関係??」

「な、何言ってるんだよ。そんなわけ、ない／／／」

薫子が言う言葉に思わず赤面してたじろぐ飛鳥。その反応が面白かったのか、色々といじってくる。されるほうとしては色々と恥ずかしいのであるが・・・。やはりこの手のネタには興味がある女子生徒たち。色々とあることが飛び交っていた。

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

「やめろよ。へんなこと言いふらされたら、あいつらだって困るだろ」

「ふーん?? あいつらって??」

「な、それを聞くのかよ」

そんなこととして新聞部、大丈夫なのかと内心で突っ込みを入れる。今でさえ普通の一般の高校生とは違う学校生活を過ごしているというのに、更に慌しいものになったりしたらこっちの身が持たないというものだ。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

などといっている彼女であるが、目に見えてようやく来たかと待ちに待ったとやる気満々に見える。

「コホン。ではまず・・・」

なにやら長くなりそうだと思った。そう感じたのは何も飛鳥だけではなかったようだ。

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだいな」

薫子もまた、付き合ってられないといわんばかりにすばやくセシリアの取材をやめる。それで新聞部が勤まるのかと内心でつつこんでいたが・・・。

「さ、最後まで聞きなさい！！」

当然のようにセシリアは反論する。

「はいはい、とりあえず三人並んでね。写真撮るから」

「あなた聞いてますの!？」

セシリアはその言葉に意外そうな声をあげていたが、声色には喜びが含まれていた。どうやら薫子は専用機持ちが2人と謎の機体を持つ飛鳥という注目の三人であるからそうしたかったらしい。せわしなく動く彼女に飛鳥も無理やり立ち上がらせられ、三人が並ぶ。

飛鳥と一夏の間、頭に一つ二つ小さいセシリアが入るという構図であった。二人の男に挟まれていることから、セシリアの顔は真っ赤であった。

「大丈夫か、セシリア??」

「べ、別に、何でもありませんわ」
「??」

この二人、程度は違えど、鈍感である。そのためにセシリアの今の気持ちを察することができると、感覚が鋭いわけではないのだ。飛鳥はそれ以外の感覚は鋭いのであるが……。

「……」

「どうしたんだよ、箒??」

「何でもない」

一夏がどういうわけか、かなり機嫌の悪い箒にどうしたのかと尋ねるが、箒はブスツとした表情でなんでもないという。一夏はしぶしぶ納得して、彼女から視線を外す。

「それじゃ撮るよー。35×51÷24は??」

「え??? えっと……2、かな??」

一夏がそう計算の答えを言おうと。

「違う、74・375だ」

「飛鳥くん、正解」

薫子が持っていたデジカメのシャッターが下りる。

周りを盛ると一組と来ていた二組の女子生徒全員が無理無理三人の中に入り込んでいた。

「なんで全員入ってるんだ?？」

ちなみに、箒は一夏の隣にいる。恋する乙女の行動力はすごい。いつもそうやっていればいいのだが、素直になれない幼馴染と、それにまったく気づこうともしない朴念仁である。

「あ、あなたたちねえ!!」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないしょ」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「「ねー」」

「く、うぐぐ・・・」

セシリアはクラスメイトに対して文句を言っているが、彼女たちから丸め込まれて、二の口が告げなくなっていた。何はともあれ、飛鳥の代表就任を祝うパーティーは夜遅くまで続いたのだった。

クラス代表就任パーティーが終わり、一夏と箒は部屋に戻ってきていた。一夏はというと部屋に戻ってくるとすぐにベッドにダイブして、大の字になって疲れたと愚痴をこぼしていた。

するとそこに箒がやってきた。

「今日は楽しかっただろう。良かったな」

どうしたわけか、どこことなく不機嫌そうな表情である。

「どこがだよ……。まったく、疲れただけで楽しいもんか」

一夏はその疑問を彼方へと投げ捨てると、端的に先ほどのパーティーの感想を漏らしていた。さすがに異性ばかりの所では気疲れする。楽しめるのも楽しめず、むしろ主催した彼女たちが盛り上がっていたと思う。

「だったら、お前が逆の立場だったら楽しかったといえるのかよ」

一夏は冷やかすように箒にそういうが、意外にも箒は楽しいかもしれないといってきた。一夏はその答えを聞いて意外そうな表情を浮かべるが、どうして箒がそうも怒っているのかわからなかった。

しかし、一夏に考える時間を与えんと、突然の睡魔が襲い掛かってきて、一夏は箒との会話を適当に切り上げると、ぼたりと再びベツトへとからだを預けるようにして眠りにつこうとした。

しかし、突然箒から枕を投げつけられ、再び現実世界に意識を覚醒させられる。一夏は怒り心頭に枕を掴みながら起き上がると箒に叫ぶように言う。

「何しやがる!!」

「それはこちらのセリフだ!! 今から寝間着に着替えるんだから、さっさと向こうを向いていろ!!」

「……。あのな、箒。そういうのはお互いが部屋にいないときにさっさと済ませておけよ」

などと正論を口にする一夏に対して、有無を言わせぬにらみを向けてくる箒。まったくもって理不尽であると思う一夏。仕方なく箒

に対して背を向ける形で寝転がると、箒はそれを確認して着替えを始めるのだった。

それからして……。

「い……いいぞ」

「うん?? ああ……」

ようやく箒の着替えが終わったらしい。ゆっくりと元の向きに向き直った位置かであるが。箒の姿を見てすぐにあることに気づいていた。それは箒が着ている寝巻きの腰の帯が変わっていることであつた。

「あれ?? 帯が新しいやつだな」

「!!」

一夏が意外にもそれに気づいたことに対して、箒は意外そうな、驚いた表情を向けていた。しかし、すぐに良く見ているなとややうれしそうな笑みを浮かべていた。

「いや……なんだろう、色も模様も違うから、普通気づくだろう。だって、箒のこと、毎日見ているんだからな」

そう一夏が言うと箒は顔を真っ赤にした。

「そ、そうか。いつも見ているか……、そうか、そうか」

箒はうれしそうに呟いていた。それからお互いに横になり、眠りにつくのだった……。

「つ、疲れた・・・」

どさっと言う音とともに、私服のラフな格好の状態の飛鳥がベツドに大の字でうつぶせに倒れる。はつきり言ってもものすごく疲れた。今回のパーティーの主役である自分よりも、周りの女子生徒たちのほうがはしゃいでいるように思えた。

更に1組だけではなく他のクラスからも生徒が来ていた。多分知り合いや友達を彼女たちが誘っていたのだろう。どう見ても一組だけの人数ではなかったからだ。

ごろりと体の向きを変え、天井を見上げる。まだ戻ってきていない簪と本音。簪のほうはぎりぎりまで整備室に入ってISの製作に励んでいるのだろう。本音のほうは多分友達とまだ喋っているのかもしれない。そろそろ消灯の時間なので戻ってくると思うのであるが。

クラス代表戦も近い。簪も4組のクラス代表になったらいいが、彼女は全く興味もないらしい。専用機持ちであり、日本の代表候補生だからだというが、その専用機はいまだ未完成のままである。彼女のプライドから考えると、クラス代表はおそらく、すでに代役としての副代表が参加することになるだろう。

彼女が未完成のまままで出場するとは思えない。本音のほうも専属の使用人だということで手伝おうとしているようであるが、その度に一人でやると言われるらしい。

彼女の姉である楯無もそれについては心配しているようであるが、彼女自身も簪が自分に対してどういう感情を向けているかを知って

いるために迂闊に声をかけることもできない。

姉としては寂しいと以前飛び込んできたときがあったが、そういうわれても彼女の性格というのか、自身に抱えているコンプレックスをどうにかしなければいけない。

しかし、そう簡単に何とかなるようなものではない。それだけ大きいものである。意固地になっている簪であるが、それでも彼女なりにけじめをつけようとしているようだ。

本音の助力を借りずに、自分一人で専用機を作り上げる。それができれば自分が抱えるコンプレックスというものが軽くなるのではないか、それ以上に、もう更識楯無の妹ではなく一人の更識簪として認められるのではないか・・・。

そう思っているのだろう。下手な言葉は彼女を更に傷つける。何とかしてあげたいという幼馴染としての気持ちはある。だが、不器用な自分で何がいったいできるのだろうか・・・。

「弱いな・・・俺」

守ってみせる。小さい頃から一緒にいた彼女たち。最初は大きな屋敷だということ了近寄りがたかった。自分からそこに以降という気も起きなかったのだから。しかし、ふとあるきっかけで遊ぶことにあり、仲良くなったのだ。それから一緒にいることが当たり前になり、いつも一緒に遊び、ご飯を食べ・・・。

「ふ、風呂・・・／＼／＼ああ！！何を思い出してるんだ！！」

ぼんやりと昔のことを思い出していた飛鳥の脳裏にいかがわしい

ビジョンが映った。慌ててその煩悩をかき消して忘れようとする。だが、顔は当然のように赤くなっている。小さい頃だからこそ平気であるが、今は普通に彼女たちも一人の女性。それと比べて年相応かそれ以上なのだろうか。それぞれが独自の雰囲気を出しているために考えただけでも・・・。

「や、やめだ！！お、俺は一体何を考えて・・・」

「るのゝ??」

「わひゃあ!？」

「おゝ」

突然肩越しからにゅっと飛び出してきたピ○チュウ・・・ではなく、キツネの着ぐるみ姿の本音。一体いつの間に帰ってきたのかと、彼女の神出鬼没な行動に驚きを隠せない。

瞬時加速以上の速さでベッド上の彼女から離れる。まだ心臓の鼓動が早い。これは恥ずかしさと驚きの二重攻撃からであった。まだ激しい鼓動をしている胸に手を当てたまま、啞然として本音のことを見ている。

「ねえねえ・・・」

「な、なんだよ・・・」

ニコニコ笑っているようで何かを詮索しているような表情の本音。思わず後ずさりをしてしまう。ぶかぶかのその黄色の袖の部分を口元に以って行き、くすくすと笑う。

「な、なんだよ」

「んゝん、何でもないよゝ」

そういわれると余計に気になる。いきなり現れておいて、一人だけ何かを悟ったというか、分かったような表情で気になるように笑われるとそうなるのも仕方ないだろう。

くるりと背を向けてしまう。ゆっくりと近づき、背中越しに声をかける。だが、すぐに立ち上がってところどころと笑いながら自分のベッドに寝そべってしまう。全く話しの相手になってくれそうにもない。

「はあ、もういい……。今日は疲れた」

「私は楽しかったよ」

「それには答えるのかよ」

「お菓子もたくさん食べれたしね」

「は、話を逸らすな!!」

おそらくわざと話を逸らしているのだろう。とはいえこれ以上何かを言ってもそののほほんとした彼女に話を逸らされるだけなのだろうと思い、布団に転がる。背中に時節視線を感じるがすぐに無くなる。

おそらく後ろでころころと転がっているのだろう。そんな彼女を無視して、今度は近々行われるクラス対抗戦について考えていた。クラス代表となったため、飛鳥が出場することになっていた。

まだ詳しいことは聞いていないが、直前になるまでは試合形式は分からないらしい。一対一タイマンになるのか、それとも二対二タッグマッチになるのか・
・。

ごろりと天井を見つめる。ゆっくりと伸ばす手に付けられているブレスレットがきらりと光ったように見えた。今日の訓練時のよう

に新しい機能が装備されていた。

“ シルエット換装システム ”

おそらくI SのコアのようにM Sのコアも戦闘データから色々なことを学び、成長しているようだ。その証拠に新しいシステムが装備されていた。それは白式とブルーティアーズのそれぞれの武装や姿、戦闘パターンなどを急速に学習し、新しい武器を作り出していたのだ。

守りたい……。あの時の光景をもう二度と見たくないから。自分の大切な人たちが、親しい人たちが死んでいくのを見たくないから。だから、力を求める……。

「俺は……」

強くなれたのだろうか。それともまだ弱いのだろうか。あくなき向上心とともに、けして忘れぬ憤怒の感情を胸に、飛鳥はゆつくりと眼を閉じるのだった。耳に聞こえてきたお休みというのは空耳だったのだろうか……。

PHASE 10 訓練と祝い（後書き）

ED2↓REASON＞玉置成実＜

次回予告

新たな場所、新たな環境。

そんな彼らの元に、海を越えて転校生がやってくる。

突然現れた彼女に対してさまざまな感情が交錯する。

そして、決定するクラス代表戦の試合形式。

戦いの舞台を目前に傷ついた戦士の胸にあるのは一体……。

次回インフィニット・ストラトス〜怒れる瞳〜『龍の襲来』

＊なんとなくやってみたくなりました。

PHASE 1 龍の襲来（前書き）

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

たくさんの閲覧とご感想どうもありがとうございます。

PHASE 11 龍の襲来

何とか反省文を完成させた翌日。思い山積みのそれを何とか職員室まで持っていった飛鳥。時間ぎりぎりになって1年1組の教室へと入っていく。クラスに向かうと、中でなにやらクラスメイトたちが騒いでいる声が聞こえていた。一体どうしたのだろうかと思いつつも、とりあえず中に入り、すぐ見つけたセシリア・オルコットに尋ねることにした。

「おはよう。なあ、この騒ぎは一体どうしたんだ??」

「あら、おはようございますわ、飛鳥さん。何でも中国出身の代表候補生が転校してくるらしいですわ」

「転校生??」

セシリアからそう聞いて、飛鳥は首を捻る。こんな時期に転校生とは一体どういうことだろうか。IS学園の転入条件というのはかなり厳しいと聞き、更に試験自体も国の推薦がなければ受ける事ができないというものであった。

「取りあえず私の存在を危ぶんでの転入かもしれませんね」

そう言いながらも、いつものように優雅なポーズを取るセシリアは、自信満々である。

「このクラスに、必ずしも転入してくるわけではないのだろうか??」

セシリアに対して突っ込みのように箒が言う。後ろから一夏とともに教室にやってきていた。どうやら二人もそれについては詳しく知らないようだ。

「どんな奴なんだろうな??」

一夏が気にするような発言をする。やはり気になるのだろうか。だが、そんな彼の発言に対して反応するものがある。

「一夏!! 今のお前に他の女子を気にする余裕はないぞ!! 来月にはクラス対抗戦があるのだから!!」

「箒さんの言うとおりですわ、一夏さん。対抗戦に向けてより実践的な訓練をしましょう。相手は専用機持ちの私がいつでも務めさせて頂きますわ」

「え?? 対抗戦?? 俺関係ないか??」

一夏が言うように、対抗戦はクラス代表がするためにその代表ではない一夏がそういわれるのはお門違いなはずなのである。しかし、そう言う彼に対して突きつけられる紙。

「クラス・・・代表対抗戦・・・変更知らせ??」

一夏は首を捻るようにしてそれを見る。そこに書かれていることを呟いている。飛鳥も今日の朝はそのような掲示板を見る余裕がなかったために、一夏同様にどういう意味なのだと思っていた。

その紙を見ると、当初の予定とはまた違う形式になっていた。タイム一対一形式から二対二形式へと変更が成されていたのだ。これの意味は一体なんだろうかと思う。

はつきりいつて数週間は経っているが、そこまで綿密な連携が取れるとは思えない、更に本番は来週である。今からどうこうなるものであろうか。とはいえ泣き言は言ってられないのも事実である。

クラスメイトからも代表戦には勝って貰わないと困ると言われ出したのだった。

とは言うものの、彼女たちは純粋な気持ちで飛鳥のことを応援しているわけではなく、優勝することで手に入るとあるもののためであった。

「優勝商品は学食デザート半年フリーパス券だからね!!」

「それもクラス全員分の!!」

「飛鳥くんが勝つとクラスみんなが幸せだよ!!」

などとそれぞれ本音が駄々漏れであった。飛鳥はそんな彼女たちを横目で見ながら責任重大だと思って大きくため息をついた。

そんな同じく紙を見ている一夏は何故自分が出場するような雰囲気になっているのかと疑問を感じていた。

「な、なあ……。この雰囲気だと、俺も出場するってことなのか??」

周りからは当然だというような視線が飛んでくる。戸惑っている一夏に対して、セシリアが言う。

「それはわたくしが辞退したからですわ」

「え?? セシリアだったら、実力的に妥当だと思うんだが……」

一夏がそう言うが……。

「セシリアわかってる!!」

「だよね!! 折角の男子がいるんだもん持ち上げないとね!!」

「私たちは貴重な経験を積める！！他のクラスの子に情報が売れる！！一粒で二度美味しいね！！」

クラスの女子生徒たちは口々にそんなことをいつていた。対する一夏はというと、クラスメイトを売るなど内心で叫んでいた。

「そんな無責任なこというなよ。ただでさえ俺はまだ基本操縦でつまづいているんだぞ。そんな簡単に優勝だなんて・・・」

できるわけがないと、一夏にしては、というよりも、この状況状態で当然の言葉であった。

「大丈夫。確か専用機持ちがいるのは1組と4組だけだから楽勝だよ」

そう誰かが言ったそのときだった。勢い良く教室の扉が空けられると、そこにいたのは、やや身長の高い、ツインテールの髪型をした少女であった。

「その情報・・・古いよ」

少女の名前は鳳鈴音^{ファン・リンイン}。彼女はとある人物に対して宣戦布告を含めた挨拶をするためにここ一年一組へと足を運んでいたのだ。そして専用機持ちが2人もいるし、それに専用機を持っている生徒がいるのはこのこと四組だけだから楽勝だという言葉聞いて、異議を唱えるようにしていつてやったのあった。

「え・・・」

「誰だ??」

鈴がそういうと一夏は彼女を見つめて驚愕の表情に染まっていた、飛鳥に関しては誰だという疑問を呈した表情で彼女を見ていた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。だから、そう簡単には勝てないよ」

「お前・・・」

クラスが一体誰だというようにざわついているさなか、一夏は目の前の少女が一体誰なのかを知っているような口でいう。

「鈴・・・お前、鈴か??」

一夏の鈴を知っているというその言葉を聞いて、一夏のそばにいた二人の女子生徒、箒は鈴を目の敵にするようにしてにらみつけてきた。しかし、鈴はそんな視線を無視して言葉を続ける。

「そうよ。中国代表候補生 鳳鈴音、久しぶりね・・・一夏」

鈴は幼馴染である一夏に挨拶をしたのだった。

「何を言っているんだ、鈴。その格好、お前には全然に合わないから、やめておいたほうがいいぞ」

しかし、対する一夏の口から出た言葉はそんな鈴に対する似合わない問いう言葉であった。確かに小さな少女がやってもさまになるような格好ではない。

「んな!?!なんてこというのよ!一夏!?!」

そんなことを言われた鈴はというと、彼女のトレードマークなだろう、ツインテールを揺らしながら激しく一夏に対して抗議してくる。

あ、こいつ終わったな。

ふと飛鳥が鈴の後ろを見たら、そう思わせる権化が仁王立ちしているのが見えた。案の定、千冬が話しかけると、鈴は一夏に対する怒りからか、年上に対する言葉遣いとは到底思えない口調で言う。

「おい・・・」

「何よ！！今いそが・・・しいのよ・・・」

最後はしぼんでいくように言う。彼女の目の前にはここの担任である織斑千冬の姿があった。

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生だ！！さっさと自分のクラスにもどれ、馬鹿者」

「は、はい。あ、一夏、後で覚えておきなさいよ！！」

「さっさと戻れ！！」

「す、すいません」

帰り際に一夏に向かって言葉を向けるが千冬の一喝で脱兎のごとく一組を後に行行った。飛鳥は先ほどの一夏と鈴という少女の会話から、二人の関係は意外と親密であることが分かった。しかし、対する筈はというと、そんな相変わらぬ一夏に対して、苛立ちの視線を向けていた。

授業中、一夏に好意を向けている筈は気になるという視線を一夏に向けていたために、真耶から注意されたり、千冬から出席簿アタ

ツクを受けるなどそれを繰り返していることから、かなり気になっているのだろう。それにしても学習しない奴だと呆れていた。

「お前のせいだ!!」

「なんでだよ・・・」

昼休み、やはりといわんばかりに箒が一夏に対して文句を言っていた。それにしても彼女が叩かれた原因は一夏であるが、そういう行動を自省できない自身のせいなのではないかと、ふと飛鳥は思っていた。

「なんだ・・・?? 話なら飯食いながら聞くから。とりあえず食堂に行こうぜ」

「ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

なんとも見事なツンデレを見せてくれた。彼女が好意を向けていながら一夏は気づいていない。この手のことは自身で気づかなければいけない。それはそうと、数人と食堂へと向かうのだった。

食堂についてからそれぞれが食べるものを注文していた。一夏は日替わりランチを、箒はきつねうどん、セシリアは洋食ランチ、飛鳥も日替わりを注文しようと決めていた。

そんな4人の前に突如として現れた人物がいた。朝に一夏の前に現れた鳳鈴音であった。その手にはすでに注文したものがお盆の上に乗っていた。しかし、彼女は自分が立っている場所が理解できていないのだろうか。食券が出せなくて4人は困っていた。

「待ってたわよ、一夏!!」

仁王立ちして言う彼女であるが。

「どけよ。邪魔なんだけど」

むっとした表情で飛鳥は鈴に対して言う。

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

一夏が目の前にいるから素直になったのかどうか分からないが、素直に聞いてくれた。後ろにいる人物であつたら絶対にしないだろうという行動である。

「のびるぞ、それ??」

飛鳥がそう言う。

「わ、わかってるわよ!! 私は一夏を待ってたのよ!! そうよ、あんたが早く来ないからこうなってるんでしょ!! 一夏!!」

素直だから箒とは違うのだと思っていたが、コレもまた裏切られたような気がした。もしかして、一夏を好きになる人は独占欲というのが強くなるのだろうか。もともとそういう性格の女性が好きになるのだろうか。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど一年ぶりになるのか?? 元気にしてたか??」

一夏がそう聞くと元気だったという鈴。

「あんたこそ、たまには怪我病気しなさいよね」

「それはないだろ」
「・・・」

それについては一夏に同感だった。こいつはこういう頭をしているのだろうかと、少し不安になってしまった。実際それだけ一夏のことが好きであり、少しでも離れていた時間を埋めたいためにそう言うってしまったのだ。それにしても一夏はどうもこうも癖の強い女の子に好かれるようだ。まあ、さまざまなキャラやジャンルの子がいるからはつきり言ってより取り見取りなのであるが・・・。鈍感な飛鳥がそれに気づくはずもないのだ。

「あー、ゴホンゴホン!!」

それからして、飛鳥たちは注文した品が来たのを箒があらさまにわざとらしい咳をして知らせる。それぞれの注文した品を受け取り、空いているテーブルへと向かう。この時間帯に空いているテーブルがあるのは驚きであるが、空いているなら座らないことはないと思い、向かう。そして飛鳥たちにくっついてきた鈴も共に昼食を食べる。鈴は一夏に対して言いたいことがあるからと一緒にいた。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ?? おばさん元気か?? いつ代表候補生になったんだ??」

などとマシンガンのように一夏が鈴に対して質問する。もちろん次々と質問を投げかけられた鈴もさすがにそれはないだろうと思った。

「質問ばっかしないでよ。それよりも、アンタこそなにIS使ってるのよ。ニュースで見た時びっくりしたじゃない」

鈴もやはり一夏がISを使えることが気になっていたようだ。かな

り離れていたために連絡も取れないし、今日聞くしかできなかったのだ。

一夏同様にこのIS学園においてはたった二人し甲斐ない男子の内一人の飛鳥も一緒にいるが、どうやら鈴にとってはほとんど無視の状態である。飛鳥もまた、彼女がどんな人物なのか、関係なかった。

それにしても一夏は気づいていないようであるが、箒からのさすような視線がずっと向けられている。相変わらず女の嫉妬は怖い。

「な、なあ一夏、そいつとはそんな関係なんだ??」

さすがに気になったのか箒は一夏に対して質問する。箒を咥えながら考えるようにしている一夏。対して鈴はというと、顔を真っ赤にしている。とは言え、この一夏が気の利いた発言をするとは思えないのであるが・・・。

「あいつ・・・」

「少しは空気を読むということができないのでしょうか??」

離れた席にて食事を取りながら飛鳥とセシリアの二人は一夏たちの様子を横目で見ながら、話に耳を傾けていた。最初は一夏と鈴という久しぶりに会った親友同士、楽しく話をしているのが見聞きできた。

内容もまた、お互いの突然の登場についてのことであった。そんな風にして、久しぶりの会話を楽しんでいた二人であった。飛鳥たちにもそう映っていたのだが、そこに突如として箒が割って入ってきた。

彼女としては我慢したほうなのかもしれないが、せっかくの再会に水をさすような彼女の行動に、流石の鈍感な飛鳥も溜息をつかざるを得ない。鈴の気持ちは、同じ女性として、セシリアは分かる気がした。

箒のその発言が食堂にいたクラスメイトたちや他のクラスの女子生徒たちもまた気になっている様子である。いつまでも考えている一夏に対して箒はいらいらしているのか射殺するような視線を向ける。

「ベベベ、別に私たちは付き合ってる訳じゃ・・・」

と鈴は言うが・・・。

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ」
「・・・」

「??? どうした??? 何睨んでるんだ???」

「な、なんでもないわよ!!」

一人で勝手に何を想像したのか顔を真っ赤にして、否定している鈴であったが、そこに鈍感である一夏の発言に不満げな視線を向ける鈴。こんなときでもやはり一夏は一夏である。ここまで来ると一種の病気なのではないかと思える。一度薬を出してもらったほうがいいのではないだろうか。その薬として特効薬なのは、後ろから刺されることなのかもしれないが・・・。

「幼馴染・・・???」

ファースト幼馴染である箒がその単語に露骨に反応していた。飛鳥とセシリアはその三人の所から離れたところで昼食を取っていた。

離れたところといっても数席ほどの所であり、もともと声が響く三人であるために会話も十分に聞こえる。

最初に動かしたのはセシリアのほうであった。飛鳥は突然腕を引かれてセシリアとともに席を離れた。一体どうしたのだというも、セシリアは特に詳しくは言わずに、ただ空気を読めというような視線で飛鳥を見てきた、口数少なく、せっかくの機会ですしと言っていた。

三人の話に二人は食事を続けながらも耳を傾ける。どうやら一夏が箒に対して、鈴のことを紹介しているようだ。彼女との出会いについてだった。

箒が引越してしまったのが小学校4年生のときで、彼女が引越して、転校してきたのが5年生のときだったらしい。つまり、二人は入れ違いになったらしい。そういうことを説明しているのが聞こえた。

「鈴、こっちが箒。ほら、前に話したろ?? 小学校からの幼馴染で、俺の通ってた剣術道場の娘。つまりファースト幼馴染」

「ふうん、そうなんだ」

そう言っ箒のことをじろじろと見ている鈴。そんな二人の間で火花が散っていたのを見たのは錯覚ではないことは確かであろう。当然一夏は気づいていない。

「ファ、ファーストって・・・」

「なら鈴さんはセカンドってことですね・・・」

どこの新世紀だよと内心つつこんでしまう。ならゼロ幼馴染はっ

て・・・いるわけがない。飛鳥は内心幼馴染にファーストもセカンドもないのではないかと思っていると、また話が聞こえてくる。

「そういえば一夏、アンタ、クラス代表なんだって?？」

「お、おう。成り行きでな。って言ってもタッグなんだけど」

「ふーん・・・」

そう呟いて残っていたスープを飲む。

「あ、あのさあ。もしよかったら、ISの操縦、見てあげてもいいけど?？」

鈴は顔を赤らめながら、恥ずかしそうにして一夏にそういう。相変わらず一夏はいい人脈に恵まれているようだ。一夏も一瞬驚いた表情になったが・・・。

「そりゃ助か・・・」

助かると言おうとしたときだった。突然テーブルがものすごい音を立てて叩かれる。相したのは当然のことながら、箒である。食堂なのだから少しは静かにしろと内心思った。そして、ここから修羅場だろう一夏に対して頑張れとしか言えない。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、そう私だからな。それに、お前は二組だろ!?いくら幼馴染だからといって、敵の施しは受けるわけにはいいかん」

箒とセシリアは鈴に対してそれぞれの意見を言う。とは言っても自分たちが一夏と少しでも長く一緒にいたいという欲望丸出し名それ

なのであるが。それでも一夏に駆って欲しい、強くなって欲しいという気持ちは感じられた。

だからと言って簡単に譲り渡す鈴ではない。

「あたしは一夏に言ってるの。関係ない人は引っ込んでよね」

「関係か?? 関係ならあるぞ。私が一夏にどうしても頼まれているのだ」

満足そうに言っている箒であるが、それは箒の勝手な思い込みであって、そこまで頼まれているわけではない。

「後から出てきて何を図々しいことをしようというのだ?」

箒の言うことは確かにお互いの手の内を明かすということであるが、別段学校内にいれればいずればれるのである、まあ見せたくないのは一理あるが……。

「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし」

「なananだと!?!? そ、それを言うなら私の方が早いぞ!?! それに、一夏は何度も家で食事をしている間柄だ。付き合いはそれなりに深い」

負けじと顔を真っ赤にして自身との過去を公にさらす。

「うちで食事?? それならあたしも同じよ?」

しかし、鈴はというと必死になっていった箒の言葉をさらりと回避する。悔

しそうに鈴ではなく一夏を睨んでいる箒であるが、その怒りの矛先は間違っ

いる。とは言え恋する乙女としては仕方のないことなのだろう。

それよりも、箒は自分以外にもそのように親しい女の子がいたとは思わなかった。とは言え一夏であるからそういう関係の子が多いのは当然だろうが……。

「い、一夏!! これはどういうことだ!? 聞いてないぞ私は!!」

転校してしまったのだから当然だろう。それに、まさか鈴が転校してくると思わなかった一夏であるから、話すこともできるわけがないと彼女の発言の理不尽さを感じていた。

「説明も何も……、鈴は幼馴染で、よく鈴の実家の中華料理屋にいった関係だ」

そう一夏が箒に対して説明する。一夏の幼馴染だという発言に鈴はふてくされたような表情になり、対する彼女はほっとした表情である。

「な、何だ。店なのか」

「なあ、鈴。親父さん、元気にしてるか?? まあ、あの人だったら、まず病氣と無縁だよな」

「あ……、うん。元気だと、思うよ」

一夏が鈴の家族のことを質問すると、先ほどまであれだけ明るかった鈴の顔に影がさす。どうやら家族の間で何かがあったようである。飛鳥は彼女については一夏のセカンド幼馴染であることしか知らず、後は中国の代表候補生であることだけだ。新学期が始まって、時間が相手から転入してくるとは、やはりなにか理由があるのだろうと思った。

とりあえず、その理由は一夏にあることは間違いないだろうと思っ
た。

「そ、それよりもさ、今日の放課後って時間ある??」

話の話題を変えて明るくしようとしたのだろう。そここのころの配
慮はできているようだ。鈴は駅前のファミレスに行って話をしたい
と持ちかけたが、一夏曰く、そこはすでにつぶれているというらし
い。なんとも悲しいことだ。

「そ、そう・・・」

鈴は自分が嘗ていたところが時間とともに変わってしまったこと
とにやや困惑しているようだった。

「じゃ、じゃあさ、学食でもいいから。積もる話もあるでしょ??」

どうやらよほど彼女は一夏と話がしたいらしい。恋する乙女であり、
長く会っていなかった相手である、当然であろう。すっかり話の流
れが大きく逸れて

いた。あの中に割り込むのは無粋だと思ったので、セシリアともど
も、耳を傾けるのはやめた。一夏の周りでは相も変わらず修羅場が
展開されていた。今度は鈴が言った放課後に一夏と話がしたいとい
うことだった。しかし、それに待ったをかけたのは筈であった。

「生憎だが、一夏は私とISの特訓をするのだ。だから放課後の予
定はすでに埋まっている」

「あっそう。じゃあ、それが終わったら行くから。ちゃんと時間空
けというね、一夏。じゃあね」

ラーメンのつゆを全て飲み干した鈴。一夏は内心そんなに塩分をとると太るぞなどと、デリカシーのないことを思ってしまったが、口にすることはなかった。もし言っていたらおそらくそのどんぶりを叩きつけられていただろう。

そう言い残して、鈴もまた食堂を後にしていった。

「一夏、分かっているだろうが、当然特訓が優先だぞ」
「は、はい」

一夏は箸から発せられる雰囲気から、そう答えるしかできなかった。放課後が楽しみなのか、箸は笑顔であったが、一夏はかなり疲労した表情であった。

PHASE 11 龍の襲来（後書き）

ED2↓REASON＞玉置成実＜

次回はかなり長くなりそうです。

ご感想、誤字脱字がありましたらよろしくお願いします。

PHASE 12 星空（前書き）

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

過去最長??まだ書き終わっていないために、明日の投稿は難しいかもしれません。少し間が空くかもしれませんが、気長に待っていただければうれしいです。

ご感想や、誤字脱字の報告はいつでも待っています。

たくさんの閲覧やご感想。いつもどうもありがとうございます。

それでは、本編をどうぞ!!

PHASE 12 星空

その日の放課後になっていた。飛鳥は一夏、箒、セシリアとともに予め予約を入れたアリーナにて訓練をしていた。

4人ともそれぞれのISスーツに着替え、飛鳥は自身の唯一機であるMSのヴェステイジを、一夏は白式を、セシリアはブルーテイアーズとそれぞれの専用機を起動させる。

「・・・」

「どうしたんだ??」

「別に・・・、何でもないさ」

一夏が起動させ、纏う白式のそのフォルムを見ただけで再び胸の内からどす黒い何かが溢れそうになった。どう見ても似すぎているその姿。一夏は無言で自分を睨みつけるようにして見てくる飛鳥に対して、どうしたのかと尋ねてくる。聞かれた飛鳥はなんでもないと、そっけなく返す。一夏も鈍感なのか、楽天的なのか、一々そのような態度を気にするようなことはしない。

そんな様子を見ていたセシリアと箒は?を頭の上に浮かべていた。箒もアリーナを予約するついでに、自身もタッグの特訓に参加するという事で打鉄を借りる予約を入れていたようだ。そのために彼女は今黒い装甲の打鉄を起動させ、纏っている。

「それにしても・・・」

「飛鳥さんの機体ですが、また違った形になっていますのね」

「以前のよりも武装が火力重視なのか・・・??」

一夏が話を切り出した。それは飛鳥の機体であるヴェステイージの背信部に装備されるバックパックが以前のものとはまた違った形のものであったからだ。起動させたVPS装甲の色もまた、赤とダークグレーのツートンから、暗緑とダークグレーのツートンに変わっていた。

高出力ビームライフルやアンカー付き巨大シールドはもちろんであるが、両腰にあった折りたたみ式対艦刀やビームサーベルは排除され、その代わりにバックパックであるそれによって巨大なビーム砲、レールガン、ミサイルランチャーを装備し、完全なロングレンジようになっていた。接近を許したときのためということで、フォールディンググレイザー対装甲ナイフの他にビームジャベリンも装備されていた。

完全な後方支援型の機体へと変わっていたそれは、一夏の白式が雪片式型という唯一の近接武器であるためにタッグを組むとなれば後方から一夏を支援するのがベストだということでこのバックパックを使用していた。

箒の言うとおり、完全に火力重視であるために、他のバックパックを装備したときよりも機動性は落ちている。とは言え、それがなくともお釣りが来るだけの威力と多彩な武装があった。

「じゃあ、時間も有限だからな。始めようぜ」

そう一夏が切り出し、タッグマッチの試合の訓練を始める4人。もちろん組み合わせは出場することになった飛鳥と一夏、その相手をするのはセシリアと箒である。お互いに即席であるが、残り時間のないこの状況で仕上げていかなければいけない。

とは言え、初めてタッグを組むとなった4人。連携という言葉は皆無であった。

「うわあああああ！！何でこっちにミサイルが飛んで来るんだよ！！」

「何やってんだよ、一夏！！ハイパーセンサーがあるんだから後ろも見えるだろ！！」

「攻撃をかわしながら、そんなことができるか！！」

セシリアのブルーティーズから射出された四基のビットから放たれるレーザー攻撃を動き回り、回避する一夏。全てを回避しきることなど不可能であるため、数発装甲を貫き、シールドエネルギーを失う。

その後ろから援護としてミサイルを放った飛鳥であるが、そのミサイルの進行ルート上に突如として現れた一夏に命中し、一夏に大ダメージが襲う。

「覚悟！！」

「こんのお！！」

打鉄に装備された近接ブレードを振り下ろしてくる筈。掛け声もあるために、すぐに反応する一夏が雪片でそれに対応する。鏝迫り合いになり、お互いの表情に更に真剣味が表れる。

お互いに剣道をやっていたために、その実力がISに反映される。しかし、徐々にであるがISの性能差で一夏が押し始める。

「おりゃあ！！」

「く！！」

力任せに雪片を振り抜いた一夏。振り切られた箒はその勢いのまま一旦後ろへと後退する。視線を外したその瞬間。突然警戒を知らせるアラートがなる。はっとして上を向くとそこには更に上空へと上がっていた飛鳥・・・ヴェステイージが両腰と肩からビーム砲とレールガンを構えていた。

「いっけえええ!!」

「な!?!」

全砲門が一斉掃射される。赤と黄色の軌跡が黒い装甲の打鉄を纏う箒に突き刺さる。一気にシールドエネルギーを削られる。

「箒さん、前に出すぎですわ。それでは援護のしようがありませんよ」

「う、うるさい」

こちらもちちらで連携の取り様がない状態が起きていた。一夏と剣を交えることができることのうれしさに突っ走っていた箒。突然向こうは付け焼刃の連携で大幅に箒のシールドエネルギーを奪っていった。それに対して冷静であれば考えないことであるが、二対一などと卑怯だと考えてしまった。

セシリアがしきりに叫んでいるが、再び刀剣を握り締めた箒がスラストを噴かし、一夏へと飛び込んでいく。雪片を構えていた一夏であるが、突然スラストを切ったように、下へと落ちていく。

「何をしているんだ、一夏!?!」

「これでいいんだよ」

「なに?!」

疑問を表すしぐさの後、すぐさま一夏がいたその後ろにいつの間にか現れていた飛鳥がその両手でビームジャベリンを構えていた。

「こんのおおお!!」

「な!?!」

振り上げられたビームジャベリンを渾身の力で振り下ろし、箒に向かって攻撃を放つ。とっさに刀剣を滑り込ませ、受け止めようとしたが、ヴェステイージのパワーに押され、下に叩きつけられる。

「が!?!」

地面に叩きつけられ、体に激しい激痛が走る。いくらISに守られているからといって、全てを受け止めきれるほど、完璧ではない。叩きつけられたことで絶対防御が発動し、箒の打鉄のシールドエネルギーが完全にゼロとなった。

「情けない・・・」

思わず唇をかみ締める。箒の瞳が向く方向には今も三人の操縦者たちが戦っている。それなのに自分はこうして無様に地面に這いつくばっている。確かに生身で戦えば一夏にはまだ勝てるだろうし、セシリアにも、彼女がどんな訓練を受けているか分からないが、勝つ自信は持っている。軍学校を卒業している飛鳥に対しては到底敵わないだろうが、それでもISに乗ればこうも違うのかと・・・。

「私は一夏の・・・」

傍にいられないのだろうか……。そうふと思ってしまった。ズキ

りと胸が痛む。これは恋する乙女だからこそ、好きな人の傍にいられない、自分に入る資格がないのではないかと思うそれが胸に突き刺さり、ズキズキと痛みが走る。

それに一夏にとってはセカンド幼馴染である鳳鈴音という少女が転校してきた。箒にとっては更に恋敵が増えるということで戦々恐々としていた。朴念仁である一夏であるために、早々ころりというとは思えないが、そのせいで自分の思いもなかなか伝わらないと思うと、やりきれない。

更にその鈴もまた、セシリア同様に国から支給されている専用機を持つ国家代表候補生である。つまり、彼女には国家を代表するほどの実力があるということだ。

思わず顔をしかめる。そう言う自分はどうか。高々ISを生み出した稀代の天災、篠ノ之束の妹だからということで、このIS学園に入れられた。もちろん自分にもISの操縦に対するランクがあったとはいえセシリアや鈴といった代表候補生のAには遠く及ばないCであった。

力がほしい……。力さえあれば一夏と一緒に、その傍にいられるのではないか。そう思いながら、空にいる一夏に向かって動くはずのない腕を伸ばすのであった……。

「く、このままじゃ……」

飛鳥と一夏は連携してあと一人……。セシリアを倒さんと戦闘を繰り広げていた。ブルーティアーズの特徴とも入れるビットが所狭しと動き回り一夏の死角からレーザーを豪雨のように放ってくる。

「一夏！！ちゃんと避ける」

「避けるって簡単に言うなよな！！」

飛鳥が周りにまわりついてくるビットから放たれるレーダーをか
らだを捻りつつかわして、かわしきれないのは左腕のシールドで受
け止める。反撃といわんばかりに右手のライフルから放たれた緑色
の軌跡が青いビットを貫き、爆散させる。

「何でそう避けられるんだよ！！」

「お前はレーザーが撃たれてから回避行動を始めてるんだよ。それ
じゃあ、かわせるわけないだろ！！」

「え？？それって普通じゃないか??」

一夏がそう言いながら、飛鳥がセシリアに向かってライフルを放っ
たために足を止めたビットを一基を雪片で叩き切る。

肩の装甲を吹き飛ばされたセシリアであるが、その爆発の余波を使
って大きく回避行動を取る。握られたスターライトから放たれたレ
ーザーでヴェステイージを射抜こうとしたが、それを横にずれるこ
とでかわす。

ミサイルランチャーを構えると、次々と誘導付きミサイルが嵐のご
とくセシリアへと向かっていく。セシリアも負けじとミサイルとレ
ーザーで対応する。次々と打ち落とされていくミサイルが爆発し、
煙が双方の視界を奪っていく。

「く、これでは・・・」

視認は不可能。後はISのセンサーに頼るしかできない。それはお

互い。どちらの攻撃が早いのか、どちらから攻撃が来るのか、飛鳥とヴェステイージか？？それも一体どの換装を使っているのか？？一夏と白式か？？ワンオフアビリティ単一能力を起動させているか？？自分から仕掛けたほうがいいだろうか？？セシリアはわずかな時間で思考をめぐらせる。

「いっけえええ！！」

突如として煙を切り裂く煌めいている刀剣がセシリアの目に映った。それを見て一夏と白式であると判断する。すぐさまライフルを握っていない左手にインターセプトを出現させる。あの後何度も練習をし、候補生として二度と恥ずかしい思いをしたくないということとですぐにその手に握り締める。

「甘いすわ。そうも、ご丁寧に掛け声もしてくださるとは、ラッキーですわ」

「ええ！？」

一夏は自身の攻撃が受け止められていることに目を見開き驚く。ISの装甲に触れた瞬間にバリアを無効化する単一能力“零落白夜”であるが、実体剣と交錯することではその力は全く生かされない。多少熱を持ったビームサーベルであろうか。

罅迫り合いの状態が続く。しかし、剣の扱いに関しては一日の長がある一夏がセシリアのことを弾き飛ばす。

「おらあああ！！」

「くー！！流石に分が悪いですわ・・・って！？」

弾き飛ばされたところに突如として現れた飛鳥とヴェステイージ。

「換装・フォースシルエット!!」

バックパックが外され地上に落ちて行くそれがすぐに粒子化する。その代わりに背信部には新たな巨大スラスターのバックパックと右手に握られたビームライフル、アンカー突きの巨大シールドが上下に分かれる。

ライフルとシールドを手放した飛鳥。背中を向けているセシリアはそれを肩越しに見ている形である。両肩の部分にある二本の突起を手で掴む。そこから桜色のビーム刃が展開され、ビームサーベルが振り下ろされる。

「きゃあああ!!」

背中のスラスターごと二本のビームサーベルで切りつけられるセシリア。一気にエネルギーを削られ、スラスターが破損したために、そのまま真っ直ぐ二地上へと落ちていく、何とか着地に成功したものの、すでに彼女には空を飛ぶ術がなかった。

「ここ・・・までですわね」

そこには前後からビームサーベルと雪片を突きつける飛鳥と一夏の姿があった。どう見ても彼女には逃げ場なく、更に反撃しようにも片方が止めをさすために試合終了であった。

「終わりか??」

「この通り、わたくしにはすでに飛ぶこともできませんし、反撃しようにもどちら科から攻撃を受けてそれで終わりですわ」

「これ以上機体にダメージを与えるのはな・・・」

相変わらず加減のない攻撃に一夏はため息をついている。その当人である飛鳥の表情は見えない。取りあえず4人は地上にてISの機動を解除する。先に戦闘不能になっていた箒はすでに解除を終えていた。

「一応即席の連携というのはできていたと思いますわ」

それぞれが一对一で来るのではなく、二対一出確実に落とすに行く。とはいえ4人がまだ連携のれの字も練習していなかったために、箒とセシリアの連携が取れなかったものは仕方のないことなのであるが。

「別に、一対二でやらなくてもいいのではないか??」

箒がそう提案する。一対一で確実に戦力を分散させる。それも一つの手である。

「何言ってるんだよ。それの方が確実だろ」

飛鳥が口を挟む形で言う。そう言われ、ややむっとした様子を見せる。箒としては、自身が稽古をつけてほしいと頼まれた形であるため、一夏との一对一の稽古をしたいという気持ちがあった。

タッグマッチになったためにそう言う気持ちは押し殺していたが、別段個々の力が強くなり、確実に一対一で相手を落とせばいいのではないかと思ったのだ。タイマン

これは彼女が今まで二対二の試合形式を取ったことがないためにそう感じているのだ。それに彼女自身の過去にもつながる・・・。
何より大きいのは、一夏と一緒にいられる時間がほしいという気持ち

ち。まだまだ剣道に関しては昔に比べてかなり腕が落ちている、そう言うのも含めて鍛えなおさなければいけないと思っていたのだ・・。

「確かに箒さんの言う作戦もありますが、それは個々の力があつてのことですわ。今回の場合いきなり連携をとれといわれても無理かもしれませんが、ある程度は可能になっておいたほうがいいですわよ?? 先ほどのようにお互いの位置関係を即座に認知できるようになっていればフレンドリーファイアだけは防ぐことができますから」「そこは何とかなるだろ。こう・・・ピキーンとくるような」「お前・・・どこの○ユータイプだよ」

頭に指を当ててそのように仕草をする箒に対して、呆れの視線を向けた飛鳥がつっこむ。取りあえず、先ほどの模擬戦での反省をする。

「一夏、なぜあの時こうドンと来たミサイルをクイツとした動きでスツとすばやく回避できないんだ」

「え、えっと・・・。なんだ?? 箒との手合わせに集中してて・・・」

「な、私に集中してて・・・／／／」

「こほん、お話がずれていますわよ??」

「わ、分かっている／／／」

セシリアに話のベクトルが修正される。自分の都合のいい言葉だけが耳に入っているようだ。

「あの時のガンという攻撃はよかった。だが、せっかくチャンスの所でこうぐつと気合の入るような掛け声はやめたほうがいい。こうズバンつと反撃を受けるかもしれないからな。そう言うときはグイ

ツと強引でもいいから回避してだな・・・」

「え??? ああ、クイツと??? ズバン・・・んん???」

一夏はマンツーマンの指導でそういわれるが、良く分からないという表情で箒の言った言葉を繰り返して口にして理解しようとしている。だが、彼女の指導は擬音語が多いために聞いているこちらもう反応していい皮からない。

「ちょっと待てよ。そんな説明で分かるわけないだろ」

飛鳥が更に説明を続けようとしていた箒に対してストップをかける。一旦間が空いたことにほっとしている一夏。せっかくの一夏と野時間を潰されたことに不機嫌そうににらんでくる箒。それを無視して言う。

「なんだと??」

「だから、そんな説明で分かるわけがないって言ってるんだよ」

まだ分からないのかといらした口調で言う飛鳥。こういうところは短気であるからすぐに突っかかるような感じになってしまう。

「何だよそのグイツとかズバンとかって・・・。擬音語多すぎて言うか、それじゃあ、こいつが分かるわけないだろ??」

飛鳥が一夏を一瞥しながら言う。一夏は一夏で飛鳥と箒の二人を目できよろきよろと見ている。箒は飛鳥をにらんでおり。セシリアはそれを腕組みをして見ていながら頷いている。

「まったくですわ。あの演習のときの一夏さんの動きの悪さはそう言うことでしたのね。こんな教え方を見たのは初めてですわ」

「う、うるさい。これが1番分かりやすい教え方なのだ。ほら、一夏だってちゃんと理解しているではないか。なあ、一夏」

箒は自身の教え方に対して難癖をつけてくる飛鳥とセシリアに対して怒りを露にしながら噛み付くようにしてそう言う。そうして、一夏に期待のまなざしを向け、尋ねる。

「悪い。全然分らない・・・」

一夏はそう言いながらも箒から目を逸らす。

「逸らすな!!」

そう叫ぶ箒であるが、一夏にとって、彼女から教えられたことはほとんど理解していないに等しかった。それでも動けるのは才能なのであろうか。

擬音語が多い箒の教え方は、ほとんど彼女の感覚をそのまま伝えているだけである。そのために一夏と感覚が違うやり方であるために、例えそれを理解できたとして、一夏がそのやり方に合っているのかは甚だ疑問である。

それに一夏がこのまま操縦が上達しないとなれば、一夏の将来はともかく、言葉は悪いがIS協会としては貴重なサンプルである一夏が使い物にならなくなったら困る・・・ということもある。

そう言われると一夏の胸にその事実が鋭い剣のような刃で突き刺さる。自分は世界で唯一のIS操縦者。自分がどう言おうと、結局は世界に対しての発言権はない。IS学園という大きな後ろ盾があるからそこまでひどいことをされていない一夏であるが。もし、こ

のIS学園がなかったらと考えると身震いした・・・。

「取りあえず俺とセシリアが説明するから、お前は何か思ったことを言ってくれればいい」

「それがいいですね。それでは先ほどの模擬戦での事ですけれども・・・」

そうして模擬戦を終えての反省会とそれぞれの特訓を再び開始するのであった。

その日の夜。ちょうど訓練が終わってから数時間が経っていた。暗くなりつつあったアリーナにぽつんと一箇所だけ明かりがまるでスポットライトのようにそこを照らしていた。

次々と射出されてくるターゲットに対してライフルを放ち、撃ち落としていく。緑色の軌跡が闇夜を切り裂き、突然現れたターゲットに対して、頭部のバルカンにて撃墜させていく。

しかし、闇夜を切り裂き飛んでくるのは何もライフルだけではなく、高速移動をするターゲットもであった。システムの警戒音が鳴り響く。五感をぎりぎりまで研ぎ澄ませ、飛んでくるそれらを回避し、撃墜させる。だが、反応しきれないものもあり、それが装甲に激突して、機体を激しく揺さぶる。

「このやろう!!」

ぶつかってきたターゲットはVPS装甲のおかげで自爆したが、その分電力を消費する。爆風で後方に飛ばされながらも、体勢は万全でないままライフルを連射し、飛び込んできたターゲットを撃墜

する。

ヴェステイージが、飛鳥が暗く、明かりの僅かなアリーナを縦横無尽に飛び回る。一人だけ延長を申し出、ぎりぎりまで動いていた。闇夜に溶け込むような黒い機体装甲。しかし、そこから放たれる一発一発のライフルも、一閃一閃のビームサーベルもその闇夜を切り裂く光となっていた。

「次・・・次!!」

無限に飛び出し続けるターゲットを装甲の内で汗だくになりながらも一心不乱に、そのトリガー引き続け、剣を振り回す。まるで何かに取り付かれたように・・・。何かを恐怖するように・・・。

「次って・・・あれ??」

突然ターゲットの射出が止まった。一旦地上に戻る飛鳥。モニターの時計を見ると、すでに延長した時間を越えていたのだ。

「何だ?? いきなり止まって」

誰かが止めたのだろうか、時間を知らせるためなのか、それとも時間を守らない自分に対して説教をくらわせようとしているのかは分からないと考えながら、その人物のシルエットが浮かぶ場所へと向かう。

すでにヴェステイージの機動を解除しているために、ISスーツと似た、防護スーツ姿の飛鳥。ゆっくりと歩いていくと、そこにいたのは相変わらずクールな雰囲気醸し出している更識簪の姿であった。

「簪??? 何でお前がこんなところにいるんだよ」

「時間が過ぎてるから、織斑先生に言われて伝えに来たの」

なるほどと考える飛鳥。どうやら彼女のほうも整備室からたたき出された様子である。まだやり足りないという不機嫌そうな感じがした。彼女の様子からして、まだ完成までは遠いらしい。このままクラス対抗戦には出るのかと聞いてもいいのかもしれないが、彼女の機嫌をこれ以上損ねるのはまずい。だから、やめておくことにした。

「もうそんな時間だったのか・・・」

「少しは決まりを守ったほうがいい」

「それはお前もだろ??」

「・・・」

言い返しはしたが、睨み返されてしまった。完成が遠いことになりストレスがたまっているらしく、爆弾の導火線に火をつけてしまっそうだ。

「夕食、まだだったな・・・」

ちらりと隣を歩く簪を見る。何も言わず、黙って横を歩いている。小さい頃から一緒にいる彼女であるが、昔ほど明るい様子はない。やはり姉である楯無に対するコンプレックスがそうさせているのか。だからといって楯無のことも責められるわけではない。

どうすればいいのか・・・。両者の間にいる立場である飛鳥にとって、二人の仲の早期改善を望んでいる。だが、それはまだまだ難しそうである。飛鳥が何かをすればまだ少し変わるかもしれないが、

それでも不器用な彼が下手に動いた場合、事態がどこに行くか分からない。そのために傍観、見守ることしかできないでいた。

「簪、お前は?？」

「まだ食べてない。私もさつき整備室から出たから」

そう言う簪はいつものように淡々と言葉を並べる。会話が続き、気まずい雰囲気が続く。

「食堂行くか??」

「うん」

コクリと首肯し、飛鳥の提案を呑んだ。ならすぐに着替えてくるから待っていてほしいと言い、すばやくシャワーと着替えを済ませ、簪と共に食堂へと向かうのだった。

食堂にはまばらに生徒たちがそれぞれ席についているのが見えた。ある人は夕食を友達ととるために、ある人は談笑をするために、デザートをつつきながら、ある人は備え付けの大型テレビでバラエティー番組を見ている。

そんな様子を一瞥してから、飛鳥と簪はそれぞれの夕食を注文し、受け取ってから空いている席へと向かった。

8時近いということで、彼らのように夕食を済ませている人のほうが多い。お互いに向き合う形になってそれぞれ注文したものを食べる。洋風のランチセットだ。

「「・・・」」

お互いに会話もなく、まるで冷め切ってしまった熟年夫婦のような夕食になっている。ちらりちらりと簪のほうに視線を向ける飛鳥であるが、淡々と食事を口に運んでいる彼女を見て、どうしても話題が見つからない。

ISに関すること・・・、大却下、即却下である。そんなことをすれば更に彼女のプライドを、心を傷つけることになる。

近況話・・・。もともと自分から人に話しかけることが苦手なのか、なかなかそうしない彼女である。それに専用機の完成に躍起になっているのだから、ほとんど打ち解けていないのではないか・・・。そんな風に不安がよぎる。

食事もそろそろ残り少なくなってきた。ふと前を見ると、簪のほうはまだ残りが飛鳥よりあった。ゆっくりと食べているために、時間が掛かるのだろう。

するとどこからかひそひそと声が聞こえてきた。どうやら飛鳥や簪と同じ一年生なのだろう。一人二人制服を着ている生徒がおり、そこにあるリボンの色が一年生のものだったからだ。

「ねえねえ知ってる。4組、私のクラスの代表の更識さんなんだけど、専用機ってどうなってるのかな??」

「そういうば、代表候補生だったよね??」

離れているからといって聞こえないと思っっているのだろうか。それでも良く響くためにどんなに声を潜めても聞こえてしまう。ちらりと彼女のほうを見れば、気にしないようにしているように無理をしていると感じ取れた。

「うん。だから専用機を持っけていてもおかしくないんだけど・・・」
「確か倉持技研だったよ」

「あれ??そこって確か一組の織斑くんの専用機も製造してなかった??」

「そうそう、織斑くんのほうにかかりつきりだったらしいよ」

「え??それじゃあ、更識さんの専用機って・・・??」

「まだ完成してないらしいよ??でも聞く話だと、自分で完成させるって啖呵を切って引き取ったらしいよ」

「えゝ、それって無謀じゃない??」

「だよねゝ。いくらなんでもそれはないよ。えっと、確かこの会長、確か更識さんのお姉さん??専用機を自分で完成させたって言うけど」

「代表選手だったよね。ぶっちゃけ会長と同じ事ができるわけないよ。身の程知らずってやつ??」

「会長みたいな天才に、凡人が追いつけるわけないよねゝ」

それを聴いた瞬間空気がピシリと凍りついたような感じがした。そして同時にブチっという何かが切れる音がした。

わなわなと握る拳が震える。何も知らないくせに・・・。自分たちだってできないくせに・・・。そうやって他の人を馬鹿にするのがそんなに面白いのか。飛鳥には分からない。ただ、今理解しているのは、幼馴染が馬鹿にされ、傷つけられたということだけ。

だから、飛鳥はキレた。いたって理由はシンプルだ。幼馴染が馬鹿にされて、黙っていられるほど、飛鳥は気が長いほうではない。ガタンという大きな音を立てて飛鳥が立ち上がる。その勢いで椅子が倒れ、床と接触して大きな音を立てる。それはまるで飛鳥の怒りを表しているように甲高い音を立てた。

「いい加減にしろよ!!」
「!!」

突然自分たちのほうに向かってきながら怒りを露にして叫ぶ飛鳥とその声を聞いてびくつと驚く女子生徒たち。彼女たちだけでなく、その食堂にいた者たち・・・、3年生も2年生も、食堂の関係者たちも黙ってその様子を見ている。

「そんなに人のことを馬鹿にして・・・、お前らは楽しいのかよ!!」

「な、なに・・・??」

「確かこいつ・・・一組のクラス代表じゃない??」

「IS使えないのに別の機体に乗ってるっていう??」

「そのクラス代表が何か用??」

飛鳥に対して、むしろ挑発的な態度を取る彼女たち。多少とはいえ、女性＜男性という考えがあるのだろう。それを盾に取っているのが分かる。

「お前たちが簪のことを馬鹿にしていたのは聞こえてるんだよ。さっさと謝れよ!!」

そういわれた彼女たちは別段気にしていない様子である。

「でも言ってることは本当のことじゃない??」

「そうそう」

「ね」

などと自分たちの主張を撤回する気はないらしい。飛鳥は元来言葉

より手が先に出る。ここまで来て我慢しているのは珍しいことであった。拳を押さえているのは、ここで騒ぎを大きくしても、自分に対して、何より幼馴染の簪に対しての風当たりが更にひどくなる。怒りの炎は激しく燃え滾り、彼女たちの態度が油となり、ガソリンとなって注ぎ込まれる。それで爆発しないのは不思議なことだった。

「それに君だって本当だったら、ここにいること事態が不思議なんだからね」

「なに??」

一人の女子生徒がそう言うのに対して、顔を顰めながら尋ねる。

「だってそうでしょ?? ISじゃないんだから、場違いにもほどがあるよ??」

「一人だけ浮いてるって感じ??」

馬鹿にしたような彼女たちの発言を聞いて、いよいよ限界を超えようとしていた。

「なんだよ、この前の試合でISに負けないって証明できたじゃないか」

「そんなことくらいでISに負けないっていえるの??」

「ISって言えば白騎士事件だよね」

「!!」

白騎士事件……。それは飛鳥にとっては禁忌の言葉とされているものである。しかし、そんなことを彼女たちが知るわけがない。彼女たちには何の罪はないが、飛鳥に対していはならない言葉であった。

「君のそのMSって言うのであんなことできるの?? 認められたいならそれくらい・・・」

そう言いかけた女子生徒がとまったのは自分に向かって怒りを爆発させた表情の飛鳥が拳を構え突っ込んできたのを見たためであった。限界まで力の込められた拳が彼女に向かって叩き込まれようとしたときだった・・・。

「やめて!!」

「「!!」」

ぴたりとその拳が女子生徒の目と鼻の先で止まっていた。つうつと嫌な汗が彼女に流れる。その拳を受けていたら一体どれだけの被害が出ていただろうか。このときの飛鳥の拳で病院送りになったものたちは後を絶たない。もちろんその中には女性もいた・・・。

男性として女性を殴るのはどうかという意見もあるが、そんなこと、今もその時も飛鳥には関係のないことだった。急停止した拳からゆっくりと力が抜けていく。

振り向く先に簪が立ち上がり、こちらを見ていた。これ以上黙っていられなかったのだろう。このまま殴っていたら二人にとってまずい状況になる。

「な、何すんのよ!!」

「男が女を殴るって・・・意味分かってるの!?!」

後ろでワンワン何かを言っているのが聞こえる。

「うるさい!!」

「!!」

「く・・・」

「な、何よ偉そうに・・・」

怒号と共に怒りを露にしたにらみを利かせ、後ろで何かを言うてくる女子生徒たちを黙らせる。法などに守られているからといって、何を言ってもいいわけではない。だからといって、飛鳥が何をしてもいいわけでもない。

黙って簪へと視線を向ける。俯いているためにどうしたのか分からない。だが、小刻みに体が震えているのは見て取れた。

「っ!!」

身を翻し、その場を立ち去る。

「簪!!」

背中を向けて食堂を立ち去ろうとする簪に向かって飛鳥はとっさに声をかける。しかし、彼女はその言葉に対して答えることも振り返ることもせず、ただ真っ直ぐ前を向き、走っていく。

「っ!!」

そのとき身を翻す彼女の瞳から何きらりと光る雫が流れているのを見た。泣いていたのだ・・・。あれだけ言われて、いくらいつもクールで冷静沈着な彼女でも、堪える。

飛鳥は彼女がいたほうへと手を伸ばしたまま固まっていた。呆然と彼女が食堂から走り去るのを見ているしかできない。

「な、何も言い返せないのね。情けないわ」

「黙れよ・・・」

そう呟き睨みつける。食堂の中はまったくの無音であり、誰もが動けない状態にあった。

「あいつのどこが情けないんだよ。あいつがどれだけ頑張っているのかも知らないで、良くそんなことが言えるな。あいつはな・・・、簪の奴は人一倍頑張り屋なんだよ。いつもいつも他の奴より頑張つて、そう言う奴なんだ。それをお前なんか馬鹿にされてたまるかよ！！」

そう飛鳥が叫んだ。それは隣に立つものではなく、一步後ろから彼女の顔を見ていたから言えることだった。確かに彼女は才能の面からすれば姉の楯無には遠く及ばないだろう。

だが、それに負けない彼女にも才能があった。それは飛鳥が手を伸ばしても決して届くことのないもの・・・。彼女と同じような感情を、むしろ彼女たちに対して持ったことがある自分だからこそ、無力さを嫌というほど突きつけられたことがあるからこそ分かる・・・。

そして、そんな才能の他に、彼女にはひたむきに頑張れる心があった。だから途中で投げ出さず、一人で専用機を製作し続けられる。信念がある、覚悟がある。それも尊敬できるくらい・・・。

だから、飛鳥にはそんな簪を馬鹿にされることはとてもじゃないが耐えられるものではない。

「これは何の騒ぎだ!!」

突然現れた織斑千冬。その後ろに一人の女子生徒がいたということから、おそらくこの状況を何とかしてもらうために彼女を呼びに行っていたのだろう。

鋭い視線で食堂を見渡し、飛鳥とその口論になっていた女子生徒たちを見て、ゆっくりと近づいてきた。

千冬を見て、おそらくこの場で尋問されるだろう。怒りが彼女が現れたことで一瞬吹き飛んだ。そして、今冷静に今までのことを思い返し、今自分がやらなければいけないことがわかる……。

間に合うのか……。いや、今ならまだ間に合う。追いかけてなにができるのか……。ならいつそのこと、見捨てればいいのか……。そんなことはない、できるできないではない。自分は、今それをしてしなければいけないのだから。

簪……。彼女は泣いていた。飛鳥自身が泣かせたも同然だ。アスカは見えない何かに突き動かされるままに、行かなければいけないという思いと共に走り出す。突然動いた飛鳥を見て千冬は一瞬驚いた表情になる。

「待て紅月!! この状況を引き起こしたのはお前だと聞いているぞ!!」

「だからなんです?? 俺だけが悪いんですか??」

横を通り過ぎたところで、千冬の手が飛鳥の肩をがっちりと掴む。それに対して立ち止まり、睨みつけるようにしてみる飛鳥。彼としては早く追いかけるべきではない。そう言う思いでいっぱいだった。

ただ。だから、彼女のこの行動は彼にとっては障害の他になかった。

「離せよ。俺は行かなきゃならないんだ」

「口の利き方に気をつけろとあれだけ言っておいて、まだ直してないようだな。それはともかく、この状況を引き起こした経緯を話してもらおうぞ」

「そんなことより、俺は行かなきゃいけないんだよ」

そう言って掴んでいた腕を振り払った。パシッという乾いた音が響く。普通であればそれは逆らう行為であるために注意されるだろう。千冬は別として、まさか彼女に逆らうような人物が生徒にいるとは他の女子生徒たちにとってはありえない光景であっただろう。

「待て紅月!!」

振り払ったと同時に走り出す飛鳥。慌てて叫び、止まるように言うが、飛鳥はそれを無視して食堂を飛び出していく。どこに行ったかは分かるわけがない。だが、本能の赴くままに足を動かしていた。

夜の廊下にはほとんど生徒は居らず、それぞれの部屋にいるか、他の友達の部屋に遊びに行っているか、どこかに赴いているかである。そのためにぶつからずにひたすら前を向いて走ることができた。廊下を走るなどいわれても、おそらくこのときの飛鳥には馬の耳に念仏であっただろう。

どうしてこの一步一步が重く感じるのだろうか。まるで簪がこちらに来るなどいつているような感じであった。膝が重い、腕が上がらない。消して疲れているわけではないのに、そう言う雰囲気であった。

階段を数段飛ばして駆け上がっていく。上へ・・・、上へと。

ようやくついたそこには更に飛鳥の行く手を遮るようにしてある扉があった。そのノブに手をかける。開けていいのだろうか・・・。
そう言う躊躇が一瞬生まれた。

「何やってんだよ・・・。何のためにここに来たんだよ!!」

そう自らを叱咤激励するかのように叫び、その扉を・・・まるで硬く閉じられた、今の簪の心を抉じ開けるようにして開いた。それは普通であれば消していいことではなく、相手を傷つけることなのかもしれない・・・。だが、この時の飛鳥にはそこまで頭が回る余裕はなかった。

びゅっという一陣の風が吹いた。それが飛鳥の寝癖頭の髪をなでる。思わず目を細めてしまう。その飛鳥の瞳に映ったのは、夜天の空に浮かぶ付きの光をスポットライトのように浴び、キラキラとまるで涙のように煌めいている星星を見上げている簪の姿であった。

「簪・・・」

そう言うのと驚いたようにこちらを向く。まさか追って来るとは思わなかったのだろう。そこまで甲斐性があるようには思われていなかったのかもしれない。むしろいつも守られていたイメージがあるから・・・。

「どうして・・・??」

不思議そうにこちらを見てくる。来てほしくなかったというような

瞳で、そこに涙を溜めている。

「どうして来たの・・・??」

「それは・・・、放っておけなかったから」

「!!」

そう、いつだって理由はシンプルがいい・・・。

更識簪は食堂から飛び出していた。幼馴染の飛鳥との夕食時、心無い言葉を浴びせられ、もう心が限界であったのだ。

一方的な姉に対するコンプレックスを抱えていた簪。彼女たちが自分に対して言ってくる言葉は彼女自身も分かっていたことだ。

だが、そうだからといって更識楯無というフィルターを通して自分を見てほしくないという、彼女なりのプライドがあった。

走った・・・。ただただ走った。周りに人がいなかったからぶつかる心配はなかったのでもいいが、途中廊下で転んでしまった。

情けない・・・。

そう思いながらもゆっくりと立ち上がり、ふらふらとまた歩き出す。

どこに行くのかも分からず、ただ一人になれるところを目指していた。こんな涙でぐしゃぐしゃになった顔を、誰にも見られたくなかった。それも異性であり、幼馴染の彼には・・・。

目の前に現れた扉をゆっくりと開ける。すると一陣の風が彼女の水色の髪の毛を撫でる。フワリをかきあげられる髪。乱れないように、とっさに手で押さえる。

ゆっくりと外に出る。そこは芝生のある屋上であった。乾いた芝生をふむ足音だけが、夜天の下の世界に響き渡る。演奏者だけの開演場……。そこには観客の姿はない。

まるで暗い会場に月光がスポットライトのように、舞台上上がっている簪のことを照らし出している。キラキラと光っている星星も、この時ばかりはまるで涙のように儚く見えた。

やっと一人になれた……。そう思った瞬間、せき止めていた涙がダムが崩壊したようにとめどなく溢れてくる。着ていた服の袖で拭いても、止まることなく流れ出てくる。

思い出すだけで胸が張り裂けそうになる……。いつも自分が思っていることであっても、やはり人に言われるということはそれが当たり前のように思えてしまったのだ。自分が否定したいことが・、当たり前のように思えてしまつて怖かったのだ。

『ねえねえ知ってる。4組、私のクラスの代表の更識さんなんだけど、専用機つてどうなってるのかな?』

『そういえば、代表候補生だったよね?』

『うん。だから専用機を持っていたもおかしくないんだけど……。』
『確か倉持技研だったよ』

『あれ??そこつて確か一組の織斑くんの専用機も製造してなかった??』

『そうそう、織斑くんのほうにかかりつきりだったらしいよ』

『え??それじゃあ、更識さんの専用機つて……。?』

『まだ完成してないらしいよ??でも聞く話だと、自分で完成させるって啖呵を切って引き取ったらしいよ』

『えゝ、それって無謀じゃない??』

『だよねゝ。いくらなんでもそれはないよ。えっと、確かこの会長、確か更識さんのお姉さん??専用機を自分で完成させたって言うけど』

『代表選手だったよね。ぶっちゃけ会長と同じ事ができるわけないよ。身の程知らずってやつ??』

『会長みたいな天才に、凡人が追いつけるわけないよねゝ』

分かっていたはずだった。そう、誰よりも姉のことを・・・、更識楯無の事を身近で見ていた簪だからこそ分かっていたこと。彼女と自分には大きすぎるほどの才能という名の溝があるということだ。どれだけ努力で埋めようとも、簪が10でようやくできることを、彼女はそれを半分の5でできるようなものだ。そう、それは決して彼女の手の届かない、自分と真上から照らしてくれている、この場所だけにだけがいるということを証明してくれている月に届くことのない距離があるように・・・。

ただ自分を、更識簪を見てほしかっただけなのだ。更識楯無の妹ではなく、ただ一人の更識簪として・・・。それがいつしか姉に対するそつけない態度に表れ、一人で完成させると倉持技研から引き取ってしまうという行為に走ったのだろう。

今の彼女は不安定であった、まるで微風だけでも飛んでいってしまいそうな、タンポポの綿毛のように……。そんな支えは要らない……。いつからそう思っていたのだろうか。しかし、今になって一人しか居ないこの世界がとてつもなく怖かった。自分を見てくれているのは楯無の妹だから???。なramし彼女の妹でなかったら・・・。そう思うだけで世界の色が一瞬にして失われた。そんな彼女の

後ろから突然ドアが開く音がした。

風が再び一陣吹いた。

「簪・・・」

その風に流されるように、簪の体の向きはその声が生じた方へと向く。そこには赤茶色の髪、燃えるような赤い瞳を持った少年・・・紅月飛鳥がいた。

「どうして・・・??？」

誰も来るはずがない。そう思っていた彼女にとって、飛鳥の登場は衝撃以外の何物でもなかったのだ。ただ彼の燃える炎を象徴した瞳だけがこちらに向けられている。

「どうして来たの・・・??？」

それは彼女が真っ先に思った疑問だった。彼がここに来る理由はないはずだから。疑問に染まった瞳で飛鳥のことを見つめる。大して飛鳥はというと、真っ直ぐな瞳を黙って簪に向けている。不意に彼の口が開いた。

「それは・・・、放っておけなかったから」

「!!」

衝撃だった。一瞬何を言われたのかを理解できなかった。その衝撃で一瞬からだ雷に打たれたように痺れた感覚で動けなくなっていた。ゆっくりといわれた言葉を反芻する。

“放っておけなかったから”

それはどうして。最初に簪に思い浮かんだのは自分が楯無の・・・、姉の妹だからということだった。そんなことだったら・・・、来てほしくなかった。まるで哀れみの目で見られている気がして・・・。今の彼女にとっては、傷に塩を塗りこむようなものだから。

「あんなに言われて、泣いてたじゃないか、お前・・・」

「だから・・・何??」

「え??」

飛鳥は簪から言われた言葉に、一瞬きよんとしてしまう。彼女が向けているのは明確な怒り、として悲しみ。

「私を慰めに来たの!??それとも笑いに!??」

「ちょ、ちょっと待てよ・・・」

「どうせ飛鳥だって・・・、あの子たちと同じように思ってたんでしょ!!!私はどうせ姉さんに追いつけない!!!身の程知らずの凡人だって!!!」

「な、何言ってるんだよ!!!俺はそんなこと、思っちゃいない!!!」

そう手を広げ、近づきながら言う飛鳥。そんな飛鳥が近づいたそのとき、何かが額に当たった。そこまで硬いものではなく、何か紙のようなものが布のようなものに包まれている・・・、そんな感じであった。

「来ないで!!!」

そう悲鳴に近い声で簪が何かを取り出して飛鳥に投げつけたのだ。こちらに来るな、拒絶された感じで、飛鳥は少し胸が痛んだ。決し

て自分はそんな気持ちはなく、純粹に彼女のことが心配なだけだったのだ。

柔らかな芝生にそれがゆっくりと落ちる。芝生がその重みで少し折れる。ずっと膝を折り、それを手にしてみている。最初は何か分らなかったが、雲に隠れていた月が顔を出すと、それと共に二人をスポットライトで照らしたのだ。

「これ・・・お守り」

それは彼女が日本の代表候補生になる前に飛鳥があげた必勝祈願のお守りだった。どこにでもあるようなデザインのものであるが、かなりぼろぼろになっていても持っていてくれたようだ。思わずうれしさが胸にこみ上げてきて、笑みが零れる。

「持っていてくれたのか」

「・・・」

「聞きたくなきゃ聞かなくていい。でも、どうしても放っておけなかったんだ。涙・・・。お前、泣いてたから」

小さい頃から見てきた簪のことであるが、泣いた様子など、ほとんど見たことがない。いつもクールを装っている彼女。

「俺が何してやれるってわけでもない。ヴェステイージのことだって、お前たちのおかげであそこまで戦えるようになったわけだし。知識はお前のほうがある。支えになってやるっていつでも・・・、いつも支えてもらっていた奴が言う台詞じゃないよな・・・」

乾いた自嘲をもらす。白騎士事件の後、葬儀など、あらゆることを一手に引き受けてくれたのが更識家と布仏家であった。何も縁の

ないただの一般家庭のために、そんな大きな家柄のものたちが手を施してくれたのだ。

その当時、心身ともにぼろぼろであった彼がお礼を言えたかという、できなかった。ただただ喪失感と向けるものがない、ただ体の中に積もり積もる怒りだけがあったであつた。

「でも・・・、それでも!!」

必死に語りかけてくれる飛鳥。簪も無視を決め込んでいたが、いつの間にか耳を傾けていた。

「お前が泣く顔を見られたくないんだったら・・・。俺が隠してやる。それくらいしか・・・、できないけど」

「え・・・」

「知ってるんだ・・・。お前、泣いてないっていう印象があるけど。本当は隠れて泣いてるんだろ?? 小さい頃から、変わってない」

「知ってたの??」

簪がまさかというように目で飛鳥を見る。たまたまそれを見てしまい。それ以降、簪の姿が見えなくなったとき、探してその度に泣いている姿を見ていたなんて、言えるはずが無い。

「あ、ああ・・・」

そう言う飛鳥。そうと呟く簪。誰にも見せたことが無い涙。しかし、本当の彼女を見ていてくれた人もいたのだ。もちろん飛鳥だけではない。姉の楯無だって、使用人の虚も本音もだ。ちゃんと更識簪という存在を見ていてくれたことに、うれしさが溢れる。それと同時に、先ほどの女子生徒たちから言われた言葉で傷ついた心から

溢れ出すものが、涙となる。

「あ、いや・・・、何で・・・」

またダムが崩壊したかのように、溢れる涙が止まらない。ほっとしたのがきつかけなのか、先ほどよりも多くの涙が溢れてくる。見られたくない。涙でぐしゃぐしゃになった顔など、人に・・・、それも異性に見られていいものではない。

「ああ、もう！！」

「え??」

突然のことに、何がなんだか分からない簪。突然自分よりも大きな体に包まれたということだけが分かった。軍事学校で鍛えられたのか、昔の頼りない胸板とは違って硬く、そして暖かかった。耳を当てるとときどきしているのが鼓動を通して伝わってくる。自分が今飛鳥の胸にいることを知り驚くと共に、何故か安心感が感じられた。

「これで誰もお前の泣いているところ・・・、見えないだろう??」

「え、うん・・・」

「周りには誰もいない。下にも聞こえはしない・・・、だから」

今くらい泣けばいい。そう言うもやとしたものは、涙と一緒に吐き出してしまえば、少しはすっきりするのではないか。簪はそう言われ顔を飛鳥の胸にうずめて泣いた。まるで幼子のように、脇目も振らず大声で泣いた。こんなに泣いたのはいつ以来だろうか。

幼い頃、一度だけこんな風に誰かに抱きしめられて、その誰かの胸に顔をうずめて泣いたのを霞がかった記憶であるが思い出した。あ

の時は一体誰だったのだろうか・・・。ぼんやりと赤茶色の髪の毛だけが見えた・・。

PHASE 12 星空（後書き）

ED2↓REASON>玉置成実<

長い・・・長かった・・・。

これで一つはフラグ的なものが建てられたかな・・・??

これは一つのきっかけ。恋愛を書くのは難しい・・・。

ご感想や誤字脱字があればよろしくお願いします。

PHASE 13 クラス代表戦開始!! (前書き)

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

また、長くなりました。明日も投稿できるかわかりません。申し訳ありませんが一日おきか、やや間を空けることになるかもしれません。

それでも待ってもらえればうれしいです。

ご感想お待ちしております。

PS 主人公が相変わらず辛い境遇にありますが、必ず彼にはいいことがあります。ありますので、そこは耐えてください!!

PHASE 13 クラス代表戦開始!!

昨日のことは、お互いに秘密にしようということになった。流石に根掘り葉掘り質問されてはお互いに困る。そう言う関係であればまだいいが、そうではない今は流石に避けなければいけない。少し残念そうな表情をしていた簪であるが、飛鳥はそれに気づかない。

クラス対抗戦が近いということで、トーナメント表が張り出されるということだった。生徒玄関前の掲示板に張られており、そこにはたくさんの生徒たちが集まっていた。やはりトーナメントに二人の男が出場するという事で、かなり注目度は高い。

「どいてくれ」

そう言うと、前にいた生徒たちの顔が少し朱に染まり慌てて、道を作ってくれた。札を言って掲示板の前に立つ。そこにあったのはそれぞれのクラスのタッグとその対戦表であった。

「一回戦の相手は・・・3組??誰だ??」

そこには飛鳥が全く知り合いや話す機会がない組のタッグの名前があった。日本人の名前であるために、専用機持ちのものではないだろうとは思ったが、どれほどの実力かは分からない。

すると後ろから飛鳥に対して声がかかる。やや気に入らない口調であった。振り向くとそこにいたのは、昨日簪について悪く言っていた女子生徒たちであった。

また、こいつらか・・・。

彼女たちのほうも、飛鳥がそこにいるとは思わなかったらしい。彼女たちの視線は掲示板に張られている対戦表から飛鳥へと移る。

「あなたのせいで昨日は散々だったわ」

「そうよ、おかげで私たちだけが織斑先生に怒られたんだから」

「なんだよ。最初に喧嘩をふっかけてきたのはお前たちだろ」

昨日のことを根に持っている彼女たちの言葉に、飛鳥は負けじと言いつ返す。どうやら彼女たちは嘘はつけずに、ありのままを千冬に話したらしい。彼女に嘘をつける人間はこの学園にはいないだろう。

当然のように怒られるのは彼女たちであるが、それでも飛鳥もあの場を乱した一人である。おそらく後で説教が飛ぶだろうということとは覚悟の上である。正直めんどくさいことこの上ないが……。

「でもラッキーね。これで憂さ晴らしさせてもらうわ」

「男同士のタッグ??? まさか広告塔にでも建てられたのかしらね」

それを聞いた回りからも小さく笑い声が聞こえてくる。それを聞いて、むっとした表情になる。

「何言ってるんだよ。クラス代表決定戦で勝ったからだ。変な言いばかりをつけるなよな」

「へえ。でも、それに参加した人の実力が低かったんじゃないの???」

「!?! なに……」

そう言ってくる女子生徒。沸点の低い飛鳥にとって、人を馬鹿にするような言葉は気に入らない。その言い方から、誰と戦ったのか

は知らないらしい。見聞きもせず、自分の憶測から言っているのが許せなかった。あの時確かに代表候補生であるセシリアに勝つことはできた。

だが、あの時は明らかに彼女が本気を出すのが遅かったのが勝因の一つでもある。一度気を抜いた状態から本気に持っていくなど、彼女の年齢からして、難しい。更に、精神的な衝撃もあり、多少なりともそれを阻害した焦りがあったのだろう。

今なら正面を切って戦えるかもしれないが、あの時の實力からして、悔しいが、真正面から戦っていれば負けていたというのが現実だっただろう。そう考えると、今回は非常にラッキーだったというわけだ。

「ふざけるなよな。誰と戦ったかも知らないくせに。噂だけで話をするようなお前に負けるかよ!!」

「!! 言ってくれるわね・・・」

こめかみをひくつかせている女子生徒。彼女も相当プライドが高いらしい。實力のほどは分からないが、手を抜くほど戦闘に関して馬鹿ではない飛鳥。むしろ叩きのめしてやるといった気持ちである。

「いいわ。当日は楽しみにしてるわよ。あなたとその機体が無様な姿を晒すことをね」

「ならお前も覚悟してるんだな。俺は手加減できるほど器用じゃない」

「くっ……。いいわ。行きましょう」

一緒にいた数人を引き連れてその場を去っていく。どこかの令嬢

だろう。そんな雰囲気と仕草が見て取れた。

そんな彼女たちの後姿をにらみつけるような視線で見ている飛鳥であるが、そろそろアリーナに行こうと思い、足をその方向に向けるのであった。

飛鳥が防護スーツに着替え、アリーナへと向かっていると、向こうのほうからなにやら声が聞こえてきた。声色からして女子生徒であるのは、当然この学園に二人しか男子がいなかったために決定的であるが、その声でとあるワードがあったので、その会話主が限定的になった。

「はいはい、話が進まないからアンタ達とは後でね。ところで、一夏。あの件についてだけど・・・、反省した??」

一夏という言葉であるために、おそらく先に来ていただろう3人がいるのだろう。だが一人、箒でもセシリアでもない声があった。一夏の関係上、あの転校してきた中国人であろうかと思いつつも、アリーナへと向かう。

「へ? 何が?」

「だから!! 『あたしを怒らせて申し訳なかったな』とか『仲直りしたいな』とか色々言うことがあるでしょうが!!」

「いや、そう言われてもな・・・。と言うか、鈴の方が俺のことを避けてたんじゃねえか」

その会話を聞いている限り、一夏がまた女性関係の問題に大して何かをしたらしい。相変わらず巻き込まれる体質だ。

「一夏アンタって人はねえ……。じゃあなに？？もし、女の子が放っておいてって言ったら、アンタは、はい分かりましたって素直に放っておくわけ！？」

「おう」

単純な馬鹿である。馬鹿正直なのは、時と場合によってこんなにも相手を傷つける鋭利な刃物になるだろうか。なんとも思っていないように、至極当然のように言っている一夏は気づいていないかもしれないが、それを言われた鈴の心には小さく傷がついていた。

こんなことになっていたのは転校してきた鈴が一夏に対していった言葉への返答であった。彼女が中学生時代、中国へと戻らなければいけなくなったとき、一夏に対して料理が……。このときは酢豚であったが、それがうまくできるようになったら毎日食べてくれるかということだった。

そのとき一夏は何気無しにそれを承諾した。日本人であったなら、それは味噌汁に変換し、遠まわしに告白していることなのであるが、生憎鈴は中国人、そのために味噌汁ではなく当時彼女の作っていた酢豚を代わりに使ったのだ。

その言葉の意味を知っていて、気づくことができればよかったのであるが、唐変朴、朴念仁、鈍感である一夏が気づくはずもなく、ただ自分のために料理を作ってくれるのかと、純粋な友達感覚で受け取っていたのだ。

ここで二人の間に認識の齟齬が発生し、IS学園で再会した二人の間でそれが明るみになったということだった。

「それがどうかしたか？？何かおかしいこと言ったか？？俺」

「おかしなことを言ったかどうかって・・・ああもう！！信じられない！！謝りなさいよ！！今すぐに！！誠心誠意、心を込めて！！」

自身の言ったことに何も疑問を持たない一夏。ここまでくれば恋愛という方向に対してまったく感覚というものを持っていないのではないかと疑いたくなるような発言である。

そういわれた鈴はむしろしゃしゃしているのか髪を掻き立てる。そんな彼女を見ているようやく彼女の酢豚の言葉の意味を理解したようであるセシリアは哀れんでいる視線を向け、箒はというと、一夏がそんな約束を自分の知らないところで、つい最近まで知らなかった女としていたということに対してかなり気分が悪かったが、内心では一夏が全くその言葉に意味を理解していないようであることを知りほっとしていた。

とはいえ鈴よりもアプローチをかけていることが少ない彼女に一夏が好意というものを向けているわけでもなく、はっきり言って現状は全く変化無く進んでいたのだ。

「だからなんでだよ、一体！！」

とうとう一夏のほうもいい加減にしてほしいというように言う。

鈴はそれを聞いて信じられないというような表情で見ている。彼女にとっては死活問題であるが、そんな風に言われるととてもではないが我慢できない。

ズキズキと胸が痛む。こんなに好意を向けているのに・・・。けなしの勇気を振り絞って、言葉にしたというのに・・・。伝わらなければそれは意味はないというが、流石に一夏の言葉は彼女にとっては想定外であった。

「それにちゃんと約束覚えてただろうが!!」

詰め寄ってそう言う一夏。逆に一步下がり、たじろぐ鈴。

「あ、呆れた。まだそんな寝言言うっていうの!? アンタの言った約束の意味が違うのよ!! そう・・・、意味が!!」

乾いた声で笑いながら、首を横に弱弱しく振りながら言う鈴。その姿はあまりにかわいそうである。もう我慢できずに、出てくる言葉は告白でもなければ、その意味を問い詰める言葉でもなかった・・・。ただの罵声だ。

「アンタは本当に馬鹿ね。馬鹿よ、馬鹿!! 大馬鹿!! この朴念仁!!! 唐変朴!!! 鈍感!!! 間抜け!!! アホ!!!」

「うるさい、貧乳!!!」

その瞬間。鈴の中で何かがぶちきれた。もはや無意識の行動であった。起動させた彼女のIS・・・部分展開で腕だけであった。しかし、それを虚空に叩きつけるだけで巨大なクレーターを作り出していた。

流石に目の前でそれをされた一夏も筈も、セシリアも驚きを隠せなかった。それがもし自分に当たっていたらと考えると恐ろしい結末しか考えられない。

「い、一夏・・・??? あ、アンタ・・・。い、言ったわね・・・?」

怒りで震える鈴。後ろには彼女の感情を表しているかのように黒

いオーラのようなものが見え隠れしている。一夏も流石にこれはまずいことを言ってしまったと自覚したのか分からないが慌てている。

「アンタ・・・言ってはならないことを、言ったわね!!」

怒り心頭の様子が、小さく小刻みに震えている肩を見て分かる。

「い、いや。今のは悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の“は”!? 今の“も”よ!! 今回のことも含めて・・・、何時だってアンタが悪いのよ!! この、馬鹿一夏!!」

まるでミサイルでも着弾したのかというような大きなクレーターが形成され。それがまるで今の鈴の怒りの指数を表しているかのように、圧倒的な存在感を示していた。

「ちょっと手加減してあげようかと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね・・・。いいわよ、アンタの希望通りにしてあげる・・・。全力で叩きの召してあげるわ!!」

そう言って鈴は踵を返してアリーナを出て行くように、走り出す。入り口近くにいた飛鳥と俯いた状態で走ってきた鈴がぶつかると。鈴は下しか見ていなかったために、飛鳥がそこにいたことに気づくのが遅れた。

「邪魔よ!!」

「な、なんだよ!! その言い草は。そっちがぶつかってきたんだろ!!」

「うっさいわね。私は今急いでるのよ!!」

そう悲鳴に近い声で言いながら再び走り出そうとしている。背中を向けた瞬間。飛鳥の手は、彼女の腕を掴んでいた。掴まれた瞬間、大きく驚いたように体が反応したのが見えた。

当然異性にいきなりつかまれたのだから当然の反応であろう。だが、それだけではない震えも見取れた。向こうから何かあったのだろうかと、いきなり走り去った鈴の叫び声が聞こえてきたのだろう、一夏たちがゆっくりとこちらに向かってくるのが見えた。

このまま彼女を放っておくわけにもいくまい。そう思った飛鳥は彼女の体を後ろから急かすように押して、廊下を進み、人気の少ないところにきていた。もちろん一夏たちには少し野暮用があるということを伝える。

それについてあまり詮索されなかったことに関しては感謝している。取りあえず涙目になって小さく震えている彼女をどうにかしなければいけないだろう相当言い合っているのが聞こえていた。

「ああ、取りあえず。あいつと何かあったのか??」

飛鳥は一夏と彼女の関係は深くは知らない。ただ幼馴染であるということだけであり、何やら約束事をしていた。そして、それを一夏がどうしたわけか、彼女の意味合いと別の意味合いで捉えていたということだった。

あまり刺激しすぎないように尋ねる。小さくまるで猫のように唸るようにして下からにらみつけるように見上げてくる。一夏に対する怒りがまだ収まっていないことに対してなのか、いきなりこんなところに連れてきて、どう下などと聞いてくるお節介な飛鳥に対してなのか。それはどちらにせよ、前者は理不尽であり、後者は申し

訳ないというものだ。とはいえ、無視できるほど、飛鳥は女性に対する対応に長けているわけではなく、男女関係なく、ただ見過ごせないから声をかけたというものだった。

深い意味も、卑しい意味もないのだ。取りあえず、鈴の返答を待つ飛鳥。どうしようかと、連れてきた方がいいが、このような経験は全くといって皆無である飛鳥にとって一つ一つの選択肢を慎重にしていかなければいけないのだ。まるでR18指定のギャルゲーみたいだと言われてもおかしくない状況なのである。取りあえず、かなり緊張している。

「何で、アンタ。こんなことするのよ・・・」

「べ、別に・・・。お前、泣いてたじゃん」

「な、何よ!! べ、別に泣いてなんか!!」

そんな目を赤くした状態で言われても困る。相当彼女にとっては重要なことだったようだ。それを覚えてもらえていなかったこと、相当ショックを受けている。まるで約束を破られ、ぐずっている幼子のようなだ。

「あのなあ・・・」

溜息をつき、相変わらず頑固な赤茶色の寝癖頭をかき上げる。

「そんな涙目で言われても、説得力ないぜ」

「うるさいうるさいうるさい!!」

「おわ!?! 殴るなよ、いてえ」

飛鳥の胸に対して拳を叩きつける鈴。結構な力があるようでかなり痛い。ここでISを起動させられなかっただけラッキーなのかも

しれない。そこまでは冷静に落ち着いてきたのかもしれない。

「あいつと何かあったようだけど?? 大切な約束でもしてたのか?」

「そうなのよ、聞いてよね。あの馬鹿一夏ときたら、もう全く信じられない!!」

といわれても一夏で無いから良く分からないが。相当お冠であるのは見て分かった。取りあえず、引き受けてしまったこんな厄介ごとを引き起こした一夏に対して軽く呆れていた。どうしてこうも女性関係の問題が多いのだろうか、自分もそういうところがあるのを棚に上げて思っていた。

「で?? 一体何があったんだよ。言い争ってるくらいしか分からなかったけど」

「あ、アンタには関係のないことよ」

プイッと顔を背ける。なんとも話しづらい相手だと飛鳥は内心思っていた。もしかしたら自分とはんでもない問題に頭をつっこんでしまったのではないかと、自らの軽率な行動に対して頭を痛める。

「ああ、そうかよ。なら俺は行くぜ」

顔を背けたまま、下を寂しそうな表情で見ている彼女を見て、これ以上何を言っても、多分意味はない。そう判断して飛鳥はそう言っただけでその場を立ち去ろうとした。

だが、突然防護スーツの上に羽織っている服をまるで羽毛に触れるようにちょこんとつまんで引きとめている鈴がいた。恥ずかしそうに顔を赤らめ、右手で服をつまみ、左手は握り拳を作って胸のあ

たりに添えている。なけなしの勇気で行動したのだろう。

「なんだよ・・・」

飛鳥はそれを見て参ったというような表情でいる。こんな顔をされてはまるで自分がいじめているようなものである。

「俺は関係ないんだろ？？悪いけど、対抗戦の練習が・・・」

「す、少しくらい・・・。話くらい聞いてくれても、いいでしょ」

「さっきは関係ないって言ったくせに」

「そ、それはそれ。これはこれよ」

なんて身勝手なんだ・・・。それが飛鳥の鳳鈴音に対してもった感想であつた。慌てたように言う鈴。少しずつであるが、話を始めた。

それは彼女が日本に来たときの話であり、一夏との出会いの話でもあつた。小学校5年生のときに両親と共に中国からやってきた。

小学校というと、やはり自分と違う何かに過敏に反応する年頃である。そして、鈴にはほかの子どもたちとは違う何かを持っていた・・・。

それは彼女が日本人ではなく中国人だということだった。まだ来たばかりであり、勉強をしたとはいえ、スラスラと流れるように日本語を話せるわけもなく、ところどころつかえたり、イントネーションがおかしかったりと、いたずら盛りの子どもたちにとっては格好の餌食だったのだろう。

「虐められていたのか」

「・・・うん」

やはり幼かった彼女にとっても、それは話すことも辛いだろう。いくらそれが出合いのきっかけになったかもしれないとはいえ、周りとは違うというレッテルを貼られた彼女は孤独だったのだろう。

異性には虐められ、同性にも助けを求めることができない。彼女はその頃小学校では、ただ一人だけの世界にいたのだ。周りは灰色に染まり、何も色がない、孤独な世界。色褪せてしまったこんな世界に一秒たりとも居たくない。

そう彼女がどう思おうが、虐めは続く。更に、いじめが続くのは当時から変わっていない強気な彼女の性格にもあった。言葉は不自由でも、言い返すことはする。それが更に虐めっ子からすれば癪に触ることであるために虐めが繰り返される。

「辛かったよ・・・でも、当たり前だよね・・・、虐められるのって大抵周りとは違う何かを持っている奴ばかりだから・・・」
「!!」

ヒュッと息を呑んだ。それは当時の彼女のことでありながら、今まさに飛鳥のことがそのまま当てはまるのだ。一人だけ浮いている・・・。そうあの時の女子生徒が言っていたが、自分はこの学園では大きく浮いた存在なのではないかと、今更になって思わせられた・・・。

俺は浮いた存在・・・。

誰にもそうは言われてなくても、そう思われているのかもしれない。だが、飛鳥にとってはどうでもいいことだった。確かに、そう

言われるならだからなんだと言い返すだろう。

自分にとって、ここにいる理由は更に強くなることと、ISに関わって伊ることで何れ現れるであろう家族の仇・・・、篠ノ之束を殺す事にあるのだから。運がよかったのか彼女の妹である篠ノ之箒の存在もある。彼女が箒に対してどういう感情を向けているのかは知らないが、何かしらの接触を図ってくるだろうということは分かっていた。そして、彼女を守るようにしていた白騎士・・・。あの時の夢が正しければ・・・、彼女と親しき者が・・・、それもまたISに関してはトップレベルな実力があるもの。例えば世界最強のIS操縦者、ブリュンヒルデと呼ばれた織斑千冬がいい例だ。

鈴の話は続く。虐められている間。それを教師に話すこともできない。もし話してしまえば更に虐めが酷くなるという恐怖があったからだ。いくら強気な彼女の性格でも、それは寂しがりやな性格の裏返し。少しでも周りに気を向けてほしいから・・・。

両親にも言えるわけがない。中華料理店を切り盛りして、いつも忙しい両親の楽しみというのは、鈴の小学校での出来事であり、鈴の笑顔であった。そんな二人に対して辛い虐めのことが話せようか・・・。

「言えないよ・・・、言えるわけがない」

「・・・」

「あんなに楽しみにしてくれている二人に・・・、悲しい顔なんてさせたくないもん」

彼女にとっては二度と戻ってこない暖かい家族との団欒。それが手が届かないもののように、写真という形で彼女の目の前に突きつけられているような気がしていた。

「でもね、虐めが始まってから一週間位してからかな・・・」

「あいつか・・・」

「うん・・・」

そのときの鈴の表情は先ほどもまでの暗い表情から懐かしいような、それでこそ大切な思い出、彼女の世界にまた色が付いた瞬間を思い出すように笑顔になっていた。

それだけ大きな出来事だったのだろう。だからこそ、一夏と一緒にいた彼女にも、そんな恋心が生まれないわけがないのだ。だが、それに気づくことない本人は一体なんなのか。

『いい加減にしろよ!! 虐めなんてかっこ悪いだけだ!!』

『何だよ、織斑!! 休んだ、戻ってきたらいきなりそれかよ!!』

『正義の味方気取りかよ』

『虐めをするよな馬鹿よりは何倍もマシだよ!!』

『このやろう!! 前から思ってたけど、お前むかつくんだよ!!』

『やるか!?! このやろう!!』

一夏はどうやら家の事情で一週間ほど・・・つまり鈴が転校してきたときにいなかったのだ。そして、久しぶりに学校に来たら目に付いたのが彼女に対する虐めだったということだ。

別に正義の味方気取りというよりも、虐めなどが嫌いである一夏の性格上、当然の行動であった。その後、鈴を虐めていた少年たちと、担任の教師が騒ぎを聞きつけてやってくるまで取っ組み合いが続いたらしい。

「私はね、その時ただ見てるしかできなかったの・・・いきなり

現れた男の子・・・、一夏ね。私のこと知らないはずなのに、あんなにムキになっちゃって・・・。最初は意味分からなかったけど、自分のこと守ってくれたんだって思ったら・・・、ね」

「好きになってたってか?？」

「／／な、な、何でそんなに平気に言えるのよ。まるで他人事のように!!」

飛鳥としては真剣に聞いていて、そのまま思ったことをいったままであったのだが、彼女にはそれがお気に召さなかったようだ。まるで怒っている猫のようだ。

「そ、それで、また中国に戻るようになって・・・」

それでまた再会したときに答えを貰いたい。そう言う気持ちを込めて彼女は一夏に対して日本で言う味噌汁を酢豚に変換して思いを伝えたのだ。彼女の思い虚しく、それは伝わっていなかったようであるが・・・。

「でも、相変わらず変わってなかったわ。やっぱり一夏は一夏ね」

「馬鹿で、唐変朴で、空気が読めない・・・、奴?？」

「流石に言い過ぎて・・・、わけじゃないのよね」

苦笑いを含めて飛鳥の言った言葉に対して否定できない鈴は小さくため息をつく。それでも表情には笑顔があった。それは変わらな一夏に対してなのか、それとも思いが伝わっていなかったことに対する自らへの哀れみなのか・・・。

それを飛鳥に知る術はなく、鈴だけが知ることである。大きくまるで猫が兵に飛び乗るかのように見事な跳躍を見せ飛鳥から離れる。そこにはもう、先ほどまであった重苦しいオーラは完全にはない

が、なくなっていたように見える。

「一夏にも言っておいたけど。アンタもぼこぼこにしてあげる。それが今のお礼よ。代表候補生と戦えるんだから、うれしいでしょ」
「何だよ、その手荒いお礼は・・・」

そんな綺麗にビシッと言う効果音がぴったりな指差しを飛鳥に向けている鈴に対して、小さくため息を吐きながら言う。また、大きな戦いになるだろう。そんな彼女と戦う前に、あの三組のペアを潰さなければ意味がない。

「それじゃあ、せいぜい腕を磨いてるのね」
「それはこっちの台詞だ」

そう言い返して、背中を向けて去っていく鈴とは逆のアリーナへと足を進める飛鳥。すでに優しさなどという甘えを一切捨て去った戦う者の目をしていた。バサツと羽織っていたものを投げ捨て、ヴェステイージを起動させ、アリーナに舞い上がるのだった・・・。

一通りの訓練が終わり、一夏たちは揃ってアリーナを後に行っていた。途中で更衣室が別々ということで別れ、待ち合わせ場所を指定しておいた。夕食を鳥に食堂に行くためでもあった。

それぞれスーツを脱ぎ、着替えをする。更衣室に設備されたシャワーを浴びる。激しい運動をした後であるために、かなり体がべたついていた。買い換えたばかりのシャンプーを使い髪を洗い、汗を流れ落とす。

「なあ飛鳥・・・」

「なんだよ」

突然隣のシャワーを使っている一夏が話しかけてくる。どうやら途中で飛鳥が野暮用だということで訓練に参加しなかったことについてであった。そのとき近くにりんがいたということで、二人に何かあったのではと思ったらしい。一夏としては鈴に対して言い過ぎた所があるので、もし何か言っていたら教えてほしいということであった。

「別に。特に何もなかったさ」

「そうなのか??」

怪訝そうにしてこちらに視線を向ける。相当後悔しているようだ。こういうところは純粹だから氣に病むのかもしれない。とはいえ無自覚に女性を引っ掛けては、思ったことを口にするから色々とタチが悪い。

「だからといって、流石にあればないだろ」

「だよ、な・・・」

髪を洗う手を止めてシュンとなる。そこまで落ち込むくらいなら少しは女心を勉強したほうがいいのではないか。とはいえ、そう思う飛鳥も一夏程ではないが鈍感なのであるが。

それからバスタオルでからだを拭き、着替えを済ませると、荷物をしまっているロッカーに手を伸ばす。

「ん、なんだ??」

ロッカーの扉に挟まれて一枚の紙。一体なんだというように思い

ながらそれを抜き取り、おられているそれを開く。

「・・・」

「どうした??」

ロッカーの前に立ち、動かない飛鳥を見て、すでに扉のノブに手をかけていた一夏が尋ねる。何でも無いと言い、少し幼児ができたということ伝え、更衣室を出てから分かれることにした。

“生徒会室へ”

その文字だけで、誰が呼んでいるということと、何か厄介なことだということだけは分かった。

「ここか・・・」

飛鳥が制服姿でやってきたのはロッカーに挟められていた紙切れに書かれていた指定場所である生徒会室であった。どこにでもあるドアであるが、何故か異質な感じがして、その中と外では別空間なのではないかと思うくらいであった。

「何で俺をこんなところに・・・」

そう呟きながらも軽くノックする。中から落ち着き払った女性の声をする楯無でも、本音でもないとなれば、本音の姉である虚であろうと思い、扉を開け、中へと入る。

「失礼します・・・」

「よしよし、ちゃんと礼儀はわきまえてるわね」

ムスツとしたように一言言っただけの中に入った飛鳥に対して正面の大きな机に座っていた楯無が大きく頷きながら満足そうに言う。
その横に並ぶ机の上に山のような書類と共に、湯気だつてお茶が見える。

「お待ちしました」

「アーちゃんだ」

中央のテーブルに座るように言われた飛鳥の手元に虚がお茶を持ってきてくれた。それを啜って、用件を聞こうと楯無の事を見る。

「で、俺をここに呼んだのは何だよ」

「そうね・・・」

そう切り出した飛鳥。とたんに真剣な表情に変わる楯無。いつも悪戯をしてくるような陽気な彼女とは思えない。そんな雰囲気が生徒会室を包み込む。それが対暗部の家系である楯無の名を継ぐ者の顔なのかもしれない。

ごくりと生唾を飲み込む。手を組んで口元を隠している彼女がゆっくりと口を開く。

「とある情報ルートからなんだけど、今度のクラス対抗戦で何か起きそうなのよ」

「はあ??? どういうことだよ」

突然襲撃まがいのことを聞かされ、理解が追いつかない飛鳥。しかし、横にいる二人の様子を見ても、それが何の冗談でもないこと

がわかる。

「どういうことだよ・・・」

「不確定だけど、何かが起きるということよ。一応私たちのほうでも手回しをするけど・・・」

「それに出場する俺に警戒しておけ・・・、ということなのか??」

「ええ。アックンがこの学園の中でも織斑くんと同じくらい異質だということもあるし、何より使っているのがISじゃない」

楯無の視線の先には、飛鳥の手首にある赤く光っているブレスレット・・・、待機状態のヴェステイージがあった。

最初は単なる宇宙服と同じようなものであったそれも、ISのデータを流用することによって完全なる兵器と化していた。それだけであればまだ分かるが、まるでISのように自己進化を続けているヴェステイージ。まるで成長期だといわんばかりに急速にである。

狙われる理由として挙げられる筆頭が、男で唯一ISを起動させることができた織斑一夏。そして、飛鳥・・・というよりも飛鳥の持つMS『ヴェステイージ』であろう。

俺はついでかよ・・・。

そう内心自嘲気味に思う。MSにとって操縦者というのはあくまでそれを動かす人間である。ISと違って拒否反応無しに性別関係なく起動するために、重要なのはMS自身であり、一夏のように生身のほうではないのだ。別段、世界で有名になろうなどという考えはない・・・。

「いつどこから来るかわからないの。いくら警戒してても、それに

は限界があるのよ」

「なんだよ、いつになく弱気だな」

「おねーさんだって人間だよ？？　そう言う心配はするものなの」

いつも陽気な彼女からは想像もできない言葉であった。少し意外な彼女の一面を垣間見ることができた気がした。しかし、何故自分にそんなことを伝えるのだろうか。それよりだったら、気に入らないが千冬など教師たちあたりに伝えたほうがいいのではないかと思った。

とはいえそれは対暗部の家系である彼女たちからの情報でありおっぴらに明かすわけにもいかない。伝えたとしても最低限である。

「伝えた理由は簡単だよ。アツくんに釘をさしておくため」

「俺に？？」

どういう意味だよというように彼女を目を細めて見る。確かに目の前で何かがあったら飛鳥は迷いなくそれに突っ込んでいくかもしれない。それを自粛するように言う楯無のその釘を指すという言葉。それはまるで……。

「俺に関わるな……、まるでそう言いたいみたいだな。あんたは」

「名前と呼んでよー。おねーさん……、寂しい」

「ふざけるなよ……」

いらいらしたように言う。そこには一抹の寂しさがあった。彼女を見ても申しわけなさそうにしている。純粹に心配だからそういつているだけなのだ。それはわかる。だが、飛鳥だって……、プライドや意地というものはある。

「そこまで重要なことを俺に言っておいて・・・、関わるなって、ふざけてるのかよ!!」

「そうでもしないとアツくん、いくらでも頭つつこむもの。そうなたったらフォローしきれないわ」

「くっ!!」

つつこまれた飛鳥は言い返せない。いくら訓練を受けているといっても元の人間性というものは大きく変えることはできない。元来、感情で大きく動いてしまう飛鳥。回りのものが危険で、その元凶があるというならいくらでも頭をつつこんでしまう。

そう言うことも含めて彼女は飛鳥に関わることを良しとしなかった。それは彼女にとっても飛鳥が大切な存在だから。生徒会長としては守るべき生徒として、更識楯無としては本当の弟のような存在だから・・・。

「今回の件は私たちに任せて、アツくんはそれよりも、試合のことに集中しなきゃ。簪ちゃんのことで一悶着あったんでしょ?」

「!!」

何でそれを・・・。

思わず目を見開いて驚く。でも、彼女が生徒会長ということを考えればいくらでもこの学園内のことは知ることにはできるだろうし、簪の使用人である本音が知っていればそれを彼女に伝えることもあるかもしれない。

「でも、次の日のカンちゃんは、うれしそうな顔をしてたよ」

本音がそう言う。次の日の彼女を見ても、あまり変わった様子はない

かったように燃えたが、女しか分からない何かがあるのかもしれないと思った。気づけないのは飛鳥の鈍感なせいもあるのであるが・・。

「あまり詮索はしないわ。二人だけの大切なことだもんね♪」

「な、何だよそれ。別に俺は」

「分かってる分かってる。おねーさんはちゃんと分かってるから」

「し、信用できない・・・」

意味ありげな笑みを浮かべる彼女に対して、一割も信用を見せていない。確かに今の飛鳥にとっての死活問題である、あのむかつく女子生徒を倒すことが先決であった。

「それじゃあ、私からの話しはおしまい。戻っていいよ」

「ハア、分かった。でも・・・、やっぱり納得できない。戦いには集中する。警戒もする。だけど!」

立ち上がったところでもう一度楯無に対して言う。我俣かもしれない。いや、これは我俣だ。

しかし、例えそうだとってもあの頃の自分とは違う。守りたい、大切なものがある。だからそのための力も手に入れた。それがヴェステイージ。身も心も傷ついた飛鳥そのものを表していた。

それを知っているからこそ。楯無だけでなく、虚も本音もこれ以上飛鳥が傷つけば辿るだろう結末を予想できる。裏世界に生きるものだからこそ飛鳥のようなものたちを見たことも、聞かされたこともある。その多くの者たちが辿った道の厳しさと辛さ・・・、その結末も。それが本当になることだけは嫌なのだ。だからこそ、あえて彼をこれから遠ざける。

「俺だって伊達に軍事学校に通っていたわけじゃ!!」

「うん、分かるよ。アツくん頑張ったもんね」

「だったら!!」

「でもね、アツくん・・・」

笑顔だった。それは力を貸してくれるということに対するお礼なのか。それはわからない。だが、その笑顔と裏腹に、彼女が言う言葉は飛鳥にとっては残酷なものだ。

「このことは一般^レ人のアツくんには関係ないの、私たち裏に生きるものの・・・」の問題だから」
「!!」

それは明らかなる拒絶の言葉だった。自分と彼女の立場は違う。ただそれだけで、自分は何も役に立てない。今彼女たちとの間に、大きすぎる壁があることを自覚した。

守ってみせる・・・。今度こそ大切な存在を。

そう意気込んでいたはずなのに。もちろん復讐を忘れたわけではない。だが、それだけのために力を手に入れたわけではないのだ。あの時変わり果てた姿となった家族を見て。もう二度と大切なものを失いたくない。失ってたまるかと思うようになった。

いくら口でそういっても、実際にそう言う体験をしなければその重さというものをすることはできない。

「・・・」

ボタンという音と共に飛鳥は生徒会から外に出ていた。あの後一体自分が何を言ったのか分からない。しかし、もうこの部屋にはいることはできない。そう言う感じがした。

肩越しに扉を見ると、まるで先ほどまでそこにあった扉がひどく遠くに見える。まるで近づこうとしても、向こうから離れていくような、そんな感じがした。

「はははは・・・」

もう流れないと思っていたのに・・・。

「何だよ・・・、何なんだよ。俺が何かしたのかよ・・・」

まるで心が出血しているかのように、飛鳥の赤い瞳から溢れ出す涙。完全なる拒絶。守りたいと思っていたものから、力になりたいと思っていたものからの完全なる拒絶。

それがどれだけ衝撃的であり、絶望を与えただろうか。目を閉じ、声を漏らすまいと歯をかみ締める。いくら扉を閉めても、その隙間から溢れ出す涙が、廊下に雫として落ちていく。

「結局・・・」

何も変わっていない。あの時と何一つ、自分はいつまでも守られる側であり、彼女たちの横にも立てない・・・。力を得ても・・・、想いがあっても・・・。受け入れられなければ何の意味もない。

「ちくしょう・・・」

飛鳥は音もなくそこを立ち去る。最後に生徒会室を出る際に聞こえて来た『ごめんね』という言葉は一体何に対して言ったものなのか。もはやそれすら考えるのがどうでも良くなっていた……。

あれから数日後、とうとうクラス対抗戦の日がやってきた。今年の生徒の入りは過去最高を記録されていた。それも当然のことで、飛鳥と一夏という男二人のタッグが出場するということだからだ。

今だ客寄せパンダ状態である二人、とはいえ二人にとっては関係のないことであるために、無視を決め込んでいる。

現在二人は控え室にて出番を待っていた。すでに着替えを終えているために、同じ部屋にはセシリアと箒の二人もいた。もちろん試合が開始する前になったら二人もすでに取ってある観客席のほうに戻る予定であるが。

「とりあえずやれることはやった。後はそれを出し切るだけだぞ」
「お二人は最初に比べると、見違えるほどに連携が取れるようになっていきますわ。自信を持ってください」

「ありがたいな、箒、セシリア。どこまでやれるかわからないけど、やれることはやってみるさ」

「ああ、その意気だ」

「そうですわね」

その一夏たちが話している横で、黙ってブレスレット状態のヴェステイージを見ている飛鳥。精神統一をしているようでいて、まるで何も考えたクナイというように、思考を拒否していた。

「飛鳥、お前もそう思うよな……って大丈夫か??」

「え、ああ。なんでもない」

一夏が横に座っている飛鳥の様子がいつもと違っていたのに気づき、話しかけてきた。一瞬遅れて反応した飛鳥であるが、内心の葛藤を悟られないようにと、いたって普通に返答する。

同様にそれに気づいていたのかセシリアも一夏同様に心配そうな表情で見えていた。飛鳥が一夏に言った言葉を聞いた後も何か言いたそうなそぶりを見せたがすぐにそれを引っ込める。

「一回戦の相手は三組だったな」

「っ!!」

「ああ。専用機持ちじゃないらしいけど、選ばれたってことは相当実力を持つてるんだろな」

そんな風なことを言いながら、やってやるという意気込みと不安だという二つの相反する感情を見せている一夏。そんな最初から弱気になるな軟弱ものと叫んでいる箒。そんな二人を見て相変わらずだと少し離れて見ているセシリア。止めようとしていないのは同じ女性として箒の気持ちを分かっていたからだ。

対して飛鳥は拳を包み込んでいた掌でまるでこぶしを握りつぶさんとするほどに力を込めていた。それは他へとぶつけられない今日まで溜まっていた怒りとやりきれなさを表した行動であった。

すると突然控え室にアナウンスの声が聞こえて来た。どうやら一回戦の試合二組と四組の試合が終わったらしい。対戦表に簪の名前がなかったので、出場していないのだろう。なら、当然勝ったのは二組だろう。

＞一組の紅月さん、織斑さんは至急ピットにお越しく下さいく

「わ、もう試合かよ」

「お、落ち着け一夏。焦っては勝てるものも勝てないぞ」

「そう言うお前が焦ってどうするんだよ箒」

アナウンスを聞いて慌てて立ち上がる。がたんという音に、近くにいた箒も驚く。やいのやいのと二人で騒いでいるが、対照的にゆっくりと立ち上がる飛鳥。そんな彼の前に立つセシリア。

「やはり、いつもと様子が違いますわよ??」

「そうかよ・・・」

「素っ気無いのはいつもどおりですけど」

「まだ何かあるのかよ」

セシリアの横を通り過ぎたところで立ち止まる。お互いに顔は見えない。やや俯き加減であるが、セシリアは言う。

「あまり無理はなさらない方がいいですわよ??今の飛鳥さんは、余裕がないように見受けられますわ」

「ああ・・・分かったよ」

「それではわたくしも観客席に戻りますわ、一夏さんもお早く。箒さんもいい加減にしてくださいませ」

「あ、おい。待てよ飛鳥」

「な、おい待て一夏。ええい、負けたら承知しないぞ」

飛鳥が控え室を出て行くのを見た一夏は慌てて追いかける。まだ言いかけたことをいえない箒は焦りながらも叫んで言う。何とか伝わったのか一夏は手を振って控え室を出て行った。

ピットに着くとそこには対抗戦であるために生徒会やら教師たち

がそこに配置されているのだ。一瞬楯無との視線があったが、睨むような視線を一瞬贈ってすぐに外す。少し寂しさもあったが、今はそれをもみ消した。

彼女も自分のような一般人とは違いやることが多いだろうからだ。黙って彼女の前を通り過ぎる。

「一組の紅月飛鳥さんと織斑一夏くんですね??」

「「はい」」

「対戦相手三組の綾崎さんと神崎さんはすでにアリーナ入りしています。時間ぎりぎりでしたね」

「あ、すいません」

おそらくこの時間帯の担当の先生なのだろう。ニコニコとして二人に対応している。すばやくチェックが入れられ、許可を得る。

「それでは、熱い試合、期待していますよ」

「あ、頑張ります」

そういわれ、律儀に返す一夏。

「なあ、最初どっちが出る??」

一夏が振り向いてそういつてくる。すでに白式の待機状態であるガントレットを身につけている。肩越しからちらりとこちらを見ている彼女を一瞥し、一夏に振り返って言う。

「最初に出ろよ」

「??? 分かった。あ、そういうえば、いつも飛鳥がピットから出てきと言う、あれ。俺もやってみようかな」

好きにしろよ。そう内心思った。一夏はすばやく白式を起動させ、カタパルトデッキに固定させる。発進の許可を示すランプが赤から青へと変わる。それを見て一夏はコールして飛び出していく。

「織斑一夏、白式。出るぜ!!」

威勢よく飛び出して行く彼の姿を見て、次は自分だと思いながらピットへと向かう。すると背中に飛鳥だけに聞こえるほどの声で何かを呟いてきた。

「頑張ってね」

「・・・」

振り返れない、振り返ればきつとあの時のことで胸に押し込めていた何かが爆発しそうだから。だから、我慢した。もう振り向けない。そう思いながら手首にあるブレスレット状態のヴェステイージを起動させる。

バックパックとしてフォースシルエットを装備している形だ。カタパルトに脚部を固定させる。真っ直ぐに倒すべき敵が待つアリーナが見える。赤いランプが数回点滅して青へと変わる。

まるでからだを絡め取る後悔と悲しみを振り切るかのように、飛鳥は叫ぶようにしてコールする。

「紅月飛鳥、ヴェステイージ。行きます!!」

アリーナを見下ろす大空は真っ青に晴れ渡っているはずなのに、飛鳥の心はひどく荒れていた・・・。

PHASE 13 クラス代表戦開始!! (後書き)

ED2↓REASON>玉置成実<

次回予告

拒絶

それは飛鳥にとって、何よりも耐え難いことであった

再び傷を負った戦士が空に立つ

横に立つは白亜の騎士

そんな二人の前に立ちほだかる龍を引き連れた少女

そんな彼らの元に突如として現れる5機の謎の影

それは見慣れぬ全身装甲のISであった

大切な者たちへと向けられた魔の手

彼らの運命は如何に

次回インフィニット・ストラトスへ怒れる瞳へ PHASE 14
謎の襲撃者!!

大切なものを守りきれ!! ヴェステイジ!!

PHASE 14 謎の襲撃者!! (前書き)

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

長い・・・、過去最長です。

ご感想や誤字脱字の報告お待ちしております。

PHASE 14 謎の襲撃者!!

アリーナの中央に向かう。そこには綾崎と神崎という令嬢とそれに付き従うものがいた。彼女たちの前には飛鳥のタッグパートナーである一夏の姿もある。すでに雪片式型を展開していることからやる気は十分だった。

「あら、遅かったわね」

「怖くて尻尾を巻いて逃げたのかと思ったよ」

「お前たち、いい加減にしろよ。言ったとおりだろ、飛鳥は来るって」

どうやら一夏は飛鳥が来るまでであることない子と彼女たちから言われていたらしい。若干苛立っているのが見えた。彼女たちから飛鳥の表情は見えない。逆に飛鳥からは彼女たちの顔が見える。

捻り潰してやりたいと思った。右手にマウントされていたビームライフルを構える。目の前にいる二人はそれぞれラファール・リヴァイブと打鉄というフランス産と純国産の第二世代型のISであった。

機体性能だけを見ればこちらのほうが俄然有利であった。しかし、機体性能だけでなく、その乗り手の操縦技術がともわなければ、ISというのはただの鉄屑に過ぎないのである。

>それではクラス対抗戦第二試合。一組紅月、織斑ペア対綾崎、神崎ペアの試合を開始しますく

アナウンスがそう叫ぶのと同時に試合開始のブザーが高らかに鳴

らされた。その瞬間すばやくセーフティを解除した飛鳥はビームライフルで綾崎の起動させているラファールが構えていたサブマシンガンの一丁を打ち抜き爆発させる。突然の武器破壊に驚いたのか悲鳴を上げていた。

それに思わず反応して振り向いてしまった打鉄を起動させていた神崎。それを隙ありという形で一夏が雪片を振り上げ、接近する。はっとして気づいた彼女であるが、反応が遅れた分、受け止めた刀剣同士の押し合いは一夏の圧勝だった。

大きく吹き飛ばされる彼女に向かって、中距離から正確な射撃が襲いかかる。次々と装甲をえぐられるたびに、シールドエネルギーが削られていく。このままではと焦りを覚える。

「嘗めるな!!」

両手にショットガンを構えた綾崎がまるで鬱陶しいハエを追い払わんとするようにして撃ちまくる。一夏は慌ててスラスターを噴かせてそのショットガンの嵐のルート上から離脱する。その後ろにいた飛鳥に向かって次々と銃弾が打ち込まれていく。

「数うちや当たるってか!?!そっちこそ嘗めるな!!」

その瞬間一気に怒りの沸点を超えた飛鳥の頭の奥で何か種子のようなものがはじけた。その瞬間飛鳥の瞳からハイライトが消える。先ほどよりも異常なまでに回りの動きが手に取るようにして見える。もちろん向かってくるショットガンの銃弾もまた、到来よりも遅く感じるくらいである。

「な!?!」

乱射した綾崎が自らの銃弾が次々とヴェステイージの頭部に装備されているC I W Sによって着弾する銃弾のみ打ち落とされるのを見て、驚きの声をあげる。そんな荒業を見せた飛鳥に対して観客は沸く。

それでスラスターが噴く音が聞こえなかったのか、突如として彼女の頭上に現れた一夏の構える雪片が振り下ろされる。光り輝いているビームサーベル状態であるそれは、単一能力である零落白夜が起動している状態であった。

近接武器を出す時間がないために、弾切れ寸前であった二丁のショットガンで受け止めようとする。だが、サーベルの熱でショットガンの銃身が真っ二つに切り裂かれる。

銃身を切ることにやや時間が取られたことで掠る程度に終わる。

「くっ！！掠っただけかよ」

「か、掠っただけでこんなに！？」

しかし、一夏と綾崎の反応は全くの反対のものであった。綾崎は一夏の白式のことを知らない。つまり、一撃必殺の単一能力である零落白夜を知らないのである。

だからといって、綾崎も馬鹿ではない。当然選ばれたのはそれだけ実力があるから。すぐさま一夏の雪片が危険であると察知して後退する。その代わりに打鉄・・・近接主戦のそれを起動させた神崎が飛び出してくる。

ハイパーセンサーに移った機影を見て、すぐさま一夏は体をその

方向へと向ける。雪片と刀剣がぶつかり合う。激しい火花が散る。しかし、白式の馬力のほうが上であるのがここでも出る。

「くっ！！第4世代に乗ってるからって！！」

「この！！」

馬力で勝っている白式であるが、ISの経験は神崎のほうが上回ったようだ。出力の調整で一夏のことを有利に弾き飛ばす。すぐさま体勢を立て直す一夏。そこにサブマシンガンの銃弾の嵐が飛び込んでくる。

「くそ、まずは俺ってか」

「落ちろ！！」

接近を許した一夏に振り下ろされたラファールに多彩に搭載された武装の一つである近接ブレード。鏢迫り合いになり、お互いに後退する。その間にも銃弾の嵐が一夏に向かう。

「やらせるかよ！！」

そこにわって入った飛鳥が大型シールドをかざして一夏の前に立つ。銃弾をもろともしないその強固なシールドが二人を守る。

銃弾を受けてもなお、傷すら見えない強固なシールド。苦々しくそれを見ている二人。その二人にライフルを牽制で連射し、遮断する。

「お前たちは・・・落とす！！」

「あ、ちよっと待て、飛鳥！！」

ライフルをマウントすると、勢い良くスラスタを噴かせた飛鳥

がビームサーベルを展開して飛び出していく。慌ててそれを追いかける一夏。

「な、何よ!!」

「男のくせに!!」

彼女たちにもプライドがある。それは女尊男卑という風潮が生み出したものだ。女性が男性に負けるわけがない。そう思い込むことで、彼女たちはこの劣勢の中、何とか落ち着こうとしていたのだ。

「落ちろ!!」

しかし、まるでどこまでも追ってくるかのような飛鳥の気迫が彼女たちの動きを鈍らせる。向かってくる相手に対して、防戦一方である。顔は見えないはずなのに、ものすごい怒りの瞳をこちらに向けている。そう思わざるを得なかったのだ。

「きゃあああ!!」

ビームサーベルが一本目の近接ブレードを切り裂き、そのまま綾崎のラファールの装甲をえぐる。斜めに切られたそこからISスーツが見える。

「こんな、こんなことが!!」

綾崎には信じられなかった。今まで自分の周りの男は自らを持て囃し、敬うものばかり。それがこの時代において当然だと思った。しかし、目の前の男は・・・飛鳥はどうか。そんなことは関係なく、自らに突っかかってくる。信じられなかった。

「男に女が負けるはず・・・」

「まだそんなこと言ってるのかよ!!」

青とダークグレーの機体がものすごい勢いでこちらに向かってシールドアンカーを射出する。がっちりと絡め取られ、それを遠心力で振り回される。視界がぐるぐると高速回転するために、焦る。

「な、な、何を!？」

そう焦っているのもつかの間、彼女の体に走るような衝撃と共に痛みが与えられる。まるでプレス機に放り込まれたような、体がぺちゃんこにされるような感覚であった。突然の衝撃が脳を貫通したのか、脳震盪を起こし、一瞬意識を飛ばしていた。

すぐに意識を取り戻したが、目を動かして自分が固い何かに叩きつけられたのを知る。アリーナに張り巡らされている。観客の保護を前提としたシールドバリアだった。

「がっ・・・。何なのよ・・・」

そう呟いている間にも再び、無重力感覚を味わい、放り投げられた体勢を立て直す暇もなく、高速で接近を許し、飛鳥が振るうビームサーベルが片方の脚部を切り裂き、吹き飛ばす。

「ひい!!」

足が切り飛ばされた。ISは通常操縦者の体の延長である。そのために彼女のISの脚部が吹き飛ばされたとして、体には異常はないが、それを初めてやられるものにとっては理解していても恐怖が勝る。

「ブラストシルエット!!」
「!!」

その瞬間ヴェステイージの背信部にあった巨大なスラスタールバックパック、フォースシルエットが解除され、落ちていく途中で粒子化する。そのまま体の上に現れた巨大なビーム砲、レール砲、ミサイルランチャーが見えるバックパック、ブラストシルエットからドッキングセンサーが放たれ、装備する。

その瞬間青から暗緑に変わる機体色。それを始めてみたものたちからすれば歓声ものであった。一気に消費されていたエネルギーを回復する。重火力武装を引っさげ、再び綾崎へと襲いかかる。

恐怖の権化であるヴェステイージが迫る。更に恐怖をかき立てられる綾崎は逃げるようにしてアサルトライフルを打ちまくる。しかし、スラスターを巧みに使った回避行動に掠ることすら叶わない。

何で当たらないのかと叫んでいる綾崎であるが、握っていたライフルをビームが貫き、爆発する。もはや武装がいくらあっても勝ち目がない。そんな風に確信させられていた。

「痛いかな!? 当たり前だろうな。でも、簪が受けた傷は、そんなもんじゃない!!」

肩越しから巨大なミサイルランチャーを構える。そこから無数のミサイルが追尾機能付きで綾崎のラファールへと向かっていく。

次々とミサイルが着弾していく。何度も何度も……。ラファールの装甲がもはや原形をとどめていないようにも見える。爆煙にまみ

れ、激しく咳き込む。そんな彼女を守るために一夏を振り切って打鉄を纏った神崎が向かってくる。性根は腐っていても、あくまで彼女を庇い立てする……。

彼女がまだ戦闘に参加していたということに対して、飛鳥は歯噛みする。一夏がここまで来て討ち取れていない。流星に経験者は違うらしい。だからといって……。

「お前もだったな……」

その瞬間、レール砲に内備されている二本のビームジャベリンを連結させる。それを槍投げの要領で向かってきた彼女に対して投擲する。それはまるで光の矢の如し。

「は、早い!! かわしきれ……」

ハイパーセンサーでようやく視認できるほどの高速スピードで投擲されたビームジャベリンが打鉄に突き刺さる。ビーム刃が装甲をえぐり、操縦者が危険だということで、絶対防御が発動し、シールドエネルギーがゼロとなった。

機体がものすごいスパーク音を放つ。操縦者自身には絶対防御のおかげで怪我はないが、彼女にとっての恐怖はまだ終わっておらず、むしろここからであった。

しかし、神崎のISが解除されたところはアリーナの地上からかなり高度にある上空である。すでにISを纏っていない彼女がそこにいれば当然その後どうなるかは決まっている。数秒の無重力を感じていた彼女であるが、その瞬間、まるで地上から見えない無数の腕が彼女を引き摺り下ろそうとでもしているように、ものすごい速

さで落ちていく。

「い、いやぁ・・・、いやぁああああ!!」

「明美!!」

綾崎が落ちていくタッグのパートナーである彼女を追いかけていく。ものすごい速さで地上との距離がなくなっていく神崎は悲鳴をあげることすらできずにもはや死を覚悟している。

しかし、ぼろぼろで、残りシールドエネルギーが少ないラファールにて、綾崎がぎりぎりですぐに加速を使い彼女を救う。どうやらなかなかの実力があつたのは確からしい。

助かったことに綾崎に抱きかかえられているのを見てわっと泣き出す。その近くには同じく離れたところから瞬間加速をして向かってきていた一夏がきていた。とっさのことで瞬間加速を会得したらしい。

それが普通の訓練や模擬戦であつたならよかったのだが・・・。
突然二人の機体にアラート音になる。ロックされたと映し出された。まさかと思い一夏は慌てて上空を見上げる。

「何でだよ・・・」

無意識に雪片を握り締める手に力が入る。一夏の目に映ったのはこちらに対してためらいなく銃口を向けているヴェステイージの姿であつた。このままトリガーを引いたとなれば、すでにISを解除されている神崎に関しては死は免れない。

「お前たちが・・・、お前たちが簪を傷つけたんだ!!」

そう叫んだ瞬間、周りと共に自らの動きも緩慢に思える感覚に陥る。ゆっくりとトリガーを引こうとする。その瞬間飛鳥はまるで一瞬にして時を越えたような感じがした。

体と時間をそこに置いて、意識体だけが時を越える。そこは空の上であつた。頭上を見上げると大空が広がり、白い雲、青い海色の染まった空が飛鳥の目に広がる。こんなに近くで見るのは初めてだった。



飛鳥が口を動かしているわけではない。だが、確かに近くで誰かが喋っているのが聞こえたのだ。声色からして・・・、二人とも（・女性だろうか。

そして、突然耳障りなアラート音になる。これはISなのかと驚きが隠せない。何せ飛鳥はISを一夏のように操縦することができるとは思っていないからだ。なら何故自分がISに乗っているような視点で見ているのだろうか。

何がなんだか分からない。そんな風に混乱していた。その瞬間、飛鳥がハイパーセンサーに移ったものを見て愕然とした。それはミサイルミサイルミサイル・・・。忘れるはずがない。篠ノ之束がハッキングを行い、日本に向かってはなった二千発以上のミサイルがこちらに向かってきたのだ。

ここは過去・・・あの時か！！

ものすごい速さでミサイルに近づいていく白騎士の操縦者と同じ資格から見ている飛鳥はその答えに行き着いた。一体どうしてこうなったのかはどうでもいい、ここで彼女の・・・、白騎士の正体を暴いてみせる。そう思った。

白騎士の技量は圧倒的であった。自分の強さが霞んでしまうのではないかと思うくらいの強さであった。まるで世界最強の操縦者である織斑千冬のように・・・。

たった一本の刀剣だけで次々とミサイルを切り落としていく。その後ろで小さく聞こえてくる悲鳴や泣き叫ぶ声。大人も子供も、お年よりも。あの時たくさんの人がいた。

それを、こいつは・・・、こいつらは！！

瞬時加速を使ったかのように、視界がめまぐるしく変化する。上に下に、右に左に、前に後ろに激しい動きを難なくこなすその飛鳥にとって敵である（・・・）彼女は圧倒的な強さを飛鳥に、そして世界にそれを見せ付けていたのだ。

そのとき飛鳥は全ての時間が止まったかのような感覚に襲われた。そんな彼の目に映ったのは人ごみから抜け出し、何かピンク色のものを拾い上げた少年だった。

あれは・・・、俺！！

ようやく見つけた宝物を手取るようにして笑顔になった少年。だが、飛鳥はそんな小さい頃の自分を視界に入れつつ、ハイパーセンサーに映るミサイルが一発、その人々が群れをなして走っている場所に着弾したのを見た。

あれが全ての（・・・）終わり（・・・）であり、すべての始まり（・・・）だった・・・。

どうして、どうしてあれを破壊してくれなかったのだと飛鳥は叫んだ。叫んだところで彼女に聞こえるはずもなく、時間が、過去が書き換えられるはずもない。

爆発が広がっていき、まるで人がゴミのように吹き飛ばされていく。飛鳥は乾いたうめき声しか出せない。人はこんなにも簡単に死んでいくのだ。たったミサイル一発でこれだけの人が死ぬ。

ならISは・・・？？

そんなミサイルすら無効化してしまう、現代兵器最強のISは一体なんなのか。篠ノ之束は一体何を目的に作り出したのか。

爆風が人々を吹き飛ばしていく。木々にぶつかり、勢いで体が切断されるもの、木に突き刺さるもの、地面に叩きつけられ絶命するもの……。幼い頃の飛鳥が吹き飛ばされ、地面をすべるようにして倒れる。擦りむいたところから痛々しい傷が見え、血が流れていた。

そして、飛鳥は確かに見た。ミサイルが着弾する前、飛鳥が戻ってくるのを待っている家族のことを。心配そうにしている母親。そんな母親に声をかけている父親。そして、自分が落としてしまった携帯を持ってきてくれる飛鳥のことを待っている朱雀。

そんな、三人に向かっていく爆発の余波。飛鳥は体を動かしたかった。だが、そのからだはなく、意識だけの存在である飛鳥は、あ

の時知らなかった光景を目の当たりにする。

「あ、あああああ！！」

余波に巻き込まれた家族が一瞬にして肉片へと変わり果てていく。あの時あった心配そうな表情も、氣遣っている表情も、笑顔も全て奪われたのだ。飛鳥はただ呆然としていた。

それと同じくして、幼い飛鳥は周りを見て呆然としているようだった。ふらふらとまるで夢遊病者のように、おぼつかない足取りで歩き始める。飛鳥が歩く道端に死体が山のように積み上げられている。

柔らかい肉が踏みつけるたびに、背中が冷えるような音を立てていく。更にはこちらに向かって助けを求めるかのようにして手を伸ばしてくるものもいた。そんな人に対して、口が動いたのみ手、おそらく誤ったのだろうと思った。すぐにそのものをまるで地面の一部かのようにして踏みつけ、歩いていく。ばたりと倒れるその人はおそらく、死んだのだろう。

その間にも、白騎士はミサイルを鬱陶しいと思うようにして刀剣で切り裂いていく。すでに飛鳥はそれには目を向けず、あの時の自分の事を見ていた。

幼い飛鳥は崩れ落ちるようにして膝をつく。そのとき締まっていた朱雀の携帯電話が滑り落ちる。それが近くに落ちていた汚れてしまったかわいらしいワンピースだったのだらう服の切れ端が引っかかった一本の腕の傍に落ちる。

ゆっくりとそれを抱き上げる。妹の温もりなのか、それともミサ

イルの熱のもののかは分からない。だが、あの時は信じられなかったのだ。たった一瞬で家族を失うだなんて、誰が想像、信じられようか……。

『■■ちゃん。そろそろ、軍のほうも来るから、そっちのほうもお願いねー』

『束、これで本当にいいのか??』

『オッケー、オッケー。全ては順調だよ』

その瞬間飛鳥の胸に怒りがあふれ出した。何が順調だと。人が死ぬことも、全て想定内だったというのか。世間に知られていなければ、それでいいのかと。

向こうから戦闘機やら、更に海上にはイージス艦など、軍艦までもが現れていた。とはいえ白騎士にはそんなのはまるで赤子の手を捻るようなものであろう。動き出す前に白騎士が視線を下に向けた。

「!!」

飛鳥の目に映ったのは、おそらく白騎士の操縦者が見たのと同じなのだろう。まるでこちらを射殺さんとするくらいの怒りに染まった瞳を向けているあの時の自分がいたのだから。

俺は、あの時こんな目をしていたのか……。

それは今でも変わらない、否、あのときよりもおそらく恨みなどは深まっただろう。そして、白騎士はこのときこんな高度なところから自分のことを見下していた(……)のだと知った。

そして、一瞬にして意識は現在へと戻る。トリガーを引こうとす

る。だがその瞬間飛鳥の目の前に現れたのは父、母、そして妹の朱雀であった。

「あ、あああ・・・」

まるでこちらを睨むようにして見て来る。どうしてそこにというよりも、どうしてそんな目を向けてくるのだという困惑のほうが大きかった。そして、一瞬にして、自分がついさっき何を見たのかということから理解する。

俺は殺すのか・・・。

あの時のように・・・、まるで白騎士が自分の家族を殺したかのよう。ゆつくりと飛鳥に近づいてくる家族の姿を見て、そんな目で俺を見るなど飛鳥はたじろぐ。だが、家族の後ろにいるのは簪を傷つけた者たち。そんな彼女たちに、飛鳥は・・・。

『お兄ちゃん』

「！！」

飛鳥の目の前に朱雀の姿がフツと現れる。その幼い手が、トリガーに手をかけているヴェステイジのそれにそつと置かれる。その瞬間、ゆつくりとトリガーから指が離れていく。一体何が起きているのかと自分の意志とは違う行動をする手に困惑を隠し切れない。

ゆつくりと遠ざかっていく朱雀。首を横に振っている。まるで撃つてはいけない。そう言っているかのように。ゆつくりと離れて行く家族の姿。まるでもう二度と会えないと、そして、その最後のお札を言いに来たかのようにだった。そして、消えた家族がいたところから雪片を、零落白夜を起動させた状態で握りしめた一夏がこちら

に向かって瞬時加速にて突っ込んできたのだ。

「やめろおおおおお!!」

「!!」

一夏にはすでに飛鳥がトリガーから指を離しているのが見えていなかったのだろうか、否、彼はただ飛鳥が後ろにいた、すでに棄権している二人に対して殺そうと銃口を構えていたのに対してぶちきれていたのだ。

どうしてそんなことをするんだよ!!

一夏には分からない。飛鳥もまた同じようにして大切な存在を守りたいと思っていることを。過去に守れず、傷つけ、失ったことがあるからこそ、力を求めた。それでも、目の前で傷ついていくものがある。それも手が届くところで、そう、彼女たちによって簪が癒えぬかもしれない心の傷を負ったのだ。

「彼女たちはもう棄権してたんだぞ!!」

「何を言ってるんだ、お前は!!」

切りつけられた雪片をシールドで受け止める。会場では突然同士討ちが始まったことに困惑のざわめきが広がる。

「お前はあの二人を殺そうとしたのか!? 何か言えよ!!」

お互いに後退する。一夏がそう叫ぶのに対して飛鳥は何も答えられない。自分は多少痛めつけてやろうというくらいであった。だが、あの時打ち込んでいたら、明らかに一人は消し炭となり、一人は即死だろう。

「あの二人が何かしたのかよ!!」

「何かした・・・だとオオオオオオ!!」

何も知らないくせに、いつも加害者側のお前がそれを言うのかと。飛鳥は一夏に言われて戸惑いを覚えていたものを完全に振り捨てた。ビーム砲とレールガンを構え、一夏に向かって放つ。

「!! こんのおお!!」

ビーム砲に対して零落白夜を起動させ、切りつける。受け止めたところから、バリア無効化効果のためにビームが掻き消えていく。だが、実弾を殺すことはできないために、白式をレールガンが貫いていく。

打ち抜かれたところから煙が上がる。それでも一夏は戦いをやめようとしなない。雪片を通常の状態へと戻す。

「お前が、お前がそれを言うのか!!」

「な、また出力が上がった!？」

再びビーム砲が放たれたため、瞬時に零落白夜を起動させる。しかし、先ほどよりも出力が大きいために、なかなか消すことができず、徐々に押される。無造作に振り切って、ビームを横なぎに切り裂く。

「何も知らないくせに、お前が!!」

すばやく換装シルエットを変更し、赤い巨大なスラスターが再び装備される。肩越しから抜き取ったビームサーベルで一夏に向かっ

て切りかかる。

「殺そうとしたとき・・・、何も思わなかったのかよ!!」

「黙れ!! あいつらは多少痛めつけるだけにするつもりだったのに!!」

「何でだよ!! そんなことのためにクラス対抗戦を・・・」

「そ、そんなことだとおお!!」

すでに沸点を軽く超えている怒りのボルテージ。飛鳥の連閃が一夏の体を激しく揺さぶっていく。切るよりも叩き付けるといったサーベルの使い方で、雪片で受け止めるも怒りで威力が上がっているその衝撃を全て受け止められるわけではなかった。

一夏の先ほどの怒りは戸惑いにすり変わりつつあった。目の前の飛鳥がその場のことで、多少のからかいの言葉だけでそこまでするとは一夏には思えなかった。いくら短気な飛鳥だからといって、そこは区別をつけている。なら、何故彼はそこまでして彼女たちに対して一方的な制裁にも似た行動を取ろうとしたのか。

「ぐが!？」

突然腹にもものすごい衝撃が走った。飛鳥がものすごい勢いで接近したと思ったら鏢迫り合いの状態からその勢いのまま回し蹴りを一夏に叩き込んだのだ。IS装甲に対して意図も簡単に輝を入れられるような鋼鉄の装甲を持つヴェステイジ。たった一回の蹴りだけでここまでエネルギーが削られるものなのだろうか。ISじゃないからといって心のどこかで見下していた感のある一夏であるが、そんなことはない、IS以上のものだとは危機感が勝る。

>いい加減にしないか!!<

「「!」」

お互いの武器が鏝迫り合いになった状態でその声が聞こえるほうに向く、そこか管制室であり、担当の教師がいる。当然そこにいるのは織斑千冬。いい加減アナウンスの女子生徒が叫んでも聞こうとしない二人に対して怒鳴り声を上げていた。

>対戦者はすでに棄権している。まさか気づいていなかったとは言わないな?<

そう言う千冬であるが、はっきり言って怒りでほとんど聞こえていなかった飛鳥はそれを知らなかった。そのためにぎりぎりの所まで、トリガーを彼女たちに向けていたのだ。

『お兄ちゃん』

あれは空耳だったのだろうか。あの家族は幻覚だったのだろうか。しかし、あの時家族が、そして朱雀がそうしてくれなかったら飛鳥は迷いなくトリガーを引いていただろう。

ゆっくりとピットへと戻る。勝利したというのに、そこには喜びなどというものが皆無であった・・・。

「「・・・」」

そこにはただならぬ雰囲気があった。突然ピットから戻ってきて一夏と少しばかり口論になったところで、ちらりと簪の姿が見えた。前に飛鳥は適当に一夏をあしらいい、その後を追って行った。例の件の対策に走っているのだろうか、楯無の姿はその場にはなかった。

廊下を歩いていき、人気の少ないところで、立ち止まった。一体なんだろうか。そう考える必要はないだろう。簪なら分かっているだろう。飛鳥があそこまでぶちきれていた理由を。

その理由が自身も関わっているために、こうしてここに来ていたのだ。真っ直ぐこちらを向いている彼女の目は少し睨んでいるようである。とは言え、見上げてくる形であるために、むしろ可愛いというもののだが。

「な、何だよ。こんなところに連れてきておいて・・・」

「理由はいわなくても分かっているよね??」

「あ、ああ・・・」

すっかり怒りのボルテージが下がっているために幾分か冷静である飛鳥は苦しそうな表情をして呟く。彼女のためということのでやったことであるが、また傷つけるだけだったのかもしれないと思うと、心が限界であった。

「どうしてあんなことをしたの??」

「お前までそう言うのか・・・??」

飛鳥はもはや精神的に限界だった。今にも足元から崩れてしまいそうだった。真紅の瞳が簪の姿を映している。

「お前まで・・・、何だよ、皆、皆」

「あ、飛鳥・・・??」

何か言おうとしていたのだが、飛鳥が突然そう言うので、簪も戸惑いを隠せない。まるでこちらが悪いみたいに見られる。別に先ほ

どの理由をもう一度聞きたい、原因は分かっているけど、どうして飛鳥がそうしたのか、その真意を聞きたかったのだ。

「お前まで俺のことを!!」

「ちょっと飛鳥!? 何を言っているのかわからないよ!!」

声を荒げる飛鳥に対して、ついつい簪も叫んでしまう。最近自分も声を張り上げることが多くなったような気がする。ずっと溜め込んでできていたことも反動してのことなのだろうか。

信じられない、信じたくない、そんな葛藤が飛鳥の顔に現れていた。簪の知らないところで、飛鳥もまた人一倍傷ついていたのだ。何気ない仕草、行動、言葉。それらは時として、癒えぬ傷をつける鋭利な刃物へと変わる。

もしかしたら自分も知らないところで、知らず知らずの内に飛鳥のことを傷つけていたのかもしれないと思うと、この前のことからすると、罪悪感が彼女にのしかかる。

「お前も俺のことを……。俺はただ、あいつらが許せなかったから……」

「う、うん。それが飛鳥のさっきのことをした理由なんだよね」

「そうだよ。お前が納得しても、俺は納得できない。それにあいつら、あることないこと、いい加減なこと言ってきやがって……」

友達のこと、MSのこと、どれも飛鳥にとっては大切なものだ。それを馬鹿にされて我慢できるような性格はしていなかったのだ。

「多少痛い目にあわせる……。それだけだった」

「でも、飛鳥は最後まで銃口を逸らさなかった……」

「あれは・・・」

怒りに我を忘れて……。そんなのは言い訳にしかない。確かに自分は人を殺そうとした。この手で、あの時目の前にいる彼女を抱きしめたこの手で……。恐ろしく自分の手が血で汚れてしまっているかのように見えた。

「でも良く止まったよね。良かったって思った」

「簪・・・」

「もし、あそこでトリガーを引いていたら。多分もう、飛鳥のことを受け入れられないと思った。いくら私のためだからといって、そこまでして欲しいって私、言っていないから」

「・・・」

悲しそうな表情で言う。それを見て飛鳥は、何も言えない気持ちになる。自分がしようとしていたのは、ただの自己満足だったのだろうか。それが結局は彼女のことを傷つけることになり、そして、彼女に・・・。

怖かった。誰もが傍から離れていくことが。まるで、家族を一瞬にして奪われたとき、たった一人その世界にいるような感覚が蘇ってくるような気がしたから。あれは生き地獄……。何度死のうと思っただことか。

しかし、そうしなかったのは彼女たちがいてくれたからだ。親身になって、いつも傍にいてくれた。そんな彼女たちすらもいなくなってしまうたら・・・。

「そうだ・・・、よな。あははは、俺・・・、何やってんだろ」

飛鳥は乾いた声で笑う。

「やっぱり口だけなのか・・・な。俺って」

守りたいと思っけていても、こうして逆に悲しませたりしている。そんなことをしているから、拒絶されてしまうのかもしれない。悔しように、唇をかみ締める。目をつぶり、流れるものを塞き止めようとしても、後から後からあふれ出してくる。

こんな情けない顔は見せられない。そんな風に背中を向ける。簪の目には、体を震わせている飛鳥の姿が見える。まるでないている幼子のように見える彼は、今にも消えてしまいそうに見えた。

まるであの時の私みたい・・・。

簪に映る飛鳥はまるで微風で求んでいってしまうのではないかと思いうくらい弱弱しく見えた。そんな彼をそのままにしておけなかった。それはこの前のお礼であろうか。それとも・・・、別の感情があったからだろうか・・・。

フワツという感触と共に、飛鳥は背中から抱きしめられていることに気づいた。ハツとして目を見開く、慌てて肩越しから後ろを見る。柔らかい感触が背中に押し付けられているために、後悔などが吹き飛び羞恥のほうに勝り始めていた。

慌てて離せと言うが、がっちりとホールドされているために、微動だにしない。いくら言ってもても動かないという簪を見て、何も言わなくなる。なんだかこれだけでも心が落ち着くような感じがした。

自分がここにいる。確かに存在しているのだということが分かるから。ふと飛鳥は先ほどの不思議な体験を話すことにした。時間が迫っていることから、掻い摘んでのことであるが……。

話が進むに連れて、家族が死ぬ場面が話される。飛鳥の握り締める拳に力が入る。怒りと悲しみ、嘗ての無力な自分を見せつけられたことに体が震えている。

そんな飛鳥のことを、簪はただただ抱きしめていた。今の彼には余計な言葉入らない。ただ、温もりと安心感、存在していることの証がほしいのだ。飛鳥を支えていたのは篠ノ之東、白騎士への憎しみと簪たち幼馴染たちの存在とそんな彼女たちを守りたいという想いだった。

しかし、そんな彼女たちに拒絶という形でそれを拒まれ、見つからない憎しみの相手、もはや飛鳥を支えるものが無くなっていった。このままではあのとこのようになってしまいかもしれない。

簪はそれだけが不安でしやうがなかった。あの時虚空を見つめ、微動だにしない一人の少年……、それが飛鳥だった。家族の笑顔が収められた写真を見つめて、まるでそこに吸い込まれるようにしてみていたのだ。今にも死にそうな雰囲気があった。

彼女たちの言葉はまるで聞こえていないという状態だった。あれから数日して、突然事件が起きた。いつものように遊びに来ていた簪たちが家の中に入ったとき、異様な鉄の臭いが充満していたのだ。何れ楯無の名を継ぐことになっていた彼女と姉、使用人見習いであった布仏姉妹が中へと入っていく。そこには風呂場で手首を切った状態の飛鳥の姿があった。まるで瞳と同じ、その風呂場が美しいほど悲しい真紅の部屋へと変わっていたのだ。

悲鳴をあげながらもすぐさま救急車と家のものに連絡し、何とか一命を取り留めた飛鳥。目を覚ましたときに最初にこぼした言葉は・・・。

『どうして生きているんだ・・・』

誰もがその言葉に愕然とした。もう彼の目には自分たちは映っておらず。求めているのは安寧、家族の元へと向かうことだった。それは守りたいと思っていた子どもらしい正義感が、あまりにも無情にも打ち碎かれたためのものであり、目の前で殺されてしまったからでもあった。

そして、彼女たちに向けた瞳はただただ怒りと恨みのこもった真紅の瞳であった。まるで彼女たちを殺さんとしているような、そんな瞳をしていた。血が足りていないために、体が動かないが、今にも殺そうと動かないからだを動かそうとしていた。

悲しかった。そして、罪悪感というものがここまで重いものだったのかと初めて知ったのだ。

飛鳥は言った。もう守りたい存在もない。守る力もない。自分は無力だ・・・と。簪たちも守るといつていた飛鳥であるが、目の前でちっぽけな力で守れるものなど、せいぜい五対不満足でも自らが生き残るというだけであった。

簪の姉、当時は楯無を名乗っていなかった頃の彼女が言う。

『だったら、アックン。もっと強くなって、私たちを守ってよ』

睨みつける飛鳥をまっすぐ見つめていった。生きる意味がないなら与えるしかない。子どもらしい発想であるが、彼女とてどうすればいいのか分からなかったのだ。いくら今は楯無を名乗っている彼女だとしても、その当時は一人の少女だったのだから。

『■■、簪、虚、本音・・・、俺』

虚ろだった、その瞳に再び炎が灯ったのが見えた。

「あの時・・・、朱雀が俺を止めてくれた」

「うん」

「そうじゃなかったら・・・、俺」

きつとトリガーを引いていた。人を・・・、あの二人を、嫌うものたちであるが、まるで自分があの中の時の白騎士のように・・・。人を殺すところだったのだ。あの時どうして家族が現れ、朱雀が止めてくれたのかは分からない。

「良かった、まだ飛鳥がここにいてくれて」

「え?？」

「だって・・・」

私たちのことを守ってくれるんでしょう??

もう意味はないと思っていたあの時の約束。小さいときのことだから、もう忘れてしまっていたのではないか、自分だけの想いだと思っていた。だが、彼女は覚えていてくれた。

「簪・・・」

「飛鳥がいなくなったら、だれが私たちを守ってくれるの?？」

お前にだって守る力はあるだろうと言う言葉がでかかったところで、飛鳥はそれを飲み込んだ。それは未だ専用機が完成していない彼女に対しては、禁句であり、それに、その言葉を言ってしまったら、自分で自分の思いを踏みにじってしまいそうに思えたから。

もしくはもう一人のISを操縦できる織斑一夏に……。

「っ!!」

そこまで考えて、数秒前の自分がそこにいたら殺してやりたい気分になった。絶対にそれだけは嫌だ。守りたい大切な存在が他の奴に守られる。まるで用無しだと自分で決め付けているような、そんな気がした。それに、そう思った瞬間に胸が締め付けられるような感じがあった。それはまるで、心にある宝物を無理やり奪われるような感覚……。

俺が、俺が守りたい大切な存在……。

スッと抱きしめていた簪の手を解く。先ほどはうんともすんともしなかった手であるが、どうしたわけか、簡単に外れた。後ろを振り向き、もう、迷いや悲しみに囚われた瞳はしていなかった。

「俺は、俺が……、守るから」

「うん」

「約束も守る。絶対に!!」

その言葉に対して、簪は笑顔で答えてくれた。小さい頃、一緒に遊んでいたときの笑顔だ。やっぱり彼女は笑顔が似合っている。そんな笑顔を守れるなら……。

「あ、来た来た。か〜んちゃ〜ん」

「ごめん、本音」

「ううん、大丈夫だよ」

相変わらずのほんとした本音が、こちらに歩いてきた簪にぶかぶかの袖が長いために手が出ていないが、手を振って席が空いていることをアピールしていた。本音を見つけてそこに向かう簪。

アリーナが良く見える席である。良くここが取れたなと簪は内心彼女のことに感心していた。そんな本音を横目でちらりと見たのだが、少しばかり笑顔にかげりが見えていた。その理由をすぐに悟る。

「飛鳥のこと??」

「良く分かったね」

口調はいつもどおりでも、シュンとなっているのが、半開きの眠そうな瞳が悲しそうにたれている。

彼女たちの周りにも、徐々に人入が多くなってくる。早くも決勝ということで、他学年の生徒たちもやはり注目している。先ほどのアクシデントはあったとはいえ、目を引くものは多い。

「大丈夫だよ」

「え??」

簪が呟く言葉を聞いて、本音がきよとした顔で見る。

「飛鳥は大丈夫」

「カンちゃん、さっき会って来たの？？」

「うん」

先ほどあったことを、周りに聞かれない程度の小声で伝える。とは言え、流石に抱きついたことを言うのはかなり恥ずかしかった。本音も嬉しそうな、それでいて少し悔しそうな表情でこちらを見ていた。

「そっか。アーちゃん・・・、あの約束覚えていてくれたんだね」

「うん。飛鳥は私たちがもうとっくに忘れてると思ってた」

「そんなことないんだけどな」

懐かしそうにしている。辛い時であったが、飛鳥が生きてくれたことは何よりも嬉しかった。

「あ、それと・・・」

話題を変える。簪もまた、更識の一人として今回のことを聞いていた。大きく動くことはせずとも、いざとなったら裏の人間として動かなければいけないという心構えはしていた。

どうやら裏で姉の楯無が色々と動いているらしいが、表立った動きがない以上、警戒は怠れない。いざとなったら彼女たちが誘導にも参加しなければいけない。

一体何が起きるのか。裏の人間である彼女たちの警戒網に何かが引っかかる感じがしていた。

「全くあいつは何をしたいんだ!!」

「まあまあ、落ち着いてくださいませ、篠ノ之さん。確かに先ほどの飛鳥さんの行動は見過ごせませんが・・・」

簪と本音の隣が空いていたために、やってきた箒とセシリアが座った。どうやら二人が話している話題は飛鳥の先ほどの行動だ。

「先ほども一夏さんが問い詰めていましたが、もうあんな行動はしないと思いますわ」

「何故そう言いきれぬ。あいつはいつ何をするか・・・」

「あら、篠ノ之さんは気づきませんでしたの??」

「何をだ??」

セシリアの言う言葉には何故か自信が溢れていた。まるで飛鳥のことを信頼しているかのように。そこまで言い切れるのはどうしたのかと箒には分からなかった。

「目ですわ」

「目??? 目だと??? それがどうしたというのだ」

何を言いたいのだと、訝しげな視線を向けている。

「目は口ほどにものを言う。確かそんな言葉がありませんの??」

「あるにはあるが、まさか、あいつの目がどうのと言うわけじゃないだろうな???」

「その通りですわ」

「な!??」

セシリアの言う言葉に、箒は信じられないという表情で驚く。放棄からして、飛鳥がまたいつあんな行動をするか。何時かの一夏に對して行ったまるで殺すような・・・。

あのときのことかまだ頭からはなれず、先ほどの試合でそれがまたよみがえっていたのだ。更に飛鳥は自分の姉、篠ノ之束のことをなにやら怨んでいるのがわかっていた。一体姉が彼に対して何をしたのか。それがMS・・・ヴェステイージと何か関係があるのだろうか。

「飛鳥さんの目が一回戦を終えてからのものとは違ってましたの」

おそらくピットから離れてから何かがあったのだろう。そうセシリアは思っていた。ちらりと横を見れば、水色の髪をした女子生徒と同じクラスの生徒である布仏本音の姿がある。

セシリアの視線は水色の髪の少女・・・、更識簪のほうに向けられていた。彼女が飛鳥の何かを変えたのだと。そう思っていた。

アリーナを見ると、一組の飛鳥と一夏、二組の鈴ともう一人の生徒がそれぞれISとMSを起動させ、空中にいた。

「一夏・・・」

簪は決勝に来ている、自身の想い人のことを心配して思わず祈るようにして手を合わせてしまう。

相手の一人は代表候補生。いくらセシリアが候補生として特訓に付き合ってくれたとて、彼女のISであるブルーティアーズとは戦術が違う。

それに対応できるだろうか。うまく連携は取れるだろうか。いろんな不安が現われては、消えていった。

簪と本音が周囲を見渡す。周りには教師団が立ち、誘導時に使うであろうインカムと共に警戒してか、待機状態のISを所持していた。

戦闘開始のブザーが鳴る。クラス対抗戦、決勝が開始された。しかし、二人にはまた別の何かに聞こえた。そう、まるで何かを呼び寄せる笛の音色に……。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

鈴がオープンチャンネルで一夏に言ってくる。だが、一夏はそんなの入らないというようにして言う。

ブザーが鳴り、お互いに一旦距離をとるために後退する。相手の女子生徒は鈴の専用機『甲龍^{シエンロン}』が中近接型であるために、後方支援ができるラファールを選んでいるようだ。

その両手にはアサルトライフルを構えている。対して鈴はその両手に青竜刀が握られている。

鈴と対峙する一夏は白式を起動させ、その手には姉千冬の使っていたものと同じ武器である雪片式型を握り締めている。

飛鳥は暗緑とダークグレーのツートンカラーのVPS装甲をしたブラストシルエットを装備しているヴェステイージである。右手にはビームライフルを構え、いつでも撃てるように準備が完了してい

る。

「行くわよ、一夏!!」

「こっちこそ行くぞ、鈴!!」

それぞれの獲物を構えた二人が接近し、ぶつかり合う。金属音が響き渡り、火花が散る。ギリギリという罅迫り合いが続き、そんな二人の間を緑色の光の軌跡と、鉛色の流星が走る。

お互いに押し合って後退する。二人に向けられた銃口から次々とビームと銃弾の嵐が襲いかかる。

一夏に当たらないよう、飛鳥は的確に鈴に対して牽制の射撃を行う。もちろん相手の生徒も負けじと一夏に狙いを定めて、銃弾の嵐を浴びせる。鈴が来ていなかったら十分クラス代表になっていた実力者。その腕前は確かだ。

「はああ!!」

「っ!!」

二本の青竜刀を連結させた『双天牙月』そうてんそうがが一夏に縦から、横から、斜めにからとバトンのように振り回して、襲いかかる。変幻自在なその攻撃の前に、防戦一方の一夏はその連撃を雪片で受け止めるしかできない。その瞬間、白式から警告音になる。

「!!」

「避ける!!」

まずい!!

飛鳥が叫ぶ声が聞こえた。まずいと、そう思った一夏はとつさに鈴に向けて、雪片を盾にするようにして翳す。するとものすごい衝撃が一夏と白式を襲う。

その衝撃が来る前に甲龍の肩部アーマーがスライドして開き、中心の球体が光ったのだ。そこから放たれた見えない何かが、一夏を襲ったのだ。

「甘いわよ、一夏。今のはほんのジャブなんだから」

そう笑みを浮かべて言う鈴。ジャブの次に来るのは当然ストレートである。再び甲龍のスライドして開いた光る球体の部分から、見えない何かが一夏に襲い掛かった。

「があ!!」

もろに受けてしまった一夏はその勢いのままアリーナの地上に叩きつけられる。それが鈴の専用機である甲龍に搭載されている衝撃砲『龍砲』の力であった。よろよろと立ち上がる一夏に対して、次々と放たれる不可視の衝撃が逃げ回り一夏のいた地面をえぐっていく。

「あんなの喰らってたら、いくらエネルギーがあっても!!」

そう回避行動をしながら一夏は毒づく。空を見上げると。飛鳥がもう一人の女子生徒と共に戦闘を繰り広げていた。

「このお!!」

「嘗めるな!!」

近接ブレードを選択して振り下ろしてきた相手の攻撃を、取り出した二本のビームジャベリンで受け止める。連結したそれを鈴の双天牙月のように振り回し、刀剣をかし上げ、ラファールの装甲をビーム刃で決る。

「きゃあああ!!」

「逃がすか!!」

その攻撃を受け、慌てて交代する相手を執拗に追いかける。そこに突然アラートが鳴り響き、スラスターを使って慌てて回避する。すると目前を不可視の衝撃が通過していく。

「やらせないわよ!!」

「あいつ・・・」

一夏が地上からこちらを見ている。どうやら置き去りにした状態で、鈴がこちらに向かってきていたのだ。確かにあの時飛鳥に対しても宣戦布告をしていた。その言葉通り、攻撃してきたのだ。

「アンタはどうかしたね??」

「こいつ、嘗めるな!!」

龍砲を放ってくる鈴の攻撃を、その光タイミングを掴み回避していく。

「当たらない!? 初見で回避したことは・・・、あるってものね!!」

構えていた双天牙月を振り回してくる。それにあわせるようにして、ビームジャベリンにてそれに対抗する飛鳥。

獲物同士がぶつかり合うたびに、激しいスパークが二人の間に起きる。思わず目をつぶってしまいそうになるが、それをしたほうが負けである。どちらも気合でそれをしないでいた。

「こいつで!!」

「このお・・・」

ビーム砲とレール砲を向け、一斉掃射する。ビームは回避するが、レール砲は得物を盾にして受け止める。しかし、衝撃は殺せずに、後方へと吹き飛ばされる。

「今だ!!」

「よっしゃあ!!」

「ええ!?!」

鈴の後ろには零落白夜を起動させた雪片を構えた一夏が突っ込んできていた。やれると思った一夏が雪片を振り下ろそうとした瞬間。突然後ろ向きのはずである体勢で、龍砲が放たれたのだ。

「な!?!」

「あれは後ろにも撃てるのかよ」

とっさの所で回避した一夏であるが、零落白夜は解除され、更に鈴は体勢を立て直すべく後退していた。追いかけてようとした一夏であるが、その間に割って入る女子生徒がアサルトライフルで牽制してきた。

「よくかわすじゃない。衝撃砲『龍砲』は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

そう鈴が二人を褒めるようにして言う。どうやらまだ自分のほうが実量は植えてであると思っっているようだ。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

「な、何よ……。そんなこと当たり前じゃない！！と、とにかく、格の違いってのを見せてあげるわよ！！」

お互いに雪片と双天牙月を構える。いつでも援護できるように飛鳥も全砲門が使用できることを確認する。そして、汗が雫として地面に落ちた瞬間。大きく動く。

「いっけえええ！！」

肩越しから無数のミサイルが放たれる。それが全て誘導つきで二人に向かっていく。とっさにアサルトライフルを構える生徒の前に立つ鈴は双天牙月をブーメランのようにして投擲する。それが鋭い回転を維持したまま、向かってきたミサイルを次々と落としていく。

「これくらい！！」

「掛かった！！」

「な！？」

ミサイルを全弾打ち落としたことに得意げに声をあげる鈴であるが、飛鳥はもともとミサイルを当てる気はなかった。むしろ当たればラッキー……。それくらいのものであった。

双天牙月が今だ旋回しているのに対してビーム砲『ケロベロス』

を向け、掃射する。ビーム熱が実体剣を溶かし、貫く。その瞬間甲龍の近接武器である双天牙月が爆ぜたのだ。

「くっ!!」

「鈴!!」

「っ!!」

パートナーの声で、咄然として自身の武器が破壊されたのを見ていた鈴があわてて気をそちらに向ける。一夏が零落白夜を起動させた状態で突っ込んできていたのだ。

「あたしとした事が・・・」

とっさに龍砲を放つがそれをかわして一夏。多少装甲を掠めるが、まだいけるという勢いのままつつこんでくる。このままじゃやられる。そう思ったりんであるが、自分にはあれを受け止める武器がすでに手元にない。そう思っていたところに突然、投げつけられた刀剣が目に入った。

「使って!!」

「ありがとう」

アンロック
使用承諾したラファール・リヴァイブの近接ブレードが鈴の手に渡り、振り下ろされた雪片とぶつかり合う。

「味方の武器を!？」

「これも連携の一つよ、一夏!!」

「こんのおお!!」

鏢迫り合いが再び始まる。そこに割って入ろうとした女子生徒に

対して、突然現われた飛鳥が蹴りを放って後方に吹き飛ばす。その手に持ったビームジャベリンを構え、突進する。

慌てて一直線上であるためにショットガンを取り出し、打ち込んでくる。しかし、そんな実弾もABシールドの前には無駄であり、多少の衝撃はあっても、ヴェステイージには傷はなかった。

「はあああ!!」

したから切り上げるようにして振り上げられたビームジャベリンのビーム刃が、ショットガンの銃身もろともラファールの腕部を切り飛ばした。自らの腕が切られたかのように恐怖に染まった顔の女子生徒。飛鳥は、止めといわんばかりに振り上げたそれを切り下ろす。完全に決まった攻撃を受け、女子生徒は地面に叩きつけられる。そのときに絶対防御が発動して、シールドエネルギーがゼロとなった。

ずっとメインカメラに移る、一夏と鈴の戦闘。今しがたやられたパートナーのほうに一瞥した鈴はまずいというような表情になり、龍砲と借りた刀剣を使って一夏を翻弄していた。一夏も何とか接近できればいいのであるが、瞬時加速をしてもおそらく鈴には見切られる。

飛鳥はすぐさまシルエットを換装する。ブラストシルエットが消え、その代わりに巨大なスラスターを持ったフォースシルエットが武装される。盾が上下に分かれる。増加されたスラスターを全開にして、肩越しから掴んだ柄からビーム刃を展開し、背中を向けている鈴に向かって接近する。

「後ろから!!」

「飛鳥!!」

鈴は後ろから接近する飛鳥のことを警戒音とハイパーセンサーで確認していた。一夏も挟み撃ちをするということで、飛鳥に声をかける。飛鳥もその意図を読み取り、加速する。焦る鈴の放った龍砲は全く当たらない。落ち着いていれば当たったかもしれないが、すでに底までの冷静さは彼女にはなかった。そして振り上げられた二本の剣。そして、それらが振り下ろされようとしたときだった。

「!!」

突然アリーナの天井を突き破る熱線が三人の近くに着弾し、会場を大きく揺らした。

「な、何だ!!」

飛鳥が慌ててメインカメラを煙の出ているほうへと向ける。するとそこから突然現れた謎の機影。それも・・・、五機。

「何だよ、あれ・・・」

「全身装甲のIS?? あんなの見たことないわよ!!」

鈴と一夏がなにやら叫んでいる。飛鳥はただただ突然現れたそれらに対して、驚きと怒りの視線を向けている。

「何なんだよ!! お前たちは!!」

「!?!」

一体何が起きたのか一瞬分からなかった。鈴の甲龍の武装である龍砲でさえ、これほどの威力はない。会場を覆っているシールドエネルギーと同じバリアーを突き破るほどの範囲と威力を持っているのだ。

一体何がおきているのか分からないでいる一夏に、突然鈴からプライベートチャンネルによる通信が入る。

>一夏、試合は中止よ!!アンタ達はすぐにピットに戻って!!」

その鈴の言葉をすぐに理解できなかった一夏。突然白式が危険を伝える警戒音を鳴らす。天井を突き破ったために発生した煙の中から熱源反応があることを告げていたのだ。

モニターに出ていたのは所属不明とすでに向こうからロックされているという文字であった。

ここに来て、ようやく一夏は何が起きたのかを理解した。アリーナの遮断シールドはISと同じものが使われている。だが、それすらも破られ、一夏のことをロックしているのだ。

>いいから、早く!!>

「だったら、鈴!!お前はどするんだよ!?!」

一夏は回線をつなげる方法が分からないために、オープンチャンネルにて鈴に尋ねる。鈴は一夏がオープンチャンネルで尋ねてきたために、自身もそれで答える。

「アタシが時間を稼ぐから、アンタ達はその間に逃げなさいってことよ!!!」

「はあ！？逃げるってお前……。誰が女を置いてそんなことできるか！！」

「この余に及んで馬鹿！？アタシよりアンタの方が弱いんだからしようがないじゃない！！」

鈴の言うとおり、現在の一夏の実力では、あんな危険な武器を持っている謎のISに勝てるとは到底思えなかった。それを分かっている鈴だからこそ、そう提案したのであるが。大して一夏は空気が読めないのか、それとも自らの信念に馬鹿一直線なのかどうか。それを拒否する。

「別に、アタシだって最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態なんだから、直ぐに学園の先生たちがやってきて事態を収拾して……」

「まずい、鈴！！」

一機のISから放たれた太い光線が先ほどまで鈴がいたところを通過して言った。それに気づいた一夏が間一髪所で鈴を抱きかかえて回避していたのだ。

そんなISの攻撃の威力を目の当たりにした一夏と鈴は一瞬言葉を失った。レーザーを放つセシリアのブルーティアーズよりも威力は上。同じくビーム兵器を使う飛鳥のヴェステイージのものよりも上であったのだ。そんな時、一夏に抱きかかえられていた鈴は恥ずかしいのか、体をばたつかせて一夏から離れようとしている。

「ちよっ、ちよっと、馬鹿！離さないよ！！」

「お、おい、暴れるな。って馬鹿、殴るな！！」

「う、うるさいうるさいうるさい！！」

いくらシールドバリアーに守られているからといって、ISの拳で殴ってくるために白式のエネルギーは少しずつ減っていた。

「だ、大体、どこ触って・・・」

「!!しまった、間に合わな・・・」

いつの間にか誘導されていたのか、一夏たちの前には銃口をむけたISがいた。鈴の言葉に気を取られていて、全く周りを警戒していなかったことがあだになった。

やられる・・・。

そう思った瞬間に放たれたビーム。しかし、二人の間に突然現われた青とダークグレーのツートンカラーの機体・・・ヴェステイージがABシールドを翳してその攻撃を受け止めていたのだ。

「飛鳥!!」

「あ、アンタ・・・」

「早く逃げろ!!」

受け止めきった飛鳥はすかさずビームライフルをそのISに向かって放つ。それが回避行動を取ったその腕を吹き飛ばす。すかさずにカバーするように入ってきた他のISがこちらにビーム砲を向けていた。

「何なんだよ、あんたたちは!!」

「・・・」

飛鳥がそう声を張り上げて叫ぶが、謎のISたちは答えない。

『紅月くん、織斑くん、鳳さん。今すぐアリーナから脱出してください！　すぐに先生たちがISで制圧に行きます！！』

突然いつもはワタワタしている彼女とは打って変わって、威勢がある真耶の声が通信で入ってきた。

「何言ってるんです！！あんたたちを待ってたんじゃない、被害が広がる！！」

飛鳥は牽制するようにしてライフルを連射する。

「先生たちが来るまで俺たちで食い止めます。いいな、鈴」

「だ、誰に言ってるのよ。そ、それより離しなさいよ。動けないじゃない！！」

「おわ！？悪かったって」

暴れるりんのことを一夏は離す。二人もどうやらやる気満々のようである。

『織斑くん！？だ、ダメですよ！！生徒さんにもしものことがあったら・・・』

真耶の話の途中、未確認がその機体装甲を生かして、飛鳥たちに向かって突進してきた。それを回避し、それぞれの武器を構える。五機の未確認もそれぞれビーム砲を向けている。

「また、たくさんの人を殺したいのか・・・、あんたたちは！！」

飛鳥があの際の光景を思い出し、叫んだ。

「もしもし！？紅月くん、織斑くん、鳳さんも！！聞いてますか！？」

アリーナの管制室にて通信を行っていた真耶の声が響いていた。しかし通信先の三人は全く答えることはない。

「山田くん。本人たちが自分達でやると言ってるのだ、やらせてみても良いだろう」

「ちょっと、お、織斑先生！？何呑気なことを！！一大事なんですよ！？」

「落ち着いてコーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

そう言って千冬は手元にある入れ物からスプーンを使って白い粉をコーヒーの中に入れていく。しかし、真耶が見たその入れ物にはデカデカと塩と書かれていた。

落ち着けといっている千冬であるが、一番焦っているのは彼女ではないだろうか。そんな彼女は全く気づく素振りもなく、塩を入れたコーヒーをかき混ぜている。

「あ、あの・・・、織斑先生？？それ、塩ですけど・・・」

「何を言っているんだ、山田くん。これのどこが・・・って、何故塩があるんだ？？」

「さあ？？でも、そこにはちゃんと塩って書かれていますよね？？」

「・・・」

「あー！やっぱり、弟さんのことが心配なんですわ。やっぱり織斑先生でも・・・」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

一瞬間まった千冬であったが、真耶のその言葉にピクリと反応し、ゆっくりとそのコップを彼女に突きつけた。無言で飲めといっているのだ。

「へ??でもそれ、塩が入ったやつじゃ・・・」

「どうぞ」

真耶は千冬に塩入りコーヒーを押し付けられ、涙目でそれを受け取った。泣き泣きそれに口を付ける。

「い、いただきます・・・」

「熱いので一気に飲むといい」

呑気にコーヒーブレイクをしている暇はないのであるが、やはりそれはしよっぱかった。それ以上に辛かった・・・。

千冬と真耶の漫才が繰り広げられている間、アリーナでは未確認のISから放たれるビーム砲が三人を襲っていた。次々とエネルギーのそこが見えない彼らが打つビームは一撃でも喰らえばやられてしまう。最悪死亡というものであった。そんな恐怖を感じながらも、飛鳥はライフルを次々と未確認に向かって撃ち込んでいた。

鈴も龍砲を放っているが、それをありえない回避行動にてかわされていく。鈴の誘導でチャンスができたとしても、零落白夜で切りつける一夏の攻撃を、これまたありえない回避行動でかわしてしまうのだ。

「何やってんのよ、一夏!!ちゃんと狙いなさいよね」

「やってる!!でも、当たらないんだよ!!」

すでに白式のエネルギー残量は半分を切っており、最悪零落白夜の使用回数は後一回であった。

「なあ、あいつの動きって、なんか機械じみてないか??」

「何言ってるのよ? ISは機械じゃない」

一夏がいきなり二人に尋ねてきた。鈴がそれに答える。ISが機械であるから、そんな行動は当然なのであるが。

「なんて言うかな……。あれって、本当に人が乗ってるのか??」

「は??人が乗らなきゃISは動かない……」

でしよと続けようとした鈴であるが、こちらに向いている未確認からは全く攻撃をする素振りが見えない。それに気づいた飛鳥は、まるでこちらを観察しているようだと思う。そう、まるでデータを取っているかのように……。

まさかと思った……。これもまた、あいつの仕業なのかと。

常識からして、無尽のISというのはありえない。しかし、それに人工的なAIもしくは、入力した動きだけをするように造られているなら、それはクリアされる。超高度な技術であるが、できないことはない。

「仮に、そう仮にだ。アレが無人機だったらどうだ??」

「何??無人機なら勝てるって言うの??」

だからといって一気に五機は無理である。流石に零落白夜を使つたとしても一機が限界である。その間に狙い撃ちをされたらとんでもないことになる。一夏にそう飛鳥が言うと、一夏も黙らざるをえない。命を張る時ではないのだ。しかし、そんな時だった。突然インカム越しに、ものすごい声量で叫ぶものがいた。

『一夏!!!!』

アリーナに響くその声。ハウリングが聞いたこの声は……、観客席に立つ篠ノ之箒のものであった。

「あいつ……、何してるんだよ!!」

飛鳥はカッと頭に血が上がる。みすみすここに攻撃を撃ってくださいと言っているようなものである。ハイパーセンサーで見ると、箒の近くにやめろと掴みかかっている教師がいる。おそらく彼女が無理やり取ったのだろう。抵抗して更に叫ぶ。

『男なら……、男ならそれくらいの敵に勝てなくてなんとする!!』

アリーナに響くほどの大声。そして、未確認のISが箒の方にそのビーム砲を向けた。そして、飛鳥がハイパーセンサーを通して箒の近くにいたものを見た。

「!!」

ヒュッと息を呑んだ。呆然としてしまった。そこにいたのは飛鳥が守ると誓った大切な存在である二人の姿……、簪と本音の姿があったのだ。

やめろ、やめろ!!

飛鳥は叫んだ。スラスターを全開にして飛ぶ。

「やめろ!! 簪!! 本音!!」

左腕に装備されたABシールドを構える。もっと早く、もっと早くと飛鳥はヴェステイージに念じる。

「やめろ!! これ以上、俺から大切なものを奪うな!!」

その瞬間ビーム砲が放たれた。その瞬間飛鳥の頭の奥底で何かはじけた。それに答えるようにして、ヴェステイージのスラスターが今までにない爆発的な噴射をする。

ダブル・イグニッションブースト
“二重瞬時加速”

飛鳥とヴェステイージが一本の軌跡となった。

「ヤメロオオオオオ!!」

飛鳥がビーム砲から彼女達を守る形でABシールドを構える。高エネルギーのビームがシールドを蝕んでいく。モニターに映るはこれ以上の防御は無理だというアラート音。

「嘗めるなアアアアア!!」

こちらから押すようにしてスラスターを爆発させる。そして、シールドが爆発する前に、一機のISのビーム銃口に蓋をする。その

瞬間、ビームが内部でISを蹂躪するように駆け巡り、爆ぜた。

「ウワアアアアア!!」

ISが爆発したときの余波に巻き込まれ、飛鳥はシールドバリアーに叩きつけられる。左腕のABシールドは拉げ、もはや使い物にはならなかった。後ろに見える、二人の安堵した顔が見える。

守れた・・・、俺は。

「!!」

しかし、忘れていた。ISはまだ四機あったのだ。それぞれが飛鳥に向けて、そして、後ろの生徒たちに向けてビーム砲を向けていた。飛鳥は覚悟を決めていた。例えば、シールドがなくても、このヴェステイージで守って見せると。

「俺は!! もう、二度と大切なものを失ってたまるかアアアアア!!」

そう叫ぶと同時に四本のビームが打ち込まれる。とっさに構えたシールドは数秒もったのがいいほうであろうか。すぐさま溶解し、左腕と同化する。そして、その四本のビームが飛鳥とヴェステイージを打ち抜き、シールドバリアーがヴェステイージのぶつかった衝撃で破壊され、観客がいない席にヴェステイージが叩きつけられる。

「あ・・・、ああ・・・」

もはや視界がぼんやりとしていた。焦げ臭いにおいが充満し、それが鼻を刺激していた。

「飛鳥!!」

「アーちゃん!!」

すると向こうから二人の声が聞こえて来た。どうやら二人は無事なようだ。それを知った瞬間、飛鳥には何故か満足感が体を駆け巡った。そしてその瞬間、ふわっと体が浮き上がる感じがした。

激しく体を突き破る痛みが、一瞬にしてなくなった。まるで自分の体から意識だけが抜けたように・・・。

ああ、俺は・・・。

「守れたのか・・・」

そう満足感に満ちた言葉を最後に、飛鳥はゆっくりと瞳を閉じた。それと同時に、まるでヴェステイジが死んだように、VPS装甲の色が落ちた。

それを見た二人の少女の、少年の名を叫ぶ声だけがアリーナに響いていた・・・。

PHASE 14 謎の襲撃者!! (後書き)

ED2↓REASON>玉置成実<

インフィニット・ストラトスゝ怒れる瞳ゝ PHASE 15 勝利
エクスカリバー
の剣

次回予告

広がる草原

少年は再び見知らぬ場所へと来ていた

そこには丘へと続く、ただ広がる大地

その丘にひっそりと主を待つ一本の剣

それは、ただ使用者に勝利を齎す剣

そこに現れる二人の女性

そして、自らに手を差し伸べる騎士

悲しみにつつまれた少女達に向けられる悪魔の手

その前に現れるは再び立ち上がる傷ついた戦士

その手に握る剣にて、勝利を掴め・・・ヴェステイージ!!

PHASE 15 未知なる世界で・・・（前書き）

OP2↓IDENTITY＞玉置成実＜

前回の次回予告とは大幅に変わっています。現行のまま投稿すると
PHASE 14を軽く超えそうだったので・・・。

それぞれのタイトルをつけ、少しずつ投稿していきたいと思います
ので、その所はご了承ください。

PHASE 15 未知なる世界で・・・

ものすごい衝撃が彼女たちの立っていた観客席に走る。それと同時にものすごい音が耳を貫くような感じがした。シールドバリアーを破壊して、何かが観客席に落ちてきたのだ。

簪と本音が恐る恐る煙が晴れるそこを見る。彼女たちの瞳に映ったのは、ビーム砲を全身に受け、機体装甲が融解しているヴェステイージの姿であった。ぐったりとして、まるで死んでいるかのように見えた。

胸が張り裂けそうな思いを抱え、そこへと向かう。煙が上がるヴェステイージ。その煙は天高く上っていく・・・、まるで飛鳥の魂を表しているかのようにだった。そんなはずはない。そういう思いを胸に、簪はヴェステイージの横に立つ。

「アーちゃん・・・」

「大丈夫・・・、うん。飛鳥なら大丈夫だよ」

本音が不安そうな声を漏らす。小さく震えているのが見える。そこにいるのは対暗部家系の使用人である布仏本音ではなく、ただ一人の少年のことを心配する少女であった。

もう一度視線を戻す。クレーターを形成し、ぐったりとそこに体を預けている状態である。

後ろのほうでは悲鳴と共に、教師の避難指示が聞こえている。自分たちも生徒会として、裏の人間としてそれを手伝いながらも動かなければいけない。だが、彼女たちはそれらをかなぐり捨てて、飛

鳥のもとに来ていたのだ。

隣で突然立ち上がり、誘導していた教師からインカムを奪った女子生徒・・・、篠ノ之箒が叫んだ声に反応してこちらに向かってビームを放ってきた未確認のIS。それらから自分たちを守るために、飛鳥は身を挺して守ってくれたのだ。

「でも、こんなのないよ・・・」

本音が涙を流して言う。ガクリと膝をついて、汚れていた床に制服の袖が触れたために黒く汚れる。しかし、そんなのを一々気にしていられるような余裕は彼女にはなかった。

「嘘だよね・・・??」

指一本動かずに行っているヴェステイージ・・・、飛鳥を見て簪がそう呟く。嘘だ嘘だと、目の前で彼女は自身に突きつけられている現実を必死に否定しようとしている。

一瞬こちらに視線を向けたような気がした。だが、運命はまるで彼女たちをあざ笑うかのようだった。まるで息を引き取るように、ゆっくりとヴェステイージのVPS装甲が解除されていたのだ。

色鮮やかな青から無機質な鉄色に・・・。それを見て目を見開く。彼女たちの声はもう届かない。その双眼からも金色の光が失われた。

「あ、アーちゃん!! やだよ、行かないでよ!!」

「飛鳥、飛鳥!! いやああ!!」

二人の叫びはもはや飛鳥には届かない。そう、手の届かない遠い

場所へといってしまったのだから・・・。

ビュウっと言う風が体を撫でる。寝癖頭の髪の毛が、風を受けてふわっと言う感触を感じている。ゆっくりと瞳を開ける飛鳥。体がとても柔らかなものに包まれているのを感じた。

柔らかく、そして暖かい。飛鳥の全てを包み込んでくれるようなそんな感じがした。横を見ると小さなテーブルの上に救急箱のようなものと、葉のような液体の入ったビン、それを入れたのだろう、水滴の付いたコップが置かれていた。

「ぐっ!!」

起き上がろうとした飛鳥であるが、とたんに走る激痛に顔を歪ませ、直ぐに柔らかな感触のあるものに体を沈ませる。どうやらこれは純白のベッドらしい。包み込む柔らかさは今までに触れた布団にはないものであった。

何とかここがどこなのか知ろうと思い。重たい首を横に向けることで見ることでできる範囲を広げる。すると回りはどこまでも広がっているのではないかと錯覚してしまうくらいに青々と茂った大草原であった。

近くには大きな泉の姿があり、木々の周りには近くの森の動物たちなのだろうか。ゆっくりとしている様子が見えた。ここは一体どこなのだとアスカは内心焦っていた。

すると誰かがこちらに向かってくる音が聞こえて来た。草を踏みしめる、ゆっくりとした足取り。複数の足音と気配がした。それを

察知できたのは幼い頃から軍事学校と鍛えられていたためである。

だが、やってくる者たちが一体何者なのか分からない以上、警戒を怠ることはできない。とはいえ、飛鳥は今体が動かない。指一本すら動かすのにかかるの神経が必要で、それを腕だというのはなら、まるで？がれたような痛みが走るのだった。

「あら？？もう目が覚めたのかしら？？」

「え？？あ、本当だ」

そんな風にどこかで聞いたような声色と口調であった。ゆっくりと、動かしづらい首をその声のするほうへと向ける。思わず目を見開き、体を起き上がらせようとしてしまった。それだけ飛鳥には衝撃的だったのだ。

「がっ！？」

「あ、もう。駄目じゃない」

「あなたは今、とてもじゃないけど体を動かせる状態じゃないんだよ？？」

痛みに涙が出そうだ。そこは歯を食いしばった我慢する。もれてくる苦悶の声を聞いて、少しでもその痛みを和らげようと、一人の女性が布団を千切らんと握り締めている飛鳥の手をそっと包み込んだ。

雪のように白いが、とても暖かく、優しい感じがした。まるで彼女と手をつないでいた時の感触を思い出しつつあった。

「あ、あん、私たち、は・・・」

声を出すのも厳しい。途切れ途切れになりながらも飛鳥は尋ねる。痛みがまだあるために、目が半開きの状態である。それでもなんとか彼女たちの顔を見ようとする。

「今は少し休んだほうがいいわ」

「それからでも遅くはないから」

ふわっと飛鳥は頭を撫でられると、とたんに痛みよりも激しい睡魔に襲われ、ゆっくりと瞳を閉じた。

飛鳥が眠りに落ちたことを確かめる二人の女性。水色の髪をした、顔立ちは似ているが、一人はセミロングの髪が外側に向いているのに対して、もうひとりには眼鏡をかけ、同じくセミロングの髪が内側に向いている。

二人ともお揃いの白いワンピースを着ており、仲の良い姉妹を思わせる。彼女たちの傍に突然現れたテーブルと椅子のセット。それに座る二人。テーブルの上には入れたての紅茶がカップの中にあつた。

「いきなり彼が現れた時には驚いたけど」

「マイスターの声が聞こえたから。たぶん彼は・・・」

そう眼鏡をかけた女性が飛鳥のことを心配そうにしてみる。突然草原に出現した一人の少年・・・、それが飛鳥だった。

干渉のはずのこの世界に現れた一人の少年。どこまでも自由な世界。誰にも干渉されず、ただ望むものがある世界。まるで心の中を表しているようであった。

「私のマイスターもようやく気づいたようだけど。信じたくないって思ってるわ」

「私のマイスターも友達と一緒に泣いてるよ。彼、戻してあげたほうが・・・」

そう言うが今戻したとしても、数秒で命の灯火が消えるだろう。

それほどまでに、飛鳥の傷は深刻であった。体中に火傷があり、ほとんど死んでもおかしくない重傷である。この干渉の世界のもので治療を施しているとはいえ、回復するには時間が掛かる。それに、このまま飛鳥を元の世界に戻すことを、彼女たちはあまり良しと思っていなかった。彼女たちが彼に向けている想いというのは、彼女たちのマイスターの心に隠されている想いと同じなのだから・・・。そう、彼女たち（・・・）は彼女たち（・・・）自身なのだ。

「自らの失策で失う命。今必死に動揺を押し殺してる・・・」

「何もできなかったことに、無力さを嘆いている・・・」

マイスターたちから流れてくる思いが、彼女たちの胸を突き刺す。重苦しい雰囲気が漂う。温かった紅茶が、すっかり冷えてしまっていた。指を鳴らせば直ぐに温くなるが、そのまま冷たいそれを口に運ぶ。

冷たい・・・。

まるで冷え切ってしまった心に触れた感じであった。自らの名を捨て、受け継ぐ名を名乗る・・・。彼女は彼女であっても、本当の彼女ではない。仮面をかぶり、それでも自らを失わないために明るく振舞う。

捨てたはずの彼女の心が今も受け継いだ仮面を被る彼女の心の奥

底にある。まるで永遠に出てこないように、冷凍保存されているように……。しかし、それはまるで、とてもとても大切に、なくならないように、形が変わらないようにするために施された処置のようにも見える……。

本当の自分を見てほしい、仮面をかなぐり捨て、ただの自分となり、思いっきり甘えたい。しかし、そんなことを許される立場ではない。彼女のISだから分かる。彼女はいつも表で笑っていても、心で寂しそうにしているのだと……。

力がほしい……。

それは何も飛鳥だけが求めているものではない。誰もが小なり、力というものを求めている。彼女のマイスターもまたそれを心から望んでいるのだ。目の前で冷たくなった少年。守るという約束は確かに果たしてくれた。だからといって、彼が死ぬことはなかったのだ。

飛鳥は体は守れても、心は守れなかった。彼女のマイスターは泣いている。それが彼女の心にも流れ込み、同調しているかのように彼女の瞳からも涙が溢れてくる。

「少しでも傷の治りが早くなればいいけど……」
「でも、その後だね……。本当に心が試されるのは……」

二人がそう呟き、ここから見える小高い丘を見上げる。人ならざる存在である二人には見えている。ただそこにひっそりと突き立てられた剣が、今もまだ手にする主がいなままあるのが……。

飛鳥がこの世界に来て数日というのだろうか。もともと時間概念というものがここにはないために、今日も昨日も明日というものもないのだ。朝がいいならずと朝、夜がいいなら夜と、まさに意のままにこの世界はあった。

歩けるほどではないものの、体を起き上がらせるくらいはできるようになっていた。少しずつであるが、治癒が進んでいるのが見て取れた。それでも体中にできた火傷などの傷は痛々しく残っている。

飛鳥自身は二人を守れたのだから、別にいいと言っていたが、少し悲しそうな表情を見てどうしたのかと尋ねる。飛鳥にとって、彼女たちはあまりに幼馴染の二人に似すぎていたのだ。

楯無と簪。飛鳥の看病をしてくれている二人の女性は、そんな二人が大人っぽくなった、数年先の未来の姿を現しているようであった。彼女たちの顔を見たとき飛鳥は、純粹に綺麗だと思った。これは嘘偽りのない思いだ。

飛鳥にとって、彼女たちが悲しそうな表情をすると、まるで楯無と簪がそんな表情になったのを想起するために、胸が痛んだ。

この世界は現実世界ではないということが直ぐに理解できた。いくら時間がたっても太陽は上ったままであるから。夜のほうがいいのかと聞かれたが、別にいいと言った。

手渡されたスープは温かく、心まで染み渡るものだ。始めの内は腕が上がらず、彼女たちにスプーンで飲ませてもらっていたが、今はこうして自分でできるまでに回復していた。一体どれくらいの時間がたったのだろうか。

元の世界の自分はどうなったのかと聞くことはできなかった。どうしても飛鳥が望まない答えが返ってきそうだったからだ。

「あ、まだ名前聞いてなかったな・・・」

食事を終え、空になったお皿と使ったスプーンを返しながら飛鳥が言う。いつまでもあんたやお前というのは流石に失礼だと思った。声を出すのも苦しく、激痛でそこまで思考が回らなかったために、遅い自己紹介だった。

「俺は飛鳥。紅月飛鳥って言うんだ」

彼女たちにとっては飛鳥が名乗らなくても良く知っている名前だった。マイスターたちが姉として、幼馴染として、同級生として、そして・・・。

「なら、私たちも自己紹介しなきゃ駄目よね。私の名前はミステリアス・レイディ。マイスターは更識楯無よ」

「私は打鉄式式。マイスターは妹の更識簪」
「な・・・」

まさかここまで彼女たちに似ているというのは、今飛鳥の目の前にいる二人がISであるからだった。

「なあ、ISって性別は皆女なのか?？」

飛鳥は困惑を隠しきれない表情で尋ねる。うっかり彼女たちを楯無、簪とマイスターたちの名前で呼んでしまうのは仕方のないことだろう。それほどまでにそっくりなのだから。

クスクスと二人に笑われ、何だよと拗ねる飛鳥も、恥ずかしさで頬が赤くなっている。

式式が説明してくれたことによると、グランドマザーと呼ばれる人物・・・、飛鳥にとっては家族の仇になる篠ノ之束。その束に作られる彼女たちたちISの人が他としての存在というのはやはり、女性にしか起動しないこともあり、女性体となるらしい。一夏が唯一の男性操縦者であるが、やはり使用しているのはISである。彼の白式のコアの人が他もまた女性なのだろうと予想できた。

「というか、何で俺はここに?? 時間はどうなってるんだ?? まさか!？」

「落ち着きなさい。向こうでは数秒もたっていないわ。ここには時間という概念がないから」

「そ、そうなのか・・・」

ミステリアスにそう言われ、飛鳥はよかったと内心安堵のため息をつく。とはいえ、今の飛鳥は自身の状態を見て、例え戻ったとしても何もできないだろうと思った。更に、ビーム砲を受けたヴェステイージはかなり機体にダメージがある。その戦いには到底参加できないだろう。

今はゆっくりと傷を癒すのが先決だった。今向こうはどうなっているのだろうか。時間はほとんど経っていないといっても、最後に聞いたのは簪と本音が自分の名前を叫ぶ声だった。

悲痛な叫びだった。大切な存在である二人を守るためにシールドを構えてビームを受け止めたが、敵は五機いた。一機を倒しても、残っていたそれらが畳み掛けるようにしてビームを撃ってきた。一発を止めて限界であったシールドは簡単に破壊され、熱で溶かされ

たそれが左腕と同化したようになったのだ。

左腕を見ると、火傷が治りかけとはいえ、痣ができていた。無理をした結果だとしても、それで守れたのならいい。思わず笑みがこぼれた。先ほども見せた悲しそうな表情。あの時聞きそびれたが、一体どうしたのかと尋ねる。

「なんだよ、これくらいどうってこと・・・」

乾いた音が草原に響き渡る。まるで山にいるかのようにどこまでも、永遠にその音が流れ続けるかと思った。その乾いた音はまるで悲しみの曲のようにして流れていた・・・。

「な、何するんだよ!!」

飛鳥は頬を叩いた簪似の式式に対して、動揺の浮かんではいる瞳を向け、怒ったように叫ぶ。ジンジンと叩かれた頬が痛む。動揺も相まって、更に痛みが大きかった。再び逆の頬が叩かれる。無抵抗の飛鳥は再びされるがままに叩かれた。

どうして・・・。

飛鳥には分からなかった。何故彼女が自分を叩くのか、呆然とした表情で、今度は反論できない。叩かれ横を向いたまま固まったようにしている。

そんな二人のことをミステリアスは黙って見ていた。彼女にはどうやらこのことの原因が分かっているらしい。彼女のマイスターである楯無が妹である簪のことを色々知っているように、それがISの彼女にもそのまま流れていた。だから、どうして式式が悲しそう

な表情でいるのかも分かっているつもりだった。

もし自分が同じ立場だったら・・・。

きっと同じことをしただろう楯無であり、■■である彼女もその想いを抱いているから。

アツくん・・・。守るって言うこと、もう一度良く考えてみてね。

慈愛のこもった瞳で飛鳥を見つめているミステリアス。こればかりは彼自身が分からなければいけないのだ。

「何するんだよ!!」

「馬鹿!!」

「!!」

ハッとして、意味も分からずに叩かれた飛鳥は思わずカッとなって叫んでしまった。自分が何か悪いことをしたのかと。飛鳥は叫ぶ。すると、式式が真正面から馬鹿と叫んだ。

「ば、馬鹿って何だよ。いきなり叩きやがって・・・。全然意味が分からない!!」

一瞬たじろぎそうになったが、叫ぶようにして言い返す。いくらなんでもおかしい。

「何も分かってない。飛鳥は何も」

「分かってないって・・・、一体何をだよ」

そう言われても、会ったばかりで彼女の考えていることなど分か

るわけがない。だが、どうしてか彼女は泣いていた。そして、その表情が簪と重なる。当然だ・・・、ほとんど瓜二つなのだから。それだけでないことを、飛鳥はまだ気づいていない。

でも、何故だろう・・・。

彼女の悲しそうな顔を見ると、胸が痛い。まるで守ったようで、何も守れなかったような・・・、そんな気がしていた。

「俺は守れたんだ。約束通り、簪と本音のことを」

その何が悪い。飛鳥はそう叫んだ。式式だけでなく、後ろで飛鳥たちの事を見ていたミステリアスに対しても。

「その何が悪いんだよ。それともあんたは二人を見捨てろともも言いたいのかよ」

「違う!!」

「そうじゃないわよ、アツくん」

「あ、アツくん!」?

突然彼女から、楯無が飛鳥を呼ぶときに使う愛称で呼ばれたために、一瞬戸惑いを見せる。悪戯っぽい笑みを浮かべている彼女を見て、マイスターがマイスターなら、ISもISだと思った。性格までも似るのだろうか、どこまでも固い絆が結ばれる奥の深さを感じた。

「そうじゃないって、どういうことだよ??」

「私たちの気持ちはマイスターと繋がっているのよ。つまり、ISは心で繋がっているの」

「?」?

どういう意味だと飛鳥は頭を捻る。突然そう言われてもどうしようもない。だが、一つだけ分かったことがある。式式が涙を流しているのも、ミステリアスが悲しそうな表情をしているのは、すべて現実世界での彼女たちの感情なのだということを・・・。

「お、俺は・・・」

二人を悲しませたのか・・・??

彼女たちの今の表情が、元の世界の二人のと同じであるならば、きつとそうなるのだろう。そう思った瞬間、飛鳥は鈍器で殴られたような衝撃が走った。視界がグラつき、眩暈がする。

目を見開き、無意識の内に手で頭を抱えていた。俯き、口からは言葉にならない呼吸音だけが聞こえる。

守ると言っておきながら、そう確固たる想いを持ちながら・・・。
ヴェステイージュという力をその手に持ちながら・・・。

雫が白い布団に落ちる。それが小さく染みを形成していく。いくつも、いくつも・・・。悔しさと、情けなさ、申し訳なさが入り混じっている。その染みがいつしか繋がるようにして大きなものへとになっていく。まるで小さな涙の雫がISのコアのようにして、次々と繋がっていき、大きな集合体へとなるかのように・・・。

涙を流す飛鳥を優しく抱きしめる式式。マイスターを守ってくれたことには感謝している。自分が今だ完成しないことを、彼女自身が悔しい思いを感じているのだ。マイスターを守る盾として矛としての役割を全うできないのだから・・・。

そして、マイスターの気持ちを汲み取るなら、飛鳥に対して怒りを向けざるを得なかった。マイスターの心を傷つけたのは本当のことだから。

ミステリアスも本当はそこに行きたいが、今は楯無の姉として、妹の簪を見守る思いを尊重し、そこで二人を見ている。

そして、別の思考を凝らしていた。彼をこのまま元の世界に戻してもいいのだろうか。

マイスターたち・・・、楯無と簪の想いを汲み取るなら、早急に傷を癒し、元の世界に戻すことが彼女たちにとっては取るべき行動であった。

しかし、傷の癒えはゆっくりというものだった。それには彼女たち自身の想いがあった。その想いというのは、マイスターたちの想いを裏切ってしまうものだったのだ・・・。

彼を元の世界に戻すのは・・・。

傷つき、それでも前に進もうとしている飛鳥。今回だって、簪と本音を守るために自ら身を挺してビームを受け、傷ついた。それを悲しむことはなく、むしろそれで守れたのだからいいのだと小さく笑みを浮かべていた。

思わず抱きしめたくなった。彼が二人を守ったからでもなく、怪我をしたからでもない。IS（兵器）である彼女自身がそう言う想いをもっていたのだ。傷つき、しかし、それを逆に力に変えていく飛鳥が今にも倒れそうに見えたのだ。

きっと元の世界に戻っても、大切な存在を守るために戦い続けるだろう。例えば自らが傷つこうとも。いくら傷つかないでと言っても、きつとそれは果たされない。自分よりも、想いのほうを優先するか
ら・・・。

ねえ、ずっとこの世界にいない??

ゆっくりと近づいたミステリアスが言う。微笑を浮かべ、飛鳥のことを歓迎すると手を差し伸べる。飛鳥はそう言われ、驚きながらその手とミステリアスのことを交互に見る。

飛鳥を抱きしめていた式式も、ミステリアスが一体何を言っているのだという視線を向けている。マイスターたちの想いを知っている自分たちがすべきことはそんなことではない。そう言う式式であるが、ミステリアスはその手を引っ込める気配はない。

「何を言ってるんだよ、そんなことしたら・・・」

向こうの世界の時間はどうなるのだと。飛鳥はその疑問を口にする。

「大丈夫よ。向こうの世界との干渉を切り離せばいいだけだから」
「それって、つまりは・・・」

向こうでほぼ止まった状態である時間が再び動き出すということ。それはつまり、飛鳥にとっては完全なる死を意味することだった。それを理解した瞬間、飛鳥は叫んでいた。

「ふざけるなよ!!」

飛鳥は傷む体を押して、差し出されていた手を叩いた。それはつまり、拒絶を意味するものだった。拒絶されたことを驚いた表情ではなく、当然かというような、確信していたかのような表情で飛鳥を見ていた。

全て確信済みかよ……。

どうも、彼女のマイスター同様にやることが巧みだ。飛鳥の本当の想いを、こうも簡単に引きだしてしまった。

してやられたと、飛鳥は少し不機嫌そうにしてミステリアスを睨みつけている。クスクスと笑う彼女は少し赤くなった手の甲をさりながら飛鳥を見つめる。

「俺はこの世界にはいられない……。悪いけど、俺にはやらなきゃいけないことがあるんだ」

「それはグランドマザーと白騎士に対する復讐??」

「ああ」

肩に手を置いて心配そうに見ていた式式が尋ねるのに対して、間を入れずに即答した。

もちろんそれだけじゃない……。

「守るため……、なのかしら??」

「当たり前だ。俺が決めたことなんだ。約束もあるけど……。俺が、俺自身が決めた信念を曲げたくない」

無意識の内に拳を握り締めていた。まるで、確固たる信念を体現

しているようにミステリアスと式式には見えた。硬く握られた信念はどうやらそう簡単には崩れることはないらしい。

なら仕方ない。そう思い、二人は飛鳥の手をそれぞれ両手で包み込み、祈るような姿勢になる。一体何をしようというのかと、飛鳥は突然のことに顔を赤くして慌てる。

淡い光が飛鳥の体を包み込む。暖かく、そして全てを受け入れるかのような。そんな感じの光に包まれた飛鳥。体から痛みがスウッと消えていくような感じがした。

起き上がってみても、以前は動かすこともできなかった足もちゃんと地に着けることができ、歩くこともできた。まるで綿毛になったかのように、風に乗って飛べるくらいに体が軽く感じた。

どこから取り出したのか分からないが、いつも着ているようなI S学園の男子生徒特注の制服が出された。それを着て、一度着替えるために借りていた小屋から出る。

ずっと横になっていたために、立った状態で感じる太陽の光はまるで現実の世界に居るように眩しく感じた。

PHASE 15 未知なる世界で・・・（後書き）

ED2↓REASON＞玉置成実＜

次回予告

立ち上がる者

その世界の住人である二人に連れられ、まだ見ぬ力を求め、少年は歩き出す

小高い丘にあるは主なき剣

力を求めん少年の前に現れるは、緋翼を持ちし一人の騎士

その力に相応しいかは己の力のみが証明する

ぶつかり合う想いと想い

彼らが触れしものは幻想か

剣を前に崩れ行く者

今再び運命を呪う

次回 インフィニット・ストラトスゝ怒れる瞳ゝ

PHASE 16 力を求めるもの

悲しき運命は残酷のみを戦士に与えん・・。

PHASE 16 力求めるもの（前書き）

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

いよいよ戦闘開始。

敵は・・・。

たくさんのご感想と閲覧いつもありがとうございます。それだけでも作者にとっては嬉しく、執筆もはかどります。

少しでも読者様に楽しんでいただけるようにしていきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。

それでは本編開始です。

PHASE 16 力求めるもの

それから飛鳥は二人に連れられて丘を登っていた。不思議と疲れはなかった。時間という概念がないために、時間の流れで衰える体力などというものもないのだろう。

二人の着ている白のワンピースがキラキラと光を受けて煌めく。まるで羽衣を身にまとった女神のように見えた。

どこまでも続くかと思わせる草原の草と同じものが丘を駆け上がるように続いている。ゆっくりとした歩調で丘の頂上を目指す。

「なあ、頂上には何があるんだ??」

「うふふふ♪秘密って言いたいけど・・・」

――あなたの中に眠る、まだ見ぬ力って言えばいいのかな。

そう振り返り、微笑みながら言うミスティアス。飛鳥は新しい力が手に入るとは、素直に嬉しかった。だが、物静かに歩いている式式は、それがそう簡単に手に入られるものではないと思っていた。

それはこの世界が彼女たちのマスターの心を表したものが混ざり合ったものとして形成されているとはいえ、何故か今から向かっている先にある、その力があることが彼女にとっては気がかりであった。

――この世界で・・・、IS間で何かが起きている??

そう歩きながら考える。意識体だけがISと接触するのは大抵第二次移行の時であり、彼女の隣を歩くミステリアスはすでに彼女のマイスターである楯無との接触は終えている。式式自身は未だ完成の域に達していないために、まだであるが……。

しかし、大前提であるISの操縦者というものに、飛鳥は当て嵌らないのだ。もしIS間で何かが起きていたならば、自分たちを生み出したグランドマザーである篠ノ之束が何かしらに気づくはずであり、早急な手立てを打ってくる筈である。

しかし、それが見られない以上。何が起きているか彼女には理解のしようがなかった。

そして、ようやく長い上り坂を登りきり、丘の頂上へと着いた。飛鳥にとっては、そこから見下ろす景色はまた別のものに見え、ずっと自分がいたところが小さく見え、更に遠くまで向こうのほうが見えた。

どこまでも無限に続く世界。果てしないこの世界に終わりはなく、始まりもない。しかし、飛鳥にとっては、ここはもう一度スタートする、始まりの場所になりそうだった。

「あ、あれは……」

後ろを向いた飛鳥の眼に飛び込んできたのは一本の剣であった。巨大な岩に突き刺さった、主なき剣……。

「私と式式の世界にはあるはずのないもののよ」
「この世界……、確かISと操縦者の対面は第二次移行の時だった……」

「そう、私とマイスターはそれを既に済ませているってわけ」

式式が少し不機嫌そうな表情になったのを見て、これは失敬というような仕草を見せる。一つ一つの仕草が可愛いと思った。

でもしかし、あの剣には見覚えがない。突然合わさった二人のI Sの世界。そして、まるでそれだけが異質のような雰囲気醸し出していた。

飛鳥は二人の顔を見る。頷く二人を見て、飛鳥はその間を進み、岩に突き刺さった剣の前に立つ。

「これが・・・俺の新しい力」

まるで新品そのものである刀身が光を反射して光っている。西洋風の両刃剣。それに向かって、ゆっくりと手を伸ばした飛鳥。

「危ない!!」

「!!」

突然式式の叫びと共に、彼女が飛鳥に向かって体当たりを食らわせる。彼女に抱きかかえられながら、飛鳥は柔らかな草の上を二人でごろごろと転がる。何かが上空から飛鳥に向かって襲い掛かってきたらしい。ものすごい金属音が響いた。

「な、一体なんなんだ!？」

飛鳥が慌てて倒れていた体勢から起き上がり、先ほどの場所を見る。するとそこには赤、青、白灰色の騎士甲冑を纏った何者かが、ミステリアスに向かって剣を振り下ろしていたのだ。とっさに守り

にはいった彼女は、自身の武器である蒼流旋そうりゅうせんを出現させ、受け止める。

「だ、誰よあなた・・・」

「・・・」

力で押し負けているミスティアスが苦しそうな表情のまま、尋ねる。しかし、突然現れた騎士は無言のままその手に持っている剣を押し付けている。

すると突然、ミスティアスがこちらにちらりと目配せしたのを見た飛鳥。式式が立ち上がり飛鳥の腕を掴み走り出す。飛鳥も慌てて引かれるがままに走り出す。

「な、いきなりどうしたんだよ」

「いいから離れて」

飛鳥が慌てて尋ねるが、式式はただそう答えるだけで走る。離れたところで突然大爆発が起きた。飛鳥はその手を振りほどき、ミスティアスがいた爆発地点に目を向ける。

爆発の余波で起きた煙と土が舞い上がり、そこで今どんな状態にあるのか、彼女は無事なのか、あの騎士は倒したのかと。飛鳥は次から次へと疑問を持った。

そして突然、煙を突き破って飛び出してきた人影があった。上空から降りてきて、片膝をつく状態で着地したのは、綺麗な白いワンピースがぼろぼろになり、その手には服装には似合わない物騒な槍を持つミスティアスであった。

「お、おい。大丈夫なのかよ」

「ちよーつと無茶しちゃったかな??」

飛鳥が慌てて心配そうに尋ねるのに対して、ちろつと舌を出してそう言うミステリアス。あれだけの爆発をしたのだ。流石の騎士も、大丈夫なはずはない。飛鳥は何度か楯無のISの試合を見たことがあったためにあの爆発が、ミステリアス・レイディのものであるのがすぐに分かった。

ぼろぼろのワンピースを押さえているのを見て、思わず顔が熱くなるのを感じた。女性であることをこれでもかと強調している胸が飛鳥の目に入ったためである。

そんな飛鳥を見て、にやりと小悪魔的な笑みを浮かべるミステリアス。そんな状況ではないにしろ、余裕を持っているのは流石であると、まるで楯無が隣にいるような感じであった。

ザツという草を踏む音と共にそこに現れたのは巨大な荷電粒子砲を構える式式の姿であった。そんなクールな表情をして物騒な巨大なランチャーを構える彼女を見て、飛鳥は唾然としている。

「来る」

「来るわね」

「まじかよ・・・」

そう口々に言うの徒同時に、持っていた剣を一閃・・・。蔓延していた土煙を薙ぎ払う騎士の姿が見えた。

「傷一つないって・・・。ちよつとショックね」

笑顔で言っているが、それは余裕そうなものではなかった。そこに現れた騎士の甲冑には傷一つ付いていなかったのだ。堂々と仁王立ちをして、こちらを見ていた。

素顔は見えないために分からないが、その胸に起伏がないことや、雰囲気からして女性ではなく男性だと思われる。背中にある大きな緋色の翼は羽ばたけないように鎖で封印されているような形であった。

「男・・・?? ならあれはISじゃない」

ISが女性にしか反応しないように、コアの人型としての姿も女性体なのである。しかし、飛鳥たちの目の前にいるのは男。つまり彼はISではない（・・・）。

「何なんだよあんたは！！いきなり攻撃してきて、何の理由があるんだよ」

「貴様がこの剣、『エクスカリバー』の真の主にふさわしいか見極めるために来た」

「な！？見極める・・・、だって」

飛鳥は立ち上がり、騎士と真正面に対面する。彼から放たれる威圧感に飛鳥の全身の毛が逆立つ。足が震えているのは飛鳥の勘違いではないだろう。ここまで恐怖するのは初めてであった。

「我と戦え、紅月飛鳥」

「何故俺の名前を!？」

すると突然飛鳥の頭上に太陽の光を反射して煌めく何かが映った。慌てて後ろに下がると飛鳥が先ほどまでいたところに二振りのナイ

フ・・・、フォールディングレイザー対装甲ナイフがあった。

「あ、危ない。いきなり何するんだよ」

「貴様にそれをくれてやる」

そう言っ自身は巨大な剣を構える。はっきり言っ、たった二振りのナイフでそれに対抗しようなどとは無謀にもほどがある。

「ちょっと待ちなさい。あなたにそれをする資格があるのかしら？」

「あるからこうして来ただけ。邪魔な貴様らに出る幕はない」

「人の世界に勝手に入っ来て、言うことはそれ？？」

ミステリアスと式式がそれぞれの得物を構える。しかし、顔色一つ変えずに騎士は言う。

せっかく二つのISの世界を繋げてやったものを・・・っと。

「!!」

「まさか・・・」

「あなたが??」

一層の警戒感が高まる。飛鳥もすばやく地面に突き刺さっていた二振りのナイフを手に取り、逆刃にして構える。それを見て満足そうに笑みを浮かべる騎士。軽々と剣を振り回し、それが空気を切り裂く。

「まさか、あんたが俺をここに連れてきたのか??」

「そうだ。まだお前には死んでもらいたくないからな」

「っ!!」

死という言葉が飛鳥の胸に突き刺さる。時間は経っていないとしても、彼女たちを傷つけてしまったのは変わらない。ナイフを握る力が強まる。

「何で俺に・・・、そこまで執着するんだよ」

「お前は俺で、俺はお前だからだ」

「はあ?？」

意味が分からなかった。しかし、威圧感と共に感じられるものは激しい悲しみと怒りであった。それはまるで、飛鳥自身が持っているものと酷似していた。

「想いがあるうと・・・」

剣が上段に構えられる。

「力があるうと・・・」

騎士甲冑の奥から赤く燃える瞳が見える。それはまるで怒りと憎悪の炎で燃えているようだった。

「運命に翻弄される!!」

一刀両断といわんばかりに振り下ろされた攻撃。それが衝撃波となって飛鳥に向かってきた。とっさに構えたナイフであるが、全く相手にされずに後方に吹き飛ばされる。

「がっ!!」

「アツくん!!」

「無謀よ!! こんな戦い認められない」

荷電粒子砲を放つ式式。それに対して左腕にあるシールドからなにやら光を出現させ、それを受け止める。全く効いていない事に、呆然とする。雰囲気が一瞬冷たいものになる。まずいと思ったミステリアスはとっさに式式を庇うようにして立ち上がった。

「!!」

金属音と共に、式式の前にいたミステリアスが軽々と吹き飛ばされる。力の差が歴然であった。敵は目の前にいる。啞然としていた表情からすぐに気を引き締め、ミサイルを出現させて、至近距離で全弾放つ。

全弾が着弾し、その余波で後方に飛ぶ式式。しかし、突然煙の仲から金属製の鞭がものすごい速さで出現し、彼女の足を絡めとり、激しい電流パルスが彼女を襲う。

「きゃあああ!!」

体に走る激しい痛みには悲鳴をあげてしまう。解かれた鞭は煙の仲へと戻っていき、攻撃を受けた式式は真逆さまに、上空から地上へと落ちていく。

「危ない!!」

飛鳥はナイフを放り捨て、慌てて落ちてくる式式の元へと走る。地面に叩きつけられる寸前で彼女のことをキャッチする。

「だ、大丈夫かよ」

「つつ・・・。只者じゃない」

「ああ」

「ちよつと、おねーさんを無視するってのは酷いな」

ボロボロになったワンピースをとどころ結んで補修をしているようだ。流石に痺れたと手を振って攻撃のすさまじさをアピールしている。

圧倒的な力と防御。更に多彩な武装と勝ち目がほとんど見えない。だが、彼を倒さない以上、あの剣を手にすることは敵わない。煙が晴れ、望んでいたダメージはなかった。

「これだけか??」

一対三でありながら全く引く様子のない騎士。飛鳥は投げ捨てていたナイフを再び構え、走り出す。

「お前を倒さないと・・・、それが手に入らないなら!!」

構えたナイフで切りかかる。甲冑は狙わない。爆発やミサイルを受けてなお健在であるその頑丈性は既に学習済みだ。

「そこ!!」

「甘い!!」

体格差を狙い、掻い潜って切りかかったが、剣ではなく腹に蹴りを入れられ、胃の中をシェイクされて吹き飛ばされる。地面に叩きつけられ、叩きつけられら時に打った箇所が痛む。

激しく咳き込むと、草に赤い液体も口から吐き出される。口の中

にも血生臭いにおいと共に、鉄の味が広がった。

「くっ……、体術かよ」

「IS戦で武器ばかりに頼った戦いをしているからだ。拳や蹴りだけでも十分にシールドエネルギーを削ることができる」

確かにと思いながらも立ち上がる飛鳥。その後ろにそれぞれの武器を構えている二人。

「くそ、このままじゃ……」

飛鳥が単体で突っ込んだところで潜り込む事ができても、体術でいなされる。先ほどのが単体でのチャンスだっただろう。しかし、それを失ってしまった今、もはや一人で突っ込むのは自殺行為であろう。

しかし、これは飛鳥に突きつけられたもの。彼女たちの助力を借りるのは……。

「一緒に戦おう、アツくん」

「二人じゃ危険。私たちがフォローする」

「二人とも……」

後ろから声がかかる。ミステリアスと式式が笑みを浮かべ、力を貸してやると言っていたのだ。心強いと飛鳥は嬉しかった。

来いと言わんばかりに剣を構える騎士。飛鳥とミステリアスが並走して突撃する。ミステリアスの槍にある四門の銃口から銃弾が放たれる。それが甲冑と地面に突き刺さり、煙を上げていく。

弾丸のごく飛び込んでいく飛鳥がナイフを構える。

「嘗めるな!!」

「そっちもね♪」

「!!」

飛鳥を再び蹴りつけようとした騎士が蹴ったのは、飛鳥の前に出現した水のヴェールであった。

「ちっ!!」

「くらえええ!!」

足を止められた騎士の下から現れた飛鳥がナイフで切りつける。慌てて体を捻って回避する。そのナイフが騎士甲冑にぶつかり弾かれる。想像以上の硬さに、衝突と共にあまりにも硬かったために痺れた手からナイフが落ちる。

一瞬の隙を突いて振り上げた剣を飛鳥に振り下ろそうとする。そこに次々と着弾するミサイル。正確な狙いで飛鳥とミステリアスを避けて騎士だけに命中させる式。その隙に二人は後退する。

「気をつけて!!」

「来た!!」

式式の声聞くのと同時に煙の中から飛び出してきた鉄の鞭。それに対して片手ナイフの鋭い一閃で切り裂く。切り飛ばされた部分が地面に落ちる。

煙の中から現れる騎士。小さく舌打ちをしていた。今度はこちらといわんばかりに剣を構えて切りかかってくる。それに対して、特

殊ナノマシンによって超高周波振動する水を螺旋状に纏った蒼流旋でミステリアスが受け止める。

罅迫り合いになり、お互いの得物がギリギリと鳴る。ここは持ち前の力で騎士がミステリアスを弾き飛ばす。そのまま上空に飛ぶのと同時に、ブラインドにして、式式が正面から荷電粒子砲を撃ち込んだ。

それに対して盾を翳す暇もなく真正面から受ける。その粒子砲が甲冑を撃ち砕いていく。所々に輝が入り、崩れ落ちている部分も見えた。緋色の翼を絡め取っていた鎖にも輝が入り、砕け散って草の上に零れ落ち、光となり、消えていく。

「今よ!!」

「行って!!」

二人の声に答えるようにして飛鳥が走る。二人が作ってくれたチャンス。これを逃すわけには行かない。

「うおおお!!」

「この!!」

珍しく騎士が吐き捨てるような言葉を言う。ナイフを順手に持ち、壊れた騎士甲冑に対して切っ先を向けている。

対する騎士はその緋翼を大きく広げ、正面に剣を構え、突撃する。その瞬間、大きく広げられた翼を更に巨大に見せるような光の翼が現れる。

「は、早い。でも!!」

初速からの加速が瞬時加速並みであったのことに對して一瞬驚きを隠せなかった飛鳥であるが、すぐさまナイフを構えなおし、狙いを定める。

「これで!!」

「甘い!!」

「!!」

スピード勝負で何枚も上であつた騎士が既に目の前に剣を構えていた。はつとして気づいたときには既にその剣が振り下ろされていた。

「やらせない!!」

瞬時的にミステリアスの水のヴェールが飛鳥の前に展開される。それに向かつて剣が振り下ろされる。その剣は光に包まれ、その光が螺旋状に渦巻いていた。

振り下ろされた剣がそれに阻まれると思われていた。しかし、その剣は止まることなく、水のヴェールごと飛鳥のことを真つ二つにしたのだ。啞然とした表情の飛鳥。ゆっくりと水のヴェールと共に姿を消した(・・・・)。

「これは!!」

「引っかったね♪」

悪戯っぽく笑みを浮かべているミステリアス。自身の水を操る力を利用し、飛鳥の幻影を作り出していたのだ。そして、その飛鳥はというと、呆氣にとられている騎士の後ろから現れる。

「これで、終わりだああ!!」

飛鳥がナイフを突き立てる。しかし、付きたてた騎士に全く感触がなかったのだ。

馬鹿なと思ったその瞬間、ゆっくりとナイフを突き立てていた騎士の姿がまるで霞のように消えたのだ。

「まさか、これも幻影!!」

「アツくん!!」

「危ない!!」

「!!」

ハッとして気づいたときにはすでに遅かった。螺旋状に輝く光を纏った両刃剣が飛鳥の体を貫いていたのだ(・・・・・・・・)。

「残念だったな」

「そ、そんな・・・」

腕から力が抜けナイフが草の上に落ちる。引き抜かれた剣の銀色の刀身が赤々と血で染まっている。抜き取られると同時に、血が噴出す。白い制服の上着の胸の辺りから徐々に血が染み渡っていく。まるで赤と白のツートンカラー・・・。

ガクリと膝から崩れ落ちる。霞む目で肩越しから騎士の事を見ている。見下す形で赤い瞳が飛鳥の事を見ている。その目にあるのは悲しみ、怒り、憎悪、・・・そして、失望だろうか。

くるりと身を翻す騎士が立ち去ろうとしている。飛鳥は腹から込

み上げてくる血を吐き出しながら、掠れた声で言う。

「ま、待て・・・」

手を伸ばそうにも力が入らない。ゆっくりと閉じられていく瞳に映るは、堂々とその場に立つ緋翼を持つ騎士の背中だった・・・。

PHASE 16 力求めるもの（後書き）

ED2↓REASON>玉置成実<

次回予告

敗北

再び運命は少年に対して残酷な現実を突きつける

自らの無力さを再び突きつけられた少年が手を伸ばす先にあるは
振りの剣

剣が求めるは運命に屈しない、不屈の心

少年が求めるは運命を覆すだけの力

二つの想いが重なった時、その力は衝撃となって戦士は立ち上がる

騎士の前に現れるは、勝利を齎さん剣を持ちし衝撃という名の戦士

今度こそ大切なものを二度と失わないために戦うと誓った飛鳥は騎
士へと戦いを挑む

次回 インフィニット・ストラトス〜怒れる瞳〜

PHASE 17 インパルス 衝撃

エクスカリバー
聖剣と共に、運命を変える衝撃となれ・・・、インパルス！！

PHASE 17 衝撃（インパルス）（前書き）

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

たくさんのご感想と閲覧ありがとうございます。

少々第二章の話数が多くなりますが、お付き合い願えれば嬉しいです。

それでは本編始まります。

PHASE 17 衝撃（インパルス）

どうして・・・。

飛鳥は自らの無力さをまた痛みと眠気と共に感じていた。ゆつくりと立ち去っていく緋翼の騎士が見える。

——ち、ちくしょう・・・。

剣の突き刺さった岩に顔を打ち付け、倒れる。しかし、その痛み以上に、自らの無力さのほうが強かった。

向こうのほうで今もまだ戦闘が続けられている。しかし、力を手にできるかどうかは、飛鳥が騎士を倒さなければ意味がなかった。

そのために、もはやそれが叶わないと見ている騎士は二人のことを鬱陶しそうにあらっている。

彼女たちが闘う理由が飛鳥には分からない。しかし、彼になくとも二人にはあった。マイスターの想いと共に、自らにも芽生えている想いに忠実に動いていた。

「よくも!!」

「許さない!!」

——やめろ、あんたたちが戦う必要なんて・・・。

ないと言いたいにもかかわらず、飛鳥の口から出てくるのは吐き出される血と弱々しい呼吸音だけ。体が鉛のようになったのではな

いかと思うくらい重く感じられた。

騎士に対する攻撃は全く通用しておらず、どこからそんな力が出てくるのかとISとMSの違いはほとんどないにもかかわらず、圧倒的な強さで二人をあしらっている。

着ていた服がぼろぼろとなっている。あちこちから傷が見え、赤い血が見える。ISとはいえこの世界では人間と同じである。傷を負えばもちろん血も出るだろう。この世界の住人であり主である二人であれば、それを干渉で直すこともできるはずだった。

しかし、それができない。まるで何かが邪魔をしているように、異分子が入り込み、機能が麻痺してしまっているように。

「いきなり現れて、彼を傷つけて!!」

「あなたは一体何がしたいの!？」

「力無き者に・・・、あれは不要!!」

握られた大剣・・・、『カラドボルグ』が蒼流旋を弾き飛ばし、向かってくる荷電粒子砲を消し飛ばす。

軽々と片手で振り回す騎士の力に、二人は力で勝てずに吹き飛ばされる。それでも何度も立ち上がっている。

それなのに自分はどうか。こうして岩に突っ伏しているだけで、ただ見ているしかできない。

———また守られるだけなのか・・・。

ふざけるな。そう思った。何のために強くなりたいと思ったのか。

何のために守りたい、守ってみせるという想いを胸にもったのか。

こうしてずっと突っ伏し、彼女たちの傷ついていく様子を、ただ傍観しているためではない。守る・・・、そのために新たな、まだ見ぬ力を求めて、ここに来たのだ。

——あいつに、こんな・・・、こんなところで！！

齒を食いしぼり、剣の柄に手をかけて、無理やりに鉛のように重くなった体を起こす。しかし、いくら心で強く思っても、足が動いてくれない。まるで、もはや足だけが死んでしまっているかのようなものだ。

——動け、動けってんだよ！！

飛鳥は心で軟弱な自分の足に毒づく。先ほどもではまるで綿毛のようにどこまでも飛んでいけそうだと思えるくらい、軽いものであったものが、一転して重い鉛のようなものになっていたのでから。

向こうから彼女たちの悲鳴が聞こえる。その度にハッとして、その方向に顔を向ける。傷ついていながら、只騎士に向かって得物を向けている。

肩で大きく息をしているも、今だその瞳は死んでいない。騎士も一気に終わらせんとして突撃する。ミサイルが着弾するも、装甲には傷はなく、式式の反応が遅れたことを察知して大剣を振り下ろす。それに割り込む形で蒼流旋でミステリアスが受け止める。

剣に弾かれるも、にやりという意味ありげな笑みを浮かべる。式式と共に下がると同時に、騎士の周りに展開されていた水蒸気が一

気に膨張する。清き熱情が起こる・・・、と思ったその瞬間、騎士はその大剣カラドボルグを回転させ、そこから発せられている熱量によって水蒸気を吹き飛ばす。

清き熱情を防がれるとは思っていなかったために啞然としてその光景を見ているミステリアス。しかし、まだその騎士を倒す術がないわけではなかった。まだ彼女には武器が残っているからだ。

式式に目配せして、頷き返してきたのを見て、再び走り出す。蒼流旋を構える。騎士も叩き切らんと翼を広げ、光の翼を展開して幻影を作り出し、飛び込んでくる。

次々と放たれるミサイルが幻影と潰していく。しかし、高速で移動する騎士には追尾付きのミサイルすら着弾させるのが難しく、急旋回されて無常にも地面をえぐるだけに終わる。しかし、ミステリアスにとって、どれが本物なのか分かれれば、後はそれに突撃するだけであった。

——これで決める!!

ミステリアスが構える特殊ナノマシンによって超高周波振動する水を螺旋状に纏った蒼流旋・・・、『ミストルテインの槍』が騎士に向かって突き立てられようとしていた。

回避も防御の体勢も取らない騎士を見て、二人は勝ちを意識した。だが、次の瞬間目を見開かざるを得ない光景を見せ付けられる。

———そ、そんな!?

金属音がぶつかり合う音が響く・・・。蒼流旋とカラドボルグが

それぞれが反する回転をもった切っ先同士でぶつかり合っていたのだ。彼女にとっては必殺の武器であるミストルテインの槍と互角の威力を見せている。

更に受け止めるというのは至難の業である。回転数、威力など、あらゆる条件を同じにしなければ不可能である。騎士は徹底的に二人を潰すつもりで来ていたのだ。見逃してやる、邪魔をするなど言っていたことを無視したためのことだった。

徐々に、徐々に威力と回転が上がり、ミステリアスの持つ蒼流旋に食い込んでいく。切っ先から柄まで輝が入ったそれが粉々に鳴って砕け散った。それを唾然とした様子で見ていたミステリアスの腹に蹴りが入れられ、後ろに立っていた式式と共に吹き飛ばされた。

「がっ!!」

「つう・・・」

地面に叩きつけられ、空から蒼流旋の砕け散った破片が降りそそぐ。ボロボロになった服が白から土と血で赤黒く染まっていた。

「この世界も終わりだ」

「そ、そんなこと・・・」

させて堪るか・・・しかし、彼女の手には既に武器はなく。世界の以上で再び出現させることも叶わない。式式の攻撃も全て無効化され、もはやこちらに勝機がほとんど残っていなかった。

勝手に自分たちの世界を二つあったものから一つにつなぎ合わせ、更に異分子であろう、その主なき剣を突き立てた。まるでそれが、ミステリアス・レイディと打鉄式式の世界を繋ぎ止めている釘とで

も言うかのように・・・。

「奴には無理だった。世界は終わる。ただ支配される、偽りの神の元にある世界が始まる」

「何を、言っているのよ・・・」

「運命は・・・」

覆らないのか・・・。赤い瞳、そこから流れる涙が地面に雫となつて落ちる。それが何を悲しんでいるものなのか。二人には分からない。

再びカラドボルグに光り輝く螺旋状のエネルギーが刀身に纏われる。それはまるでISという単一能力。ワンオフ・アベリティー

「捻じれ狂う刃よ・・・、一瞬の雷の軌跡となりて射抜け。雷神のライジング・カラドボルグ槍」

二人に迫り来る捻じれる大剣はゆっくりと感じられた。やられるという諦めと共に、きつと来てくれるという淡い期待が入り混じった想いが彼女たちにはあった。

半分まで迫ったところに突然遠くから飛来するものがあった。それと共に、彼女たちが信じていた者の叫ぶ声が聞こえてくる。

「やめろおおお!!」

飛来してきたのは桜色のビーム刃を展開されたフラッシュエッジ・ビームブーメランと名づけられたもの。

ものすごい速さで飛来したそれが、二人に突き立てられようとし

ていたカラドボルグにぶつかり、激しくスパークする。

すぐにビーム刃が消滅したが、衝突で標準がそれたカラドボルグは二人の傍の地面に突き刺さり、そこに巨大なクレーターを作り出すような爆発を起こす。

その爆発の余波に吹き飛ばされるのを利用して、二人はその場を離脱する。鉄の鞭は既に使用できない。そのためにそれを気にする必要はなかった。そして、二人と騎士の間に突如として空から飛来するもの。

それは二本の対艦刀を握り締めた戦士。以前のような不気味なダークグレーではなく、まるで迷いなどを全て取り払ったかのような、まっさらな白。彼女たちの着ているワンピースと同じまっさらな白と変わっていた。

胸部が赤く染まり。先ほどの制服がそのままMSに反映されたかのような姿であった。双眼に光が灯る。

「まさか、剣自身が選んだというのか!？」

騎士は戸惑いを見せながらも、カラドボルグ大剣を握り締める。青々と美しく広がっていた草原は焦土と化していた。そんな大地に立つ戦士の姿は燃えるような赤と純白に輝く。

突然現れたその存在は3人に対して大きな衝撃を与えた。その戦士は傷だらけの戦士が絶望を与え続ける運命に対して衝撃を与えるために立ち上がった存在。その存在の名は……。

インパルス
“ 衝撃 ”

飛鳥は一振りの刃渡りが、機体と同じくらいの大きさであるレーザー対艦刀『エクスカリバー』を柄の部分で結合させ（アンビデクストラス・フォーム）、頭上で大きく振りかぶる。

「もうこれ以上・・・」

飛鳥は目の前にいる騎士から自分と同じ感じを感ぜながらも、ハイパーセンサーで見える後ろの傷ついた二人を見てカッと怒りを感じながら叫ぶ。

「誰も傷つけさせはしない！！」

レーザーが対艦刀の切っ先まで走る。その切っ先を騎士に向け、そう叫ぶのだった。

少し前の話だ。

霞みゆく紅玉のような瞳で、飛鳥は二人に止めを刺そうとしている騎士の姿を見ていた。動け動けと体に鞭打つが、全く動く気配はない。

———こんなところで・・・。

やられてたまるか。そう思った飛鳥。その瞬間に左手に何か重量感のあるものを感じたのだ。なんだろうかと見たそこには、たった一つだけ、飛鳥の元に残された、剣があった。

“ヴェステイージ”

ボロボロであるそれからは起動させよう意識を強めても、反応はなかった……。

——こんな時に……。

とは思えども、あれだけの攻撃を受け、無事であるはずはないのだ。傷ついたヴェステイージは、自身を捨てても、マイスターである飛鳥の命を繋ぎ止めようと、自らを捧げたのだ。

たった一度だけの単一能力^{キセキ}。

飛鳥がかろうじて命がつなぎとめられたのは、その一度だけの単一能力^{キセキ}が発動したからであり、普通であればシールドバリアーすら撃ち抜くビームを受けたなら、機体ごと蒸発していただろう。

『力を望むか……』

不意に聞こえて来た声。飛鳥とその一点を中心にして、時が止まったかのようだった。風の音、騎士が草を踏む音……。さまざまな音や色彩が世界から失われていたのだ。ただ失われていないのは飛鳥と、その手にある傷ついたヴェステイージの待機状態であるブレスレット。そして、岩に突き刺さり、飛鳥が手を添えている一振りの剣だけだ。

『力を望むか……。傷つきし戦士よ』

——誰だ！？

直接頭に入ってくるような声。既に体を動かすこともままならない飛鳥。その声の主がどこにいるのか分からなかった。気配もない。

人の気配は……。

異様は雰囲気をかもし出している一振りの剣。その声を発しているのは手を添えているその剣であった。

——あんたが……??

剣に対してあんたというのはどうかと思うが、それはただの武器（剣）には思えなかった。意志を持つ……、まるでISのようなもの。

『答えよ、傷つきし戦士。運命に屈するか、それとも運命に抗うか』
「そんなこと……」

言われずとも決まっている。飛鳥は立ち上がる。不思議と鉛のように重かった足が自然と動いたのだ。それよりも飛鳥はその剣からの問いに答える。その答えを示すように、飛鳥はその剣の柄を両手で握り締める。

「最初から決まっている!!」

そう叫びながら剣を岩から抜き取らんとして上へと持ち上げる。これで抜けなかったら世の笑いものである。しかし、その剣は飛鳥の答えを受け入れるというかのように軽々と抜けたのだ。

「抗って見せるさ!! どんなことがあっても、どんな敵と戦うことになっても!!」

そう言う飛鳥の思いがまるで乗りうつったかのように、その剣が黄金に光りだす。まるで幻想的な世界にせんとばかりに、時が止ま

っている世界に黄金の色をぬっていく。それに負けんと、傷ついた
紅いブレスレットもまた光り輝く。

イメージする。自身が望みし力の形を。この二つの力が合わさり、
想いを形にする。

剣・・・。

最初に思いついたのは、対抗戦で戦った二組の中国の代表候補生
である鳳鈴音の甲龍の近接用武器青竜刀・・・、『双天牙月』であ
った。

———それだけじゃ駄目だ・・・。

ただの実体剣では駄目だと思った。それでは結局はISと同じで
あり、白騎士に対抗できない。ISに互角ではなく、それをも上回
る力が欲しい……。だからこそ、イメージした武器・・・、エク
スカリバーレーザ―対艦刀。ISの装甲を対艦刀というだけに、叩
き切る武器。

“傷つきし戦士、勝利を齎さん剣を持ちて、世界に衝撃を与えん”
ヴェステイージ エクスカリバー インパルス

時が再び動き出す。飛鳥は念じる。もう二度と失いたくない大切
な存在。今度こそ失いたくないから。

“General Unilateral Neuro-Link
Dispersive Autonomic Maneuver
———Synthesis System”

その文字が浮かび上がり、飛鳥の体を次々と鉄色の装甲が覆って

いく。そして、シルエットとして背中に装備されたのは、二本のエクスカリバーレーザー対艦刀とフラッシュエッジ・ビームブーメランを積んだソードシルエットだった。

“ソード Sword・インパルス Impulse・ガンダム Gundam”

その瞬間鉄色から燃えるような赤と純白のツートンカラーへと変わる。その瞬間時間が動き出す。慌てて二人の方へと視線を向けると、カラドボルグを二人に対して突き立てようとしている騎士の姿があった。

——まずい！！

飛鳥は慌ててソードシルエットの装備されているフラッシュエッジ・ビームブーメランを掴み取りビーム刃を展開させ、騎士の持つ大剣目掛けて投擲する。

「やめろおおお！！」

ものすごい速さで向かったそれが、二人に突き立てられようとしていたカラドボルグにぶつかり、激しくスパークする。

すぐにビーム刃が消滅したが、衝突で標準がそれたカラドボルグは二人の傍の地面に突き刺さり、そこに巨大なクレーターを作り出すような爆発を起こす。

その爆発の余波に吹き飛ばされるのを利用して二人はその場を離脱する。鉄の鞭は既使用できない。そのためにそれを気にする必要はなかった。飛鳥はスラスターを噴かして上空へと飛び、そのままエクスカリバー対艦刀を両手に構え、騎士に対して叩きつける形

で飛来する。

以前のような不気味なダークグレーではなくまるで迷いなどを全て取り払ったかのような、まっさらな白。胸部が赤く染まり。先ほどの制服がそのままMSに反映されたかのような姿であった。双眼に光が灯る。

「まさか、剣自身が選んだというのか!？」

飛鳥を睨みつけながら、騎士は若干の戸惑いを見せつつ、カラドボルグ大剣を握り締めて、こちらに切っ先を向いている。飛鳥がインパルス（新しい剣）と共に立つそこは、青々と美しく広がっていた草原であった数分前とは打って変わって、焦土と化していた。そんな大地に立つ戦士（飛鳥とインパルス）の姿は燃えるような赤と純白に輝く。

突然現れたその存在は3人に対して大きな衝撃を与えた。その戦士は傷だらけの戦士が絶望を与え続ける運命に対して衝撃を与えるために立ち上がった存在。その存在の名は……。

インパルス
“衝撃”

飛鳥は一振りの刃渡りが、機体と同じくらいの大きさであるレーザー対艦刀『エクスカリバー』を柄の部分で結合させ（アンビデクストラス・フォーム）、頭上で大きく振りかぶる。

「もうこれ以上……」

飛鳥は目の前にいる騎士から自分と同じ想いを感じながらも、ハイパーセンサーで見える後ろの傷ついた二人を見てカッと怒りを感じながら叫ぶ。

「誰も傷つけさせはしない!!」

レーザーが対艦刀の切っ先まで走る。その切っ先を騎士に向け、
そう叫ぶのだった。

PHASE 17 衝撃（インパルス）（後書き）

ED2↓REASON＞玉置成実＜

いよいよ騎士との戦いも終わりに近づいてきました。

ご感想や誤字脱字の報告がありましたら、お待ちしております。

次回予告

手にした力

それは二度とあの時の思いをしまいと思ったから

それは二度と大切な存在を失いたくないから

そんな剣と戦士（飛鳥^{インパルス}）が騎士の前に立つ

鍵と鍵穴のある扉は揃った

今再び戦士は現実へと帰還する

次回^{ゲンジツ}インフィニット・ストラトスへ怒れる瞳へ PHASE 18
居場所への帰還

力と想いをその手に、舞い戻れ・・・、インパルス！！

PHASE 18 居場所（ゲンジツ）への帰還（前書き）

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

第二章も長くなりました・・・。

ワードで書いてますけど、既に200ページを超えてしまってます・・・。

もう少し掛かりますが、第二章『怒れる剣』にお付き合いください。

いつも、たくさんのご感想と閲覧。ありがとうございます。

PHASE 18 居場所（ゲンジツ）への帰還

柄の部分で連結した（アンビデクストラス・フォーム）にしたエクスカリバー・レーザー対艦刀を構え、飛鳥は騎士に向かって走り出す。

これで戦える。そう思い、振り上げられた剣を下ろす。騎士は振り下ろされたそれに対して、膝を折ってカラドボルグで受け止める。その時の衝撃で少し表情が曇ったのが見えた。そのまま反対側の刃にて、切り上げるようにして攻撃する。

それを左腕のシールドで受け止める騎士。その攻撃を受け止めつつ、後方へと飛ぶ。

「逃がすかよ!!」

飛鳥はすかさず腰にマウントされているビームライフルを掴むと連射する。それに対して再びシールドを翳してそこからビームシールドを展開。その攻撃を無効化していく。

「甘い!!」

「ビームシールド!？」

小さく舌打ちをして、すぐにライフルをマウントし、連結していた柄を解除、二刀流にして、走る。

「こんのおお!!」

「はあああああ!!」

エクスカリバーとカラドボルグがぶつかり合う。互いのレーザーとビーム刃がぶつかり合い、激しいスパークが走る。

お互いに押し合うがまるでびくともしない。力では圧倒的に騎士のほうが勝っている。だが、ここで飛鳥が力負けしていないのは見えない力の存在だった。それは飛鳥の想いであり、後ろで見守っているミステリアスと式式、現実世界で飛鳥の生を信じているものたちの想いであった。

「俺は、負けられないんだ!!」

「ぬぁ!!」

もう片方の対艦刀を振り上げる。ビームシールドを展開するも、重い一撃を受けた防御が破られる。ゾクリと騎士の背中につめたいものが走る。飛鳥はそのまま思いつき蹴りをボロボロになっている騎士甲冑へと打ち込んだ。

「ぐはぁ!!」

砕け散った騎士甲冑を散らばせながら、後方に飛ばされ地面に叩きつけられる。騎士が膝をついたのはこれで初めてではないだろうか。

——行ける!!

飛鳥は対艦刀を構え、倒れている騎士に向かって走り出す。騎士も緋翼の翼から光を放ち、先ほどとは段違いにすばやい動きで一気に接近してきた。

——掌を翳している??

左手を開いてこちらに向けているのが見えた。そして、甲龍と同じように、何かきらりと光るものを見た。ゾクリとした寒気を感じ、慌ててスラスターを噴かせて上空へと離脱する。その瞬間、飛鳥のいたところを一寸の光の軌跡が通過した。

「な、何だよあれ・・・」

飛鳥はそれを上空から見て咄然としてみていた。着弾した箇所が大きく抉られていたのだ。確かにあれはビーム砲であるのは見て分かったが、あそこまで威力のあるものだとは思わなかった。

——あんなものを喰らったら・・・。

飛鳥は自分の負ける予感をしてしまい、すぐさま頭を振って打ち消す。

——どんな敵とだって戦うって決めたんだ。今更臆することができるか!!

飛鳥は自らを鼓舞し、騎士へと向かっていく。

それを見ているミステリアスと式式の二人は、そんな二人の戦いをただ見ているしかできなかったのだ。

二人が共に飛鳥の援護に出ないということをお口にしていたわけではない。飛鳥と騎士の想いと想いがぶつかる戦いに呼吸を忘れてしまうくらい、見入ってしまったのだ。

二人にはただ祈るしかできない。飛鳥が勝つことを、ただただ祈

るだけなのだ。

交錯する度に、対艦刀同士がぶつかり合い、閃光が迸る。実力が互角なのは、性能差で負けていても、想いがそれを埋めていたのだ。

「嘗めるな・・・」

騎士が腰だめから巨大なランチャーを構えた。そこから赤いビーム砲が飛鳥に向かって放たれる。

「こんのおおお!!」

左腕のシールドを翳し、受け止めるのではなく、斜めにして弾きながらもシールドを投げ捨てる。

高速で接近してくる飛鳥から、先ほどとは打って変わって、気迫が騎士の体を襲う。だからといって、彼がそう簡単に負けるわけには行かない。飛鳥がここから現実世界に戻ったならば、再び運命が彼を潰しにかかるだろう。

本当であれば楽にしてやればいい。だが、それも彼にとっては我慢ならないことであった。現実世界に待っている彼女たちを悲しませることを、彼はできなかった。

そして、何より彼は飛鳥自身であった。飛鳥の思っていることが流れ込んでくる。悲しみ、怒り、憎悪、喜び……。さまざまな感情が騎士の胸に入り込み、それを認めつつも、負けないという思いで剣を振るう。

「はあああああ!!」

「でやあああああ!!」

剣と剣がぶつかり合う。突然飛鳥にインパルスからのアラートが鳴る。ハツとして見ると、全力で戦っていたために全くエネルギーのことを考えていなかったのだ。そのために、既に残っているエネルギーが少なかった。

——このままじゃ・・・。

表情を歪める飛鳥。しかし、すぐに何かを思いついたように、腰にマウントしていたビームライフルを騎士に向かって投擲する。騎士はそれに対して避けることもなく、鬱陶しいハエを追い払うかのようにして剣を振るおうとする。

「今だ!!」

「!？」

頭部のCIWSをそのライフルに向かって打ち込み、剣が届く前にライフルが爆発する。その煙がブラインドになり、すばやく対艦刀をシルエットに戻すと、ソードシルエットを自動飛行モードにして、更にフォースシルエットを出現させ、換装する。

更に失っていたシールドとライフルもまた再び出現させ手に取る。

シールドが上下に展開され、赤と白のツートンカラーが青、赤、白というトリコロールカラーへと変わる。

煙をカラドボルグで切り裂いた騎士が現れる。先ほどの爆発は小規模であったために傷はないが、目晦ましにはなっていた。

「これでえええ!!」

「ちい!!」

飛鳥と共にソードシルエットが並走して、後退行動をとる騎士を追いかける。その間にもこの世界に異変が現れ始め、剣を抜き取ったため、無理やりに二つの世界を繋げていた代償が現れ始めたのだ。地面は割れ、空は真っ赤に染まる。

「逃がすかよ!! 二人を・・・、二人を傷つけたあんたを倒す!!」
「!!」

騎士は感じ取っていた。飛鳥から、まるで無数の触手のようにして絡み付いてくる怒りを。どこまでも追いかけてくる、まさに常人にとっては恐怖以外の何物でもない。

敵であれば決して容赦はしない。どんなものであっても、傷つけるものは倒す。そんな気迫をもって欲しかった。それが感じられる以上、この体にその刃を突き立てさせればいい。

現実世界へ戻る鍵はそれであり、扉は騎士であった。

——鍵は手に入れた。

「さあ、扉を開け!!」

飛鳥にはその言葉は聞こえていない。並走するソードシルエットからフラッシュエッジ・ビームブーメランを手にすると、振りかぶり、投擲する。

高速回転するそれが向かってくる。逃げてもまるで付いてくるような感じがした。それに対してシールドを翳し、受け止めようとす

る。しかし、そのブーメランはまるでシールドをかわすかのような軌道を描いて騎士の腕ごとシールドを吹き飛ばした。

「ぐっ!!」

切り裂かれた先から鮮血が飛ぶ。痛みに騎士は表情を歪める。カラドボルグを構えようとした瞬間。右手のビームライフルが右手を貫き、それすらも吹き飛ばされる。

完全に敗走状態の騎士。それでも既に受け入れる準備はできていた。飛鳥はソードシルエットからエクスカリバーを一振り握り締める。握られていたライフルを捨て去り。両手に構える。

「うあああああ!!」

怒り、勝利への渴望、守りたいという想いを乗せ、スラストーが噴く。そのときフォースインパルスと飛鳥は一閃の光となった。そして、次の瞬間。エクスカリバーが騎士の体を貫いていた。

それを見ていたミステリアスと式式も思わずガッツポーズをしていた。確実にやったとその手で感触を感じていた飛鳥は、勝利と新たな力をその手に感じつつ、何かの命を奪ったような、そう言う感覚も同時に感じ取っていた。

そして、次の瞬間。顔部を覆っていた騎士甲冑が吹き飛んだ。そこに現れた騎士の素顔。それを見て、飛鳥はおろか、ミステリアスと式式も啞然とした表情を隠しきれなかった。

「お、俺・・・」

飛鳥が少し年をとったような、精悍な顔付きの男性がそこにいた。その顔には悔しさというよりも、見事に試練を乗り越えてくれたという、喜びのようなものが見えた。

頭が混乱して、飛鳥はその手から対艦刀を手放す。両腕を失っている騎士はゆっくりと足を地に着け、後退する。その瞬間、後ろの地面が陥没し、世界の崩壊が完全に始まる。

騎士は笑みを浮かべたまま、ゆっくりと世界と共に、その下へと落ちていった……。

「ほ、崩壊している!!」

これはまずいのではと思う飛鳥。慌てて二人の元へと戻る。

「一体どうしたんだよ!!」

飛鳥は慌てた様子で二人に尋ねる。二人はこれがどうして起きたのかというのを理解していた。そんな顔を飛鳥に向けていたのだ。

どうして、そんなにも落ち着いていられるんだと飛鳥は不思議に思った。

「もともと彼が、私と式式の世界をその剣で繋ぎ止めていたのよ」「その剣が抜き取られ、飛鳥の手に渡ったということは、当然繋ぎ止めていたものがなくなったということ」

だから、この現象が起きるのは必然的であったということだ。だが、そうなれば彼女たちの世界はどうなるのだと、飛鳥は尋ねる。

そんな飛鳥を見つめる二人の表情には不安というものはなかった。

良く見ると彼女たちの足元には光の円があった。ちょうど彼女たちを体を包み込めるくらいの大きさのものである。

「アツくんは気にしなくてもいいんだよ」

「私たちのことは大丈夫。こうなった後のことも、ちゃんと考えてくれていたらしいから」

少々荒療治のようであけど・・・と式が呟く。するとミステリアスが指を指す。その方向の先にはゆっくりと開かれていく扉があった。向こうには光が満ち溢れ、先は見えないが、おそらく飛鳥が戻るためのものなのだろう。鍵が手にした剣であれば、鍵穴と扉の役割を担っていたのはあの騎士だったのだろう。

「せっかく会えたけど。これが最初で最後だね」

「寂しいけど。仕方ない」

その言葉に振り返る。二人と会うのは確かに最後になるだろう。飛鳥はISを使うことができない。この出会い（キセキ）だって、本当はありえないことなのだから。

あの騎士と今この手にある剣が起こしてくれた、ただ一度の出会い（キセキ）・・・。欲張りとは言えない。でも・・・。

——もう少し、一緒にいたかったな。

——いろんな話を、したかったな。

二人の胸には、寂しさがあった・・・。

「二人には、本当に感謝してる・・・」

この世界に突然来てしまった自分を、怪我の手当てから、食事の世話までしてくれた。拒むことなく、受け入れてくれた。それだけではない、新たな力を手に入れるまで、導いてくれて、傷だらけになりながらも、一緒に戦ってくれた。

「本当だよ。感謝しても・・・、しきれない」

MS『インパルス』を解除しているために、今は真っ赤に染まりきったIS学園の制服を着ている。まるでISの防護スーツを着ているようなものである。

飛鳥は小さく笑みを浮かべ、二人に対して、感謝の言葉を言う。

「ありがとう。俺、今度こそ・・・、守ってみせる」

「その意気だよ」

「これしか言えないけど・・・、頑張ってる」

それだけで十分だと飛鳥は思った。十分なくらい支えてもらっている。なら自分がしなければいけないこと・・・、それはもう十分に理解しているつもりだ。

そして、不意に二人が近づいたと思ったら、左右それぞれに口付けを貰っていた。ミステリアスは小悪魔的に笑みを浮かべ、式式は逆に恥ずかしそうに頬を赤く染めていた。

「な、な、な／＼／」

飛鳥は顔を真っ赤にしてたじろぐ。後ろを良く見ていなかったた

めに、すぐ後ろに戻るために扉があったことに気づいていなかった。足元の石に躓き、ゆっくりと光に包まれていく。

「おわあ!!」

飛鳥は突然のことに驚きを隠せない。遠のいていく彼女たちに向かって手を伸ばす。しかし、何も触れることもできず、飛鳥の視界は光に包まれていくのだった。

「行っちゃったわね」

「うん」

残されていた二人はゆっくりと扉が閉まっていき、粒子となって消えていくのをずっと見ていた。足元から自分たちも、もといた世界へと戻るために、光の粒子となっているのにも気づいていた。

「いきなり現れた騎士には驚いたわ」

「最初は何をしたいのか、分からなかったから」

最初は自分たちの行動を邪魔しに來ただけなのかと思っていた。しかし、彼自身が飛鳥に新しい力を与えるために行動していたのだと知って、最初から行ってくれればと思う自分もいることを感じていた。

「でも、感謝しなきゃ・・・」

「え?」

もう顔ほどしか残っていない状態でミステリアスがこちらを向いて言う。何をだと、式式は表情でそう語っている。

「あなたに会えた」

そう言うミステリアスに対して、式式はどういうことかと最初は分からなかった。しかし、マイスターである簪のことを考えると、自分とミステリアスがこうして仲良くしていられるというのは、現実のマイスターたちのことを考えると不思議なことなのである。

だからこそ、式式も言うのだ。

「私も、感謝しなきゃ」

そう言って笑顔になる。いつからだろう。あの姉妹にあのよう
に壁ができてしまったのは……。姉は楯無という偽りの仮面を被る
ことになり、その天才としての才能を遺憾なく発揮する。それを誰
よりも近くで見ていた簪は自分を彼女と比べていた……。いつも。

そのとき感じていた羨望がいつしか嫉妬へ、そして、姉妹であり
ながら壁を作るコンプレックスへと変わってしまった。

姉妹ではないが、マイスターがそれぞれ姉であり、妹である。二
人は思う……。この世界で自分たちが、普通に接することができ
たように、現実世界でも、姉妹の仲が修復され、今度こそ笑顔にな
れればと……。

だからこそ、こういう機会をくれた彼に感謝するのだ……。

「「ありがとう、デステイニー運命」」

そうして二人のIS（女性）はそれぞれの世界へと戻っていくの

だ
っ
た
・
・
・
。

PHASE 18 居場所（ゲンジツ）への帰還（後書き）

ED2↓REASON＞玉置成実＜

ご感想お待ちしております。

次回予告

自らの罪に絶望するもの

それが引き起こしたものはあまりに大きすぎた

彼女たちに迫る危機

その危機を前に現れるは新しい力を得し者（飛鳥とインパルス）

かの者を呼ぶ者とそれに答える者

光り輝く剣が全てを浄化する

次回 インフィニット・ストラトス〜怒れる瞳〜 PHASE 19
約束

その胸に誓いし約束を果たすため、その剣の輝きを今……、インパルス……！！

PHASE 19 約束（前書き）

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

いつもたくさんのご感想と閲覧ありがとうございます。いよいよ第二章も終わりに近づいてきました。最後までお付き合いいただければ幸いです。

話しは飛んで、第三章のタイトルが決まりましたので発表します。

『インフィニット・ストラトス〜怒れる瞳〜 第三章 惑える二人』
です。

OP&EDも決定しつつあります。三章の内容はタイトルを見れば想像できるかもしれません。

基本原作重視ですが、オリジナルを組み込んでいきたいと思っています。あくまでもこの作品の主人公はオリ主の紅月飛鳥ですから。

それでは本編スタートです。

追記 今回より投稿時間を深夜に変更します。

PHASE 19 約束

どうしてこうなってしまったのだ……。篠ノ之箒はただ茫然として、アリーナを荒らしている未確認機を見つめて、そう思っていた。

四機はそれぞれビーム砲を放ち、突入した教師陣たちを牽制している。誰もが教師陣が突入すれば、何とかなると思っていた。しかし、数人がそれぞれ打鉄、ラファールを起動させ、未確認機を破壊せんとしているが、それをあざ笑うかのようにして戦いを続行させる。

他の教師たちは誘導を行い、生徒たちを避難させている。生徒たちは暴れまわる未確認機に対して恐怖を感じている様子である。

セシリアはいつまでも呆然と立っている箒の肩を揺らして叫んでいる。とはいえ、あまり大声を出すともた攻撃の的にされる。細心の注意を図り、声をかけていた。

「篠ノ之さん!! 早く避難しますわよ!!」

「私が……、私のせいで……」

肩を震わせ、このアリーナの現状を見、箒は受け入れたくないという状況に陥っていた。自分が引き寄せてしまった最悪の状況……。軽率な行動をとってしまったばかりに、クラスメイトを傷つけてしまった。

「篠ノ之さん!!」

「私は……、どうすれば……」

自らが引き起こしてしまったことに対して、何か自分にできることはないか。そう考えようにも彼女は混乱しきっており、全く案が浮かばない。というよりも、他者から見て、強大な力も、専用機も、類まれなIS操縦技能も持たない彼女にやれることは、ここには何一つなかったのである。

「いい加減になさい!!」

「!!」

乾いた音と共に、セシリアの怒声が箒に投げかけられる。ハツとしてセシリアの顔を見る。そこには当然のように怒った表情をした彼女がいた。グイッと腕を掴んで引つ張るセシリア。少しでも早くここから逃げなければ、いつ流れ弾が飛んでくるか分からない。引かれるままに歩く箒。

「あなたにできることなど、今は何一つありませんわ」

「し、しかし・・・、私が軽率な行動をとったから」

「分かっているなら、少しでも今の状況を読んでくださいませ」

代表候補生である彼女もまた、戦闘に参加すればいいという考えもあるが、その許可が取れない今、身勝手な行動は自らの立場を悪くする。セシリアとて守りたいという想いはある。だが、一夏と鈴もまた強制的に撤退させられた今、一生徒である自分が出る幕ではないと思っていた。

——無事でいて欲しいですわ・・・。

セシリアは色を失ったヴェステイージとその操縦者の飛鳥のことを気にかけてつ、箒を連れてアリーナから教師の誘導に従って避難

し始めるのだった。

「早く逃げなさい!!」

教師の叫ぶ声が二人に投げかけられる。しかし、二人は腰が抜けてなのか、それともこの現実が受け入れられないというのか、全く動くことができなくなっていた。

そんなことはない。そう思ったかった。しかし、鉄色に変わってしまったヴェステイージからは何の反応もない。強制解除もできないという異例の状態。もともとISとは違っているが、彼女たちの働きかけもあり、MSは兵器・・・、ISと同等の力を持つものとなっていた。主に整備のほうは、腕が立つ虚と本音がMSについては一般よりも知識があるために行っている。だが、彼女に聞いても、この状態は分からないという。

早く出してあげ、治療しなければいけないというのに、まるでヴェステイージがそれを拒んでいる・・・、否、また別の何かがそれを拒んでいるように見えた。

無理やりに立ち上がられる二人。虚ろな目で、ぐったりとしているヴェステイージ（飛鳥）を見つめている。涙は流しつくしたのか、それとも枯れたのか、その線だけが頬に見えた。

教師たちに肩を抱かれ、その場を離脱しようとする。だが、隣では自分専属の使用人が未だに少年の名前を叫んでいる。何もできなかった自分の無力さが悔しかった。

次の瞬間、突然何かがこちらに飛来してきた。慌てて教師たちが

肩を抱いていた二人と共に前方に跳んだ。ものすごい音が響く。なんだと思い、うつぶせの体勢から起き上がり、その方向へと目を向ける。

そこにはISを纏った教師が武器を持った状態で、観客席に激突した姿が見えた。すぐさまアリーナへと目を向けると、四機の一機がこちらにカメラを向けていた。

他の教師たちも決死の連携で落とそうと奮闘しているが、無人機であるために、操縦者のことを考えていない動きをしてその攻撃をかわしていく。

「あ・・・」

誰が呟いたかはわからない。だが、分かったことは、こちらに向かって未確認機がビーム砲を向けたということだ。

——やられる!!

誰もがそう思っただろう。ここから今逃げ出したとしても、ビーム砲の威力とその規模を計算に入れると、どう考えても生き残るのは不可能だった。砲口から光が溢れ出してくる。

全ての時間がゆっくりと感じられるようになった。倒れていたISを纏った教師は慌てて飛び出していく。だが、彼女が盾になったとしても、その威力を軽減させることは不可能だろう。

あるものは目を見開き、あるものは顔を背け、あるものは未確認機を睨みつけ、あるものはその場を間に合わないと分かっている。逃げ出した。

これで終わりなのかと簪は考えた。せっかく助かった命を、また奪われる危険にさらしてしまったのは、紛れもなく自分たちの行動だ。

ここまでの思い出が一瞬にして彼女の頭を駆け抜けた。そして、ついさっき自分たちを守るために身を挺して攻撃を受け、倒れてしまった少年のことを想う。

後悔を感じると共に、殺されたら会えるのかもしれない……。そう思うと自然と怖くなかった。そして、砲口から光が放たれようとした……。その時だった。

突然どこからともなく飛来した、桜色のビーム刃を展開したブルーメランがその未確認機の体を真っ二つに切り裂いたのだ。ビームが発射されようとしていたところであったが、砲門もろとも真っ二つとなったそこからは光は放たれることはなかった。

「え、何!？」

慌てて周りを見る。そして、思わず目を見開いた。そこに倒れていたはずの飛鳥とヴェステイージの姿が見当たらなかったからだ。

——まさか!？

そう思った瞬間、簪は自分たちの頭上を何かが飛んで行ったのを、それが起こした風で感じた。スラスターを噴かした音。また一機の未確認機がやられたという音に他の機体もこちらを見ていた。

そんな機体と簪たちの間に突然上空から現れた機体があった。先

ほどの鉄色とは違い、まさにベールを脱いだかのように色づく。下半身と腕部白く、肩や胸部は赤く染まる。機体が通電し、フェイズシフト位相転換システムがオンとなったのだ。

新しく手にした力を背面から手にして、抜き放ちながら地上へと降り立つ。ボロボロとなった観客席を踏みしめて現れた機体は、燃えるような炎の赤と、穢れなき白に輝きを放っている。

その機体・・・、インパルス（新しい力）はエクスカリバーを柄の部分で連結させ、大きく頭上で振り回し、残っている三機の未確認機に向けて切っ先を向けた。

「もうこれ以上・・・」

聞こえてきたのは生死が不明であった少年の声だった。

「アーちゃん!!」

「飛鳥!!」

その声がまた聞いたことが嬉しく、そして何より、生きていくれたことが嬉しかった。簪と本音は思わず飛鳥の名前を呼ぶ。その二人の声に答えるかのように一瞬輝きを取り戻した双眼がこちらを向いた。

大丈夫、安心しろと言っているような気がした。そして、再び未確認機に向き直り、叫ぶ。

「傷つけはさせない!!」

飛鳥は走り出していた。ビームが放たれようとしている機体に対して、教師団が連携して攻撃することで、発射させないことに成功する。

「こんのおおお!!」

連結したエクスカリバー（アンビデクストラス・フォーム）で一刃両断にする。レーザー刃によって、まるで熱いナイフでバターを切るようにして簡単に二つに割れたそれがアリーナの地上へと落ちていく。

突然アラートがなる。危ないという教師の声にはっとして気づいたときには既にビームが放たれていた。

それに対して左腕のシールドを掲げ、防ぐ。以前よりも強力になったシールドの性能のおかげで、機体へのダメージはない。

すばやく背面にあるビームブーメランへと手を動かし、それを掴むと投擲する。それが高速回転して未確認機を切り裂いていく。とっさに回避したために、ビームの銃口を破壊しただけに終わるが、すばやく手に持ったライフルを連射し、それを蜂の巣へと変えていく。

「あと一機!!どこだ!!」

飛鳥はそう言いながらもカメラで機影を探す。しかし、近くにそれは見当たらない。

「あ、逃げて行くぞ!!」

一人の教師が叫ぶ。慌てて指差すほうを見ると、一機のボロボロとなった未確認機が逃げていくのだ。

今から追いかけてようにも、追いつけるかどうか分からない。ただ見ているだけの教師陣の中で、飛鳥は動いていた。

「逃げようって言うのかよ・・・」

連結していた対艦刀を解除し、それを合わせるようにして一本の太い対艦刀へと変える。周りにいた教師たちは一体何をしようというのだという視線を向けている。

——二人を傷つけておいて、傷つけようとしておいて・・・。

「逃がしはしない！！」

ワンオフ・アベリッティ

エクスカリバー

『単一能力発動。“浄化の光剣”』

「うおおおおお！！」

その一つに合わさった対艦刀が桜色のエネルギーに包まれる。それを横なぎに振りぬく。すると届くはずのない刃がものすごい勢いでレーザー刃が代わりに伸びていくのだ。

逃げていく未確認機にアラートが鳴り響く。感情があるわけではないが、もしそれに感情というものがあつたら感じていたのはなんだろうか。おそらく感じていただろうもの・・・、それは“恐怖”。

ものすごい威圧感がその後方から来る。とつさに振り返ったとき、その未確認機は桜色の巨大なビームサーベルによってこの世から蒸発させられ、消滅していた。メインカメラに映ったのはただ美しく輝く光の刃だけだった・・・。

あれから数時間が経っていた。夕方というには少し時間が経っているだろうか。飛鳥は長い長い検査をようやく終えて、担当医からの検査結果を聞いていた。

「異常は・・・、ないわね」

よかったという安堵の雰囲気保健室に漂う。後ろには担任である千冬をはじめとして、くっついてきた一夏、セシリア、表情の浮かない箒、本音、簪、鈴がいた。

目に見えてほっとしているのが分かったのは本音と簪の二人であった。明日か自身もそんな二人に対して、これ以上の心配はかけられなくなかったために、ほっとしていた。

「それじゃあ、今日の所はゆっくり休むこと。3日ほど、なるべく激しい運動は避けること。いいわね」

「まじかよ・・・」

飛鳥はそう言われ、うんざりとした表情をする。あまり動かない状態でいるのは好きではない。多少の軽い運動なら言いというが、やはりMSを起動させたいという思いは強い。起動まで許したとして、そこからこっそりと訓練をされてしまえば堪ったものではない。

教師としてもそれは見過ごすことはできない。千冬からも、三日間の訓練禁止、その間に行われる実技訓練時も口頭によるアドバイスだけにするように指示された。

嫌そうな表情になるも、余計な心配をかけられない。そう言うこ

とでしぶしぶであるが、それを呑むしかなかった。

それから保険医はその部屋を後にする。ここに残ったのは先ほどのメンバーから保険医以外のものだ。

「とりあえず、身体に異常がなくて何よりだ」

そう言うは担任でもある千冬である。管制室にてただ見ているしかできなかった彼女もまた、飛鳥が数発のビームを受けたのを目にしていた。普通であれば死んでいてもおかしくはないものであったが、奇跡的に助かったのは運がよかったのだろうと思っていた。

もし飛鳥に何かがあったら両親に何と言ったらよいか……。

「よかったよ、アーちゃん」

突然抱きついてきた本音。いつも半分しか開いていない瞳であるが、赤くなっているのを見て、泣いたのだろうと、申し訳なさを飛鳥の胸はいっぱいになる。その本音の後ろで、よかったと呟いている簪の瞳も赤くなっている。二人には本当に心配をかけてしまったと、反省をするようにして飛鳥はごめんと言う。

「だったら約束して」

「約束……」

簪の言葉に飛鳥は何を言いたいのかわかっているつもりだったが、それをしたとして、それをきちんと果たすことができるか……。

「そう、約束」

真っ直ぐに見つめてくる瞳を飛鳥はただ見つめ返すしかできない。この状態で空気を壊すわけには行かないと、ちゃんと読んだ千冬は四人を連れて一旦部屋の外に出ることにした。このときばかりは、朴念仁である一夏もちゃんと空気を読んでいるようだった。

この部屋にいるのは三人だけである。静まり返った部屋は無音であり、それでも重苦しい雰囲気というわけではない。抱きついていた本音もいつの間にか身体を離し、簪同様に飛鳥を見つめていた。

「私たちの前からいなくならないで……。ただ……。それだけでいいから」

「簪……」

「そう……。約束して」

最後のほうは涙声で言う。ハッとして顔を背ける。まじまじと泣き顔を見るだなんて、そんな無粋なこととはできない。ただ黙ってハシカチを手渡す。着替えを終え、制服であつたためにポケットに入れていたものだ。

それをありがとうと小さく呟き、手に取る。それは見ていないが、重量感がなくなったので手に取ったのだろうと思った。少し経ってからちらりと横を見て、そろそろだろうかと思う。

先ほどと変わらず、こちらを見ている二人が見える。いい鳴らそうといってくれ……。などということは言わない。そこまでデリカシーがないわけではないからだ。

「でも俺……。約束してるから」

「うん、分かってるよ……。でもね」

「ああ、分かって。分かってるさ」

少し強めに言う飛鳥。彼女たちがそう約束して欲しいというのはいやというほど分かっている。飛鳥は彼女たちが悲しそうな表情になるのが嫌だった。それはもう、自分の胸が引き裂かれたような痛みを伴うものだ。

いなくならないで……。それは死なないでということだ。まるで戦地に赴く者のような気分である。守るということは戦いが伴うことだ。そのときに無傷でいられる可能性は限りなく低い。守るためならいくらでも……。それで死んだとなれば元も子もないということだ。

——難しい……。

その一言に尽きる。守るためならいくらでも傷つく覚悟でいる飛鳥と、それでいなくならないで欲しいという想いでいる本音と簪。相反する想いが交錯する。

「そうだよな……。そうになったら、一番傷つけちゃうもんな」

飛鳥は今日のことを思い起こし、納得するようにして言う。一度は静止を彷徨う状態にいたのだ。彼女たちからしてみれば飛鳥は死んだ状態だった。それが泣かせた理由であり、この約束を言う原因にもなったのは容易に想像できる。

「分かったよ。俺は死なないし、いなくなりはないさ。だって、そうだよ……」

そうなってしまったら、結局二つとも約束を破ることになる。だ

から、飛鳥はそう言うのだ。

「やったね、カンちゃん。これで少しはアーちゃんも自重してくれるよ」

「ううん……。なんだか余計に頭を突っ込ませる気がするんだけど」

とたんに笑顔になる本音と対照的に、更に不安げな表情を隠しきれない簪がいる。当たり前のようにある光景であるが、二度と見れなくなっていたかもしれないと思うと、ぞっとする。当たり前であるものが、これほどまでに美しく、大切なもののように見える。

そんな大切なものを守りたい……。そのために、あの丘にて新しい力を得たのだ。今は以前と同様に紅いブレスレットへと変わっている新しい力。^{インパルス}まるで任せろとでも言うように、蛍光灯の光を受け、紅くきらめいた気がした……。

PHASE 19 約束（後書き）

ED2↓REASON＞玉置成実＜

ご感想お待ちしております。

追記 他のシルエットの単一能力で案がありましたら、いつでも受け付けております。フォースとブラストがなかなか・・・。

ワシオフ・アヒリテイー

次回予告

怒り

それは大切なものを失いかけたから

衝撃の戦士の紅き瞳が怒りに燃える

何も知らず、知ろうともせず

自らが何をしたのかを今、罪人たちは突きつけられる

守るということの重さを突きつけられるもの

傷つきし少年の過去が明かされる

そんな怒れる瞳に映り続けているものは一体何なのか

次回 インフィニット・ストラトスへ怒れる瞳へ PHASE 20
怒り

かの者たちに罪を数えさせろ・・・、インパルス！！

PHASE 20 怒り（前書き）

OP2↓IDENTITY＞玉置成実＜

いよいよ、ラスト、今回を含めてあと二話。

第二章に最後までお付き合いいただければ幸いです。

いつもたくさんの閲覧とご感想ありがとうございます。ご指摘に対して、全てにお答えできると言うわけではありませんが、修正などに生かさせてもらいます。

それでは本編スタートです。

PHASE 20 怒り

シンとなった部屋にいるのは千冬をはじめとする一夏、セシリア、鈴、そして顔色が悪い箒である。この場に本音と簪の姿が見当たらないのは、彼女たちが仕事で戻るといったからであった。

飛鳥自身はもう少し一緒にいたかったという思いであるが、生徒会であり、対暗部のための暗部に身を置く彼女たちにとって、この事件の調査をしなければいけないのだろう。物足りなさを感じさせる雰囲気を置いたまま、二人は今ここにいるメンバーと入れ違いになって出て行ったのだ。

入れ違いになる際、二人が最後に入室した箒に対していつているのが聞き取れなかったが見えた。そのときに啞然とした様子が見て取れたことから、普段の二人からは考えられないような言葉を発したのかもしれない。

対して、飛鳥としては今日は休みたかったし、更にこの後、話があるといってもその理由が分かりきっているために、うんざりとしていたのだ。座っている椅子の前には腰に手を当て、こちらを睨むようにしてみている織斑千冬の姿がある。

「取り合えず・・・、大事に至らなくて何よりだ」

ほっとしたような表情で言う彼女を見て、心配していたのかと思うと、いつも反抗するような態度をとっている自分が子どもみたいに思えた。

少しだけ、この空間に張り詰めたいた重苦しい雰囲気が軽くなっ

ただろうか。とはいえ、根本的な解決にはなっていない。

ちらりと飛鳥はそう言った千冬を見て、どうもと一言。素っ気無い言葉であるが、相変わらずだと言うように見ているのだろう。彼女は何も言ってこなかった。

「よかった……。本当によかった、皆が無事でさ」

一夏がこの空間の雰囲気の重さに耐えかねたのか、その雰囲気を少しでも変えようと思ったのだろう。明るい話題を提供しようとしたのか、そう言う。

だが、今回のことを考えると、一夏の言うことだけでは済まされないのだ……。それをそれぞれ違う意味合いであるが、分かっていることであった。

「あ、あれ……。？？どうしたんだよ皆」

一夏は雰囲気が変わらないことと、その言葉に対して何も発言してこないことに疑問を感じたのか、そう言ってきた。彼に集まるのは何を言っているのだというような非難の視線だ。更に空気が重くなるのを感じる。

「皆助かったんだ。飛鳥だって、大きな怪我はなかったんだからさ」
「織斑。今回のことはそれだけでは済まされない。それに誰一人生徒の中で死傷者がいなかったのはたまたまだ。それに、紅月に関しては奇跡というしかない」

「ち、千冬姉……」

織斑先生だと静かに言うが、出席簿がないために制裁は飛んでこ

なかった。拳に対して身構えていたが、それが来なかったために呆気にとられているようだ。流石にこの雰囲気の中でそれができようか。

戸惑う一夏に対して、千冬は静かに語りだす。

「今回お前たちに未確認機撃墜を許可したのは私だ。大半の責任は私にある」

「でも、あれは。あれは俺達が志願したからで。別に千冬姉のせいってわけじゃ・・・」

「あの時の私はお前の姉ではなく、一教師の織斑千冬だ。もちろん今だってな・・・。だから、あの許可を与えたところで、その責任は私が負わなければいけないのだ」

それが、人の上に立つ者というものだ、と、ため息と共に言う。彼女を見てぐくりと生唾を飲み込むことしかできない。

あの時教師団が突入するまで時間稼ぎをするくらいはできるだろうと思っていた。それがまさかあんなことになるとは思っても見なかった。完全に自分の落ち度だと、内心かなり反省していた。

今考えるとあの時許可を出すことは間違っていた。ISに関して鈴が代表候補生ということで頭一つ抜けていただろう。MSがISと対等に見ることができる今、もしかすると飛鳥の技量は代表候補生を上回るのではないかと思った。そんな二人と比べると、遥かに見劣るする自身の弟である一夏。更に、即席の連携ができるとは思えない彼らの性格。そう言うことだけでも、あの時の判断は悪手であった。

更に、あの未確認機のビームの威力である。学園を守るシールド

バリアーすらも打ち抜いてしまうほどの威力。あんなものをISが受けたらどうなるだろうか。当然操縦者もろとも蒸発するだろう。正直な話、それがもし起きていたらと思うと、今回の飛鳥の場合は奇跡以外の何物でもない。自らの誤った判断が、生徒を殺していたのだ。

すると、ずっと俯いていた箒がポツリ、ポツリと何かを呟く。椅子に座って、膝あたりで手を組んでいた彼女の手の甲に雫が落ちる。

「わ、私のせいだ・・・」

箒な泣き声交じりにそう言う。突然のことに一夏は慌てたような表情になり、他の者たちはただ彼女を見つめているだけだ。

「私に一番責任がある・・・」

「ほ、箒・・・」

自分を責めるようにして言う箒に対して、一夏はなんと言っていないのか分からず、彼女に向かって伸ばした手が途中で止まる。

思わず齒噛みする。こんなにも悲しんで、自らを責めている幼馴染に対して、言葉すらかけることもできないのかと、自分の未熟さが嫌だった。

「分かっているなら、安心だ。あれだけのことをしておいて反省もしていなかったなら、人ではない」

「千、千冬姉！？それは言い過ぎじゃないか」

一夏が反論するように言うが、彼に続いて文句を言おうとするものはいなかった。一夏にとっては飛鳥は兎も角、セシリアと鈴

は何かを言ってくれると思っていた。しかし、彼女たちを見ても、まるで擁護する気はないように、むしろ当然であるというようにして見ている。

——どうしてだよ……。

一夏はこの状況をすぐに理解できなかった。確かにアリーナはめちゃくちゃになり、あわや死傷者が出る危険な状況になった。あの未確認機であって、素人に毛が生えたくらいである一夏であっても分かる、あれは危険だと。一時はどうなったか生死すらも分からなかった飛鳥であるが、奇跡的に助かった。結果的に全員が無事であったのだ。

良かった。しかし、それは結果であり、過程からすると彼女はとんでもないことをしでかしていたのだ。あわや何十という人の命を散らせていたかもしれないことを……。

「正直なことを言うと、篠ノ之、お前をこのI S学園から退学させるのが妥当だ……」

「!!」

「ちょっと待てよ、千冬姉!!」

自身の姉の口から、まさかそんな言葉が出るとは思わなかった一夏は慌てて反論するように言う。そう言われた筈はただビクッと見て分かるように肩を震わせていた。分かっていたつもりだ。しかし、いざ言われてみると、とてつもなく恐ろしく、そして、自身の犯した罪がどれだけ重いものなのかというものを感じていた。

恐ろしいのは、想い人である一夏と離れること。そして、再び見知らぬものたちの中へと入らなければいけないということだった。

更に、今度は以前のようにはない。

何せ、自分の犯したことは、何十という人の命を危険にさらさせたことなのだ。もしかしたら、死傷者が出ていたかもしれない。そうなったら、もう自分には普通の人生は送れないだろう……。もう既にそんな人生は失われつつあるが……。

「黙れ、織斑。お前も分かっているだろう、篠ノ之犯した軽率な行動を……。言葉を変えると罪だ」

「ぐっ！！だ、だけど！！」

「いい加減、私情を持ち込むのはやめろ！！今の私は一教師の織斑千冬として言っているのだ」

一瞬納得しかけたが、そこで踏みとどまり、反論する。だが、そこで千冬に睨まれ、一夏はそれ以上何も言えなくなっていた。そこにいるのは自分の姉である織斑千冬ではなく、一教師である織斑千冬であった。

「危険な状況にもかかわらず、近くの教師から誘導に必要なインカムを奪い取り、更に注意しようとして回収しようとした教師を投げ飛ばす」

ここまでしたら何をしたいのかと彼女の奇天烈な行動に頭を悩ませるだろう。しかし、彼女の行動はそれだけに止まらなかった。あの時の彼女の心にあったのは、ただ一人、想い人である織斑一夏に対する言葉を伝えたいということであった。

「それだけでも嚴重注意ものだ。だが、篠ノ之の極めつけは何だ？」

そう言われて一夏は流石に理解、納得せざるを得ない。

『一夏！！！』

『男なら・・・、男ならそれくらいの敵に勝てなくてなんとする！』

状況が別であれば、分かることである。しかし、あのときの彼女の行動はまさに悪手であった。それによって未確認機にロックされるような状況を作り出してしまった。

そして、その後の事は一夏も見ただことである。飛鳥が叫ぶようにして言葉を発し、瞬間移動したようにして彼女を守るようにしてあったシールドバリアーと未確認機が放ったビーム砲の間に割って入り、ABシールドによってそれを防いで見せた。

ここで一夏たちが勘違いしていることは唯一つ、飛鳥があの時飛び込んで行ったのは守るためであるが、何よりも本音と簪という、彼にとってはもう失いたくないと思える存在がいたからであるということだ。

そして、吹き飛ばされた衝撃がシールドを貫通したのだ。それだけ強力なものだったのだろう。その音が更に敵の注意を引きつけてしまった。直接的には飛鳥が向けてしまったものであるが、間接的には簪の軽率な行動が生んでしまったものだ。

「奇跡的に助かったとはいえ、紅月を殺しかけたのだぞ。更に奴が身を挺していなかったらどうなっていたか・・・。それが分からないほどお前の脳は腐ってはいるまいな??」

「・・・」

「それに、助かったからいいだ???よくあるヒーロー物のような

言葉が現実に通ずると思うな!!」

そう叫ぶようにして言う千冬は落ち着くためなのか、小さくため息を付き、だがと続けるようにして口を開く。

「だが、事情が事情だ。篠ノ之をIS学園から出すわけにはいかない。よって二週間の完全な謹慎処分だ。もちろん部屋ではなく、誰も使われていない個室がちょうど一つ空いている。そこを使う」

その部屋というのは完全なる密閉空間窓もなければ、何もない、完全なる物置のような部屋であった。ちょうど整理が行われた直後であるために、掃除をすれば部屋（牢屋）としては使えるだろうということだった。

「何だよ、その事情って言うのは!! それにその使われる部屋って・・・、それじゃああんまりだろ!!」

その部屋の整理をしたのはちょうど千冬に捕まった一夏自身であった。自分があの部屋にいたから分かる。あんな密閉された何もないところにベッドだけ、食事を運ばれてくるだけだなんて、拷問以外の何物でもない。だからこそ、一夏は箒を庇うようにして叫ぶが、そんな一夏にずっと口をつぐんでいたものから声がかかる。

「はっ!! この余に及んで正義のヒーロー気取りかよ。よかったな篠ノ之!! 愛しの王子様・・・、正義のヒーローがいてくれてよ!!」

「!!」

一夏たちの視線が一斉にその声の主へと向けられる。そこにいたのは、椅子に座っている飛鳥だった。

だが、明らかに飛鳥から出ているオーラというのは怒りに真っ赤に染まっているものであるう。

すさまじい威圧感で目の前にいる一夏と箒を睨みつける。今にも二人を殺しかけないような殺気も含まれている。それを受けて、セシリアと鈴は何も言えず、動くことすらできずに、まるで石になったかのように視線を固定していた。

飛鳥の言葉に反応を示す箒。

「何だよ、一夏……。お前って本当に甘ちゃんだよな。お前は知らなくてもいいってことだよ。織斑千冬オリハヤヒチヨウの弟だからって、何でも優遇してもらえと思うんじゃないぞ？？」

「お、落ち着けよ。そ、そりゃ、俺達の力だけじゃあいつらは倒せなかったかもしれないけどさ……。皆無事だったんだ」

戸惑いながらも言う一夏であるが、その一言一言が更に飛鳥の怒りを逆なでする。怒りに燃える紅玉の瞳が更に睨みが強くなる。

「その言動だよ！！皆助かったから良い？？ふざけるなよ！！」

ガタンとものすごい音を立てて飛鳥が座っていた椅子が倒れる。それはまるで飛鳥の怒りを表しているかのようなものすごい音を立てた。

「この際俺のことはどうでも良い！！だけどな、あそこには本音と簪がいたんだよ！！」

その怒声と共にものすごい速さで距離を縮めたかと思ったら一夏

のことを床に倒し、馬乗りになって襟首を掴む。突然倒されたために、いくら剣道を再開し、運動神経がもともとよかった一夏だとはいえ、それに反応する事ができずに背中を強く打ち付けられる。

背中痛みよりも、飛鳥からの向けられる怒りと殺気に戸惑いを隠せない。今だ嘗てここまでのものを感じたことがない一夏にとつて、背中の痛みを忘れるのには十分なものであった。

鈴とセシリアは椅子が倒されたときに魔法が解除されたようにはっとして気づいた方がいいが、すぐさま一夏が飛鳥の怒声と共に倒されたのに再び啞然として見ているしかできなかった。

鈴としては一夏のことを助けたい。しかし、今回のことを考えると、どうしても一夏の言うことは箒を庇うものでしかなく、それははっきり言って子供の我侖であることは分かっていた。

セシリアも止めようと思う気持ちと、それは言うてはいけないという呆れのような気持ちとが、胸を駆け巡っていた。動こうにも動けないもどかしさとそこにいた自分がそこに入っていないことに小さな痛みを感じていた。

一夏は呆然として少しの息苦しさと激しい戸惑いを感じていた。そして、飛鳥の言葉から何かが自分と違うことを感じていた。しかし、それを一夏は理解できない。

「もしかしたら・・・、二人は死んでたかもしれないぞ!! それを助かったから良い・・・、だど!!」

二、三度一夏の背中を揺さぶり床に叩きつける。痛みが走る。それは一夏が背中を打ちつけられる痛みであり、もしかしたら、本音

と簪を失っていたかもしれない飛鳥が感じている心の傷みでもあった。

「どうしてそうも簡単に・・・、そんな言葉が言えるんだよ・・・、言えるんだよ！！一夏ああ！！」

痛い、痛い・・・。嘗てここまで痛みを感じたことがない一夏はこの気持ちがなんなのか・・・、分からない。体ではなく、心が痛む。

一夏が見る先には、紅玉のような紅い瞳をもつ、そこに涙を溢れさせた飛鳥の顔であった。

「そうか、そうだよな。お前みたいなの守られてばかりの甘ちゃんが・・・、知ってるわけないよな！！」
「なにー！！」

そう言われた瞬間に一夏に涌いてきたのは怒りであった。確かに自分は弱い、そう自覚している。だが、幼い頃から両親がおらず、ただ一人姉の千冬が自分を守ってくれていたのをずっと見ていた。だから、多大な苦勞をかけたと思う、彼女がやりたかったことも多々あっただろう。それを全て犠牲にしても、一夏を守ることに時間を費やしていたのだ。

そして、第二回モンド・グロッソにおいて、彼女の二連覇という偉業を成さんという時・・・、一夏は誘拐された。何とか彼女がドイツ軍の情報源を頼りに救出したが、それにより棄権とみなされ、優勝することができなかったのだ。自分が弱かったから・・・。そのために迷惑をかけてしまった。

だから、ここIS学園に来て、白式チカラを手にしたとき。今度は自分が守るんだと、心に決めたのだ。それを……。

「俺はもう……、守られてばかりじゃない!!」

「じゃあ、何をするってんだよ!!甘ちゃんのくせに!!」

「俺は俺と白式チカラで皆を守るんだ!!」

「こ、こんのお……」

もはや飛鳥には怒りが理性を凌駕し、本能に赴くままに行動しようとしていた。それは、自らの意にそぐわない一夏テキを倒すということだった。

一夏の言葉を聞いて、一気に過去のシーンが飛鳥の頭を掛けめぐる。目の前にいるのは、子どもらしくちっぽけな正義を見せていた幼い自分であった。そんな自分の末路はどうだっただろうか。

突然降りそぐミサイル。悲鳴を上げ、逃げ惑う人々。そこには法も、道徳もなく、ただ自らの命が大切だと、我先にと人を押し倒していく。

落としたものを拾いにいこうとする妹。それを引きとめる両親。それを取りに行くと、走り出した幼き日の自分。

突然吹き飛ばされる。そして、次の瞬間数秒前には人が逃げ惑う様子があったところに映ったのは死体、死体、死体の山。

四肢が飛び、頭部が吹き飛び、黒焦げになり、臓器が飛び出し、痛みで助けを求める、まるで絵に描いたような地獄がそこに形成されていたのだ。

そして、つい先ほどまで、久しぶりの家族旅行に心躍らせていた妹、そんな彼女を愛しむようにしてみていた母、楽しい旅行にする
と意気込んでいた父の肉片と化したものがあつた。

携帯電話と妹のちぎれとんだ腕を抱き寄せ、空を見上げれば、そこから見下すようにして、飛鳥を見ている白騎士の姿。

「何も知らないくせに!!」

握られた拳が振り上げられる。一夏もそうはされまいと体をバタつかせるが、がちりとホールドされているために、徒労に終わる。

「大切なものを奪われたことのないお前に!! “守る” だなんて言
すべてに絶望した
葉・・・、口軽く言うな!!」

そう怒声と共に、吐き出されずに積もりに積もっていたどす黒い
ものが一夏に拳と共に迫る。だが、その拳が一夏に届くことはなかつた。

「またあんたかよ・・・」

「一度集中講義をした方がいいか?」

相変わらず教師に対する口ではないことに頭を痛めつつ、振り上げられた拳を掴んでいるのは、ついさっきまで見ているだけであつた千冬であつた。

流石に被害者だという飛鳥であっても、ここで暴力を行使するといふならば流石に見過ごせない。

常日頃から理不尽な出席簿による攻撃をしている彼女が、そう言

うのには全く威厳の欠片もないのであるが・・・。

「過去のお前に何があったかは知らないが。くだらない理由で突っかかるのなら、見過ごせんぞ?？」

「くだらない・・・??」

幾分か時間があったので、冷静になりつつあった飛鳥であるが。そのことばに再びカツと頭に血が上るのを感じた。

「くだらないなんて言わせるか・・・」

飛鳥の瞼に、突然のミサイルの飛来の衝撃で千切れ飛んだ、土で汚れてしまった幼い腕が蘇る。たった9年で歩みを止めてしまった命、それを奪っていった二人の憎き仇・・・、篠ノ之束と白騎士。

「こいつに、篠ノ之に、こいつに・・・、あんたに関係ないなんてそんなのは大間違いだね」

飛鳥は千冬の手を振り払うかのようにして、自身の手を解放させ、三人を睨みつけるられるところに立つ。

「俺の家族はこいつの姉である篠ノ之束と白騎士に殺されたんだ！
！」

周囲のものが、その言葉に凍りつく。だが、飛鳥が見ているのは、その憎き敵の妹である篠ノ之箒。

「そ、そんな・・・。それはないと思っていたのに・・・。いくら姉さんでも・・・、人を殺すだなんて」

「それはあんたにも言えることだよ・・・、篠ノ之箒!!」

「!!」

飛鳥の怒声にもう縮こまれないというくらいに体を縮こませ、小さく震えている。そう、彼女自身もあわや人を殺しかけていたのだ。

「あんたも俺から・・・、俺から大切なものを奪おうって言うのかよ!!」

箒からはすまない・・・、ただそれだけしか聞こえてこない。謝られても困る。実際に彼女は謝っても許しを得ることができないほどの罪を犯したのだ。

「それにあんたにも関係あるんだ、織斑千冬!!」
「!!」

このときばかりは彼女も動揺していた。そのためにフルネームで言われても、注意することはできなかった。何せ彼女も償いきれないほどの罪を負っているのだから。

「ちょ、ちょっと待てよ。白騎士事件って・・・、死亡者はいなかったって・・・」
「やっぱりそうだったのかよ・・・」

一夏だけでなく、飛鳥以外の者たちが啞然とした表情で飛鳥のことを見ている。飛鳥が言っているのは彼らからすれば理解できることではない。何せ世間では白騎士事件では死者はいなかったと言われているのだから。

だが、それはあまりにも大きすぎるほどの嘘、偽りであった。それが公に出てこなかったのは、マスコミや軍関係、そして何より、

篠ノ之束によってその真実が暗闇へと葬り去られたのだからだった。

しかし、それはすでに遅すぎる真実。いくら飛鳥一人が呼びかけたからといって、世間の認識が劇的に変わるわけがない。

対して飛鳥はショックを受けたように啞然としている千冬に対して睨みつける視線をぶつけながら言う。

「あんたが篠ノ之束と交友関係があることは、こいつらが親友同士だということから簡単に予想できさ。だとすれば、あんたが一番奴の傍にいたんじゃないのか!!」

そう言われ、返答に困ったような表情でいる。

「あんたが奴を止めていれば、少なくともあんなことには、こんな世界にはならなかったはずだ!!」

傍から見れば無理な注文かもしれない。しかし、千冬にとってはまさにそうだったのだ。自分が束の一番傍にいて、彼女のやることなすことに対して、彼女自身はただ傍観し、流されるようにして付き合っただけ。その結果が多くの無関係な人々の命を奪い去り、世界を狂わせた。

「あんたも俺から大切なものを奪っていったんだ!!」

飛鳥からすれば間接的に、当事者である彼女からすれば、直接的に飛鳥から家族を奪ったことになる。ずっと白騎士という顔を隠し続け、教師という仮面を被っているが、何時か来ると思っていたが、こうも早くその関係者が自身の目の前に現れるとは……。

憎しみの炎が燃えているのが見える紅玉が、箒へと向けられる。彼女は自身と自身を通して、姉である束のことを睨みつけているのだろうと思った。飛鳥に何と謝罪しても、もはや許しは得られないだろう。それだけのことを、彼女の姉である束はしてしまったのだから……。

飛鳥から見る彼女の瞳には後悔の色が濃く見えた。だからといって、許せるほど飛鳥の機嫌は良いほうではなく、むしろ最悪のほうである。今箒に対して手が出ないのは奇跡に近い。

ゆっくりと近づき、怯える彼女の襟首を掴み、無理やりに立ち上がらせる。突然のことに、息苦しさから苦しそうな小さな悲鳴を上げる。

「やめろ!!」

ハッとして一夏は飛鳥から箒を引き離そうと掴みかかるが、その前に飛鳥の蹴りが叩き込まれる。対暗部のための暗部の楯無たちとの幼い頃からの稽古と軍事学校での訓練で鍛えられた飛鳥と、一夏とは生身の戦いで圧倒的に飛鳥のほうが勝っていた。

もろに腹を蹴りでえぐられた一夏は吹き飛び、部屋……、保健室のドアまで転がった。鈍痛の走る腹を抱えながらも、歯を食いしばって立ち上がろうとする。そんな一夏にでしゃばるなど睨みつけ、怒りの視線を箒にぶつける。

「あんたはあの時誰かが死ぬだなんて考えずに行動したんだろ?? 何も見ようとしらない、何も分かつちやいないあんたに、大切なものを奪われてたまるかよ!!」

掴んでいた襟首を離し、後ろに押し飛ばす。ふらふらと受身も取らずに箒は床に倒れる。ただただ呆然と飛鳥の事を見ているだけだ。

飛鳥は吐き捨てるようにしてそう言い、立ち上がり、ただ飛鳥を睨みつけているのか、戸惑っているのか分からない目で見てくる一夏の横を無言のまま荒っぽい足取りで通り過ぎ、保健室を後にしようとする。

ふと扉の前で立ち止まる。

「俺は許さない・・・」

「「・・・」」

立ち止まった飛鳥の握られた拳は未だに小刻みに震えている。

「絶対に許さない・・・。篠ノ之束と白騎士・・・、俺が必ず殺す」

その言葉はこの場にいた者たちにとってはひどく遠いものであった。しかし、躊躇なく飛鳥は言っただけだ。この時千冬は自らに刃が向けられたことを感じ取った。いつそれが切りかかってくるかわからない。

静かに保健室を出て行く飛鳥を、ただ見ているしかできなかった・・・。

PHASE 20 怒り（後書き）

ED2↓REASON>玉置成実<

まさかの千冬Ⅱアスラン!？

とはいえ、この作品の中での千冬の立ち位置は・・・。

箒もはっきり言って被害者（束が加害者）なんですけれどね・・・。
優遇されているとはいえ、裏ではただの人質なんですよね。一夏も
守られているようで、ただの観察対象・・・。

なら飛鳥は??道場破り（・・・）みたいな存在から、IS関係
者からの一夏同様の観察対象でしょうね。

ご感想がありましたらいつでもお待ちしております。

追記 インパルスデュアル・アビリティの単一能力・・・、じゃなくて多重能力と言え
ばいいのでしょうか。フォースとブラストの案がありましたら、こち
らもお待ちしております。

次回予告

想い

それは二度と大切なものを失いたくないと言うもの

想い

それは大切なものを失わないために守り抜くと言うもの

想い

それは大切なものを愛しむ思いと言うもの

想い

それは大切なものが傷ついてほしくないと言うもの

さまざまな想いが交錯する

しかし、それは時としてすれ違い、お互いを傷つけたりするもの

一度はすれ違った想いは今・・・

次回 インフィニット・ストラトス〜怒れる瞳〜 PHASE 21
エピローグ？

その想いは交わることのない運命なのか・・・、インパルス！！

PHASE 21 エピローグ? (前書き)

OP2↓IDENTITY>玉置成実<

いつもたくさんさんの閲覧とご感想どうもありがとうございます。

いよいよ第二章も最終話となりました。ここまでよんでくれた皆様に最大限の感謝を。ありがとうございます。

第三章もまたお付き合いいただけると嬉しいです。

それでは本編スタートです。

PHASE 21 エピローグ？

ボタンという扉が閉まる音が、無音の廊下に響き渡る……。俯いたままの飛鳥の表情がどうなのかは分からない。しかし、先ほどの怒りというのは完全に収まったというわけではない。

それを表しているように、未だに握られた拳が震えている。それが納まらないまま、飛鳥はゆっくりと足を進め部屋へと戻る。

早くベッドに入りたい……。そんな気分だった。

今日は色々ありすぎた。クラス対抗戦。突然の過去への時間遡行。突然の未確認機による襲撃。二人を庇って一時は生死不明の状態になった。更には、ISの世界にての戦闘。楯無と簪のISである二機……。この場合は二人と言ったほうがいいのだろうか。二人に出会え、色々なことがあった。正直今日何度死に瀕したか分からない。

「ヴェステイージ……。いや、今はインパルスか」

自身の手首にあるブレスレットが紅く輝く。傷ついた飛鳥を守るために犠牲になった傷ついた戦士の名を持つヴェステイージ。再び衝撃として飛鳥の剣としてこの手に戻って来てくれた。

自身の未熟さゆえに、一度は失ってしまった剣。しばらく歩き、ようやく部屋にたどり着く。ドアノブを捻る。誰も戻って来ていないのか中からは音らしきものはなかった。

鍵が掛かっている、一応合鍵がそれぞれに渡されているために

大丈夫なのであるが……。飛鳥はドアノブを捻り、中に入る。

「お帰り♪まず何にする?? ご飯、お風呂?? それとも……」

——私??

飛鳥の前に現れたのは、生徒会長として動いているはずの楯無であった。突然現れたために、飛鳥は咄然とした表情で彼女の顔からゆっくりと視線を下げていく。

「な、な、な／＼／」

一步、二歩と呆気にとられ、口を開けたまま飛鳥はゆっくりと後ずさりをする。先ほどの怒りと苛立ちは一瞬の内に吹き飛んでしまった。

そこにいたのは紛れもなく楯無であるが、問題は彼女の今の姿、着ているものにある。白い肌が見え、エプロンだけという、所謂裸エプロン。恥ずかしいのか、ややピンク色がさしているのが見える。

飛鳥はそんな楯無の姿をまじまじと見てしまい、慌てて顔を背けるが目だけは横から離せずに釘付け状態である。顔が真っ赤であるのを見て、大成功といわんばかりに満面の笑みを浮かべている楯無が見える。

慌てて上着を脱ぎ、彼女の体を隠すように、顔を背けつつ押し付けるようにして渡す。もう少し何か言ってもいいのではと剥れながら言う楯無であるが、既に危険域である飛鳥にとって、言葉よりも手が先に出そうである。

「な、なんて格好してるんだよ／＼／」
「ええ／＼？？アックンこういうのは嫌い？？」

どうだといわんばかりに、押し付けていた制服の上着を脱ごうとする楯無であるが、すぐにその手を飛鳥に止められて、それをすることはできなかった。

「む／＼。もうちょっと何かしようって思わないのかな？？」

「ば、馬鹿言うなよな／＼／／／、そんなこと・・・」
「ん？？」

「の、覗き込むな！！」

とりあえずこんな入り口付近でやり取りをしていれば誰かが気づくだろう。当然のように誰かが二人の会話を聞いて外に出てきていた。慌てて飛鳥は入り口付近にいた楯無の体の向きを反転させ、後ろ肩を押して中へと入っていく。

ギリギリ他の女性生徒たちに二人のやり取りをしているところを見られずに済んだ。ここで新聞部などに見つかったら、とんでもないことになっていただろう。

——少しは周りのことも気にしろよな。

——なに？？私の肌を他の人に見られたくない？？

——ど、どうしてそっちの方向にもって行きたいんだよ／＼／／

中に入ってからそんな風にやり取りが交わされる。相変わらずどうだといわんばかりに見せ付けてくる彼女に対して、複雑な感情を向けつつ、何とか流そうとする飛鳥。

とりあえず彼女をベッドに座らせ、自分は飲み物を入れるために

小さな台所へと姿を消す。

飛鳥だけでなく、妹の簪とその使用人であり、更識家に仕える布仏家の一人である本音が生活している部屋である。

それぞれの服などが入っているクローゼットやダンスなどが置かれ、その上には人形やら、アニメ関係のものも置かれている。

ふと、やや二人のものよりも彩りもなく、置かれている物もほとんどないダンスの上に、置かれている写真立てを見つけた。

スツと立ち上がり、そのダンスに近づく。それは飛鳥のものであり、そこにあった写真立てに入っていたのは、飛鳥の両親、そして楯無がまだ■と名乗っていて、先代の楯無が生きていた頃に撮ったたった一枚の写真であった。

その後ろには……。

“飛鳥、朱雀、■、簪、虚、本音”

と書かれたものがあった。純粹に懐かしいと思ってしまった。既に語ることなくなった名前がそこにある。まるで楯無^{偽り}の仮面を捨て去った感じがした。

ちらりと後ろを見ると、お茶を入れてくれている飛鳥の後姿が見える。この写真に写っている、純粹な笑みを浮かべている子どもどもの彼の彼は打って変わって、笑みは見せるが、あのときのようには笑っていない。ただ彼の眼に映っているのは篠ノ之束と白騎士に対する復讐だけなのだから……。

——ねえ、アツくん……。復讐以外の生き方も、あってもいいんじゃないかな。

そう寂しそうな瞳を飛鳥に向けながら思う楯無。

向こうから入れ終わったのか、楯無用の紅茶、そして、自分用のコーヒーとお盆に乗せて持ってきた。使用人の二人ほどではないが、一時期は手ほどきを受け、自身の楽しみでもあるためにそこその腕はあると思っている。

楯無は手にしていた写真立てを元の位置へと戻す。その様子を見ていた飛鳥の表情に、少し陰りが見えたのを彼女は見逃さなかった。

とりあえず座り、テーブルに置かれたそれぞれの飲み物に口を付ける。やはり虚たちよりは劣るものの、これらのものが入れるのよりはいい味を出している。そう笑みを添えて言う。

——やっぱり、そうか。

苦笑いを見せ、飛鳥はそう言う。流石に本格的に腕を磨いてきた彼女たちには追いつくのは至難の業である。

一時は明かりの下で、二人だけのゆっくりとした時間が流れていた。しかし、ゆっくりとカップが置かれる音と共に、空気ががらりと変わった。

「け、怪我のほうは、大丈夫なの……。??」

「……。大したことは、ない」

閉じられていた口が重く開かれる。楯無の声には、いつものよう

な明るさというものはなかった。飛鳥も先ほどのことを聞かれ、忘れていた怒りが少しだけ振り返してきたのか、少し素っ気無い。

口を付けていたカップを飛鳥もゆっくりと置く。静か過ぎる部屋に、それを置く音だけが何故だかひどく、そして、重く響いた。

——それで……。

何でここにいるんだよ……。それが飛鳥の楯無に向けるものである。少し目を見開くような動作が見えたが、すぐに平静を保とうとしている。

「あんた言ったよな……。俺は一般人だから関係ないって、自分は裏の人間だからって……」

「うん……。そうだね」

まるで尋問するかのよう、飛鳥が楯無に尋ねる。飛鳥の問いに對して、楯無はいつもの覇気はなく、ただ一人の少女のように、か細い声で呟くように言う。

「自分たちが何とかするって言うておいて……。これは何だよ」

「そう、だね……。何やってるんだろう、おねーさ……。ううん。私……」

顔を俯かせているために、飛鳥の表情は伺えない。だが、声が少しだけ震えていることから、怒りを抑えているのだろうと思った。当然だ、自分たちは、否、自分は飛鳥のことを巻き込またくないと思ひ、突き放したというのに、結局巻き込み、もっとも最悪の状況を作り出してしまった。

あの時のことを思い出すと、今でも恐怖が体を支配する。

『え……、アツくんが』

あの時、ちらりと見えたのは飛鳥がヴェステイージにて観客席に放たれた無数のビーム砲に対して、身を挺して受け、倒れた光景だった。

『お嬢様!!』

『そ、そんな……』

煙の中から現れたぼろぼろとなったヴェステイージからPS装甲の色が抜けていく。それはまるで飛鳥が死んだことを表しているように見えた。

その瞬間楯無の足は観客席に続くほうへと向いていた。それは無意識のことであり、彼女の素直な想いが突き動かしたものであった。しかし、それは腕を掴まれたことで叶う事はなかった。数歩歩いたところでつかまり、その腕を掴んでいるものを見る。

『離しなさい、虚……』

『駄目です、お嬢様』

睨むようにして虚を見る楯無。しかし、虚が掴む手は離れることはなかった。彼女とて、あの場にいるだろう妹のことが心配だ。だが、今はこの事件を解決することが早急であった。

行きたいという思いを押し殺し、生徒会の一人として、更識家に

仕える布仏家の一人として行動しようとしていた。

『離さない・・・、離して!!』

『お嬢様!!』

虚の腕から抜け出そうとして、一層激しく暴れる楯無。こんな慌てる彼女の様子を他の生徒が見たら大層驚くであろう。それくらい珍しい・・・、にとっては何年振りというだろう光景であった。

今の彼女は威厳あるIS学園の最強の名を誇る生徒会長、更識楯無ではなく、ただ一人の駄々をこねる少女であった。

——お嬢様（■■■）、あなたの気持ちも分かります、でも・・・。

楯無（■■■）の気持ちも痛いほど分かる。だが、今はそうしている暇はないのだ。だから、虚自身も自らに言い聞かせる・・・。あの三人なら大丈夫だ・・・と。

乾いた音が響いた。白い肌の一箇所・・・、楯無の頬が赤くなっていた。呆然と顔を横にしたまま固まっている。楯無の頬を叩いたのは紛れもなく、使用人である。普通であれば主従関係があるためにそんなことはすることすらできないのであるが、彼女たちは主従というよりも姉妹、仲のいい友達という関係のものであった。

『お嬢様の気持ちも分かります。しかし、今は!!』

『嫌よ!! 私は!!』

『更識楯無!!』

『!!』

駄々をこねるような幼子のようにその腕を振り払おうとする楯無

であるが、そんな彼女を止めるために、意を決して虚は叫ぶ。

“更識楯無……！”

それが彼女の今の名前である。嘗ての名を捨て、頭首として、その名を継ぐことを受け入れた。その裏を統べるものとして、この行動はあってはならない。その虚の言葉が一気に楯無を冷静にさせた。

呆氣にとられた表情で見つめていたが、すぐに大人しくなり、振りほどこうとしていた腕をゆっくりと下げる。それを確認し、虚は楯無の腕を放す。

『ごめん……、そうだったわね』

『お嬢様……』

小さくため息を吐き、きつと表情を引き締める。こんなことをしている場合ではなかった。そう思うと少し胸が痛む……。だが、自分は楯無。このIS学園の生徒会長であり、更識家の頭首である。

『生徒の避難状況、アリーナの被害の規模。それを確認したら、私も教師団に参加するわ』

『分かりました』

走り出した楯無の後ろを付いていき、指示を聞く。もはや立ち止まって入られない。先の暗い廊下を二人は走っていくのだった……。

「そしたらアツくん……、突然起き上がったもんね」

教師団とともに戦おうとして、自らも専用機である『ミステリアス・レイディ』を起動させようとした。だが、その時まるでISが拒んだかのように、一瞬の時間の誤差が生じた。

そして、その一瞬の時間差で飛鳥が、インパルスが姿を現したのだ。そこからはもはや二人の独相場であった。いくら教師団の連携を駆使しても落とすことができなかった未確認機を次々と沈めていったのだ。

それはまるで鬼人の如し……。圧倒的な中近接距離の戦闘を見せつけ、あまつさえ、逃亡を図った機体に対しても、情け容赦のない攻撃を放ち、その存在を無に帰させたのだ。

その後ろには観客席があり、そこにいた本音と簪を守るようにして立つインパルスがあった。

「よかったよ……。あの時本当に……」

——死んじやったかと思ったよ……。

その声は震えていた。いつの間にか俯いているのは楯無であり、飛鳥はハッとして顔を上げていた。

「そうかよ……。でも」

——心のどこかに死んでもよかったのかもしれないって言うのもあったのかもしれない。

「え……」

瞳に涙が見える楯無が慌てて顔を上げる。そこにはひどく疲れたような飛鳥の姿があった。それはまるで、家族を失って、自殺を図り、助かったときのようなものだ。

「だってそうだろう？ 守ってやる……、だなんて。俺から言わせれば、楯無、簀、虚、本音あんた達のほうが強いだし……」
「アツくん……」

固い決心がある心の奥底に、あの頃から残っている、わずかな思い……。もしかしたら自分は。

「あんた達にとって……、ただの足枷あしづかりなのかなって」
「そんなことない!!」

そう言う楯無であるが、目の前の飛鳥は更に言葉を続ける。

「そう言って……、あんた達は俺を拒絶したじゃないか!!」
「あ、あの時は……、仕方なかった」
「仕方がない!? ふざけるなよ!!」

ものすごい音が明るい部屋に響く。IS学園の寮は基本的に防音対策をなされているために、この音は外へと漏れてはいないだろう。

まだ中身の入っていたカップが落ち、乾いた音とともに、カップが粉々に砕け散った。それはまるで、あのときに拒絶された飛鳥の心を表すかのように……。そう捉えた楯無は、飛鳥の剣幕にただ見つめることしかできない。

「だったら今日、どうしてあんな状況になったんだよ!!」
「そ、それは……」

まさか空から来るだなんて予想していなかったなどというのは言い訳である。今の飛鳥にはそれはマズイ。

飛鳥自身、彼女に対してこう言うつもりではなかった。しかし、先ほどの約束なども、全てが怒りに頭から抜け落ち、怒りに流されるままに吐き出されずに溜まっていたものが飛び出していく。

「あれだけデカイ口叩いていながら・・・、何だよあのザマは!!」
——ち、違う・・・。

「巻き込まないって言ったよな!! 一般人は巻き込まないって!! なんだよ、皆危険な目に遭ってるじゃないか!!」

——あれは楯無たちのせいじゃ・・・。
「何やってたんだよ、あんた達は!!」

——俺は、俺はこんなことを、言いたいんじゃない・・・。

「ご、ごめ・・・、ごめんね。ほ・・・、本当に、ごめんね」

——ない・・・っていうのに・・・。

「ごめんね・・・、アツくん」

——俺はナニヲシテイルンダヨ・・・。

飛鳥はいつの間にか楯無のことを追い詰めていたようだった。彼女が座っていた後ろには飛鳥がいつも使っているベッドしかあらず、その後ろには少し高いところに窓があるだけで、あとは壁だけだ。そんな壁ギリギリまで下がるまで、追い詰めてしまっていた。

飛鳥は自らの腕を壁に押し当て、楯無が逃げられないようにしていた。目の前には涙を流し、ただ謝り続ける姿だけがあった。

その姿を見て、一気に頭に冷水をかけられたかのように、怒りの熱が鎮火したように、消えていく。

ゆっくりと手を離し、首を弱弱しく左右に振りながら、よろよろとベッドから遠ざかるようにする。

自分が何をしていたのか、自分でありながら、自分ではないものの目の中から見ているような感じであった。

それはまるで、白騎士の意識化において、あの事件を見ていたときのように。そんなことを言いたいのではないのに、溜まりすぎた怒りなどのものが、歯止めが掛からなくなり、一気に吐き出されていたのだ。

それが向けられたのは、飛鳥にとって守りたいと思っている存在・・・、楯無だ。

自分は何をしているんだ・・・。ものすごい罪悪感と嫌悪感が襲いかかる。だが、目の前にいる彼女は泣いているのだ。泣かせたのは誰だ。

——俺自身だ・・・。

「ち、違う・・・」

飛鳥は逃げるように後ずさる。怖かった。言ってしまった後であるからどうにもならないことは分かっている。だが、決心したばかりのことが、こうも簡単に怒りというものに凌駕されてしまうものなのかと。

「俺は・・・」

こんなことをしたかったんじゃない・・・、言いたかったんじゃない。戸惑いを色濃く見せる表情。それを見て、涙を流し、俯いていた楯無も顔を上げ、飛鳥を見る。

「俺は・・・、ただ」

「アツくん・・・」

スツと借りていたIS学園の男子用の上着を引き寄せる。ゆつくりとベッドから降り、飛鳥の元へと歩み寄る。彼がここまで癩癪を起こしたのも、すべては自分が選んだ選択の結果である。

それを理解していたから、知らない場合よりもショックは少なかった。だが、怒りに任せていつているとはいっても、それは飛鳥の胸に溜め込まれていた思いである。だが、いざ言われてみると、辛いものの以外の何物でもない。その言葉一言一言から、飛鳥の想いというものを感じていた。

それを分かっているつもりでいて、全く理解しようとしていなかったのではないだろうか。それに対する謝罪を意味するものとして、近づいてくる楯無から逃げるように後ずさる飛鳥に腕を廻し、抱きつく。

柔らかい感触が飛鳥の胸にあたり、ビクツと体が震えるのが楯無は見えて分かった。驚いたようにこちらを見ているのを見て、逃げるのはやめてくれたのかと思った。顔に赤みがさしているのを見て、こういうのはまだまだ初心なのだろうと思う。とはいえ、自分も恥ずかしく、顔が熱いのを感じている。

飛鳥は楯無に抱きしめられ、一瞬目を見開き驚いた表情で、彼女のすることを見つめるも、大丈夫というように、安心させるように視線

でそう語っていたのを理解すると、思わず怒り以外の感情が胸の奥底からこみ上げてきた。

瞼から熱いものが零れ落ちる。それが頬を伝い、そして、楯無が着ている男子用の制服に落ちて、消えていく。瞳を閉じて、そこから溢れてくるものを塞き止める事ができず、次々と溢れては頬を伝って、大きな雫となる。

柔らかい寝癖がついたような髪を優しくなでる……。まるで子どもをあやす母親のように。飛鳥もそれにすがるように、楯無のことを抱きしめるようにして、腕を廻す。飛鳥の方が、いつの間にか身長で彼女を越していた。

時間が経っていたことを、それが示している。思わず楯無は昔のことを思い出す。まだ彼女が楯無ではなく、■であつた頃のことだ。身長は同じくらいか、それよりも小さな飛鳥。

自分をお姉ちゃんと呼んでくれていた頃の、幼い笑みが脳裏に思い出される。小さく嗚咽を漏らしている飛鳥を、ただただ何も言葉をかけずとも、優しくなでてあげる。すると、嗚咽交じりに飛鳥の声が聞こえてくる。

「俺はただ・・・、皆がいなくなるのが」
——怖いんだ。

あの時のように、ずっと一緒にいられると思っていた存在が、突然消えてしまう恐ろしさ……。それが飛鳥にとってはトラウマであり、二度とそんな思いをしたくないということで、守りたい・・・、そのことを誓いにしたことであつた。

まるで今にもいなくなってしまうのではないかという恐怖に駆られたのか、先ほどよりも抱きしめる力が強くなる飛鳥。痛いなどと言える状況ではなかった。楯無もまた、自分はここにいる、いなくなるなどないと言う様に、飛鳥のことを抱きしめ返す。

「父さんや、母さん・・・、朱雀みたいに。皆がいきなり俺の前から・・・、いなくなるんじゃないかって」

——あの時のように・・・。一瞬で皆がいなくなるのが・・・。
——怖くて・・・、怖くて仕方がないんだ。

“ 僕が守って見せるんだから ”

そう言っていた幼い頃の自分というのは、白騎士から見ればただ無力にも、絶望に打ち拉がれた哀れな少年だったのだ。

想いだけでも・・・。

——守れない・・・。

皆を守ると言っておいて、あの時はただ呆然としているしかできなかった自分。ただ獣のように吼えることしかできなかった。周りには守れなかった家族であった肉塊が転がり、その飛鳥の腕には妹の千切れた腕と携帯電話が抱かれていた・・・。

手の届くところにいたというのに、何もできずにただ呆然と見ているしかできなかった。

“ 守る ”

聞こえが良く、誰もが大人なり小なり、何かに対して想うものであ

ろう。しかし、それは力ありてのものであり、あの時の飛鳥のように、力もないものがそう言う言葉を告げたとしても、ただの妄想である。

力だけでも……。

——守れない……。

あの時最強の力を持っていただろう白騎士。だが、あの力をもちても地上では数多の命が奪われていった。多少の犠牲は付きものだ・・、などと彼女にとって、地上にいた者たちが守るべきものではなかったのかは、分からないが・・・。

だからこそ、あの時ヴェステイージを託されたとき、もう二度と失いたくないという想いが強くなったのだ。

今でも悪夢で出てくる光景・・・。呆然と立っている自分。足元には鮮血で泉のような物ができている。そこに沈んでいる彼女たちのからだ。その目の全てが自分に向けられ・・、まるでこう言っているように見えた。

“ どうして約束を破ったの？？ ”

その度に跳ね起きる。汗が体中から噴出し、着ているものが体に張り付くようで気持ちが悪い。その度に起こしてしまう二人に申し訳なさが募る・・・。

失うことの怖さを知っているから・・・。守れなかったときの虚しさ、無力さを知っているから・・・。

「頼むよ・・・お」

消えそうな声で言う。

「傍にいてくれ・・・、よお」

「うん・・・」

懇願するように言う。そう言っている飛鳥がとても小さく、まるで小さい頃の彼がそこにいるような感じがした。

「傍に・・・、傍にいさせて、くれよお・・・」

そう言う飛鳥を一旦抱きしめていた腕を解き、離れる。飛鳥はというと、惑った様子で目の前にいる楯無の事を見ている。

「——いて欲しいな・・・、あ、でも約束して欲しいこともあるな」。

「——な、なんだよ・・・。」

目が泣いたためにもともと紅玉のような瞳であるそれが、更になくなっていった。頬には涙が乾ききっていないために、まだ湿った線がいくつも残っているのが見える。

男の涙を・・・、それも異性に、更に守りたいと想っている者に見られるなど、恥以外の何物でもない。飛鳥は慌ててワイシャツの袖で拭き、顔を背ける。しかし、その顔をずっと伸びてきた楯無の手で向きを正面に向けられる。

「話を聞くときは、ちゃんと人の目を見ないと駄目だぞ♪」

「こ、子ども扱い、するなよな・・・」

「だって、アツくんは私にとって・・・、うう・・・ん??」

いつもであったなら、可愛^いい弟などといってから変えるのだが、
どうしてかそう考えると胸が痛んだ。一瞬考^ええるような仕草を向けるが、ふとある言^ワ葉^ドが頭に浮かび上がり、ボンっという音を立てたかのように顔が赤くなる。

——は、恥ずかしい／／／

自分がこんな恥ずかしいなどという感情をもったのは何時以来だろうかと、内心で戸惑っている。

——い、言えないよ／／／

目の前で百面相をする楯無を見て、思わず戸惑っていた表情から、
笑みの見える少しばかり明るくなった表情で思わず噴出してしまふ
飛鳥。

「わ、笑わないでよ」

「だ、だって・・・、おかしんだからしょうがないだろ」

飛鳥は未だ小さく笑いながら楯無に対して言う。ぽかぽかと飛鳥
の胸を叩いてくるが、全く力を入れていないことから、彼女も冗談
のつもりなのだろう。

「それに懐かしい・・・、な」

「??」

——櫛^{くしな}花が慌てるの、小さい頃のしか知らないからな。

「!!」

「あ、悪い・・・」

——楯無……、だったよな。今は……。
——。。。

バツが悪そうにして、そう謝罪する飛鳥。そう、もう彼女は櫛花ではなく楯無なのである。対暗部のための暗部、裏家系の頭首……、それが今の彼女の素顔であつた。

それでも楯無は櫛花と呼ばれたことに、嫌な顔はせず、むしろ嬉しそうであるくらいだ。

「ううん、いいよ」

かわいらしく頭を左右に振り、気にしていないことを飛鳥に伝える。

——むしろ、二人だけのときは……、そう呼んで欲しいかな。
——え???

笑みを浮かべながらそう言う。飛鳥は一瞬きょとんとした様子でそう言う楯無……、もとい櫛花のことを見る。

「あ、忘れてた」

「なんだよ、一体」

そういえばというような様子で言う櫛花に飛鳥は尋ねる。

「約束……、言い忘れてたね」

「な、なんだよ……」

約束……。つい先ほども、本音と簪の二人ともしたばかりだ。

“死いなくならないでなないで”

それは飛鳥が守るためなら自らをいくらでも傷つけるだろうということを憂いてした約束であった。自分の前に二人に会っているのなら、そうするだろうというのは予想できた。今は少し距離ができている姉妹であるが、植無と簪考えるとところは似ているところもある。

櫛花は少し考えた。自分が仕様と思っている約束は、もう二人と取り付けているだろうと。同じことを約束しても、それはいいのであるが、それでは面白くない。

どこまでも面白さを追及する、そんな彼女の素の部分が見え隠れしていた。そして、何かを思いついたように、悪戯っ子がするような笑みを浮かべる。

飛鳥はそんな彼女の様子を見て、また何か企んでいるのだろうと、苦笑いを浮かべてみていた。

そんな風にして、彼女の事を見ていると、ゆっくりと顔を近づけてきた。一体何をしようというのだと思っていた飛鳥であるが、このときはどうしたわけか金縛りにあったように動くことができなかった。

動くという選択肢をもっていなかった・・・、と言えがいいのだろうか。抵抗もせず、ただそれを受け入れる。

——約束してね・・・。

——な、何をだよ。

——フッフ、分かってるくせに。

全てが麻痺したかのように何も思考できない。ただ目の前にある
榴花の瞳に目を奪われていた。そして、淡い桜色をした唇が動く。

“私たちの傍からいなくならないで”

それは数分前に二人とした約束と同じものであった。おそらくそ
うだろうとは思っていた飛鳥であるが、次の行動には全く予想も立
てることができなかった。

——これは契約の証よ。

「!」

そう小さく呟くと、近かった彼女の顔がより近づいた感じがした。
そして、次の瞬間、飛鳥は思わず目を見開かざるを得なかった。

柔らかな感触が飛鳥の唇に感じられた。それが彼女のものである
と言うのを理解するのに数秒は有したのは仕方のないこと。

照明が照らし出す部屋の中で、二人の事を見ていたのは、飛鳥と
榴花のMSとISだけであった・・・。

FIN（終わり）

PHASE 2 1 エピローグ? (後書き)

ED2↓REASON>玉置成実<

第二章完結!!

ここまで読んでくださった皆様に最大限の感謝を。

ありがとうございます!!

まだまだ続くインフィニット・ストラトスゝ怒れる瞳ゝであります
が、どうか第三章以降もお付き合いいただければ幸いです。

ご感想などがあればよろしく願います。

次回予告

インフィニット・ストラトスゝ怒れる瞳ゝ 第三章 惑える二人

ご期待に沿えるように頑張ります!!

PHASE 21・5 キャラ&機体設定？

名前 紅月飛鳥

年齢 15歳

容姿 髪は赤茶色で瞳は赤色。髪型は寝癖型で、顔立ちは上の中。

性格 一見して雰囲気的に冷たそうで怒りを露にすると怖い印象があるが、人を見下すようなものに対して陰悪している。

身長 170センチ

体重 60キロ

使用機体（MS） ヴェステイージュ↓インパルス

家族関係 父・母・紅月飛鳥・妹・紅月朱雀

趣味 読書

学歴 一般小学校↓軍事学校↓IS学園

友人関係 更識姉妹、布仏姉妹とは親友で幼馴染

使用武器 小型ナイフ、ハンドガン

備考 現在IS学園に通っている少年。一夏のようにISは使用できないが、それに代わるMSモビルスーツを持っている。世間一般では死者0と

言われていた白騎士事件における数少ない生存者。白騎士事件において家族を奪った篠ノ之束と白騎士のことを恨んでいる。クラス対抗戦にて一時は生死不明になったが新たな力^{インパルス}を得て復活した。言葉より手が先に出る性格であるため、現在学園内では好意的に見られるのと、少し怖がられているのが半々という状態。

名前 インパルス

由来 理不尽な運命を覆す衝撃。

機体イメージ ガンダムSEED・DESTINYのインパルス。

配色 基本は青、赤、白のトリコロール。シルエットによって変化する。フォース^{青・赤・白}↓トリコロール、ソード↓赤と白のツートン、ブラスト↓暗緑と白のツートン、???↓???と白のツートン。

世代部類 第3世代

動力源 電力

待機状態 紅いブレスレット

武装 ・C I W S×2

・フォールディングレイザー対装甲ナイフ×2

・高エネルギービームライフル×1

・ワイヤーブレード×1

換装シルエット

・フォースシルエット*白式との戦闘データからヴェステイージ自身が生み出した換装シルエット。インパルスにも継承されている。

高機動を生かした中近距離の戦闘を得意とする。

・ブラストシルエット＊ブルーティアーズとの戦闘データからヴェステイージが生み出した換装シルエット。インパルスにも継承されている。機動性は若干劣るが、圧倒的な火力が持ち味。中遠距離での戦闘を得意とする。

・ソードシルエット＊甲龍との戦闘データから飛鳥とインパルスが生み出した新しいシルエット。二本の巨大なレーザー対艦刀を装備し、近接戦闘に特化している。

・??? シルエット＊データ上は全てがUN^{未確認}KOWNとされている。

備考 クラス対抗戦時に未確認機のビームを受け、大破したヴェステイージの後継機。ヴェステイージのシルエット換装システムを継承し、性能が向上しており、ISの第三世代と同等の性能を持つ。またデュートリオンビームによってエネルギーを回復することも可能。ISのコアのように自立進化の兆しがある。

新OP&新ED

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳＜
ED3↓RIVER＞石井竜也＜

予告 第三章 惑える二人

怒れる瞳を持つ少年に安寧の時間は訪れない。

突然現れる二人の転校生。

「初めまして、シャルル・デュノアです」

フランスからの転校生・・・、その人物の性別は『男』だった。

その胸に抱くのは一つの野望と大きすぎる不安……。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

ドイツからの転校生……、その瞳に映るは、ただ憧れの人物とその栄光を潰した憎き少年の姿。

「やめろおおお！」

傷つけられる仲間を守るため、剣を抜く少年。

「あんたはいつもそうだ！」

傍観者へと牙を向ける、怒れる瞳を持つ少年。

「そこまでだ！」

「え？」

野望を打ち砕く衝撃。インパルス そんな少年少女に向けられるは冷たい銃口。

「あんたは何のために力を求めるんだよ！」

「力こそ、私の存在意義！」

想い 存在意義
力と力がぶつかり合う。

Damage Level D.
Mind Condition Uplift.

Certification Clear.
《Valkyrie Trace System》
boot.

力に飲まれる少女。怒れる瞳に映るは騎士の姿。^{レイブン}

「そうやって . . . 、機械のように生きるのかよ、あんたは!」

「そんな悲しい生き方 . . . 、認めない!」

ボロボロの二人の手に握られるは一本の剣。^{エクスカリバー} 浄化の光剣が黒き影^{レイヴン}を切り裂く。

「な、なんだ!? どこから!?!」

。 突如として現れる三機の全身装甲のIS . . . 、否、あれは . . .
^{インフィニット・ストラトス}

「そ、そんな . . . 、どうしてMS^{モビルスーツ}がそこにあるんだよ!」

再び学園を守るシールバリアーを打ち破って現れたのは三機のMSであった。

「目的以外は殺してもいいんだろ?」

黒い一機は赤い縁取りのある翼、猛禽のような鉤爪^{クロー}、二門の砲を持つシールド、更に頭部にも砲門を持っているそれは、まるで人面鳥^{ハービー}のような姿をしたもの。

「とりあえず、そう言うこと」

カーキ色を基調にした一機は、背負っている甲羅のようなリフト
ーにシールドを装備し、長い砲身を二門持つだけでなく、その機体
の恐ろしさを増幅させるのは、鋼鉄をも切り裂くような、死神の持
つそれを思わせる湾曲した巨大な鎌であった。

「うっせーよ、お前ら。さっさと仕事^{殺し}するぞ」

毒々しさを見せ付けるような青緑とオレンジ色のツートン一機は
右手と左手には、それぞれ小ささまざまなビーム砲を握っている。
更には巨大な二門の砲を肩から背負っているのが見える。

「殴りたいのは山々だけど、やらせるかよ！」

光剣を手にした白い騎士^{一夏と白式}が立つ。

「準備オッケーだよ！」

「本音！！ソードシルエツト！」

聖剣を手にした^{飛鳥とインパルス}衝撃の戦士が立つ。

「これ以上・・・」

「好き勝手には・・・」

突如として現れた新たな敵に立ち向かう。

「「させるかよ！」」

PHASE 21・5 キャラ&機体設定? (後書き)

ご感想などお待ちしております。

次回予告

謎

突如として現れた無人のIS入ったい何者が??

その唯一の答えを持つもの

なら彼女は一体何のためにそんなことを??

分からぬそのものの考え^{野望}

彼女の問いに答えるものは……、いない

次回 インフィニット・ストラトスへ怒れる瞳へ
プロローグ? PHASE 22

その野望、幾多の運命^{イケニエ}を所望するか……。

PHASE 22 プロローグ? (前書き)

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳＜

第三章『惑える二人』投稿開始です。

感想などがありましたらよろしくお願いします。

PHASE 22 プロローグ？

クラス代表戦において、優勝者がいないという異例の事態になってしまった。そのさなか、突如として現れた未確認機。

圧倒的な火力のビーム砲でアリーナのほうを壊滅状態にさせてしまった。更にその事態において、あわや死者が出るというところまでになってしまった。

今一度、教師と生徒会の間での緊急時の対応を協議しないといけないのかもしれないと思っていた。

ここはIS学園の地下50メートルの所にある、レベル4権限を持つ関係者のみが入ることを許可されている、一般には隠されている空間である。これだけでも、十分IS学園の異質性が際立つ。

ここには対抗戦に乱入してきた機能を既に停止させている未確認機のISが運び込まれ、解析がなされていたのだ。

とはいえ無事であったのはたったの二機であり、その中の一機は内部が完全にイカレてしまい、解析できるのは残りの一機だけというものであった。

「……」

その室内は薄暗く、いくつもの展開されているディスプレイの光で照らされた織斑千冬の顔は普段と違い、何か思いつめているようなものであった。

『織斑先生?』

突然、一つの展開されていたディスプレイに割り込むようにして現れたのは、一組の副担任をしている山田真耶の姿であった。彼女もまた、いつものおどおどした様子は皆無であり、そこには気を緩めないというような緊張感を漂わせた様子が見えた。

「あ、ああ。それで山田くん。何か分かったのか?」

千冬からそう言われ、いつになく厳しい表情をしている真耶は口を開く。

「はい、運び込まれたあのISの解析結果が出ましたよ」

「それで……、どうだった??」

「はい。やはり無人機でした」

真耶からそう言われ、千冬は小さく息を吐く。そのときの彼女の表情は、まるで真耶が告げた結果が最初から分かっていたというようなものであった。

世界中で開発が進められているISの技術……。その中でも注目の一つであり、いまだ完成していない技術……。それが遠隔操作と独立稼動である。しかし、その未完成の技術のどちらかが、あるいはどちらも今回の件に関わっているのかもしれない。

その事実というのは、当然のようにすぐさま学園関係者全員に緘口令が引かれ、闇の中に葬られたのだ。

「その未確認機がどのような方法で動いていたのかは不明です。紅

月くんの攻撃で機械中枢が焼き切れてしまっていて……、修復は無理かと」

打ち出された結果を読み上げる真耶の言葉を黙って聞き取った千冬は、次にISの中枢にあるものであるコアについてのことを聞く。それに対して、真耶は衝撃の事実を伝える。

「ええっと……、それが、あの未確認機に使用されていたのは……登録されていないコアでした」

「そうか」

そう呟く千冬であるが、まるで確信をしていたような様子を見せている。それに気づいた真耶は何か心当たりがあるのだろうかと思いい、尋ねてみる。

「あ、あの、織斑先生？ 今回のことで、何か心当たりでも……」

「——あるのですか？」

そう聞かれて、千冬は自分の顔にそう悟られるようなものが出たのだらうと、気が緩んでいるなど自らを戒め、閉じられていた瞳を開ける、

「いや……」

「——今はまだ。」

「——そ、そうですか。」

そう言っつて千冬はディスプレイに移される映像に視線を戻す。真耶も残りの作業に戻るということでモニターから消える。一人視線を向けている千冬であるが、その心境はかなり複雑なものであった。

そう……、今はまだ。ため息をつき、彼女の目の向こうに見えるのは、親友であり、ISを生み出した張本人の後姿。

——まさかお前なのか……、束——

千冬の問いに答えるものは……、いなかった。

PHASE 22 プロローグ? (後書き)

ED3↓RIVER>石井竜也<

次回予告

あれから一週間以上が経った

生徒たちの中には、あの出来事で心を痛めるものもいた

そんな中でも運命の悪戯は待ってはくれない

飛鳥に訪れるさまざまな出来事

それは穏やかなようで慌しいもの

だが、それはまるで嵐の前のよう……

次回 インフィニット・ストラトスへ怒れる瞳へ
嵐の前
PHASE 23

その瞳に映るものは何ものか……

PHASE 23 嵐の前 (前書き)

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳＜

第三章惑える二人本編開始です。

いつもたくさんのご感想と閲覧どうもありがとうございます。

ようやくここまで来たわけですが、読者様方に楽しんでいただけるものになるように頑張りたいと思います。

それではスタートです。

PHASE 23 嵐の前

「ということで、アツくんの生徒会副会長就任がここに満場一致で可決されました」

「異議はありません」

「さんせ」

「おい、ちょっと待てよ……」

ここは生徒会室。入り口から正面にある大きな机と椅子があるところが会長席であり、そこに座る現IS学園会長である更識楯無がそう声高らかに宣言する。

同じく生徒会会計の役職についている布仏虚と生徒会書記の役職についている布仏本音がそれぞれ楯無の決定に賛成の意を表していた。

そんな彼女たちに対して、楯無の机の右隣にある席についていた新しく生徒会副会長に任命されていた紅月飛鳥が米神を引くつかせて言う。

こうなったのはつい昨日のことだ。あの後飛鳥が理性を総動員して獣になる本能を押さえ込んだ後、今回の件を含め今後のことを話し合うことにしたのだ。

『俺にも何か、できないか?』

ただ指を咥えて何かが起きるまで待っているというのも歯がゆいというものだ。最も何も起きないことに越したことはないのであるが……。

ベッドに二人して座り、隣にいる楯無……、櫛花に尋ねる飛鳥。そこには想いと決意の色が紅玉の輝きとなって見て取れた。

——そうね……。――

少し考えるような仕草を見せる櫛花を見て、先ほどのこともあつてか飛鳥は思わず可愛いと思ってしまった。

それが行動に現れていたのか、じつと彼女の横顔を見ていた。飛鳥の視線に気づいた櫛花がニツと笑い、飛鳥はしまったという表情になる。

彼女のこういう笑みを浮かべたときは、何かを思いついたときや面白いものを発見したときのものであることを、小さい頃からいる飛鳥は分かっていた。

——いい案があるわ。

——な、何なんだよ、その……、いい案っていうのは。

あまり聞きたくないようで、気になってしまうのは仕方のないことだろうか。楽しそうに言う彼女を見ていて、邪険には扱えまいと思う飛鳥。素っ気無くではあるが、耳を傾ける。

『私が生徒会長をしているのは知ってるわね？』

『当然。それに、嫌でも悪行が耳に入るよ』

『な！？あ、悪行って何よ！』

学園における彼女の人気は高く、容赦なく他者を振り回しつつ飄々とした言動で周囲の人間を自分のペースに引き込んでいく。いろ

んな意味で他者との交流があるのだ、それが時たま会話に聞こえてくるために、気にしていなくてもそういうが耳に残っているのだ。

戸惑いながら彼女の常備している扇子には驚愕という文字が書かれていた。どこから出したんだなどと聞くことはしなかった。

『で？？何でそれを引き出しに？』

——まさか……。

——フッフ、賢い子はおねーさん大好きだよ。

飛鳥が目細めて言うことに對して、ニンマリとした笑みを隠すように扇子が口元を隠し、正解という文字がそこにデカデカと書かれていた。

ということもあり、飛鳥が朝早くから生徒会室に呼ばれ、専用の机などを提供され、座って副会長の着任を認められているわけであるのだが……。

「朝いきなり生徒会室に來いって言われたけど、いきなり副会長って……」

「ええ？アツくんは会長の私を補佐（守って）してくれないの？」

「っぐ！」

「おねーさん寂しいな」

そう言われると、飛鳥は断るという選択権がなくなる。あからさまに嘘泣きだとわかるしぐさをしている楯無であるが、ちらちらとこちらに視線を向けてきている。

——くそ……、そう言われると、断るなんてできないじゃないかよ！

「でも、アーちゃんがいると百人力だね。私もいてくれると嬉しいなあ」

「駄目よ本音。自分の仕事はちゃんとやりなさい。もちろん会長もです」

「「ええ」」

「そういつでも駄目です」

「俺に何をさせようと……」

本音が何か楯無と同じことを考えていたのかそう言うものの、姉である虚に釘を楯無ともども刺され、文句を言うようにして唸っている。

何を二人は考えていたのか……、そうため息をつきながら思う飛鳥。大方溜まっている仕事を廻そうとも思っていたのだろう。いつもどこかに出張っている楯無と、のほほんと雰囲気も行動もゆっくりにある本音。そう考えると、虚と比べてはかどるスピードは自然と違ってくる。

「まあ、とりあえず……」

立ち上がり、扇子を開いた楯無。その扇子には新生という文字が書かれており、新しく飛鳥を含めた生徒会の発足ということだった。

「放課後またここに集合してね、アックン」

——生徒会のこと、色々教えてあげるから。

にっこりと笑みを浮かべ、そう言う楯無に對して。

「分かったよ」

疲れたように苦笑いを浮かべ、そう返す。始業の時間が迫っていたために、一旦解散となった。それぞれの教室へと向かう途中、生徒会長権限で授業を放棄しようとしていた楯無は、すぐさま虚に捕まり引きずられて二年の教室へと向かって行ったのは目が疲れているためではないだろう・・・。

「やっぱりハヅキ社製のがいいなあ」

「そうかな。ハヅキのって、なんだかデザイン重視って感じしない？」

「だとしてもさ、やっぱりデザインがいいの！」

「私はやっぱり性能的に見て……、ミューレイのがいいと思うな。特にこれ。スムーズモデル」

「あー、あれね。でも、あれってモノはいいけど、ちょっと高くないかな？」

飛鳥と本音が一組の教室へと向かい、中に入ると廊下側の席に座っている生徒たちが色々なメーカーのカタログを開き、あれこれと意見交換を質得るのが聞こえた。

鞆を肩から提げて、二人でクラスに登校したために、何か誤解でも与えたのだろうか、そこにいた女子生徒たちが飛鳥たちに視線を向けてきた。

「あ、紅月くんにはほんさん」

「おはよ」

「おう」

そこにいた生徒たちにあいさつをして、席に向かおうとしていた二人であるが、カタログを開いていた生徒が尋ねてきた。

「そういえば紅月くんのISスーツって言えばいいのかな？あれって、どこのやつなの？見たことないんだけどさ」

確かにという声が口々に聞こえてきた。確かに女子生徒たちのはかなり露出の多いものであるが、飛鳥や一夏と例外の二人はほぼ全身を覆っている露出のないものである。流石に女子と同じものはご免蒙りたい。

ISスーツというのは肌表面の微弱な電位差を感知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、そして、ISはそこで必要な動きを行う。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることが出来る。もちろん、その衝撃は消えることはないのだが。

そして、当の飛鳥は一夏や彼女たちが着ているISスーツというものとは違い、パイロットスーツのようなものに近いものであった。これは亡き父の残していたデータに残っていたものを、更識家で再現したものであり、カラーリングは飛鳥の色にあっているということで赤になった。

「ああ。あれは俺の父さんが残してたデータを再現したものだよ。どっちかというと、パイロットスーツに近いんじゃないか？」

そう言うとな、なるほどと呟いているのが聞こえて来た。すると、ちらりとそんなISスーツについて話している生徒たちの後ろに、数人の女子生徒がこちらにちらちらと視線を向けていた。

先ほどから、離している間にもその視線が向けられていたが、全く何も言っていないのに飛鳥は少々苛立っていた。

「ほ、ほら来たよ」

「う、うん……」

「何してるのよ、早く行ったほうがいいってば」

「そ、そうだけど……」

何やら飛鳥に言いたいことなどがあるらしい。言いたいことがあるなら早く行ってほしいと、おどおどしている女子生徒に対して睨みつけるような視線を向ける。その視線があったのか、女子生徒は思わず目を逸らしていた。

「アーちゃん駄目だよ、それだと怖がられるのかもしれないと思うよ」

「え、だって」

もうちょっと待ってあげてもいいんじゃないかと言われ、ムツとした表情は変わらずだが、その生徒が来るのを黙って待つ。ようやく決心が付いたのか、数人の友達を連れてきた。

少し怯えた感じがするのは飛鳥が少しむすつとした表情をしているからか、それとも人見知りなのか。

「ちょっと、紅月くんいいかな……?」

「なんだよ」

その何かを言おうとしていた女子についてきた一人が尋ねる様にし
て言ってきた。

「ほら!」

「あう……」

背中を押された一人が前に一步出る。飛鳥よりも頭一つ小さい、ショートカットの髪型をした女子生徒だった。あまり話をしたことのない生徒であるために、飛鳥も名前は分からない。

「あ、あの！」

「な、なんだよ」

突然目の前で大きな声を出されたために驚く。彼女にしては、決心してのことだったために、もはや勢いのまま口を動かす。

「この前は……、クラス対抗戦では助けてくれてありがとう！」

「は、え？」

いきなりそう言われ、戸惑いを隠せない。彼女の言い方からして、クラス対抗戦で助ける……、つまりはあの観客席にいたということだ。

「あ、いや、べつに……」

照れているのか、顔を背け、寝癖頭の髪をかき上げる。

「アーちゃん照れてる」

「かわいい」

「今よ、シャッターチャンス」

「貴重な、紅月くんの照れモードよ」

「な、何だよお前ら」

IS学園において、飛鳥はいつもムスツとしたようなあまり笑顔を見せない意というのが広まっていた。別にいつも起こっているわけではないのだが、彼の雰囲気というものがそう捉えさせているのか

もしれない。

そう言うのもあってか、飛鳥の表情の変化というのは以外に貴重なものであった。いつの間にカメラモードにしたのかと不思議に思うくらいに次々とシャッター音が聞こえた。

「おい、何撮ってるんだよ。あ、別にあの時は……、何て言うか……、無我夢中っていうのか、そんな感じだったんだ」

ぽつりぽつりと恥ずかしそうにして飛鳥も言う。はっきり言って、あの時飛鳥は本音と簪の二人を守りたいという想いで戦っていた。もちろんあの時二人がそこにいなくても、突っ込んでいただろうが。

とりあえず飛鳥が言うべきことは……。

「何て言うか……、ええっと」

頭を掻いていた動作を止め、ちらりとその女子生徒を横目で見ながら言う。

「とりあえず、無事でよかったよ」

普段は見せない、柔和な笑みを添えて。

「き……」

「き？」

「「きゃああああああ！」」

「うわあ！？な、何だよいきなり！」

教室の一角で突然歓喜の声が響き渡った。そこに居合わせていな

かった生徒が一組だけでなく他のクラスからもぞろぞろと一体何が起きたのかと見に来る。

彼女たちが叫んだのは飛鳥が笑みをつくったからに他ならない。貴重な男子の笑顔ということだけでなく、仏頂面が多い飛鳥のことを考えると、これまた貴重な瞬間だったのだ。

それが口コミで伝わると悔しがる声や、それを取った写真がほしいなどというようにこにまで発展していた。

「アーちゃん、人気者だね」

「疲れるだけだ……」

本音がのほほんとした様子で言ってくるのを聞いて、飛鳥は疲れたようにため息を漏らし、自分の席へと座る。その隣の席が本音の席であるから、彼女も持って来ていた鞆をかけて、ちょこんと擬音語が鳴るようにして座る。

「それにしても」

「ん？」

頬杖をかいて窓から外を見ていると隣の本音が独り言のように話しかけてきた。ちらりと目と耳だけを彼女のほうに向けている飛鳥。

「アーちゃんが生徒会に入ると色々楽しくなりそうだね」

色々というところで、袖が長いために手が出ていないが、大きく背伸びをして腕を半円を描くようにして強調して言った。

「そうならいいな」

「なるよ、だってアーちゃんだからね」

「なんだよそれ」

飛鳥は表情を思わず破顔させる。頬杖を解き、彼女の顔を見る。

「説得力ないぞ」

「そんなことないよ。ぶう」

怒っているのかどうか分からないが、拗ねているのはわかった。思わず可愛いと思ってしまい、無意識の内に手が伸びていた。

「ふみゅ」

ポフンというように、本音の頭に手が置かれていた。サラサラとした髪感触を楽しむかのように、頭を撫でる。眠そうな目がいつもよりも少しばかり開かれ、驚いた様子が見て取れた。それから目を糸のようにして、その撫でられる感触を楽しんでいた。

飛鳥も頭を撫でている間、まるで昔もこうしていたと何故だか懐かしみを感じていた。年齢が上がることにより、やはりお互いに異性という意識がどこかにあったのかも知れない。

とりあえず、こんなひと時もあったもいいのではないか……。二人は共にそう思うのだった。

「諸君、おはよう」

「「おはようございます」」

そして、今日も一日が始まるように、SHRが行われる。担任で

ある千冬が教壇に立ち、挨拶をすると、そろって皆が挨拶を返す。

一週間前にあれだけのことがあって、生徒の間にもいろいろあった。今はこうして、一組には全員が揃ってはいるが、他のクラスにはまだあの時の恐怖で休んでいるものも少なくはない。もちろん、今日飛鳥に話しかけた女子生徒もまた、今日までずっとカウンセリングを受けながら休んでいたのだ。

飛鳥は彼女の言葉に耳を傾けながら、頬杖を書いて、また窓から外を眺めていた。外からは暖かな太陽の光が差し込んでいた。その太陽が見える空には白い雲がゆっくりと風に流されるようにして移動している。青い空はまるで海のようにであり、つい最近まで曇りきっていた自分の胸が、今はその空と同じように晴れ渡っているのが見ていてそう感じた。

「さて、今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人、気を引き締めるように。自身のISスーツが届くまでは学校指定の物を使うので忘れないようにな。忘れた者は代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それも無い者は……、まあ下着でも構わんだろう」

それを聞いて思わず頬杖が外れてガクンと頭を垂れる。流石にそれはないだろうと思いつながらジト目を教壇に立つ千冬に向けていた。その時目に入ったもう一つの後姿。

———そういえばあいつ……、謹慎が解かれたんだったな。

飛鳥の見る先にいる長い黒髪をポニーテールにしている女子生徒……、篠ノ之箒。反省をしたから出されたのだろうか、やはり出たばかりだということで、少しばかり元気がないように見えた。

今時の女子高生がそう言うイベントに対してリアクションが薄いわけがないのだ。当然のようにクラスを揺るがさんとはかりの音量が響き渡る。全く対応策を施していなかった一夏は、耳を押さえて机に突っ伏している。

こんな時期に、今度はこのクラスに転校生とは一体このクラスはどうなっているのかと飛鳥は頭を捻る。

隣の本音を見ると、何か知っているような表情でこちらを見詰め替えて来ていた。

——何か知ってたのか？

——転校生が来るってくらいかな。

どうやら生徒会には知らされていたらしい。それなりに学校内では地位が高いためにそうなのかもしれないと思った。

——知ってたなら教えてくれたって……。

——だって、ドッキリのほうがいいでしょ？

拗ねたように言う飛鳥。本音から見れば、面白いことを教えてくれなかったことに対して剥れているような小さな少年のように見えた。

「入っていいぞ」

「失礼します」

「……」

すると向こうのほうで、廊下側のドアの近くに立っていた千冬が

廊下にいるだろう転校生たちに対して声をかけるのが聞こえた。

それに答えるように一人は返事をしたが、もう一人いるはずの生徒からは全く声が返ってこなかった。

それに対して、千冬が何も言わないことに対して一瞬疑問を覚えしたが、どうでもいいとして忘れた。

そして、その入ってきた転校生を見て、転校生の出現に、歓喜のざわめきが起きていたそれが一瞬にして止まった。当然であろう、二人の転校生の内、一人が男子だったのだから……。

PHASE 23 嵐の前 (後書き)

ED3↓RIVER>石井竜也<

ご感想お待ちしております。

次回予告〜BGM『明日への橋』〜

何かが起きそうな雰囲気が流れる

飛鳥の前に現れたのは二人の男女

一人は突然現れた世界で二人目の男のIS操縦者

仲間ができて喜ぶもの

不審に思うもの

その胸に抱く思いというのはそれぞれ異なる

現れたもう一人の転校生の少女

血色に染まったその瞳は、ナイフの如き鋭さで一人の少年を見つめる

その瞳に優しさという温もりはなく、ただ怒りと殺意によって冷たく燃える炎があるのみ

その二人が齎すのは一体何か……

次回 インフィニット・ストラトスへ怒れる瞳へ PHASE 24
金（フランスの貴公子）と銀（ドイツの軍人）

まだ見えぬ先（未来）の衝撃となれ……、インパルス！

PHASE 24 金（フランスの貴公子）と銀（ドイツの軍人）（前書き）

OP3 ↓ 僕たちの行方＞高橋瞳＜

たくさんのお覧ありがとうございます。ご感想も頂き、大変嬉しく
思います。

いよいよ新しい問題が飛鳥に降りかかります。どうなっていくのか、
少しでもお楽しみいただければ嬉しいです。

それではスタートします。

PHASE 24 金（フランスの貴公子）と銀（ドイツの軍人）

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

転校生の一人であるシャルル・デュノアはそう自己紹介をにこやかな顔で告げて、一礼する。一組のクラスメイトたちが考えていることは同じであろうと、簡単に想像できた。

「お、男……？」

クラスメイトの中で誰かが呟いたその言葉が、このクラス全員の共通の疑問を表しているのだろう。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を……」

人懐っこそうな顔、礼儀正しい立ち振る舞いと中世的な顔立ちで髪は濃い金髪。黄金色の長い髪を首の後ろで丁寧に結わえている。身体はともすれば華奢に思えるくらいスマートである。

おそらくクラスメイトたちにとって、彼の第一印象というのは正に『貴公子』といったところであろうか。

「きゃ……」

「はい？」

「「きゃ〜〜！」」

まさにソニックムーブといわんばかりの完成が、一組に沸き起こ

った。当然このようなことが起きると思っていた飛鳥は耳をふさいでいたが、それでも聞こえてくるのだから、堪ったものではない。

「男子！！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってもらいたい系の紅月さんと織斑くんとは違って、守ってあげたくなる系の！」

「良かった……、本当にこのクラスで良かった」

などと、クラスの女子たちは言葉を発している。当然、来たのは美形であるために、そういうのに弱い彼女たちのこの状態はいた仕方のないことなのだろう。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

あまりの收拾のつかないこの状況に、面倒くさそうにしてぼやく千冬。そんな態度で担任がいいのかと思うのは間違いないだろう。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからね」

真耶が收拾がつかないこの状況にどうすればいいのか戸惑いながらも、なんとかしようと声を出している。皆がそのことを忘れていくわけではないのだ。ただ彼の隣にいるもう一人の転校生があまりにも異質であるから、それが気になりつつも、敬遠していたのだ。

「……」

そこに立っているのは一人の少女だ。飛鳥の目にも、確かにそう映っている。だが、明らかに異質なのである。このクラスにただ一

人だけ違うオーラを発している。輝くような銀色の髪は腰まで長く、そして、異質性を最も大きくさせているのは、その少女の左目を覆っている眼帯であろう。

その色は医療用の白というものではなく、漆黒の闇をイメージさせるような黒色をしていた。まさに軍人が付けるような物である。元軍事学校卒業の飛鳥でさえ、流石にそれを異質以外の何物にも感じることはできないでいた。

瞳の色は飛鳥のものに近い赤色である。

しかし、紅玉のような飛鳥の瞳とは違い、禍々しいほどに血色のように見えた。怒りや悲しみといった感情が色濃くある飛鳥の瞳であつても、優しさの温もりというものはある。

だが、そこにいる少女の血のような紅い瞳には全く温もりはなく、ただ目の前の敵を射殺するような鋭利な刃物のように、鋭く、そして、冷たかった。

姿を見てみても、隣に立つシャルルという転校生に比べてやや小さく、傍から見ればかわいらしい容姿をしている。だが、彼女が軍人だというそのオーラが近寄りがたい雰囲気を作り出していた。隣に立つシャルルも少し居心地が良くなさそうに見える。

「……」

そんな居心地の悪い、重苦しい空気の中、その元凶でもある彼女は全くそのオーラを抑えもせず、フレンドリーな様子も見せない。

ただ、まるで目の前にいるクラスメイトたちをそこらに転がって

いる石か何か、よくて下等動物のように見下すようなそんな視線を向けていた。

———気に入らない……。

それが飛鳥がその銀髪の軍人少女に対して持った感想であった。隣に立つもう一人の男子……、シャルル・デュノアに対しても、あまりいい感情を持ち合わせていない。

———なんだろう、何かこう……。

しっくり来ないという変な感覚があった。もしフランスに突如として一夏同様に男で扱えるものが現れたというのなら、以前の時のように世界的に大ニュースとして発表されるはずである。

それがなかったというのはあまりにもおかし過ぎる。本音を見ても黙って前を向き、時折クラスメイト話をするなど飛鳥のほうにはあまり視線を向けない。彼女が生徒会員として何かを知っているのではないかと思ったのであるが……。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

するとなかなか自己紹介をしない銀髪の少女……、どうやらラウラと言うらしいが、彼女に対して千冬が痺れを切らしたのか、それとも早くSHRを終わらせたいのか声をかけた。

すると、ずっと無言であった彼女が突然佇まいを直し、綺麗過ぎる敬礼と共に返事を返したのだ。更に気になった言葉……。

“教官”

クラスメイトは更に沈黙をせざるを得ない。それはラウラという少女の千冬に対する行動が原因である。生徒たちに対してと千冬に対しての態度が180度違いすぎているのだ。

とはいえここで軍人としての敬礼を向けられてもこ丸というように、少々困った表情をしている千冬。だが、ラウラはその敬礼を解こうとはしていない。どこまでもまじめなのだろう。少しばかり場を考えてもいいのではないかと思うのは間違いではない。

「ここではそう呼ぶな。もう私はお前の教官ではないし、ここでは当然お前も一人の一般生徒にすぎん。それと、私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう釘をさすようにして言う千冬に対して、逆らうことはせず、ただ素直に聞いて、答える。再び背筋を伸ばし、綺麗な姿勢を見せるラウラ。飛鳥も軍事学校に通っていた頃は、そのようにしていたが、今はそこまでまじめにやろうとは思っていない。

相変わらずこちらをどうでもいいものとして見ている様な視線を向けながら、ようやく彼女も口を開く。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「「……」」

普通の少女の声でありながら、そこには軍人としての誇りのようなものを感じられた。とはいえようやく喋りだした彼女であるが、クラスの雰囲気を変えることはできず、クラスメイトたちの沈黙が

痛いように継続している。

だが、名前を告げてから等のラウラというのは、硬くまるで貝が閉じてしまったかのように口を再び閉じてしまう。

「あ、あの、以上……、ですか??」

「以上だ」

おろおろとして、恐る恐るであるが話しかけた真耶であるが、ラウラから返ってきたのはその言葉であった。話しかけた真耶は即答されたためにもはや泣きそうな顔をしている。教師の威厳はどこへやら……。

そんなまるで人形のように突っ立っているラウラであるが。飛鳥には直感的に、彼女は危険だというのを感じていた。何がどう危険なのかは分からないが、彼女が来たということで、今後の学園生活がまた厄介になりそうだというのは間違いないだろうということだ。

更に、隣に立つフランス人の一夏に続いて二人目の男の操縦者……、シャルル・デュノア。彼に対しても、勘繰るような視線を向けている。

そして、突然クラスの空気が凍りついたように冷たくなるのを飛鳥は感じ取った。目だけを横に向けると、本音もやはり裏の人間であるから気づいているようだ。あとは……、千冬だけだろうか。

何かが起こりそうだという感じがし、飛鳥は音もなく動く。すると案の定、ラウラの視線が比較的教卓の近くに在一夏に向けられる。絶対零度の視線でありながら、彼女の瞳にあるのは怒りのような炎。

「貴様が……！」

足早にラウラが一夏の机の前に近づく。クラスメイトを初め、一夏はなんだろうかとぼかんとした様子で彼女を見ている。

そして、突然振り上げられたかと思われた右手の平手打ちが一夏に向かって吸い込まれるようにして叩きこま……、れなかった。

ラウラは自分が振り下ろそうと思っていた右手が誰かにつかまれているのを感じ、慌ててそれを振りほどきつつ、振り向く。

「貴様が！何故邪魔をする！」

そう言われた飛鳥は何を言っているんだこいつというように、呆れた視線をラウラに向けていた。誰が好き好んで人が叩かれるのを黙って見ているだろうか。ラウラの言う言葉ははっきり言って意味が分からない。

「はぁ？何言ってるんだよ、あんた」

——クラスメイトが叩かれるのを黙って見ていられるわけないだろ。代表としては。

「それともなんだ。ドイツの挨拶って言うのは殴ることから始まるのかよ？」

ラウラに対して、負けじと睨み返す飛鳥。クラスの仲で一触即発のムードが生まれ始めていた。そういわれ、むっとしたラウラは邪魔されたこともあってか、今度は飛鳥に向かって殴りかかってきた。

「貴様！」

——邪魔をするな！

「ふざけるなよ！」

——意味分らないことをするなよな！

それが頬を掠り、チリつとした痛みが走る。だが、飛鳥も負けじと避けたところからその腕を掴むと教卓めがけてラウラを一本背負いの要領で投げる。巨大スクリーン型の黒板にくるりと身軽に体勢を立て直したラウラはそれを足場に再び飛鳥に向かって攻撃を仕掛ける。

「貴様も軍人か！」

「軍事学校出だよ！」

——これらの男よりだったら喧嘩はできる！

——ほざけ！

回し蹴りが放たれ、それを腕でがっちりガードする。すると両足で腕を挟まれると、体の回転を利用され、床にたたきつけられる。鈍痛が身体を走るが、力が緩んだところをとっさに立ち上がり、構えていたラウラにシヨルダータックルをくらわせる。

「おのれ！」

「こいつ！」

勢い余って二人で床に倒れる。ラウラは反撃するタイミングを失っていたために、飛鳥にマウントポジションを取られる。このとき飛鳥は左手に何か小ぶりで柔らかい感触を感じていたが、全く気にする様子はなかった。若干ラウラの頬に朱が差しているのが見える。

飛鳥が動けないだろうラウラに向かって拳を振り下ろす。だが、その瞬間に、ばたつかせていたラウラの脚が飛鳥の背中を思いつき

り蹴り飛ばした。そのまま一回転して教卓に背中をぶつける。

「この……」

背中が痛むが、立ち上がり拳を構える。ラウラも負けじと戦闘態勢を崩していない。だが、そこで第三者の介入が入る。

「お前たち、いい加減にしないか」

「教官！」

「また、あんたか……」

慌てて構えを説くラウラと、睨みつけるようにして千冬を見る飛鳥。最初に喧嘩の種を撒いたのは自分だとは自覚しているが、もっと早く止められたのではないかと、傍観していた彼女に対してまた不信感が募る。

——こいつはいつもそうだ……。

いつも我関せずと、生徒同士の問題は自分たちで解決しろというようにしているが、不意に突然割って来ることがほとんどだ。最初からそうしろよと、飛鳥は内心思っていた。

「行き過ぎた挨拶はそれでいいだろう。二人とも席に座れ」

「はい」

「はいはい……」

ラウラは先ほどとは打って変わって素直に返事をし、飛鳥は面倒くさそうにして自分の席へと戻っていく。

「ではHRが終わるが、各人は速やかに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。それでは解散！」

そう千冬が締め、HRは終了した。飛鳥は着替えるために椅子から立ち上がる。すると隣の席に座っている本音からの意味ありげな視線を受け、なんだよと尋ねる。

「……胸掴んだよね。アーちゃん」

「い……!？」

本音に指摘されて、幾分か落ち着きを取り戻していた飛鳥は先ほどの小ぶりで柔らかな感触が残る手に視線を落とし、愕然とする。

これでは自分が一方的な悪者ではないか。飛鳥は鈍器で殴られたような痛みを頭に感じていた。そんな飛鳥に対して、本音は冷やかな視線を向けてから、からかうような口調で言う。

「このゝ、ラッキースケベ」

「ち、ちがつ！」

慌てて飛鳥は真っ赤になりながらも弁解しようと本音に詰め寄ろうとしたが、本音は友達と共にキヤーと声をあげながら足早に更衣室の方へと向かうべく教室を出て行った。

「ちょ、ちょっと待て、本音！」

詰め寄ろうとしたときに机にぶつかり、横にかけていた昼食が入った袋が落ち、中身が散らばってしまった。慌ててそれを片付けると、飛鳥は幼馴染（本音）の後を追う。

他の生徒たち……、最も警戒しなければいけない楯無に話されたとなればどんな弄りを受けるか分かったものではない。一瞬ではあったが、まだ残っている感触。もう少しボリュームがなどと不埒な方向に考えが向きかけたところで憤然と頭を振った。

「ち、違う！ あれは事故だ、事件だ、不可抗力だ！」

そう騒ぎながら追いかける飛鳥。自ら何かをやらかしたことを広めているなどと、そのときの彼には分からなかった。

飛鳥が一夏たちに合流してから、現在3人は廊下を歩き、更衣室へと向かっていった。三人というのは、今までは飛鳥と一夏だけだったところに、フランス人転校生、シャルル・デュノアがいるからである。

今まで男の数が少なかったために肩身の狭い思いをしていた一夏にとっては嬉しいらしい。更に自分だけだと思っていた男の操縦者が新しく見つかったということもだ。

途中女子生徒たちにたかられそうになったが、それを振り切って何とか更衣室へと入ることができた。

「ねえ、どうして僕たちだけ第二アリーナの更衣室を使うの？」

シャルルが飛鳥たちにそう尋ねる。とはいえ彼の尋ねたことは答えるまでもないことである。飛鳥が呆れたような視線を向けながら口を開く。

「何言ってるんだよ。もしかしてお前……、女子と一緒に着替えたい

っていうのか？」

「え！？ち、違うよ！！えっと……、何て言うか、さ」

飛鳥の言うことにシャルルは慌てたように否定する。いくら美少年であっても、流石に女子が使用している更衣室に乱入したのなら犯罪になるだろう。とはいえあのテンションの彼女たちであればそれを許しそうであるから怖い。

「言い方ちよつときついんじゃないか、飛鳥。転校生で分からないことだらけなんだから、もう少し優しくしたほうがいいぜ」

「ああ、もう。簡単に言えば、ここは普通の女子高、俺達みたいな男ははっきり言って場違いなんだ。だから、実習の度に空いてるアリーナの更衣室で着替えるんだよ」

一夏が諫めるようにして言う。そう言われ、飛鳥は頭を面倒くさそうにかきながら言った。

とりあえず三人は着替え始める。三人だけが使っているとはいえ、大きすぎる更衣室である。たった三人の男子のためにわざわざ専用の更衣室を作るだなんてことはするまい。そんなことをしたら税金の無駄遣いである。

そんなものに金をつぎ込むよりだったら、より効率よく男の操縦者のデータ取りをできるようにするだろう。当然MSも注目されている。実体の攻撃を受け付けない装甲、そして、開発が遅れているビーム兵器をいち早く取り入れていたのがそれであるからだ。

———それにしても……。

先ほどからこちらにちらちらと視線を向けているシャルル。落ち

着きがないのはこれが転校初日だからであろうか。とはいえあまりいい気分ではない。シャルルの視線に気付いた一夏が口を開いた。

「どうしたんだよ、シャルル」

「え??? な、何のことかな」

一夏に突然声をかけられ、驚くシャルル。とはいえどこにそんな要素があるのだろうか。

「トイレか？」

「と、と、と、トイ……っ違うよ!」

顔を真っ赤にさせながら叫び声に近い声量でいう。密室なのだから響く……、耳が痛い。

——なんだ、こいつ……。さっきから落ち着きがないし、いちいちオーバリアクションするし。

飛鳥はどこかシャルルは男らしくない(……)と感じていた。

「時間が無いからさっさと着替えようぜ」

「ああ、そうだな」

飛鳥がそう言うで一夏もそれに同意し、止まっていた手を動かし始める。脱いだ制服などをハンガーにかけて、ロッカーにかける。シャツなどを脱ぎ、ほとんど裸に近い状態になる。すると後ろからすっとなきょんな叫び声が聞こえてきた。

「わぁ!？」

——またか……。

シャルルが突然声を上げたのだ。一体声を上げる要素がどこにあるんだと、いい加減飛鳥はいらいらしていた。

「何だよ一体」

「ご、ごめん。なんでもないから……」

最後のほうは小さくて良く聞き取れない。

「そう言うなよ飛鳥。どうしたシャルル、荷物でも忘れたのか？つてなんで着替えてないんだ？」

一夏がそう言うのを聞いて後ろを見ると、そこにはまだ制服姿のシャルルがいた。いくらなんでも遅すぎるのではと思った。

「時間がないんだ・・・のんびりしていると遅れるぞ」

「あ、うん。き、着替えるよ？？でも、その、あっち向いてて……、ね？」

それを聞いて思わず首を捻ってしまう。とりあえず、飛鳥に男の体を鑑賞するという変な趣味はないのであるが。一夏のほうは知らない。

——あつたら、今後の付き合いを考えないとな。

対抗戦以降、あまり話していない二人。衝突はあったが、一夏にとって、飛鳥の過去にそんなことがあったことを知らない。それが今回箒に大きく関わることであったのだから飛鳥が怒るのは仕方のないことなのかもしれないと思っていた。

あの時はカッとなって殴りかかってしまったが、今冷静に考えれば、自分がやっていたのは箒にとっても何も意味のないことだったことが分かる。ただ悪戯に飛鳥の心の傷を広げていただけなのだから。

謝りたいし、仲直りもしたい。今現在は三人であるが男同士として、これ以上すぎすした関係は嫌だったのだ。しかし、きっかけがなかった。つい先ほども言葉少なげに会話をしたが、どうしてもまだお互いに壁を感じていた。

「俺だってそんな趣味はないぞ！　っていうか……」

——いつまで俺たちの方を見てるんだ？　シャルルは。

「そ、そんなことないよ！　み、見ていない！　うん、別に見てないよ！」

大げさに手を振って否定を表しているシャルル。流石に一夏も大げさじゃないかと苦笑いを浮かべて言う。恥ずかしそうにして唸っているシャルル。まるで男というよりも女である。

確かにそう言う仕草をする男性もいるかもしれないが、シャルルの場合はあまりにも女らしいのだ。どこかピースが会わない飛鳥は違和感を感じざる得ないでいた。

とりあえず赤を基調とした慣れ親しんだ防護スーツに着替える飛鳥。胸元から首にかけてジッパを上げて着替え終わる。

「行こうぜって、何だ、まだ着替え終わらないのかよ」

「え、ちよっと速すぎないか！？」

「いい加減それ隠せよ。まさか……、お前。そんな趣味……」

「ないから！さっきも言っただろ！」

若干引くようにして飛鳥が言うのに対して、一夏は否定するように騒いでいる。そんな一夏を無視して、今度はシャルルに視線を向ける。

「着替え終わったのか？」

「え！？あ、うん」

「って聞いているのかよ！っていうかシャルルも着替えるの速いな。何かコツがあるのか？」

「い、いや、別にコツって言うのは……」

「そんなことより、時間ないぞ」

そう言っで時計を顎で示すと既に開始時間に迫っていたのだ。飛鳥は既に着替えを終えているシャルルを連れて更衣室を出ようとする。後ろから一夏が慌てて着替えながら待ってくれと言っているのが聞こえているが、待っていてはこちらも遅刻してしまう。流石に遅刻だけはしたくない。

「い、いいのかな？」

シャルルが遠慮がちに聞いてくる。

「一夏がさっきから叫んでるんだけど……」

「いいんだよ。どうせすぐに追いつくから」

「そう言うものなのかな……？」

苦笑いを見せるシャルル。やはり仕草に違和感がある。どこか仕込まれたような、そんな感じがするのだ。

何とか時間ギリギリ間に合うというところで、グランドの半ばあたりを歩いていると後ろから息を切らせた一夏が待機状態の白式を持って走って来た。

「ちょっと待ってくれよ」

——少しぐらい待っててもいいだろ。

一夏が恨めしそうに言うのに対して、シャルルは若干罪悪感を覚えていた様子であった。

「ご、ごめんね一夏」

「あ、いや……、そ、それよりもシャルルのスーツ着やすそうだな。どこのなんだ?？」

何故か言葉に詰まった一夏。確かに一見美少年にも美少女にも見えるシャルルであるが、流石に男にそう言われてどもるといのはどうかと。言葉に詰まった一夏は大幅に話を逸らすことで、回避することにしたようだ。

「デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはフランクスだけど、ほとんどがフルオーダー品」

「ディノア?もしかしてお前……」

「うん。僕の家だよ。父がね、社長をしているんだ。一応フランスで一番大きいIS関係の企業だと思う」

なるほどと呟く飛鳥の視線の先には専用機があった。オレンジ色のネックレスが首からかけられているのが見える。ディノア社の社長の息子……、世界において二人目の男の操縦者……、そしてフランスの代表候補生……。

——ん……？

何かがおかしい……。そう飛鳥が頭に引っかかるものを感じた。

「じゃあシャルルって社長の息子なのか。道理でなあ」

「うん？道理でって？」

——どういう意味かな？

一夏が感心したようにシャルルに言うのに対して、どういう意味だと聞き返す。

「いや、なんつうか気品っていうかいいところの育ちって感じがするじゃん」

「はは……、いいところ……、ね……」

そう言う一夏の言葉を聞いて、嬉しそうな笑みではなく、どちらかというと悲しみのこもった、乾いた笑みを浮かべて、シャルルは虚空へと視線を向ける。おそらくあまりそれについてはいい思い出がないのか、何か特別な事情というものがあるのか、それには触れて欲しくないというような、複雑な表情を見せていた。

PHASE 24 金（フランスの貴公子）と銀（ドイツの軍人）（後書き）

ED3↓RIVER＞石井竜也＜

ご感想お待ちしております。

次回予告～BGM『明日への橋』～

突然始まるは模擬戦

立ちほだからは嘗ての実力者

疾風と共に現れる

その前に立つは赤き瞳の少年

衝撃と共にその戦士は姿を見せる

次回 インフィニット・ストラトス～怒れる瞳～ PHASE 25
衝撃VS疾風

その風に衝撃は通じるのか……、インパルス！

PHASE 25 衝撃VS疾風（前書き）

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳＜

久々の戦闘描写。イメージを浮かべながら執筆しました。

やはり背景、心情、動きなどを文字にするのは難しいです。

御期待に添えるか分かりませんが、どうぞお楽しみください。

それでは本編スタートです。

PHASE 25 衝撃VS疾風

話し込みながら歩いていると、いつの間にか集合場所である第二グラウンドへと着いていた。そこには既に集まっていた女子生徒たちや教師の姿があった。どうやら番号順などに整列するようだ。

ジャージ姿の千冬に並ぶように指示され、それぞれの場所に移動する。一組が前で、その後ろに二組という整列らしい。

そして授業開始を告げるチャイムが鳴り響く。前に立つは千冬とおそらく二組の担任教師なのだろう。もちろん女性だ。とはいえ、二組の副担任の姿が見えるというのに、一組の副担任である真耶の姿が見えない。

「よし、授業を開始する。静かにしろ!!」

仁王立ちする千冬から声がかかり、喋っていた生徒たちの声がぴたりと止まる。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する……。といてもいきなり実践訓練とはいけまい。そこで今回は歩行などを中心とした基本動作をしてもらう」

朝方は合同の模擬戦だと聞いていた飛鳥はふと疑問を持った。

「さて、まず初めに専用機持ちによる模擬戦を行ってもらう」

しかし、二組には専用機持ちというのは中国の代表候補生である鈴だけしか居らず、このままでは彼女の連戦となってしまう。それ

では非効率ではないだろうかと思った。

「それと、お前らが戦う相手はもうここに来る。ほら、来たぞ」

そう千冬が言うと、飛鳥たちの頭上から、何やらものすごい勢いで空気を裂くような音を響かせながらも迫り来る機影が見えた。

「きゃあああ！ど、どいてくださいー！」

頭上から近づく機影に載る人物の顔が見えてきた。副担任である真耶であり、悲鳴を上げながらこちらに向かって降りてきた……、ではなく落ちてきた。おっちょこちょいな真耶であるが、ここまで来ればたいしたものだろう。それで大惨事を起こしたならばとんでもない。

なにやら千冬がインカムで落ちてくる真耶に言っているのが聞こえた。おおよそ被害のないようになどと言っているのだろう。それを聞いて軌道修正しようとしているのが見えるが、どう見ても生徒たちが並んでいる列への進行ルート上から外れる気配が見られない。周囲からは大丈夫なのかというような声がひそひそと聞こえてくる。飛鳥もまた、何か嫌な予感を感じざるを得ない。

ふらふらと体勢が立て直せないように見える、少々教師団のほうにも不安の色が見えている。飛鳥が動かなければいけないと決定付けたのは、千冬が小さくため息とつきながら、手を額に当てた時だ。

———そんなことをするなら助けろよ！

飛鳥は一秒も掛からずに、その左手首にある紅いブレスレットの状態にあるインパルスを起動させる。

「え！？アーちゃん！？」

突然のことに、隣に立っていた本音が声をあげる。その声を聞いて、周りにいた女子生徒たちも飛鳥に視線を向ける。

「離れろ！」

飛び立つのに、スラスター音や余波が周りに影響を与えると考えたために、叫ぶようにしてそう言う。

慌てて飛鳥の周りから離れる生徒たち。それをハイパーセンサーで確認すると、今にもこちらに落ちてきそうなISを起動させている真耶に向かって、インパルスを飛び立たせる。

制御ができないことに焦る真耶であるが、その焦りが更に、操作に難を齎しているように見える。

——何やってんだよ！

飛鳥はそう毒突きながらもスラスターを噴かせて真耶の元へと飛ぶ。バタバタと慌てるように暴れているために、彼女の身体を抱きとめた瞬間に腕が頭部を強打した。

かなり痛い——

ズキズキと痛む頭の痛みを我慢しながら真耶の身体を抱きつつ、ゆっくりと地上へと降りていく。一応着地点は教師団の所、千冬の隣でいいだろう。

不意に感じる柔らかな感触。インパルスMS越しにも何故か感じられる。メロンほどの大きさでありながら、その感触はマシユマロみたいふわふわとしたものである。

飛鳥は知っている。この感触はつい数分前にも感じていて、まだ手にその感触が残っていたはずだ。

そして、何か嫌な予感が脳裏に走る。何故だか分からないが、何かが起きそうだという予感だけはどうしても拭いきれないでいた。

「着きましたよ」

——教師なんだからもっとしっかりしてくださいよ。

「あ、ありがとうございますね。飛鳥くん」

——うう……、すいません。

飛鳥にそう注意され、全く教師らしいところを魅せられなかったこともあり、真耶はシュンとなってしまった。その姿はまるで愛玩動物のようだ。

——うっ！ 言い過ぎたか？

自分の腕の仲でそう縮こまってしまっている真耶を見て、申し訳なさに顔を背ける。自分の無遠慮な性格がこういう時は恨めしい。

「あ、あとですね……」

「？」

どうしたわけか、彼女の顔には朱の色がさしているのが見て取れた。やはり教師として、こんな失態を犯してしまったことが恥ずかしいのだろうか。そう思っていた飛鳥。

確かにそれも理由の一つかもしれない。そんな風に思っている飛鳥の手には相変わらず柔らかな感触があった。

「あ、あう」

「？」

恥ずかしそうな、そんなくもった声が飛鳥の耳に聞こえる。だが、それはあまりに甘美であり、無意識の内に飛鳥の思考をとろけさせる様なものだ。だが、飛鳥は無意識の内に感じていた、何か嫌な予感がする、と。

「あ、あの飛鳥くん」

——そろそろ離してくれませんか。

「え、ああ!？」

——し、しまった。

飛鳥は自分が今何を握っていたのかを見て、ようやくその正体に気づく。それと同時に、やってしまったという後悔の念と共に、女性の胸を触ってしまったという気恥ずかしさと申し訳なさを感じていた。

「す、すいません!」

悲鳴を上げるようにしてその手を外す飛鳥。真耶の方も恥ずかしそうにして、ゆっくりと立ち上がる。その顔にはまだ手の色が色濃く見え、流石に年下とはいえ、体格も違うことなどもあり、恥ずかしさは隠せないようだ。

「というように、今回の相手は山田先生がしてくれる」

——こうドジを踏むときもあるが、実力は確かだ。

「なんだかヒドイことを言われたような……」

——とはいえ、それを否定できないのが悲しいです……。

千冬がそう言うのを隣に立っていた真耶が聞いていた。上げてから落とすのではなく、落としてから上げる。とはいえ、先ほどの着地失敗のこともあり、ほとんど効果は十一ゼロであろう。

ISスーツによって更に強調されている豊満な胸。男である飛鳥と一夏の視線がそちらに向いてしまうのは仕方のないことであろう。シャルルのほうは分からないが。

飛鳥がインパルスの起動を解除し、元の待機状態であるブレスレットに戻して、元の並んでいた列へと戻る。バラけていた生徒たちも、事なきを得たことを見て、ほっとした様子を見せている。列の乱れは直っていた。

「……ねえ」

「っ！」

——何をしたのかな……？ 何を見てるのかな……？
——っ！

スウッと息を吸った。横から見上げるように冷めたようで、それでいて、どこか拗ねたような視線を向けている本音が横目に映った。

「な、なんだよ！」

自分が何かしたかと言うように尋ねると、飛鳥の腕に抱きつきながら背伸びをして、耳元で蚊の鳴くような小さな声で、周りに聞こえないようにして言う。その時、いかにISスーツを着ているとは

いえ、直に触れているような柔らかな感触が腕を包んでいた。

「ラッキースケベだよ、アーちゃん……」
「そ、それは」

——あ、あれは事故で、事件で、不可抗力で……。っていうか、何で抱きつくんだよ。

——そうかな？ 私には楽しんでもうに見えたけど？ むう、もつと驚くとか何か反応がないのかな？

更に腕に抱きつく力が強まる。さりげなく押し付けている彼女の胸が、一枚の薄いISスーツ越しに感じられる。

小声で言う飛鳥であるが、彼が本音の気持ちを理解するのはまだ早いようだ。もういいというように、拗ねて元の場所に戻ってしまった。回りでそれを見ていた数人の女子から何やらニヤニヤとした視線を受けて少し居心地が悪かった。

なにやら模擬戦についての説明が始められていた。簡単に言えばそこにいるIS『ラファール・リヴァイヴ』を展開している真耶と戦うというのだろう。

——インパルスは……。

ちらりと自らの手首にあるブレスレットを見る。太陽の光に反射し、紅く輝くそれは、まるでいつでもいけると言っているようだった。飛鳥は背中を押された気分だった。

「今回戦う専用機持ちだが……、誰かやりたい者はいるか？」

そう腕組みをしながら一組と二組を見渡す。隣に立つ模擬戦の相

手をする事になった真耶は立候補者がなかなか出てこないことに少々落ち込んでいるようだ。

「いないのであれば私が……」

「俺がやります」

「っと、紅月か……。いいだろう、前に出る」

誰も手を上げなかったために、千冬が指名しようとしたところで飛鳥が手を上げ、立候補した。一瞬何かを考えるような間ができたが、それを許可した。

「山田先生はこう見えても元日本代表候補生だ。お前とは年季が違う」

「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし……」

「——そんなことは関係ない。やってやるさ……」

そう、どんな奴が相手であっても……。そう飛鳥は思いながら指定された位置へと向かう。

「よし、起動させろ」

そういわれ、飛鳥はMS『インパルス』を起動させる。

——行くぞ、インパルス。

光に包まれ、そこには鉄色の全身装甲姿でインパルスを起動させた飛鳥が立つ。目の前に立つ真耶も、いつものおどおどした様子ではなく、一人の戦士としての眼をして飛鳥と対峙する。その手にはアサルトカノンを構え、いつでもいけるという様子である。

「それでは、始め！」

その言葉と共に、閉じていた瞳を開く飛鳥。紅玉のような瞳に映し出されるはこちらに向かってライフルを構える真耶とそのISのラファール・リヴァイヴ。落ち着かせ、スラスターを噴かし、コールして飛び上がる。

「紅月飛鳥、インパルス。行きます！」

鉄色の装甲が青、赤、白のトリコロールカラーへと変わる。そして、背部にフォースシルエットが装備される。右手にビームライフル、左手のABシールドが上下に分かれるように展開する。

そして、お互いの銃口から無数の銃弾と緑色のビームが軌跡となつて放たれた……。

模擬戦が空中にて行われ始めてから数分が経っていた。片や謎の最新兵器MSモビルスーツを有する一生徒、片や量産型のISインフイニット・ストラトスとはいえ、元は国家代表に近い代表候補生であつた教師。

その実力はまさに互角を極め、お互いに攻防が激しく入れ替わっているのが生徒たちには映っていた。

「ちょうどいい。デュノア、今のうちに山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あつ、はい」

上空で戦鬪を繰り広げている二人を見て、長引きそうだというところで血冬が姿の見えたシャルルに指示する。突然当てられたため

に、一瞬驚いた様子を見せたが、返事をして答える。

「山田先生の使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代機開発最後期の機体ですが、そのスペックは初期の第三世代型に劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替えを両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替え可能で、参加サードパーティが多い事でも知られています」

それを聞いて一夏はフムフムと唸りながらその説明を聞きつつ、上空に目を向けて戦闘を見ていた。簡単に言えばラファール・リヴァイヴと飛鳥のインパルスは似たようなものだということだ。

だが、似ているとは言ってもその武装の性能面においては圧倒的にインパルスのほうが上回っている。

だが、ラファールだってISのカテゴリーの中では十分高性能な機体である。とにかく操縦がしやすく変な偏りのない機体といえるだろう。装備を変更するだけでありとあらゆる局面に対応できるといふ、全局面对応型の期待であり、それがすでに量産型なのだから、現行で開発が急がれている第三世代よりも十分なレベルであろう。

第三世代は大きく偏りができている。一夏の白式の場合は圧倒的な近接戦闘能力を誇るも、相手に近づかなければどうしようもなく更に射撃用の武器も持っていない。更に早くから単一能力ワンオフ・アビリティを出現させているが『零落白夜』は燃費が悪くとてもじゃないが、長期戦には持たない、短期戦専用のものである。とはいえそれと同じ性能を持つ第一世代のIS『暮桜』にて世界の頂点にたった千冬があまり

にも規格外過ぎるのだろうか……。

セシリアのブルーティアーズは射撃特化であり、イメージ・インターフェイスのビット武装によるオールレンジの戦闘を得意としている。だが、あまりにも射撃に偏りすぎているためか、近接武装が少ない。一夏とは真逆の考えでいいだろう。

鈴の甲龍シエンロンは中近接距離に特化した機体と考えてもいい。青龍刀の双天牙月による近接、衝撃砲の龍砲による中距離戦を可能にしている。とはいえ衝撃砲の射程距離が遠距離まで長いというわけではないので、これまた偏りのある機体というわけだ。

「ああ。いったんそこまでいい。流れが変わりつつあるな……」
「？」

千冬の言葉を聞いて、一夏は再び全意識を上空へと向けた。

「はああああああ！」

飛鳥のビームライフルから次々とビームが放たれる。流石に簡単には着弾しない。とはいえ、先ほどよりも明らかに機体に近づきつつあった。

真耶の方も反撃としてアサルトカノンとショットガンを構え狙い打つも、弾速の早いショットガンも弾数の多いアサルトカノンも、圧倒的な機動性の前には掠りもしない。

真耶の前方にいる飛鳥が背部の大型スラスタに装備されているビームサーベルの柄に手をかけるのを見て、粒子変換をして近接ブ

レードを取り出す。

飛鳥は桜色のビーム刃を展開させ、前方から向かってくる真耶に向かつてサーベルを振り下ろす。それを近接ブレードで受け止めると激しいスパークが両者の間で起きる。だが、これはお互いにとつては目晦まし。お互いが蹴りを放ち、装甲に衝撃が走る。

両者に目に見えてダメージがあったのはISを装備した真耶の方であった。インパルスを蹴り上げたラファールの脚部装甲が砕け、輝が入り、更に蹴りを受けたところからシールドエネルギーが削られる。向こうのほうもVPS装甲の効果で多少はエネルギーを削ったが、微々たる物である。

圧倒的に分が悪いと距離をとろうとした摩耶であるが、その腕に何かが巻きつき、動けない。よく見るとインパルスの右腕から射出されていたワイヤーブレードであった。

動けない真耶に向かつてビームサーベルをも飛鳥が接近する。袈裟懸けに切り込んでくる剣撃を滑り込ませた近接ブレードで受け止める。再び走るスパークに思わず目をつぶりそうになる真耶であるが、そうしてしまえば隙ができる。その隙は敗北に繋がると、目の前の飛鳥の力量から判断した。その隙がどれだけ小さくとも、その一瞬を付いてくる。

——以前見たときよりも実力が上がっていますね。

ヴェステイージからインパルスと機体の性能も上がったこともあるが、それを完全に使いこなしている飛鳥の技量の高さも感じ取っていた。更にこのまま順調に力を付けていけばどうなるのだろうか。

ISが世界最強といわれている今、それに対してまるで挑戦状という名の衝撃をたたきつけているMS。大きな戦いとなったらと考える……。

——つと、今はそれ所じゃないですね……。

ワイヤーブレードを近接ブレードで切り、何とか離脱することに成功したが、ライフルを手にとってこちらに向けてはなってくるビームが次々と装甲を掠めて行く。

肩、腕、脇、脚の装甲と、掠めたところが黒く焦げていた。ビームに対してグレネードを投擲。銃口からコースを読んでの攻撃であった。ぶつかったそれらは爆発し、お互いの視界をくらます。

どちらかがハイパーセンサーを頼りに攻撃を仕掛けるか、それともカウンターを狙うか、それとも隙を突くか……、であった。

——どこだ！

——どこに……。

お互いが神経を限界まで研ぎ澄ませる。

「そこ！」

お互いが何かを感じた。そして、先に煙を突き抜け、得物を向けたのは……。

「甘いですよ、紅月くん」

「ちい！」

背後から突然何かが近づくアラートが鳴ったかと思ったら、煙を切り裂いて現れた真耶が近接ブレードを握り締め、トップスピードで突っ込んできたのだ。

——まずい！このままじゃやられる！

接近する真耶が振り下ろそうとしている近接ブレードを今から振り返っても防ぐところまでは間に合わないだろう。だからといって、このまま逃げることもすぐに追いつかれる。初速から瞬間加速並の加速ができるわけではないからだ。どうしても最初のコンマ数秒時間がかかる。

——だからといって……。

「こんなところで、俺は負けられないんだ！」

その瞬間から、飛鳥の行動は早かった。とっさに装備していたフォースシルエットを解除し、それを向かってきた真耶へとぶつけた。

「ええ！？」

突然のことと、トップスピードであったためにそれに反応しきれずにぶつかり、後方に押し出される。

すぐさま体を真耶のほうに向けた飛鳥は握られていたビームサバーベルを槍のように投擲し、それをフォースシルエットに突き刺す。それが推進剤に引火して爆発を起こす。

爆発の衝撃を受け、大幅にシールドエネルギーを失ったらファールとその操縦者である真耶はその余波を受けて煙の仲から投げ出された。脳を激しく揺さぶられたために、一瞬意識を失っていた。

そう……、意識を失っていたのだ。

——しまった！

そう思った真耶であるが、既にその隙を見せてしまっていた。目の前の煙の中から現れた飛鳥とインパルス。脚部からフォーレンジングレイザー対装甲ナイフを両手に構えて突っ込んできた。

そのままショルダータックルを受け、地上へと落ちていく。それをなおも追撃するようにして、スラスターを噴かせる飛鳥。

「でやあああああ！」

真耶に向かって迫る飛鳥の両手にはアサルトナイフが握られており、蹴りと爆発によって生まれていた大きな隙間に向けて、その切っ先を突き立てる。その瞬間真耶の体は地面にたたきつけられ、絶対防御が発動し、完全にシールドエネルギーが切れた。

「そこまでだ！」

勝敗が決したということで、千冬がインカム越しに二人に向かって声をかけてきた。飛鳥が勝ったことに驚きの歓声が上がっているのが聞こえてきた。対して負けてしまった真耶というと、今日こそは教師としての威厳を示そうと意気込んでいた分、落ち込んでいるように見えた。

「全く、山田先生。負けてしまっただけは困るな」

「す、すいません」

参ったといわんばかりに、今回ばかりは千冬も頭を抱えるように

して、その手で顔を覆うようにしていた。それを見て、真耶も申しわけなさそうにしている。

——とはいえ……。

制限された状態で元代表候補生を倒すところまで実力をつけているということが分かった。はっきり言ってこの成長スピードは以上だと思った。確かに、最初のクラス代表戦において、現イギリス代表候補生であるセシリアを破ったときには実力があるとは感じていたが、その実力でも流石に教師・・・、今回は真耶であったが勝てるとは思っていなかった。

機体の性能の差というものもあるが、それを排除しても操縦の腕というのはあの時とは雲泥の差だ。

——それがお前の求める力なのか……、紅月。

白騎士を篠ノ之束を殺すために、大切なものを二度と失わないために……。

千冬自身もたった一人の家族である一夏を守るためにISという剣を取った。だから、飛鳥の言うように誰かを守るといふ思いは分かるし、失うことの怖さを知っている。

「あー、さて。今回はこのような結果となったが、諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

はいと言う生徒たちの返事が聞こえる。飛鳥もMSインバルスを解除して、元の場所へと戻っていた。その間にすごかったとクラスメイトたち

に言われ、照れくさそうにしていた。

「よし、全員聞け！」

一度小さくため息をついた千冬は、手を叩いて注意を自分に向けさせる。

「一度確認すると。専用機持ちは紅月、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな」

その名を聞いて、列に並んでいた飛鳥はシャルルとラウラのほうに視線を向ける。シャルルは先ほど待機状態であるISらしきものを見たので、専用気持ちだということは分かっていたが、もう一人の転校生であるラウラもまた、専用機持ちであるとは思っていなかった。

「では、それぞれグループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機もちだから六グループだな。いくつか人数が多いところも出るが、そこはうまく調整しろ。では、分かれろ」

そう千冬が言い終わると同時に、やはり人気の高い男である三人に多くの生徒が並ぶという状態になる。

「紅月くん、分かんないところ教えて」

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「デュノアくんの操縦技術を見たいなあ」

そう詰め寄られても一気にこんな人数を見られるほど、飛鳥は教導に自信を持っているつもりはない。当然のように一夏はあたふたしているし、シャルルも困ったような笑みを浮かべている。

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

千冬がこの状況を見かねて叫ぶようにして言う。とはいえ、彼女の言葉数も少なかったためにこうなってしまっただろう。あれだけでは好きなどころに入れといっているようなものなのだから。はっきりいいって入るほうとしてはより取り見取りかもしれないが、入られるこちらとしては迷惑千万である。

とはいえ千冬の鶴の一声にて、蟻のように群がっていた集団が、脱兎のごとくに移動し始め、数秒も経たないうちに、名前順に分かれて、グループの配置が完了した。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

そんな彼女たちの行動の速さを見て、思わず思いため息をつく千冬。とはいえ先ほどの状況を生んだ原因は彼女にも少なからずあるのであるが。

そんな風にして別れた女子たちであるが、それぞれ指定の位置に行きなが千冬に隠れておしゃべりをしているのが聞こえてきた。

「……、やったあ、織斑君と同じ班。名字のおかげね……」

「……、うー、セシリアか……。どうせなら同じ金髪のデュノア君の方が……」

「……、凰さん、よろしくね。あとで織斑君のお話聞かせてよ」

「デュノア君！分からないことがあったら何でも聞いてね！ちなみに私はフリーだよ！」

「……」

各所から漏れ聞こえてくるのは女子生徒たちの歓喜の声や無念の声である。確かに一夏やシャルルに教えてもらいたいというのは分かるが、流石にその言いようはひどいのではないかと。更にはウウラに対しては無言一色である。

まあ、彼女から発せられる緊張しきった雰囲気と軽蔑しきった冷たい視線を向けられると誰もがそう思うだろう。何かを言ったらどうされるか分かったものではないから。

ふと飛鳥の後ろに数人の生徒が集まっていた。そういえばもう分かれていたのかと思いつながら向きを変える。すると口々に聞こえてきたのと同じようにいうのだ。

「こ、紅月くん、“ISの訓練”頑張ろうね」

「“ISの操縦”私余り慣れてないからよろしくね」

「“ISの訓練”手取り足取りよろしくね」

「“ISの教導”や、優しくしてください……」

「ちょ、ちょっと待てえええ！」

なんだか『“”』の言葉を抜かすと変な意味でとられる。対して口にした彼女たちは、特に深い意味でいったわけでもなく、ただ純粹に口にしただけらしいのだが。始める前から精神的に疲れそうだ。

「ええと、いいですかー皆さん。これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は『打鉄』が三機、『リヴァイヴ』も三機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

そう千冬の隣で手をマイクのように使って叫んでいるのが聞こえ

た。とりあえず何を使うか……、女子に聞いてみることにしたが――

「紅月くんの好きなもので良いよ！」

「そうだね、私も！なんでもいいから、ね！」

などと完全に人任せな発言を受け、飛鳥はため息をつきながらISを鳥に教師たちがいる所へと向かって行く。

とりあえず無難にと選ぼうとしたが既に他のグループが使用するISを持って行ってしまっていたので残っていた打鉄だけが残っていた。

性能も安定しているし、扱いやすい。それに純国産だということで、日本人である彼女たちにも合うだろうと思い、それを借りていくことにした。

借りてきたISをしゃがませる形で、コックピットを低く設定する。そして、一応何かがあったときに対応できるようにと腕部と脚部だけを武装させた飛鳥が彼女たちの前に立つ。

「それじゃあ、早速ISに乗ってもらって、歩行の訓練をしてもらう。一番出席番号が若いのは？」

「あ、はい」

一人眼の女子生徒が手を上げて打鉄と飛鳥の近くに出る。IS学園にいる生徒たちは多少なりともISに触れたことはある。今までだって歩行はせずとも装着などの操作だけはしていた。

最初の子もまた試合のための訓練というものはなくとも搭乗はし

たことはあるらしい。一応そこまではできるのだから、とりあえず、やらせてみようと思った。

「それじゃあ、乗り込むところまでやってみて」
「うん」

そう言ってゆっくりとであるが背中側から足を脚部の装甲に入れていく。一応の装備の仕方は理解しているようだった。完了したように次々にからだを覆うようにして打鉄の黒い装甲が展開されていく。

「違和感はあるか？」

「え？ あ、大丈夫」

何か不備があつて、誤作動が起きてからでは遅い。早い段階から確認したほうが無難であろう。

一人目、二人目、三人目と順調に来ていた。装備は皆恐る恐るの所もあるが、スムーズにでき、ゆっくりとではあるが歩行も出来ていた。とはいえ初めての人が多いために、見ている見栄えはしない形ではあるが、彼女たちからは一生懸命さは伝わっていた。

そんな途中でのことである。

「きゃあ！」

「危ない！」

打鉄に乗り込んだはいが、不慣れなためか、大きくバランスを崩したのだ。歩き出そうとした脚が交差してしまったのが原因らしい。一応絶対防御があるから傷はできないだろうが、倒れるのはいつも以上に高い感覚からのものであるから恐怖はその分大きい。

悲鳴を上げて倒れる生徒に慌てて近寄って首と背中から両腕を出す……、所謂お姫様抱っこで転倒するのを防いでいた。

「何やってんだよ。あまり急ぐなって言っただろ」

「あ、ごめんなさい」

「まあ、怪我がなくてよかったけどさ」

シュンとなってしまうその子の様子を見て、言い過ぎたとすぐに反省した。すぐにフォローするように言っ、なんとかすることには成功した。

後ろからは同じグループの女子たちがなにやら黄色い歓声を上げているのが聞こえたが、それをあえて無視した。打鉄を解除した彼女は列に戻るや否や、他の女子たちになにやら質問攻めをされていたのが見えたのは目が疲れていたからではないだろう。

それから何人かが終わり、ようやく最後の生徒の歩行が行われていた。

「ご、ゴメンね、紅月くん。私へたくそだから」

「別に。誰も最初からうまく行くわけないだろ」

「そ、そうだね」

現在最後の女子の両手を前に立って掴みながら、ゆっくりと歩行をしていた。最初に歩行しようとしたときに、バランスを崩し倒れてしまい、その後もなかなかうまく歩行ができなかったのだ。

初めての歩行として、ここまで順調にきていたのははっきり言って運が良かったと言えるだろう。

申しわけなさそうにして言う彼女に対して、飛鳥は別に気にしていないということと、フォローするように言葉を紡ぐ。少し落ち込み気味であった彼女の表情に少しだけ明るさが戻ったような気がした。

ゆっくりと一歩ずつ動かして、しばらくしてから手を離す。先ほどは動かすこともできなかったが、ゆっくりと、確実に前進していたのだ。うまくいったことがうれしいのか顔をほころばせている。後ろのほうでは、同じグループの子たちが拍手をしているのが見える。

ふと隣で行っているグループに目が動いた。確か隣には本音たちがいるはずだと。うまくやっているか確かめるつもりで見たのだが、そこにいたグループリーダーはラウラ・ボーデヴィツヒであり、なにやら揉め事が起きたようで、訓練が滞っているように見えた。

何もないのであれば、飛鳥も行動することはなかっただろう。だが、次に聞こえてきた言葉を聞いて、飛鳥の脚は自然と彼女のグループへと動いていた……。

「では、ISの装着と起動、歩行を行う。最初の奴、何をボーっとしている、始めろ」

「は、はい」

飛鳥の足がこちらに向く前のことだ。ラウラのグループも使用するISを持って着て訓練を開始することになって来ていた。しかし、もって来たはいいが、彼女たちが動こうとしない。いい加減いらいらしたのか、冷たい赤い瞳を睨みつけるようにして見渡しながらそ

う言うラウラ。

流石に怖かったので返事が震えていた。流石に軍にいるときのよ
うに張り詰めた空間を作り出しては、なれない彼女たちがすぐ
に動けるわけではないのだ。

何とか装着してからの歩行が進んでいく。その間にもラウラはた
だその鋭い眼光を向け、かたくなに塊のように口を閉じ、腕組みを
してみているというよりも睨み付けていると言ったほうがいいだろ
うか。

順調とっていいのだろうか。何とか半分まではうまくいって
いたところでハプニングが起きる。

「あ、あの……、コックピットに届かないんですけど……」

どうすればいいのかわからないと言う様に言ってくる生徒。どう
やら前に装着していた人が、ISの解除時にしゃがまずに、立った
状態で降りてしまったようだ。立たせたままの状態であると、装着
時の入れる位置がそれなりに高くなってしまい、不便だからという
ことだ。

しかし、そんな彼女に対してラウラから告げられた言葉はあまり
にもつめたいものだ。

「ふん。そんなこと、自分でどうにかしろ」

「そ、そんな……」

「ふん。文句があるなら、そんな初歩を間違えた前のバカにでも言
うんだな」

「「……」」

そう冷たく言い返されてしまった。その搭乗しようとしていた女子生徒はどうすればいいのかわから内という様子であり、前に搭乗し、この状況を作ってしまった生徒は今にも泣きそうな顔をして俯いてしまい、後に搭乗する生徒は教師を呼ぼうと辺りを見渡すが、他の場所においてこちらには来られそうにない。

一人取り残された生徒が今にも泣きそうになっていた。そんな時、後ろのほうから声がした。少々苛立っているのが、その声で分かるくらいだ。

「何やってんだよ、あんたは」

「貴様は……」

——何故ここに？

そこに現れたのは赤と白の防護スーツを着た飛鳥であった。部分展開をしたままの状態で、ラウラを睨みつけるようにしてそういつてきた。ラウラも何故飛鳥がここに来たのか分からないと言うことで、目を細め、口を開く。

飛鳥もここに来て、状況がどうなのかを理解していた。しかし、飛鳥が今文句を言いたいのはラウラ自身に対してであった。

「そんなのはどうでもいい。何で彼女に手を貸してやらないんだよ」

——グループリーダーだろ。

「ふん、それくらい手を貸さずともできるだろう」

——それとも何か……、それすらできずにISを操縦しようとも言いたいのか？

「なに……？」

「ふん」

飛鳥が詰め寄りながらラウラに言う。だが、彼女も言い返す。どうやら彼女のほうから手を貸すつもりはない。――操縦者に危険がない限り《・・・・・・・・・・・・・・・・》……、はであろうか。

それでも何のためにグループリーダーに専用機持ちが抜擢されたのか、全く意味を成していない。

「どうしても手を貸さないのかよ……」

――役割を理解してるのかよ。

「だから言っている」

――これくらい、手を貸さずともできる……、とな。

「ふざけやがって……」

「な！？何をしようと！」

突然インパルスを部分展開している飛鳥がこのグループで使っているISに手をかざしたのを見て、ラウラは尋ねる。

「ちょっとどいてくれないか？」

「あ、はい」

涙目であった女子をそこから離して飛鳥は作業に入る。インパルスを通して、飛鳥には操縦することができないISを強制的に動かそうということだった。流石に大げさな操作はできずとも、立ったり、しゃがんだり位はできるだろうと思った。

さまざまな文字がモニターに映る。そして、必要な信号を送るとゆっくりではあるが、音を立ててそのISが立っている状態から膝を折り、しゃがむ体勢になったのだ。それを見ていたら裏のグループの生徒たちは小さく歓声を上げていた。

「これで乗れるだろ？」

「う、うん。ありがとう」

「べ、別に礼なんていいさ。それにミスは誰にでもあるんだからさ。接木をつければいい」

「は、はい」

飛鳥がISをしゃがませ、傍に立っていた搭乗者の生徒に対してそう言う。彼女はそれを見て、よかったと言う安堵の表情をしつつ、お礼を言う。面と向かってそう言われたために、思わず照れて顔を背けて素っ気無く返してしまう。

とりあえず、この状況を作ってしまった生徒に対しても一応のフォローを入れる。飛鳥にそう言われた生徒は、鳴きそうであった顔が少しだけ元気になったように、返事を返してくれた。

そんなやり取りを、ラウラは苦々しげな表情でずっと見ていた。その視線を背中に受けていたために、飛鳥はすぐに振り返り、目を細めて言う。

「なんだよ」

「……っち、余計なことを」

そう睨みつけるようにして尋ねると、舌打ち交じりにそういつてきたラウラ。お礼を言われるならまだわかるが、その対極にある舌打ちと侮蔑ともっていいだろう視線を受け、もはや限界であった。

「何だって!」

飛鳥のいる場所を中心として空気が震えた。

「お前さあ、ちゃんと話を聞いていたのかよ」

「なんだと？」

つまりは千冬の話聞いていたのかと飛鳥は聞いているのだ。ラウラは侵害だと言わんばかりに睨み返してくる。彼女が千冬のことを教官と呼び、尊敬していることは見て取れる。だが、彼女がやっていることは本当にその千冬から教わったことなのだろうか。

はっきり言って、軍人としてもありえないことをしている。市民を守るのが仕事であれば、その市民が困っているのを見たら手を差し出すくらいはできるだろう。彼女がやっているのはただ傍観であり、その手をとろうともせずむしろ払い除けているようなものだ。

「言われたよな?? 装着と歩行の訓練だって。お前ができるだろうって言ったことは入ってないんだよ」

——グループリーダーに指名されたのも、こういうのが起きたときに手を貸すためだろうが。それに……。

“なんだよその態度は”

飛鳥はラウラの態度が気に入らなかった。人を見下すような冷たい目。彼女が唯一尊敬を向け、そして、まじめさを見せるのは、ただ一人……、織斑千冬の前だけだ。

人を見下したような態度を飛鳥は心底嫌っていた。それは、あの篠ノ之束IS開発者と被るためだ。そんなものから理不尽に傷つけられる者たちの辛さを知っている。だから、ラウラの態度が気に入らず、このように一触即発の状況になっていたのだ。

しかし、飛鳥の視界にはそんな二人の様子を心配そうに見ている生徒たちの姿も映っていた。この雰囲気には耐えられない生徒もいて、今にも泣きそうだ。

——これじゃあ、俺が悪者じゃないか……。

上りかけていた血が一気に下がっていくのが感じられた。とりあえず、ラウラにはこれ以上訓練を任せてはいられない。おそらく同じようなことの繰り返しだろうと判断した飛鳥はくると身を翻しながら言う。

「とりあえず、お前はもういい。どっかに行けよ。後は俺が彼女たちの訓練も見る。どうせ嫌々なんだろう？あいつに言われたから仕方なくって……。ということなら、構わないだろ？」

「……」

そう飛鳥が肩越しにラウラのことを睨みつけながら言う。向こうに見える彼女も、何も言わないがこちらのほうを睨んでいる。それからしばらく二人の間で火花が散っていたが、鼻を鳴らしてその場から去っていった。

とりあえず、去っていく彼女の後姿を見てから、そこに残っていた生徒たちに一言二言伝え、元のグループに混ぜて訓練を見ることになった。

PHASE 25 衝撃VS疾風（後書き）

ED3↓RIVER＞石井竜也＜

ご感想お待ちしております。

次回予告～BGM『明日への橋』～

違和感の残る転校生の二人

気になる飛鳥は生徒会の力を使って情報収集を始める

二人の登場でIS学園の雲行きが怪しくなる

異変の気配を感じる

そんな飛鳥に降りかかる最初の困難とは……

次回 インフィニット・ストラトス～怒れる瞳～ PHASE 26
情報収集

怒れる瞳が闇の先に見るのは一体何か……

PHASE 26 情報収集（前書き）

OP3 ↓ 僕たちの行方 > 高橋瞳 <

PHASE 26 情報収集

授業が終わったということもあり、それぞれのグループは使用したISを格納庫まで運び、次の授業に間に合わせるというように、忙しくしていた。遅れてしまうと千冬からの説教が待っているからだ。

飛鳥も使用したISをカートに積んで運んだのはいいのであるが、如何せん、それに動力というものはついていないために、ほぼ人力というものであった。何とか運び終えたはいいが、流石に疲れる。

すると飛鳥の元に走ってくる姿があった。転校生のシャルル・デュノアであった。同じようにして運んできたように見えるが、かなり涼しい顔をしている。

「お疲れ、飛鳥」

「ああ、っていうか、何でそんなに涼しい顔なんだ？」

飛鳥はそんな疑問をシャルルに投げかける。そのことと苦笑いを師ながら話してくれた。

どうやら最初はシャルル自身が持つていこうとしていたようだが、グループの女子生徒たちが任せられないなどといって代わりに持つて行ってくれたらしい。

それを聞いて、世の中は美少年が勝つのかとふとそう思ってしまった。すると向こうからなにやらぶつくさ言いながらやってくる人物がいた。

「あー……。何だってISはあんなに重いんだよ……」

その人物は同じくカートにてISを運び終えてきた一夏であった。相当疲れているのは飛鳥も同じなので、特に何も言わない。

「少しくらい手伝ってくれよ、飛鳥」

「何言ってるんだよ。俺だって運んだんだ。情けないこと言うなよな」

体力だけでなく、一夏のグループには謹慎明けの筈がいたために、そちらに対する配慮もしていたのだろう、相当精神的に疲れている様子が見えた。何を言っても一夏は優しいほうである。そこは変わらない。

「とりあえず着替えようぜ」

「だな。スーツがべたついて最悪だ……」

一夏が体に張り付いたようにしてあるISスーツをつまみながらうんざりした様子で言う。

「え、ええっと……、僕はちょっと機体の微調整をしてからいくよ。だから先に行って着替えててくれないかな。もしかしたら時間かかるかもしれないから。あと、僕のことは待ってなくていいからね」

そう言うシャルル。飛鳥は特に気にする素振りも見せず、アリーナのほうへと体を向ける。だが、ここで一夏が口を開く。

「ん？ いや、別に待ってても平気だぞ？ 次は昼休みだしな」

爽やかな笑顔でそう言う一夏。それを言われたのが女子だったらころりというかも知れないものであるが、生憎相手は男のシャルル

であり、一夏は朴念仁。まさかシャルルがソツチ系には見えないし、一夏が恋愛に疎いことから意味はない。

とりあえず何を言っているんだと飛鳥は呆れた視線を向ける。少しずつ仲が改善されつつあるかもしれないが。少々こういう人がよすぎるのも大概にしろと言いたいものだ。

シャルルのほうを見れば、少しばかり困った表情をしている。それが何を意味するのかは、飛鳥には分からないが。

一夏に対して言う。

「別にいいって言ってるんだ。待たなくていいだろ」

「いや、そこは友達として」

「友達の着替えが見たいのかよ、お前は……やっぱりお前って……」

飛鳥は少し引くようにして一夏に対して言う。横目で見たときには、シャルルも引きつった笑みのまま数歩、一夏から遠ざかるのが見えた。一夏はそんなことはないとはないと弁解している。

「一夏がソツチ系じゃないって分かったから……、ね。僕の事はいから。むしろ僕が平気じゃないから、ね？ 先に教室に戻ってよ」

「お、おう。そこまで言うなら」

シャルルの必死な様子に、とうとう一夏のほうが圧倒され、ようやく折れたようで承諾したように頷いているのが見える。

とりあえず、そこまで慌てるシャルルに対して、また少し疑いの念が募る。

そこで別れた飛鳥たちは着替えを終え、昼休みということできれ別れるのだった。

昼休み。最初は一夏が数人連れて屋上で食べないかと声をかけたきた。その時一夏の後ろには謹慎が解かれた篠ノ之箒の姿もあった。

こちらを見ず、ただ不安そうな表情をしているのが見えた。当然、あそこまで言われ、更には二週間もあんな密閉された空間に閉じ込められていたのだ。あれで反省というのか、そんな色を見せないと言うならば本当に拳が飛んでいたところである。

だと言って、それとこれとは違う。まだ根に持っているのかといえ、ばそうでもないが、だからと言って、そう簡単に許せるわけはない。

今回箒がいるにもかかわらず、飛鳥を誘ったのは、自身を含めて箒との仲を少しでも開いてしまった大きすぎる溝を埋めようという、彼ができる精一杯の配慮だったのだろう。

その時しきりに箒のほうを気にしていたのを見て、そう思った飛鳥。二週間も一応病欠していたとなっていたので、友達だろう者たちから心配されている姿が見えた。

とはいえ、数人の勘のいい女子生徒たちは、彼女がとった行動からして処分を受けていたのではないかと考えているようだ。それが噂になればどうなるか。つくづく女子は怖いと思った。

そんな一夏の提案に対して、飛鳥は机の横に掛かっていた昼食の

パンなどが入った袋を手にも、立ち上がりながら言う。

「悪いけど……、今回はパスだ」

それを聞いて一夏はどうしてと疑問を投げかける。後ろの箒はやはりと言うのか、少し落ち込むような、そんな表情をしていた。

「別に、そいつがいるからというわけじゃない。一応生徒会委員だからな」

「ええ！？」

生徒会員だということを告げると、一夏は驚いた声を上げた。とはいえもう入学してから3ヶ月ほどは経つ。各種部活や委員会に入部している生徒も好くなくない。

していないといえば一部の女子、もしくは一夏くらいだろうか。一夏がどこかの部活に入ろうとなれば、むしろこちらが羊と化すかもしれない。そうならないことを祈りつつ、部活に入っているのだろうが、特に入りたいと思う部活はない。

一夏も謹慎を受けている箒が不在であったために、剣道は自主錬という形になっていたが、今日からまた再開するかもしれない。

となれば飛鳥であるが、この前のことがきっかけで、今朝方生徒会に入会することになった。入った方がいいが、まさかの副会長と言う立場。色々と役回りで立ち回る必要がでてきたと、また振り回されるのではないか。ため息をつきたくなる思いと共に、妙な懐かしさを感じていた。

「それに……。色々やることがいきなり出てきたんだよ」

「やること？ 俺に手伝えることなのか？？もしよければ言ってくれれば手伝うぜ」

まさかそう言うてくるとは思わなかった。それが一夏なりにも、少しでも早く仲を改善したいと言う思いの表れなのかもしれない。それは素直に嬉しいことだった。だが、今回のことは飛鳥の独断の行動であり、生徒会の指示ではない。利益があるのは……、今の所飛鳥くらいだろうか。

その一夏の善意を言葉だけ受け取っておくことにした。少し寂しそうな表情をした一夏であるが、これは一夏の思っている以上に大きなことなのかもしれない。もちろん飛鳥にとっても。

時間も有限であるため、飛鳥は一夏に行くことを告げ、教室を出て、生徒会室へと向かった。

「はい、どうぞ」

「サンキュ」

お盆から、慣れた手つきで入れられた紅茶の入ったカップが飛鳥の使っている生徒会の机に置かれる。眼鏡を掛け、長髪で三つ編みの髪型をした少女――布仏虚が飛鳥に紅茶を提供しながら、何やら目の前でせわしなくパソコンのコンソールを叩いている様子を見ている。

「一体何を調べているのですか？」

「え、ああ。転校生について……、かな」

「ああ、そういえば二人ほど欧州の方から来ていると聞いていますが、その二人が何か……？」

「まあ、ちよつと……。引つかかるところと言うか、気に入らないと言うか……」

そう言う飛鳥の使っているパソコンの画面には在学生のデータがびっしりと入っている。生徒会はこのような情報を逐一保存しておくのだ。その在学中に起こしたことや、その処遇などもこと細かく記入されている。プライベートルームなことは流石にであるが、それだけでもその人物がどのような人間なのか、どんな経歴があるのかというのを知ることができるのだ。

「こちらはフランスの在住者名簿ですね。それに、こちらはドイツ……。確か一組のはフランスとドイツからの代表候補生が転校してきたと……」

「それにフランスのほうのシャルル・デュノアって奴が一夏同様に男ときた……。でも、今まで大沙汰にならなかったのはどうしてなんだ？」

「確かに……。織斑さんのことを考えると、世界的にもニュース沙汰になっていてもおかしくはない……。ですね」

冷静になって考えれば考えるほど、このシャルルの人物像というのは疑わしい他の何物でもなく感じる。

何故今頃になって転校してくるのか。

——はっきり言って遅すぎる……。何か裏であるのか？

何故男の操縦者として、大沙汰にならなかったのか。

——これが一番おかし過ぎる。いくら隠していたとしても無理があるんじゃないか？

何故ただの操縦者ならまだしも、代表候補生なのか。

——見つかって数ヶ月で代表候補生って・・・、嘗めてるのか？
それともフランスには実力者がいない……、って訳じゃなさそう
だけどな。

そして、シャルルがフランスの大手メーカーであるデュノア社の
ご子息だと言うこと。まるでできすぎたアニメのようなものである。

あまりにも胡散臭すぎる。まるで息子を利用して……にしか
見えない。

こう考えられるのも、暗部の家系のものと訓練を積んできた賜物
であろうか。身体だけでなく頭脳のほうも考え方の基礎を小さい頃
はちんぷんかんぷんであったが、その習ったのが片隅に残っていた
のは奇跡だ。^{ラッキー}

——それにしても……。

「まわるゝ、まわるゝ」

隣でのほほんとした声でくると椅子を回して遊んでいる本音が
張り詰めた空気を和らげている。否、和らげるというよりも緩め
ているようだ。

「まわるゝ、まわるゝ、私はまわるゝ」

「本音やめなさい」

楽しそうにして回っている本音であるが、その椅子が徐々に緩み、

上に向かっているのに気づいていない様子である。それを見かね、これから起きるかもしれないことを示唆するように、虚がやめるように諫めるが、本音は相変わらずの語尾を延ばす返事をして更に回転する。

「まわるゝ、まわ、わきゃ!？」

かわいらしい悲鳴を上げて、背中から転げ落ちる本音。予想通り、椅子の中芯が抜けてしまい、座る部分が取れてしまったのだ。転げ落ちた本音は尻餅をつき、かわいらしい仕草を見せている。

思わずごくりと生唾を飲み込む。飛鳥は頬が熱くなるのを感じた。

「うう……、痛いよ。あれ？　アーちゃん？　どうしたのかな？
？　顔が赤いよ？」

「あ、いや……、えっと」
「？」

どうも齒切れが悪い飛鳥。顔も若干赤く、目がちらちらとこちらを向いたり、視線を外したり忙しくしている。どうしたのだろうか、かわいらしく小首を傾げた。

そして、ハッとしその飛鳥の視線をたどって見ると……。

「ほ、本音！」
「ん？　はわわわ！」

ようやく二人して飛鳥が顔を赤くしていた理由を理解した。視線の先には転げ落ちて少し乱れたスカートがあり、そこからピンク色の下着が見えていたのだ。慌てて言う虚と隠す本音。ううっとかわ

いらしく唸りながら目じりに涙を浮かべ、上目遣いの形で睨みつけてくる。いつもよりも目が開いているのは怒っているからだろうか。恥ずかしさからか、頬が若干赤い。

「あ、いや、その……」

飛鳥はそう睨まれ、思わず何か言おうとしたが、どうしても言葉が見つからず、どもってしまふ。

「アーちゃん……」

「わ、悪い。わざとじゃない。そう、たまたまだ、たまたま。事故、事件、不可抗力」

そう言い訳のような言葉を並べていく飛鳥。だが、目じりに羞恥の涙を浮かべ、小さく唸るようにして見上げてくる。まるで子狐がかわいらしく威嚇しているようにしか見えない。

「アーちゃん、今日三度目だよ」

「はあ!？」

「ちよっと、どういう意味ですか、飛鳥さん!」

突然爆弾の如き言葉を投下してきた。飛鳥は目を丸くして驚き、それを聞いた姉である虚は動くが早いか飛鳥の肩を大きく揺り動かしていた。流石に妹に不埒な行為を行うことは許さないと言うものであろうか。

「ち、違う! あれは……」

「でもしたよね、ラキスケ」

「略すな!」

「やっぱりしたのですね」

「ち、違う！　だから、あれは……」

虚に詰め寄られ、ガツチリと掴まれた肩に指が食い込む。正直言
ってかなり痛い。嫌な汗がだらだらと流れているのを感じながらも、
何とかこの状況を脱しなければいけないと想い、必死になって混乱
しかかっている思考をめぐらせる。

だが、出てくる言葉は先ほどと同じ、言い訳のようなもの。更に
立ち上がっていた本音があの禁断の言葉ブロックワードを告げる。その瞬間、飛鳥
は自身の身体から、サーッと血の気が引いていくような感じがした。

とりあえず何か反論しようとしたが、口から出たのはそんなしよ
うもない言葉、それが更に虚が誤解するようなことに繋がってしま
う。

すると突然、生徒会室の壁の一部がはらりと剥がれ、そこには布
を掴んだ制服姿の楯無が激写などという言葉が扇子に書かれたもの
を持ち、ニヤケ面のまま現れた。

さらに突然、窓際からフラッシュ音がした。一体なんだと思い、
そちらに目を向けると、飛鳥の目に映ったのは、何を必死に窓際の
手すりを掴みながらも、新聞部のプライドに賭けてなのか、カメラ
にこの光景を見事に収めようとしている楯無と同じ二年の黛薫子が
いた。

「ふふふふ、いいことを聞いたわ。さらに、この網膜にもしっかりと
と納めたわ。薫子！」

「な！？　た、楯無！　一体どこから！」

「きたよタツちゃん！　大スクープ！　『真昼、無音の生徒会室で
幼馴染である三人が……』。更に姉妹丼と来ましたか！」

「何やってんだよ、あんた達は！」

まるで忍者の如く現れた楯無と、何をしたかったのかカメラに収めるや否や、記事を書かんと飛び降りていく薫子。流石にそれはまらずいと判断したのか、虚が代わりに彼女を追いかけるべく生徒会室を出て行った。どうやら誤解は解けているようだ。

ほっとした飛鳥であるが、とんでもないことになってしまったことで、まだ午前が終わったばかりだというのに、一日が終わったような疲労感を感じていた。

外からなにやら奇声のような悲鳴が聞こえた。おそらく急いで出て行った虚が薫子のことを拘束したのだろう。楯無もそれを理解しているからあえてそれを許可したのかもしれないが、やられたこちらとしてはたまったものではないが……。

もしそれが学園に広まったりしたら……。

「まずい……」

非常にまずい。ただでさえこの学園は女子高であり、そのような話に年中飢えているだろう。そんな状況にそれが叩き込まれたりしたらとんでもないことに……。

とはいえ、流石に彼女もそこまでではないだろう。楯無の持つ扇子に心配という文字から、一瞬で無用と言う文字に変わっていたからだ。一体どうやってその文字が変わっているのか……。

「それよりも……」

「な、何だよ……、その変な目は」

ひどいなくつと笑みを浮かべながらゆっくりと近づく楯無。飛鳥の片腕をぎゅっと抱く。なにやら柔らかな感触が腕を包み込んだ。

「な、何するんだよ」

慌ててその拘束を解こうと動くが、その逆からも柔らかな感触が腕を包み込む。ハッとして顔を向けるとそこにはいつもの笑みに戻っていた本音が楯無同様に飛鳥の腕を抱き、拘束していた。

傍から見れば羨ましい光景。しかし、今の飛鳥にとってはこれから何をされるか理解しているために、嫌な汗が滝のように流れるのと、自分が無事にここから出られるかと自らの身の安全に危機感を感じていた。

「さあ……」

「な、何を……」

「さあ……」

「だから、何を……」

「「さあ、聞かせてもらおうか、アツくん！」」
アーちゃん

「何を、何をだよおお！」

静かな廊下に、時折悲鳴のようなものが響いていた――

PHASE 26 情報収集（後書き）

ED3↓RIVER>石井竜也<

ご感想お待ちしております。

次回予告〜BGM『明日への橋』〜

何も起きない平和な日々

普通に起き、朝食を食べ、登校する

勉強をし、訓練を行ない、昼食を食べる

友と語らい、友と友情を育み、なかなか気づいてもらえない淡い恋をする

友と切磋琢磨し、夕食を食べ、語り合い、夢の世界へ

何時か終わるかもしれないそんな平凡でありながら掛け替えのない日々が続く

ただただそれを享受する

迫りくる悲しみと絶望が姿を現すまで……

二つの物語

次回 インフィニット・ストラトス〜怒れる瞳〜 PHASE 27
優しいひと時

その日々は悲しみを背負う復讐者に安らぎを与えるか……

PHASE 27 優しいひと時（前書き）

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳＜

たくさんさんの閲覧とご感想どうもありがとうございます。作者自身嬉しきでいっぱいです。今後とも読者の皆様に楽しんでいただけるようにしていきますので、今後ともよろしくお願いします。

こんPHASEではのぼのとした平和なひと時は一旦終了です。少ないその時間が飛鳥に安らぎを与えるのか……

本編スタートです。

PHASE 27 優しいひと時

「というわけなんだ……」

「……そう」

今日あったことを一通り話し終える。整備室にてやや照明が暗い中、コンソールを無心で叩いている簪が飛鳥の言葉に少し間を置いて答える。

ちらりと飛鳥のほうを見れば、確かに疲れきった様子であるのが見て分かる。あの後色々と二人に尋問されたというらしいが、自分も聞いていて彼女たちがその行動にでたのが分かるような気がした。

——私もそこにいたら……。

同じような行動を取っていたのだろうか。どうかと聞かれると、言い切れないが、その行動をとると言う割合が大半を占めているのが分かった。

何を思っていたのかどうか、少しばかりコンソールを叩く力が強くなっていたのに気づき、慌てて修正点がないかを確かめる。特になかったのほっと一息入れるが、隣でぼうつとしている飛鳥を見て、何故か目を離せなくなる。

一時は生死不明という境にいた飛鳥。だが、そんな危機的状況においても、まるでアニメに出てくるようなヒーローのように颯爽と自分たちを救うために立ち上がったくれた。

『これ以上傷つけさせない!』

まるで自分がアニメのヒロインになったような気がして、その日は興奮してほとんど製作に集中できなかった。

この世に正義などがあるのか。そう言われると簪は即答できない。この時代が来る前までも、いつの時代も強いものが正義弱いものはそれに従い、それに従わず、逆らうものは全てが悪として切り捨てられてきた。

それはあまりにも歪んだもの。果たして綺麗な正義とは一体なんなのだろうか。もしかすると、人はアニメというものを通して、そんな美しい正義を作り出すのかもしれない。

まるでこの世には体現化させられないような、まさに理想の世界。戦争もない、差別もない、貧困もない。誰もが笑って暮らせるような、そんな幸せな理想郷のような世界。

そんな世界に思いをはせながら、人は現実を目にしていつため息をつく。現実アニメのようにには優しくないのだ。主人公のように、頑張れば何とかなるような補正もない。努力すればするほど強くなるような設定もない。傷ついたときに、まるで用意されたように登場するヒロインがいるわけでもない。

誰もが迷い、絶望し、それでも立ち上がろうとする。それもまたひとつのアニメなのかもしれない。

でも、自分だけのヒーローがいてもいいのではないか……つと、ふと思ってしまう簪。それは彼女が無類のアニメ好きだからだろうか。

“俺はもう……、二度と大切なものを失いたくないんだ”

“だから、守るために俺は戦う。どんな奴が敵だとしても”

何故今その言葉を思い出したのだろうか。彼女がアニメのことを考えていたから、それに影響されたのかもしれない。まるでアニメのセリフみたいだと思った。

だが、飛鳥の事を見ていると、まるで悲劇の主人公のようにも見えた。傷つき、どこまでも救いの与えられない……。

——そんなこと……、させない。

例え世界が飛鳥に対して救いを与えないのであれば自分が、自分で足りないのなら本音たちを巻き込んででも救ってあげたい。こんなにも傷ついた飛鳥がこのまま絶望して終わるだなんて、そんなのは簪には耐えられないし、許すこともできなかった。

そう思うのは彼女がアニメにおいてハッピーエンドを好むからだろうか……、否、ただ純粹に、更識簪としての想いがそこにあった。

それからしばらく作業を行っていた。とはいえ、そうそう物事はうまくはかどるものではない。完成にはまだまだ程遠い打鉄式。そんな途方もない作業を行っていることに、少しばかり影がさす。

嫉妬しているのかもしれない。一夏のようにでもないが、飛鳥もまた一つの完成された力を手に入れていたのだ。確かにもともとはただのマルチスーツのようなものであったヴェステイジであるが、更識家と布仏家の協力にて、ISのように兵器へと姿を変わっていた。

——飛鳥のお父さんが見たら……、どう思うんだろう。

ふとそう思った簪。その時、不意にコンソールを叩く手を止めていた。宇宙に進出するためのマルチスーツ。ISもまた、もともとはそのために開発されたのではないだろうか。

だが、今こうしてみると、スポーツの一環となっており、自らもそれを手にしている。

“MSが兵器なら、ISも同じく兵器”

飛鳥が以前言っていた言葉だ。確かにレーザーやら、ミサイルやらを自分たち十代半ばの子どもが平然と撃っているのだ。それが例えばスポーツというものだとしても、果たして許されることなのだろうか。

スポーツだから良いという思いとこれがまた過ちを繰り返すきっかけになるのではないか……。簪は人が一人で考えるのには途方もないことに思いを馳せていた……。

夜。飛鳥はいつもどおり簪と本音と同じ部屋にて終身の準備をしようとしていた。だが、飛鳥のこのときの姿はいつもとは違っていた。

「……」

「わ、笑うなよな！」

「似合ってるよ、アーちゃん・キツネさんヴァージョン！」

ババンツというような音と共に登場した飛鳥であるが、いつものようなシンプルなジャージではなく、いつも本音が好き好んで着ている着ぐるみシリーズの中でのキツネのものを着ていたのだ。

「に、似合いすぎ……」

「くっ！」

「くっく」

「だ、だから、笑うなよな！」

腹を抱えて声を押し殺して笑っている簪。ここまで笑いがこみ上げてくるのはいつ以来だろうか。

悔しそうに二人を睨みつけている飛鳥であるが、その姿であるといつもの迫力というのが半減する。

やや薄暗いこの空間に黄色い物体が大小とあった。

「何で俺がこんなものを！ 恥ずかしいもの、着れるかよ！」

「なんでく？ 約束だよねく、許す代わりに何一つ約束するって言うのは、嘘なのかなく……？」

「くっ！ そ、それは……、卑怯だ」

「卑怯くう？ ラキスケのアーちゃんには言われたくないよ」

「くっ！ か、簪も何とか言ってくれよ！」

飛鳥は比較的常識人である簪に対して助けを請う。だが、簪はこちらに向けてなにやら冷めた視線で見ている。一体自分が何を下のだろうかと飛鳥には理解ができない。

「いいんじゃない？」

どうやら、飛鳥に助けを差し伸べるものはいないようだ――

これは昼休み時、楯無と本音の二人に尋問され、それから解放されるためにとった苦肉の策の結果であった。何か約束するからいい加減にしてくれと言った時はその場しのぎだとしか考えていなかったが、冷静になるとんでもないことを言ってしまったと自覚する。

楯無は保留にするといってその場を後にしたが、本音の場合は部屋に戻ってくるや否や、これを着ろと黄色い寝巻きのようなものを押し付けてきた。それがこの着ぐるみシリーズであるということだ。

はつきり言っていてどうして自分の体型に合ったものを彼女が所持しているのか疑問だった。気にするなとやんわりと流されたので、必要以上には聞けなかった。まだいくつも持っていそうで怖かったのだ。

黄色を基調に、腹のあたりが白という完全にキツネ。更に尻尾まであるなど完全再現率が高いものだ。本音の着ているものと同じということでペアルックだろうか。嬉しいのか、本音の着ている着ぐるみの尻尾がフリフリと動いている。

――あれってどういう構造しているんだ……？

そう素直な疑問を持つ飛鳥。とはいえ、すぐに羞恥のほうをそれを勝る。ううーと唸りながら、飛鳥は観念したのか、それとも自棄になったのか。ベッドに飛び込んで布団に丸まってしまった。

「も、もう寝る！」

声が上ずっていたのは恥ずかしさを隠し切れないから。布団を被っているが、白い布団の中から黄色い狐耳がぴょこんと見えている。それがまたほほえましく、しばらく二人で鑑賞していたのだった……。

翌朝。土曜日と言うわけであるが、IS学園では普通に午前中のみの授業が執り行われることになっている。そのために普段どおりの生活をする必要があるために、食堂には何人もの生徒たちが朝早くから集まり、食事を摂るなどをしている姿が見える。飛鳥もまた、ふらふらと眠い目をこすりながら食堂に来ていた。

いつもならもっと早く起き、トレーニングを終えているところであるが、この日は前日の羞恥からなかなか寝付けなかったためになり遅くに起きてしまったのだ。とりあえずふらふらと起き、洗顔を終えてもまだ眠い目をこすりながら食堂へと簪と本音と共に向かう。その後ろから数人途中であった同学年の生徒とともに向かう。飛鳥の姿を見て可愛いとっているが、眠気が醒めない飛鳥の耳には右から入って左から出るといったことを繰り返しているだけだった。

「アーちゃんまだ眠いの？」

「うるさい……。誰のせいだと思ってるんだよ。おかげで日課のトレーニングができなかったじゃないか」

「ええ……、人のせいにするのかな。そもその原因は誰だったかな？」

「ぐっ！」

思わずどもる飛鳥。相変わらず袖で口元を隠し、小さく笑っている。食堂に入った瞬間。飛鳥の目に映ったのは、食堂で食事を摂っ

ていた生徒たちがこちらを見て、豆鉄砲を食らったような表情でいる様子であった。

——なんだ？ 何か変だったか？

自分に何かついているのだろうか。寝ぼけているために半眼の飛鳥。紅玉にまだ力強い輝きはない。

「き……」

「ん？」

ちょうど朝食を注文し終わったところで後ろから声が聞こえた。だが、その後に起こるであろうことを、飛鳥は知っていた。デジャヴである……。

「「きゃあああああ！」」

「ぬお!？」

やはり響き渡る黄色い声。その彼女たちの視線の先にいるのは飛鳥。だが、いつもであれば親しげに話しかけてくる程度、今においてはパンダ的な存在から、一人のIS学園の生徒、男子生徒として見られていた飛鳥であるが、久々に聞いたこの歓声で耳が痛い。

思わず手に持っていた朝食のランチセットを取り落としそうになった。その驚きが一瞬で眠気を吹き飛ばしていた。

何かがおかしい。そう飛鳥は感じ取っていた。朝早く起きて、日課のトレーニングができなかったのは昨日本音から押し付けられたキツネの着ぐるみを着て眠ることになったために、羞恥ですぐに眠ることができなかったからだ。

キツネの着ぐるみ……。

「っ！」

まるでブリキロボットが首を動かすような効果音と共に、飛鳥はとなりにいるだろう本音のことを見る。起きているのだろうか、眠そうに半眼の彼女は小首を傾げ、こちらを見上げてくる。

そう、彼女もまだキツネの着ぐるみを着た状態で朝食を取りに来ていた。その手に持たれたトレーの上には洋食セットが乗せられている。そして。ゆっくりと自分の着ているものがなんなのか、視線を移動させる。

そこには本音と同じ、—黄色のキツネの着ぐるみ《……………
……………》を着た自分がいた。

「し、しまったああ！」

彼女たちの黄色い声に負けないような悲鳴が響き渡る。次々と光る携帯のフラッシュと可愛いという声。何故今の今まで気づかなかったのかと、相当気が抜けていたのだろう自分が恨めしい。穴が開いていたらすぐにでも入りたい思いであった。

「かわいい！」

「い、いけるわ、飛鳥くん・キツネヴァージョン」

「これいくらで売れるかしら……」

「ちよっとまであんた！ 一体何をしようとしているんだよ！」

何故かポラロイドカメラを持っていた女子生徒。彼女がしきりに

シャッターをとると同時に、次々と無限生産機のように黒い画像が吐き出され、しばらくするとそこには羞恥に顔を赤らめた飛鳥が写った写真が何十枚という数が周りの生徒たちの手に渡っていく。

慌ててトレイをまだ注文の品を待っていた後ろに並んでいた簪に押し付けると、慌てて走り出す。

「悪い、持ってきてくれ！」

「え？　ちよっと、飛鳥！」

後ろからいきなり押し付けられたために驚いた声で聞き返す簪の聲が聞こえたが、今は彼女に返す暇はなかった。

急いでポラロイドカメラを持っている女子生徒彼女が取った写真を持つ生徒たちの元へと走る。

何とかそれだけはやめて欲しい。それが出回れば、学園内で笑われ者だ。もしそんなことになったら……。

だが、彼女たちはこのような話題がなかなかなかったためか、飛鳥の申し出に対してかなりの難色を示している。一体そんなものを持つていて何になるのかと飛鳥は思っているが。ここは男と女という性別の違いが出るのかもしれない。

「えー！」

「せっかくのベストショットなのに」

「貴重な飛鳥くんの一面写真……。これでいける」

「もう一度言うけど、一体あんたは何をする気なんだよ！」

何か身に危険を感じた飛鳥。それが何か分からないが、このまま

渡してはいけないとだけは分かっていた。

「と、とにかく写真はやめろ！」

相手が上級生ということも関係ない。年上に対しても堂々ものを言える飛鳥の性格がこの時ばかりは役に立っていた。

「それじゃあさあ〜」

「ねえ〜」

怪しく光る彼女たちの目。あれはまともな考えをしていないと思う飛鳥。逃げようと後ずさる飛鳥の肩をつかむいつの間にか後ろに回っていた一人の女子生徒。彼女も前の生徒たちのような妖しい目をしていた。

ダラダラと嫌な汗が流れる。言い知れぬ不安に襲われる。そんな彼の予想通り、次の瞬間には飛び掛ってきた女子生徒たちに捕まり、抱き枕のようにしてもみくちゃにされる。

それからようやく解放され、写真とネガを回収することはできた。しかし、部屋に隠しておいたそれがいつの間にか消えていたのに気づくのは、午前中の授業が終わってからのことであった……。

PHASE 27 優しいひと時（後書き）

ED3↓RIVER>石井竜也<

ご感想や誤字脱字がありましたら、よろしく願いします。

次回予告〜BGM『明日への橋』〜

友

勉強、部活、団欒……、そして、訓練

いつだって共にいて助けてくれる、そんな存在

訓練においてはお互いに切磋琢磨する関係

再び衝撃と戦う龍と青き涙
インパルス シェンロンとブルー・ティアーズ

果たして閃光の先に立つは誰か……

次回 インフィニット・ストラトス〜怒れる瞳〜 PHASE 28
模擬戦

その衝撃で敵を打ち倒せ……、インパルス！

PHASE 28 模擬戦（前書き）

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳＜

たくさんさんの閲覧とご感想どうもありがとうございます。

今後とも、読者の皆様に楽しんでもただけるように精進したいと思います。

PHASE 28 模擬戦

「ええつとね、一夏がオルコットさんと凰さん、それに飛鳥に勝てないのは、単純に射撃武器の特性を理解していないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応わかっているつもりだったんだが……」

「とりあえず分かっているのと、実際にできるのは違うぞ。それに……」

「うう……」

シャルル・デュノアとラウラ・ボーデヴィツヒの二人の転校生が来てから最初の土曜日の午後。現在飛鳥たちはアリーナの一角にて訓練が執り行われていた。

他の高校とは違ってIS学園では土曜日の午前中も授業が執り行われる。ISというものを扱う以上論より証拠、実際に動かさなければ身体に感触がなじまないというものだ。

とりあえず、午前中の授業が終わり、飛鳥は一人アリーナにて自主練習をしようとしていた。ところが、途中からそこに現れたのは一夏たち。セシリアと鈴はいつものことであるが、その後ろには転校生であるシャルルと謹慎が解かれた箒の姿もあった。

一瞬箒の視線を感じたが、すぐに外れる。彼女が今更どう言うおうが関係ない。一方的に彼女が飛鳥から距離をとっているのだ。それは自分のしたこと、自分の姉がしたことを考えると、かなりの罪悪感というものがあるのだろう。申し訳なさで、何を言えいいのか分からないということだ。そんな二人の中を少しでもと考えたのか、一緒に連れてきたのだろう。とはいえ少し場の雰囲気重くなる。

飛鳥は次にシャルルを見る。大方、同じ男だと言うことで一夏が誘ったのだろう。とりあえず、まだ右も左も分からない彼が学校でうろついていたらどうなるか……。一夏としてはそれも考慮したのかもしれない。

なら他でやって欲しい……。などと思っていたのだが、突然近づいてきたと思ったら一緒に訓練しないかと言ってきた。それは一夏だけでなく、セシリアと鈴もそう言うのだ。

ハイパーセンサー越しに彼らの事を見、最初はどうか考えた。別にかまわないということで、模擬戦を執り行うということにしたのだ。

「確かに飛鳥の言うとおりだね。一夏は知識としてだけ知っている感じかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったし……」

集まっていた6人で模擬戦を執り行った。それぞれが交代で試合を行い、ちょうど今、一夏とシャルルの模擬戦が終わったところであった。当然のように彼もフランスの代表候補生。一般生徒と比べるまでもない。一夏の完敗であった。

現在一夏に対してシャルルが技術的な面の手ほどきをしていた。代表候補生ということもあり、的確である。そんな二人の様子をそれぞれ違った意味合いで唸りながら見ている筈、セシリア、鈴がいる。

この3人の教え方は相変わらず斜め上を行っている。筈の教え方が壊滅的なことは既に知っていたが、他の二人もまた似たり寄った

りだということを知り、頭を抱えた。

箒は相変わらず擬音語が多い。以前突っ込まれたところであるが、相変わらず変わっていないことから、それが彼女なのだろう。『どこーん』やら『くいっ』やら『ギューン』などと聞いている一夏も更に意味が分からないと言う様にしていた。だが、律儀にも理解しようとして、あえなく断念していたが……。

セシリアは理論に偏りすぎ……、と言った方がいいだろう。確かにある程度知っているものならいいかもしれないが、少々教科書と言う方に嵌りすぎている。こと細かい角度など、数字を並べているが、それはあくまでも数字であり、一夏にそれが当てはまるというわけではないのだ。とりあえず、知識不足であり、理解するよりもある程度感覚など慣れていくほうであろう一夏には理論派のセシリアの教導は合わないのだ。

鈴の場合は既に教導になっていない。感覚だとしきりに言っているが、それは鈴自身の感覚であり、それを一夏に理解しろといっているのも不可能であり、意味はない。とりあえず、聞いていても一夏のためにならないということで、後ろでしょんぼりしている二人の方に首根っこを掴んで引きずっていくことにした。

「……確かに。イグニッション・ブースト 瞬時加速の軌道も最初から読まれてたしな……」

一夏は瞬時加速とその軌道を読まれたことに対して疑問に思っているようだ。とりあえず瞬時加速はその名のとおりの高速移動であるが、一方向にしか使用できない。それを急激な方向転換をするというならば、その身体に負荷がかかり、最悪骨折である。一夏の場合はすばやく間合いに入るためにそれを使うが、タイミングさえつかめれば、それを受け止めることもできる。それを瞬時にできるのだ

から、流石は候補生であり、それだけシャルルの実力が高いということなのだろう。

——これがこいつ一夏と同じ男の操縦者の実力……、か。

シャルルの実力ははっきり言って、かなり仕込まれているものだと考える。候補生という肩書きがあるのだから強いのは当然なのであるが、彼に適正があると分かったのは一体いつなのだろうか。一夏以前であつても、表に出来ないのはおかしいと思った。むしろ広告塔としてドンドンと上に持ち上げられていただろう。あの時の一夏同様に……。

更に一夏に対するレクチャーが続く。一夏も彼女の説明は先の三人よりも的確であり、分からない所は更に丁寧に説明するなどしてくれるので、スムーズに頭に入っているようだった。

「一夏のISは近接格闘オンリーだからね。より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ」

射撃を使わない試合は先ほどの筈くらいであろうか。1週間も触れていなかったことで、ほとんど一方的な試合運びになっていたが……。

とはいえ飛鳥を初め4人は射撃武器を持ち、距離はそれぞれ違っているとはいえ、一夏はそんな4人に逆に手も足もでずに負けた。

「知識として知っておくのは大切な事だけど、やっぱり実際にやっていくのも大切な事だと僕は思うよ」

実際に使い、その特性などを知っておけばいざそれを向けられた

ときに予測して回避行動や防御行動に移れるだろう。一夏の場合、それがないために対応策が分からず、無駄な被弾が多いのかもしれない。

それには一夏の白式にはライフルや衝撃砲などといった牽制や誘導に使う武装が一つもないのだ。それこそ機動性を生かし、隙を作り出しての一撃で相手を沈めるということが必要となってくる。長期戦は向かない白式。そのための単一能力零落白夜なのであろう。

「そういえば、一夏の白式って後付装備がないんだよね？」

「そうなんだよなあ……。何回も調べてもらってるんだけど、拡張バース領域ロットに空きがないらしいから、粒子変換が無理なんだってさ」

普通であれば武装の一つや二つ、もう少し搭載することができるのであるが、どうしたわけか、白式には既に空きがなく。どうすることもできないために、近接一辺倒の戦いを余儀なくされているのだ。

考えられるのは、その拡張領域を犠牲にするほどその機体性能が高いのか、それほどの要領の武装なのか……。おそらく一夏の場合はその武装である雪片式型とその単一能力零落白夜がそれを意味しているだろう。

単一能力について指摘するシャルル。それを聞いて、一夏はまた単語の意味を忘れたのか、助けを求める。

「その文字通りの意味だよ。唯一つの特殊能力。ただそれには発言条件があるし、ISとその操縦者が最高の相性にならないといけないんだよ」

「なら最初から俺が使えたのって……？」

「お前たちがの相性がよかったか、あとはその機体白式が異常なんじゃないか？」

「なんだかひどい言われようだ……」

「でも、普通は第二次移行セカンドシフトを終えてから発現するんだよ。それでも発現しない機体の方が圧倒的に多いからね。あと、それ以外の特殊能力を複数の人間が使えるようにしたのが第三世代IS。ここですうと、オルコットさんのブルー・ティアーズと凰さんの衝撃砲がそれだよ」

それぞれの世代において特徴が分けられているために、その機体の性能がよくてもその特徴イメージ・インターフェイスがなければ第三世代並の力があっても、それは第三世代にはなりえないということ。

各国において開発が急がれている第三世代の機体であるが、完成させたり、見通しができている国というのは少なく、試作としてある国々が進んでいるとしかいえないのだ。

とはいえ、第二世代だからといって、第三世代などという次世代の機体に勝てないというわけではない。飛鳥のインパルスもまた、後付装備であるシルエツト換装があるために、ISで言えば第三世代に部類される。

以前の真耶との模擬戦の時、それと互角に戦えたのは、単に操縦者としての真耶の技量が高かったということだ。

そして、シャルルもまたその技量が候補生ということもあり高く、世代と性能で勝っている白式を圧倒する戦いを見せつけた。それは単に一夏の技量が未熟で、白式を扱え切れていない、戦い方がなっていないということもあるのであるが……。

ワンオフ・アビリティ
白式の単一能力——『零落白夜』。

あらゆるエネルギー性質のものを無効化・消滅させる必殺の能力である。だがしかし、強い能力には当然のように代償がつく。零落白夜のそれは、あまりにも大きすぎるものなのである。一撃で相手を戦闘不能に陥れることができる必殺の剣でありながら、その発動の代償には自らのシールドエネルギーを削るといった、まさに諸刃の剣なのである。

実弾装備の相手にはとことん後手に回るが、エネルギー武装を装備するものにとっては天敵であろう。だが、それを逆手に取ること
も可能だ。

シールドエネルギーを削らずに零落白夜が常時展開可能になれば、はつきり言ってほぼ無敵になりえる。とはいえ、世の中そう甘くはない。ビームやレーザーを撃てばエネルギーが減る、銃弾を撃てば弾が減る、剣を振れば刃こぼれするように、そんな甘い設定はまらないのだ……。そう、まだ。

そんなことを考えていると、シャルルが何か考えるようにしている。

「うう……、ん」

「どうしたんだよ、シャルル。何か気になることでもあるのか？」

一夏はシャルルが自分を見ているのを視線を感じて気づいたので尋ねる。一夏というよりも、白式のほうが気になっているようだ。

「うん？ ええっとね、一夏の白式なんだけど、まだ第一形態……、だよな？」

そう尋ねてくるシャルルに対して、軽い口調でそうだと答える一夏。それが何か変なのだろうかと思っっているような表情の一夏。

——あ、なるほどな。

飛鳥はシャルルが白式に疑問を持っている理由が分かった。

「それなのに、もう単一能力ワンオフ・アビリティが発現している……。それってものすごい異常事態なんだよね。白式のような前例がまったくないのが理由だけだ」

シャルルの言うとおり、ISの単一能力ワンオフ・アヴィリティというのは第二次移行が終わって初めて発現するというのが今までの常識であつた。それが単なる奇跡グウゼンなのかそれとも必然仕組まれたものなのか……。

そう悩んでも仕方がない。理数などの工学系に関することは点で苦手である飛鳥。そのため愛機インパルスの整備は整備に通じている人……。それも決まって虚か本音に頼むのが多い。簡単な数値の入力はできるが、細かな整備などは点で駄目だ。

『明日までですか？ まあ、忙しくはないので、構いませんよ』
『やっぱり、アーちゃんは私たちがいないと駄目だね』

確かに……。そう言われるとそう思わざるを得ない。前機体であるヴェスティージが専用機兵器となったのは彼女たちの協力もあつたからだ。自分一人だったら、とてもじゃないが無理だろう。彼女たちの支えのありがたさを感じた。

そう考えていると、隣からまた会話が聞こえてきた。

「それに、その『零落白夜』って織斑先生の……、初代『ブリュンヒルデ』が使っていたISの能力と同じなんだよね？」

——あいつと同じ……。武器も、そして、単一能力も。

「まあ……、なんだ？ 姉弟だからとか、そんなもんじゃないのか？」

「そうかな……。でも、姉弟だからってだけじゃ理由にならないと思うよ。やっぱり、さっきも言ったけど、それを発現させるにはISと操縦者の愛称が大切だからね。いくら再現しようにも、それを意図的にやろうだなんて……。普通は無理だと思うよ」

普通であれば無理かもしれないが天災であればどうであろうか。飛鳥はその可能性を考え、すぐに霧散させた。もしそれが可能なら、彼女はあまりにも危険な存在だ。

飛鳥は今更になって、自らが敵として見ている相手が危険な存在なのかを再確認させられた。はつきり言ってブリュンヒルデが霞んで見えてしまいそうだ。

「っと、その話は置いておいて……」

「え？ なんだよ、シャルル」

突然にシャルルが話を変えるのに、一夏はどうしたのだろうかと思う。だが、今その話を延々としていてはせっかく予約しているアーリーナの使用時間がドンドン削れて行く。

更に待たせてはせっかく一緒に練習することにした飛鳥にも迷惑が掛かるということで、シャルルが頃合いを見て話を変えたのだった。一夏もそういえばと、予約している時間は有限であることを思い出し、まだその時間ではないが、あと1時間もないと気づく。

「それじゃあ、さっそく射撃武器の練習を試みようか。一夏、はい、これ使ってみてよ」

そう言いながらシャルルは先ほどの模擬戦で使っていたアサルトカノンを手に現し、それを一夏に手渡した。

一夏はそれを手にしながらも、授業で習ったことから疑問に思ったのだろう。そのことをシャルルに尋ねる。

「なあ、他のISの武装って使えないんじゃないか？ ほら、登録されてないとか、それに俺の白式には空きがないし……」

「ああ、それなら大丈夫だよ」

そう疑問を吐露する一夏に対して、シャルルが爽やかな笑みを添えて答える。ISの武装は使用承諾アンロックをすればその武装を登録している全員が使えるようになる。

そのアサルトカノンに一夏のことを登録したために、後は使用承諾をだせば、自動的にそれは一夏が使かうことができるようになる。

「それじゃあ、使用承諾を出してくれよ」

「あ、うん。えっと……、もう大丈夫だよ。使用承諾は出したからしたから試しに撃ってみてよ」

慣れないものであり、男であれば一度は憧れる銃。それは一夏とて例外ではない。今まで真剣は見たことも、手に触れたこともあっても、銃というものはテレビなどで見るくらいで、全く自分とは無縁のものであったのだから。

「えっと、構えは……、確かこうだったか？」

「あ、もうちょっと脇をしめて、そうそう、そして左腕はこっちだよ」

一夏はシャルルに後ろから手取り足取り銃の構え方を教えてもらっている。どう見ても男女が戯れているようにしか見えない。とはいえシャルルは男なのであるが……。

——そして、こいつらはこいつらで……。

後ろを肩越しから見てみる。そこにはまるで男女が触れ合っているように見えるのか、一夏に対して好意を向けている二人は悔しうにしている。セシリアはそんな二人と、一夏たちのことを交互に見て苦笑い気味だ。

鈴は自分の教え方で一夏が理解してくれなかったこともあってか、二人が仲良く訓練しているのを見て何故か胸がむかむかしているというような状態だ。心の中では二人は男同士なのだと言い聞かせているのであるが、どうしても納得していない自分鈴がいるのを感じていた。

そして、箒の方はもはや睨みつけているを越えている。もしかすると謹慎処分中一夏分を補給できなかったための反動なのだろうか。あの処分が果たして適切だったのか。彼女の立ち位置の不安定さとIS学園の対応の甘さは相当なものである。

その反動の大きさが、これ以上の暴走に繋がらなければいいのであるが。そんな彼女たちから目を離すと、一夏に対するレクチャーが現在進行形で続けられていた。

「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るだろうけど、それに対してはISが自動で相殺してくれるから大丈夫だよ。後、センサー・リンクはちゃんとできてる？」

「ええっと、それって銃器を使うときのやつだったよな？さっきから探してるんだけど、それ、白式に搭載されてないみたいなんだ……」

射撃とはいえ、相手も高速で移動するのだ、肉眼で照準を合わせるなどということはほぼ不可能だといって言い。

そのためにハイパーセンサーとの連携が不可欠になってくるのだ。ある程度のターゲットロックをしてくれるなど優れたものなのであるが、白式にはそれが無いようで、一夏が困惑した様子でそう言うてくる。

普通、白式のような格闘専用の機体であっても、打鉄などにも搭載されているように、普通はあるはずなのであるが。それだけ単一能力を重要視しているのかもしれない。
ワシオフ・ア
ヴィリテイ

確かに零落白夜はそれを捨ててもお釣りがでるくらいの破壊力はあるのだから。とはいえ、使い手が未熟であれば、ただの自滅するものにしかならないのであるが。

そんな風になっていると、ふと一夏に……、白式に対して明るい、いつもの表情ではなく、何かを見定めるような視線を向けたシャルルが眼に映った。一体何をしているのか。

それではまるで、白式のことを観察しているようなものである。じっと見つめるシャルルの目には、それだけが映っている。対して、一夏はその視線に気づいていないようであるが。

「どうしたんだ？ 白式に何かあったのか？ そんなに真剣まけんな視線で見て」

「え！？ あ、別になんでもないよ。気にしないで」

突然飛鳥に話しかけられ、驚いているシャルル。忙しく手を振りながら、そう笑みをつくってみせるシャルル。しかし、慌てている様子がなんとも怪しい。目を細め、シャルルのことを睨みつけるようにして見る飛鳥。それに対して苦笑いで流そうとしている。

「そ、そうだ、一夏。早速撃ってみてよ。センサーは使えないけど、目測でやってみて」

「あ、ああ。よしそれじゃあ、早速……」

飛鳥の視線から逃げるようにしてシャルルは一夏に練習するように促す。二人の様子を黙って見ていた一夏は突然詰め寄るようにしてやってきたシャルルに圧されて、慌ててアサルトカノンを構え、提示された的へと目測であるが、狙いを定める。

そして、連続で響き渡る銃声。アリーナには他にも生徒たちが訓練をしている姿が見えるが、それでも一際大きな音を立てていたために、かなり響いていた。

手ほどきを受けた一夏であるさ、流石に初心者ということに当たったのは数発。後は大きく的を外していた。とはいえ、完璧に打ち抜くことが目的ではなく。一夏自身が火気装備の特徴というものを掴んでくれさえすればいいというものだった。

欠片だけでも掴めればというまで一夏は何度も銃のトリガーを引き続ける。

その間に飛鳥はただ見ているだけでは時間が勿体無いということ
でセシリアと鈴を誘い模擬戦を再度行うことにしていた。

セシリアに対しては^{中遠距離用}ブラストインパルス、鈴に対しては^{中近}ソードイ
ンパルスにて戦闘を行う。

「くっ！ 相変わらず回避行動は憎たらしいくらいに眼を見張るも
のがありますわ」

「無駄に着弾してたら意味ないだろ！」

セシリアの^{スターライトmk3}レーザーライフルから放たれる攻撃を回避し、更にビ
ットからの攻撃をABシールドで受け止めながらも、反撃としてビ
ームとレールガンを放つ。

それが回避行動をとったセシリアの四肢を掠めていく。それだけ
でも十分すぎるエネルギーを削っていくのだから顔を顰めるのは仕
方がない。

距離をとりつつ、ビットを操作し、飛鳥に十分な体勢で攻撃をさ
せまいとする。飛鳥も四方八方、巧みな位置から放たれる攻撃に機
体を絶妙な操作で回避していく。

「くっ！ これじゃあ……」

「そう何度も負けるのは、イギリス代表候補生として避けなければ
なりません。それに、わたくしのプライドの問題でもあります
わ」

そう連敗もできないし、簡単には負けられない。初めて戦ったと

きに真面目に戦っていれば勝負はセシリアの方に傾いていたかもしれない。だが、あの時彼女は慢心があったゆえの惜敗。

その後は模擬戦というものをしていなかったが、飛鳥はまるでスポンジのように水をドンドン吸うようにして経験を積んでいき、それを自らの糧としていった。

そして、模擬戦を繰り返すたびに実力の差を感じ始めていた。候補生として、一般人よりも何十倍、何百倍の時間という量と、濃密な質の訓練を受けてきたつもりだ。だが、飛鳥のその成長というのは戦いにおける天賦の才なのかもしれない。

次々と狙いをつけ打ち込んでいくセシリアであるが、飛鳥はその攻撃を首を傾けることで回避し、更にABシールドを翳してそれを受け止める。レール砲に内蔵されているビームジャベリンを取り出し、連結させるとそこには桜色のビーム刃が展開される。

「はああああああ！」

瞬時加速を使い、一気に接近する。すぐさま左手に粒子変換したインターセプトを展開し、振り下ろされる攻撃を受け止める。それにより、激しいスパークが二人の前で起きる。

一瞬後退するも、すぐさま前進し、お互いの得物をぶつけ合う。飛鳥は持っていたビームジャベリンを頭上で回転させ、遠心力をつけると、身体のねじりを加えてセシリアに切り上げるようにして攻撃する。

それを受け止めようと滑り込ませたインターセプトが大きくかち上げられる。隙ができたことを見逃さない飛鳥と、まずいと思うセ

シリア。とっさの判断により、逆刃で攻撃してきた飛鳥のそれにビ
ットを滑り込ませ、それをシールド代わりにして爆発の余波を利用
して大きく後退していく。

「相変わらずものすごい力ですわね……」

——馬力で負けていますわね……。接近戦はもともと得意じゃな
いので、これ以上は危険ですわ。

ボロボロとなったインターセプト。もともとABシールドのよう
にアンチ・ビームコーティングなどされていないために打ち合うた
びにそれに負荷がかかる。刀身がビーム熱によって溶かされていた
のだ。

すぐにそれを粒子化し、再びスターライトを握る。接近してくる
飛鳥に対してミサイルを撃ち込み、接近を許さない。

対する飛鳥も背面からミサイルランチャーを展開し、全く同数の
ミサイルを同じ奇跡に撃ち込んで相殺する。そして、爆発で発生し
た煙をブラインドに、ハイパーセンサーである程度のセシリアの位
置を特定すると、持っていたビームジャベリンを投擲する。

「熱量反応……、まさか！」

セシリアは前方に発生している煙の向こうにいるだろう飛鳥から
熱量を感じ取り、警戒感を強める。そして、それは候補生として長
時間の訓練を行ってきたための経験だろうか、何か蓄積されている
経験が動けと言っていたのだ。

それに突き動かされるように、全く疑うことなくセシリアはその
場から離脱するようにして動く。それよりも早く煙を突き破ってき

たのは飛鳥が投擲したビームジャベリンであつた。

——当たれ！

——当たるわけには！

二人の思いがぶつかる。そのビームジャベリンの穂先がセシリアに対して決定的なダメージを与えることはできなかった。しかし、それが吸い込まれるようにして、ブルーティアーズの片方の脚部を貫き、爆散しさめた。

「くっ！」

「外した！？」

更に上昇したセシリアは一瞬舌打ちをするが、残ったビットから豪雨のようなレーザーを放ち、飛鳥をその場から引き離す。

お互いにアリーナの上空を所狭しと動き回り、お互いのライフルを放ち続ける。飛鳥が撃ったビームがブルーティアーズの肩を掠め、熱量で、装甲がえぐれる。セシリアが撃ったレーザーがインパルスのわき腹を掠め、同じく熱量によって装甲がえぐれる。

クルクルと回りながら戦う二人はまるで演舞ワルツを踊っているように見えた。そんな演舞ワルツも終曲へと向かう。集中力を高めた飛鳥にはセシリアの動きがイメージするように見て取れた。的確な牽制で動きを制限し、そこに雪崩の如きミサイルを撃ち込んでいく。

失ったビットと残り少ないミサイルを動員しても、それを撃墜させきることはできない。だが、そのミサイルは誘導付き。逃げても追いかけてくる。必死に攻撃を打ち込み、ミサイルを撃墜させていく。

「またですよ!?!」

不意に煙で前方が見えなくなる。だが、後方に警戒するアラートが鳴る。もはや接近戦をこなせないインターセプトをとっさに身体のスピンを使って投擲する。その穂先が突然現れたインパルスに突き刺さる……、否、その装甲に弾かれ、限界であった刀身が砕け散った。

「そ、そんな!?!」

微動だにしないインパルスが全砲門を開いた。巨大ビーム砲と、レールガンが掃射され、ブルーティアーズのことを飲み込んでいった……。

それから数分後……。

「「はあああああ!」」

二人がそれぞれエクスカリバー・レーザー対艦刀と双天牙月を連結させ、大きく振り回し、得物同士をぶつけ合っていた。

お互いが大きな得物であるために、接近しすぎると振り回すことができない。何度目かの衝突が起き、スパークと共に火花が散る。衝撃で後方に飛ぶ二人。アンビデクストラス・フォーム連結したの対艦刀を片手に、空いた手で背面に装備されているフラッシュエッジ・ビームブーメランを掴むと、桜色の刃が展開され、大きく振りかぶり鈴に向かって投擲する。

「ハアアア!」

投擲されたビームブーメランが鋭い回転と共に、回り込むようにして飛来する軌跡をその刃を煌めかせて描きながら鈴に接近する。それをハイパーセンサー越しに眼にする鈴はスツと眼を細める。

「そんなので……」

——アタシを倒せるとでも！

接近したそれに対して双天牙月で弾くように振り回し、鈴に対してダメージを与えられなかった。しかし、一瞬の視線を飛鳥から飛来したブーメランへと向けていた鈴。

視線を戻したときには既に目前まで飛鳥が迫っていた。一瞬の隙を突いて、瞬時加速にてその懐へと潜り込んでいたのだ。握られている対艦刀を切り上げるようにして振るう。

目を見開き驚きながらも、反射的にその攻撃を受け止めようとする。だが、全てを受け止めきれはるはずもなく、大きく弾き飛ばされることになる。体勢が崩れるのをなんとかスラスターを操作して阻止する。

こちらに向かってきそうな気配を見せる。近接距離での戦いはお互いに互角。しかし、馬力では向こうのほうが勝っているようだ。優位に立てないことに歯噛みしつつも、こちらに飛ばうとした飛鳥に向かって、龍砲を構え、衝撃砲を放つ。

不可視の衝撃砲が飛鳥に向かって牙を突き立てる。二門のそれが光った瞬間にある程度の空間の歪みや、銃口の向きからルートを割り出す、一つは回避したが、もう一つをもろに正面で受けてしまう。

まるで大型ダンプに轢かれたような衝撃が身体全体に襲いかかる。衝撃を受け、地上へと落ちていく飛鳥。一瞬意識を飛ばしかけたが、すぐに頭を振るい、上空にいる鈴とそのISを睨みつける。^{甲龍}

「こんのおおお！」

体勢を整え、地上に足をつけるとすぐさまスラスターを吹かせ、対艦刀を握り締めて、鈴めがけ上昇する。

対する鈴はというと。こちらに向かってくる飛鳥に対して、迎え討たんとし両腕に連結を解除した双天牙月を握り締めている。

「でやあああ！」

「はあああ！」

両腕にある青龍刀で叩き潰すようにして攻撃してくる鈴。それを加速の勢いも合わせ、振りぬくようにして切り上げる対艦刀がぶつかる。鏝迫り合いになり、お互いにスラスターを吹かせる。その状態のまま空中で停滞……、にはならず飛鳥が頭部にあるCIWSを撃ち込み、僅かであるがシールドエネルギーを奪っていく。装甲に着弾した銃弾による煙がお互いの視界を奪っていく。

力を入れ、後退せざるを得なくなる。煙を突っ切って突撃してくる飛鳥。衝撃砲を放ち、牽制する。

だが、不可視のそれをまるで見えているように次々と回避していく。当たらないことに躍起になるが、接近を許しつつあることに対して、とっさに青龍刀の片方をブルーメランのように投擲する。

「こんなもの！」

「引っかったわね！」
「っ！」

飛鳥が対艦刀でそれを弾こうと振り上げたその時、龍砲が唸りを上げると共に、それが投擲された青龍刀に直撃……、それを押す形で強度にやや難のある対艦刀を破壊する。

「くそ！ 武器が！」

「このまま一気に！」

その手に残ったのは握られていた対艦刀の折れた柄部分と僅かな刀身だけだけ。すでに武器としては役に立たず、残っている部分に僅かにレーザーが通るくらいであるが、とてもではないが対艦刀のように使うことはできないだろう。

手にしているそれを見て、思わず毒付く飛鳥。キッと眼を上に向けると、チャンスだと言わんばかりに両肩の龍砲を撃ちながらこちらに突っ込んでくる鈴の姿が見える。

右に左に身体を動かしてその攻撃を回避していく。振り下ろされる青龍刀を左腕のシールドで受け止める。軋ませるような音を立てて押し付けてくる青龍刀を弾き返すようにして鈴を後退させる。

後方に飛びながらも龍砲を撃ち込んでくる。シールド越しでも十分な衝撃が機体を通して飛鳥の体を蝕んでいく。歯を食いしばり、その衝撃に必死に耐える。

——このままじゃ……。

マズイ……。そうやや焦りながらも感じていた、いくら装甲に傷がつかなくとも、VPS装甲の効果を発揮する度にエネルギーが消費されていくのが見える。更に先ほど瞬時加速やら、急加速を繰り返していることからエネルギーが半分を切っているのが見える。

レーザー刃を展開している対艦刀の残りを握り締め、それを大きく振りかぶると鈴に向かって投擲する。それがブーメランのようにして回転して向かっていく。だが、あの状態では傷はつけられてもフラッシュエッジ・ビームブーメランと同じ効果は望めないだろう。

まるで鬱陶しいハエを追いつかうかのように、龍砲でそれを手早く撃墜しようとして狙いを定めている鈴。そして、トリガーが引かれようとした。だが、そのときだった。

「そこだ！」
「っ！」

鈴に届かないところを飛んでいた折れた対艦刀のレーザー刃に対してすばやく腰にマウントされていたビームライフルで狙いを定めると連続でトリガーを引く。銃口から放たれた緑色のビームが軌跡を描きながらそれに命中する。

一体何をしたいのだと思う鈴であるが、その瞬間、レーザー刃に命中したビームがその刃にあるレーザーを拡散させ、まるで無数の槍の如く鈴と甲龍に襲い掛かってきた。

次々と着弾し甲龍のシールドエネルギーを削っていく。着弾による衝撃が鈴の体を襲う。更に発射態勢であった龍砲の二門にもそのエネルギー状の槍が突き刺さり、爆発が起きる。

その衝撃は着弾したときよりも大きく、その爆発の影響で、大きくエネルギーが削られる。優勢から一気に劣勢へ。

油断した自分を悔いながらも、残った青龍刀の一本を手にして構える。飛鳥はそんな鈴に対して右手のビームライフルを連射する。右に左へと回避し、その攻撃を回避していく。だが、全てを回避することはできず、掠めるたびにぞっとするような悪寒が走る。

大きく振り上げたそれを飛鳥に向かって振り下ろす。それをシールドで受け止め、持ち上げるようにして後方に投げ捨てる。大きく身体の体勢を崩している鈴。

「くっ！　こんのおおお！」

「そこお！」

すぐさま振り返りながら、狙いを定めてビームライフルを放つ。その緑の軌跡が、握られている刀剣諸共腕を吹き飛ばした。砕け散った装甲の破片が舞う。まるで鈴が掴みかけていた勝利が粉々に砕け散ったように……。

「え！？　きゃあああ！」

「今だ！」

双天牙月も龍砲も失った今、彼女に対抗できる術はなかった。飛鳥は近接距離に入ると脚部から飛び出した一本のアサルトナイフを握り締め、ボロボロとなった装甲に向けてその刀身突き立てる。

「これで……」

———終わりだ！

それが装甲を突き抜け、操縦者にダメージを与えるところで絶対
防御が発動。甲龍のエネルギーがゼロになったために、模擬戦は終
了した。

PHASE 28 模擬戦（後書き）

ED3↓RIVER＞石井竜也＜

ご感想お待ちしております。

次回予告～BGM『明日への橋』～

突然に現れるもう一人の転校生

彼女の冷たい瞳が射抜くのは一人の少年

二人の間にある何か

そんな彼らを見下ろす空はまるで飛鳥の心を表すかのように、すがすがしい青から、不安を色濃く表す黒へと変わっていく……

次回 インフィニット・ストラトス～怒れる瞳～ PHASE 29
静かなるハジマリ

晴れ渡る空を包み込む黒い雲……、黒い雨^{シユヴァルツェア・レーゲン}が齎すのは恵みか、それとも絶望か……

PHASE 29 静かなるハジマリ（前書き）

OP 3 ↓ 僕たちの行方 ＞ 高橋瞳 ＜

いよいよ原作で言う第二巻の二つの出来事に入っていきます。シャルロット編 ↓ ラウラ編 というように流れは一緒です。

なるべく原作どおりではなくオリジナル色を強めていきたいと思っていますので、その所はご了承ください。

いつもたくさん閲覧とご感想どうもありがとうございます。今後ともよろしく願いします。

それでは本編スタートです。

PHASE 29 静かなるハジマリ

模擬戦が終了し、三人はそれぞれ機体を解除してスーツの状態となり、ちょうど向こうのほうでもレクチャーが終わったようなので、一夏たちの元へと歩いていく。

何かが掴めたかは分からないが、感謝するように頭を下げて使用したアサルトカノンを返している一夏と、そんなことはないとその礼に対して答えているシャルルの姿が眼に映った。

額に汗をかいているが、セシリアと鈴落ち着きを払っている飛鳥に対して、その両隣を歩いている二人はそれぞれ悔しそうにして、それを表情に表していた。

「ああああ！ また負けた！」

「このままでは代表候補生としての威厳が……」

頭をわしわしと掻く鈴と、本気になって落ち込んでいるセシリア。二人は国を代表する候補生であるために、そうそう負けて入られないのであるが、一度目の対戦からしばらくしてからタイマンの模擬戦で、驕りもなく、ましてや一对一で戦ったというのに、二人続けて負かされるとは……。

「あんた本当に一般生徒？ 普通に候補生レベルじゃない」

鈴が飛鳥の事を見ながら疑問を持った瞳で見ってくる。確かに初心者に毛が生えた程度では候補生に勝とうなどという淡い幻想はあっけなく碎け散るだろう。だが、飛鳥の場合はその実力は拮抗するだけではなく、上回っている。戦うたびに強くなり、今回であっても

以前の対抗戦で戦ったときよりも実力の向上が見られた。

「普通の一般生徒だ。一体なんだと思ってるんだよ……」

「それにしても成長の速度が恐ろしいくらいですわ……。羨ましいくらいですわね」

セシリアもその飛鳥の実力を認めるような口調で言う。

「あ、三人ともお疲れ」

「あれ？ そっちも終わったのね。一夏、アンタちゃんとコツは掴んだの？」

「ええっと……。ま、まあ。そこそこな……」

「すぐには掴めなくても、射撃武器がこういうものだって分かればそれでいいと思うよ・それだけでも視野が変わると思うからね」

「そうか、そうだな。サンキュー、シャルル」

「ううん、いいよ。僕も練習になるからね」

そう話している二人であるが、ふと飛鳥は起動状態である二人の内、シャルルの機体である『ラファール・リヴァイヴ』に視線を向けている。

「なあ、デュノア……」

「どうしたの飛鳥？」

飛鳥の言葉を聞き、シャルルが聞き返す。その視線の先に、自分の機体があることに気づく。

「僕のラファールがどうかしたの？」

「お前のそれ、この前山田先生ラファールが使っていた量産型のものとは違うなって……。それはやっぱり専用機だからなのか？」

一夏もそれに気づいたように、そういえばと呟く。飛鳥の言葉に、シャルルは肯定の意を見せる。

飛鳥と模擬戦をしたときに使用した真耶のラファール・リヴアイヴはネイビーカラーに四枚の多方向加速推進翼が特徴的だった。マルチ・スラスター

しかし、対するシャルルの機体は、カラーだけでなくフォルムも量産型のそれとは違うものである。ラファール・リヴアイヴ

背中の一对の推進翼は中央から二つの翼のようで、より機動性と加速性が高くなるようになっている。更に、アーマー部分も量産型のものより小さく、マルチウェポンとして大きなリアスカートが付いている。そして何より違うのが、肩のアーマーで、本来ついている四枚の物理シールドが全て外れている所だ。

「僕のラファール・リヴアイヴは専用機だから、かなり弄ってあるんだよ。正式にはこの子の名前は『ラファール・リヴアイヴ・カスタム？』って言うんだ。この子の拡張領域は倍にしてあるんだ。だから今粒子変換インストールしている装備だけでも20くらいはあるよ」

「まるで火薬庫だな、シャルルのIS」

的を射た言葉を言う一夏。確かにそれだけの量の武装を持っているのだ、その言葉が一番しっくり来る。どの距離にも対応できるラファールのカスタム機……。

しかし、果たしてそれだけの量の武装を扱いきれるのだろうか。臨機応変に対応できるとはいえ、そのときの状況を冷静に判断し、適切な武装を選択する。

「そういえば、さっきの模擬戦だけ……飛鳥も色んな換装武器があるんだね」

「まあな……。それがインパルスの特徴だから」

シャルルからそう言われ、飛鳥が答える。シャルルのラファールほどの武器の数はないが、量より質と言ったところだろうか。現行のISにはないビーム兵器を搭載している飛鳥のインパルス。十分なお釣りが来るほどのものだ。更にエネルギーも常時回復させることができるなど、ラファールにはない——システム《シルエット換装システム》なのだ。

そんなシステムを搭載しているインパルスを操縦する飛鳥であるが、数多くの武装を使い分けるには逐一シルエットの換装をする必要がある。だが、ラファールを使うシャルルはその問題を解決するだけの何かを持っているのだろう。彼女ではなくとも、IS自身に何かが搭載されているなどと……。

もしかしたら、シャルルが男としてフランスの代表候補生である理由はそれなのではないか……。そう飛鳥は思うのだ。

「ねえ、ちよつとアレ……」

「え、ちよつとウソ、ドイツの第三世代型だ」

急にアリーナの雰囲気が変わったように、そこにいたほかの生徒たちがざわつき始めた。

僅かであるが、殺気を感じる。そして、その殺気が放たれているであろう方向を向く。そこにいたのは黒い装甲をしたISを起動させたドイツからの転校生であるラウラ・ボーデヴィツヒの姿があった。

相変わらず血色の瞳からは殺気と冷たい視線しか放たれていない。そんな彼女を見て、飛鳥はこのまま穏和に終わるはずはない。そういう確信をどういうわけか持っていた。

その予想通り、彼女はまるで無感情な声色で、だが、僅かに怒りを含めたそれでこちらに解放回線オープンチャンネルを使って声を飛ばしてきた。

「おい」

「……なんだよ」

ラウラの言葉が自分に向けられているのだと視線を感じてなのか、それとも彼女と何かしらの関係があるからなのか、一夏が誰よりも先に答える。その言葉を聞くや否や、彼女はスラスターを吹かせ、こちらに向かって飛翔してきた。

> 貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と闘え<

> イヤだ。理由がねえよ<

> 貴様にはなくても私にはある<

ラウラが絶対零度の視線を一夏に向け、まるで射殺さん**とばかり**の殺気をその小さな身体と闇のように黒いISから放っている。個プライベートチャネル人間秘匿通信で二人は話している。

一夏とラウラが知り合いなのかは分からないが、転校初日で平手打ちをしようとするくらいなのだから、かなり仲の悪いほうなのだろう。知り合いかどうかは一夏がラウラのことを知らなかったことからそうではないのだろう。

だが、彼女は一夏の姉である千冬のことを教官と呼んでいた。そ

のときの彼女の声色には憧れなどという、殺気などとは違う感情が込められていた。

そんな彼女は一夏に対して指先を向けて言う。表情は変わらないが、紛れもなく明確な殺意を抱いている。飛鳥は何が起きるかわからないということ、いつでもインパルスを起動できるようにして構えている。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を成し得たであろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を——貴様の存在を認めない」

やや語気を荒げながら言う。それだけ彼女のことを尊敬しているのだろう。そして、そんな彼女の輝かしい栄光に対して泥を塗った張本人である一夏のことを、彼女は許せなかったのだ。例え、千冬が気にしていなくても、ラウラは許せなかった。

そう言われた一夏の表情にやや陰りが見える。何故そうなるのかは飛鳥は知らない。彼の過去を知らない飛鳥にとっては理解することとはできない。だが、二人にとって、意味合いは違えどもかなり大きなことであったのだろう。一夏にとっては大切な姉として、ラウラにとっては尊敬すべき教官として……。

「悪いけど、また今度な」

一夏が口にしたのは拒否であった。一瞬であるが、ラウラの瞳が細まるのが見えた。更に殺気が薄く、それでいて鋭くなる。まるで見えない鋭利な刃が向けられているかのような感覚である。

「ふん。ならば——闘わざるを得ないようにしてやる！」

そう言うや否や、ラウラのIS『—シュヴァルツエア・レーゲン
《黒い雨》』が戦闘状態へと移行^{シフト}される。

それをただ見ているだけの一夏。その機体の右肩から大型のレー
ルガンの砲身が一夏に向けられる。そして、砲口の奥がきらりと光
ると、そこから大型実弾砲が放たれた。

それに対していち早く反応したのは飛鳥ではなく、ラファールを
起動させていたシャルルのほうであった。一瞬の内に粒子変換した
実弾シールドを展開させるとそのレールガンから一夏を守るように
して前に立ち、それを受け止める。更に右手にはいつでも反撃でき
るようにとアサルトカノンを展開していた。

「貴様……、邪魔をする気か？」

絶対零度の瞳が細められるようにして睨みつける。シャルルは毅然とした態度で、そう言うラウラに対して言う。

「君はISを展開していない人に対してよく銃を向けられるね。そ
れに勝手に戦いを挑んでおきながら、言ってることは勝手なことば
かりだよ」

「フランスの第二世代^{アンテイク}如きで、私の前に立とうだと……？ 嘗めら
れたものだな。第三世代^{最新型}に勝てるでも思ったのか？」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの—最新型《ルーキー》より
は動けると思うけど？ それに僕は曲がりなりにも代表候補生だか
らね。そう簡単にはいかないよ」

ラウラの挑発に対して、ひらりとかわしながらも反撃するシャル
ル。そんな二人の間で見えない火花が散っていた。

「お前……、自分が何を言ってるのか、本当に意味が分かってるのかよ」

「貴様……、ふん、そんなMS玩具の操縦士が何故ここに」

「この……、玩具呼ばわりするなよな！それに、それが軍人の言う言葉かよ！お前、何も考えてないんだな！」

「吼えるな、雑魚が。そんなもので盾突こうなどと……」

見下したように言うラウラ。どうやら彼女は自らの力に絶対的な自信を持っているようだ。自らが代表候補生ということもあるが、軍人としての誇り、そして、尊敬する人物に鍛えられ、絶望のどん底から再びトップへと駆け上がったという自らの確かな力への感触。

だが、そう言う彼女であるが、言葉を紡ぎ終わる前にそれは一閃の軌跡と突然の爆発によって遮られる。ライフルを展開した飛鳥が、怒りに染まった瞳をラウラに向けながら、シュヴァルツェア・レーゲンに装備されているルール砲を破壊したのだ。

突然の爆発にラウラだけでなく、傍で見ていた一夏たちも呆然として飛鳥の事を見ているしかできなかった。破壊されたルール砲の破片がまるで木の葉のように宙を舞い、ゆっくりと黒い雨のようにアリーナの地面に落ちていく。

「もう一度言ってみろ……。そのISシュヴァルツェア・レーゲンの名前のように、肉片の雨を降らせるぞ……」

「くっ！貴様！いいだろう、相手になってやる！」

お互いに睨み合いが激化し、無意識の内に飛鳥はフォースインパルスを起動させ、その手にライフルをマウントさせ、代わりにビームサーベルとシールドを握る。

対するラウラはその両手にプラズマ手刀を展開させる。すでに射撃武器を失っているために近接戦闘が主になるだろうか。

十秒……、三十秒……、一分が経った。

「……」

お互いににらみ合ったまま動かない。否動けない。お互いの距離は飛鳥の展開しているビームサーベルがギリギリ届かないところ。ラウラが自らの攻撃を当てるには、後一步前に出る必要がある。それではリーチの差でサーベルが襲いかるだろう。

誰かが足を動かした。その時地面とそれがこすれる音が小さく響く。その瞬間に二人はほぼ同時に足を踏み出し得物を振るう。

それが衝突しようとした……、そのときだった。

「こら！ その生徒何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！」

目立つ一角で騒ぎを立てていたために、それに気づいた監視の教師の声がスピーカーを通して耳に響く。その声が遮り、二人の刃はお互いの得物に触れるか触れないかというところで止まっていた。

「ふん、命拾いしたな。今日はここまでにしてやる……」

「それはこっちのセリフだ」

ラウラは展開していたプラズマ手刀を解除し、そのままアリーナの入り口付近まで飛翔すると、こちらに一瞥もくれず、姿を奥へと

消していった。

しばらく黙って見ていたが、それからインパルスを解除し、小さく息を吐く。緊張から身体と精神が解放され、凝り固まっていたものが柔らかくなる。

「飛鳥……、大丈夫か？」

一夏がおずおずと尋ねてくる。肩越しから一瞥し、視線を斜め上に向け、アリーナから見える空を見る。

「別に……。なんともない」

いつものように素っ気無く、それでも大きな騒ぎになる前に事が収まったことにほっとしたような柔らかなものであった。

空を見上げると、夕方近くだとは言え、時期が時期ということもありまだ青空が多く残っている。遠くのほうはやや薄暗くなっており、予約していた時間が既に来ていることを暗に示しているかのようだ。

そして突然、飛鳥の髪を撫でるようにして風が吹いた。徐々に染まりつつある暗い空……。まるでその風が何かを運んできたかのように、飛鳥は思えた。空が青から黒に変わりつつある。まるで、何かが起きるのではないかと不安に思っている飛鳥の心を表しているかのようにあった――

PHASE 29 静かなるハジマリ（後書き）

ED3↓RIVER>石井竜也<

ご感想お待ちしております。

次回予告〜BGM『明日への橋』〜

何かのため

そのために自らを犠牲にしてもやり遂げなければいけない時もある
しかし、それによって失われるものもある

仲間

愛する者

名声

権力

大切なものを失う覚悟があつて、それをするのか

何かを守るためにそうするのか

その野望が動くとき、突きつけられるは冷たい銃口

次回 インフィニット・ストラトス〜怒れる瞳〜 PHASE 30

冷たい銃口

その野望を操りし糸を断ち切れ！
インパルス！

PHASE 30 冷たい銃口（前書き）

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳＜

PHASE 30 冷たい銃口

時刻は19時あたりであろうか。夕方を通り越して夜である。そんな時間帯で、IS学園のとある一室に明かりがついていた。

IS学園生徒会室。学園生活がより良くなり、生徒たちが望むことをできるだけ答えようと日夜活動している……、っと言いたい。

「……」

「だあああ！ もう！ 疲れた。肩こった。お腹空いた」

「あーうー、お腹すいた、そうだ！ お腹が空いたときはお菓子を食べよ」

「駄目よ本音。今の書類が終われば夕食なんだから」

「うへー……、そんな」

トントンとリズムカルに承認を示す判子を押していく飛鳥。背もたれ付きの椅子にぐったりと身体を預けている楯無。今しがた溜め込みすぎていた仕事を何とか終えたばかりなのだ。

時々人に仕事を押し付けてどこかに隠れてしまうことが多いために代わりに虚と本音の二人で飛鳥が来るまでそれを代わりにやっていたらしい。とはいえ、虚一人でそれを短時間で終わらせられるほど、簡単なものはあらず、更に処理スピードが雰囲気同様にのほほんとスローペースである本音の場合、終わるのはかなりの日数と時間を有することになる

最近になってか飛鳥が生徒会の副会長としての席についてからは、楯無の溜め込む仕事を処理するスピードが上がったようだ。それは三人にとっては喜ばしいことであり、楯無にとってはこれで思いつ

きり溜め込めるなどと豪語し、その瞬間に虚に撃墜させられていた……。

彼女も仕事をさせれば短時間で終わらせられるスキルはあるというのに……。飛鳥は変わらぬリズムで判子を押しながら、そんな彼女を見ていた。

「これでラスト……」

最後の手元に残っていた書類に対して、承認の判子を押す。まるで本日の仕事を終えるのを伝える鐘のように、生徒会室に響いた。その瞬間楯無と本音は終わったのを喜ぶかのようにして飛び上がる。

「「終わった〜!」」

「お疲れ様でした、そちらは私のほうで処理しますね」

「悪いな。頼むよ」

嬉しそうにして退室する準備をしている二人を尻目に、飛鳥は虚に終わった書類を手渡す。そして、ふと思い出したことを口にする。

「ああ、そうだ」

「どうしましたか?」

その飛鳥の言葉を聞いて、虚はどうしたのかと尋ねる。飛鳥は自分の手首にあるブレスレットである待機状態のインパルスを彼女に見せる。なるほどと納得したような表情になる虚。

「色々ゴタゴタしてたけど、一回こいつを整備したほうがいいかな
インパルス
って思ってた」

「確かに対抗戦以降、特に大きなメンテナンスはしていませんね」

そう虚が言うように、あの対抗戦にてヴェステイージからインパルスに代わったことからデータ取りとして、一時的に学園側にそれが預けられていたのだ。そのときにメンテナンスもされていたようであるが、あれ以降はほとんど数値の確認くらいであったために細かなところまでやっていないのだ。

「自分でできればいいんだけどな」

小さくため息を吐いて、自分のそちらに対する知識と技能のなさに情けなさを感じている飛鳥。

「数値入力……、OSの書き換えくらいできれば十分かと思いますよ。後は、細かな整備として、私たち整備科に任せてもらえばいいですよ」

そう笑みを浮かべて言う虚。ただ一人の人間がやれることは限られている。全てを完璧にできる天才^{天災}などがそこらじゅうにごろごろいられたらたまったものではない。

「そうか、そうだよな。なら、悪いけど頼めるか？」

「ええ、もちろん」

今日はもう時間的に整備室も閉まるだろう、今頃簪もそこを後にしているだろう時間帯だ。完成率もまだ半分に届かないということ少し焦りを覚えているのかもしれない。いつも以上に作業に没頭する姿を見るのが増えた気がする。

「簪ちゃん、少し肩の力を抜いてほしんだけどね」

心配という文字が書かれた扇子を広げる楯無。確かにと飛鳥は呟く。そこまで意固地になる理由を知ることこそ、それで何かしらの事態になったら困るということだ。

そうならないように、使用人の本音がいるのであり、同じ部屋に飛鳥がいる。男女がこの年齢で同じ部屋というのはおかしいことであるが。

「近々学年別トーナメントですけど。今度も何もなければいいのですが……」

虚がそう危惧するのも無理はない。あの時とあるルートから入った情報どおり、何者かが無人ISを投入させ、IS学園を襲撃したのだから。その時誰も死亡しなかったのは言いとして、それを事前に知っていたものたちからすれば反省せざるを得ないことであった。

「虚ちゃんが不安になるのもしょうがないかもしれないわね。何も無いのが一番だけれど……」

何かもやもやが晴れないような表情を扇子で隠すようにしている。彼女も不安なのだろう。いくら日ごろ飄々と人たらしのようにしている彼女だとしても今はまだ一人の少女。いくら裏家系の頭首をしているからといって、鋼の精神を持っているわけではない。

不安などがないものはいない。そう、あの天災ですら。

「簪は出るのか？ 機体がない以上は、借りることもできるけど……」

「カンちゃんはお出ないと思うよ」

本音が相変わらず眠そうに半目をこちらに向けながら言う。自分で聞いたことであるが、確かにと飛鳥は思う。彼女のプライドなどを含めると、辞退するのが目に見えている。

そんな横には苦笑いする楯無が見える。彼女はそれに自分が大きく関わっていることを既に理解知れているのだ。理解しているからこそ悩み、どうすればいいのかわからないkのでどうすることもできずにこのままの状態が続いている。

———櫛花と簪二人の関係が微妙になったのはいつからなんだ？

しばらく彼女たちから離れていた飛鳥はそのことを詳しくは知らない。ただ情報で原因などを聞いているだけであり、時間に添っての二人の関係の変化をこの眼で見たわけではないのだ。

「それよりアックンたちのクラスに転校生が来たのよね？ 本当に多いわね、一年一組は」

「フランスとドイツから。前も言ったけど、あの二人は———」

何かしら問題がある。そう飛鳥が呟く。

シャルル・デュノアに関して言えば男の操縦者でありながら、全く表沙汰にならなかったこと。更に代表候補生などと、まるで以前から訓練を受けていたかのような印象を与える。更に彼の仕草である。飛鳥と一夏男と着替えるとき、しきりに視線を向けてくる。まるで女子と着替えているようである。

ラウラ・ボーデヴィツヒの場合は明確な敵意を持っているのは間違いない。それが一夏に対しての一方通行的なものである。一夏はその理由を知っているのかもしれないが、深く詮索はしない。予

想できることであれば、そこに千冬が大きく関わっていること、ラウラが軍人であることから、千冬が何かしらの形でドイツの軍……、IS 関係に関わったのだらうということは分かる。

「ああ、アックくんがラッキースケベをした子ね。もしかして、アックくんはああいう子が好み？」

「何でそれを一々掘り返すんだよ。俺は……」

「?。」

そこまで言って、飛鳥は顔を真っ赤にさせて、三人を置いて行くように足早に廊下を歩いていく。

後ろからは何かを言っている声が聞こえるが、恥ずかしさで顔が赤い飛鳥はそれを意図的に聞かないようにする。大方からかうようなことを言っているのだろう。

「アックくん！」

「アーちゃん！」

「飛鳥くん！」

「あー！ 聞かない聞かない！ 俺は聞かないぞ！」

自分を呼ぶ声が聞こえるが、飛鳥はそれをわざと手を耳にかぶせて聞かないという仕草をとる。仲のいい、まるで昔のように笑顔が溢れている様子がそこにはあった――

「あれ？ 飛鳥？」

「デュノア……。なんでここに？」

飛鳥が翌日に虚と共に整備室に向かうと、そこには転校してから

一週間がたつシャルル・デュノアの姿があった。どうやら彼も自身で専用機をメンテナンスしていたようで、起動されたそれが固定された形で飛鳥たちの目の前に佇んでいた。

突然飛鳥がここにきたことに、シャルルは驚いた表情を向けていた。飛鳥もまた、ここにシャルルがいるとは思わなかった。

「どうしたの？ あ、飛鳥もIS……、じゃなかった、MSのメンテナンスをしにきたの？」

「まあ、そんなところかな」

相変わらずの爽やかな笑みを見せる彼女に対して、そこまで素っ気無い態度を取ることはできない。するとシャルルの視線が隣にいる虚のほうに移る。その視線から、彼女は誰なのだろうと思っっているのだろう。

「彼女は整備科3年の布仏虚……、さん」

いつも虚のことを呼び捨てにしているために、思わずそう言いかけた。流石に同級生に対してであるが、呼び捨ては失礼だろうと思いい、そう言うことにした。

「俺の幼馴染で、生徒会の会計担当なんだ。で、インパルスのメンテをしてくれてる」

「あ、僕飛鳥と同じ一組で、この前転校してきましたシャルル・デュノアと言います」

シャルルがそう言うのを聞いて、虚はよろしくというように手を差し出した、シャルルもそれに習って手を差し出し、握手する。

「飛鳥って生徒会に入ってるの？　だから、部活動に入っていないかな」

「まあな」

シャルルはそれに関してあまり深くは追求しない。学校をよりよくするのが生徒会の仕事。飛鳥にもそういう思いがあるのだろうと考えたのだ。

「で、お前もメンテしにきたのか？　よく一人でできるな」

飛鳥は感心したような声色でそう言う。褒められたことが嬉しいのか、笑顔が二割増しで輝いて見えた。

「フランスにいた時に訓練と一緒に教えられたからね。でも、飛鳥のようにメンテナンスをしてくれる信頼できる人がいるっていいよね」

「かもな。こっちは戦いに集中できるし」

「とはいえ、あまりひどい損傷は勘弁して欲しいですけど。修理する私たちも大変ですのぞ」

「あはははは……」

虚の言葉にシャルルは乾いた声を出すしかできない。

とりあえず、メンテナンスを始めるということで、虚は飛鳥にインパルス^{インパルス}を起動させ、ハンガーに固定させる。

一瞬紅い光が瞬くと、そのハンガー部分に固定される形で佇む鉄色の全身装甲の機体がいた。自分がいつも使っている愛機^{インパルス}を目の前で見るのはまた違った感覚を感じる。

「あれ？　いつもと違う」

シャルルはメンテナンスを続けながらも、隣に佇むインパルスを見上げ、そう呟く。シャルルが見たインパルスは、青・赤・白トリコロール、赤と白のツートン、暗緑と白のツートンの三種類だからだ。だが、それはまだ装甲に電流が流れていない、VPS装甲が起動していない状態である。基本は色づいた状態で出現するために、彼にとっては初めての光景だったのだ。

「これはどういう構造になってるのかな？」

シャルルが興味深そうに聞いてくる。一瞬飛鳥は横に立つ虚に対して目だけを動かし、視線を向ける。虚も同じようにしてこちらに視線を向けてきた。どうするべきかとお互いに意志を伝える。確かに教えることもできるが、早々データを提供する気はないし、したくない。

悲しみや戦争
そのデータが新たな火種に繋がるのかもしれないという考えがあるからだ。それに彼を疑いたくはないが、どうもそうせざるを得ない要素が多すぎる。

更識家との訓練のおかげだろうか、こういうのに関しては冷静に考えられる。もう少し普段の生活でそうなればいいのだがと、隣に立つ虚はそんな飛鳥を見てふと思った。

ヴァリアブル・フェイズ・シフト

VPS装甲——装甲に流す電流の量を変化させることが可能であり、これによって、装備や状況ごとに装甲へのエネルギー配分を調整・最適化することで電力消費のロスを抑えることができる。

なるべくエネルギーの消費を抑えるためのもの。ISにこれを搭

載するとなれば、もはや現代兵器などはこの世から消えるのではないか。

どうしたのだろうかとこちらを小首を傾げて見上げてくる。

飛鳥はそんな彼を見ながら、話せないという拒否の意を示す。シヤルルはそう言われ、少し残念そうな表情を見せる。とはいえ、そう簡単に他国に情報を渡せないと言う競争というものもあるために仕方ないのだろうと自己完結してくれたようだ。とはいえ、その視線はインパルスから離れることはないが。

インパルスがハンガーに固定されていることを確認し、虚がコンソールを叩く。飛鳥はその隣でインパルスを観察している。ヴェステイージとは見た目はほとんど変わっていないと見ていい。

だが、虚が操作するモニターに映し出されるデータ上の性能というのは、ファーストステージヴェステイージを大きく上回るものとなっており、実質セカンドステージと言っているだろう。

“フォース・ブラスト・ソード・????”

四種類のシルエツトがそこに表示されており、これがインパルスの最大の特徴とも言えるだろう。すると後ろから覗き込んでいたシヤルルが指摘する。

「あれ？ この?????ってなんなのかな？」

「ってデュノア……」

「あまり覗き込まないで貰いたいですね。そうやすやすと他国の者に見せられるものではないので」

「あ、うん。そうだよ、ね。ごめんね」

落ち込むシャルルであるが、こればかりはどうしようもない。まだ完全に信用しきっているわけではないということも含めてだ。

大きく破損したところや、細かな傷というものは見当たらない。システム上も、虚から見て特に以上はないということ。

すると突然整備室に響き渡るアナウンス。その声の主は生徒会長である更識楯無からのものであった。

『校内にいるアックんと虚ちゃんは今すぐ生徒会室に来なさい』

「ちよっ、何でこんなときもそう呼ぶんだよ」

「あ、アックんって……」

「わ、笑うなよな」

シャルルは口元を隠しながら、あまりにもかわいらしい呼称であるために、いつもぶっきらぼうな飛鳥のイメージとのギャップに笑いを隠しきれなかったらしい。

『はい、後十秒！』

「うわっ。なんだよそれ」

「はあ、とりあえず自動管理に繋げておきますね。すぐに終わるところでしょうし。残りの作業もそれで何とかありますので。早く行きたほうがいいですね。お嬢様が何をしでかすか……」

——また何か、突然の思いつきか……。

飛鳥と虚は同時にため息をつき、コンソールをたたいてシステムを児童管理につなげる。これで残りの処理を自動でしてくれるだろう。全く科学が発展するのは良いのもあるし悪いのもある。

『はーい、後五秒。何してるのかな？ まさか……、密会！？』
「「違う！」」

二人は見事なシンクロを見せながらも整備室を後にする。

二人の背中を見ながら苦笑いをするしかできなかったシャルル。整備室の扉が閉められると、スッと視線をラファールの隣に佇む鉄色の機体——インパルスへと向ける。彼の瞳はいつも明るく、それとは違い、何かをなさなければいけないという意を決したものとなっていた。

視線を回りに振りまく。そこにはシャルル以外に、少し離れたところにいる数人の生徒くらいだろうか。だが、彼女はシャルルに対して背を向けている形で居り、更に作業に集中しているようである。シャルルがいることも、視線を向けられていることにも気づいていないようである。

シャルルはその制服に忍ばせていたディスクを取り出す。データを取り込ませるための媒体だ。

歩を進めると、目の前には鉄の巨人が聳え立つ。まるでシャルルのことを睨みつけているかのように、ISとは違った威圧感を向けている。一瞬決心が緩みそうになる。

——だけど、だけど僕は！

その男としては華奢な腕と細長い指がコンソールに伸びる。瞳がモニターに映し出されている画面を移動する。

自動管理システムが作動しており、処理の途中らしい。とはいえ、

発展した科学上、データ取りとの並行処理はお手の物だろう。

シャルルが慣れた手つきでコンソールを叩いていく。このIS学園に来る前に叩き込まれた技術である。

「流石に一筋縄じゃ行かないよね……」

シャルルの目の映ったのはエラーという文字。設定していないものが入れられたために、システムがそれを拒絶する信号を示していたのだ。シャルルは一瞬それを見て、ほんの一瞬ではあるが表情を歪める。

時間がないのだ。いつ飛鳥たちが戻ってくるか、分からないこの状況。もし見つかったなら、自分はどうなるのだろうか。想像しただけでもこの身が凍りつきそうな寒気を感じる。

しかし、ここで覚悟を崩すわけにはいかなかった。自分がこの学園に着た大きな理由——それは、同じ男の織斑一夏の専用機白式のデータ、そして、ISにはない未知の力を秘めたマルチスーツMSを持つ紅月飛鳥の専用機インパルスのデータを奪ってくるというものだった。

「流石にIS学園の整備科に通ってるだけはあるね……」

——それに、並みの防御プログラムじゃない。

スツと眼を細めるシャルル。そこにあるのはかなり高度な防御プログラムであり、ここにはいない虚のことを内心で褒めていた。とはいえそれを突破できないような訓練は受けて来ていない。真剣な表情でコンソールを更に叩いていく。徐々にプロテクトが外れていく防御プログラム。

小さな機械音がなると、防御プログラムが完全に解除され、エーの文字が消えていた。シャルルの目の前のモニターに映し出されるインパルスのデータ。最初に飛び出してきた文字は……。

“General

Unilateral

Neuro-Link

Dispersive

Autonomic

Maneuver | | Synthesis
System”

「こ、これは……」

シャルルは目の前に映し出されたその文字を目で追っていく。ISとは全く違うシステムがMSには構築されているのだ。

「GUNDAM……、これは、ガ、ンダム？」

“
G U N D A M
”

シャルルにとっては聞きなれない言葉であつた。しかし、それを見ただけで、インパルスがとてつもない力を秘めているのだということだけは確信が持てた。そして、更にデータを覗き込んでいく。

そうしている内にもシャルルが入れたディスクにはインパルスの内部にあるデータが送られていく。その、一双眼が見下ろしている間にも《、、、、、、、……》。

「ビーム兵器に、さっき言っていたVPS装甲……。すごい、これをつくった人はすごい」

シャルルは眼に入るデータを見て、ただただ感心するしかできず、その言葉以外に当てはまるものはなかった。

高エネルギービームライフル、ヴァジュラビームサーベル、ビームジャベリン、ケロベロス高エネルギー長射ビーム砲、デリュージ―超高初速レール砲、フラッシュエッジ・ビームブーメラン、エクスカリバー・レーザー対艦刀……。更にはシルエット換装をするたびにエネルギーが回復するシルエット換装システム、外部からの直射エネルギーで回復するデュートリオンビーム。

どれもがシャルルの知識にはない、あつたとしてもそれは未だ完成はおろか、議題にも出ていないものばかり。更にシルエット換装システムなど、ラファールと酷似しており、もしそれが使えたならば、更に強力なものになるのではないか……。そう思うと罪悪感よりも好奇心のほうが強くなる。

——これさえあれば……。

「これさえあれば……」

デュノア社は潰れずに済む。自分がここに來た役割を果たすこともできる。少しでも親のためにできれば、もう一度自分を見てもらえるかもしれない。そんな淡い期待を感じつつ最終段階に入る。流れる川のごとくデータはコピーされていく。

そして、モニターに映し出されたのは自動管理システムが残っていた処理を終えたのとコピーが終わったのを同時に知らせるコンプリートという文字。シャルルは震える手で挿入口から出てきた正方形のディスクをその細長い粒でつまみ、取り出す。

そこにはインパルスから奪ったデータが入っている。後はこれを
フランス
母国にいる父親に贈ればすべてが終わる。シャルルは重責を果たし
たかのようにほっとし、肩を下ろす。

この時彼女は気づいていなかった。既にこの整備室には彼女しか
いないということを。

——悪いことはしたとは思ってるよ……。でもね——

譲れないものもある。今になって想像以上の罪悪感が彼の胸を締め付ける。それを我慢し、証拠を残さないための処理をしようとコンソールに手を伸ばした……。その時だった。

一発の甲高い銃声が整備室に響き渡った。それは乾いた銃音であり、そこには優しさや同情というような情けは一切ないものであった。

それを聞くのと同時にシャルルは自身の瞳を大きく見開き、啞然とした様子で自らの指を見つめていた。

伸ばした方でない指に挟まれていたディスクが粉々に砕け散っていたのだ。まるで——シャルルの野望が砕け散ったかのように《、、、、、、、、、、、、、、、、》。

「え……」

シャルルは自身の指の間から崩れ、散りゆくそれを呆然として見つめて、そう何が起こったのか分からないという声で呟く。

——何が起こったの？

その疑問に答えて欲しいと、シャルルは慌てて何かが飛来した方向へと身体ごと向ける。そんなシャルルの瞳に映ったのは紅い紅玉のような瞳を持った少年と、その少年が握り締め、こちらに向けている、煙が上がった拳銃であった。

「ど、どうして……？ どうして、ここに飛鳥が？」

そこにいたのは、つい先ほど生徒会室へと向かったはずの紅月飛鳥。そして、その後ろから現れたのは水色の髪が外側にはねた髪型の上学年の女子生徒——更識楯無。

彼女の手にある扇子は開かれ、そこには逮捕という文字が書かれていた。

「お前、自分が何をしたのか、本当に分かってるのかよ！」

「え、な、何のこと……？ 言ってることが分からないよ」

「あらここまでできてまだ白を切るつもりなのかしら？ シャルル・デュノアくん……、いいえ、シャルロット・デュノアちゃん？」

「っ！」

シャルル・デュノア……、否、シャルロット・デュノアはまるでこの世の終わりのような表情をして、その場に石像のように立っていた——

PHASE 30 冷たい銃口（後書き）

ED3↓RIVER>石井竜也<

ご感想お待ちしております。

次回予告〜BGM『明日への橋』〜

誰かのために

その想いは誰しもが持つもの

だが、彼女の犯したことは決して許されることではない

復讐を背負う少年と似た運命を辿ってきた少女の過去が今、明かされる

次回 インフィニット・ストラトス〜怒れる瞳〜 PHASE 31
La・une・marionette〜操り人形〜

その喜劇は突然の終演を迎える……

PHASE 3 1 L a ・ u n e ・ m a r i o n e t t e 〱 操り人形 〱 (前書き)

いつもたくさんのお閲覧とご感想どうもありがとうございます。いよいよ第三章の一つの山場であるシャルロット編に入ります。少々長くなりますが、お付き合い願えれば嬉しいです。

それではスタートします。

OP 3 ↓ 僕たちの行方 ＞ 高橋瞳 ＜

誰かのために

その想いは誰しもが持つもの

だが、彼女の犯したことは決して許されることではない

復讐を背負う少年と似た運命を辿ってきた少女の過去が今、明かされる

とある一室——IS学園会議室。

そこには声はなく、ただ時計の針が動く音だけが小さくこの無音が支配する部屋に響いていた。

白一色と穢れのない部屋のように見える。良く掃除がなされているのか、やはり来客など、それも世界のトップが来るのだから、常に清潔でいなければいけないのだろう。

用務員は大変だ。給料は高いのだろうかなどどうでもいいことを考えてはすぐに忘却の彼方へと葬り去る。さまざまな置物があるが、飛鳥にはその価値などは分からないし、どうでもいい。

この部屋のソファに座っているのは飛鳥だけ。黙って静かに待っている。目の前に虚が入れてくれた紅茶の入ったカップが置かれているが、手をつけたのは一度だけで、すっかり冷めてしまったように湯気は立っていない。

飛鳥は先ほどあったことを思い出していた。

転校初日からあからさまに怪しかったシャルル……、否、彼ではなく彼女の本当の名前はシャルロット・デュノア。正真正銘、性別は女性だった。

彼が、彼女がどうしてもそのように性別を偽ってでもこの学園にや

ってきたのか。それを知るのは彼女たちが来てからだ。飛鳥は焦る気持ち在必死に押さえ込んでいた。

それに飛鳥は怒りを胸の内にもっていた。自分たちを裏切るような行為をした彼女に対して、自分の大切な機体を奪われそうになったことに対して、そして何より、彼女に対してこのような生贄のようなことをさせるフランスーデュノア社に対して、その紅玉のような瞳には怒りの炎が燃え滾っていた。

手を組んでいるが、小さく小刻みに震えている。抑えきれない怒りが、そうやって表に現れているのだ。裏家系の者たちと訓練をした方がいいが、人間性がたたってだろうか、どうしてもそれだけはどうしようもない飛鳥。だが、それを自分らしさと捉え、そう見られている。言葉より手が出ると傍から見れば迷惑なものであるが。

どれくらいの時間がたっただろうか。一分か、十分か、否それ以上かもしれない。永遠のように感じられていた飛鳥であるが、唐突にそれが終わりを告げる。突然ドアがノックされ、向こうから声が聞こえてきた。楯無の声であった。

飛鳥が俯き加減にしていた頭を上げ、ドアのほうに視線を向ける。そして、ドアが開かれ中に数人の人が入ってくる。

生徒会関係では楯無、虚、本音。先頭で入ってきたのは、顔を絶望の色に変えたシャルロット・デュノア。そして最後に入ってきたのは一組の担任である織斑千冬であった。

「あんたも……」

「紅月か……、そういえば生徒会に入ったと言っていたな」

お互いに視線を向け、短く言葉を紡ぐ。飛鳥は座っていたソファから立ち上がり、千冬と楯無に場所を譲る。

ここからは生徒会長と担任が何とかするだろう。飛鳥はそのまま出口近くの壁に身体を預け、腕を組んで話を聞くことにする。

飛鳥が残していた紅茶の入ったカップを回収し、また新しく入れるために移動する虚。

本音が飛鳥の元にやってくる。彼女の表情はクラスメイトを心配する表情であった。

「アーちゃん……」

「仕方ないさ」

——そう、仕方がないんだ。これはあいつが引き起こしたこと。罪を犯したなら、罰を受けなきゃならないんだ。

罪人には罰を……。飛鳥自身が罰を与えると意気込んでいる篠ノ之束と白騎士。もしそれをしたなら、今度は飛鳥自身が罰を受ける立場になるのだろうか。例えそうだとしてもそれを受ける覚悟はある。

そうこうしている内に、話が進んでいるようだった。シャルロットは相変わらずの表情である。無理もない、隠しに隠してここまできたところをすべて崩れ去ってしまったのだから。

「どうして男装なんてして、IS学園に転校して来たのかしら？」
——大体予想はできるけど……。

三人の手元に紅茶の入ったカップが置かれてから話が始まった。
千冬だけがコーヒーであるが。

楯無は目を細め、生徒会長としてシャルロットに対して尋ねる。
その雰囲気は決して嘘は言えない、黙ることも許さないというもの
だった。いつもの彼女とは180度違った姿だ。

千冬は口を一文字にしてシャルロットを見ている。だが、流石は
嘗ての世界最強であり、学園の中でもかなりの権力を持っているも
のだけあってかそのまとう雰囲気というものは常人のそれではない。

シャルルはまるで、蛇に睨まれた蛙のように震えている。それで
も彼女は口を閉ざすことを許されない。それだけのことを彼女はし
てしまったのだ。それが例えどんな理由があろうとも、彼女は確か
に罪を犯したのだから。

「それは、その……、実家にそうしろと言われて……、それに従っ
たんです……」

シャルロットは手を膝に置き、俯きながらも答えていく。やはり
中心は彼女の独断ではなく、彼女の実家……、デュノア社であった。
そして、その社長というのは彼女の父親である。

「実家ね……。つまりデュノア社ね？」

楯無が尋ねると、コクリと頷きながらハイと答える。

「は、はい。僕の父がその社長をしていて、その人からの直接の
命令……。なんです」

その声に嗚咽まじり、その瞳からは涙が雫となって膝に落ちていく。雫が手の甲に落ち、それを伝ってズボンの膝あたりに染み込んでいく。

父……、それは彼女にとっては親に当たる。その言葉を聞いて露骨に厳しい表情を見せるは飛鳥と千冬だ。珍しく感情を一瞬見せた千冬を横目で楯無が見る。人それぞれ何かがあるのだらうということとで自己完結する。

「命令だと？ デュノア社社長は父親だろう？ なぜそんなことを。実の娘に対して……」

「ぼ、僕は、父の愛人の子なん、です」
「「っ！」」

千冬の問いに対して、シャルルは顔色を一層悪くして答える。その答えに、その場にいた誰もが絶句せざるを得なかった。

——なんて奴だ……。

飛鳥は素直に怒りを覚えていた。隣に立つ、いつもは温厚の塊である本音ですら、その表情に小さな怒りが見えていた。

——自分の娘に、愛人との中にできた子どもだからって！ 人として許せない。

飛鳥がそう思っていると、シャルロットは更に言葉を紡ぐ。まるで自分で傷を開くように、その痛みを感じているのか、涙が止まることはない。

「引き取られたのが二年前です……。ちょうど私を生んでくれたお

母さんが亡くなった時、父の部下がやって来ました」

母親——シャルロットにとっては本当の母親であり、その父親にとっては一人の愛人。そんな彼がシャルロットを引き取りにくる理由は高が知れている。

「その時に非公式ではあるんですけど、デュノア社のテストパイロットをやることになって……」

彼女の言葉から、二年間もISの訓練をして来たということだ。それならば男の代表候補生という肩書きをもてるくらいの実力があるわけだ。

「父にあったのは二回くらい、ですね。会話をしたのは数回くらい。普段は別邸で生活をしているのですけれど、一度だけ本邸に呼ばれて……」

そうしてシャルルの口が突然閉じられる。体が震えているのが見える。話していることが、どれだけ彼女にとって辛いことだろうか。飛鳥も彼女とは違った形で家族を失っている。何かを失うことの辛さは分かるつもりだ。彼女にとっては残された父親が頼りだったのだろう。だが、与えられたのは不自由なく過ごせる環境ではあるが、愛情はほとんどなかった。それは今回のことも考えると、分かること。

そして、ようやく彼女の重く閉じられていた口が開く。

「あの時はひどかったなあ……」

まるで自嘲するように言う。

「本妻の人に殴られたんです。『この泥棒猫の娘が!』って。あの時は流石に参りました。母さんも、母さんです。本妻の人にちよつとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったんですけどね……」

他人事のように言うシャルロット。彼女の口から漏れる笑い声は乾ききっており、まるで愛に飢えている子供のようにであった。

その時の彼女の思いというのはどんなものだったのだろうか。突然殴られ、そんな言葉を吐かれれば、誰だって呆然とする他はないだろう。その言葉ははつきりとシャルロットのことを拒絶するものだった。

「それから少ししてから、デュノア社は経営危機に陥ったんです」

シャルロットの実家——デュノア社はラファール・リヴァイブ量産機ISのシェアが世界第3位の大企業である。だが、設立当初から技術・情報力不足に悩まされ、未だ生産できるISが第2世代止まりであることから経営危機に陥ったようだ。

——なるほど……。

飛鳥を含めた——この部屋く、く、くにいるものだけがそれを理解した。つまり、デュノア社の経営危機の回避のため、シャルロットの父親が苦肉の策として、シャルロットを男装させ、二人目の男のIS操縦者という広告塔及び第3世代以降のISのデータ収集のために、ここIS学園へ送り込んだということだ。

「それに……、同じ男子なら日本で登場した特異織斑一夏ケースと接触しや

すいですし。可能であればその使用機体と本人のデータを取れるだろう……、と」

「一夏——白式か」

千冬が睨むようにして見る。一瞬体を震わせ、肯定するように言う。そして、入り口付近で背中を壁に預けて話を聞いている飛鳥に對しても視線を向ける。

「あと飛鳥とヴェステイージ……、今はインパルスなんだよね。そのデータも取ってくるようになって……」

「確かに、アツくんの機体はISにはない武装がたくさんあるから当然ね」

「確かにな」

千冬と楯無が納得するように言う。

シャルロットは完全に父親に利用されているのだ。そして何より彼女もまた、ISというものに人生というものを狂わされた一人。織斑一夏然り、ここにはいない篠ノ之箒も、これは飛鳥の憶測であるがラウラ・ボーデヴィツヒもその一人なのかもしれないと……。

彼女には偶然高いIS適正があった、だから使えるものは使っておこう。彼女に対する父親の認識というのはそれくらいのものであるろう。そして、賢いシャルロットはそれを理解している。理解している上で父親の命令に従っているのだ。もしかしたらもう一度見てもらえるかもしれない。とはいえ、それは彼女の持っていたただの幻想だった。分かっていたことだとしても。

「それで……」

自身のことについて話す事は話し終えたからだろうか。目の前にいる二人に対して尋ねるように言う。

「僕は、僕はこれからどうなるんですか？」

震えを抑えられないのが分かる。彼女は今まさに人生が終わったと思っているのだ。たった16年という人生は、利用され、それがばれて終わる。その恐怖が彼女を襲っていた。

「皆にはばれちゃったし……、本国に呼び戻されるのでしょうか。デュノア社は……まあ、潰れるか、他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、それは僕にとってどうでもいいことかな」

もう関係のないこと、そんな風に言うシャルロット。確かに駒のように、人形のように扱われていた彼女にとって、自身の父親やその会社というのは敵のようなものかもしれない。

「飛鳥と布仏さんも……、ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと今まで嘘をついてて、ゴメン」

クラスメイトである飛鳥たちに振り返り深々と頭を下げるシャルロット。二人は複雑な表情で、飛鳥はその瞳に小さな怒りを見せながら彼女の事を見ていた。

その時だった。突然閉められていたドアを飛鳥が勢い良く開いたのだ。するとその勢いのまま、白い制服を着た誰かが中に転がり込んできた。シャルロットだけが、その人物を見て哑然とした表情をしている。

その人物は突然扉が開けられたのと一緒に中に転がり込んできて、思いつき床と激突した。相当痛いのか、その箇所をさすっている。しかし、四方から向けられる視線に気づいたのか、慌てて立ち上がる。

「何故ここにいる……、織斑」

「ち、千冬姉……、俺は」

一夏はただ向けられる教師としてそこにいる姉からの視線に戸惑うように言う。だが、すぐに視線を彼女の前に座っているシャルロットに向ける。

一夏がここに来たのは、シャルロットの持ち物や身体調査を終えた後にこの部屋に連れてこられた時だ。まさかクラスメイトが担任であり、自身の姉である千冬とクラスメイト、更には知らない上級生二人と共に、見たこともない絶望しきった表情で入っていくのだから、優しすぎる一夏の性格上、見過ごすことができなかったのだ。

もちろん一夏は悩んだ、迷った。自分があそこに行っているのだろうか。自分が思っていることではないかもしれない。逆に自分が思っている以上にまずいことなのかもしれない。だが、一夏を突き動かしたのは何ものでもなく、あの明るい笑顔を見せていたシャルロットがあんな顔をしていたことだ。

彼女に一体何があったのか、そして、何をしたのか。それを知りたかった。友達を見捨てることなど、彼の信念は許さなかったのだ。

そして、ドアに耳を当て、そばだてて聞いていた。ほとんど聞こ

えないものであるが、その時ばかりはIS^{白式}があつてよかったと思う。ISの機能を使い、中で何が話し合われているのかを声を拾って聞いていたのだ。

聞いていてほとんど理解できなかった。否、理解したくなかったのだ。シャルルというのは嘘で、本当の名前はシャルロット・デュノア。そして何よりも同じ男の操縦者だと思っていたのが、まさかの女性だったということ。

ここに来たのは自分と飛鳥の機体のデータを盗むため。そして、それが彼女の父親の命令だということ。そして、彼女が言う言葉を聞いて一夏が動くのには十分なものであった。

動こうかとドアノブに手をかけた、その瞬間に突然扉が勝手に開いたのだ。そして勢い余って床にダイブしてしまったということだ。一夏に対して向けられるのは非難の目であろうか。一夏自身、ここに自分がいいとは思っていない。だが、視線の先にいるシャルロットが絶望しきった表情を見せ、それを見た以上は引き下がれない。

「あら、君は織斑一夏くんね」
「ええつと……、あなたは？」

一夏は千冬の隣にいる楯無から声をかけられ、誰なのかと尋ねる。まだ、二人は楯無が一方的に一夏のことを知っているしかない関係なのだ。ほとんど学園のことを知らない一夏にとって生徒会というものがあるのを知っていると、その会長が誰なのかまでは知らないのだろう。

楯無は自己紹介をし、今後何かと関わるかもしれないということを一夏に伝える。それについて一夏は頭をかしげていたが、隣に座る千冬はそう言う楯無の意を理解してなのか、彼女に対して視線を向けていた。

楯無の自己紹介を聞くやすぐに一夏はシャルロットのことで口を開く。一夏の手は握られており、人目で彼女に対する扱われ方に対して怒りを覚えているのが見て分かる。

「なんなんだよ、それ！ 親がいなけりゃ子は生まれない。それは分かるけど。けどだからって！ 親が子供に何をしていいなんて、そんな馬鹿なことあるかよ！」

一夏のその怒りはシャルロットの父親に向けられたものであり、彼の顔も知らない両親に対してのものでもあった。

織斑一夏に両親の顔を覚えている記憶というのはない。彼は生まれてからすぐに両親に捨てられたのだ。残された姉と二人で過ごす日々。どんな人物たちだったのかと千冬に尋ねてみても、露骨に話すのを嫌ったり、流されたりと知ることとはできない。

一夏がもっている怒りはもちろん千冬にもある。彼女の胸にくすぶっている捨てられたという過去がどうしようもなく蘇ってくるのだ。そして、目の前にいる少女が嘗ての自分たちのように見えてならない。

「お前が怒ったところで何も変わらないさ」

「っ！ 飛鳥！？ 何でお前がここに……」

一夏は後ろにいる飛鳥にようやく気づいたのか驚いたような表情

で見てくる。そこまで驚かなくてもと内心思う。

「俺も生徒会員だからだよ。一応役職は副会長だ」

「マジかよ!？」

一夏はまた同じように驚いた表情で言う。いい加減飽きてきた。そんなことよりも一夏は話を戻すように言う。

「飛鳥はなんとも思わないのかよ!」

「分かるさ!」

「っ!」

突然目の前で怒鳴ったために、一夏は気圧されるように数歩たじろぐ。飛鳥とて、こんなことを引き起こしたシャルロットの父親も、それに従ったシャルロット自身に対してもなんとも思わないわけではない。

だが、ここで言いたいことを言って、それをぶつけるものがないからとシャルロットに聞かせていいはずがない。何より利用され、大きな不安と恐怖をその胸に抱いて過ごしてきたシャルロットが一番この部屋の中では辛い思いを今感じているのだ。

それを言われ、一夏はただゴメンと呟くだけだ。良くも悪くも彼は優しい。だが、それは時として人を傷つけることもあるのだ。それを自覚しない限り、一夏がいくら守るといっても、知らず知らずの内に傷つくものが出てくる。

飛鳥は一夏にそう言い終わると、次にシャルロットへと視線を向ける。彼女もその視線に気づくと、流石にデータを破壊されたとは言え、奪ったことには変わらないのだ。申し訳なさで、すぐに顔を

背けた。

「それで、お前はどうするんだ？」

「何を言ってるの飛鳥。どうするんだって……、もう時間の問題じゃないかな？ フランス政府もこの真実を知ったら黙ってないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋じゃないかな？」

飛鳥の問いに対して、シャルロットは諦めたような表情を崩さずに、そんな口調で言う。産み落としてくれた母親とは死に別れ、そんな両親の片方である父親にとっては娘ではなく操り人形マリオネットとされていた。

飛鳥の紅玉のような紅い瞳に映るシャルロットの姿は、人の形をして、操る主を失い、ぐったりと動きを放棄した操り人形マリオネットのようしか見えなかった。誰かが糸を動かしてくれないと何もできない、そんな操り人形に……。

「そんなことはどうでもいい！ お前はそれ運命に抗おうとしないのかよ！ お前はこれでいいのかよ！ そこで歩みを止めるのか？」

飛鳥が怒声にも似た声でシャルロットに言う。もう驚くも何もしない。彼女はただ悟ったような表情で言う。

「僕にはそんな選ぶ権利がないから、仕方ないよ。もともと僕はそれくらい運命の存在だったんだから……」

その瞬間の彼女はもしかすると自分が辿っていた未来のように映っていた。両親を殺され、復讐したくともそんな力はあらず、守りたくとも守るものもなく、守るものがあっても守るための力はあらず、全てに絶望し、過去を憎み、現実から逃げ、未来をも捨てる。

そんな紅月飛鳥がいたかもしれない。

だが、ここに立つ紅月飛鳥はそんな紅月飛鳥ではない。両親を殺されたが、復讐するための力を求め、守りたいものがあり、それを守るために力を求め、絶望を跳ね除け、運命に抗い、過去を忘れず、現実にて力を求め、未来にてその復讐を果たさんと思っている紅月飛鳥がいる。

だが、それと同時に激しい怒りを感じていた。目の前にいる少女は自らの運命に屈し、それに抗おうともせず、ただ流れに任せるようにしているだけ。あきらめ、全てに絶望したというような顔が、そこから立ち上がるうとする気を感じないことが飛鳥にとってはひどく気に入らなかった。

「このやろう！」

そう叫ぶが早いか、手が出るのが早いか、シャルロットの襟首を掴み、飛鳥は立たせる。突然のことに部屋の仲は騒然とし、シャルロットに関しては啞然とした表情でこちらを見ている。

軽い、軽すぎる。

そう思うように、やはり彼女は女だったのだ。男としては華奢な体、細長い指、恥ずかしがりやな様子。疑わしかったが、やはりそう見ていておかしくなかったのだ。

そんなことよりも、今は目の前の彼女だ。飛鳥の燃えるような紅玉の瞳がシャルロットの瞳を射抜くようにして見ている。

怖い。

シャルロットは視線を外したかった。顔を背けたかった。だが、それをも許さない飛鳥。

「確かにお前がやったことは決して許されるものじゃない！」
———だけど！」

「だからって、全てをそこで投げ捨てるのかよ！　少しは抗おうとしないのか、お前は！」

飛鳥はまるでIFの自分を罵るように、それでいて叱咤激励するように叫ぶ。シャルロットが見せるその痛々しい微笑が気に入らない。そのあきらめていますと言っている表情が気に入らない。操^親る主に捨てられたから、その命令がないからもう動けない、進めないと言うようにまるで事切れた操^{マリオネット}り人形のようにしているのが気に入らない。

「そんなこと……。どうして、飛鳥なんか……。———言われなきゃいけないの！？　何も知らないくせに！　無理なこと言わないで！」

シャルロットは自身の襟首を掴んでいる飛鳥の手を振り払い、たずまいを直すことも忘れるくらい、激昂して叫ぶ。手を胸に当て、飛鳥の言うことに対して反論する。

一夏はまさかいつも温厚の塊であるシャルル——シャルロットがそこまで激昂するとは思っても見なかった。そのために驚いて、開いた口がふさがらないと言う状態だった。

「お母さんが病気で死んで、唯一救いだったのはほとんど会えないお父さんだった……。でも、その時お父さんから声がかかったとき

は、どれだけ嬉しかったか。でも、僕は所詮愛人の娘。本妻に受け入れられるわけがないんだよ。それでも、こんな僕に役割をくれたんだ！」

精一杯の反撃だろうか。涙が溢れた状態で、睨みつけながらも飛鳥に向かってシャルロットはこの場にいるものたちに見せたこともない、感情を爆発させた姿を曝け出していた。

データを盗んで来い

「操り人形って言う役割をかよ……」

「っ！」

「飛鳥！」

そう飛鳥が声低く言う。ハッとした様にシャルロットは目を見開く。例え役割を与えられたとて、それを拒否することもまた、決して避けられなかった運命じゃない。

一夏も飛鳥の言い方が全く無遠慮なものであるために少し自重しろとも言いたかった。

一夏も何とかしたいという思いはあるものの、一般人の自分が何を言おうと変えられる事態をよりは超えているのだということでも無力さをかみ締める。

どうして自分は……。目の前にいるのは、まるで捨てられた子猫のように見えた。雨に打たれたように顔を涙でぬらし、助けも救いの希望もなくそこにいる少女。

つい最近までは自分だけだと肩身狭い思いをしていた一夏であるが、シャルロットが来てくれたときはどれだけ嬉しかったか。

しかし、そんな彼女は男ではなく女。男装をしてまでここに来たのは自分と目の前に立つ飛鳥の機体のデータを奪うため。

なら……。

——今までの1週間はなんだったんだよ……。

一夏には目の前にいるシャルロットが触れてしまえば、まるでそこにいることが幻想だったかのように消えてしまうようだと思った。

主を失った操り人形マリオネットは動かない——

PHASE31 La・une・marionette（操り人形）（後書き）

ED3↓RIVER＞石井竜也＜

少々矛盾のあった飛鳥の言動ですが、そこはすいません。

ご感想お待ちしております。

次回予告／BGM『明日への橋』／

手を差し伸べるもの

しかし、その手は届かない

自らの運命に涙し

自らの無力さに涙す

復讐を背負う少年の目に映るは嘗ての自分

その姿が再び脳裏に蘇ったとき、少年が移す行動とは……

次回 インフィニット・ストラトス／怒れる瞳／ PHASE32

断ち切られた糸

その少女は闇を彷徨う……

PHASE 32 断ち切られた糸 (前書き)

連日IFを書いていた泉海斗ですが、こちらが基本ですからね。でも、読んでくださった皆様。どうもありがとうございます。

IFはあくまでもIFですので、こちらではなるべくハッピーエンドで終わらせたいと思います。いえ、ハッピーエンドにしたいです。とりあえず、山場のひとつを超えることから。

いつもたくさんのご感想と閲覧ありがとうございます。今後ともよろしく願います。

それでは本編スタートします。

手を差し伸べるもの

しかし、その手は届かない

自らの運命に涙し

自らの無力さに涙す

復讐を背負う少年の目に映るは嘗ての自分

その姿が再び脳裏に蘇ったとき、少年が移す行動とは……

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳く

PHASE 32 断ち切られた糸

1

——ここはどこなんだろう……。

締め切られたカーテン。重苦しく、呼吸をすることすら厳しいほどの雰囲気。明かりが点灯しているが、まるでここは牢屋のように思えた。

「そ、そうだ特記事項第二！ それなら！」

「え？」

一夏が何かを思い出したかのように言う。シャルロットに関しては、突然の一夏の言葉を聞いても理解が追いつかない。もはや自分には救いはないと思っているから。

「この学園にいる限り生徒はありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない。本人の同意がなければ、外的介入は原則として許可されない！ だから、ここにいろ！」

一夏がこれで行けるという満面の笑みを浮かべていた。シャルロットもまるで再び糸を引かれた操り人形が動いたかのように、それでも先ほどの絶望しきった顔をしていたとは思えないほどの笑みが見えた。

助かるかもしれない。そう思ったときだった。

「それは無理よ」

きらりと光はその救いの糸を切る、鋭い刃を持ったハサミが見えた気がした。それをちらつかせたのは扇子を乾いた音で閉じた楯無であった。残念だけど付け加える彼女に対して、一夏はということだと突っかかるようにして言う。

「確かにその特記事項には書かれているけど」

「なら何で!？」

「おまえも言っただろうが。原則はってな。日本人で日本語の意味も知らないのかよ」

どういうことだと睨むように見る。シャルロットに関してはもはや何がなんだかわからないという状態だ。ようやく助かったと手にかけて目の前に、まるで奈落の底に突き落とさんとして立ちほだかるものがいるのだから。

「お前はシャルル……、シャルロットを助けたいと思わないのかよ! 友達じゃないのかよ!？」

一夏は猛然と飛鳥に突っかかっていき襟首を掴む。以前やられたのとはまるで逆の形になっていた。だが、一夏がどんなに圧しても引いても、まるでそこに根を這ったかのように飛鳥は微動だにしない。ただそこにある紅玉のような瞳が物語っている。

“いつまでもヒーローごっこしてるんじゃないやねえよ!”

睨み付ける紅い瞳は炎のように燃えている。

その色は怒りを示していた。

飛鳥とて悔しくないわけがない。それはたった一週間とはいえ、

あの時力がなかった飛鳥が何もできなかったように、今無力な一夏もこの場において、できることなどないのだ。

「今回は原則という範疇を越えているわ。例外的扱いとして、処分を考えないかね」

「そうだな。私が学校側に掛け合い、フランス政府とデュノア社に事の経緯を話そう」

——どうなるかは目に見えているがな……。

自身の過去と照らし合わせると、そう言う答えが嫌でも浮かんでくる。シャルロットに対してそのような指示を下したものが、ハイそうですかと取り合うとは思えない。

——おそらくこの事件をなかつたことにするだろうな。

千冬は苦虫を噛むように表情を歪める。自分の生徒がここまで苦しんでいたと言うのに、自分は一体何を見てきたのだと。教師だからと、何もただISの知識や、操縦技術を教えれば良いというだけではないというのに。

こんな自分よりも、生徒たちの行動に対して一喜一憂して慌しくしている真耶の方がよっぽど教師らしい、と思い、自分はまだまだ甘いと自らを省みる。

「デュノア。お前に対してはフランス側との話が付くまで監視を付けさせてもらう。拒否権はないぞ」

シャルロットは力なく項垂れ。ハイと答える。まるで壊れたブリキロボットのよう動きは緩慢だ。糸が切れた人形ののように、ゆっ

くりとソファ―に座りなোস。もう彼女には立っていらるだけの自信が、今はなかった。

「織斑先生」

「どうした、更識。ああ、処分についてか」

楯無の言葉に、千冬はどうしたと尋ねる。生徒会長として、生徒を守れなかったことは、楯無にとっても悔しいことである。だが、こうなってしまった以上、少しでもシャルロットの将来のことを考えた上での処分が必要だ。それに、3年はこの学園にいらるのは確かだ。それからのことを考える時間は十分にある――彼女はどうか知らないが。

「彼女の監視はこちらから従者を一人つけますね」

「更識家のか……。下手な奴よりはましか」

更識家は裏社会に生きるものたちである。そこに関わる従者なのだから、下手な教師よりもその責務を果たせるだろう。シャルロットがどうとるかは分からないが、彼女には拒否権というものがない。

「今日すぐには可能なのか？」

「既に通達は行っている筈です。夕方までには着くと思いますよ」

そうかのため息をつく。シャルロットに視線を向け、話を向ける。

「デュノア。お前には監視が付けられるが、会談の結果が決まるまでは普通の生活をしていても構わない」

シャルロットは千冬から普通の生活と言われても、もう何も感じられない。彼女が望んだことというのは一体なんだっただろうか。

富だろうか、名誉だろうか、欲しいものを与えられると言う名に不自由のない生活だろうか、IS操縦者としての誇りだろうか。

——違う、違うんだ。僕が望んでいたことは——

シャルロットの脳裏に浮かぶのは、父がいて、母がいて、その間に笑顔で二人と手をつなぎ、幸せそうにしている自分がいるという、ただどこにでもありふれた家族像だった。

シャルロットが本当に欲しかったのはただそれだけ。何もお金も、名誉も、権力も必要がない、どこにでもある家庭像。それがひび割れて行ったのは、彼女の母親の死だ。

その後の本妻との出会いでも、彼女は受け入れられることはなかった。そして、父親もまたシャルロットとの面会はほとんどなく、ただ与えられら所に住み、与えられた役割をこなすことしかできなかった。

そんな父が自分をどうするだろうか。捨てるだろうか、それとも守ってくれるだろうか。どちらにせよ、今のシャルロットにはこの後のことなど考えられるほど混乱は収まっていない。

「だが、今回の件については他言無用だ。もちろん織斑。お前もだ」

「わ、分かったよ」

「ハイ、分かりました、だ……。紅月、分かったな」

「ハイ、ワカリマシタ」

千冬の言葉に対して飛鳥は、誰が聞いても分かるように無理やりな敬語で言う。千冬は小さくため息をつくが、それに対しては何も言うことはなかった。それを注意していることよりも、今は目の前

の問題を何とかしなければいけない。

彼女がどうなるのか、ここにいる誰も知る術を持っていない――

2

「それじゃあ一夏……」

「え、あ」

シャルロットが一旦今日まで生活していた一夏と同じ部屋に戻ってきて、荷造りをしていた。一夏はそんな彼女の背中をただ見ているしかできず、手伝うという選択肢すら引くことができなかった。手早く荷造りを終わると、扉のあたりで待っていた千冬がこちらに視線を向ける。

その視線でシャルロットに早くするようにと言っているように見えた。そんな姉に対して、一夏は何かを言いたそうな仕草を見せるも、それだけだ。

「色々ありがとうね、それと――ごめん」

「そんな……、俺は別に」

シャルロットになんて声をかければいいのだろうか。気にするな、大丈夫だ、きっと何とかなる。いろんな言葉がのどまで上って来てはすぐに下がっていく。口をまるで酸素を求める魚のように開け閉めするだけだ。

「いいんだよ。それに、もうしばらくは普通に生活できそうだから。少しでも思い出を残したいな……」

「っ！」

スウッと息を吸うだけだ。それはただ驚きで反射的にした行動。一夏から見て、シャルロットの瞳には既に未来は映っていないように見えた。

——何でだよ！ どうしてそんな目をするんだよ！

一夏は戸惑うばかりで何もできないでいる。ゆつくりとベッドに腰を下ろしていたシャルロットが何かを振り切るかのように、無言で立ち上がると、一夏に一瞥もくれずにそのまま入り口へと歩いていく。

また明日になれば会える。しかし、それは以前のように笑っていただけるものではない。お互いに仮面を被り、周りに嘘をつかなければいけない。箒にも、セシリアにも、鈴にも……。

「シャ……」

「やめて！」

一夏がシャルロットを呼びとめようとしたところで、彼女自身が振り向くことをせずに叫ぶ。千冬の厳しい視線が一夏に向けられる。今の一夏に、彼女を引き止めても、できることはない。

シャルロットはそう叫んだっきり口を閉じ、千冬に連れられてこの部屋を出て行った。扉が閉まる音が、やけに一夏の耳に響いていた。まるで二人の間に、高すぎる壁が形成されたかのように感じられた。

——なんで……。

「何でこうなるんだよ！」

叫び声と共に振りぬかれた拳が壁を突く。人の手で壊されるよう
なつくりにはなっていないIS学園の寮。当然傷つくのは壁ではな
く、殴りつけた一夏の方。だが、それもお構い無しに殴りつける。
まるで溜まりすぎた怒りと無力さを吐き出す矛先を求めるかのよう
に――

「クソ！ チクショウ！」

まるであの時の自分と何も変わっていない。そんな自分を消さん
とばかりに拳を叩きつけるが、最後の一撃を加えたところで、膝か
ら崩れ落ちる。拳は壁からずり落ちるようにして下がっていく。

またいつものように朝起きて、一緒に食事を摂りに行って、みん
なで喋って、勉強して、みんなと昼食をとって、ISの訓練をして、
夕食を食べて……。そんなごく当たり前な生活が続くと思っていた。

なのにそれがたった一つの出来事^{衝撃}で終わりを告げた。ありふれた
日常を、続くと思っていた当たり前を壊したのはなんだ。

「飛鳥……」

一夏の口からこぼれてきた名前の主――紅月飛鳥。

一番傍にいたかもしれない一夏が気づかず。どちらかというと距
離をとろうとしていた飛鳥は、誰よりも先にシャルロットが女であ
ったことに気づいた。そして、何より、この状況になったのはその
事実と共に、彼女のとった行動を知らせたから。

飛鳥を憎んでも意味はないこと分かる。あの時どうしてそのまま

黙っていてくれなかったんだと言ったとて、なら自分に何ができたかというのだろうか。

特記事項を盾に取ろうと、あれはあくまで原則。いつだって例外はあるものだ。既にシャルロットとそれを指示したデュノア社社長——シャルロットの父親はそれを大きく逸脱したことをしたのだ。

ならこの怒りと無力感を何に向ければいいのだ。白式チカラを手に入れたから、これで守れると疑いを持っていなかった。なのに友達すら守れないなんて——

肩を震わせ、涙を流すのを我慢している一夏。そんな溢れない涙の代わりに、壁に線のように描かれた血が、まるで涙のように見えた——

3

シャルロットに用意された部屋というのは、千冬が生活している部屋からそう遠くない部屋であった。つまりは普段教師たちが使用している寮の階にある部屋というわけだ。

旅行カートやら、大きな旅行バッグを持ち、その中へと入っている。それほど大きく違った構造にはなっておらず。違ふとしたら、ベッドが一つあるくらいであろうか。

中に入るように言われ、言われたとおりに足を踏み入れる。雰囲気は誰も使っていなかったために、無色というのが妥当であろう。

全てが真っ黒に染まってしまったシャルロットとはまるで真逆の光景。自分ももう一度このようにすっきりとして、やり直しができ

たなら……。

「それでは、デュノア。今日一日はこの部屋からは出るな。食事が摂りたいなら彼女に言うといい。家事全般に関しては問題ないらしい」

「お任せください」

畏まったように言う女性。どう見ても多少の訓練は受けたシャルロットから見ても、全く隙が見えなかった。生徒会長楠無の従者であるらしいということは聞いているが、一体何ものなのだろうかと思う。

「明日以降は会談の結果が分かるまでは普通に生活している。私としても何とかしてやりたいが……」

——流石にここまでやられると、な。

その言葉は精一杯の担任教師としての言葉なのだろう。シャルロットにとってはそれは言われても言われなくても同じようなものであった。

「いいんです——今は休みたいので……」

「そうだったな。それではよろしく頼む」

千冬に背中を向け、ベッドの方へと向かうシャルロット。蚊の鳴くような、弱弱しい声でそう言う。千冬もこれ以上彼女に何かを言っても意味はないと思ったのか、従者の女性に頼むと一言言い残して、その場を後にする。

従者の女性が恭しくお辞儀をして、千冬が去っていくのを見ている。そして、姿が見えなくなったところで従者の女性も部屋の仲へと入る。シャルロットには、扉が閉められ、鍵がかけられる音がま

るで牢獄にでも閉じ込められたもののように聞こえた。

実質そう捉えてもおかしくはないのだ――

シャルロットはベッドの上に寝そべり、身体から力を抜いて目を瞑る。これが夢であったならいいのにと。そう思ってもう一度目を開けてみても、自分がいるのは牢獄のような部屋。透明な雰囲気の中にいる、異色の存在である自分。

ベッドの近くにあるテーブルの備え付けである椅子に腰掛け、黙って持ち込んでいた、何やら難しそうな本を呼んでいる監視役の女性。時折目だけをこちらに向け、視線を送ってくるのが感じられる。

ふと疑問に思ったことだった。ゆっくりとしていたからか、大分頭も冷静になってきたのが分かる。

どうしてあの時、飛鳥はそこまで怒るような態度を取ったのだろうか、と。確かに友達に対して、あきらめるななどと言う事はできるが、そこまで言うとは思わなかったのだ。

まるで飛鳥が自分自身に対して怒りをぶつけているように、シャルロットは不思議な感覚を持っていた。

不思議に思ったシャルロットは、無意識の内に尋ねていた。

「あの、飛鳥って過去に何かあったんですか？ あそこまで怒りを露にするのって……、余程のことがないといけないんじゃないじゃ」

シャルロットは起き上がり、そう尋ねる。目線の先にいる女性は眉一つ動かさずにシャルロットへと視線を返す。

閉じられた本の音が、まるで二人のいる世界がまったく違うことを示すかのように聞こえる。それは境界を生むように、切り裂かれた音のように……。

しかし、その女性の口から出された言葉は、シャルロットが求めていたものではなかった。

“私の口からは言えません。それに、あなたが知ったとて、何か意味がおりでも？”

そう言う彼女の声色は透き通る宝石のように美しく、それでいて、まるで氷細工のように冷たいもの。

答えを求めようとも、彼女に突きつけられているのは、先の見えぬ真つ暗な未来だけであった――

4

何かがつぶれる音が生徒会室に響いた。先ほど買って来ておいた缶コーヒ―の缶を、飛鳥が握りつぶしていたのだ。まだ中身が残っていたために、飛鳥の手は黒い液体で染まる。

しかし、飛鳥にはそれが真つ赤な液体に見えた。まるであの時の妹の腕を抱いたときに滴った真つ赤な鮮血のように……。自らの、今も痛々しく残る傷から出てきた真つ赤な鮮血のように……。

手が震える。あの時のことが鮮明に思い起こされる。

爆発の熱で異様に熱くなっていた妹のちぎれた腕が、飛鳥の抱く

胸の中で徐々に冷たくなっていく。

家族を一瞬の内に奪われ、己の無力さを突きつけられた飛鳥。胸に激しい喪失感があった。その後彼の周りに残ったのは家族が使っていたものだけ。しかし、それを残しておいても意味はないということ、あらかたは売りさばいた。

ホームヘルパーがいたために、必要最低限のものがあればいいと思っていた。近くには更識家と布仏家もあったから。何かがあればその家々も動くという体制をとっていた。

あの時の飛鳥はまさに先ほどまでのシャルロットのような状態だったのだろう。あの時の彼女の姿というのは、嘗ての自分と重なっていた。

そして、一度飛鳥は逃げた。仕方がないといえばそうかもしれないが、今の飛鳥からすれば、あれはあのときの辛さから少しでも早く解放されたいという思いからの逃避だった。

自殺を図ったということだ。

あの時は運よく一命を取り留めていたが、少しでも遅かったら今ここにはいなかっただろう。もしかしたらまた違った運命になっていたかもしれない。

だが、飛鳥は確かにこの場所にいる。それは確かなことだ。それのせいで運命が変わってしまったかもしれない。だが、変わってしまった運命を変えることもまた可能なのではないか。

シャルロットに対して怒りに任せた言葉をぶつけたのは少々行き

過ぎた行為だったかもしれない。そう思いながら飛鳥は汚れてしまった手を虚が手渡してくれた濡れタオルで拭く。その白いタオルが黒く染まっていた――

5

その染みがドンドンと白い部分を染めていく。まるで怒りで心が広がっていく飛鳥の心を表しているようだ。

だが、あの時はああ言わざるを得なかったのだ。まるで――

「IFの自分を見ているようだったから？」

「っ！」

「？」

突然隣に現れた本音が言う言葉に、飛鳥は核心をつかれたためか、驚きを隠せない。時々彼女はこうやって鋭い時がある。いつもはのほほんとしているのにと、飛鳥はそう思いながらも、驚きに染まっていた表情を落ち着き払ったものへと変える。

「だってあいつ、何もかもを諦めていやがる」

隠しきれない怒りなどのさまざまな感情というものが、握り締める行動となって現れる。タオルから、吸い込んでいたコーヒーが床に雫となってこぼれていく。まるで心のカップに入りきらない、感情が溢れているかのように。

「もしかしたら俺が辿っていたかもしれないけど。それでも！アイツの目、すべてがもう終わりましたっていう、あの目が気に入らないんだ！」

「昔のアーちゃんもそういう目をしてたね」

「……、そうかもしれない、いや、そうだな」

裏社会に関わる家のものとの関係を持っている飛鳥。否が応でも、社会の裏の汚さというものは知らされている。そのために、これからシャルロットが辿るであろう未来を予想することに難くはなかった。

「このままじゃ、十中八九、彼女は切り捨てられるわね」

遅れて生徒会室に入ってきた楯無がそう言う。三人の視線が彼女へと向けられた。いつもの飄々とした顔ではなく、生徒会長としての威厳のあるものであった。考え込むようにたたまれた扇子を額に宛がう仕草をする。

「娘だとはいえ、彼女は愛人の子。それにこんな命令を与えるなんて、やると思えばやれるわね」

普通だけでは支えきれない社会。見えないところで汚いことに手を出さなければいけないほど、厳しい状況だったのかもしれない。今の世界を見ていても、ISというものを中心として、さまざまな国家間で開発競争というものが絶えない。それぞれの国では会社が潰れては新しい会社が建てられる。デュノア社もまた、そうならないようにということで彼女を利用したのだろう。

だからといって、人をまるでモノのように扱うなどと許されるはずもない。飛鳥の怒りはシャルロットに向きつつも、その先にいるだろうその父親に対しても向けられていた。

「でも、彼女が犯した罪は重いわ。これは国家間の問題に発展して

もおかしくない——もしそうなるなら……」

「フランスは潰れたも同然だ。当たり前だろ。それだけの愚行をしたのだから」

吐き捨てるように言う飛鳥。だが、胸の奥では彼女に対しては非情になりきれないところもある。確かに操り人形のように、その命令を受け入れたシャルロットであるが、彼女にはまだやり直せるチャンスはいくらでもある。

だが、このままでは楯無の言うように、シャルロットは父親に捨てられる可能性がほぼ100パーセントである。娘の立場よりも、会社の存続を選ぶであろう。もし彼女を一人の娘として愛していたならば、こんなことをするわけがない。

それは押し付けになるのだろうか。彼女自身がそれを望んでいるのか分らない以上。もしかしたら自分が考えていることは、かえって彼女を追い詰めるかもしれない。

「それでも、手を差し伸べるつもりなの？ 確かに彼女にはまだチャンスはあるけど。彼女にとっては更に苦痛になるかも」

「確かに、そうかもしれない……。でも、だからって！ それぐらいで運命に屈するほど、人は弱くない！」

嘗て暗闇の中にいた自分に対して手を差し伸べてくれた彼女たち。運命は変えられる。大きく変わってしまったこの運命を、また大きく動かすために、飛鳥たちは動き出す。

それがどう作用するかは分からない。それでも、闇のその先にある小さな光となれば——

PHASE 32 断ち切られた糸 (後書き)

ED3↓RIVER>石井竜也<

いかがでしたでしょうか？ご感想をいただけると作者も嬉しく思います。

それでは次回またお会いしましょう。

次回予告〜BGM『明日への橋』〜

嘘

仮面を被りいつものように過ごす者たち

そんな時、ついに運命の分岐点に差し掛かる

海を超えてやってくるシャルロットの父

対面する織斑千冬とシャルロット・デュノア

そんな彼女たちに突きつけられる社会の黒さ

そして、シャルロットに突きつけられる、己の存在——それは幻想

切る手札は少なく、相手には切り札の存在

運命に屈しようとした時、再び衝撃が運命を変える

インパルス

次回 インフィニット・ストラトス（怒れる瞳） PHASE33
操り主

闇の向こうに、小さき希望^光を燈せ！ インパルス！

PHASE 33 操り主（前書き）

いつもたくさんの方の閲覧とご感想どうもありがとうございます。

今後とも読者の皆様楽しんでいただけるように頑張っていきたいと思っております。

今後ともよろしくお願ひします。

それでは本編スタートです。

嘘

仮面を被りいつものように過ごす者たち

そんな時、ついに運命の分岐点に差し掛かる

海を超えてやってくるシャルロットの父

対面する織斑千冬とシャルロット・デュノア

そんな彼女たちに突きつけられる社会の黒さ

そして、シャルロットに突きつけられる、己の存在——それは幻想

切る手札は少なく、相手には切り札の存在

運命に屈しようとした時、再び衝撃が運命を変える

インパルス

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳＜

PHASE 33 操り主

1

あれから一週間ほど経っただろうか。一夏とシャルロットの二人はお互いの間に見えない壁のようなものを感じつつも、平常を装うようにして普通に男友達として付き合っていた。

しかし、一度シャルロットの性別が女であると知ってしまった一夏は、流石に鈍感でも彼女の言動に対する違和感というものを感じていた。スタイルからしても、女なら羨ましいものであるうが、男としては少々心もとない。とはいえ、守ってあげたいという、美少年の雰囲気は相変わらず健在である。

他のクラスメイトたちは二人の様子にはほとんど気づいていない。一夏の幼馴染であるはずの筈と鈴ですら、一夏の心の迷い――助きたい、でも、どうすればという葛藤をしているということに気づいていない。

いつものように昼食をとり屋上へと向かうことも、当たり前のように続けられている。シャルロットの胸には嘘を付いていることへの罪悪感が、以前に増して大きくなり、それに反して、残りの学園生活を楽しもうというような、変に達観した思いを胸にもつていた。

昼食時はいつもと変わらずに笑いに溢れたものであった。一夏を中心に好意を向けるもの、友達としているものがそれぞれの弁当を広げ、会話を挟んでのゆっくりとしたひと時を過ごしている。

そんなシャルロットに対して、少し離れたところから監視の女性の姿が見える。とはいえ周りからはほとんど気づかれるようなところには居らず、シャルロットがギリギリ気づけるようなところにいる。

楽しかったはずのこの時間。しかし、一夏とシャルロットの笑みにはどこか陰りがあった。それでも周りに気を遣わせまいと、無理に仮面を被り続けるしかできない。

もし彼女たちがこのことを知ったらきっと何か行動しようとする。それが彼女たちの優しさであり、シャルロット……、この場ではシャルルであるが。彼に^{彼女}に対する親友としての当然の行動だと。

それはとても嬉しいことであることの反面、彼女にとっては辛いことでもあった。嘘に嘘を重ね、親友として見てくれていたものたちに対して、裏切りとも取れることをしてしまったのだ。例えばそれが父^{ウエ}親から命じられたことだったとしても、彼女はそれを受け入れ、実行してしまったから。

「それにしても昨日はどうしたのよ二人とも」

幼馴染である鈴が日々腕を上げている酢豚を箸で掴みながらそう言う。それを一夏の口に無理やり詰め込む。

「味はどうよ？ 一夏」

「むぐぐぐっ！ ぷはっ！ 無、無理やり入れるな、鈴！ 死ぬとこだったぞ！」

何とか酢豚を飲み込んだ一夏は、咳き込みながら目じりに涙を浮かべてそう言う。

「確かにうまいけどさ」

「そ、そう？ 良かったわ」

味の感想を告げる一夏。確かにうまかったが、もう少しゆっくりやって欲しかった。その行為がどういう意味を持っているのか、一夏は理解していなかった。それを見てムツとしているのは、鈴の反対側に座っている同じく幼馴染ファーストの箒だ。

完全謹慎処分

一週間独房入りという処置を受けた彼女であるが、あれ以降、反省した色は見えているようであるが、更に一夏への好意が強まったように見える。それはひとえに一週間も会えなかった事からの反動であろうか。

「い、い、一夏。私も弁当を作ってきたから食べてくれ」

「お、おう。悪いな。ありがとうな」

「い、いや、別にいいんだ」

顔を赤らめながら、一夏に押し付けるようにして手作りの弁当を手渡す。胸あたりに突きつけられた一夏はとっさにそれを受け止める。綺麗なナプキンに丁寧に包まれた弁当。一夏は作り笑いではない、心からの笑顔でお礼を言う。

お礼を言われた箒もまた、顔にある朱の色は取れないが、嬉しそうにして、自分の弁当に箸をつける。

「うわあ」

一夏が感嘆の言葉を漏らす。久しく彼女の手料理というものを食べていなかったためと、明るい話題というものから離れていたため

に思わず胸が温かくなるように感じた。

流石に酢豚だけでは食は進まない。

先ほど同席していたセシリアの作ってくれたサンドイッチを食べたのであるが、一瞬三途の川のようなものを見た。どうやらセシリアは貴族出であることから自分で料理をつくったことがないらしい。流石に女性のアドバンテージとして料理は必須である。決心を決めて今日、こうしてためしに作ってきたようであるが、如何せん、見た目はよくても味がまた摩訶不思議なものであった。

甘かったと思ったら辛く、そしてすぐにしょっぱいを通ったのすっぱいとくると流石の味覚に自信のある一夏だとはいえ、それには耐えられない。

流石にセシリアもそれを見て、自分で食してみたのだが、一秒も経たずに仕舞い込んでしまった。その後、セシリアは背中を向けて自らの料理の腕の未熟さを通り越したそれに絶望し、涙する。

流石にこのままではいけないと、胸の内では今度従者に頼んで手ほどきを受けようと、密かに決意していた。

「この唐揚げうまいな」

「そ、そうか？　そういつてくれて嬉しいぞ。お前の好物だからな」

その表情を見ていても、おいしそうに食べていると言うのが分かる。ご飯もあるのでおかずも自然と胃の中へと消えて行く。もちろん鈴の作ってくれた酢豚も白米に良く合っている。

この様子を傍から見れば、楽しそうに昼食時を過ごしている高校

生にしか見えまい。だが、一夏とシャルロットから見れば、この瞬間はまるで幻想のようだった。

「篠ノ之さんも鳳さんも料理上手だね」

そう言うシャルロットであるが、彼女もまた、料理が得意なのか、手作りのものがそこにあった。比べるものではないが、一夏が箸をつけている二人の弁当と遜色ない出来栄であった。

「そう言うシャルルだって、うまそうな弁当じゃないか。料理得意そうだな」

つまんだ料理を口に運びながらそういう一夏。そういわれて、嬉しそうに笑うシャルロット。箸と鈴は何故かその笑顔を見てむっとした表情を見せる。シャルロット——シャルルは男だというのにどうしたわけか、一瞬だけ危機感を感じたのだ。

——やっと笑った。

一夏は内心ほっとしていた。ずっと思い詰めたような表情を隠そうと、無理に平常を装っていたシャルロットの姿を見るのは辛かった。

一夏はふと空を見上げる。こんなにも空は晴れ渡っているというのに、その胸の内にある心は晴れていないのを感じていた——

2

「デュノア、ちょっとこっちに来い——話がある」

「は、はい……」

——とうとう、なのかな。

あの会議室でのやり取りから、一週間ほどが経っていた。シャルルにとってはそれ以上にも感じていた。ある日の夜、いつものように一夏たちとの訓練を終えてから、一通りのことを終え、そうしていたら既にこんな時間になっていた。

勉強も調整も終えてしまったためにやることはなく、かといって監視役の女性のように本を読むなどという気にもなれなかった。日に日に募る不安。

そして、突然部屋をノックして、中に入ってきた千冬。彼女の視線から、とうとう来てしまったのだとシャルロットは読み取った。

「ようやくフランス側及び、デュノア社との都合が付いてな。明日こちらに伺うそうだ」

「そ、そうですか」

シャルロットは自分が予想していたとはいえ、いざこうなると胃の中に鉛が入ったかのように重く感じた。

いつものように鋭くこちらを見ている千冬がまるで自分を責めているように感じられた。当然かもしれない、自分は生徒であつても犯罪者なのだから。

「ち、父は」

「ん？」

「父は、何か言っていましたか？　そ、その今回の、ことで……」

「いや……。お前の望んでいることや、思っていることは言っていなかった。ただ明日こちらに伺う……。ということだけだった」

そう言われ、ほっとしていいのか、残念というのか分からない思
いがこみ上げる。更に不安が増し、ぎゅっと胸あたりの制服を掴む。

誰もいない教師寮の廊下の一角にて話されている。角のほうには
従者が居り、誰かが来ないかと監視しているという状態だ。

「今回の件の話しは、お前にも同席してもらう——いいな？」

「は、はい。というよりも、僕には拒否権はありませんから……」

そう呟くシャルロットはいよいよ消えてしまいそうなくらい、儚
げに見えた。千冬が無意識の内に拳に力が入るのを感じた。彼女の
境遇と、自分と一夏の過去を重ねあわせ、シャルロットの父親に対
して怒りを向けていたのだ。

だからといって、一教師がでしゃばったとしても、彼女にはそこ
までの権力はないし、問い詰めるための材料もない。だが、手段は
ある。ジョーカー

——だが、私にはそれを切ることは許されない。

千冬は自らの切り札がどれだけ危険なものかを知っていた。切れ
ば一発逆転のそれであるが、リスクも大きい。

何もできない自分が不甲斐なく、齒噛みする。世界最強と言われ
ていても、政治などの場になればそれはほとんど意味を成さない。
守るだけの力があっても、彼女は守れなかった。それがどうしよ
うもなく悔しく思う。

「話しはそれだけだ。時間は10・00だ。遅れずに会議室前に来

るように——それと、これは他言無用だ」

「は、はい。分かりました」

飛鳥にも、一夏にもこのことが言えない。あの時の怒りを露にした飛鳥であれば、もしかするとしなくとも、乱入しての乱闘騒ぎになりかねない。一夏もまたその性格上付いてくるというかもしれない。

それはけしてさせてはいけないし、シャルロットにとっても二人が巻き込まれることだけは避けたかった。これは自分が起こしたことであり、自分で落とし前をつけないといけないのだから。

「後は戻れ。少しは気持ちの整理をさせたいだろうから——もう逃げられないぞ」

「はい……」

シャルロットは千冬からそう言われ、返事を返すも、それは蚊が鳴くように弱弱しいもの。

従者と共にその場を後にする。

姿が見えなくなつてから、千冬は全身の力を抜くようにして、背中を向けていた壁に寄りかかる。盛大なため息をつくと彼女の顔には色濃く疲れが見て取れた。

一夏のIS操縦適正が見つかったことに始まり、ISとは違うマ_モビルスーツを持つ飛鳥が入学してきて、クラス対抗戦での無人機による襲撃事件、そしてこの中途半端な時期に転校してきた二人。その一人であるシャルル——シャルロットは自身の父親から指示され、飛鳥と一夏のデータを奪おうという犯罪行動を犯しかけた。そ

れだけでもいっぱいいっぱいだというのに、彼女の予想していたことの斜め上を行かれたために、心労は絶えない。ここにいない副担^耶任もまた、てんてこ舞いになっている。

「それが解決したとしても、な」

——まだ厄介なことが残っているな。

千冬に追い討ちをかけるようにして、また新たな問題が降りかかりそうな、そんな気がしてならない。

“ラウラ・ボーデヴィツヒ”

千冬は数年前にモンド・グロッソでの出来事において、ドイツ側に対する借りがあったためにドイツの軍におけるとある部隊の訓練の教官として赴いたことがあった。

“シュヴァルツェ・ハーゼ”

ドイツのIS配備特殊部隊であり、通称『黒ウサギ隊』。部隊章は眼帯をした黒ウサギであることからそう呼ばれている。ドイツ国内にある十機のISの内、三機を保有している名実ともに最強の部隊である。

その部隊の中で、今では隊長としてその実力を誇っている彼女であるが、千冬がそこに出向いたときには、むしろその逆であり、出来損ないのレッテルを貼られ、更には部隊の味方からもそのような視線を向けられていた。

——あの時はまるで捨てられた子猫……、というよりも、孤独に

震える子兔だったな。

今となっては懐かしい思い出である。正直な話、自分が教導官などという役割を果たしてこなせるのか。それも軍人というエリートたちに対するものであるために、自分のようなもので果たしていいのだろうかという不安もあった。

結果からすればうまくいったと言っているだろう。ラウラ自身もどん底にいた成績がその逆のトップにまで駆け上がったのだから。もしかすると、自分には教導の才があるのではないかと、無意識の内にそんな感情を思っていたのではないか。

IS学園において教師をしているが、ほとんどの生徒や他の教師たちは、自分がモンド・グロッソで優勝した織斑千冬だから従っているのではないかと、ふと最近になって思うようになっていた。

自分の教えに間違いはないとは思っていたが、それよりも大切な導きというものを蔑ろにしていたように思える。

——教師として最も大切なことを忘れているとはな。

それがこんな大事に繋がってしまうとは、ため息と共に、顔を手で覆うようにして、一時的に現実を遮断した——

シャルロット・デュノアの頭の仲には様々なことが渦巻いていた。このまま行けば、自分は一体どうなってしまうのだろうか、と。上げられるだけでもキリがないといえる。国家代表候補生の資格と一専用機《ラファール・リヴァイヴ・カスタム？》の剥奪はもちろん

のこと、母国フランスへ強制的に送還され、当然待っているのは牢獄行きだろう。

彼女の目には光は全くなく、ただただ無限に広がる暗い闇が見えるだけであった。今更出あるが後悔が彼女のことを押しつぶそうと押し寄せてくる。それを表すように、シャルロットの胸にはズキリという鈍い痛みが走る。思わず制服の胸あたりを掴む。男子用の制服を着ているが、既にコルセットは外されているために、彼女の性別が女であることは見て分かる。

もし別の運命があったなら、どんな未来があっただろうか。母がいて、父がいたら。父に捨てられても、母が傍にいてくれたら。そして、母が死に、そして父に捨てられていたら……。

こんなことをすることもなかっただろうし、ただ一人の少女として生きていけたかもしれないというのに。何故こんなことをしてしまったのだろうか。今更になってそう思うのだ。

今彼女がいるのは、一週間前に連れてこられた会議室であり、そこに備え付けられているソファアに座っている。隣には鳥肌が立つような雰囲気をももし出している担任の千冬の姿があった。

彼女たちの前に鎮座しているテーブルの上には紅茶とコーヒーがそれぞれ入れられたカップが置かれている。いまだ湯気がゆらゆらと運命が揺れ動くようにして見えるのを考えると、それほど時間は経っていないように見えた。

しかし、シャルロットにとってはこの緊張は更に後悔を増幅させるために、早く終わって欲しいという思いもあった。ひどく時間が長く感じた。このまま永遠にこの状態が続くのではないかと、ふと

そう思ってしまった。

すると扉の向こうから声が聞こえてきた。誰か案内役の教師が話しているのが聞こえる。その声に若干の緊張が感じられるのは、流石に相手がフランスのトップ会社の社長だということにもなれば当然であろうか。

「ようこそ、デュノア代表。お待ちしております」

「いやあ、もう少し早くに伺えるはずだったのだけどね。こちらとしても、事が事なのでね……」

「っ！」

——お父さん……。やっぱりそうだったんだね……。

シャルロットは父が一瞬こちらに、自分に視線を向けたのをしっかりと見ていた。それは親子だったから分かるほどの僅かなものであった。

流石に千冬もそれには気づけなかったようだ。

シャルロットには、父から向けられたのはまさに失望という意味合いが込められた視線であった。その視線は暗にこう告げていた――

“マリオネット役立たずの操り人形が”

シャルロットの父親——シ ril・デュノア。彼はあの時からシャルロットのことを娘というよりも駒としか見ていなかったのだ。

「立ち話もなんですから、まずはお座りください」

「それでは失礼」

千冬にそう言われ、ゆっくりと対面する形でソファアの座るシリアル。その顔立ちは整っており、本妻のほかに愛人がいてもおかしくはないと思わせるものだ。その顔には繕ったものであろうかどうかと判断しかねるほど、爽やかな笑みを浮かべている。そして、シャルロットと同じ、黄金色の髪。

纏っている雰囲気からして彼自身が輝いているように見えた。それがまるでフランスのIS企業のトップであることを示しているかのように。

「手始めに、はじめまして、ブリュンヒルデ。それとも、ここでは織斑千冬とお呼びした方がいいだろうか？」

「そうですね、ここでは一教師でしかありませんので。それに過去の名声には縋るつもりはありません」

「はははは、しかし、今なおその名前に陰りは見えないようだ」

シャルロットの父親、シリル・デュノアの言う通り、千冬のブリュンヒルデとしての実力や名声というのは今もこのIS学園では有名であり、憧れである。本人がどうであれ、周りはそれに注目してしまうものだ。

「その話はこのくらいにして、そろそろ本題に入りましょうか、デュノア代表」

「ああ、そうだったな。いやしかし、私の息子が――」

ちらりと千冬の隣に座るシャルロットに視線を向ける。彼女が既に、男装をしていないことを見て、その言葉をとぎる。

「娘が大変な迷惑をかけた」

既にシャルロットの性別がばれているのを、それを差し向けた自身がごまかしていても意味はないと、シリルはシャルロットのことを息子ではなく、娘と言う。

シャルロットとしてはここで娘などと言われても、彼から親愛は感じられなかった。こちらとしても、もはや信用できるようなものは欠片も残っていなかった。時折彼女に向けてくる視線が、まるで道具のようにしか見ていない、あの時向けたものと酷似していたからだ。

「あなたの娘さん……、シャルロット・デュノアが犯したことは、ISの法律としても重大なものであります。そのことはご理解いただけますね？」

ようやく話が本題に入ったということで、緊張感を感じつつも、千冬はゆっくりと話し始める。今までにも国家代表として、国のトップとの会談をしたこともあるが、このような形は初めてであった。いくらブリュンヒルデであっても、緊張無しではいられない。

更に交渉のしだいで隣にいるシャルロットの未来が大きく左右されるのだから、かなりの重責であった。しかし、それはシャルロット自身が受け入れてしまったせいでもあり、彼女が生徒の事を見ていなかったことも原因である。

「ああ、それについては良く分かっている。そのことでこちらからの提案であるのだがね。今回のことをの揉み消すだけ対価として、それなりのものを提供しようと思っているのだよ。つまりは交換条件ですよ」

「交換条件ですか？それは一体どういうことです。まさか、今回のことをなかったことにしようとしても？」

「そうだ。今回のようなことが公に出たら、ただでさえフランスはIS開発においては後れを取っている。そうやってしまえば完全に開発計画から外され国としても厳しいものになるのだよ」

シリルがその対価として提供してきたのは日本としては嬉しい限りである多額の支援金の他にも、ISの数十機もの予備パーツである。それだけあれば日本としても、更にIS開発に力を入れ込むことができるのではないか。

しかし、それは日本側——ここでは不干渉というものがあるためにIS学園となるが、こちらにそれを黙認しろということだった。

千冬はそれを聞いて視線が少しばかり鋭くなるのを自覚していた。目の前の男——シリル・デュノアは自身の娘のことを気遣うことはせず、もはや用済みというように見捨てている。

自らの富、名声、地位の保全を優先しているような言動。国を守ろうとしているように見えて、本心はデュノア社が潰される、自らが失脚することを恐れているのだらうと千冬は考える。

親として、子どもを見捨てて——自分の過去に似ていて、無意識の内にシリルの事を睨みつけるように見ていた。シリルはそんな千冬の視線に気づき、少し困ったような苦笑いを浮かべる。

「やはり、気に入らないかね？」

「当然のことです。公になれば大事になるようなことを、みすみす見過ごせと？ ご冗談を」

と言う自分は果たしてそういう資格があるのだろうか、自らに言い聞かせる千冬。自分はそれ以上に酷いことをしたのだ。飛鳥の家族をはじめとする、何十、何百という人の命を奪うテロ行為に加担したのだから。例えば死者がいなくとも、それは立派なテロである。

——私も二人と同じ……、か。

いつの間にか黙り込んでいたのにハッとして頭を上げる。視線もそれに伴って下がっていたようだ。前に座るシリルには、何か考えているのだろうと取られていたようで、千冬は安堵のため息を小さくつく。

「確かに納得するわけには行かないという君の——そちらの考えも分からないわけじゃあない。だがしかし、こちらとしては、既にその後始末をつけるようにと、政府で決められているのでね。私個人としても、そうせざるを得ないのだよ」

シャルロットはそれを聞いて愕然とした。そんな上のものたちの決定を覆せるはずもない。完全に彼女が必死になって手を伸ばしていた希望の光が潰えたように感じられた瞬間だった。

表情は変わらないが、千冬も息を呑み、それを聞いていた。

「こちらとしても慌てているのですよ。何せ自分の娘が——ハッキングを行い、情報を盗み出したなどという犯罪を犯したのですから……。経営困難に陥っている我が社のためとはいえ、非常に残念に思っているのですよ」

「っ！」

「な!？」

話が違ふ。斜め上に行き過ぎているこの流れにシャルロットも千冬もそう驚きを隠すことはできずにいた。

「こちらとしては、素直にこの条件を呑んでいただき、身柄を明け渡してもらえればと思つているのですよ。私としても信じたくなかつた……、しかし、証拠もあるのです。それを見せられたらどうしようもないですよ」

演技かどうかも分からないほどに、完璧なものであつた。シリルは本当に嘆いているようであり、その言動からして、まだ何かしらの切り札を握っているのかもしれない。

「できれば穏便に事を終わらせたいのですよ。それは彼女の世間体シャルロットにも関わつてきますからね」

「どういう意味でしょうか……？ 確かに彼女が犯したことは、そのような問題も出てきますが。それは当然あなたにもではないでしょうか？ シリル・デュノア代表」

千冬は敢えて、二人のファミリーネームである『デュノア』を強調した。シャルロットのことが公に出ればシリルであつても穏便には終わらないだろう。それこそデュノア社は終わりだということだ。会社は存続したとしても、そこにはシリルはいないということもありえるだろう。

「フランス政府としては、それが吞まれないのであれば、彼女のことを重罪人として逮捕するつもりです」

「そのことに対してですがデュノア代表、この学園には特記事項第二十一があります。それは良くご存知でしょう？」

「それは当然だ」

一度のどの渴きを潤すために、テーブルに置かれていた紅茶の入ったカップに口を付ける。それを戻し、ゆっくりと口を開くシリル。

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする――確かに、本来ならこちらから学園に対して、シャルロットに対して干渉することはできない」

「ええ、その通りです。そういうことなので……」

「とは言っても、それはあくまでも原則ではなかったでしょうか？ この事態がまさかその範疇に入らないとでも？ それが分からない、教師ではないでしょう」

まるで挑発するように言うシリル。その顔に浮かぶ笑みは爽やかなものであり、穢れ一つないものであるが、その顔の裏にある顔ペルソナとは一体どんなものなのだろうか。想像しただけでも恐怖が身体をなでる。

娘すらも駒としてしか見ていない男である。更にこの期に及んでも、全てを彼女に押し付け、自分は自らの保全に走る。

「それにこれは学園に対して以外にも、シャルロットに対してもいつていることです」

「それはつまり……」

「ええ、あなたが考えているとおりですよ、織斑先生。シャルシャルロットはフランスの代表候補生。つまりは国からの命令は彼女彼にとって絶対なのです。これが意味することはお分かりですね？」

「国家反逆罪……、これ以上彼女に罪を負わせたくなければ――その条件を飲みつつ、彼女の身柄を引き渡せ……、と。そうおっしゃりたいのですね？」

「いやあ。理解が早くて助かります。それに——IS学園というのは犯罪者を匿うような、そんな施設なのですか？」

「っ！」

「何を、おっしゃりたいのですか？」

その言葉は、シャルロットは当然のこと、千冬に対しても刃が向けられていた。はっきり言ってその項目は視点を変えるとそういうことになる。それを逆手に取られることだって、シャルロットの件の様にあるかもしれない。

そんなことになるとはっきり言って、IS学園は危険なものとなされる。ただでさえ、どの国にも所属しない、まさしく中立を保っている。謂わば一つの国であるのだから。

当然のことながら宣戦布告だって向けられてもおかしくない立ち位置なのだ。千冬がそう言うってから無言になるのを見て、更にシリアルは言葉が続ける。

「確かこの学園には——篠ノ之束犯罪者の妹もいますね」

「っ！ ええ、彼女がこの学園に在籍しているのは、一種の保護的措施ですからね」

“篠ノ之束”

彼女の名前は千冬にとっても、そして何より箒にとっては決して逃げられないものである。前者は親友として、そして、何よりテロ活動に加担したものの同士として。後者としては、永遠に消えることがない姉妹、家族というレッテルとして……。

「もしかしたら彼女がその場所を知っているかもしれませんよね？」

そうなる、彼女もまた、犯罪者を匿っていることに加担している。どうしてそれが問題にならないのでしょうか？」

それを聞いて流石に千冬も待ったの言葉をかける。それは決してないこと。こちらとしても連絡手段は持っているが、彼女の居場所を知ることはいかない。

——いや、私が聞こうとしていないのかもしれないな。

聞こうとすれば聞くことは可能だろう。だが、彼女は紛れもない『天災』である。こちらがどんな意図で電話をかけ、それを聞いたとして、二重三重に対策を採ってくるだろう。例えば、信頼している千冬たちに対しても……。

それに筈として、早々連絡をとろうとはしないだろう。むしろ彼女は束のことを憎んでいるのだから。あらゆる可能性があったらう彼女の運命をこれでもかとおかしくしてしまったのは、紛れもなく姉である束であった。

そんな彼女が謝罪も無しに、最悪の行為である逃亡という札を切ったのだから。まだ許す気が彼女にあったとしても、そう簡単には行かないだろう。

「彼女はどちらかというと被害者側。この処置は当然かと。それに、もし知っているならこちらとしても把握しているはずですから」

「そうですか、とはいえ、今はそちらの話をしている場合ではなかったですね。こちらから話を振っておいて申し訳ない」

「いえ……」

千冬としてもその話しはこれ以上続けたくなかった。まるで自分

のことを責められているような気がしたからだ。しかし、それは間違っておらず、彼女自身もありすぎるくらいに関係していたのだ。

まるで小言を聞きたくないという子どものように、耳をふさぎたい思いだった。自分がしてしまったことの大きさは、当時の彼女たちでは想像もできなかったことである。

高々15にも満たない子どもが考え付かないことかもしれない。とはいえ天災である彼女なら考え付かないことではないかもしれない。

だが、彼女は興味関心があるほうに対しては天才レベルだろうが、はつきり言って世の中の常識に対してはまるで子どもレベルなのはなかったのだろうか。

例えば欲しかった玩具を買ってもらえて喜ぶほどの年齢の子どもと同レベルの……。以前学会に提出したIS理論は子どもが考えたものだということで全く相手にされたなかった。もっと理性的であったなら、もっと修正したものを提出するなども考えたかもしれない。例えば女性だけではなく、男性も使えるということも……。

しかし、彼女はそこまで思考が大人ではなかった。それどころかまるで我が侘を認められず、駄々をこねた子どもが癇癪を起こし、暴れるかのように引き起こしたのだ、あの事件を――

“白騎士事件”

多くの人の運命を変えてしまった事件。

ふと思った。まるで世界は一人の子ども^{天災}によって動いているので

はないかと。はたまた、描かれている絵なのではないかと。地球という大きな箱庭に、人という人形を意のままに動かすように。地球という大きなキャンパスに人という色彩用具で絵を描いていくように。

そう思うとゾツとした。

ハツとして現実思考に戻したとき、ジトつと掌には汗が溢れていた。あまりにも嫌なものであったためハンカチにてふき取る。

「もう一度言いますが、条件を呑み、シャルロットの身柄をこちらに引き渡してはいただけませんか？」

相変わらずの笑みを浮かべているが、千冬にとっては生徒を人質に取られたようなものだ。シリルにとってはこれ以上はないという切り札を既に切っている。しかし、千冬にはそれに対して対抗するものはない。

交渉術など、そんな大層な訓練を受けていない彼女にとっては厳しい状況だ。こんな男のせいで、ただ一人の生徒の運命も守れない、変えられない自分が恨めしかった。本当に飛鳥に言われたとおり、ただ流されていたのではないかと今になってそう自覚する。

「正直に申しますと、シャルロット・デュノアという人間はこの世には存在しないのですよ」

「え……?」

「な!？」

ずっと石像のように固まって話を聞いていたシャルロットはまるで魔法を解かれたように声を出した。しかし、それは驚愕と、己の

存在を否定されたこと彼女に与えていた。

「ぼ、僕は……、わ、私は……。存在……。していないの？」

シャルロットの瞳から光が失われる。それは彼女が運命に屈したのを表しているようにも見えた。ふらふらと正気を保てていないようであるシャルロットを見て、千冬はこれはまずいと感じた。

「氣を確かに持て、デュノア！」

「お、織斑、先生……。僕は一体……」
「っ！」

まるで路頭に迷う一人の少女だ。千冬にはシャルロットがそんな風に見えた。どこまで子どもの、娘の運命を狂わせれば気がすむのかと、千冬は目の前に座り、相変わらずの笑みを浮かべているシリルに対して睨みつけるようにして見る。

「デュノア代表！ 私にはあなたが言っていることが理解できない！」

千冬が叫ぶようにしてシリルに言う。だが、彼はあくまでも冷静に千冬の言うことに対して返答する。

「織斑先生。そもそもシャルル・デュノアという男の操縦者など、存在しないのですよ。その存在自体、作り出された偽造の戸籍なのですから」

「そ、そんな……」

愕然とするようにして言葉がこぼれる。

「作り出したものですから、当然のように消すのも容易です」

「ちょっと待ってください！ それなら『シャルル・デュノア』――

――二人目の男の操縦者として世界に知らされている今、突然その存在が消えたならば混乱を招くだけでは！？」

「それについては心配はいりませんよ」

「どういう意味で？」

千冬が向けてくる言葉に対してヒラリヒラリとかわしていくシリル。

「そもそも我が国フランスに、『二人目の男の操縦者』がいるなどと世界に発表した覚えはありませんよ？」

そのシリルの告げた言葉は二人にとってトドメ以外のないものでもな衝撃を与えた。シャルロットは、もう一人の自分の存在すらも否定され、更に消すことも容易であるくらいに脆いものであったのを知る。

自分の存在がまるで霞のように消えていくのを感じる。両親と一緒に過ごした日々が、母親がなくなってから引き取られ、代表候補生になるための訓練をこなすと共に、教え込まれたハッキングや男として潜入するための訓練。そして、IS学園に来てからの出来事――皆との授業、皆との訓練、皆との団欒、それ以外にも色々あった。たった二週間であったが、シャルロットにとっては掛け替えのないものであったはずだ。だが、それすらもまるで幻想であったかのように消えていくのだ。

啞然としている二人に対して優しく語り掛けるように言う。

「では、こちらからお尋ねしますが——織斑先生はどちらでそのような情報を得たのですか？」

「そ、それは……」

「当然でしょう——もし仮に存在しているとしておいたら、今回のことでフランスは終わりでしょう。そういうことも念頭に置いてのことです」

二重三重と用意されていた防衛網。シャルロットが犯したことが自らとフランス政府にとって不利益にならないようにするために、存在そのものをなかったことにする。

戸籍上には二人の存在はない。千冬とシャルロットこれは二人にとっては完全に——

——詰んだのか？

シ ril が提示してきたそれを受け入れ、シャルロットをフランス側へと引き渡すしかないのだろうか。しかし、そうしてしまえば十中八九、シャルロットは牢獄行きだろう。最悪二度と太陽の下には出られないことになる。

綺麗ごとだけでは済まされないのが世の中であるが、そんな汚い手口で、ただ一人の少女の運命が狂わされてもいいのだろうか。何百倍という人々の運命を狂わせた千冬自身が言えたことではない。

ただ一人の生徒すらも守れないのかと。齒噛みして、足掻くようにシ ril のことを睨みつける。

対するシ ril は、繰り返すようにして条件を受け入れるのと、シャルロットの身柄の引渡しを要求する。少しばかり苛立っているのは、いい加減にあきらめろと言っても言っているのかもしれない。

あきらめられない、だが、どうすれば。時間だけがただただ過ぎていく。それを表しているかのよう、三人の前に置かれていたカップの飲み物からは温かみが失われ、湯気は既に消えていた。

「織斑先生……」

「なんででしょう？」

「私としても、これ以上時間をかけても無駄だと思うのですが？
一体あなたにできることがあるのですか？」

「っ！」

「無駄に時間をかけることで、シャルロットが今どんな気持ちでいるのか……。あなたは考えているのですか？ 私にはそうは思えない」

「そ、それは……」

千冬は隣に座っているシャルロットを見る。もう早く終わって欲しい、そんな風に思っているように見えた。辛いだろ——両親からも、国からも裏切られ、自らの存在を否定されたようなもののだから。

これ以上彼女に辛い思いをさせ続けながらも、時間を長引かせるべきだろうか。だが、既に千冬には言い返す言葉すらない。ただ一人の人間が国という巨大な組織に立ち向かったとしても勝てるはずがないのだ。彼女の記憶には、ただ一人、それを可能にしている人物がいるが……。

「さあ、シャルロット！ 来るんだ！」

「あっ」

いつの間にかシャルロットの前に来ていたシリルが項垂れていた

シャルロットの腕を掴み、無理やりに立ち上がらせる。小さく悲鳴のような声を上げるが、それはシリルが強く握ったためであろう。まるで糸が切れた操り人形のようにふらふらと立ち上がる。

「なにを!？」

「話しはついたのでは？」

「そ、それは……」

「どの道、あなたにはこれ以上できることはないのでは？　ならこれ以上シャルロットに苦痛を与え続けることが、果たして教師のすることなのでしょうか？」

「くっ！」

そう言われ、反論することができない。ただ二人が去っていくのを見るしかできない。この事件はもみ消される。あの未確認機がI S学園に襲撃したことを、こちらがもみ消したように……。

引きずられるようにして連れられているシャルロット。その視線は床に向けられている。その瞳には光はなく、まるで本当に操り人形マリオネのようだ。否、彼女はシリルにとってはその役目すら果たせない欠陥品だったのだ。

——あの扉を抜ければ僕は……。

近いようで遠い扉。狭いようで広く感じる会議室。シャルロットにはそう見えていた。父シリルに引きずられるようにして歩いていく。

——きっと待っているのは牢獄だね。あははは……、当たり前だよ。それだけのことをしたんだから、ね。

シリルの手がドアノブへと伸びた。しかし、その時だった。まだ触れていないはずのドアノブがゆっくりと回転し、扉が開けられたのだ。一体なんなのかとシリルは凝視している。

外と比べてカーテンを閉め切っていたために若干暗かった会議室であるが、その中にまるでシャルロットの暗い運命に小さな光が差し込むかのように明かりが入り込んできた。

「な、なんだ!？」

シリルは突然扉が開けられたことに怪訝そうな表情を見せている。

ゆっくりと開かれる扉。その奥にいる人物の姿が現れる。紅玉のような瞳を持った一人の少年——紅月飛鳥の姿がそこにあった。

「そこまでだ、シリル・デュノア」

その時シャルロットは確かに感じていた。運命が変わった瞬間というものを——

PHASE 33 操り主（後書き）

ED3↓RIVER＞石井竜也＜

いかがでしたでしょうか？

ほとんど主人公飛鳥を登場させられなかったのが残念ですが、次回より飛鳥をはじめとして生徒会メンバーが活躍するかもしれません。

ご感想をいただけると嬉しいです。

それではまた次回、お会いしましょう。

次回予告／BGM『明日への橋』／

反逆

それは何かに対して抗うこと

それは並大抵のことではない

力がなければ

覚悟が無ければ

それだけで失うもの、傷つけるものがあるのだ

その罪を背負いつつ、少年はその反逆への道を進む

しかし、そこに現れるはあるはずの無いもの——モビルスーツ

世界で何が起きているのか

何か大きな存在^影がそれを証明する

次回 インフィニット・ストラトスへ怒れる瞳へ PHASE 34
運命への反逆

反逆の茨道……、それでも歩みを止めぬか！ インパルス！

PHASE 34 **Rebellion**（反逆）（前書き）

いつもたくさんのご感想と閲覧ありがとうございます。

誤字脱字の報告や、アドバイスなどもわざわざありがとうございます。誤字脱字のほうは少なくなるように努力していきたいと思えます。

それでは本編スタートです。

反逆

それは何かに対して抗うこと

それは並大抵のことではない

力がなければ

覚悟が無ければ

それだけで失うもの、傷つけるものがあるのだ

その罪を背負いつつ、少年はその反逆への道を進む

しかし、そこに現れるはあるはずの無いもの——モビルスーツ

世界で何が起きているのか

何か大きな存在（影）がそれを証明する

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳＜

加筆修正完了 11月27日

PHASE 34 Rebellion（反逆）

1

「そこまでだ、シリル・デュノア」

そう言うのは紅月飛鳥。シリルにとっては一体何を言っているのだと、目の前に立ちはだかるようにしている飛鳥を睨みつける。

自分が一体どんな立場にいる人間なのか、まさか知らないわけがないだろう。はっきりいって、飛鳥がそこにいることは無礼千万である。

だが、飛鳥はそこから微動だにせず、ただシリルのことを睨みつけている。そして、そういう言葉が意味することとは。

「誰だね君は？」

———すまないけど、そこをどいてくれないかね？

怒りを表に出さずに、あくまでも仮面^{ペルソナ}を被り、笑顔でそう優しく諭すように言う。

「やだね」

飛鳥はシリルの言葉に対してはっさを切り捨てるように言う。まさかのその答えに、流石のシリルも啞然としてしまう。

———この生意気なガキが……。

内心先ほどの会談やシャルロットのデータを奪うことの失敗など、シリルにとっては苛立ちに関係する要素が多すぎた。更に、目の前に行く手を遮るようになっている飛鳥がいる。苛立つ炎にガソリンを投入するようなものである。

「どういう意味かな？ 私はデュノア社の社長をしていてね。君の行動は十分無礼に値するのではないのかい？ そこをどいてくれるならとやかく言うつもりはないよ。そこまで私も鬼ではないのでね」

それは暗に、どかなかつたら力づくでも潰すと言っているようなものである。純粋な腕っ節の力ではない力という重さが、飛鳥に向けられる。それに対していくら腕っ節の力が強かろうとも、決して抗えないという凄みがあった。

だが、それくらいで屈するような性格はしていない飛鳥。変わらない睨みつけるような視線を保ったまま言う。

「あんた達が話していたことは全部聞かせてもらった」
「「なっ!？」」

シリルだけではなく、隣にいたシャルロット、ソファアから立ち上がって黙って見ていた千冬もまた、その飛鳥の言葉を聞いて啞然とする。

生徒会に対しては、この件についてはこれ以上の関わりをする必要はないと釘を刺しておいたが、まさか知らないうちに動いていたとは。

飛鳥がすっと上げた右手の二本の指に挟まれたディスクのような

もの。それが意味することが何なのか。理解するのにはそれほど時間がかからなかった。

「隠しカメラでも置いておいたのかい？　それで一体何をしよう？」

例えその記録を流したとて、シリルが命じたということにはならず、ただシャルロットの独断での行動だったということが知れ渡るだけだ。

そうなったらシャルロットは、本当の意味でこの世から消えることになるだろう。シリルがやったという決定的な証拠がない以上。シリルの手に絶対的な勝利の二文字があった。

「君がそれを使い、世界に知らしめたところで、私がそれをしたことになると思うのかい？　今回のことはシャルロットの独断だ。父親としては残念でならないよ」

「よくもそう抜け抜けと……。あんたには罪の意識がないのかよ！」
「罪の意識？　私に一体何の罪が？」

そう叫ぶ飛鳥の言葉はどこ吹く風と、シリルは飄々とした表情のまままだ。睨みつけている飛鳥の後ろには、生徒会長の更識楯無を先頭に布仏虚と本音の姿があった。中に押し込むように飛鳥はシリルに詰め寄る。

一定の距離を保ちつつ、シリルもそれに合わせるようにして後ろに後退する。どうしたわけかそう動いてしまったのだ。

最後に本音が部屋の仲に入ると、まるで逃げ道を奪うかのようにして、その扉に鍵をかけたのだ。

「一体、何のマネかね？　こんな無礼は初めてだよ」

顔は笑っているが、その眼は笑っていない。しかし、飛鳥はここで引けない。目の前にいる男が、決して許される人物ではないからだ。

「まあ、立ち話はなんですから。デュノア代表もソファーにお座りください」

スツと飛鳥の後ろから姿を現した楯無が落ち着いた様子でそう話しかける。彼女の姿を見て、楯無がロシア代表であり、飛鳥に比べたら、何倍も礼儀をわきまえているということでご好感をもつ。仕方ないと小さくため息をつきながら座ることにした。

シリルはくると背を向けてソファーのほうへと歩く。

対して千冬はというと、ほっとしたようで、どうなっているのか分からないという表情をしている。

虚と本音が冷めてしまった飲み物を入れ直すために一旦姿を奥へと消す。立っている飛鳥に近づく楯無。

「もう、アツくんは慌てん坊だな」

「仕方ないだろ」

困っちゃうという様に言う楯無に対して、言葉通りの表情で見つめ返す飛鳥。部屋から出られてでは遅いのだ。これからすることは飛鳥の我侭のようなもの。しかし、人を人として、自分の子どものことを人として見ていない、扱っていないシリルに対して、飛鳥は

とてもではないが我慢ができなかったのだ。

飛鳥の知る父親というのは優しく、そして、厳しいという存在だ。権力でも、財力でも、知力でも、腕っ節の強さでもない心の力、家族を愛している、守ってみせる——そういう想いをもっている存在だ。

「分かってるよ、それじゃあ、行こうか」

「ああ」

——あいつを許すわけにはいかないんだ！　そう、絶対に！

飛鳥と楯無は並んでソファの方へと向かった——

2

シャルロットには今この状況が理解できないでいた。突然父親のシリルに無理やり立たされて、連れて行かれそうになった。もうその時はあきらめていたために何も感じていなかった。

しかし、突然扉が開けられ、飛鳥が現れた。更に生徒会のメンバーがそれに続き、再びソファに座ることになっている。

「どうぞ」

「ごゆっくり」

凜とした声で言う虚とのほほんとしたスタイルをここでも貫く本音が、人数分の飲み物を入れて持ってきた。

「とりあえず、どうして私たちを止まらせよう？　これ以上余計……」

な時間をかけている暇はないのですよ。これでも経営者のトップに立つ者……、大事とはいえかけられる時間というのは有限であって、無限ではない」

「それは申し訳ありません。でも、すぐに終わりますから、ご安心ください」

——あなた……の失墜と共に——

先ほどの笑みがこわばって見える。いくら寛大な心を持っているとはいえ、流石にここまでくると苛立ちを隠しきれないようだ。それに対して楯無は手に持つ開いている扇子を閉じる。その乾いた音はまるでこれから始まる運命への反逆を知らせるもののようにだった。

3

横に備え付けられた大型スクリーンが下りてくる。それを操作しているのは、ソファアに座っていない二人——虚と本音だ。

戦闘よりもこうした裏方のことに長けている二人は、すばやくそのスクリーンにとあるデータなどを映し出していく。スクリーンに次々と現れてくるデータを見てシリルは徐々に顔色を青くしていく。

「ば、馬鹿な……」

誰にも聞こえないほどの小さな声で呟いた。シリルの頭にはありえないという文字だけが埋め尽くしていた。

まるで自らの手にあった勝利というものが砂山の崩れるが如く、脆くもそれが崩れ始めていた。そこにあったのはデュノア社——

正確にはシリル・デュノアが個人的に手回しをし、それをするようにと部下に命じていた不正、不正、不正という文字。

シリルの顔色が徐々に青くなっていくのが見えた。それに対して冷めつつも、怒りに燃えた紅玉のような瞳が鋭くシリルに向けられている。

シャルロットにとっては信じられないものであった。確かに父シリルの経営しているデュノア社は経営に行き詰っていたはず。巨大会社なのだから、一つや二つの不正行為はあるかもしれない。そうは思っていた。

だが、これは彼女の予想を遥か斜め上に行くものだった。もしそれが本当のことであつたなら――

「ふ、ふざけるな！」

突然あれだけ温厚そうであつたシリルが怒りに顔を真っ赤に染めて怒声を発した。静まり返っていた会議室に響き渡る。

突然立ち上がるシリル。肩で大きく息をしており、その一言にどれだけの怒りなどが込められているのか。

「濡れ衣だ！ 貴様ら、子どもだからといって許されることだと思ふな！ 国に喧嘩を売っていることだと、知っていてやってるのか！？」

突き出すようにして指をスクリーンに映し出されている不正の数々のデータに向けながら叫ぶ。

「ふざけるなよ！」

シリルの怒声に負けない声で飛鳥が叫ぶ。

自分の子どもに対してそんなことをさせておいて、よくもまあ抜け抜けと言えものだと、飛鳥は苛立ちを隠せなかった。

「なら大人なら許されるとでも言うのかよ！ あんたは！」

飛鳥はシリルに対して噛み付くように言う。お互いに睨み合い、視線がぶつかり合って、火花が散っているようにも見えた。

「残念ながらデュノア代表」

「なんだ!？」

「こちらのデータはすべて正確なものです」

「嘘も大概にしろ！」

飛鳥が暴れださないようにと楯無が落ち着き払った態度でシリルに対して言う。シリルに対して避けられない槍を突きつけられているようであった。三人の間で、否、五人の間で見えない戦いが繰り広げられていた――

4

「生徒会には信頼のできる協力者が居りまして、直接フランスに潜入して情報を集めてもらったのです。もちろん正規の入国は済ませておりますよ」

信頼のできる協力者――それは更識家に仕えている者たちである。彼らは裏社会に通じている者、そうやすやすとばれるようなこ

とはなく、デュノア社を始めとする、シリルが関わった企業や組織に潜入していた。

「そうしたらこんなにも多くの不正の数々……。とてもじゃありませんが許されるようなことじゃありませんよね」

スツと眼を細めて言う。生徒会長として、そして、裏家系の更識家頭首としての更識楯無がそこにいる。

虚と本音がデータで現すそれらはすべて直接手を下してしまったものたちからの証言である。そう、彼らは犯してしまったことに對して、罪悪感をもち、後悔を感じていたのだ。

もちろんそうではない者たちもいる。だが反対にそうでない者たちは罪悪感から後悔に苦しんでいた。経営のためとはいえ、決して許されることはないことをしたのだから。

それが知られればどうなるのか。日が経つたびに積もり積もる負の感情。全てが消えてしまうという恐怖、不安。富も、名声も……。家族を持つものなら家族が路頭に迷うことになる。

その行為をすればどうなるかくらい、分かっていたはずなのに……。人は欲望には勝てないということだろうか。より多くの金を、より高い名声を、より高い地位を手に入れるためと……。

「これらはすべて、あんたが指示した奴らから得た証言だ！」

「そんな確証がどこにあるというのだ！　そこまで言うなら、証拠を見せろ！」

「証拠なら……、ここにある！」

シリルにとっては根も葉もないことを言われたと憤慨する。しかし、それに対しては飛鳥が映し出されるものが変化するのを見計らって指差す。それをみてシリルはただただ呆然と眼を見開く。

そこには直筆でのサインが書かれていた。自らの犯した罪の重さとそれからくる苦しみに耐え切れず、そこに吐き出したのだ。そのサインした文字の周りにある染みというのは、その吐き出した苦しみなどを表している涙であろう。

「あんたは確かに会社を守るためにこういったことをしてきたんだろうさ。それは分かる。どんな奴がトップでも、地位を上げるとか、潰れないように守るって事をするくらい。子どもの俺でも分かるさ！」

今までの事だって、そして、今回だって、そのためにシャルロットに指示したのだろう。経営者としては素晴らしいかもしれない。どんな手を使っても、ばれなければそれは結果となるのだから。

———だけど、それでも！

それでも飛鳥は納得できない。それは子どもだからだろうか。大人になりきれない、中途半端な立ち位置だからだろうか。それを理解しようとしても、納得しようとしても、決してそれを許せないという、飛鳥にとって曲げられない信念というものがあつた。

「それでも！ あんたは絶対にしちやいけないことをしたんだ！」

一步シリルに対して近づき、叫ぶ。飛鳥を止めるようにする者はいない。黙って見つめるだけだ。それはここにいる者たちは全員、飛鳥と同じ気持ちであるから。

「それでもあんたは、シャルロットだけじゃなく、ここにあるサイン書きをした人たち、ほかにもたくさんの人たちの一運命をめちゃくちやにしたんだ!」

「っ!」

——余計なことを……。

シリルは内心でそう毒付いていた。そもそもあの時シャルロットを連れて出て行けさえすればすべては何事もなく終わっていたはずだった。

そう、ただ一人の犠牲だけで済んでいたはずなのだ。知られていなければ何とかなったものを。みすみす自分たちの手ですべてを明かしてしまった。シリルはそんな腰抜けとも取れる関係者たちに対して怒りを抱く。

だが、シリルの取り続けてきた手段というのは決していいものでもなければ、許されるものでも、認められるものでもない。飛鳥たちがこのことを告発し、シリルが捕まれば多くの社員が路頭に迷うかもしれない。だが、そのような運命になるように仕向けたのは誰でもない——シリル自身なのだ。

隣に座っているシャルロット。立ち上がって飛鳥と正面切って言い合っている父シリルの手が小刻みに震え、汗で湿っているのが見える。それは歓喜などの感情から来るものではなく、むしろその逆。怒り、恐怖、不安……、そういった感情からくるものだ。

いつもは温厚そうに見える父がここまで負の感情を表すなど、ほとんど見たことがない。そのシリルの状態が、どれだけの黒いもの違法

に手を出してきたのかを表しているようであった。

「高々16年しか生きていない子どもに！ 人の上に立つことがどういう意味か知らない子どもに！」

シリルは溜め込んでいたものを吐き出さんとばかりに飛鳥に怒声を浴びせる。何も知らない子どもが理解しているような口を利くのが気に入らなかった。すべて順調に行き、今回の事だって、すべてはシャルロットの責任で終わるはずだった。

それを高々生徒会に足元を掬われるとは思っても見なかった。手の中にあった勝利というものは塵と化し、風と共に消えてゆく。瓦礫が崩れるが如く、シリルの足場が崩れていく。一気に奈落の底へと叩き落された気分だ。

確かに飛鳥は……、飛鳥たちは子どもだ。いくら裏社会の頭首だとしても、その下に仕えているものだとしても、その者たちと交流があるからといっても。大人から見れば子どもでしかない。

——ああ、そうさ。俺はただ一人の子どもでしかない！

何も知らず、何かが起きてからではないと対処できないほどに弱い存在。感情に物を言わせて思ったことをまるで癪癢を起こした幼子のようにわめき散らす。それは酷く呆れるような姿かもしれない。

だが、そういう視点、立ち位置だからこそできること、言えることがあるのではないか。飛鳥一人では何もできない。目の前にいるシリルに対して、こうまでして言い合うこともできない。

こうもできるのはすべて、楯無たちのおかげだ。一人で無理なら

二人で、二人で無理なら四人で、それでも無理であつたらそれ以上の人数で——力を合わせればいい。

「国のためとか……、会社のためとか……、そういう大それたもののために必死になるのはいい！ それでも、例えそうだとしても！どんな理由があろうと、あんたに他人の運命を踏みにじる資格はないんだよ！」

飛鳥の叫ぶ声が締め切られた部屋に響き渡った——

5

「残念ですけど、デュノア代表。このことは既に、フランス政府のほうに伝わっています」

「なっ！？　どういうことだ！」

扇子に王手と描かれたそれを見せながら言う楯無。既に手を回し、政府との連絡も取られていた。従者がそれを行ない、フランス政府との会談をこの一週間の間に終えて、既に色々と返答を得ていた。

流石に緊張したと、内心で苦笑いを隠せない楯無。しかし、表面的な表情は相変わらず読めないものであり、射殺するような冷たく、それでいて鋭い視線をシリルに向けている。

「フランス政府の回答は、『こちらとしては、シャルル・デュノアは存在していると認識している』とのことです」

「くっ！」

シリルとフランス側が結託して今回のことを起こしたわけではなかった。フランス政府としてはシリルが連れてきたシャルロットが

一夏に続いてのISの適正のある男だということで代表候補生にさせたのだ。

もちろんすぐにはない。高い適正Aという結果が出たために、その候補生に見合った実力を付けさせるために訓練を行わせた。そして、一夏が世界初の男の操縦者というのが発表されたのをきっかけに、今回のことを思いついたのだ。

男の操縦者というだけで十分な広告塔になる。しかし、そうするためにはあまりにも時間がなかった。例え、一年という時間を待ったとしても、その間にデュノア社が潰れる可能性だってあった。

その時でさえ、経営もギリギリであり、第三世代の開発が全く進まないことに、社内においてもかなり空気が重かった。そのために、僅か半年もかけずに転校させることにした。

その僅かな時間でシャルロットシャルルに対してISの訓練以外にも様々な訓練を行わせた。それらは普通の一般人が必要とは思えないもの。スパイに必要な事を訓練させた。主にハッキングであろうか。そのために、虚が打ち込んだ防御プログラムを解除させることができたのだ。

もちろん男装させたのも、広告塔となるそれもあるが、最も大きく占めているのは、一夏に接近しやすくなるという目論見があったから。ただ一人の男として肩身が狭い思いをしているだろう一夏にとって救いになるだろうと考えたからだ。

そんなことを考えていたシリルにとって、また幸か不幸かとある情報が入ってきた。ISではないマルチスーツを使いISを倒した男子がIS学園に入学するという事だった。

更にそれが使用するものの中に、現代で開発にも着手されていないかったビーム兵器を使うというのだから、それを逃さないわけはなかった。そのために飛鳥と一夏の機体データを奪ってくるようにシヤルロットをIS学園に転校させた。

うまくいくと思っていた。そうすれば会社は潰れずに済む……、そう思っていた。だが、シリルの目論見は脆くも崩れ去った。誰でもなく、データを奪おうとしていたターゲットである紅月飛鳥に……。

もう何も言えない。言ったとしても、シリルにはもはや切る札がないのだから。目の前に映し出された、彼にとっては裏切りとも取れる、逃げとも取れる同じく手を罪に染めたものたちの声。

それらがいつの間にか無数の刃となってシリルを追い詰めていた。自らが駒としか見ていなかった者たちにこうもされるとは……。

「く、くそ！」

多くの者たちの運命を踏みにじってきたシリル自身の運命がはかなくも、ガラスが砕け散るように終わった瞬間を表しているようだ。ガクリと頭を垂れ、膝を折り、床に崩れ落ちる。項垂れるようにして、手と足を付く。

「お父さん……」

どんな思いをしていたのだろうか。何とか会社を発展させようという経営者としての思い。会社が潰れるかもしれないという経営者としての恐怖。経営者としては社を思う気持ちがあり、素晴らしい

かもしれない。だが、例えそうだとしても、やって良いことと悪いことがある。それに、シリルは何より、シャルロットをはじめとして、多くの者たちの運命を踏みにじったのだ。

そんな項垂れ、崩れ落ちてしまった父親の背中を見つめるシャルロットの胸にある気持ちはなんだろうか。自らの運命を踏みにじった、父親だとしても許せないという気持ち。会社のためということでは黒い部分に手を出していたことに対する同情という気持ち。自分はやはり望まれて生まれてきたわけではないのかもしれないという、寂しい気持ちが入り混じっていた……。

———詳細な証拠があるということはフランス政府は本当にシリル・デュノアがいると認識していたのね……。それにしても、たかが一つの企業で、政府を騙せるのかしら。

ふと楯無は閉じられた扇子を唇にあてがいながら考える。視線が自然と下がる。しかし、考えたとしてその疑念を晴らす証拠も、その後ろ盾がいるかもしれないという確固たるものもない。

———私の思い過ごしかしら。だとしたら、それで終わって欲しいのだけれど……。

「デュノア代表、もうあなたに逃げる場はありません」

そう言うところに隠れていたのか、更識の従者たち——様々なところに潜入しているということもあり、もちろん警察関係者もいるのだ。そこには確かに手帳を翳しているものたちが奥のほうから現れた。

それを見たシリルは本当の意味で自身の終わりを確信した。さあ

つと血の気が引いていくのが見て取れた。あれだけ温厚そうで、明るい笑みを浮かべていた顔には、もはや感情というものは見て取ることが難しいほどにまるで能面のようなものにならわっていた。

「は、ははは、あはははははは！」

「「っ！」」

突然狂ったように笑い出す。あまりの突然のことに、流石にその場にいた者たちは哑然とした表情を浮かべざるを得ない。何か嫌な予感が頭をよぎる。

「シ ril・デュノア、違法取引他、多数の罪状により逮捕す——」
「うるさい！」

手錠を持った一人の警察官の後ろにも従者らしきものがある。手を伸ばしてきた一人に対して突然立ち上がるとシヨルダータツクルを喰らわせる。

面食らった一人はそれを受け止める事ができず他の者を巻き込んで後ろに倒れる。それぞれが警戒するようにして身構える。

「奴め、話が違うじゃないか！」

「っ！ やっぱりあんたの後ろに誰かいるんだな？」

睨み付けるように視線を向けながら飛鳥が尋ねる。とはいえ答えるはずもなく、シ ril は吐き捨てるかのようにその言葉を言う。

苦々しげにしているシ ril であったが、突然全員に見えるようにしてその指に嵌められている指輪のようなものを示す。

既婚者であるから結婚指輪かと思う。否、それは――

「まさか！」

それに気づけたのは実際にそれを操縦している飛鳥だけ。その言葉に対してニヤリというようにシリルが気味の悪い笑みを浮かべる。

まずいと思い、それを取り上げようと動き出すものたち。しかし、それよりも早くその指輪が光りだす。

「遅い！」

その瞬間に鋼鉄の拳が光の中から現れ、取り押さえようとした更識の従者たちを吹き飛ばす。整えられていた机や椅子をものすごい音を立てながらも押し倒していく。吹き飛ばされた従者たちは怪我を負ったのか、立ち上がるできない。

「伏せろ！」

飛鳥が頭に電流が走ったような感覚を感じ取り、咄嗟に叫ぶ。虚が隣にいた本音を押し倒し、飛鳥は両隣にいた千冬と楯無の背中を押し、覆いかぶさるようにして床に倒れる。シャルロットも悲鳴を上げながら頭を手で庇いながら床に伏せる。

そんな彼らの頭があったところを黄色の軌跡が薙ぐ。それと同時に緑色の閃光が会議室の壁を破壊する。轟音と共に崩れていく壁。その崩れたところから差し込んでくる太陽の光。

「くっ！ 一体何だというんだ！」

千冬が突然のことに叫ぶように言う。突然光に包まれたと思
ったら、その光の中から黄色の剣閃が飛び出してきた。とっさの判
断で床に倒れこんだのがよかったためにかわせていたが、もしあれ
を受けていたら今頃蒸発していただろう。

「デュノア代表は!？」

光が収まり、そこにいたはずのシリルの姿がないことに気づいた
楯無が叫ぶ。虚と本音も周りを見る。従者たちもいつの間にか立ち
上がっており、探しているが周りにシリルの姿は見られない。

「なんだ!？ あれは!」

「「っ!」」

一人の従者が突然指を指し、叫ぶ。全員の視線がその指差された
ほうへと向けられる。大きく崩れた壁、そこから太陽の光が差し込
んでいる。まるでそこに対してスポットライトが当てられているか
のように。

そこにいたのはシリルではない、全身にISではないもの機械装甲を纏った。

「あ、あれは……」

モビルスーツ
“MS”

そこにいたのはISよりも人型に近い全身装甲のもの——所謂
MSであった。右肩から見える突起はビームサーベル、握られた右
手にあるはビームライフルであろう。おそらくあの光の中から見え
た黄と緑色のものはそれらの攻撃だろう。まさかこんな狭いところ
で起動させてくるとは。

死傷者がいなかったからいいが、それは飛鳥たちを殺すつもりで攻撃をしてきた。

「なんなんだ、あんたは！」

飛鳥が右手にある待機状態のインパルスをいつでも起動させられるようにと構えを見せる。睨みつける視線がそれにぶつけられる。

「こうなってしまったてはデュノア社社長としては終わりだ。だが、私はまだ捕まるわけにはいかないのですね」

「逃げるのか！ 罪を犯したなら、その罰を受けろ！」

飛鳥がそう叫ぶのと同時にインパルスを起動させる。それを見たシリルは身を翻し、そこから逃走する。

「っ！ 待て、逃げるな！」

「紅月！」

「アックン！」

突然インパルスを起動させ、逃げていくシリルを追いかけるようにして壁に開いた大きな穴から飛び出していく飛鳥に対して千冬と楯無が叫ぶようにして呼び止める。

だが、それだけで止まるような飛鳥ではない。まるで聞く耳を持たないというようにして言葉を返さずにフォースシルエットを背面に装備させ、四門のスラスターを吹かせ、追いかける。

「あれはMSなのか？」

「全身装甲のIS……、ではないでしょう。未だに男で操縦できる

のは織斑くんだけですからね」

「なら、やはり」

千冬が尋ねるようにして言う。しかし、尋ねるまでもない問いである。それが楯無の言う答えが示していた。確かにと内心で思う千冬。本当は関わってほしくはないと思っていたが、自身の弟である一夏だけが、今回の事件でシャルロットが女であったということであらう。ただ一人の例外であるということが分かった。

だが、それで解決したわけではない。MSはもともと飛鳥の父親が残っていたものだけであるはずだ。なら何故、他の機体があるというのだろうか。

——デュノア代表……、いいえ、今はシリルと言えはいかしら。彼の後ろには何か大きなものがある。それがMSと何か関係があるのは確かだ。

楯無は冷静にそう分析する。とはいえ、それだけの技術力があるというのは見過ごせない。更に生産力もあるとなれば最悪戦争になりかねない。

“IS^{女性}VS^{男性}MS”

現在の世界は白騎士事件をきっかけに大きく歪んだものとなってしまった。まるで綺麗な絵になりつつあったものに対して、泥水をかけてしまったかのように。

“女尊男卑”

それが現代の世界に蔓延している風潮である。ISは女性にしか

使えない。だから女性が今まで国防の大部分を男性が担ってきたのに取って代わった。だから、女性が偉い———というように雪崩式に、そのようなおかしい風潮が出来上がっていった。そして、極め付きには女性優遇の政策というものが出来上がり、そのために一般人の間にもそれを盾にとって理不尽な要求をするものが増えてきていた。

そんな時に現れたのが、性別を問わずに使用できるMSであれば、楯無の想像しているような最悪なことになりかねない。

———なんとしてでも捕まえないと！ 聞き出せることは聞き出さないといけないわね。少々痛い目にあってももらわないといけないかもしれないけど……。

「織斑先生。私もアックン——飛鳥くんの援護に向かいたいと思いますので、あとのことをよろしくお願いします」

「分かった。頼むぞ」

もちろん楯無は言い残すと自らの専用機である霧纏ミステリアス・レイディの淑女を起動させ、水色の装甲を纏う。MSと反対で、装甲が少ない。その手に蒼流旋を握り締め、その開いた穴から飛び出して行く。

何事もなければいいが……。そう考える千冬であるが、そんな彼女の不安は———

PHASE 34 Rebellion（反逆）（後書き）

ED3↓RIVER＞石井竜也＜

如何でしたでしょうか？

ご感想をいただけると嬉しいです。

今後とも泉海斗と作品たちをよろしくお願いします。

次回予告↓BGM『明日への橋』↓

突如として現れたのは飛鳥の父が作り上げたモビルスーツと見られるもの

だが、それが何故彼らの前に現れたのか

それを纏いて逃走するシリル・デュノア

それは罪からの逃走

それを追うは飛鳥と楯無

そんな二人の前に現れるは複数体のモビルスーツ——それらは有人機

逃げる者と追う者

彼らがたどり着く最後というのは——

次回 インフィニット・ストラトスへ怒れる瞳へ
別れとワカレ PHASE35

罪人に告げられるは神からの神罰……

加筆修正完了 11月27日

PHASE35 Parting（別れ）（前書き）

様々なご感想とご意見ありがとうございます。

今回からSEED&SEED・DESTINYの原作のキャラが登場します。

それでは本編スタートします。

突如として現れたのは飛鳥の父が作り上げたモビルスーツと見られるもの

だが、それが何故彼らの前に現れたのか

それを纏いて逃走するシリル・デュノア

それは罪からの逃走

それを追うは飛鳥と楯無

そんな二人の前に現れるは複数体のモビルスーツ——それらは有人機

逃げる者と追う者

彼らがたどり着く最後というのは——

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳く

BGM1↓黒い波動

加筆修正完了 11月27日

PHASE35 Parting(別れ)

1

「待て！ 逃げるな！」

「くっ！ しつこい子どもだ！」

飛鳥は高速で逃走するシリルを追いかける。機体性能のせいか徐々に追いつきつつあった。

「こいつ！ 落ちろ！」

「っ！」

突然脇越しからビームライフルを連射してくる。飛ぶことはある程度OSなどが制御してくれるだろう。しかし、射撃となればそうはいかない。狙いを付けることはできたとしても、それはあくまでもそこまでであり、撃つか撃たないかは本人のトリガーを引く早さにかかっているし、敵がずっとその場に居続けるわけでもない。教科書どおりではスポーツには勝てても、殺し合いには勝てないのだ。

「くそ！ 当たらない！」

次々と放たれるライフルであるが、右に左にと機体进行操作して回避していく飛鳥。焦れるようにして叫ぶシリル。その間にも、飛鳥との距離が縮みつつあった。飛鳥は腰にマウントされているビームライフルを掴むと、狙いをつけて右手に握られているシリルのビームライフルに向かって撃つ。

「っ！」

それが真っ直ぐ、まるで吸い込まれるようにしてシリルの持つライフルを撃ち抜き、爆発させる。歯噛みするシリルであるが、更にスラスターを吹かせて逃走する。

「あんたは罪を犯したんだ！ 逃げずに戻れ！ たとえ許されなくても、償うことくらいしろ！」

「戻ったところで私の未来は既に終わっている！ それを分かっている。戻る馬鹿はいないだろうに！」

「あんたはそんな馬鹿よりも馬鹿だよ！ 大馬鹿だ！」
「この……、子どもの癖に分かったような口を！」

吐き捨てるように言うが、視線はただただ逃げの方向に向けられている。ハイパーセンサーがあるために一々振り向く必要はない。

『アツくん！』

「楯無！？ いきなりなんだよ！」

先ほどの言い合いのこともあり、飛鳥は少々苛立ちを隠せない。会話をしながらも、視線はただ逃げるシリルに対して向けられている。最悪の場合は撃墜をしなければいけないかもしれない。

『私も今そっちに向かってる。彼は殺しちゃ駄目よ』

「ならどうすればいいんだよ！」

『手足の装甲を吹き飛ばすくらいならいいわよ』

「っ！ くそ、結局それかよ！」

楯無からの通信を聞き、飛鳥は内心は苛立ちを募らせながらもライフルを再び握り締める。殺すわけには行かない、生かしつつ捕まえる。それにはどれだけの技量が必要だろうか。もともとMSとい

うのは宇宙に進出するために飛鳥の父親が開発したものであるが、様々な武装を取り付けることで、既にそれは兵器と化していた。人を殺せる武器なのだ。

「くっそおお!!」

飛鳥は溜まりに溜まった怒りを咆哮として吐き出し、更に加速する。その銃口から放たれる緑色の軌跡が次々とシリルのMSの装甲を抉っていく。肩を、腰を、腕を、脚を……。

「くそ! このままでは!」

このままでは捕まるのがオチだとシリルは毒付く。だが、ろくに訓練も受けていない経営者風情のものが、訓練を受けている現役の者に勝てるだろうか、いや、勝てるはずもない。逃げていることだけでも不思議なのだ。次々と着弾するビーム

「があああああ!」

衝撃に耐え切れるような鍛え方をしていないために、その体が衝撃に対して悲鳴を上げる。激痛を感じ、思わず苦痛の声を上げる。IS学園から逃走していたために、激しい衝撃にて体勢を大きく崩すシリル。もともとOSが頼りであったために立て直すのが間に合わず、海面に叩きつけられ、その上を数メートル水上スキーの如く滑る。

シリルがこの手の違法行為に走った大きなきっかけは、飛鳥には痛いほど分かっていた。

“白騎士事件”

彼もまた篠ノ之束と白騎士によって運命を狂わされた存在。
二人の憎き仇

——なんでだ！　なんでだよ！

どうして人が傷つかないといけないのだ。どうして運命を狂わせられなければいけないのだ。飛鳥の頭にぐるぐると渦巻くようにしてある疑問。すべてはあの二人のせいなのか？

「戻れよ！　これ以上罪を重ねるつもりかよ！」

「もういくつ犯そうが関係のないことだ！　もう取り返しのかないところまできているのだ！」

「だからってええええ！」

更に加速するインパルス。次の瞬間、虚空の彼方から無数の緑色の軌跡が飛鳥に向かって降りそそぐ。

「っ！　なんだ！？」

機体を逸らしてその攻撃を回避する。新手かと思ひ慌てて逃がしてしまふとシリルの方を見る。だが、そこには啞然としているのか、その動きを止めているシリルがそこにいた。

すると雲を突き破り、飛び出してくる機影があった。

「あ、あれは！？」

『アックくん！？　どうしたの！』

「新手だ！」

『っ！』

「また来たんだよ！　さっきのMSが！」

飛鳥は苦々しく思いながらもアンテナのような一本のそれを装備した全身装甲のそれを、睨みつけながら楯無との通信を介して言う。

「くそっ！ 邪魔するなよ！」

インパルスのシステムを使い、相手の生体チェックを行う。その結果は――

「有人機！？ くそっ！ 人が乗ってるのかよ！」

そう毒付いている間にも無数のビームが飛鳥に襲いかかる。ビームライフルを向けるが相手は有人機。以前のように戦えば、おそらく命を奪う可能性もある。逆にこちらが危険である可能性もあるのだ。

――くっ！ 有人だから考えて動いてくる。

以前戦闘をしたことがある無人機とは違い、今は有人機。研ぎ澄まされた飛鳥の第六感が、数機の未確認機から発せられている殺気というものを感じている。一瞬でも気を抜いたら待ち受けているのは――死だけだ。

「数ばかりごちゃごちゃと！」

飛鳥は吐き捨てるようにして叫ぶと、ビームライフルを連射し次々と敵機のライフルを撃ち落としていく。

「アッくん！」

「っ！ 楯無！」

「加勢するわ、一人でも多く捕らえるの！ 奴らは何か大きなものと繋がってる！」

「分かってる！」

隣に立つ楯無がその手に蒼流旋を握り締め、敵機に対してその矛先を向ける。それを感知したのか、ライフルを落とされたものは一旦退くようにして後退する。それと入れ替わるようにして、ライフルとビームサーベルを構える数機の敵が二人の前に立ちはだかる。

まるでシリルを守るようにして――

「各個撃破！」

「了解！」

楯無の指示に即答する飛鳥。散開してそれぞれ六機の未確認機に対して三機ずつ相手をするようになった。

「邪魔をするな！」

飛鳥は肩にある突起を掴み、桜色のビーム刃を展開させ、突撃してきた一機のサーベルを回避し、代わりに斜め上に切り上げるようにして、その延長上の腕を斬り飛ばす。

「こいつ！」

それでも追いつがるようにして突撃してくる。体当たりを喰らい、後退する飛鳥であるが、再び迫るそれに対して回し蹴りを食らわせ、海面に叩き落す。

「ええい！ たいした腕もないくせに、数ばかりごちゃごちゃと！」

『アックくん、気を抜いちゃ駄目だよ!』

「分かってる!」

飛鳥の言葉に諫めるようにして言う楯無。握られた蒼流旋の四門のガトリングが火を噴き敵機の装甲を凹ませていく。そして、爆発したそれが煙を上げて墜落していき、海面に叩きつけられた。

ビームサーベルを振り下ろしてきた一機に対して、螺旋を描くようにして、水のナノマシンが蒼流旋に纏われる。その攻撃を見切り、回避し、そのまま装甲に突き立てる。装甲を削るようにしていく。やられまいとして、それががむしゃらにサーベルを振り回す。まずいと思い、水のベールを展開する。しかし、ビームサーベルの熱量にその水の方が蒸発し、ギリギリ回避したとはいえ危ないところだった。

『そっちこそ気をつけろよ!』

「むう。悪かったわよ」

通信から飛鳥の声が聞こえる。心配するように注意してくる飛鳥に対して小さく笑みを浮かべながら答える。

「シリルはそう遠くには行ってないわ。アックくとインパルスなら追いつける!」

『でも、それだと楯無が!』

「うれしい。心配してくれるの?」

『なっ!?! あ、当たり前だろ!』

上ずったような声が聞こえてくる。飛鳥が言うそれには他意はない。ただ純粹に楯無のことが心配なのである。

そんな飛鳥に対して、笑みを浮かべながら言うのだ。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、私をあんまり甘く見ないで欲しいな」

『え?』

飛鳥がどういふことだと言うようにして尋ねてくる。楯無は悟られないようにして罫を張る。その手に持つ蒼流旋のガトリングで巧みに誘導していく。向こうからライフルを撃ってくるが、それほどの実力ではないらしく、余裕を持って回避できる。

「それと見知らぬMSの操縦士さんたち? 少し熱くないですか?」
「「?」」

その言葉を聞いて、動きを止める未確認機たち。それを見て楯無はニヤリと笑みを浮かべる。

その瞬間、いつの間にか誘導され、一箇所に集められていた未確認機の周辺で爆発が起きた。

クリア・パッション
“清き熱情”

ナノマシンで構成された水を霧状にして攻撃対象物へ散布し、ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させ、その衝撃や熱で相手を破壊する戦闘能力である。その拡散範囲は限られているが、先ほどのように一箇所という狭い範囲に敵を追い詰めれば、非常に有用性が高くなる。

「私はロシアの国家代表選手。そう簡単にはやられないわ」

そう言う楯無の目に映っていた煙の中からは、装甲がボロボロになった機体が数機現れ、残っていたものは重力に引かれるようにして海面に向かって落ちていった。

『……。無理はするなよな』

「それはアツくん、そっくりそのまま返すね」

『っ！ 行って来る』

「行ってらっしゃい」

そう言う通信が切れ、四門のスラスターを噴かせたフォースインパルスが逃走するシリルを追いかけて行った――

2

「くそ！ こんな、こんなはずでは！」

シリルはそう何度も吐き捨てるようにしながら逃走する。とはいえ彼に向かう場所というのはあるのだろうか。まるで無限に続く闇に向かって突き進むかのようにしている。

「あいつめ！ 言っていたことと違うじゃないか！」

シリルがここにいない人物を思い出す。金髪で、端正な顔立ち。知識や洞察力は優れているが、器量は狭く性格も自己中心的である人物。冷静な皮肉屋を気取っている。

「ムルタ・アズラエル……」

苦々しげにその人物の名前を呟く。この機体――GAT-01『ストライクダガー』である。デュノア社と手を組んでいたその巨

大な謎の組織にて開発されているMSだと言う。

「奴がよく現れるところに行くしかないか……。くっ！ あの子ども、余計な真似を——」

「誰が余計な真似だって？」

「っ！」

突然後ろからオープンチャンネルにて声が届く。先ほど振り切ったと思っていた飛鳥とインパルスの姿がカメラに映る。思わず唇を噛む。

せっかくここまで来たというのに、こんな所で捕まるわけには行かない。だからといって、シリルには戦闘力は無い。

——万事休すか……。

ビームライフルを構えた飛鳥。狙うは両腕部と脚部。完全に戦闘能力を奪う必要があると思った。トリガーを引き、銃口に光が放たれようとした、その時だった。

「っ！」

突然のアラート。そして、次の瞬間、右手にあったライフルが何かに打ち抜かれ、爆発したのだ。

「な、なんだ!？」

飛鳥がアラートが示すほうにカメラを向ける。そこには橙色の機体が見えた。

——あ、あれは！

ラファール・リヴァイヴ・カスタム？を起動させたシャルロット・デュノアがこちらに向けてショットガンを構えていたのだ。狙い打ったのはビームライフル。その瞬間に飛鳥は一体何をするのかと叫ぶ。シャルロットの表情には申し訳なさが見える。

「ごめん……」

「何するんだよ！」

「もう一度、もう一度お父さんと話をさせて！」
「っ！」

何を言っているんだと飛鳥は目を見開く。しかし、そういうシャルロットには最後の願いというのが瞳の中にあるのを飛鳥は見出し、ゼロに近いだろう。

だが、それでもシャルロットにとって、シリルは父親なのだ。そんなシャルロットを利用しつつして、最後には捨てるようなことをするシリルをまだ信用しているのか。飛鳥には分からなかった。

「何であんな奴！ お前のことを利用してたんだぞ！」

「うん、分かってる。でも、それ以上にあの人は——僕のお父さんだから」

そう尋ねる飛鳥に対して、苦笑いを浮かべながらもそういうシャルロット。分からない、どうしても飛鳥はそう思いながら空中に立つ。

シャルロットは飛鳥からその先に佇んでいるシリルの方へと視線を身体ごとそちらへと向ける。顔面も覆っているその全身装甲で表

情は見えないが、突然シャルロットが登場したために、驚いているだろう。

「なぜここに？」

その声色はいつもの営業的な優しげなものではなく、感情の籠もっていない無機質なものであった。それを聞いて思わず身が震え上がる感覚を感じた。あんなにも温厚である父親にも、こんな冷たい部分があったのかと。ここへ来て初めて知った。

「もう一度、お父さんと話がしたくて……」

「もう、お前とは話すこともない。それに――」

お前はもう私の娘ではない。シャルロット・デュノアという存在はこの世には存在しないと告げるシリル。まるで心臓を握りつぶされたかのような酷い痛みがシャルロットの胸に走る。一瞬ブラックアウトしそうになるが、何とか意識を保つ。

「それでも……、もう一度やり直しませんか？ 確かにお父さんはしてはいけないことをしたけど、それでも！」

「くどい……、戻ったとて何十年も牢獄行き、更に出たとてもはや働ける年齢ではなくなっている。そんな運命が待っているくらいなら」

「お父さん！」

それでも、それでもこれ以上父をそちらの道に行かせてはいけない。まだここに自分がいるから、手を伸ばせば届くからまだ間に合う。そう思っていた。

しかし、父親から娘に対して返された言葉は明らかなる拒絶であ

った。届かない……、届くような所にいるというのに、どうしてもその手が届かない。シリルがその手を握ってくれない。

「お前のことを娘だと思ったことは――」

「やめろ！ それを言うな！」

シリルのオープンチャンネルによるその言葉を聞いて、飛鳥はその後にくだるう言葉を理解し、それをやめさせるために叫ぶ。

スラスターを噴かせ、全力でシリルへと向かう。殴ってでも止めなければいけない。今のシャルロットの心は既に崩壊寸前だ。ただでさえ拒絶され、更に存在と愛されていたということも否定されたのだ。

――どこまでふざけてるんだ、あんたは！

飛鳥は紅玉の瞳に怒りの炎を燃え滾らせて飛ぶ。肩越しに突起を掴み、ビームサーベルを展開する。シャルロットがそれに気づいたが、それは既に遅い。シリルに対してその刃を振り下ろす。

「くっ！」

咄嗟にシールドを翳し、それを受け止めるが、それだけだ。衝撃を受け止めきれずにその機体ごと後方へと弾かれる。しかし、逆に双方に距離が開く、しまったと思ったときには既にシリルの口は開かれていた。

「今まで一度もない！」

「っ！」

「あ、あんたって人はあああああ！」

そう言いきったシリル。

その瞬間にひび割れていた何かが砕ける。最後まで信じていたシヤロットに手を伸ばさず、その手を払った。シヤロットはもはや視点が定まらず、虚空を見つめる。啞然とした様子で呆然とその場に佇む。

その瞬間飛鳥の怒りのボルテージが沸点を遙かに超えた。何かが頭の中ではじけるのを感じる。その瞬間自身には分からないが、飛鳥の瞳にはハイライトが消えていた。

怒りで頭が沸騰しているというのに何故かクリアであり、冷静に考えられた。まるですべての邪念を振り払った境地に立つが如く。

左手に持たれていたA Bシールドを投げ捨てると、その手にもビームサーベルを握り締め、スラスターを吹かして突撃した。

“殺しちゃ駄目だよ”

楯無の言葉が頭に響く。

「こんのおおお！」

「ぐっ！」

両手に持たれたビームサーベルがまるで舞を舞うかのようにインパルスが動くのに呼応して剣閃を描く。

ストライクダガーに搭載されているOSの回避システムがそれを限界に発揮して回避していくがそれにシリル自身がついていけず

苦悶の声を漏らし、口から吐血する。

画面に血がつく。そのカメラには自分が切り捨てた娘^{こころ}だった少女の姿が映る。こちらに対して、信じられないというような視線を向けているが、その視点は定まっておらずに揺れ動いている。

そうしている内にも飛鳥の攻撃が腹あたりを捕らえる。鋭い一閃が装甲をえぐる。火花が弾け、思わず眩しいと目を瞑ってしまう。

「あんたはなんなんだ！ 自分のしてしまったことを悔いもせず、ただその罪から逃げる！ それをすべて、命令されてやったデュノアたちに擦り付けるって言うのかよ！」

「き、貴様……」

唸るようにしてシリルはそう言葉を漏らす。だが、そこには人の上に立つものとしての威厳というものは皆無である。

だが、シリルは戻る気はないらしい。ただただ、己の罪から逃げるために……。

「そうだと言うなら、あんたは俺が止めるんだ！」

「なっ！」

「今日！ ここで！」

飛鳥は己の信念を信じ、左手のサーベルを逆手に持ち変え、目前にいる敵^{シリル・デュノア}へと迫る。逃走しているシリルのストライクダガーがその言葉にたじろぐようにして動きを鈍らせるのが鮮明になった瞳に映った。それを逃さない。

飛鳥はフルスピードでシリルの懐に入り込む。逆刃のサーベルで

攻撃するそれに対して、防御プログラムがシールドを翳し、受け止める。だが、それだけだ。衝撃で腕がシールドごと弾かれる。

「それが……、どうした！」

大きく隙ができたのに対して、右手のサーベルを唐竹に切り下ろす。それによって左腕の延長部分が切り飛ばされた。しかし、飛鳥の猛攻はそれで終わらなかった。

インパルスの動きを止めることなく、複雑な舞いを舞うように、二本のビームサーベルを巧みに操り、縦横に弧を描くが如く光の刃がそれを切り刻む。頭部を覆っていた装甲が切り飛ばされ、更にほとんどの装甲に悪魔の爪がえぐったかのような傷を残し、残っていた右腕と両足も切り飛ばし、本当の意味で達磨と化したシリル。ほぼ機能を停止したストライクダガーは重力に引かれ、海面に吸い込まれるようにして落ちていく。

空に舞い上がっていた細かな装甲の破片が、まるでシリルの碎けた野望や運命のように思えてならない。

啞然とした表情で空中に佇むインパルスを見上げているシリル。飛鳥高度から叩き落されたが、最後の最後で絶対防御と同じ働きがMSにも搭載されているために、それが起動して難を逃れた。

しかし、もはや動くことのない機体。逃げる手段を失ったシリルに待つのは牢獄という罪を償わせる場所であろう。

——くそ！　こんなはずでは……。

苦痛に苦しむシリルであるが、神はまだ、彼に神罰を下していない――

3

「ぐうつ！」

苦痛に整った顔が大きく歪む。それと同時に、突然電子音が鳴り響く。どうやら残っている通信機器はまだ使えるようだ。更にその虚空に現れるモニターが現れる。

そこに現れたのは、人を舐めるような笑みを浮かべた、端正な顔立ちと金色の髪をしたスーツ姿の男性だった。

「ア、ズラエル……」

『どうも、シリル・デュノア』

相変わらずねちねちとした気に食わない口調での声がシリルの耳を打つ。しかし、そのあとに続く言葉が、冷たい感触となってシリルの思考を一瞬にして凍りつかせたのだ。

『いやあしかし、あなたは良く動いてくれました。楽しかったですよお？ 親子共演の喜劇ハア』

「な、なにに……」

シリルはすぐにその言葉を理解できなかった。一体どういう意味だと。

『おやあ？ どういうことだと言う顔ですネエ。ああ、そうでしょうね。分かりましたヨ、特別にお教えしましょう』

その現れた男——ムルタ・アズラエルという人物の笑みが、ゆっくりと悪意に染まったものへとなるにつれ、速度を増して、シリルは先ほどの言葉の意味を理解していた。

——ま、まさか。最初からこうするつもりだったのか。こうなる運命だったのか……。

経営が困難に陥っていたデュノア社社長であるシリルに対して手を差し伸べるかのようにしてきたのは紛れもないアズラエルだ。

シャルロットの適性検査を監督したのも彼であり、それに目を付けて今回のことを計画したのもほとんどが彼だ。

そんな空腹な獣に対して高級な餌をぶら下げるかのようにしていたアズラエルのそれにまんまと引っかかってしまったシリル。

ダガーシリーズ他、様々な機体を製造するために必要なデータなどを提供したのも自分だ。

『お分かりいただけましたカー？』

「貴様……、すべて図っての」

『当然じゃないですか。たかが一つの会社のトップよりも更に上で局面を見ているものがあるんですヨォ』

まるで子どもにやさしく諭すようにして言うアズラエル。苦々しげにそんな年下でありながら、自分よりも上の地位にいる彼に対して視線をぶつける。しかし、そんなシリルの足掻きのようなそれに対して軽く受け流す。

『ご心配なく。会社の方もこのボクがあ買い取ってあげますので。社員の方々のこともご心配なく。それとご提供いただいたラファール・リヴァイヴのコアですが、ありがたく使わせてもらいますヨオ？』

「く、くそっ！」

いくらこちらから言おうとも、向こうには聞こえるだけであり、意味はない。逆にこちらに対して言うてくるアズラエルの言葉は真っ直ぐに刃となってシリルを追い詰める。

結局シリルが行ったことで残ったのは、多くの者たちの運命を蔑ろにしてしまったという最悪の結果だけだ。

「よくも、よくも私を！」

『駄目ですね、もう駄目駄目デス。そういう物言いですから、器量が小さいと見られるんですヨオ』

同情するように頭を横に振り、ため息混じりにそういうアズラエル。こんな男の掌の上で踊らされていたのかと思うと自分の浅はかさを感じると共に無能さを感じる。

「アズラエルーっ！」

『あ、そうそう、言い忘れてましたけど。そのストライクダガーは爆発しますよから』

「貴様ーっ！」

シリルは怒りに支配されていた。本音を言うとは画面の向こうにいるアズラエルのことを殴り飛ばしたい気持ちだった。延長上の腕が切られているが、まだ動く右腕を振りかぶり、海面上であるが勢いをつけて画面を殴る。しかし、その瞬間にそれは掻き消える。最後

に見えたアズラエルの更に笑う様子を見て、シリルの怒りは頂点に達した。

しかし、その怒りをぶつけることなく、機体に内蔵されていた遠隔操作型の爆弾が起動し、シリルはその炎によって身を食い尽くされた。その身は灰すらも残ることはない。まるで償いきれない罪を犯したシリルに対する神より言い渡された、地獄の業火による判決だったのかもしれない――

PHASE35 Parting（別れ）（後書き）

ED3↓RIVER＞石井竜也＜

如何でしたでしょうか？ 様々な意見をいただき、これを含めて書きダメを一気に直しているところであります。原作のようにご都合主義と取られた方もいるかもしれませんが、少しでも面白いと思ってもらえるような作品にしていきたいと思いますので、今後ともなにとぞよろしくお願いします。

ご感想をいただければ嬉しいです。

次回予告（BGM『明日への橋』）

運命は大きく変わった

それは良い方なのか、悪い方なのか

どう受け止めるかはその人間しだい

帰還せし戦士たちの胸に走る痛み

もう少し早ければ

もう少し何とかなったのではないか

それはIFでしかない

今一人の少女は運命の分岐点に立つ

己の意志で、その先にある道を選び取らなければいけない

そう、今度こそ、自身の意志で立つことを選び取らなければいけないのだ

次回 Infinite・Stratos（怒れる瞳） PHAS
E35 帰還

先の見えぬ未来に、一縷の希望を見出せるか……

PS 誤字脱字の修正をしました。発見した場合は報告していただけると嬉しいです。

加筆修正完了 11月27日

PHASE 36 Return（帰還）（前書き）

たくさんのご感想と閲覧ありがとうございます。

それでは本編スタートします。

運命は大きく変わった

それは良い方なのか、悪い方なのか

どう受け止めるかはその人間しだい

帰還せし戦士たちの胸に走る痛み

もう少し早ければ

もう少し何とかなったのではないか

それはIFでしかない

今一人の少女は運命の分岐点に立つ

己の意志で、その先にある道を選び取らなければいけない

そう、今度こそ、自身の意志で立つことを選び取らなければいけないのだ

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳く

加筆修正完了
11月27日

PHASE 36 Return（帰還）

1

運がよかったというしかないのだろうか。シャルロットが父親であるシリルが爆死するのを見ずに済んだのは本当の意味で幸運だったのかもしれない。とはいえ、完全なる拒絶を受けた彼女は、ギリギリの所で心の欠片を全て手放すことはしなかったようだ。

もしそうであつたならば完全に精神病院行きだ。あのあと爆発音に驚いたために気を失ったシャルロット。まずいと思った飛鳥はすぐに両手のサーベルを投げ捨てるとトップスピードでそこに向かい、ギリギリの所でシャルロットを回収することに成功した。

それと同時に、楯無がいる方向から次々と大きな爆発音が数発起きたのだ。海面に大きな水柱がたったり、空中で黒煙が上がるのも見えた。その瞬間飛鳥は自分でもいつの間に動き出したのか分からないというように、フルスピードでその方向へと向かった。

「榴花！」

最悪の予想が頭から離れない。あの海面の爆発に巻き込まれて、あの空中にただずむ黒煙の中での爆発に巻き込まれていたならと……。

あたりを見渡しても水色の機体——霧纏ミステリアス・レイディの少女の姿が見えない。

———そ、そんな……。

ハイパーセンサーで探すもその姿を捕えることはできない。飛鳥に不安の念が募る。もしあの時自分がこの場を離れていなかったら。しかし、そうしていればシリル・デュノアを逃がしていただろう。良手だったかもしれない行動だが、それが結果として更識楯無――更識櫛花を危険な目に遭わせてしまった。

「やめろよ、やめてくれよ……」

ゆつくりと煙が晴れるのを横目に。インパルスを駆りて辺りを搜索する。すると突然、何かが横一線に払われた。煙が切り裂かれるようにして晴れる。その中から水色の装甲がやや煤汚れている状態のミステリアス・レイディを起動させた櫛花の姿があった。

「櫛花！」

「あ、アックくんって一体どうしたの!？」

突然近づいて来て肩に手を置く飛鳥。大丈夫なのかと肩を激しく揺さぶりながら尋ねてくる。心配してくれているのは嬉しいのであるが、あまりに激しいので答えようにも答えられない。それに、心なしかシールドエネルギーが減っている。

「おい、大丈夫なのか？ 怪我はないのか？」

「だ、大丈夫だよ、アックくん。心配してくれるのは嬉しいけど」

「そ、そうか。よかった」

櫛花からは飛鳥の表情は見取れない。だが、心からほっとしているのだろうと思う。何よりも大切なものを失うことを酷く怖がっているため、仕方のないことなのだ。

飛鳥は櫛花が無事であることが分かり、ホッとしている。

どうやら一通り撃墜して、尋問しようと近づいたところで突然爆発したということらしい。おそらく引き金はシリルの爆発だったのだろうと飛鳥は思う。櫛花も飛鳥とその腕の仲に抱かれている気を失ったシャルロット以外に姿が見えないことと、先の爆発のことを考慮して、シリルもそうなったのだという答えに行き着いた。

「手がかりはすべて消えた……、か」

「わ、悪かったよ。俺がもつとしっかりしていれば」

「ううん。そんなことないよ、アツくん。アツくんは良くやってくれたよ」

「で、でも！」

飛鳥は自身の失敗を相当悔やんでいるようだ。櫛花としては、そこに誰が行こうともそのような結果になっていただろうと思う。誰が爆弾を内蔵されているなどと気づけるだろうか。

はつきり言ってここにどうしているのか分からないシャルロットを連れて帰って来てくれたことだけでも賞賛ものだ。結局シリルは捕まった後、死ぬまで牢獄入りをすることは自明だった。死がただ早まっただけだと考えるのが妥当だろう。

「ここで話していても仕方ないから、一旦戻ろう。彼女だってそのままでいさせるのも、かわいそうだし」

悲痛な面持ちで気を失っているシャルロットを見る櫛花。確かにこのままの状態にいるのはまずいだろう。寝心地も決して良いとはいえない。すぐに保健室へと連れて行ったほうがいいだろう。

それに、彼女の今後の処遇についても聞かなければいけないだろ

う。とはいえ、飛鳥が直接的に関われることではない。生徒会だとして、そこまで生徒のプライベートなところまで足を踏み入れられるわけじゃない。

「そうだな」

飛鳥もそれに同意し、IS学園のほうへと体を向ける。青々と広がっている海であるのに、全てを飲み込んでしまいそうな、そんな雰囲気を漂わせていた。一体何人の命がここに飲み込まれていったのだろうか。

飛鳥はシリルの運命すらも踏みにじった何者かに対しても、怒りの矛先を構えていたのだった――

2

「特に異常はありませんね。精神的に参っているようですので、しばらくは安静にしたほうがいいかと」

「そうですか、ありがとうございます」

「いえいえ、これも仕事ですから」

保険医が、ベッドに横になっているシャルロットの容態を確かめ、異常はないと、近くに立つ千冬に対して言う。

一度に精神的なショックが来たためにパンクしてしまったのだろう。あの状況だと当然だろうなと思う。

保健室の外で待機している生徒会メンバーとの話もある。千冬はもう一度礼を言い、保健室を出る。

「あ、織斑先生」

「ん、更識か。全員揃っているようだな」

千冬が楯無の言葉に反応し、彼女の周りを見渡す。生徒会メンバーである飛鳥、虚、本音の姿が見える。

虚はあくまで冷静に、本音はクラスメイトのことを案じているのか、不安が見え隠れしており、飛鳥というと何かに対して怒りをもっているのか、不機嫌そうな感じだ。

とはいえ千冬自身も詳しいことはまだ聞いていないが、怒りを感じざるを得なかった。それと同時に自分たちが生み出してしまったISというものが、どれだけの人々の運命^{ジンセイ}を狂わせてしまったのかと思うと、罪悪感に押しつぶされそうだ。

「それで、お前たちが追いかけていったデュノア社長のことが……」

「死んだよ」

「アツくん!」

サラリとそう言う飛鳥に対して、流石に言葉を選べというように楯無が諫める。壁に身体を預け、腕組みをして目を閉じている飛鳥。それでもしなければ、溜まりすぎた怒りが爆発しそうだった。

「いきなり爆発したんだ。止められなかった……」

「そうか。だが、お前が気にすることはない。誰が行ってもあれは止めることはできなかったのだからな」

そう言う千冬であるが、空気が重いことには変わらない。既にフランス政府にも連絡がいつているが、一連のことでむしろ好都合な

どということを書いてきた。確かに、向こうとしてはそうかもしれないが、こちらとしては生徒のこともあるので簡単には済まされない。

「それで織斑先生」

「ああ、デュノアの件か」

「ええ、彼女は指示されたとはいえ、それに従って事を行ないましたから」

「むこう——フランス政府としてもデュノアの件については慎重になっているからな」

シャルロットが行ったことは確かにフランス政府としては不利益になることこの上ない。だからこそ、それを闇に葬るために条件を日本に対して提示したのだ。他国にそれを知られるわけにはいかず、自国を守るために……。

そのためなら人の一人や二人の命や運命というのは関係のないことなのだろう。それよりも国の威信を守ることが先決だから。

「あいつはどうなるんだよ」

「相変わらずだな、まったく」

小さくため息をつく千冬。何度いっても直そうとしない飛鳥に、流石の千冬もお手上げのようだ。こちらを見て、飛鳥はシャルロットの処遇について尋ねてきた。

「回答待ちだ。だが、おそらくは候補生の権利と専用機は剥奪され、数年は牢獄行きだろうがな」

「分かっていたことですけど、いざ聞いてみると辛いものですね」

そう言うは虚。とはいえ、してはいけなかったのだから、それ相応の罰は受けなければいけない。彼女はそれ以上に精神的にショックが多すぎた。

隣に立つ彼女の妹である本音は心配そうな表情で、無駄に長い袖で口元を隠しながら呟く。

「ショックだっただろうな」

一週間だけとはいえ、それなりにも親しくなっていたから、そう心配になるのは当然だろう。

父親に拒絶されただけではなく、その存在すらも否定された。彼女は自らの存在意義を失ってしまったのだ。今まで一体何を支えに生きていたのだろうか。

父と母に囲まれて、ただ一人の少女として生きることがシャルロットの本当に求めていたことだった。だが、母と死別し、父はほとんど別荘には来ない。そして、彼には本妻がいたということであり、そんな彼女からもシャルロットが受け入れられることはなかった。

既にそこからシリルにとっての人形となっていたのかもしれない。適性検査の結果が高かったということで流されるように候補生となり、訓練を受け、そして今年に入って突然世界を震撼させたニュース——織斑一夏。

男として初めてといえるIS操縦者というニュースは世界中で注目された。更に彼がかの世界最強と呼ばれたブリュンヒルデ——織斑千冬の弟だということもまた、その注目に拍車をかけることになった。

それを利用しない手はないと再び川を流れるかのように身を任せてシャルロットは男として……、シャルルとしてIS学園にやってきた。

どれだけ不安だっただろうか、何度不安で眠れない日があっただろうか、どれだけ自らの運命に絶望しただろうか。

「こちらからもアプローチをかけてみるつもりだ。長引かせるとデュノアにとってもきついだろうからな」

とはいえ、彼女を本国に戻しても決していることは待っていないだろう。それに彼女には引き取り手もない。

最悪自殺なんてこともあるかもしれない。ないとは言いきれない彼女の精神状態。どうすればいいのかと千冬は思案する。

「もう一度特記事項を盾に取りますか？ それ無しでも司法取引しだいでは、先ほどとは違って、事件自体がなくなったことになっていても、むしろは条件を提示して無理やりもみ消したものですから。こちらからも何らかの条件を提示することもできるのではないですか？」

「確かに……」

特記事項を盾にして、それ無しでもシャルロットの身柄だけでもこちらで保護したほうがいいのではないか。しかし、彼女がこのままで良いというならば強制はできない。押し付けのような優しさでは誰も救えない。

「なら、一応デュノアにも話をしよう。こちらだけで決めても、逆

に奴を傷つけかねんからな」

「分かりました。一応その用意だけはしておきますね」

「ああ、助かる」

千冬と楯無がこの場にはいないシャルロットのことを考慮したことを話している。一応そのことも考えていたのかと思うと、飛鳥は内心誰にも悟られずに深い安堵の息を吐く。

とはいえ、彼女が一体その手を握るか、それとも運命に身を任せるか。どちらにせよ彼女が決めること、だが、目にさせる手札は一枚でも多い方がいいだろう。

飛鳥としては、どちらかという彼女にもう一度何かしらの生きる意志を持つてほしいというのが本音だ。今目の前にいる彼女たちとここにはいない簪のおかげで飛鳥は一度屈しかけていた運命に立ち向かう勇気と生きる意志を持てた。

——俺の生きる意志……、大切なものを守り、そして——

“篠ノ之束と白騎士をこの手で殺す”

それが、今飛鳥がここに生きていると存在を証明しているもの。
だが——

——もし、あいつらを殺したら、俺は一体……。

その後のことなんて考えたこともなかった。いつ現れるか分からない篠ノ之束と白騎士。

——血で汚れた俺を皆はどう思うのだろうか……。

受け入れてくれるだろうか、それとも恐怖し、拒絶するだろうか。今まで考えたことがなかったために、答えが見つからない。

だが、ふと思ったこと。ただ平和な日々を幸せに過ごしたい――

もしかしたらそれが本当の飛鳥の望みなのかもしれない。だが、それに気づくのはまだ後になってのことだ――

PHASE 36 Return（帰還）（後書き）

ED3↓RIVER＞石井竜也＜

如何でしたでしょうか？少しでも面白いと思ってもらえるような作品にしていきたいと思いますので、今後ともなにとぞよろしく願います。

ご感想をいただければ嬉しいです。

次回予告～BGM『明日への橋』～

運命

幾重にも伸びた道

その先にあるは同じ未来か、それとも違う未来か

迷う者に、嘗て同じ道を歩んだものが指針を示す

それが与えるものとは

次回 Infinite・Stratos（怒れる瞳） PHAS
E37 Old・Sore（古傷）

その過去、いつかは力と成り得るか……

加筆修正完了 11月27日

PHASE 37 Old・Sore（古傷）（前書き）

いつもたくさんのご感想と閲覧ありがとうございます。

いよいよシャルロット編は残り今回を含めて二話。ここまで読んでくださった皆様ありがとうございます。今後ともよろしく願います。

それでは本編スタートします。

運命

幾重にも伸びた道

その先の先にあるは同じ未来か、それとも違う未来か

迷う者に、嘗て同じ道を歩んだものが指針を示す

それが与えるものとは

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳＜

PHASE 37 Old・Sore（古傷）

1

あの事件から数日が経っていた。当然のように、一般生徒の間でも突然の学園内での爆発や、海上付近での閃光と爆発が話題になっていた。

当然教師たちはその事を知っているために、捏造した情報を生徒たちに流していた。流石に真実を告げるわけにもいかない。

国としても、特に大きな影響はないということをニュースなどで伝えていたために、少しずつそれについては風化していくだろうと思われた。

シャルロット・デュノアが目を覚ましたのもそれくらい時間が経ってからであった。それまでまるで死んだように眠っていた。

シャルロットにしてみれば、眼を開ければすべてが夢であったなラと思っていたが、当然のように現実には彼女に対して辛い運命を突きつけた。

——お父さん……。

あの時突然父が爆死したことをシャルロットは見ていたのだ。剣閃が幾重ものに重なって切り刻まれた父。あれだけを見ても、まるで飛鳥は殺しにかかっているようにも見えただろう。しかし、シャルロットにすれば、あの時の飛鳥は、自身の父を止めようとしていただけなのだろうと理解していた。そこから感じられたのは怒りで

あつて殺意ではなかったからだ。

一体どれほど危険なものと手を組んでいたのか。シャルロットには想像も付かない社会の黒い部分。父シリルもまた、辛かったのかもしれない。それならそうと何か言つてほしかった。彼が自分を自分の娘ではないと言つても、シャルロットにとってはただ一人の生きていた肉親だったのだ。そういう時こそ手を取り合うのが家族、親子なのではないか……。

もつと何とかなつたかもしれない運命^{I F}があつたかもしれない。今となつてはどうしようもないことであるが、肉親を失ってしまったシャルロットには小さな穴が心に開いていた。

現在は昼休みくらいの時間帯だろうか。頭上にある時計がその時間帯を針で指し示していた。そこには日付も書かれているために、自分がどれだけの時間を眠っていたのかが分かった。

シャルロットの使っているベッドの周りは白いカーテンで四方を覆っているために、外からは姿は見えないようになっていた。向このほうからなにやら書類をめくる音や、何かを書いている紙とペンをこすれる音が聞こえている。それを聞いて、保険医が仕事をしているというのが分かった。

——これから、どうなるんだろう……。

シャルロットは白い天井を見つめながらそう考えていた。自分の暗い運命^{ミライ}と比べて、瞳に映る天井は穢れなき白が彼女を見下ろしている……。

「ハア……」

そのため息が何を意味するのか。シャルロットには分からない。しかし、それを合図にするようにして、突然保健室に誰かが入ってきた。

「失礼、します」

「どうぞ」

男の声だった――

2

――この声、飛鳥？

一体何をしに来たのだろうか。今は休み時間だろうが、曜日的に座学の時間だったはずだ。そう考えていると突然カーテンが開かれ眩しい光が差し込んできた。

――眩しいっ！

思わず手をかざして、光を遮るようにする。指の隙間からその先を見ると、そこには白衣を着た保険医と、その後ろにいるIS学園の男子用の制服を着た飛鳥が立っていた。

「ようやくお目覚めかしら？」

「あ、はい。すいません」

「いいのよ、相当疲れてたんでしょう」

この時ばかりの保険医の気遣いはシャルロットにとって嬉しかった。ふと彼女のほうから後ろに立つ飛鳥へと視線を移す。保険医の

教師もその視線に気づき、口を開く。

「何でも紅月くんがお話したいことがあるって言うのよ」

「話、ですか？」

「詳しいことは彼から聞いて。私はここにいないほうがいいかしら？」

「え、ああ。すみません」

「いいわよ、それじゃあ職員室のほうにいるから、終わったら一声かけてくれない？」

「分かりました」

飛鳥が話があると言うことを伝えられるとシャルロットは一瞬きよんとしてしまった。こんな自分に対して一体何の話があるのだろうかというように思ったのだ。

肩越しに飛鳥に聞く保険医。突然話を振られ、一瞬慌てた飛鳥であるが、申しわけなさそうにしてそう言う。気にすると言って保険医は一言二言残して保健室を出て行った。

この保健室にいるのは二人だけだ。一体何の話なのだろうかと不安そうな表情で飛鳥を見つめる。

「と、ところで。話って何なのかな？」

沈黙が続いていたために、シャルロットが耐え切れずに口を開く。そこには不安が色濃く込められていた。

「もしかしたらだけど、僕の処遇についてなのかな？」

そう尋ねると、ようやく飛鳥の口が開く。

「まあ、それに関係することなんだけど」

ポツリポツリと話し始める。

「お前について、フランスに対して特記事項と事件の隠蔽を盾にして身柄の引渡しを拒否できるかもしれないって事なんだ」

「えっ？　でも、僕は……」

シャルロットに伝えられたことは、彼女を救うということだった。突然そういうわれ、流石に戸惑いを隠せないでいる。

「でも、それは強制じゃない」

「えっ？」

真っ直ぐな視線を向けてくる。飛鳥ができることは、シャルロットに事を伝え、後は彼女がどうするかを見届けることだけだ。

「お前がどうしたいのか。このままフランスに戻るか、ここに残るか。いずれせよ、—シャルロット・デュノアとして《……………》もう一度スタートするための……………」

「……」

「どっちかは、お前が選べよ」

突き放すような言葉でありながらも、選択肢を与えている飛鳥。シャルロットにとっては辛いものであるが、時間は一人の人間のために待つてはくれないのだ。もちろん国という存在も…………。

「急なんだね」

「分かったことだろ。何も不思議なことじゃないさ」

あくまで一定の距離を保つ。今のシャルロットには同情というものは必要ない。彼女自身が選び取らなければいけないのだ。そう――

――嘗ての俺のように……。

3

すぐに答えを出せというのはあまりにも一方的すぎるだろうか。しかし、時間がおしている。催促するつもりはないが、どうしてもそうなってしまう……。

悩むシャルロット。答え一つが運命を変えるのだから。だが、葛藤がある。こんな自分を皆は受け入れてくれるのだろうか。もしかしたら、戻ったとしても拒絶されるのではないかと。そんな不安が、彼女が一步を踏み出すことをと惑わせている。

もしかしたら、ここが分岐点なのではないかと思った飛鳥。もしかしたら、嘗ての彼女たちはこんな風に自分を見ていたのではないか。そう思ったのだ。

「聞かなくてもいいけどさ、ちょっと昔話をするぞ」
「えっ？」

突然の飛鳥の言葉に、どういふことだと言うようにシャルロットは俯かせていた頭を上げ、視線を向けてくる。だが、その質問に対して飛鳥は答えず、ただ淡々と言葉を紡ぐ――

「あるところに、幸せそうな家族がいた。いたって普通の父親と母親の元に生まれたのは一人の男の子と女の子。二人は兄妹だった。ある日、久しぶりに父親が休みをまとめて取れたということで、家族で旅行に行きました。しかし、そこでとある事件に巻き込まれ、少年を除く三人の家族は帰らぬ人になりました」

「……」

「少年は昔から正義の味方のように、誰かを守ることに憧れていた。だからいろんな稽古を頑張り、それなりに強くなったと自負してた。友達にもそして、親にも守ってやると自信ありげに言っていた。だが、それはただの妄想、幻想に過ぎなかったんだ」

「……」

「目の前で死に行く三人の姿を見ているしかできなかった少年の瞳に映ったのは見下すようにして圧倒的な強さを見せ付けた騎士だった。少年は突きつけられた。身につけたはずの力というのは何の役にも立たず、少年自身、無力な存在だということを……」

「……」

「少年の心は完全に閉ざされた。子供っぽい夢であってもそれは立派な夢、志、想い、覚悟……。それを圧倒的な強さで、真っ向から否定された。少年に残ったのは……。ただのお先真っ暗な運命と絶望感、虚無感だけだった」

「……」

シャルロットは飛鳥の話す誰かの昔話を聞いて、妙な親近感を覚えていた。そこに出てくる少年というのは、自分よりも年下だという。そんな少年が目の前で家族を一瞬にして奪われたのだから、一体その時の絶望感というのはどれほどのものだったのだろうか。彼女には全く想像もできなかった。

そんなシャルロットを尻目に、飛鳥は更に話を進めていく。

「少年には守りたいと思うくらい、大切な者たちが他にもいた。だけど、想いがあっても守れない。それを突きつけられ、無力な自分には存在する意味はないと思ったんだ」

「そ、そんな……」

子どものくせに悩みすぎだ、子どものくせに、子どものくせにと、そう言えば簡単かもしれないが、その少年にとっては幼き頃の夢であつたのだ。

「少年に対して、友達は元氣付けようと色々と話をしてくれた。友達の家族も優しくしてくれた。だけど、その少年の心を癒すのにはならなかったんだ」

「それで――」

シャルロットが一番知りたかったのはその後のことだ。絶望して、自らの運命に屈しようとしている少年。あの時の自分と似ていた。

「その子はどうしたの？」

シャルロットは不安げに尋ねる。自分よりも年下であるその少年が正気でいられるはずはない。そう思っていた。そして、そんなシャルロットの不安は的中する……。

「自殺した」

「うそ……」

否、そんな言葉を聞かずとも分かっていたことだろう。小さな子どもがそんな現実を突きつけられて平気なわけがない。

ちらりと飛鳥を見る。その視線の先にあるは右手首の白い包帯だ。そして、それだけで十分だった。

——ま、まさか……。

シャルロットは何か確信めいたものを掴んでいた。更にスパイ活動を行うということで、相手の表情の変化を探るということも訓練していた。そのためか、自殺をしたと言った時の飛鳥の表情が一瞬だけ険しくなったのを見逃さなかった。

「でも、その少年は一命を取り留めた。彼を発見したのは幼馴染の4人だった。もしあの時迅速な行動をとっていなかったら、その少年は今も生きてはいなかっただろうな」

「そうだね……」

確信めいたものから、確かな確信へと変わっていく。

「少年は彼女たちに言った、『どうして助けたんだ』って」
「っ！」

将来にも絶望し、現実^{イマ}を捨てようとした少年は幼馴染たちに救われた。しかし、それは命だけであり、心を救うことはできなかったのだ。

「でも、少女たちは少年に対してもう一度生きる価値を与えてくれた」

「そうなの？」

「『今度こそ私たちを守って』ってな。その言葉を聞いて、少年はもう一度生きようと思ったんだ。今度こそ守ってみせるってな……。それが——」

「それが――」

シャルロットの口が開く。目の前にいる飛鳥は自らの古傷を開くようにしているために、表情は辛そうだ。

「俺なんだ」

「飛鳥……、なんだね」

二人の言葉が重なった――

5

良く分かったなと言いたげな視線を向けてくる飛鳥。

「僕なんかに、ここに居ていい理由があるのかな？」

シャルロットがそう呟く。彼女に残っているのは、ただフランス出身のIS学園に通う元代表候補生だった一般生徒という肩書きだけだ。専用機も、代表候補生としての権利もすべて奪われた今、ここに居ていい意義が彼女には見出せなかった。

今まで流されるように、指示されたことを忠実にこなしてきた彼女にとって、自らに道を与えてくれる者がいなくなった今、どうすればいいのか分からないという状態だった。

彼女自身にもどうしたいのかという気持ちはある。だが、どうしても一歩前に進めない。不安が彼女の胸を支配する。もしかしたらというように、周りに対して疑心暗鬼になっていたのだ。

――無理もないよな……。

信じていたものから裏切られ、更には友達の信頼を裏切ってしまったのだからそうなるのも仕方がない。ずっとこうなることを不安に思っていたのだから、余計辛い。

腹部までかけていた布団を引き寄せ、握り締める。その握り締めている手が小刻みに震えているのが、今の彼女の気持ちをよく表していた。

「皆に嘘ついちゃったし、一夏も僕のこと、知ってるから……」

「今のところ知っている奴以外にはこのことは知らされない。流石に大事だからな。それにあいつはそんなことで友達を見捨てるような奴じゃない」

「そうかな……」

「ああ」

飛鳥が近くにあった椅子に座りながら、シャルロットがつぶやく不安に対して律儀に返答する。

こうなったら少しでも不安を取り除いてやるしかないと思ったのだ。

「僕はもう、代表候補生じゃないから……」

「別に肩の荷が降りたんだからいいんじゃないのか？」

全ての鎖から解放されたのだから、もう彼女は自由なのだと思飛鳥は思っていた。しかし、今まで鎖に繋がれていた大人しい彼女は、まるで道に迷った子犬のようだ。

「僕には専用機もないし……」

「別に他の奴に比べたら、教え方はうまいんだからいいだろ」

はつきり言うが同学年でシャルルはどうまく教導できるのはほとんど居ないだろう。箒とセシリアはともかく鈴とラウラはベクトルは違うが教導をしようとしていない。それと比べたら、シャルロットはまだいいほうである。

「僕は、僕が……」

「チッ！」

ふつふつとシャルロットの言葉を聞いていると、飛鳥の胸には純粹な怒りが湧いてきた。これがもっと冷静なものがいれば違う言い方ができたのかもしれないが、生憎飛鳥にはそれができなかった。

「ああ、もう！ 何なんだよお前は！」

「っ！」

突然飛鳥が怒声にも似た叫びをしたのに対して、シャルロットは目を見開く。

「確かにお前はいろんなものを失った！ たくさんの人を裏切った！ だからって、いつまでもううじうじ言ってるんじゃないやねえよ！」

「い、いきなり何！？ 確かに飛鳥も同じ事を体験したかもしれないけど……、こんな言い方、あんまりだよ！」

目じりに涙を浮かべ、そう批判するように言うシャルロット。窓が開けられているとはいえ、部屋であるからやや響く。

「さっきから周りの目を気にしてばかりで、自分には何もないから！？ いい加減なこと言うなよな！」

「いい加減なことって」

何も分かっていない、何も変わろうとしない。飛鳥から見れば、シャルロットはシリルからの指示を聞くだけの操り人形だったときと何一つ変わっていないように見えた。

誰もがあの時の飛鳥のように決心を固められるわけでもない。だが、飛鳥にとってはいつまでも自らの意志を持つとしない彼女に對して、どうしても黙っていられないのだ。

「変わらない、変えようとしな！ お前には意志はないのかよ！」
「っ！」

飛鳥の言葉が刃となって突きつけられる。シャルロットはそれに對して何もできない、何も言い返せない。凶星だから、彼女は一度として、自らの意志で動いたことがあっただろうか……。

「今のお前は操り人形と変わらない！ 今のお前には選択肢がある。今変わらないでどうするんだよ！」

「……」

もはや俯いてしまい、今彼女がどんな表情をしているかは分からない。しかし、白い布団に染みができているのが見える。俯いた顔から雫が落ちている。泣かせてしまった。

———こういう悪役は、俺くらいしかできないだろうな……。

どうしてもこのような喧嘩腰の言い方になってしまう。そのために、諭そうとしても逆に泣かせるようなことになる。

「お前の運命^{ジンセイ}はお前のものなんだ。いい加減操^{くわん}り人形は卒業したらどうだ？」

立ち上がり、保健室の出口へ歩をすすめていく。シャルロットに對して背を向けながら言う。

「お前がここに居ていいのか、生きていていいのか、どうすればいいのか分からないなら。俺から一つだけ言えることがある」
「えっ？」

まだぶっきらぼうな言い方であるが、先ほどのように、シャルロットに對して頭ごなしに言うようなものではなかった。

こちらには顔を向けず、ただ言葉を紡ぐ。

「お前は望まれて生まれてきたんだ。誰よりも、お前の母親からな」
「っ！」

「だから、自分が居ちゃ駄目だ、生きてちゃ駄目だなんて言ったら、悲しむんじゃないのか？ あいつらだってそう思うかもしれないけど、誰よりも、お前の死んだ母親が悲しむ」

「……」

「どちらを選んでも誰も何も言わないさ。それがお前の選び取った運命^{ジンセイ}なんだから」

そう言い残し飛鳥はその保健室を出て行った。その場に残ったのは自分の手を見つめ、考え込むシャルロットだけだった――

二人の境界を完全に遮断するように、保健室のドアが閉められた。

俯き加減にそのドアの前に立つ飛鳥。そんな飛鳥の隣に、壁に寄りかかるようにして立っていた人物がいた。

「ごめんね、こんな悪役のようなことをさせちゃって」
「別に」

気にしていないというような素振りを見せる飛鳥。そんな飛鳥を見て、気遣うようにしているのは楯無だ。

この役を負うのは、何も飛鳥でなくてもよかったのかもしれない。しかし、シャルロットと境遇が似ている飛鳥が適任なのかもしれないというのもあった。飛鳥自身、彼女に言いたいこともあったので、その役を引き受けた。自ら悪役になることを選んだのだ。

シャルロットにとっては少々きつい薬だったかもしれない。だが、これで少しは自身の意志で運命を選び取る気が起きてくれればいい。そう思っていた。

「ここからは私たちの仕事ね」
「俺はあとお役目ご苦労ってか？」

飛鳥の言葉に対して、楯無はこれ以上副会長ばかりに仕事はさせられないと、会長としての言葉を告げる。

「どっちを選ぶかしらね……」
「分からないさ。でも、どちらを選んだとしても、俺達にはどうしようもないんだ」
「ええ、そうね……」

飛鳥の言葉に同意を示す楯無。開かれていた扇を乾いた音を立て

て閉じる。それと同時に壁に預けていた体を起こして、飛鳥と変わるように保健室のドアの前に立つ。

自分たちにできるのは手札を見せ、シャルロット自身が選んだそれをフランス政府に対して伝えるということだけ。彼女の意思を無視して進めることもできるが、それが果たして彼女のためになるのかというと、分らない。もし、そうしてしまったならば、自分たちはシリル・デュノアと同じようになる。それでは彼女のためにはならない。今がその分岐点なのだろう。

「後はおねーさんに任せなさい」

「そうさせてもらうさ」

それ以上に疲れたとため息混じりにそう言う。苦笑いを浮かべる楯無。そんな彼女に対して背を向けて廊下を歩いていく飛鳥。しかし、そんな飛鳥に対して楯無は申しわけなさそうな視線を向けている。

彼女のCANはまだ何かしら大きなことが起きそうだと告げているのだ。それは十中八九飛鳥を何かしらの形で巻き込むだろうもの。

不安を胸に抱きつつ、楯無は保健室へと足を踏み入れる――

PHASE 37 Old・Sore（古傷）（後書き）

ED3↓RIVER＞石井竜也＜

如何でしたでしょうか？ ご感想をいただければ幸いです。

今後ともよろしく願います。

次回予告（BGM『明日への橋』）

立ち去る者

戻ってくることを望む者

それは本人の思い

しかし、その思いは時に牙と化し、傷つける

飛鳥の周りにある問題は、未だ全て解決したわけではなかった

魔の手が二人に迫る――

次回 Infinite・Stratos（怒れる瞳） PHAS
E38 Choice（選択）

それぞれの選択、それに続く道の先にあるは喜びか、それとも絶望か……

PHASE 38 Choice（選択）（前書き）

いよいよシャルロット編完結、ラウラ編開始です。

お楽しみいただければ幸いです。

それでは本編をどうぞ。

立ち去る者

戻ってくることを望む者

それは本人の思い

しかし、その思いは時に牙と化し、傷つける

飛鳥の周りにある問題は、未だ全て解決したわけではなかった

魔の手が二人に迫る――

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳く

BGM↓黒い波動

加筆修正 11月25日 完了

PS 最近また誤字が多くなってきました。読者の皆様には大変申し訳なく思っております。少しでも改善できるようにしていきたいと思っております。

PHASE 38 Choice（選択）

1

それから数日経っていた。一年一組にシャルロット、シャルル・デュノアの姿は無かった。その数日後の朝のSHLにてクラスに千冬が伝えたことだ。

『シャルル・デュノアは事情があり、国に帰ることになった』

それを聴いた瞬間、飛鳥はそれを選んだのかと。なんともいえない表情となり、一夏は啞然とした表情のまま固まり、周りの生徒たちは残念がる悲鳴を上げていた。

何故彼女がそのような選択肢を選んだのか、帰る前にただ二人だけ自分の正体を知っている飛鳥と一夏に対してシャルロットが言った言葉。

『逃げるって訳じゃないよ。僕なりに考えた。時間がなかったから最後まで踏ん切りがなかったけど、やっぱり罪を犯したまま、何もなしに過ごすことは、僕にはできないって思ったんだ』

それは罪の重さ。自身の罪であり、自身の父親の罪。目の前で爆発に飲み込まれていった父シリル。結局二人は分かり合うことができなかった。一番近くにいた親子であったというのに。

そう言うシャルロットに対して、二人は何も言えない。彼女自身が始めて自らの意志で決めたことだから。ここで何かを言って引き止めようとなれば、それは彼女に対して失礼だ。

それは二人とも分かっていた。口先だけでは何も変えられないから。

『一体どうすれば僕の……、僕たちの罪が償えるわけじゃないけど、それでも、償いたいんだ』

あの時のような何かに言われるがままになっていた彼女ではなく、自らの思いを芯にしての選択であり、それを表した言葉であった。

『まずは謝罪したい。お父さんが関わった人たちに、僕がどうこう言っても意味はないかもしれないけど、それでも……、うん、やっぱりそうしたい。そうして、もっと色んなことをしてみたい。ISだけじゃなくて、もっと色んなことを』

彼女は、今やある程度は自由の身である。ISに関して言えば、候補生の権利と共に専用機を回収された。とはいえ、彼女が望んでそれをしていたわけでもなく、たまたま高いランクを出したために、シリルの格好の駒として使われていたに過ぎない。

彼女とて年頃の少女である。色んなことに興味を持ち、やって見たいと思うだろう。

とはいえ、戻ってからのしばらくの数年間は、政府のほうから下されるだろう処分——何らかの社会奉仕活動を行った上での社会復帰となる。シリルが亡き今、もはやデュノア社はそのまま潰れるかどうか。

だが、フランス国内においてデュノア社が未だトップを走っているのは事実。デュノア社がここまで引っ張ったおかげでフランスはな

なんとかIS関連において他国に何とかしがみついていたのだ。それがなくなるとなれば厳しいものとなるだろう。

『本妻の人ともう一度話しをしたいな。あの時は何も会話もできなかったからね。も、もちろん怖いよ。何を言われるか分かったものじゃないからね。でも、きっと彼女にも伝わってるはずだよ……、お父さんの死が』

彼女の笑みに陰が差す。あれだけのことをされたとしても、血の通う父親なのだ。確かにめっちゃくちゃな人生にされてしまった。だが、今こうしてまたやり直そうとしている自分がいる。

父シリルに対して怒りや恨みもあるも、それでも感謝もある――亡き母と一時とはいえ愛を育んでくれたことに。そうでなければ自分は生まれてこなかった。今頃は何をしているだろうか。天国だろうか、地獄だろうか、それらがあるかどうかではなく、死んだものが誰しも辿り着く所で、二人は会えたのだろうか。

『二人には色々迷惑かけたよね。ゴメン、そして、色々してくれてありがとうね。いい思い出になったよ。皆とご飯食べて、勉強して、ISの訓練をして、おしゃべりして……。あの時はまるで幻想のよう感じたけど、今では確かに現実だったって、思える、うん』

まるで確かめるようにして呟くシャルロット。たった数週間の思い出ではあるが、それは確実に彼女の胸の中にあるのだ。それが例えば、シャルロット・デュノアの思い出ではなく、シャルル・デュノアのものであったとしても。

向こうからモノレールが向かってくるのが見えた。時間だ。ゆっくりと近づいてくるそれが、別れを意味していた。

三人はリニアレールの方に向かっていき、シャルロットはその中に乗り込んだ。制服は着たままであるが、その容姿からすぐに性別が女性であることが分かる。飛鳥の視線が一点を示していたからであらうか、シャルロットが胸を腕で隠しながら顔を赤らめる。

『飛鳥のエッチ……』

『えっ、ちょっ、まっ！』

そう言われて飛鳥も頬を赤らめ戸惑う。それを見て、面白そうに笑うシャルロット。後ろからそれを見ていた一夏は苦笑いを浮かべている。シリアスだった雰囲気が一気に吹き飛んだようだ。

発進する合図が鳴る。それはまさに別れを意味するもの。しかし、永遠ではない。何時かまたひょっこりと会うかもしれないのだ。それまでのしばしの別れ。お互いに手を振る。ゆっくりと閉まっていた扉が、お互いの立ち位置をはっきりを示しているようだ。

最後までこちらを見ていたシャルロット。そんな彼女を見ていた飛鳥と一夏。もっと別の運命があったかもしれない。しかし、それはあくまでもIF。けして手の届かない世界。どこかで分かれたってしまった道。

飛鳥は、一夏は、シャルロットは、人々は何かが起きた後になって、その道を望む。まるで助けを求めるように、逃げ道を求めるように。

だが、それが不可能だと知っている。だが、その後の運命を変えることはできるだろう。それを知っているからこそ、飛鳥は今回動いたのだ。

二人の視線の先には遠ざかっていくモノレールが見える。

シャルロット自身の意志で決めた運命ジンセイの始まりだった――

2

あと一週間とちよつとすると学年別トーナメントが始まる。どんな形式でやられるかは分からないが、出るからには勝つしかないだろう。ふとトイレを済ませ、廊下を歩いていた飛鳥。

「なぜこんなところで教師など!」

「ん?」

短い休み時間というのに何やら話し込んでいる様子であるのが聞こえてきた。その声色からして同じクラスであり、転校してきたドイツ軍軍人であるラウラ・ボーデヴィツヒであることが分かった。

一体こんなところで何を話し込んでいるのやらと、むしろ彼女と話が出来る人物がいたことを不思議に思った。

ラウラはその氷のような冷たい視線と軍人のスタイルを崩さないその雰囲気ので、誰も話しかけようとしなないのだ。むしろできる人物がすごいと飛鳥は思う。飛鳥の場合は話しかけた瞬間から即乱闘になりかねない、それを考慮されてか座る席は離れているのだ。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で、一体何の役目があるというのですか!」

どうやら彼女と話をしているのは千冬のようなようだ。それなら納得が

いく。彼女と話をできるのは千冬ぐらいだからだ。

どうして彼女がしつこくも千冬のことには拘るのかはわからない。しかし、彼女が“教官”と呼ぶことから、千冬が何らかの形で彼女がいたドイツ軍軍隊に関わっていたのだろうと飛鳥は予想した。

しかし、あまりにもしつこいようで、角からそっと見てみると千冬はうんざりとしている様子だ。正直飛鳥もラウラがまるで駄々をこねている幼い子どものようにしか見えない。

対するラウラというと、千冬が頑なに彼女の受け入れに答えようとならないことが信じられないのか、更に言葉を並べる。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「ほう」

まるでラウラという言葉は彼女が千冬のことを何でも知っているような言い草だ。それに対して千冬は特に気にしていないといわんばかりに軽く言う。

何を持って自らの力が発揮されたかが分かるだろうか。一体誰がそれを判断するのだろうか。

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません
ん」

「なぜだ？」

「……」

流石にその言葉に対して飛鳥は苛立ちを禁じえなかった。確かに

世界最強の人物が、一端の高校において教師をやるなどと普通は考えられまい。

ラウラの言う通り、普通であれば軍でもISの世界レベルに関わる場所で教導を行うべきなのかもしれない。

しかし、それを決めるのはラウラではなく千冬自身であり、今の彼女は彼女自身が自らの意志で選び取った結果である。

常日頃から人を見下したような言動を取るラウラ。はっきり言って軍人の風上にも置けないと思った。よくそんな彼女が軍人として活動していられると不思議に思えてならない。

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど――」

「確かにそうだな」

「「っ!」」

突然聞こえてきた飛鳥の声に、二人は驚いた表情を見せ、こちらに視線を向けてくる。

「紅月……、盗み聞きとはいいい趣味ではないな」

「誰が好き好んで盗み聞きをするんです。ただ偶然聞こえてきただけですよ。それに、そんな大きな声で言ったりやそう聞こえます」

そう正直に告げる。二人の会話……、一際ラウラの声は響いていた。そこに誰もいなかったから良いとして、他の生徒が歩いていても聞いてしまうだろう。聞いてくださいといっているようなものであった。

「そうか、貴様もそう思うだろう」

いがみ合う関係であったが、ラウラは飛鳥の言葉を聞いて少し気分がいいという表情を見せている。それは目の前に千冬がいるからであろう。

「だけど、ISを軍事使用しようとしてるお前たちも、同じように勘違いしてるんじゃないか？」

「なんだと!」

噛みつくように言ってくるラウラ。

もともとアラスカ条約という脆い鎖に繋がれているISは軍事使用を禁止されているはずだ。それは白騎士事件で証明されているように、たった一機で国を制圧できるかもしれないほどの力を持つそれをみすみす放し飼いしておくわけにはいかないからだ。

しかし、アメリカを始め、ヨーロッパではそれを無視した形で軍に配備している。圧倒的な力をちらつかせ、抑えつけようとしても言うのだろうか。

「ドイツ軍を侮辱するのか!」

「誰もそんなことを言っていないだろ」

まるで子どもが自分の自慢を馬鹿にされたときに癩癪を起こすようにラウラは叫ぶ。周りの生徒たちと比べても身体が小さいとは思っていたが、見た目どおり考えも少々幼いように感じる。

「それになんだよお前。人のことを見下したような言い方ばかり

して。自分が優秀だとしても言いたいのかよ」

「ISに対する認識を誤っているやつらよりはな」

平然とその言葉を吐くラウラ。それほどの自信というものがあるのだろう。そうでなければ言える言葉ではない。

「ふん、水を差されたな。教官、このお話に関しては後日また」

「ラウラ……」

そう言い残すと、飛鳥と千冬に背を向けて去っていく。今日まで色々なことがあったために少々疲れたような表情を見せている千冬。最後までラウラに分かってもらえなかった。

「あいつとあんたの間に何があったかは知りませんがね。何とかしたほうがいいんじゃないですか？」

「ハア……、分かっている」

あのじゃじゃ馬の手綱を握っていられるのは、この学園の中で千冬一人だろう。何かがあっては遅い。そうなる前に何とかしたほうがいいのではないかと飛鳥が呆れるように言う。

ラウラの経歴など、詳しいことは知らない。しかし、流石にあの言動には目を瞑りきれないものがある。更に千冬の目の前で堂々と一夏を殺すなどという呆れた言葉まで言う始末である。

しかし、ラウラであればやりかねない。そんな風に思えた。しかし、逆にラウラもまた何も分かってはいない。

先ほどの言葉からして、自分こそが誰よりも千冬のことを分かっていると言っているようなものだった。

とんだお門違いであり、もはや妄信者、狂信者だと思えない。

確かにそこにはラウラの意思というものがある。もう一度ドイツの軍に戻り、教導を請いたいという明確な意思が。だが、それには千冬の意思というものがない。押し付けであるそれはお願いではなく我俣である。

「それよりも、お前はこんなところで油を売っていていいのか？」

腕時計を見ると既に授業が開始する時刻であった。急いで戻れば何とかなるだろうと思い、走り出す。

「気づかれずにな」

「っ！ 分かってますよ」

その時の気遣いには素直に感謝した。

走り去っていく飛鳥の背中を一瞥し、近くの壁に身体を預け、天を仰ぐ。

「ハア……」

ようやく吐けたため息。真剣に言葉を向けてきたラウラには悪いが、今の千冬にはそれを受け入れるだけの気力は無かった。

——ラウラ……、尊敬してくれるのは嬉しい。だが、私というのは、お前が思っているほどすごくはないんだ……。

まるで子どもが憧れの人物とであったときのようにキラキラとした

瞳を向けてきた。それはそれで嬉しく、こそばゆい感じがする。だが、あそこまで必死にというよりも、何かに縋りつくように言われるとは……。

それに千冬は今日までのシャルロットの件を通して色々と考えていた。一人の生徒のことも気にかけれなかった者が教師などできるのかと。自分にとってはあまりの大役なのではないかと。確かに自分の教え方に確固たる自信は持っている。しかし、教導とは教えるだけでは意味がないのだ。

——私はあの時、導くことができなかった……。

生徒が悩んでいるときなど、手を差し出して導いてやるのも教師の役目ではなかったのか。分かっているにも実行するのは難しいものだ。だが、はいできませんでしたでは意味がないのだ。

シャルロットの件では主に飛鳥が立ち回っていた。生徒に助けられるとは、いつもは生意気だと思っていたがこのときばかりは感謝しなければいけないだろう。

「ラウラ……」

彼女がどんな思いであそこから這い上がってきたかは分からない。だが、その時の辛さや苦しさを分かっているならそんな言動を見せるわけがないのだ。孤立していく生徒に対して導くことも教師の仕事ではないか。

千冬はそう決心した。しかし、もはや歯止めが掛からないところまで事が進んでいたことに、誰も気づいていなかった——

その日の放課後であった。

「あれ？」

「あら？」

第三アリーナに現れた二人の人影。それぞれセシリア・オルコツトと鳳鈴音だった。どういうわけか二人は突然現れた目の前にいるそれぞれがどうしてここにいるのかが分からないという顔をしている。

「奇遇ね。アタシはこれから学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど。流石に一人に負け続けるのは気に入らないから」

「奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ。何とか連敗を脱出しなければ、イギリス代表として顔が立ちませんもの」

二人の間に火花が散っているように見える。二人としては代表候補生として優勝を目指すことはもちろんであるが、このところ飛鳥に連敗しているということ、もう一度腕を磨き直さなければいけないと思ったのだ。

「ちょうど良い機会だし、お互いに代表候補生ってことも含めて、どっちが上かはつきりさせとくってのも悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場ではつきりとさせましょうではありませんか」

候補生ということ以前にプライドの高い二人。一般生徒の飛鳥に戦うたびに実力的に離されつつある感が否めない。このままでは優勝すら危うくなっている今、少しでも腕を上げておかなければいけ

ないという危機感というものもあった。

二人はそれぞれのIS——ブルーティアーズと甲龍を展開して、愛機のメインウェポンを呼び出す。周りに被害が広がらない場所へと移動し、一定の距離をつくり、静止する。

「では——」

そうセシリアの言葉で試合を開始しようとした……、その時だった。突然その声を遮るようにして、二人の間を切り裂くように超音速の砲弾が飛んできたのだ。

「「!?!」」

二人は慌てて緊急回避を行う。そして、セシリアと鈴音は揃って砲弾が飛んできた方向を見る。彼女たちが視線を向けたその先には、漆黒の機体が佇んでいた。

“機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』、登録操縦者——”

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

そうセシリアが自分たちに対して攻撃してきたものの名前を呟く。突然撃ってきたことに対する苛立ちや、以前の言動の他に、同じ欧州の代表候補生という立場。その声色が重いのは致し方ないことだ。

セシリアのブルーティアーズ然り、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲン然り。欧州トライアルにて開発されている第三世代のISの稼動データを得るためにIS学園に來た二人。セシリアの視線が鋭いのはそういう意味合いもあった。

「……どういうつもり？ いきなりぶっ放すなんて、良い度胸してるじゃない」

三人の間で長く沈黙が流れていたが、それを破ったのは鈴であった。双天牙月を肩に担ぐと、肩の装甲とこすれる音が、やけに響いた。それと同時に、いつでも戦闘を開始できるよう、衝撃砲を準戦闘状態へとシフトさせる。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

相変わらず見下したような口調で言うラウラ。セシリアと鈴からすれば、代表候補生に対してと、その国に対する挑発と取れる。我慢して見逃そうと思っていた二人であるが、流石にそれを聞いて黙っていたられるほど自国に対して思い入れがないわけでもなく、歴とした代表候補生である。それを聞いてセシリアと鈴の二人は口元を思わず引き攣らせた。

「何？ やるの？ わざわざドイツのくんだりからやって来てボコられたいなんて、大したマゾっぷりね。それとも、ジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの？」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちではないようですから、あまりいじめるのは可哀相ですわよ？ 犬だってまだワンと言いますし」

ラウラの全てを見下ろすかのような目付きに並々ならぬ不快感を抱いた二人は、それでもどうにか怒りのはけ口を言葉に見出だそうとした。わざとその挑発的なラウラの売り言葉を買い言葉で返す。

何か効果はあるかと思っていたが、二人の言葉はまるで効果はなかった。二人の試みは徒労に終わる……。

「はっ……。高々M^{玩具}S如きに負ける程度の力量しか持たぬ者が専用機持ちとはな。イギリスと中国というのは余程人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけを取り柄の国とは良く言ったものだ」

流石に二人の我慢は限界を超えていた。二人の近くで何かが切れる音がしたと思った矢先、セシリアと鈴は装備の準戦闘状態から最終安全装置を解除した完全な戦闘状態へと移行させていた。

「ああ、ああ、オーケーよ。よく、分かったわ。分かったわよ！ アンタのお望みはスクラップになることなのね！ セシリア！

どっちが先にやるかジャンケンしよ」

「ええ、そうですね。わたくしとしてはどちらでも良いのですが」

「はっ！ 二人掛かりで来たらどうだ？ 一足す一は所詮二にしかならん、男に尻尾を振るような、男に負け続けるような無能に、この私が負けるものか」

それは明らかな挑発であるが、堪忍袋の緒が切れた二人には最早どうだって良い。

彼女たちにとっては今日の前にいるラウラを叩きのめすことしか考えられなかった。この場にはいないものを平然と侮辱できる彼女の考えを理解できない。好意を寄せている者を、親友だと思っている者を馬鹿にされてはいそうですかと流せるほど、彼女たちは馬鹿ではない。

「アンタね……。今、何て言った？ アタシの耳には『どうぞ好き

「ただけ殴ってください」って聞こえたけど？」

「この場に居ない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けぬように此処で叩いておきましょう」

鈴は双天牙月を、セシリアはスターライトmk?を握りしめる。その手には押さえきれない怒りというものが力となって得物を握り締める力が無意識の内にきつくなる。そんな怒りを露にしている二人を見ているラウラであるが、彼女たちから向けられる視線を受けてもまったく意に介せずに、余裕たっぷりである。

数秒という短い沈黙が双方を支配する。先に動きを見せたのはラウラのほうであつた。彼女はその冷ややかな視線を向けつつ、右手を前に出し、自分側に向けて振る。

“か、か、つてこい”

明らかな挑発。もはや彼女たちに戸惑いなどなかった。

「上等！」

セシリアと鈴がラウラに向かって飛び出していった――

「なんだ？」

ふと第三アリーナに足を運んでいた飛鳥が何やらそこがやけに騒がしいことに気づいた。誰かがまた暴れているのだろうか、自分のことを無意識に棚にあげている発言をする。

自主練をしようと、生徒会の仕事を切り上げてきたのはいいが、なにやら嫌な予感がしてならない。足早に更衣室へと足を向け、すぐに防護スーツに着替えて再びピットに向かう。

「あれは――」

――セシリアに鳳鈴音……、それに！？

そして、飛鳥の目に映ったのは唯二人だけではなかった。代表候補生である二人を相手に、たった一人で戦っている人物がいたのだ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

その人物の名前を苦々しげに呟く。彼女の常日頃の人を見下したかのような言動やその態度を見て、彼女とは仲良くはできないだろうと、嫌っていた。

そんな彼女が今していることは何か。

――常日頃から強さだとかなんだとか言ってるけど、あいつ！

彼女のやっているのは勝負でも、模擬戦でもない。一方的な力による暴力という名の非道だった。あれが人を守るためにいる軍人^{レクイエム}のすることなのか。軍事学校を卒業している飛鳥にとってはそれを決して認められるものではなかった。

飛鳥が見ている間にも勝負は一方的な展開が続き、いよいよ終曲へと向かっていた。セシリアと鈴にとっては敗北への鎮魂歌^{レクイエム}である。

鈴は自身のISである甲龍に搭載されている第三世代としての特徴である衝撃砲『龍砲』を両肩を開くことで展開する。

「これでも——」

その二門の砲口が狙いを定めるは、宙に浮くシュヴァルツェア・レーゲンを展開してるラウラである。

「喰らえっ！」

最大出力で放たれるはその攻撃は不可視であり龍の咆哮の如き。唸りを上げてラウラへと襲い掛からんとして向かう。

『龍砲』の特徴としてはその砲身も砲弾も不可視であるというところである。更にその攻撃が放たれる角度にほとんど制限がないために厄介である。慣れるまでは蜂の巣にされるのがオチかもしれない。

しかし、ラウラにとってそんなものは脅威にすらならなかった。回避行動も防御体勢もとらない事に衝撃砲を撃ち込んだ鈴は疑問の視線を向ける。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな
衝撃砲はいくら時間が経ってもラウラにダメージを耐えることはなかった。」

「くっ！ まさかこうまで相性が悪いだなんて……！」

自らの攻撃が全く通用しないことに歯噛みする鈴。鈴と甲龍にとっ

てラウラとその機体——シュヴァルツェア・レーゲンはとことん相性が悪かった。

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー

“A・I・C”

指向性PICを発展させたドイツの第三世代型兵器。対象の周辺空間に慣性を停止させる領域を展開し、その動きを封じることが出来る。

ラウラはその攻撃に対して余裕を見せる笑みを浮かべ、右手を突き出して向かってきた衝撃砲を完全に無力化した。受けに回るばかりではなく、その攻撃を無力化するや否や、すぐに攻撃へと移る。

両肩に搭載されている刃の突いたワイヤーブレードが獲物を射ぬかんとする弓矢の如く放たれる。それに対して打ち落とそうと鈴が衝撃砲を打ち込んでいくが、複雑な軌道を描くそれを捕らえられない。ワイヤーブレードはその刃を不気味に煌めかせ、その牙は終に鈴の右脚部を捕らえる。

「何度もそう、同じ手は喰らいませんわ！」

ワイヤーブレードに捕まり、身動きを制限されている鈴の援護射撃を行うセシリア。鈴を捕らえているワイヤーブレードがあるために、ラウラも大きくは動けない。しかし、相当の訓練を受けているようであり、あのブリュンヒルデに教導を受けたこともあるためか動きに無駄が見えない。

セシリアが放つスターライトmk？からのレーザーを最小限の動きだけで回避していく。

「なら、これでどうですの！」

ライフルの射撃だけでは無理だと判断し、四基のビットを射出し、ラウラへと向かわせる。

「ふん……。理論値最大稼動のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせる」

セシリアがライフルとビットにて多角からの攻撃をラウラに向けて撃ち込んでいく。しかし、そのどちらの攻撃も的確な回避行動にたかわしていき、ダメージがない。

そのことに対してセシリアは歯噛みし、悔しさを露にする。その一瞬の精神の乱れがビットにも影響が出ていた。

——いけませんわ！

慌てるセシリア。一瞬の精神の乱れが、ビットの動きを鈍らせていたのだ。それを見逃すはずのないラウラ。すばやく移動し、ビットに対して腕を突き出す形でA I Cを発動させる。それよりビットが動きを完全に停止した。

しかし、動きを止めたのは何もセシリアのビットだけではなかった。

「動きが止まりましたわね！」

セシリアが笑みを浮かべてそういうとおり、A I Cを発動させるためにラウラは動きを止めていなければいけなかった。だが、それ

だけで終わるとなるならあれだけの大口は叩かないだろう。

「貴様もな」

動きを止めたラウラに対してスターライトで狙撃するも、右肩から出ている大型のレールカノンを放ち、相殺する。何とかしようと動こうとしたセシリアであるが、彼女が動くよりも先にラウラはすばやくワイヤーブレードを操り、捕まっていた鈴をセシリアにぶつけ、その動きを封じる。

「「きゃあああ！」」

お互いに激突し、身体に衝撃が走る。一瞬ではあるが二人の動きが止まり、隙ができる。それを見逃さないラウラは、攻撃態勢に移行し、その離れていた間合いを一瞬で詰めてきた。

イクニッション・ブースト
“ 瞬時加速 ”

ラウラはシュヴァルツェア・レーゲンの両手首に装着した袖のようなパーツから超高熱プラズマ刃を展開する。それを見た鈴は小回りが利かないということ握っていた双天牙月の連結を解いた。

「このっ……！」

前進し続けながらその超高熱プラズマ刃にて攻撃してくるのに対して、必死に後退しつつ距離を置きながらも鈴は連結を解除していた青龍刀にて凌いでいた。

上手くアリーナの形状に合わせた機動にて、追い詰められないようにしている鈴であるが、対するラウラもまたそんなことを長くさせ

ることを許すはずもなく、再びワイヤーブレードが鈴に向かって襲い掛かってきた。

それも今までのように両肩の二つだけでなく、腰部左右に取り付けられたものも合わせて六つものワイヤーブレードが複雑な動きを見せながら襲い掛かってくる。それに合わさるようにして、プラズマ手刀が鈴のことを焼き切らんとして唸りを上げる。

まさに怒濤の攻撃。

「くっ！」

こちらの機体にダメージが入り一方でシールドエネルギーが次々と削られていく。対してラウラのほうにはダメージらしきものはほとんど入っていないように見える。悔しそうに唇をかむ鈴は負けじと衝撃砲を展開し、砲弾エネルギーを集中させる。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとは」

ラウラの言葉通り、衝撃砲は目の前にいる標的ラウラに対して弾丸を射出する寸前にシュヴァルツェア・レーゲンのレールカノンから放たれた実弾砲撃によって破壊される。

「もらった」

「っ！」

先ほどの攻撃で破壊された龍砲を装備していた肩のアーマーを吹き飛ばされた鈴はその大きな衝撃によって大きく体勢を崩していた。そんな彼女に対してラウラは獲物に止めを刺さんとする捕食者のようにプラズマ手刀を振り下ろす。

「それは、させませんわ！」

突然二人の間に割って入ってきたのはセシリアであった。鈴と激突してから大きく距離を開けられていたが、何とか追いつきプラズマ手刀が振り下ろされるところに間一髪、自身の武器であるスターライトmk?を滑り込ませ、それを盾にすることで鈴に振り下ろされるのを防いでいた。

もちろんスターライトはその攻撃によって焼き切られることになったが、咄嗟に後退しつつ、セシリアがブルーティアーズの腰部に装備されているミサイル方のビットを真っ直ぐにラウラへと射出する。

ゼロ距離という、ある種の自殺行為である行為に出たセシリア。しかし、この時がようやくわって出たラウラにダメージを与えられる機会だったのだ。流石のラウラもゼロ距離から高速で突っ込んできたミサイルに反応することはできず、真正面からその攻撃を受けることになる。

「きゃっ！」

「痛っ！」

しかし、逆に二人もその爆発の余波に巻き込まれ吹き飛ばされる。大きなものであったために、身体の体勢を立て直す時間もなく二人とも地面へと叩きつけられる。ISを展開しているために身体には傷はないが、多少のエネルギーを消費することになった。

「それにしても、無茶するわね、アンタ……」

「そういうのはまたの機会に。けれど、これなら、流石の彼女にもダメージが――」

鈴が隣に立つセシリアに対して呆れたように言う。しかし、その声色から感謝していることが伺えた。

小さく笑みを浮かべながらそう言うセシリア。少しでもダメージが入っていればと淡い機体を抱き、言葉を紡ぐが……。

ゆっくりと煙が晴れていく。しかし、そこに現れたのはあのゼロ距離という超至近距離における大爆発を受けたというのに全くダメージがないという状態で佇んでいるラウラとシュヴァルツェア・レーゲンであった。ラウラは蚊にさされた程度といわんばかりに気にしている様子はなく、相変わらず見下すような冷めた視線を向けながら、宙に浮いていた。

「なんだ、もう終わりか？」

興ざめだといわんばかりの発言。しかし、ラウラにとって、二人がいくらあがこうとも、負ける気はサラサラなかった。

「ならば——今度は私の番だ」

その言葉は二人にとってはまるで死刑執行の合図にも聞こえた。

ラウラはそう言うや否や、イグニッション・ブースト瞬時加速にて一気に地上へと移動し、二人の前に向かう。突然現れたことと、それぞれの機体が限界に近かったこともあり、動くのが遅れた。

最初に正面にいた鈴のことを蹴り飛ばし、セシリアに対しては右肩にある巨大なレールカノンを操作し、照準を合わせて至近距離にて砲撃を撃ち込んだ。

彼女の攻撃はそれだけに止まらず、ワイヤーブレードを射出し、二人を拘束する。それに拘束された二人は何とか逃げ出そうともがき、抗うががちりと噛み付かれたそれを外すことは叶わない。

まるで鎖に繋がれ、処刑台へと連行されるように、二人をラウラは自身の下へと手繰り寄せていく。

完全に身動きをとれない状態にされた二人に対して始められたのは、ただただ一方的な暴虐であった。

その腕に、脚に、体に、ラウラの拳が叩き込まれていく。二人のISのシールドエネルギーがその攻撃にてガリガリと削られていく。回避も防御もできないと言う状態でそれを続けられ、あつという間に減り機体維持警告域を超え、操縦者生命危機機域へと到達する。
レッドゾーン デッドゾーン

このままではIS自体の限界ダメージになり強制的に解除されてしまう。そうなってもおそらくラウラはその攻撃を止めないだろう。そうなる所に残るは二人であっただろう肉の塊だけだ。冗談抜きで二人の生命の危機が迫っていた。

しかし、そんな時だった。突然何かが乾いた音を立てて割れるような音が響き渡る。一体なんだと飛鳥は視線をその方へと向ける。

そこに映ったのは白式を起動させ、雪片式型を構え、単一能力である零落百夜にてアリーナの観客席を守っているバリアシールドを破いた一夏の姿であった。

——あいつ！

一夏の目にはおそらく暴虐を行うラウラと、それによってボロボロにされているセシリアと鈴しか映っていないだろう。

バリアシールドを破壊された今、もし戦闘がこれ以上激化すれば観客席の方にも被害が及ぶかもしれない。

「やめろおおお！ その手を離せ！」

観客席から一直線に白式を加速させ、雪片式型をラウラへと振り下ろした。

「ふん……。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

「な、何だ！？ くそっ！ 体が……」

ラウラは自身に向かって雪片を振り下ろしてきた一夏に対して、暴虐という名の攻撃をしていた腕を止め、その手を向けた。零落白夜を展開していた一夏であるが、突然自身の身体がピクリとも動かなくなったことに困惑する。ラウラの眼帯をしていない右目が確実に一夏の事を捉えていたのだ。

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない——消えろ」

肩の大型カノンが接続部から回転し、一夏へと砲口を向けた。その動きが一夏にとってはあまりに緩慢に見えた。それだけではない、全ての動きがまるでスローモーションになったように見えたのだ。

——やられる！

そう思う一夏。許せない、助けなければと正義感に突き動かされ

るままに飛び出した方がいいが、全く何もできずに返り討ちに遭おうとしている。おそらくこの一撃だけではないだろう。隣に見える二人ももはや限界のように見えた。IS自体も最早装甲が万全の状態に残っているところを探すのが難しいと見えるくらいである。

レールカノンの砲口の奥に光が見えた。今度こそまづいと思う。そして、ラウラの一夏に対する恨みの一撃が放たれようとした――その時だった。

「「っ！」」

突然シュヴァルツェア・レーゲンのアラートが鳴り響く。ラウラが一瞬それに反応したことで、レールカノンの発射がコンマ一秒遅れた。

そして、その僅かな時間を切り裂くようにして飛来した何かが、レールカノンの銃身を切り裂いていき、発射寸前であったレールカノンは内部で爆発が起き、機体に大きなダメージを与えられた。

集中力が切れたためにAICが解除される。

そこに突然現れた機影。瞬時加速にて一気に間合いを縮めたのか、ラウラが反応を示したときには既に桜色の刃がセシリアと鈴を拘束していたワイヤーブレードを切り裂いていた。

「何だ、貴様は！」

ワイヤーブレードから解放された二人は気を失うようにして、地面に倒れこむ。一夏はそんな二人の元へと慌てて向かう。それと同時に肩越しに一体誰なのかと視線を向ける。

そこに見えたのは見覚えのあるトリコロールカラーの機影。しかし、背中を向けているそれ。ラウラがその隙を逃すはずがない。

——まずい！

一夏は声にこそ出さなかったがその機影の主である飛鳥が危険だと察した。逃げろというのには間に合わない。

——これで！

ラウラは大きな隙を見せている敵飛鳥に対してその超高熱プラズマ刃を振り下ろし、その機体を切り裂いた。

「ああっ！」

「馬鹿め。そんな玩具でしゃしゃり出てくるから——」

しかし、次の瞬間ラウラは目を疑った。切り裂いた機体がまるで霞の如く消え失せたのだ。

——な、何！？

慌ててハイパーセンサーに敵機を探す。その瞬間に背後に警戒するようにとアラートが鳴る。脊髄反射的に刃を振るう。

「貴様！」

「アンタだけは、許さない！」

桜色の刃を展開したビームサーベルがプラズマ刃と鏝迫り合いになる。ラウラは表面的には飛鳥の出現に対して怒りを露にしている

が、内面的には何が起きたのかと疑問が募っていた。

ここまでの暴虐。既に軍人としての誇りの欠片も見えない彼女に對して、一応は軍事学校を卒業した身である飛鳥はもはや許せる範疇を超えていると思っていた。

ただでさえ常日頃からの態度が気に入らなかった彼女であるために、既に許す気はサラサラなかった。

「アンタの振るう力に、何の想いも込められちゃいない！」
「ほざけ！」

ぶつかり合う刃と刃。飛鳥はそこから流れてくるラウラの想いというものを汲み取っていた。とはいっても感覚的に、もしかするかどうかくらいである。剣と剣を交えれば相手の気持ち分かるなどという極地ではなくとも、なんとなくであるが分かるのだ。

しかし、ラウラから伝わってくるのは果て無き力への渴望と満たされぬ空虚な想いだけだった。

——こいつ、心が空っぽなのか！？

望むは力。望むは力の象徴である織斑千冬。あの時間いた話からして、彼女はこの学園にて圧倒的な力を誇示し、学園生徒の無力さを彼女に知らしめ、ドイツに連れて帰るつもりなのかもしれない。

——そんなことになったら……。

彼女の優勝がただの試合で決まるはずがない。圧倒的な力を誇示するために、暴虐の限りを尽くすかもしれない。日常においても友

達を見かけることなど皆無である彼女の場合、慈悲などくれてやるはずもないだろう。

そうなってしまったら血の劇場が出来上がってしまう……。

「そんなこと……、させるもんかあああ！」

一旦退いたところでスラストを限界まで吹かす。瞬時加速を発動させ、一気にラウラとの距離を縮める。

「馬鹿め！」

A I Cがあるラウラにとって一対一は彼女の土俵である。更にいくらか早い瞬時加速だろうとも、結局は直線的なもの。タイミングさえ合わせれば敵ではないのだ。

「そんなもんによい！」

ラウラは知らない。知るはずもない。彼女が疑問を募らせていたそれに対する知識や情報というものがないのだから。

——これで！

——決める！

二人の気迫がぶつかり合う。飛鳥は右手に握られたビームサーベルを最大出力にしている。ラウラはそのプラズマ手刀を飛鳥の首に叩き込まんとして構える。

しかし、突然二人の間にどこからともなく実弾が次々と撃ち込まれ、二人はその間に引かれた境界線上の前で止まった。飛鳥にとっ

てはもう少しで手の内を明かすところであった。

二人の間に突然現れたのは水色の機体装甲を持つISを起動させた人物――IS学園生徒会会長更識楯無だった。

「た、楯無!？」

「何者だ!」

飛鳥は突然の楯無の登場に驚いている。対するラウラは敵意を向け、プラズマ手刀を打ち込みんとして接近する。

振り下ろされたそれであるが、突然楯無を守るようにしてアクア・クリスタルから展開された水のカーテンがその攻撃を受け止めていた。それに対して舌打ちをしつつも、追撃しようとしたところでいつの間にか自身の喉元に蒼流旋を突きつけられているのに気づいた。

――いつの間に!？」

怒りで集中力が低かったからなのか、それとも楯無の攻撃がラウラの反応速度を上回っていたのか。ともあれ、目の前の彼女が自身よりも強いということだけは感じ取っていた。

国家代表と代表候補生だからではなく、楯無にあって、ラウラにはない何かの差であった。

「これはもう模擬戦の範疇を超えているわね。アリーナのバリアシールドを破壊しちゃうだなんて、流石に見過ごせないわ」

そう言われ、申しわけなさそうにしている一夏。誰かがこの騒ぎを心配して呼んできたのか、ピットの向こうから走ってくるのは千冬

とその後ろに続く救護班であった。さらにその後ろから心配そうにしてくるその千冬たちを呼びに言っていたのだろう女子生徒たちの姿もある。

「更識！」

「あ、織斑先生。後は先生にお任せしますね」

「あ、ああ。すまないな」

遅れて来てしまったことに謝罪を入れる。楯無は気にしていませんと言い、飛鳥のほうに歩み寄る。

「さあ、戻ろっか。アツくん」

「え？ あ、ちよっと待てよ」

突然腕を絡ませ引きずるようにしてその場を後にする楯無と、されるがままにインパルスを起動させたままの飛鳥。

「それでどうだったの？」

楯無が下から覗き込むようにして飛鳥に尋ねてくる。インパルスを解除しながら、何のことだよと聞き返す飛鳥であるが、彼女が一体何について聞いているのかは理解していた。

「フォースインパルスの単一能力——ムゲン夢幻は」

「ああ……」

完璧だった。ただそう力強く言うのだった——

PHASE 38 Choice（選択）（後書き）

ED3↓RIVER＞石井竜也＜

如何でしたでしょうか？

ご感想をいただけると嬉しいです。

今後ともよろしく願います。

次回予告↓BGM『明日への橋』↓

傷ついた者

守れなかった者

時は止まらずに近づく学年別トーナメント

二人は共に舞うパートナーを求める

その横に立つは一体誰なのか……

次回 Infinité・Stratos（怒れる瞳） PHAS

E39 Invitation（誘い）

その間にあるのは……愛か

誤字脱字が増えてきています。読んでくださる皆さんには大変申し訳なく思っております。

加筆修正 11月25日 完了

PHASE39 Scheme（目論見）（前書き）

いつもたくさんのお覧と感想どうもありがとうございます。

それでは本編スタートします。

傷ついた者

守れなかった者

時は止まらずに近づく学年別トーナメント

二人は共に舞うパートナーを求める

その横に立つは一体誰なのか……

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳＜

PS サブタイトル変更しました。そのために前回のあとがきとは内容が変わります。申し訳ありません。

加筆修正完了 11月28日

PHASE 39 Scheme（目論見）

1

ピットに戻るや否や、そこには生徒会メンバーである虚と本音の姿が見えた。何かあったらすぐに動けるようにしていたのだ。

「御二方は保健室に搬送されました。大きな怪我はなさそうですが……」

虚が気を失い、機体もろとも暴虐にあったセシリアと鈴の容態を告げる。大事には至らなかったものの、彼女たちの身体的なダメージはもちろんのこと――

「どちらの機体も相当なダメージを受けているらしく……」

どうやら二人の機体はレベルCというかなり深刻なところまでいつているらしい。運よくコア自体は無事であったようであるが、双方のことを考慮するに、おそらく出場は不可能であろうと考える。

「これはいよいよ事前に意見書を提出しておいてよかったかもしれないわね……」

「どういう、ことだよ？」

飛鳥は疑問を持った表情をして、楯無に尋ねる。もともと学年別トーナメントは対一であったはず。何かしらの意見書を提出したということは、何かがあったということ。

「前のクラス対抗戦の件を考慮して、少しでも多くのISがあれば、

いざ何かがあっても対応ができるってことで、学年別トーナメントでは二対二のタッグ戦にするように提出したのよ」

「何てまた急に。それにいつの間にそんなことを？」

楯無が飛鳥の質問に対してすらすると答えていく。確かにあの時も4人の内3人がそれぞれの専用機を所有していた。生徒自身に何かをさせるというのはまた教師たちからすれば望んでいないことであろうが、有事はいつでも起きるか分からない。

今回もまた、その形式をとるのがよいのではないか。教師団が到着するまで、少しでも時間を稼ぐのにはそれが適していたのだ。

「おねーさんは優秀なのよ」

褒めて褒めてと甘えるように言ってくる楯無。苦笑いを浮かべる飛鳥であるが、仕方ないと楯無の水色の髪を優しく撫でてあげる。

その光景をほほえましく虚と本音は見ている。

「さてっと！」

「ん？」

ひらりと舞うようにして飛鳥から離れる楯無。

「とりあえず、そのことを全校生徒に伝えないとね」

重要事項を前日に発表されても困るだけだ。おそらくその決定事項を全学年の教師にでも伝え、掲示板にでも張り出すのだろう。

とはいえ、その仕事をさせられるのは自分なのだと、それを理

解して小さくため息をつく。

「保健室に行ったら？ 友達なんでしょ？」

「え？ ああ、でも……」

仕事があることを示唆する。だが、それに対して虚と本音が自分たちで何とかするということを言う。

「そうか。悪い、ありがとう」

そう礼を告げ、飛鳥は三人に背を向けて保健室へと向かうことにした。

2

「「……」」

保健室に沈黙が漂っている。アリーナの一件が起きてから既に一時間ほどが経っていた。

保健室にあるベッドの上では打撲の治療を受けて包帯の巻かれたセシリアと鈴が少々機嫌の悪そうな表情で、視線をあらぬ方向へ向けていた。

「別に助けてくれなくて良かったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

などと言っている二人であるが、とてもそうは言える状態ではない。痛々しいともいえるように、白い肌にできた痣を隠すようにして白い包帯が幾重にも巻かれている。

——悔しいだろうな……。

いくらラウラが実力者だからといって、二人もまた代表候補生。それなりの実力だってあるのだから、二対一というアドバンテージがあったというのに完敗というのはプライドを酷く傷つけられただろう。

更に彼女たちのISの状態を知っている飛鳥からすれば、彼女たちがリベンジに燃えているのを見てなんとも言いづらさを感じていた。

「お前らなあ……。とりあえず、怪我はたいしたことなさそうで良かった」

「こんなの怪我のうちに入らな——痛たたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味——痛っ！」

二人は少々動きをするだけでもそれだけの痛みを感じるのだ。何をやっているのかと呆れた表情で見る。

——大人しく、安静にしてろよな。

馬鹿に動けばかえって痛い思いをするだけなのにと思っていた飛鳥。飛鳥同様に、一夏もそう思っているのかもしれない。

すると、そこは女性のカンというものののだろうか。セシリアと鈴が飛鳥と一夏に対して視線を向けて言う。

「バカって何よ！ バカって！ バカ！」

「お二人こそ大バカですわ！」

「え!?! 俺、口に出したつもりはないんだけど」

———何でバレたんだ?

一夏は二人に思っていたことを看破され、驚いたように声を上げる。

「ま、候補生としてのプライドもだが、大方好きな奴や親友に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいじゃないのか?」

飛鳥は途中で買ってきていた飲み物を両手に持ちながらそう言う。

このあたりの年齢だったら、そういう話が良く話のネタになるだろうと、学園内では良く耳にしていた。自分で言うのもなんだかおかしい気がした。

セシリアにとっては飛鳥と一夏というのは初めての男友達というような存在であろうが、鈴にとっては一夏は特別な存在である。友達を侮辱され、好いているものを侮辱された二人。その間には程度こそあれ、許せないという思いだけは二人は同じであった。

ふと飛鳥の頭に浮かんだ良く知る少女たちの姿。何故今彼女たちの姿が思い浮かんだのだろうと首を捻る。彼女たちは飛鳥にとっては守りたいと思う大切な存在。しかし、今までそういう感情恋愛というフィルターを通して見たことがあっただろうか。

飛鳥が記憶を巡ってみたところではそういう経験はない。あの日———自殺し、一命を取り留めてから、ただそのことのためだけに力を求めている気がする。もう二度と大切な存在を失いたくないから。

そして――

――白騎士と篠ノ之束《守りたいと思っていた大切な家族を奪っていった憎き敵》を殺すために……。

いつの間にか思考が別の方向へと変わっていた。やはりこれについて考えると、無意識の内に飛鳥の表情というのは怖いものへと変わる。

「ん？ なんのことだ？」

一夏は一夏で良く聞こえなかったらしく、何を言っているのだというように首を傾げている。流石に聞かれるのはまずいと、鈴は大きさに腕を振って何でもないと呼ぶ。彼女の顔は羞恥で真っ赤であった。

「ま、全く何を言ってるのか、全然分かんないわね！」

「ま、全くですわね！ あ、飛鳥さん！ もう少し言葉を選んで欲しいですわね！」

「ぷっ！ なんだよそれ。まあいい、烏龍茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着けよ」

「ふ、ふんっ！」

「あ、ありがたくいただきますわ」

未だに頬が赤い二人だが、素直に飛鳥が買ってきた飲み物を受け取り、口にそれを含む。羞恥で渴いていた口の中、喉が潤いに満ちていく。

「それにしても、何なのだあいつは」

沈黙していた雰囲気破ったのは箒の一言だった。彼女の言葉が伝えるように、ここにいる数人はラウラがどうして普通に候補生として選ばれ、認められているのかが分からないでいた。

「そうだな。ああいう奴だったら普通ドイツの評判が落ちるってことで候補生から外されるんじゃないか？ 真っ先に」
「私もそう思う」

一夏と箒はどちらも同じように考えていたようだ。確かに普通ならそう考えるのが妥当であろう。

しかし、それを聞いていた代表候補生であるセシリアと鈴は二人とは違った様子である。

飛鳥も身近に国家代表と代表候補生の姉妹がいるためにそれについて二人と同様に知っていることだった。

「候補生として、第一に実力があればいいのですわ」

セシリアの言葉に対して、一夏は反論する。

「だからって、力があればいいって分けじゃないだろ？ 限度ってものがある」

「そうだ。奴のしたことはその限度というものを超えている」

一夏と箒の言うことは確かにもっともなことだった。現にその限界を超えた暴虐という名のことをされ、自身とその機体を完膚なきまでにされたのだから。それを身をもって知っているセシリアと鈴。

「それでも、このIS学園では外からの干渉がほとんどない。それ

はつまり、今回のことがあっても、生徒間のいざこざって言う程度で済まされるのよ」

「何だよそれ……」

信じられないという表情で呟く一夏。対外的には強いIS学園であるが、内部における問題に対してはてんで弱い。今回のことであってもラウラが模擬戦で二人に怪我をさせてしまった。それくらいで済まされてもおかしくはないのだ。むしろ他国の候補生相手に二対一で勝利するのだから、より彼女の実力が高いことが証明されることにも繋がる。

すると二人に続けるようにセシリアが口を開く。

「代表候補生として大切な役割は二つありますの。一つ目はその専用機はもちろん、その時の戦闘、そして、相手の機体の稼動データを集めることですわ。そして――」

すると突然隣に立つ飛鳥に目配せする。話のバトンを渡された飛鳥はそんなセシリアに対してなんで俺に話を振るのかとぶつくさ言いながらも話を続ける。

「そして、もう一つはその機体で成果を出し、自国の技術が他国よりも優れているということを証明することだったか？」

おそらく彼女が候補生としてドイツ政府から何も言われず、野放しにされている理由はそこにあるのだろう。彼女がもつともISの操縦に秀でており、黒き雨に適していると判断されたからだ。そして、今回のことをドイツの方に伝えたとしても、むしろよく成果を上げてくれたと逆に褒められるのではないか。

——機体の性能が証明できればそれでいいのかよ！

それで誰かが傷ついたとしても、彼らにとってはいい踏み台になってくれたと思うくらいであろう。そんな風に考えた飛鳥は思わずドイツのことを嫌悪した。

ふと考える。もし代表候補生が一人でも学年別トーナメントに出なかったらどうなるだろうか。現にセシリアと鈴という二人の候補生はまだ告げられてはいないが、既に出場は絶望的だ。身体的以上に機体が間に合わないのだから。

現に数少ない候補生が一気に二人減ったのだ。自身がそうしたことではあるが、学年別トーナメントにて力を見せ付けようとしているラウラにとっては好都合だろう。

飛鳥が知っているのも、あとは日本の候補生である簪くらいだろうか。他国のことはよく分からない。しかし、簪については少し特殊である。彼女の操縦の技術は高いといっても過言ではない。

しかし、視線を動かし、その先にいる唯一の男の操縦者——織斑一夏の専用機である白式の開発のために倉持技研の研究者たちが借り出されたために、彼女の専用機である打鉄式が放置されてしまったのだ。

組み立てている最中であるが、完成には未だ遠いというのが現状である。そう考えると、ラウラの標的になる可能性は低い。後残っているのはMSインパルスを持っている飛鳥と白式という専用機を持ちながら、あのブリュンヒルデの弟である一夏が標的であろう。

そして、今回一夏もろとも白式を破壊しようとした。それは自国

のためであると共に、織斑千冬を神のように尊敬している彼女である。転校初日から一夏のことを敵視していた事からも、当然殺しに掛かっていただろう。無論激しい戦闘にてこうなってしまったと言えど何のことはない。

だが、それは普通の女性操縦者ならである。一夏はあの織斑千冬の弟であり、何より世界でただ一人のISの男の操縦者である。そんな貴重な存在に死なれてしまったなら世界はどう動くであろうか。

誰にでも分かることである。ドイツに対して責任追及をし、ドイツはラウラただ一人に罪を着せるだろう。何せラウラにはそれをするだけの動機というものを今確かにもっているのだから。しかし、ラウラにとってはまだ地獄は続くだろう。軍から捨てられ、国から捨てられ、そして、弟を殺されたことから千冬からも捨てられるだろう。彼女が一夏に対してどういう思い入れをしているかは見ていて分かるくらいだ。

そうなれば結果としてラウラは壊れるだろう。己の一方的な思い込みが生んだ最悪の運命である。

「となると考えられるのは、ライバルを片っ端から潰していくってことね」

「悔しいですけど、そうされてしまったのですからね」

「え？　　どういことだよ」

セシリアと鈴の言葉に一夏が尋ねる。

「簡単なことよ。さっきも言ったけど、アイツが候補生としての役割を果たすのに手っ取り早いのは圧倒的な強さで勝つこと。そして、それを他国のトップに見せ付けることなの」

「一夏さん。あと一週間もないですが、この後にある行事はお分かりですわよね？」

「あ、ああ。なるほど！」

一夏は二人の言葉でということなのかを理解したようだ。

「つまりは自惚れって分けじゃないけど、候補生として実力のあるアタシたちをあらかた潰しておけば、後は入学して数ヶ月といってもまだ一年生。初心者同然の生徒たちの中に彼女を入れれば当然――」

「断一の優勝だな。今回のことを知らないIS関係の上役の奴らはそのまま流れるようにドイツを評価するって図式か……」

「そうですね。学年別トーナメントは所謂他国の技術を公でお披露目する数少ない場ですもの」

「簡単に言えば、アイツ一人でおいしいところ取りってわけね」

逆に出場できない場合は評価が下がってしまう。今回の場合はセシリアと鈴の二人、イギリスと中国がそれに当て嵌まる。

話を進める度に空気が重くなっていくのを感じていた。もしかしたらという彼女とその国ドイツの目論見を予想して思わず怖気がした。

果たしてそこまでする必要があるのかと。しかし、それは子どもの事情や視点から見てのこと。大人の世界ではそれが当たり前なのだ、より良いものを欲し、より良い成果を欲する。そのためなら多少なりとも汚い手段をとる。今回は逆にIS学園の特記事項が仇になった結果だ。

「初めは一夏さんに対する何かしらの事情でだけなのかと思ってい

ましたが……、改めて考えてみると、彼女の暴走にはそんな理由があるのかもしれませんがね」

「そうね。そうなると私たちに対して突っかかってきた理由も分かる。まんまと妨害されたというわけね。ああ、もう！ あったま来る！」

二人の表情には悔しさが色濃く見える。まんまと国ごと評価を下げてしまうような事態に追い込まれてしまったのだから。候補生として、これほどまでに屈辱的なことはない。

「そういえば千冬姉が私闘を禁止したって言うのは――」

「ああ。十中八九、これ以上生徒に被害が行かないようにするためだろうな」

学園側としては当然の処置だろう。これ以上被害が拡大しないために、生徒を守るためということだ。

「あ、そういえば四組にも専用機持ちがいなかったか？ 確か代表候補生だったはずだけど……」

一夏が思い出したように言う。

――簪！

飛鳥は突然心臓を鷲掴みされたような痛みを胸に感じた。うまく呼吸ができない。心臓の鼓動が早まる。口の中が急激に渴いていく。口が開かれた状態で、言葉が出ない。

思わず飛鳥はセシリアと鈴が陥った状態を簪と置き換えた。置き換えてしまった。崩れ落ちる身体。吹き飛ぶ装甲。美しく咲き誇る

は鮮血の花……。

聞こえてきそうな言葉――

“どうして守ってくれなかったの？”

――っ！ お、俺は。俺は！

「お、おい。飛鳥？」

「ちよっと、アンタ大丈夫なの？」

「顔色が真っ青ですわよ……」

その声にハッとして現実に意識を戻した飛鳥。背筋に嫌な汗が流れる。額にもじっとりと汗を感じており、思わず額を手で覆い隠す。こんな表情を見られたくはない。

「何でも、ない」

ただそう素っ気無く返す。気にしなくてもいいと付け加えて。

「アイツは、簪は大丈夫だ」

「？　なんでだよ」

一夏がどういうことだと尋ねてくる。簪は確かに日本の代表候補生であり、専用機を未完成ながら持っているが、それを起動させることはしない。それに彼女の性格からしてトーナメントには出ないだろうというのは分かりきっていたことだ。

「とりあえず、大丈夫だ」

「詳しいことは知らないけど。その簪さんって言う人と飛鳥は知り

合いみたいだね」

「幼馴染だ」

「そうか。なら、飛鳥がそう言うなら大丈夫じゃないのか？」

一夏がそう言うのを聞いて、箒たちも頷いていた。対照的に飛鳥は不安を胸に抱えている。例えば参加しないとはいえ、何かしらの接触を図ってくるかもしれない。それも飛鳥自身がラウラと大きく衝突したこともあるから余計に不安に思うのだ。

もし彼女が簪に対して何らかのアクションを起こしたなら――

――絶対に許さない……。

そう思うと同時に、握り締めていた拳に力が入る――

3

「まずアイツの身近にいたのがセシリアと鳳だったってことだ。それと一夏、ずっと気になってたんだけど、アイツと昔何かあったのか？ あそこまで敵視するなんて、そうそうないからな」

――とはいえ、俺もアイツと同じか……。

飛鳥が一夏に対して尋ねる。飛鳥の言葉を聞いて一夏はあからさまに顔色を悪くする。それが何を意味しているのかは分からない。しかし、一夏自身はラウラから敵視される理由を程度はどうであれ自覚しているらしい。

「ちょっと昔な。千冬姉絡みで」

「悪いな。嫌なことだったか？」

飛鳥がすまなさそうにして謝る。一夏は気にしていないと小さく笑みを浮かべる。

「なら、別に言わなくてもいいんだぜ？」

そう続ける飛鳥。誰にでも一つや二つ、言いたくないことだってある。

しかし、そう言われた一夏は首を横に振る。話さなくてもいいこともある。しかし、それを話さなければいけない時もある。もしかしたらそれが今なのかもしれない。そう一夏は思っていた。

「そうかもしれないけど。やっぱりこうなっちゃったら話さないわけにはいかないだろ。それに、そこまで重苦しいものじゃないからな」

一夏は心配されたくないからか、表情はいたって明るいものだ。しかし、その仮面の裏ではどう思っているのだろう。

それが一夏自身の意志ならば自分たちがとやかく言っても仕方がないと、飛鳥の視線を受けたセシリア、鈴は理解し、頷くことで答える。

「とりあえず、アイツが今回みたいなことをやらないという理由はないな。代表候補生としてその実力とその国の技術を見せ付けるという責務を果たすと共に、同時進行で私怨を晴らすことができるかな」

「否定、できないよな……」

飛鳥の言葉に疲れたように言う一夏。

「そうですわね。ドイツがどんな内情かは分かりませんが、第三世代の実用化に遅れたこともあってイグニッション・プランに遅れが生じているのは確かですわ。そういうのを挽回するっていう思惑があるのであれば、やらないわけではないと思いますわ」

セシリアがそれに付け加えるように言う。

「バカな、そんな卑劣なことが許されると思っているのか!？」

そう叫ぶのは箒だ。彼女の根幹を成す武士道からすればそれを許すことをする気なんてサラサラないだろう。

確かに彼女の言うように、ドイツやラウラがやろうとしていることは間違いなのかもしれない。しかし、箒の言うような綺麗ごとだけで済まされるようにアニメのようなご都合主義というのはこの現実にはないのだ。

現にフランスは既にそのような手を下している。この場に既にいなくなってしまったシャルルもとい、シャルロット・デュノアがその良い例だ。

それを知っている一夏は箒の言葉に賛同しつつも、あまり良い表情を浮かべてはいなかった。

「馬鹿はアンタじゃない？ 協定だなんて、あるようでないものよ」

鈴が箒の言葉に対して異議を申し立てる。鈴自身も気に食わないとも感じている。しかし、候補生というように、社会の歯車の一部

になって分かったこともあった。協定や条約などというものは、ただか建前でしかないということを。

「なんだと！？ それではルール違反ではないか！」

「ルールは破るためにあるようなものよ。だから、新しいルールが作られるんじゃない」

鈴はそう言い続ける箒に対して呆れるように首を横に振って言葉を並べる。至近距離にて叫ばれるので傷にその声が響く――地味に痛い。

「お、おい、箒落ち着け。見ろよ、鈴の傷に響いてるぞ」

「あ、ありがとう、一夏」

鈴が横になっていたベッドに詰め寄りながら叫ぶ箒。至近距離で叫ばれたために、地味に傷に響く。鈴が少し表情を痛みで歪めるのを一夏は逃さず、彼女のところから箒を引き剥がすように肩を掴む。箒は一夏の顔を見て、仕方ないと一旦引く。そんな一夏に対して、小さな声で例を呟く鈴。一夏には聞こえなかったが、隣のベッドにいたセシリアには聞こえていたようで、くすりと笑みを浮かべ彼女を見ていた。

「鳳の言う通りだ。あんたは本当に世界の汚い部分を知らないからそう言えるんだよ。いつでも綺麗ごとが通じると思うなよな」

「なんだと！？ そんな卑怯なこと……」

「オホン、少し落ち着いたらどうですの篠ノ之さん。確かにルールに則ることはとても綺麗なことでありますし、素晴らしいこと、当たり前前のことですわ」

「当然だ」

「しかし、わたくしたちが今こうしている内にも、社会というのは

水面下で動いているのですわ、複雑に」

セシリアがそう告げる。

「自分たちの国で作り出したものが公の場で優秀なことを披露できれば、さっき言ったようにその国そのものの評価が上がるんだよ」
「それはつまり、わたくしたちのような代表候補生や専用機を持つ者というのは国や企業にとっては忠実な駒、歯車の一つにすぎないのですわ」

「そうね……、セシリアの言う通りだわ」

飛鳥とセシリアが説明する。忠実な駒、歯車。飛鳥はその言葉を連想し、思わず歯噛みする。それはここにはいないシャルロットが、まさにそれだったのだから。

そして、ここにいるセシリアや鈴、この場にいない簪はもちろんそういう意味合いに当てはまる。もし国が簪に対してシャルロット同様のことをさせようとするならば、飛鳥は答えを聞かずに暴れるだろう。それくらいのことには許されるはずだ、と思っている。

大人たちによっていいように使われる子ども。ISが齎した社会というのはほとんどが歪みである。その歪みが社会を飲み込み、風潮を乱し、更には悲しみを広げている。

この場にいる者たちは皆、程度の違いこそあれどISの犠牲者なのだ。おそらくこの場にいないラウラ・ボーデヴィツヒも……。

拳を握り締めるその力がそのまま決意の強さへと変わる。決してこのままではいけない。こんな世界はおかしい。このままではより多くの者たちの運命が蔑ろにされていく。子供は大人の駒や歯車と

なり、大人はより高位にいる者たちの忠実な操り人形へとなる。そして、そんなものたちすらも遙かな高みからまるで子どもが人形を動かしているようにして遊んでいるものもある。

——篠ノ之束、そして、白騎士！ あんた達は、俺が必ずその空から引き摺り下ろしてやる！ そして、この手で殺す！

飛鳥は誰も知らないところで硬く、硬くその決意を固めていた。

「確かに表面上でやれば、アンタの言う通り生真面目な人たちに処分されるわ」

「あ、当たり前だ。そんなことを、誰が許せるものか！」

「篠ノ之さんが許さないといっても、社会は許しますの。表面上で争わず、このように見えないところで熾烈な争いをする。私たちはそれを重々覚悟していますわ」

「ふざけるな！」

箒が叫ぶ。信じられないというような表情をして、目の前にいる者たちが自分が決して許せないようなことを許容しているということが理解できないでいた。

「そんな許されないことを貴様たちは許容するのか！？ 恥を知れ！」

顔を真っ赤にして叫ぶ。愚直なまでに真面目な彼女の信念にはそれを許容するという手段はない。曲がったことが嫌いな彼女の性格が今回は崇っていた。

「それを知っていながら候補生をしているのか！？ お前たちはそれが間違っているっていうことの自覚がないのか！ 正義はないの

か！」

そうは言うが、彼女たちであってもただ利用されるだけではない。セシリアにしては名家オルコット家を継ぐためということでISを利用し、鈴にしてみれば純粹にそれを楽しみたい、もちろん報酬もあるということで家計を助けることにも繋がる。シャルロットにしてみれば自らの父が経営する会社を救うためということでその命令に従った。そして、今問題になっているラウラもまた……。

「わたくしたちにも譲れない理由がありますの」

「まあ、専用機も持たないアンタには分からないことでしょうけどね」

鈴の言葉に箒は今まで感じたことがないくらいの悔しさを感じていた。自分はこの場にいる者たちとは立場のベクトルが違う。飛鳥を始めとして一夏、セシリア、鈴は専用機を持ち、その責任を果たそうとしている。一夏の場合はデータ取りが主であるが……。

しかし、箒は違う。篠ノ之束の妹だからということで、保護という名の軟禁状態におかれているこの状態。決して望んできたわけではない。だが、ここに来なかったらどうなっていただろうか。当然犯罪者の妹というレッテルを張られていただろう。今の一夏といわれる幸せな日々を過ごせなかっただろう。感謝こそすれど、恨みなどのほうが大きかった。

——力が欲しい……。

たかが一週間といえども、箒は隔離されていた。その時何より思ったのはようやく会えた幼馴染であり、恋心を抱いていた一夏に会いたいという思いだった。窓もなく、ただ白い空間に隔離されてい

る間、様々なこと思い出していた。まるで麻薬を求めるように会いたいという思いが溢れていた。しかし、一夏にそういう感情を向けているのは何も彼女だけではなかった。セカンド幼馴染という鳳鈴音を筆頭に多くの女子生徒たちもそんな風に一夏を見ている。会えない一週間で何が起きているのか。ずっと一夏のすぐ傍にいますという席には自分がいたというのに、いつの間にか多くの者たちがそこにいた。

自分がそこにずっといたというのに。突然現れてそれを奪っていかうとする。そんな彼女たちに対して嫉妬心を募らせる。自分こそが一夏のことを誰よりも良く知っているというのに。

異性同性構わず一夏の傍にいますのは、飛鳥、セシリア、鈴といった共通したものを持っている者たちだった。それは——専用機。箒から言わせると圧倒的な力だった。

力があれば。傍に立てるくらいの力があれば。箒の胸のうちにはまるで黒い何かが渦巻くようにしてあった。

「とりあえず、アイツの最終的な目標は一夏だターゲットってことだな。あれだけの恨みを向けられているんだ、骨折くらいじゃすまないだろうな。もしかしなくても殺されるぞ」

「考えたくないことだけど、あの時殺されそうになったからな……」

「馬鹿な!? 一夏がそんなことをするはずがない!」

「箒……」

飛鳥の言う言葉に、一夏はその時のことを思い出し、思わず背筋がゾッとするような感覚を覚えた。

一夏はどこまでも信じてくれる箒の言葉に嬉しく思うのと同時に

申し訳なさを感じていた。一夏がラウラ自身に直接的なことをしたわけではなくても、間接的にはそうしてしまっている。一夏が、唯一つ心当たりがあること。おそらくそれが限りなく答えに近いだろう、否、答えであろうと思っていた。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど。やっぱり俺、心当たりがある」
「い、一夏……？」

箒が信じられないという表情を見せる。自身の信じていたものに裏切られたというように。一夏はそんな箒を見て、申しわけなさそうな顔を向けている。

「嘘をつかなくてもいいのだぞ、一夏。アイツを庇う必要だなんてない！」

「嘘なんかじゃない。セシリアと鈴が巻き込まれたのも、結局は俺の責任だ。俺があの時……」

「一夏！」

「いい加減にしろよ！」

「「っ！」」

いい加減苛立ちが頂点に達しそうだ。誰かを信じることはいいことだ。しかし、飛鳥にとっては箒のそれというのは信頼というよりも妄信ととれる。自分というフィルターを通し、都合の良い考えに変換したことしか言わない。一夏がそう言っているというのに、彼女の中の一夏と違っているためにその言葉を否定しているのだ。

「っ！ とりあえず！ あいつがここで何をしようとも、政府の奴らは、それがドイツにとって有益になるなら目を瞑り、むしろドンドンやれって言うだろうな」

飛鳥が話を無理やりに変えるために声を張り上げて言う。空気が振動するような感覚が走る。

今回ラウラが送り込まれてきた理由は様々あるだろうが、相当の腕を持つ彼女である。そして、まるで各国の首脳陣が集う学年別トーナメントに合わせる形で送られてきた。その貴重な場を利用し、一気にトップに躍り出ようとでも算段しているのかもしれない。彼女の千冬への執着心と一夏への憎しみを利用してまでも……。

「IS学園には欧州からヨーロッパもライバルが多く通ってる。破壊するところまで行かなくても、圧倒的な優劣を付けられればいいっていう考えだろうさ、おそらくドイツ政府としては。そういう評価がイグニツション・プランにも大きく影響するだろうし」

「そうになるとイギリスに取って代わりますわ。悔しいですけども、おそらく同年の中では彼女が一番強いといってもおかしくないですわね」

指を唇に宛がうような仕草をしながらそう呟くセシリア。自身の力が全く通用しなかった。最後までほとんどダメージを与えられなかったのだから。それも鈴との二人係でも。更に二対一ならこちらが有利と思っていたものの、そのタッグというものを逆手に取られ連携を崩された。とはいえ、あの時の二人はお互いに違った意味合いでキレていたために、冷静で戦えていなかったということもあるのであるが。

「自慢するわけじゃないけど、私だってこれでも代表候補生なんだもん。それをセシリアと一緒に戦ったのに……」

「手も足も出ませんでしたからね。というのはわたくしたちの精神的な甘さも原因ですけれど……」

「うっ！ それ言わないでよ」

冷静になって考えれば、なんて候補生として愚かなことをしてしまったのかと鈴は頭を抱える。ISという名の兵器を操縦するに当たっては常に冷静でいなければいけない。それがいつ無防備な人に牙を剥くか分からないからだ。冷静に、そして広い視野を持つ必要がある。何よりその専用機を持つということに責任を持たなければいけない。それを自身の力にした時、その失態に対して責任を負うのもまた、自分なのだから――

PHASE39 Scheme（目論見）（後書き）

ED3↓RIVER＞石井竜也＜

如何でしたでしょうか？ ご感想をいただけると嬉しいです。

今後ともよろしく願います。

次回予告（BGM『明日への橋』）

共に戦うため、傍に立ち、支えてくれるパートナーを求める

支え、支えられて決して倒れない、そんな鋼の絆で結ばれたパートナーを

胸中で悩む簪

それを知らぬ飛鳥

後押しする本音

果たしてそこに立つ者たちとは

次回 Infinite・Stratos（怒れる瞳） PHAS
E40 Wish（望み）

二人の絆を固くするは、一体何か――

加筆修正完了 11月28日

PHASE 40 Wish（望み）（前書き）

いつもご感想と閲覧ありがとうございます。

それでは本編をどうぞ。

共に戦うため、傍に立ち、支えてくれるパートナーを求める

支え、支えられて決して倒れない、そんな鋼の絆で結ばれたパートナーを

胸中で悩む簪

それを知らぬ飛鳥

後押しする本音

果たしてそこに立つ者たちとは

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳く

PHASE 40 Wish（望み）

1

「あ、そうだ。俺から話すんだったな」

一夏が忘れていたと話を切り出した。一番聞いておかなければいけないことだ。一夏がそんなことをするはずがないと思っている筈もまだ納得していないようであるが、不承無承引き下がっていた。

「何忘れてんのよ、一夏」

「だから、悪かったって」

ジトツと目を向けてくる鈴に対して、手を合わせて謝る一夏。そんな様子を見て、飛鳥たちは一瞬ではあるが、肩の力が抜けた。

「それで？」

しかし、すぐに気を引き締めるようにして、飛鳥が尋ねる。その瞬間空気が引き締まるのを感じた。ぴりぴりとした雰囲気飛鳥が中心となって周りを包み込む。一夏たちの顔には緊張の色が色濃く見える。誰かがゴクリと生唾を飲み込む。

「え、ええっとな……、それは――」

一夏がその空気に耐えられず、口を開いた、その時だった。

突然扉の向こう、つまりは廊下側の方からもの凄い地響きが聞こえてきたのだ。一体何だと、重苦しい雰囲気の中で誰もが思った。

外からは何やら真耶の叫んでいる声が聞こえるがその大きな音が止まることはなく、突然保健室のドアが開けられた。

否、開けられたというよりはあまりの人の数による圧力でドアが吹き飛んだ。無残にも飛んでいく保健室のドアを唾然とした様子でその場にいた飛鳥たちは見ていた。

「ちょ、ちょっと皆さん、落ち着いてください！　ここは保健室ですよ！」

雪崩の如く押し入ってきた女子生徒たち。その中から真耶の手だけが助けを求めるように見える。なんとか声を張り上げているが、何かを求めている彼女たちの耳には届いていない。

「皆さん、聞いてくださいって、きゃあああ！　助けてー！」

もみくちやにされ、人の雪崩の中に吞み込まれていく。ただでさえ低身長な彼女である。あっという間にその姿は見えなくなった。

「なんなんだよ！　この状況は！」

飛鳥が突然のことに声を張り上げるようにして言う。大体の理由は理解している飛鳥であったが、突然このような状況になったことに、当然そう言わざるを得なかった。

対照的に一夏たちは一体何をしに来たのかと分からないという表情で、女子生徒たちを見ていた。

どうやら早くも学年別トーナメントのことが知らされたらしい。相変わらず速いと仕事を引き受けてくれた二人の顔を思い浮かべる。

そこにいる女子生徒たちの手には同じ用紙が握り締められている。
トーナメントに参加するための申込書だ。

大方ここにいる誰かをタッグパートナーにするために来たのだろう。
おそらくは飛鳥、一夏であろう。

「ちょ、ちょっと一体何なのよ！」

「あ、あなたたちここに何をしに！」

まだことが伝えられていない二人は当然のように尋ねる。飛鳥も知らなかったら彼女たちと同じように言っていただろう。

「え、えつとね。これなんだけど……」

「えつと、何々……？」

先頭にいた生徒が一夏に手渡したその用紙。一夏はそれを手に取り読み始める。

「学年別トーナメントの方式を一对一方式から二対二のタッグ方式に変更。各生徒はトーナメントに参加する際、そのタッグを組む生徒を一人決め、二人の名前を記入した用紙を提出すること」

「あとは、期日までに決まらなかった生徒は、強制的にくじ引きで決められたもの同士がタッグを組むことになる、か」

それを覗き込んでいた飛鳥が一夏の言葉を継いで言う。それを聞いた瞬間、箒と鈴の顔色があからさまに変わるのが見えた。

「紅月くん！」

「織斑くん！」

突然飛鳥たちを取り囲むようにして立つ。まるでショッピンゲームに置かれているバーゲンセール時の商品ののような気持ちである。そして、次の瞬間にはまるで飛鳥たちを我先に取ろうとして腕が伸びてくる。はつきり言ってこれは恐怖以外の何物でもない。そこに映るのは手、手、手。

「紅月くん、ぜひ私と組んで！」

「私と組もう、織斑くん！」

突然の学年別トーナメントの仕様変更は彼女たちにとっては悪いことばかりではなかったようだ。それはIS学園にいる二人の男子生徒とタッグを組めるのだから。こうして雪崩の如くやって来たのは、自分がタッグを組むのだという先手必勝の思いだったのだろう――

2

篠ノ之箒は織斑一夏に対して恋心を抱いている。素直になれないところはあがあるが、その想いに嘘偽りはない。

そのために箒はけななしの勇気をかき集め、数日前に宣言していたことがある。それは――

『今度の学年別トーナメントで私が優勝したら、そ、その。つ、つ、付き合ってもらおうぞ！』

『えっ？ あ、ああ』

その言葉通り、自身が優勝したら一夏と付き合う、つまりは恋人になれと宣言したのだ。傍から見ればただ自分の好きだという想いを押し付けているみたいなのであり、相手の、一夏の気持ちという

ものを考慮していない行動であるが、箒にはそこまで考えることはできなかった。

あの時一夏が箒の言葉をどのように解釈したかは分からない。しかし、一々そこまで考える余裕はあの時の彼女にはなかった。いつもの彼女であつたら、恥ずかしさに耐え切れず、竹刀で一撃ぐらいは打ち込んでいただろうからだ。

しかし、ここで彼女にとっては予想外のことが起きていた。それは彼女の一夏に対する告白を聞いていた誰かがそれを膨らませた話として学園内に広めていたのだ。

“学年別トーナメントで優勝すれば紅月飛鳥、織斑一夏と付き合うことができる”

何故そこに飛鳥が含まれているのかは、IS学園というのが女子高であることが災いしていた。

それよりも箒は焦った。このままでは一夏を他の誰かに取られてしまうという危機感を感じていたからだ。

一夏が優勝すればいいのだが、一夏よりも実力の高い生徒というのはたくさんいる。飛鳥やラウラを始めとして、怪我をしているがセシリアと鈴だ。他のクラスにもいるかもしれない、それも箒よりも実力の高い生徒が。

だが、今回のトーナメント仕様の変更を聞き、箒は内心更に焦っていた。正直この中でタッグを組めるものというのは限りなく少ないだろう。何より優勝した時に、一夏を取られては意味がないからだ。前提は一夏に対して恋心のような感情を持っていない人物だ。

鈴はまず論外だ。彼女は箒が見ても分かるように、一夏に対して恋心を抱いているのが分かる。一体どんな経緯があったかは分からないが、そんなことは彼女には関係のないことだった。

セシリアもまた箒はタッグに組めるとは思っていなかった。彼女にとって放課後というのは一夏と二人っきりでいられる唯一の時間だったのだ。

それなのにセシリアは最初のクラス代表決定戦の後から謝罪も含めて訓練に付き合うようになっていた。

そして、飛鳥とのタッグは不可能だ。箒自身、今でさえ声をかけられない。組む資格すら自分にはないと思っているのだ。自身の姉である篠ノ之束が起こした事件にて飛鳥は家族を失った。運命そのものを狂わされたのだ。そして何より箒自身もまた、飛鳥にとっては決して許すことのできないことをした。それは飛鳥にとって守りたいと思っっている大切な存在である二人を危険な目に遭わせたことだ。ただ危険なだけではなく、あわや死なせてしまうところだった。

それらもあってか、自分にはその資格がないと思っていた……。

しかし、ふと箒は思いついた。それはもう彼女にとっては画期的なアイディアであった。何故今までこれを思いつかなかったのか。彼女は数分前の自分をしないで殴りたい気分でもあった。

———なんだ簡単なことじゃないか。

それを思いつき、箒は思わず笑みを浮かべてしまった。

それは彼女自身が一夏とタッグを組むという案であった。そうすればタッグを組むのには連携が必要だということで訓練は常に一緒にいられる時間が以前よりも増える。そして、一夏と共に戦えば不思議と何でもできるような気がしていた。そうすれば自分の恋路を邪魔する者たちを倒すこともできる。そんな風に考えていた。

相変わらず一夏は飛鳥と周りの女子生徒たちから申し出を受けている。箒はそんな彼女たちに割って入り、無理やりにどかして一夏の元へと行く。彼女たちが何かを言っているが、箒の耳には聞こえない。ただ一夏の元へと一直線に向かうだけだ。

はっきり言って恥ずかしさで今にも心臓がはち切れそうだ。いつもであれば、それを隠すためにしないで一撃殴るなどしているかもしれない。しかし、今この場でそうしたら、一夏にタッグを組んでもらえない。そう思った箒は今にも手を出しそうな腕を必死に抑え込んでいた。

そして、ようやく一夏の前に躍り出た箒。意を決してタッグを申し込む。

「い、一夏！ わ、私とタッグを組んで——」

そんな箒の言葉を遮って——

「織斑くん、私とタッグ組んで！」

「くれ、ないか……？」

箒の誘いは、そんな女子生徒たちの言葉にかき消された——

笑顔で固まっている箒に対しては助けを呼ぶような表情を向けている一夏。対する箒はというと、そのまま固まっていて動かない。

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ。一夏！」

鈴が一瞬呆氣にとられた表情をしていたが、すぐに表情を変え、一夏に噛み付くように言う。

「わ、私とだってタッグ組めるでしょ！」

一夏に対して、痛みを堪えて起き上がろうとしている鈴であるが、何とか生徒たちの間から抜けてきた真耶によって肩を抑えられてベッドに戻された。

「駄目ですよ、鳳さん。たいした怪我じゃなかったからといって、無理は駄目ですよ」

真耶の言葉に流石に反論できない鈴。しぶしぶベッドに横になる――

箒はただ黙って固まっていた。目の前にいる一夏に手を伸ばしているが、近くて遠い。どうしてという困惑する。その表情は一体一夏が何を言ったのかと戸惑っているものだ。

――ありえない、こんなのありえない！

箒は今起きている現実を受け入れられない状況だった。そして、次に思ったこと。それは一夏にまた置いていかれるという、とてつもない恐怖と孤独感であった。

箒には既に冷静な考えをすることができない状態に陥っていた。初めは6年ぶりに再会できたことが嬉しかった。しかし、それからセシリアに始まり、鈴、今はいないシャルルといった専用機持ちや実力のある者たちとドンドン親密になっていった。

飛鳥のことは、どうかは分からないが、一応話をしている限りは以前のような深すぎる溝は少し埋まったのかもしれないと思う。

箒は一夏に対して、もしかしたら自分をタッグに選ばなかったのはそういうことなのかと。つまり、自分には飛鳥たちのような専用機も、実力がないからなのかと。一夏はそんな力有り無しで人を選ぶ人間ではないと、幼馴染のカンがそう告げているが、別の自分が囁く――

“力無きものは認められず、何れ捨てられる”

“圧倒的な力こそ、人を惹きつける”

“力無きものは何ものをも守れず、失う”

——嫌だ、嫌だ、嫌だ！

箒は必死に否定する。一夏に捨てられ、また一人になるのが嫌だ。せっかく
手にしたい場所を彼女たちに奪われるのが嫌だ。

しかし、彼女を取り巻く現実というのはあまりに非情だ。現に一夏の周りには
彼女が羨むほどの実力と専用機を持った者たちがいる。そして、そんな一夏は
箒に見向きもしていない。

——おのれ、一夏に群がるとは、このハイエナどもめ！

箒はそんな一夏と一夏に群がっている女子生徒たちに対して憎しみをぶつけ
るような視線を向けていた——

5

「ところで——」

場のこの状況を何とかするため、飛鳥が口を開く。制服は女子たちに引っ張られ、かなり乱れている。ボタンが引きちぎられているためか、これは修繕しなければいけない。

「二人のISはどうなってるんだ、じゃなくて、ですか？」

飛鳥が視界に入った真耶に対して尋ねる。突然尋ねられた真耶は一瞬驚いた様子を見せたが、すぐに眼鏡を直し、落ち着く。彼女の手

に持たれている用紙からして、あれは二人のIS——ブルーディ
アーズと甲龍の検査結果が載っているだろう。

飛鳥はすでに知っているが、他の生徒はもちろん、持ち主である二人も知らない。非常に言いずらそうにしている真耶。セシリアと鈴は不安そうな表情を隠せないでいる。当然だ。あそこまで酷く破損させられたのだから。あの時目視だけでもこれはまずいと思えた。

「お二人のISの状態をさっき確認しましたけど、ダメージレベルがCを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

「うっ！ や、やっぱり？ ぐう！ わ、分かりました！」

「彼女に対してリベンジできないのは残念ですが。専用機がそのような状態では致し方ありませんわね。不本意ですが……、非常に、非常に不本意ですが！ トーナメント参加は辞退しますわ……」

二人は非常に悔しそうにしている。当然だ、やられっぱなしで終われるほど、候補生のプライドというのは小さくない。とはいえ、機体が無ければどうすることもできず、ましてや量産機の訓練機を借りて出場するのは国に対して全く利益が無い。むしろ逆効果である。

とはいえ、一夏は意味を理解出来ていないみたいだ。

「あのなあ一夏、それはIS基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三のことだ」

飛鳥が一夏に対して言う。、佇まいを直す飛鳥が続けるようにして説明する。

「『ISは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼働も含まれ、ISのダメージがレベルCを超えた状態で起動させると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、それらは逆に平常時での稼働に悪影響を及ぼすことがある』。基本的なことなんだからもう思い出しただろ」

そういえばそんなものがあつたとかすかに思い出したというような表情の一夏。あやふやであるようなので、後で勉強し直すだろうと、それは個人の責任だと後は無視した。

とりあえず、タッグトーナメントになったことで、以前のような未確認がきたときには複数人でなんとか時間稼ぎぐらいはできるなどの対応の幅がでる。しかし、飛鳥はむしろ危機感を感じていた。

——一般生徒に危険が無ければいいけどな……。

彼女の狙いは一に一夏、二に候補生だろう。その中には篠ノ之箒も含まれている。彼女からすれば寝耳に水だろうが、はっきり言って彼女が一夏と並んで一番危険だろう。

——何せ、憎き敵アイツの妹だからな……。

箒に言えば彼女とは関係ないなど言うかも知れない。否、言うだろう。しかし、すでに以前であるが三学年の上級生に対してそれを書いてしまっている。

彼女にとっては一夏を取られないために使った手段だったのかもしれない。何も考えず、ただそう言っただけ。自分は関係ない、彼女

のことなど知らない。などと言ったとしても、世界はそれを認めない。

それはラウラの国であるドイツもまた然り。それは彼女が篠ノ之束の居場所を知っているかもしれないと思われているから。彼女の意志は関係ない、ただ彼らは篠ノ之束がどこにいて、今何をしているのか、その彼女の頭脳と技術だけを求めている。そこに彼女の意志はなく、拒否権も無い。無論、筭にも。

そう、彼女は――人質なのだ。悪く言うと餌。

そのために飛鳥は危機感を抱いている。もし筭が他の一般生徒と組んだらどうなるか。彼女の関係者だと、一方的な考えで攻撃してくるかもしれない。そうやってしまえば罪のない人が傷つく。

だが、どうする。彼女はきっと飛鳥とは組もうとしない。飛鳥もどうしてもその気が起きない。

関係ない生徒を傷つけるわけにはいかないという思いと敬遠してしまふ篠ノ之の姓――飛鳥はその狭間に板ばさみにされていた。

6

すると、一夏に視線を向けていた彼女たちが飛鳥に一斉に振り向く。ああ、やっぱり来たかという、一種の諦観だ。

「紅月くん！」

「私と！」

「違うよ、私と！」

「「タッグを組んでください！」」

何十人という女子生徒たちから申込用紙を突きつけられた。その言葉と共に。

どうするべきだろうか。この中から誰かを選ぶことなど飛鳥には到底できることではない。中には知っている女子生徒もいるが、大半が知らない顔ばかり。それに一般人の彼女たちを巻き込むわけにはいかない。既に飛鳥もまた、彼女のターゲットの一人となっていたのだから。

守りきれないなどという考えは無い。しかし、勝負には絶対は無い。巻き込みたくない、だが、この状況を抜け出すための切り札が飛鳥の手にはないのだ。おそらくこの場にいるものに助けを求めたとして意味はないだろう。

——どうする、どうするんだよ、俺！

いくら考えても答えは見つからない。彼女たちからはただ期待の視線をぶつけられるだけだ。そんな風に、追い詰められつつあった飛鳥の元に、まさに救いの手が差し伸べられる。

突然ポケットに入っていた携帯がメール受信の音楽を鳴らす。まるで逃げるようにそれを確認する。その送り主は——

「か、簪……？」

何故彼女がというのが飛鳥の率直な感想だ。この時間帯、いつもだったら整備室に入り浸っているはず。そんな彼女がメールを送ってくるだなんて珍しいこともあったものだ。

書かれているのは至極簡潔な文章――

“いつもの所に来て”

もつと何か絵文字などを使わないのだろうか、彼女の使用人のテクテカしたメールを見るたびに目を瞑ってしまうことがある飛鳥はふとそう思った。

しかし、一体難なのだろうか、彼女の意図が読めない。すると一分も立たない内にまたメールが来た。もちろん送り主は――

「これまた簪……」

今度は何だろうか、もしかしたら催促のものかもしれないと思いい、メールを開く。

「は……？」

飛鳥はそれを見て固まってしまった。

“ヤッホー♪ アーちゃん、さっきのメールは見てくれたかな？
来てって言ったんだから早く来てくれないと私寂しいよ。いつも
の所は分かるよね。絶対来ないと怒っちゃうんだぞ、プン
プン！”

――な、何やってんだ――本音の奴。

文面からして使用人である布仏本音であろう。簪がこのような文章を書くとは思えない。そういうことを知らないものであったら驚いただろうが、それを知っている飛鳥は別段驚かない。

——どうせからかってきただけだろうな。ハア、助け舟が来たと
思っただけど……。

助け綱を握ったらそれが蛇だったなどというようなものだ。して
やられたと飛鳥は思わず手で顔を覆う。

すると突然今度は電話が鳴り響く。最初のメールから既に五分が
経過していた。今度は一体誰だろうか。このIS学園で一々メール
や電話を使うとしたら、遠くにいる家族や友人との連絡ぐらいだろ
う。飛鳥にとってはそんな存在は既にないのであるが。

「はい、もしもし？」

『飛鳥……』

「ん？ 簪か？」

少し怒気が含まれているのは製作が難航しているためであろうか。
そんな風雨に思っていると彼女のほうから話を振ってきた。

『メール、見た？』

「ああ、何かあったのかと思ったんだけど、次に来た本音のメール
でからかってるのかと思った」

『やっぱり……』

『わー、かんちゃーん！ ごめんごめーん』

「……」

向こうのほうで本音の謝る声が聞こえる。おそらく簪に何かを言
われたのだろう。やはり彼女に黙って送ってきたらしい。一体彼女
が何を考えているのか分からない。そんな風に考える飛鳥の口から
思わずため息が出た。

「それで？ 一体なんだったんだよ。何か用があったのか？ 無いなら切るぞ。こっちはこっちで今ヤバイんだ」

『ヤバイ？』

どういふことと声を低くして聞いてくる。特に隠す理由もないために、飛鳥は素直に答える。

「えっと、クラスメイトも含めた大人数の女子生徒にタッグを組んで欲しいって言われてるんだよ」

『へえ……』

なにやら声色が重くなったようなのを感じ取った。特に気にしていない。飛鳥の考えには、彼女のISの製作が大きく関わっているのだろうということしかなかったからだ。

『わー！ かんちゃーん、壊れるー、壊れるー！』

「っ！？ 一体何してるんだよ！」

『気、気にしないで！』

「なっ！？ ちょ、それは無いだろ……」

『何でもないから！』

語気の強い声が奥から聞こえてきた。思わず電話を耳から話してしまう。一体自分が何をしたのだろうか。何もしていないのに怒られるのは勘弁して欲しいと少し理不尽さを感じている。

向こうのほうではドタンボタンという何やらじゃれ合うのには大きすぎる音がたっているし、他の生徒たちが止めようとしている音が聞こえる。一体彼女に何が起きたのだろうかと心配になってきた。

ようやく落ち着いたようで、電話越しにその音が聞こえなくなつた。すると向こうから何故か本音が電話に出た。暴れていたのはもしかすると携帯の取り合いをしていたのかもしれない。

『アーちゃん、アーちゃん、聞こえてる〜?』

「ああ、聞こえてる、聞こえてる。十分すぎるよ」

このときに言うような言葉じゃないだろうと、思わず髪をかき上げる。いつもの彼女らしいと言えはそうなのだが。

とりあえず何かあるのかと尋ねる。いい加減目の前にいる彼女たちに対して何かを言わないと不審がられる。待ってくれる時間なんぞ、僅かしかないのだから。

『えっとね〜、早く整備室に来てほしんだけど〜?』

「何で疑問形になるんだよ。それに、行って何があるんだ? こっちとしては今本当にマズイ状態なんだよ」

この状態を何とかしたい。彼女の言うように、整備室に行くことを口実にしようかと考える。

『来ないの〜?』

「急ぎなのか?」

そう尋ねる。自分でもそう言ってからとっと行けばいいのにと考えた。しかし、そう言って少し間を開けなければ聞き逃していただろう。飛鳥にとっては黒歴史である——それ。

『写真ばら撒くぞ〜』

「っ! ちょっ、おまつ! 脅迫かよ!」

それ以前にどうしてそれがまだあるのかというか、何故それができるのかというのが飛鳥の疑問だった。なぜならその写真のネガは飛鳥が持っているからだ。見つからないように隠している。

なら何故それが可能なのか。もしかしたらハツタリかもしれない。しかし、一度信じ込んでしまえばそれからなかなか脱却できないのが人間。いわばそれは一種の妄信と同じなのではないか。飛鳥もそれと同様に、内心激しく焦っていた。

——まずい！

そう思った瞬間には足が動いていた。目の前のいる女子生徒たちに対して、タッグは組めないということを伝え、謝罪する。背中の方から聞こえる悲鳴のような声をバックに飛鳥は保健室を飛び出していくのだった——

PHASE 40 Wish（望み）（後書き）

ED3↓RIVER＞石井竜也＜

如何でしたでしょうか？ ご感想をいただけると嬉しいです。

次回予告／BGM『明日への橋』／

始まりの鐘が鳴る

衝撃と共に立つ、嘗て共に戦った機体

例え不完全だとしても、共に立ちたいという気持ちは変わらない

鋼鉄の鎧を身に纏い

いざ、戦いの間へ

次回 Infinite・Stratos（怒れる瞳） PHAS
E41 Partner（相棒）

絆を深めるは想いと信頼か――

PHASE 4 1 Partner（相棒）（前書き）

いつもご感想どうもありがとうございます。

いよいよ学年別トーナメントが始まります。戦闘シーンは次話になってしまいましたが、こちらもお楽しみいただければ嬉しいです。

それでは本編始まります。

始まりの鐘が鳴る

衝撃と共に立つ、嘗て共に戦った機体

例え不完全だとしても、共に立ちたいという気持ちは変わらない

鋼鉄の鎧を身に纏い

いざ、戦いの間へ

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳く

PHASE 4 1 Partner（相棒）

1

あの事件からあつという間に時間が経って六月もいよいよ最終週に入り、IS学園は月曜から学年別トーナメントの色で彩られていた。

それは学校内の慌しさというものを見れば容易に分かるものだ。入学して数ヶ月の一年生にとっては初めてであり、それがとても驚くことであつただろうが、二年生以上の生徒たちについても今年は例年以上に慌しいらしい。

トーナメントの第一回戦が始まる直前まで、全校生徒たちが雑務や会場の整理、来賓の誘導などを執り行っている。生徒たちにはこれから試合が待っているということもあり、二重のプレッシャーを感じるようになっていた。

ようやく解放された生徒たちはこれから今度はISスーツに着替える必要があるということで更衣室へと向かうことになる。もちろん飛鳥、一夏はアリーナにもはや彼ら専用となっている更衣室を陣取って着替えをしていた。

とはいえ全校生徒が使用するのだ、他の更衣室は今頃女子生徒たちを自分たちの何倍もの人数を収容しているのだろう。頑張れ更衣室としか言えない。

そんな飛鳥たちは出番が来るまでは更衣室で待つことになっていた。もちろん試合が始まるとなればピット近くにて準備はするが。

「しかし、凄いなこりゃ……」

更衣室のモニターから観客席の様子を見ていた一夏が呟いた。モニターに映し出されているのは特別席に誘導され、座っている者たち。そこには各国政府関係者、研究員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた。この学年別トーナメントがどれだけの価値を有しているかが窺い知れた。

どの者たちの目にも鋭い光があった。それは自国の生徒たちの成長の成果、機体の性能の高さの確認。他国の技術の進歩具合とその機体を操る生徒の実力。腕のいい生徒たちをスカウトしたいという思惑もあるだろう。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認をするために来てるんだろ。実際に見て盗めるものは盗む、得られるものは得ておこうっていう算段もあるんだろうな」

それと一緒に見ていた飛鳥が呟く。しかし、飛鳥が一点だけを見つめているのを一夏と途中からここにやってきた箒は分かった。その先にいるのはフランスとドイツの関係者。その一人、デュノア社に変わって視察に来ている男、名を確か——ムルタ・アズラエル。

彼が一体何ものなのか。フランスの問題で色々と疑念が募っていたために、いきなり現れた彼には注意を向けている飛鳥。これもまた更識、布仏との訓練の賜物なのだろうか。

「でも、一年には関係ないだろ？」

などと隣に立つ一夏が呟く。飛鳥はそれを聞いて少し呆れた様子でため息をつく。

「だとしても、トーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入るだろうな」

「ふーん、ご苦労なことだ」

飛鳥の耳に聞こえてきたのは、そんな一夏は興味がなさそうに返事をする声であった。

「一夏はボーデヴィツヒとの対戦だけが気になるみたいだな」
「まあ、な」

数日前に知らされたことであるが、セシリアと鈴の機体はラウラのよってダメージレベルCを超えるにまで大破させられていた。修理するにもそれぞれの必要機材が届かなければ意味がないために、出場の許可が下りなかったのだ。

「あいつら、辛いだろうな。せつかくの自分の力を試せないんだから……」

そう呟く一夏の左手は怒りでなのか震えるように握り締められていた。それを見た箒は心配そうな目で一夏を見つめる。優しすぎる一夏の性格上、あんなことをしたラウラのことを許せなかったのだ。彼女が教官と呼び尊敬している自身の姉である千冬。彼女から教導されたのなら、どうしてそんな風に力を振るうのか。千冬の見せていた力と、彼女を尊敬しているラウラの見せている力というのは真逆であるように一夏には見えていた。

「一夏……、一夏の気持ちも分からないわけじゃない？　だが、あんまり感情的になるな。奴は、おそらく一年の中では現時点で最強だからな」

そう言いながら箒は恥ずかしそうにその自身の手を一夏の握り締め
ている拳を包み込むようにして手を置く。その優しさが一夏にとっ
ては嬉しくもあり、申し訳なくもあった。

そんな風になっている二人を尻目に、飛鳥はまた別のことを考えてい
た。呆れとこの大会でのこと。

一に横目で見える先に居る一夏。彼は世界で唯一男でありながらIS
を操縦できる存在だ。そんな彼をみすみす見逃すものがあの中にい
るだろうか。いるはずも無い。むしろ今回はそれを目当てにしてい
ているだろう。

人柄は、その個人として、タッグを組んでの実力はいかななものか。
そして、一度は放り出された機体である白式の機体としての性能は
如何なものかと。注目されないわけが無い。何せ世界最強の名を持
つ千冬が姉としているのだから。むしろ彼女の名前も背負っている
ものである。その所を理解しているのだろうか。否、していない
だろう。

もちろん飛鳥やその機体——インパルスモビルスーツのことも見に来ているだ
ろう。ISに対抗しうる存在——MS。既に創造主が亡き者であ
り、その者に賛同した者たちが一体誰だったのかも分からない。唯
一の手懸かりとなるのはインパルスだけだ。更にそれに武装されて
いる武器にも注目がいつている。

“ビーム兵器”

一体父は誰と手を組み、それを開発したのだろうか。それを飛鳥
に知る術はない。幼い時に、一度だけ会ったことのあるあの男性だ

ろうか。ふとそれが正解なのではないかと思ったが、彼以外にもっと賛同者という存在がいたのではないか。

もう一つは、ラウラ・ボーデヴィツヒのことだ。既に彼女についてのターゲットというのは限られている。飛鳥、一夏、そして、箒だ。飛鳥と一夏はラウラにとっては目ざわりという存在、特に一夏の存在が千冬の栄光を汚したものだとして決め付けている。彼女が一番に持ってくるターゲットであろう。そして、最後の箒である。彼女としては国からの指示なのかもしれない。彼女から篠ノ之束の居場所を聞き出す。それが箒の意志がなくても、彼らならやりかねない。社会の裏にある、汚い黒。美しい文字を描く墨のような黒でもなく、星を一層輝かせる黒いキャンパスのような夜空の黒でもない。紛れもなくヘドロのような黒。人々が罪として持っている欲望を色として表した、紛れもない黒。

——考えすぎるのも疲れるな……。

額に手を翳し、一度現実から思考を外す。そろそろ対戦表が発表されるだろう。

そして、現実へと目を向ける。飛鳥の視線の先にあるモニターには今しがた発表になった一年生のトーナメント表が映し出されていた。

「完全に反対側だな……」

「ボーデヴィツヒとは決勝まで当たらない」

そう二人が言うように、一夏たちはまったくの逆のブロックに入ったラウラ。

「えっと、飛鳥は——俺達とは準決勝で当たる組み合わせか。パートナーは——」

二人が視線を移してその名前を探す。そこにあったのは紅月飛鳥と——

“更識簪”

現日本の代表候補生であり、専用機を持つ実力の持ち主である。それを噂程度であれど知っていた一夏。元候補生である真耶をはじめとして現候補生であるセシリア、鈴、そして、元ではあるがシャルロットも打ち破った実力を持つ飛鳥。

二人のコンビネーションが如何なものかは分からない。それでも戦う時は簡単にはいかないだろうというのは明白だ。個々の実力は高いのだから。

「簪……」

しかし、ゆっくりとその彼女の名前を呟く飛鳥を見て、簪は何かを感じていた。飛鳥のその声色に込められたもの。それはただの同じIS学園にいる生徒同士、親友というもので表せないもの。そう……、もっと奥深く、そして、美しくも儚いもの。

背を向ける飛鳥はこの場を後にし、向かうべき所へと足を進める。ドアノブに手をかけたところで、肩越しに二人に対して言う。

「悪いけど、あいつを倒すのは俺だ」

「「っ！」」

その言葉だけで二人は視線を外せなくなった。そこに込められているのは親友に向けるような親しみは無く、ただ倒すべき敵に向けられた敵意そのもの。模擬戦でも向けられたことの無いそれを肌で感じ、何も言えない。

この距離を隔て、彼らは敵となっていた。このトーナメントが終わるまでは、お互いがお互いの目的のために戦う敵。そこに、一寸の情けも躊躇いも無かった。

「だから、ここからは俺にとってお前たちは――」

“ 敵だ ”

そうぴしゃりと告げ、飛鳥はこの場を去った。パートナーの待つ所へ向かうために――

2

更衣室を出て、飛鳥はまっすぐに整備室のほうへと向かっていた。途中途中ISスーツに着替えた各学年の女子生徒たちとすれ違う。彼女たちは試合に近いものだろうと考えた。いよいよ始まるのかと思ひ、その足は少しずつ速まる。

「入るぞ」

中に入り、その中の様子を見渡す。人の姿はあまり見当たらない。多くの生徒は観客席やらピットやらに移動しているのだろう。整備を主に担当する生徒など、ほとんどがピットだ。

当然すぐに彼女たちの姿を目で捕捉する事が出来た。飛鳥の足は

ゆっくりと彼女たちのほうへと向かっていく。向こうの方も飛鳥のことに気づいたようだ。その二人も既にISスーツに着替えている。

「緊張はしてないのか？」

「ちよつとは……」

そう言って簪は視線をそこに立つ機体へと向ける。

“打鉄式式”

彼女が一人でここまで作り上げた専用のISである。外見的には既に完成しているように見えるそれでも、中身のほうがまだだったのだ。稼動データとそれに必要な武装のデータが必要になっていた。そのために現在武器として使えるのは近接武器である対複合装甲用の超振動薙刀——『夢現』だけだった。

「わたしはもうまんたういだよ」

ISスーツすら特注のキツネなのかと、飛鳥は彼女の趣味爆発のそれを見て頬をひくつかせる。とはいえ彼女のその様子を見てみれば緊張はそれほどなさそうだ。飛鳥自身も残っていたそれが、彼女ののほほんとした様子を見て、いつの間になくなっていった。

——ありがとう……。

目の前で簪の機体の調整を進める本音に聞こえないように、小さな声で呟く。全く彼女の力には敵わない。飛鳥では周りを笑顔にすることは難しいが、彼女はそれを意図も簡単にしてしまう。全くもってその力は羨ましいと思う。

「機体の方は大丈夫か？」

「うん、なんとかなりそう。一応、動くから」

「運がよかったよ。一番最後だから、ギリギリまで整備できるからね」

などと言っているが、本音もまたトーナメントに出るので対戦相手と打ち合わせをする必要はないのだろうかと思う。

本音はそれを理解している上でこうしているのか、それとも完全に忘れているのか。

彼女が特に何も言わないのなら大丈夫なのだろう。とはいえ流石に近くなったら声をかけておこうと思った。

出場するにはやはり優勝を狙うだろうし、それなりの成績を残したい。この学園を卒業したからといって、IS関連の職に就けるわけでもないのだ。今から少しでも自らの株を上げておかなければと思うのはおかしいだろうか。

「とりあえず、ギリギリまで調整しちやおうつか」

「うん」

「ええっと、なら俺は何をすれば？」

はつきり言っこの手の整備の知識というのはあってないような飛鳥。そんな風な彼に対して二人は笑顔で言うのだ。

「「黙って見ててね」

「はい……」

どうやらろくでもないことをされては困るという考えがあるらし

い。軽く邪険にされたことに、飛鳥は少し落ち込んだ――

3

時間が経つに連れてトーナメントの方も進んでいるのがモニターに映し出されているトーナメント表が示している。

途中試合があるということでパートナーの生徒に引きずられていった本音。数十分後にはいつものほほんとした表情で戻ってきた。勝敗で言えば勝利だった。もしかすると彼女のその独特の雰囲気というのは武器なのではないかと、試合を見ていて思ってしまった飛鳥と簪の二人。

少しでも安定した戦いをできるようにと調整が進められていく。本来なら無理な動きはさせない方がいい。そのために簪の打鉄式は飛行機能が搭載されていなかった。空中分解されるよりだったら安定した状態で地上戦で戦ってもらいたい。それ以外の戦域では飛鳥がカバーするつもりでいた。

「もうすぐか……」

「そうだね……」

トーナメント表に勝利した生徒たちが赤い線で線が伸びている表示が映し出される。ちらりと見るとそこにはもちろんラウラと一般生徒のペア、一夏と簪のペアも勝利しているのが見てとれた。

前者は圧勝、後者はなかなか苦戦したようだ。前者としてはほとんどがラウラの独相場である。圧倒的な力でねじ伏せるといった戦い方。はっきり言って一般生徒の出番は皆無である。とはいえあまりにも酷い戦い方だ。あれが本当に織斑千冬からの教導を受けたも

のなのかと。

彼女の教師としてのやり方は気に入らないが、教官ならまだましなのではないかと思っていたが、ラウラの戦い方はまさに絶対的強者が力でひれ伏せさせるというものだ。

試合終了後、涙を流す生徒たちの後姿が痛々しく見えた。思わず手を握り締めてしまう。あれで大きな怪我を負わせないというのは彼女の実力の高さと、興味がなからであろうが、それでも許してはおけない。

一夏が筈に言われたように、感情的になりすぎてはいけない。常に頭は冷静に、だ。いつも言われていたことだろうに。いつも忘れてしまうのは未熟な証だ。

「打鉄式、大丈夫なのか？」

「うん。多分、大丈夫」

スツと優しくそれに触れる飛鳥。自分には反応してくれないIS。それが少し寂しくもある。彼女は無事に自分の世界に戻れたのだろうか。そうふとあの時のことを思い出していた。

「無理はしなくていい。せつかくここまで造った式式が壊れたなんてなったら意味ないからな」

「分かってる。それでも、優勝はしたいから」

「簪……」

隣に座り、コンソールを叩き、画面に集中していた簪がこちらに向き、そう言う。あまり笑わない彼女であるが、小さく微笑みながらそう言ってくれた。その決意はやはり、姉の楯無に対抗するためな

のだろうか。そう思うと、少し胸が痛む。

「確かにお姉ちゃんのこともある、でも、それだけじゃない」
「？」

飛鳥が思っていた通り、彼女が出場したのは、優勝候補筆頭である生徒会長、更識楯無——姉に対抗するため。

なら続けようとした言葉は一体なんだろう。もう一つの理由、聞いてみたかったが、口を開きかけたところで突然アナウンスが入る。関係者から、ピットのほうに来るようにということだった。すでに飛鳥たちの一組前までできていたのだ。

「いつの間に」

話し込んでいたらいつの間にかこんなにも時間がたっていた。丁度打鉄式式の調整も終わったようだ。これで飛行行動ができないことや武装の少なさを抜かせば何とかなる。機体の性能だけじゃない、簪の武器としては、候補生に上り詰めるだけの実力もあるのだ。打鉄式式と、彼女の力と、そして、彼女自身を信じている飛鳥。

「ハイ、アーちゃん。おねーちゃんから調整が終わったインパルス
を預かったよ」

「悪いな、ありがとう」
「いいよ」

そう言って羽織っていた制服のポケットから取り出した紅いブレスレット。以前から変わらぬ待機状態の機体——インパルス。

それをお互いに笑みを浮かべつつ、飛鳥は受け取る。緊張は無い。

目の前にいる本音のいつもの笑顔を見れば、それが自然と消えていく。胸の仲で感謝を告げる。

「よし、行くぞ。簪」

「うん」

立ち上がる二人。やや薄暗い整備室にある光でその中で一際二人の待機状態の二機が輝いて見えた。その光が表すのは一体何なのか――

4

ピットに辿り着くとすぐに身体チェックやら機体チェックが行われる。不具合が無いかの最終チェックである。更にもしもリミッターが外れていたらなどと考えると慎重にならなければいけない。

「はい、オッケーです」

それを担当していた者がそう告げる。戻ってきた待機状態の機体を見て飛鳥は今一度覚悟を決める。簪を、打鉄式を傷つけない。決して失わせはしない。

簪が先に打鉄式を起動させ、ピットに立つ。後ろを振り向き、飛鳥に向けて頷く。飛鳥もそれを見て、頷き返す。それだけでいい。二人にはそれで十分なのだ。伊達に幼馴染をしていない。

「それでは時間です。頑張ってくださいね」

そう言うのはお決まりなのだろう。とはいえ言われて嫌な思いはしない。簪が先に行くということとでピットから飛び出していく。

「先に行くね」

「ああ」

そう言い、簪が先頭にたって飛び出していく。その後姿を見つめながら、飛鳥はそんな頼もしい彼女と組めたことを嬉しく思う。

——来い、インパルス！

飛鳥は自身の愛機を呼び出す。鉄色に染まった全身装甲が飛鳥の身体を包んでいく。システムには異常はない。流石虚だと思った。

カタパルトに脚部を固定させる。その視線の先には明るいアリーナが見える。そこで何が起きるかは分からない。だが、構えているだけでは何も始まらない。自分から必要に応じて虎穴に入らなければいけないだろう。

——何があろうとも、誰が敵であろうとも！

守り抜いてみせる。それがあの時から胸に刻み込んできた、曲げられぬ信念だから。赤いランプが数回の機械音の後に青く染まる。いよいよ飛び立つのだ。向こうからは発進の許可を告げる声がする。

だからこそ、飛鳥はそれを言葉にして宣言する。

「紅月飛鳥、インパルス。行きます！」

自身を崩れぬようにしてくれる支えとするために——

PHASE 4 1 Partner 相棒 (後書き)

ED 3 ↓ R I V E R > 石井竜也 <

如何でしたでしょうか？ ご感想をいただけると嬉しいです。

それではまた次話でお会いしましょう。

次回予告 ↓ B G M 『明日への橋』 ↓

舞台に立つ鋼の戦士と乙女

舞台にて二人が舞う

それが見せるものとは

次回 Infinite・Stratos ↓ 怒れる瞳 ↓ P H A S
E 4 1 Support ↓ 支え ↓

大切な存在を守りきれ、インパルス！

PHASE 42 Support（支え）（前書き）

いつも閲覧とご感想どうもありがとうございます。

それが作者のやる気に繋がりますので、今後ともよろしく願います。

それでは本編スタートします。

OP 3 ↓ 僕たちの行方 ＞ 高橋 瞳 ＜

PHASE 42 Support（支え）

1

飛鳥と簪のペアの初戦は別クラスの一般生徒のペアであった。それぞれが貸し出しをされている打鉄を起動させ、こちらと対面している。

飛鳥はピットから飛び出し、すぐさまシルエットを選び出す。とりあえず初戦ということで様子見からだ。ソードシルエットを選び出し、粒子変換されたそれが飛び出す。センサーが双方から放たれて、まるで磁石がS極とN極で引き合うようにしてドッキングする。

それが完了するとすぐにVPS装甲を展開させる。鉄色であったそれが、まるで命を吹き込まれたかのようにして赤色と白のツートンカラーへと変わる。

観客席から他国のトップや生徒たちからの簡単のため息やら歓声が湧き上がる。空中から簪が待つ地上へと降り立った。

着地を決め、隣に立つ彼女をカメラを通じて見る。緊張の色よりも、この機体でどこまでできるのかという不安のほうが大きそうに見える。

少しでもその不安を和らげたかった。だからだろうか、・チャンネル個人間秘匿通信にて簪に話しかける。

「大丈夫……」

『え?』

モニターに映る飛鳥から言われた言葉を聞き、思わずそう呟く。

「簪は、俺が守るから、だから……」

『う、うん』

その後の言葉が続かない。だが、それ以上は必要はない。傍に支えがいてくれる。飛鳥にとっては簪が、簪にとっては飛鳥が。インパルスにとっては打鉄式式が、打鉄式式にとってはインパルスがいる。

何も恐れることはない。ただ進むだけだ。

相手の女子生徒たちの打鉄は共に近接距離専門の機体。純国産といえるだろう、武装としては近接ブレード、所謂刀の形をしているものだ。お互いに中遠距離の武装を扱えるのは飛鳥のインパルスが持つビームライフルとビームブーメランだけだ。懐に入られすぎなければ何とかなる構図。

試合開始まで十秒を切る。五秒に差し掛かり、そこからはカウントダウンだ。四、三、二、一——試合開始を告げるブザーが高らかに鳴り響く。

開始と共に二人の生徒は先手必勝と言わんばかりにブレードを構えて前進してくる。それを見て飛鳥は指示を出す。

「散開して、各個撃破！」

『分かった！』

力強い返事が返ってきた。思わず笑みが零れる。しかし、すぐに気

を引き締める。油断は敗北を招き寄せる。二手に散開し、それぞれを相手にする。

飛鳥は背面にあるレーザー対艦刀『エクスカリバー』を両手に構え、連結させる。振り下ろされる刀剣を受け止め、それをかち上げるようにして対艦刀を振り上げた。

衝撃で女子生徒は後方に大きく吹き飛ばされる。相当の衝撃だったのか、思わずその生徒は握っていた刀剣を離してしまった。クルクルと回転し、アリーナの地面に突き刺さる。それに目もくれずに飛鳥はそれを両手で構え、未だに衝撃で体勢を立て直すのに手間取っている彼女に向かって突進する。

気合一閃――

居合い抜きの如く振り抜かれたその輝く刃が、打鉄の装甲を切り裂く。一気にエネルギーを持っていく。集中し直す前に再び弾き飛ばされ、もはや冷静でいられない。

いつもの模擬戦であつたらまだ何とかいけたかもしれない。しかし、これは一発勝負のトーナメント。それだけ思い入れというものが違う。更にここまで激しい戦闘は一年生ではないだろう。二、三年生でもそこまではないかもしれない。

とはいえ、負ける気も、手を抜く気もサラサラ無い。

ちらりと簪が戦っているほうを見る。唯一の武装である近接戦闘用薙刀の『夢現』にて激しく斬り合っているのが見える。どちらが優勢と言え――簪の方だろう。

流石に候補生としての実力は本物である。的確にいなし、隙を突いて連続で畳み掛けていく。彼女が更識の一人として身につけてきた武術のそれをISの操縦にも生かしている。

戦っている女子生徒はもはや完全に押し込まれている。活路を見出せないという表情をしているのが見える。

対してこちらは、複数本ある近接ブレードを再び手に取り、こちらに向かってスラスターを吹かせて接近してくる。

振り下ろされるそれを左腕のシールドで受け止めると、救い上げるようにして後方に投げ飛ばす。

流水の如き動作が流れ、女子生徒はそのまま投げ飛ばされる。地面に叩きつけられ、慌てて立ち上がろうとするも、既に構えられていたビームライフルが放たれ。その手に握られていた刀剣を吹き飛ばす。

それで止まることなく、両腕で握られた連結した対艦刀の切っ先を向け突進する。後退するようにスラスターを吹かせるが、もはや敗走。勝ちはその女子生徒には無かった。

上段から切り下ろされたそれが残されていた打鉄のシールドエネルギーを一気に奪っていく。その瞬間に搭乗者を保護するということで絶対防御が発動し、打鉄のエネルギーがゼロとなる。

——とりあえず、こんなものかな。

入学し、ISに直接触れ、訓練して高々2ヶ月、3ヶ月ちよつと目を見張るような動きをできるとは思えない。それが相手を候補

アンビデクストラス・ハルバード

生級とするならば一般の生徒たちはそこに立っているだけの様なものである。

「簪の方は……」

心配するようにしてハイパーセンサーを使い、簪の方へとカメラを向ける。そこには完全に流れを手にした簪が薙刀『夢現』にて的確に相手の打鉄のダメージを与えていた。フィニッシュまでもう少しだろう。

「簪、援護は？」

『必要的。もう少しで終わる』

「分かった」

プライベート・チャンネルにて言葉を交わす。優勢であるように、彼女には今は援護はいらないらしい。自分の機体、自分の実力、それを支える相棒の存在。それが簪の背中を押している。

がむしやらに振り下ろしてきた刀剣を柄で受け止めると、流すように指定無しに掛かる。力をあらぬ方へと外された女子生徒は前につんのめる形になる。それを夢現にて横一線に薙ぎ払う。

気合一閃――

その斬撃が決まり、相手のシールドエネルギーがゼロとなった。その瞬間勝敗が決した。

『試合終了。勝者――紅月飛鳥、更識簪』

試合時間にして十分も経っていないだろうか。二人の実力を考え

るとそれくらいだろう。そうだとしても、タッグであるのにはつきり言って協力も何もない戦い方であった。

——これじゃあ、いつもの戦いと変わらないな。

一回戦、二回戦あたりならまだいいかもしれないが、上に上がるにつれて、それだけでは対応できなくなるのではないか。とはいえ、一般性と相手には苦戦はしないだろう。だが、候補生レベルとなればそうはいかない。

飛鳥たちが先に当たるかもしれないペア、一夏、箒。そして、おそらく向こうのブロックから決勝に来るであろうペア、ラウラ、一般生徒。彼女たちが相手になると、流石にそう簡単には勝敗は決しない。

そこで重要になるのは相棒との連携だろう。

「お疲れ、簪」

「うん、ありがとう」

ピットから降り、廊下で一息つく二人。歩く廊下の途中で購入したスポーツ飲料を口に運びつつ、もう一本の方を簪に手渡す。両手で包むようにそれを受け取り、小さく礼を言う。

「ありがとう」

「いいよ、大したことじゃないから」

小さく笑みを浮かべる二人。ほとんど人が行きかわないのはそれぞれ試合やら係りの仕事、更には観客席での応援があるからであろう。ゆっくりとした時間を過ごせるのはラッキーだ。

「やっぱりすごいな、簪。流星は候補生だよ」

「え、そうかな？ 飛鳥の方が、すごいと思うけど」

飛鳥の言葉にきよとした簪。自身としてはいつも通りにやったことであり、相手はまだ本格的にISに乗り始めてそれほど日にちが経っていない。実力の差があっても当然なのだ。

運がいいことに、他の候補生レベルの相手と当たるのは、順当に行けば準決勝の所で一夏と筈のペアがもしかすると当たるかもしれないというものだ。それに勝つとおそらく百パーセントでラウラのペアとの戦いだろう。

飛鳥たちはそのまま整備室の中へと入っていく。やはり未完成の状態で、いくら調整やら点検をしているとはいえ、いつ何が起きてもおかしくはない状態である打鉄式式。冷えないようにと、持って来ていた上着を簪にかけながら自身も別の上着を羽織る。

打鉄式式を展開させ、各部を固定させ、簪はモニターに視線や思考を集中させる。コンソールを叩くスピードはいつもよりもスムーズだ。

「それで、大丈夫そうなのか？ どこか悪いところとか出てないか？」

飛鳥がまるで自分の子どものように打鉄式式の様子を聞く。簪が思わず噴出しそうに鳴るのを我慢し、大丈夫だということを告げる。

「大丈夫。今の所は何処も異常はないから」

「そうか、良かった……」

そう言ってほっとした表情を見せる飛鳥。そのモニターに映る複雑な文字列を見ても飛鳥には分からない。それでも簪が大丈夫だというのだ、飛鳥はそれを信じるだけ。

モニターに映る試合が既に二回戦を始めていた。相変わらずラウのペアは彼女一人が圧倒的な強さで相手ペアを蹴散らしていく。ちらりと見えたドイツから来ている関係者の笑みが憎たらしく見えた。

「すごいね、ボーデヴィツヒさん」

「純粋な力は、だろ？ でも、負ける気はない」

「うん、分かってる」

確かの彼女は強い。だが、それだけだ。ISが敵である以上ISのことを知らなければいけない。そういう意味合いもあってか、飛鳥はモンド・グロッソ世界大会の動画などを何度も見たことがある。そこに出場している選手たちは皆、ただそこで力を振るっているわけではなかった。

そこには国を背負う覚悟、何かのために戦う意志、そして、それらを力と変える心の強さと技術が輝いて見えた。憎き敵が作ったものであっても、それを扱う者たちは一人一人が輝いていたのだ。だが、今日の前にいる彼女はどうか。全くそんな風には見えない。

その力はただ相手の叩きのめす力。自身を誇示する力。

そんな彼女の力を見ていて、飛鳥は何故かそれが気になった。彼女のことが許せないからということもある。だが、その力の振るい方が、もしかしたら、自分もそうなっていたかもしれない、そして、

何れそうなるかもしれないということを示していたからだ。

「あっ！」

「ん？ ああ」

なるほどと飛鳥は思った。ラウラたちの試合からしばらくしてからモニターを見ると、そこに映ったのは一夏と箒の試合であった。簪が声を出したのは、彼女の機体にもともと製作に携わっていた技術者たちを一夏の白式を製作するためだということを取られてしまったのだ。おかげで今も完成まで程遠い状態である。彼女の視線が睨みつけるようなものであるのは仕方が無いことだ。一夏にとっては知らないことであるが、大きく関係していることなのだ。

共に近接戦闘型である二人は飛鳥たちが取っていた作戦のように、各個撃破の作戦で試合に臨んでいた。専用機を持っているとはいえ、一夏の実力は一般生徒よりも上であるくらいであろうか。それに剣道の技術を転化させた戦い形である。それは箒も同様である。確かに二人は剣道であれば強いかもしれない。しかし、これはISである。やや苦戦している感も否めない。

それでもなんとか地力で相手ペアを追い詰め、各個撃破を成功させていた。

それからしばらく経つ。

飛鳥と簪は待機状態にしたそれぞれの機体を身につけ、整備室を出る。

「行くか、簪」

「うん」

お互いに背中を預けあう二人。お互いに笑みを浮かべ、再び戦いの場へと向かうべく二人は再びピットの方に足を向けていた――

2

簪の前を歩く赤と白のツートンカラーの防護スーツを着込んでいる飛鳥。彼女が飛鳥とペアを組むことになったのは、何よりも彼女の申し出からであった。本音の策略もあり、飛鳥があの日慌てて整備室にやって来た。

大会は強制的に全員出場である。そのために簪もまた、自身の機体が完成していなくても貸し出される機体で出場することになってしまふ。しかし、彼女はそう積極的に出場する気にはなれなかった。機体も完成していない、そんな自分が何を見てもらえるのだろうか。日本の代表候補生として、その専用機すら持っていないとなれば、国の恥さらしになるのではないかと思った。

周りでは次々と出場するペアが決まっていく。もともと人付き合いが得意ではない簪はそこに取り残されていく。

決めなければいけない。しかし、そう思うほど彼女の足は動いてくれない。表情には表れない焦りが彼女の心に募っていく。

そんな時、ふととある言葉を聞いた。

『ねえねえ、もうペア決めた？』

『ん？ まだだよ』

いつも聞いている会話。しかし、この時ばかりは違っていた。

『何でも優勝すると、紅月くんか織斑くんと付き合えるんだって！』
『え！？ それって、本当！』

それを聞いて何故か動かしていた指がまるで魔法にかけられたように動かなくなった。思考も固まってしまったかのように、通常稼動しない。ただ向こうの方で喋っている少女たちの声が耳にはいつてくるのを聞いているだけだ。

『うん、学園中で噂になってるんだよ』

何故か焦りが募る。

『優勝か、一番手っ取り早いのもって強い人と組むってのだよね』

『そうだよ。でも、そんな人近くにいるかな？』

『だったらさ、紅月くんか織斑くん誘ってみない？』

『っ！』

今まで感じたことのない恐怖を感じた。それだけは駄目だと。何故かそう思った。それが踏ん切りの突かなかった彼女の背中を押したのは。それを本音に打ち明け、そして、飛鳥のメールで来るように言ったのだ。来たのは最初のメールに気づいてからかなり経っていた。最終兵器として本音が残っていた飛鳥にとっては黒歴史を使用し、強制召還のように呼び出したのだ。

その時の飛鳥は今まで見たことの無いような焦りを浮かべた表情だった。呼んだこちらが申し訳なく思うくらいのものだった。

そして、本音の背中を押されるようにして飛鳥にペアを組んでくれないかと頼み込んだ。もし既に組まれていたらどうしようという

不安もあつた。

しかし、飛鳥はそれを受け入れた。丁度女子生徒たちからそれを一気に申し込まれていたところだったらしい。そういうこともあり、あまり話したこともない人よりは知っている人の方がいい。そういう理由くらいなのかもしれない。だが、飛鳥にとってはそれ以外にも理由がある。

“ラウラ・ボーデヴィツヒ”

専用機が無いからといって彼女が簪を狙わないという理由にはならない。彼女が狙うは唯実力の高い存在。つまり、戦い続けられればどこかで順当に当たることになる。そうなれば簪にも被害が出る。それだけは飛鳥は許すことはできなかった。

飛鳥の瞳は唯目の前にいる簪だけを見ていた。守ってみせる。絶対に。そう決意した想いが炎となり紅玉が輝く。

簪から手渡された彼女の名前が書かれている欄の隣に、飛鳥は名前を記入した。狙うは優勝、唯それだけ。

そう言葉にしなくても、お互いの想いは分かっていた。

その後、飛鳥は本音に何故か脛を蹴られた――

3

いよいよ決勝が近くなってきた。今は準々決勝。これに勝ては次は一夏と筭のペアとの試合になる。その前にこの試合に勝つことを優先しよう、そう思った。

「簪、その……、打鉄式式だけど」

「……、大丈夫。何とかなる」

そう言う簪であるが表情は固い。初戦のころとは打って変わってしまっていた。ここまで来た方がいいが、打鉄式式の不完全さが祟り、徐々に歪みが生じていたのだ。

それは不完全さを庇うようにして戦っていたために負荷がかかっていたということだ。飛鳥もそれをさせまいと一回戦とは違って連携を重視してここまで来たのであるが、それでもカバーしきれなかったようだ。カバーしきれなかったことを悔いる。

「簪、絶対に無理するな。いくらさっきまで本音と調整していたとはいえ、完全じゃないんだから」

「分かってる」

そうだよな、と飛鳥は思った。誰よりも打鉄式式のことを知っているのは彼女なのだ。なら飛鳥がこれ以上心配しても、しつこいと思われるだけだろう。余計な気遣いは相手を不快にさせる。何事もやりすぎは駄目だ。なら飛鳥にできること、それはできるだけカバーし、負担を減らすこと。ただ、それだけだ――

4

準々決勝、試合開始まで五秒。四、三、二、一――開始のブザーが鳴り響く。

「「なっ!?!」」

その行動に飛鳥と簪は驚きを隠せなかった。どちらもラファール・リヴァイヴを起動させ、両手にアサルトカノンを構えている。その二人が飛鳥に向かってそれを嵐のように撃ち込みながら突進してきたのだ。

「っ！ 飛鳥を最初に潰す気！？」

「短絡的なんだよ！」

その銃弾を背面のスラスタを吹かして回避する。ブラストインパルス。フォースほど機動性はなく、その足りない機動性をそのまま火力へと変換させているそのシルエット。それでも打鉄の機動性を上回るのには十分だ。

まるで地面を氷上と見て、アイスダンスの如くその銃弾を回避していく。一対一では絶対に勝てない。そう思った二人が取った作戦が一番厄介である飛鳥を先に沈めるというものだった。

放たれる銃弾が虚空を裂き、地面に着弾して、土埃を舞い上げる。咄嗟に背中を向けずに正面を敵に向けながらも回避行動をとっていた飛鳥。ブラストインパルスの両腰から抜き出したケロベロス高エネルギー長射ビーム砲のトリガーに指をかけ、引く。

二門の砲門から飛び出した赤いビーム。それが迫っていた二人の間を挟るようにして地面を大きく掘る。大爆発と共に、煙幕を張ったかのような土煙が両者を遮断する。

二人の女子生徒はその煙幕の中には埒が明かかないと、共にその土煙の仲から飛び出そうと考える。その時だった。その煙を薙ぎ払う光刃が二人を切り裂く。

「「っ！」」

二人はそれを見て驚きに動きを止めてしまう。突発的なことにまだすぐに対処できないらしい。その光刃が二人の装甲を傷つけ、シールドエネルギーを削る。振り抜かれたそれに吹き飛ばされ、煙の中から弾丸のように飛び出した。

ブラストインパルスの唯一の近接用武装ディファイアントビームジヤベリンだ。それを片手に構え、ビーム刃を出力の調節で伸ばしている。

「簪！」

「分かった！」

簪は力強く答え、握られた夢現にて体勢の崩れた一人に斬り掛かる。突然のことに、武装変更が間に合わないために、アサルトカノンを盾にする。夢現の刃が銃身を真っ二つに切り裂く。それを投げ捨てながらも女子生徒は後退する。そうしながら近接ブレードを手に出現させ、構えた。

「っ！」

反撃といわんばかりに簪に接近し、振り抜いてくる。それを咄嗟に構え、受け止める。衝撃が両者の間で生まれる。鏝迫り合いになり、お互いに必死の形相が伺えた。

「っ！ 今援護を！」

「そんなこと、させるかよ！」
「なっ！」

両手に装備した威力の高いショットガンが簷に向けられていた。一人が足止めをし、一人が一気に畳み掛ける。そういう作戦だった。

だが、それはこちらとて同じこと。飛鳥はすぐに背面にあるミサイルランチャーを展開し、四連装ミサイルランチャーを放つ。真っ直ぐと狙いを付けられた女子生徒に向かって放たれる。

「ちっ！」

舌打ちをしてその女子生徒はその場から離脱する。彼女がいた場所に、ミサイルが次々と着弾し大きな爆発音が響き渡る。

移動しながらこちらに銃弾を放つ。それを持っていたビームジャベリンで焼き斬る。その荒業に会場がどよめく。一瞬の戸惑いを見て、飛鳥はスラストスターを一気に吹かせる。

上段に構えたビームジャベリンを振り下ろした。

それに対して、近接ブレードを展開して受け止める。刃とビーム刃が交わりスパークが起きた。カメラが真っ白に染まる。しかし、それが示す熱源反応は変わらずそこにあるのが分かる。

飛鳥はそれを頼りに目の前の相手の腹部を蹴る。確かに蹴り飛ばした感触と共に女性特有の悲鳴が聞こえた。

「きゃあああ！」

吹き飛ばされた女子生徒は背中から地面に倒れる。煙がゆっくりと晴れてきた。その先にいたのは全砲門に向けたブラストインパルスであった。VPS装甲などの他のエネルギーを火力に全て渡して

いた。数値にすれば、攻撃・防御が9…1という偏った状態であろう。この状態で攻撃を受けたらひとたまりも無い。しかし、それが出来るのは心強いパートナーがいるからだ。

もう一人を簪が完全に抑えこんでくれている。一気に畳み掛け、残りの一人を二人で倒そうと思った。

そのために今目前にいる彼女を何とか行動不能にする必要がある。プログラムのターゲットロックの支援システムにて両腕部、脚部をロックする。

ビームライフル、ビーム砲、レール砲が一斉に火を噴いた。それらは寸分狂いなく女子生徒のラファール・リヴァイヴのロックした部分を貫く。それも最大出力。人を殺さない、所謂リミッターがあるその最大出力。一気にシールドエネルギーを奪うのには十分すぎるくらいの火力であった。

爆発とともに体を襲う衝撃に悲鳴を上げる女子生徒。エネルギーが無くなり、地面に転がるISを解除された女子生徒。彼女を一瞥し、飛鳥はすぐにインパルス向きを斬り合っている簪たちの方へと向ける。

「簪はっと………」

飛鳥の視線の先では今まさに激しい戦闘を繰り広げている簪の姿が映った。状況は——やや厳しい。

いくら候補生の腕を持っているとしても、ここまで勝ち上がる相手も一般生徒の中では実力を持つ方。武装の種類においても、距離を開けられると、簪は回避行動と防御を取らざるを得ない。無理に突

っ込むことは、自殺行為なのだ。

「簪！」

『っ！ 大丈夫！』

飛鳥が簪に声をかける。帰ってきたその言葉が、一体何を意味しているのかは分からない。だが、不安は尽きない。今の情勢では、何れ先に倒れるのは簪だ。それよりも先に、機体のほうがバラバラになる可能性だってある。

飛鳥はビームジャベリンを連結させ、二人の元へと向かう。

「っ！ やられたの！？」

「こいつ！」

上段から振り下ろされた光刃が唸りを上げる。咄嗟に回避するも、地面を抉った衝撃が襲い掛かり、予想していた以上に後方に吹き飛ばされる。

マシンガンを取り出した女子生徒が来るなどいわんばかりに弾幕を張る。その方が早いか回避行動に移れない。飛鳥は咄嗟に連結しているそれを回転させ、次々と襲い掛かってきた弾幕を円を描いて払い落としていく。

まるで職人芸。マシンガンの銃弾が切れる時には、飛鳥と簪の足元には打ち落とされた銃弾がまるで敷かれた絨毯のように見えた。

たじろぐのを見た。簪が飛び出す。今の機体ギリギリのトップスピードで。それを見て相手も新たな武装を展開する。だが、それが粒子から実態になった瞬間——消えた。

突然自分の手元で爆発が起きたことに、何が起きたのか、理解が追いついていない女子生徒。バラバラと武装が碎け散っているのが舞っている。

その向こうには、右手にビームライフルを構えたブラストインパルス——飛鳥の姿があった。

簪が飛び出したと同時に援護に回っていた飛鳥。その手に握られたビームライフルから次々と撃ち込まれるビームが権勢を一気にこちらに引きこんでいく。その流れに乗るようにして、簪が夢現を振るう。

まるで舞うように、そして、その後ろを色鮮やかに赤、黄、緑の軌跡が駆ける。しかし、どの攻撃も簪に当たることも、掠ることもない。まるでお互いにどこからどう攻撃して、どう動くのかが分かっているようである。

——分かる、簪がどう動くのかが。

幼き頃に経験した阿吽の訓練。誰ともすぐに連携を取れるよう、お互いのことを良く知る。最初は踏んだり蹴ったりとお粗末であったが、繰り返し返される内に形となっていた。

まさか、それがここに来て、ISの戦いに生かされるとは思わなかった。飛鳥同様に、簪もそれを感じ取っていた。

——分かる、飛鳥がどう動こうとしているのかが。

まるで背中に目があるような言い方。確かにハイパーセンサーにて、

後ろは見えているのであるが、それでも相手が何をどうしようとしているのかまでは分からない。思考は分からない。

しかし、無意識ではあるが、こうしてくるだろうということは分かった。だからコンマ一秒前にそう移動し、援護を貰う。そして、相手が怯んだところを嵐の如く薙刀を振るうのだ。

「くっ！」

「そこっ！」

切り下ろし、薙ぎ払い、突き離す。まるで流水の如き流れる動きが観客を魅了する。代表候補生だからではない、更識簪の力、舞に魅了されていた。

———そこだ！

飛鳥がビームライフルを連射する。次々と動きを止めていた女子生徒に着弾して息、エネルギーが一気に奪っていく。

「簪！」

「うん！」

「一気に畳み掛ける！」

飛鳥は連結させたビームジャベリンを、簪は夢現を構え、共に並びながら加速する。歪みのない、まさに共に戦うパートナーとして。

同時に獲物を振り上げる。その対象である女子生徒が咄嗟に近接ブレードを出す。ぶつかり合う刃と刃。激しい閃光が双方の間で暴れる。

ビームジャベリンの出力を上げる。熱量が上がり、純粋な金属であるそれが溶け始める。徐々に食い込んでいくそれはまるで敗北へのカウントダウン。

そして、とうとう飛鳥の振り下ろしていたビームジャベリンがそれを焼き斬った。ビーム刃が突き立てられると同時に、簪が振り下ろしていた夢現の刃も同時に突き立てられた。

シールドエネルギーが操縦者を衛ために発動した絶対防御が起動したために削られ、そして、ゼロになる。

『試合終了。勝者——紅月飛鳥。更識簪』

アナウンスの言葉が響き、歓声がアリーナを包み込んだ——

PHASE 4 2 Support（支え）（後書き）

ED3↓RIVER＞石井竜也＜

如何でしたでしょうか？ ご感想をいただけると嬉しいです。

今後ともよろしく願います。

次回予告 PHASE 4 2 Fantasy（夢幻）

PHASE 43 Fantasy 夢幻 (前書き)

いつも閲覧とご感想どうもありがとうございます。

それでは本編スタートします。

OP3↓僕たちの行方＞高橋瞳＜

PHASE 43 Fantasy 夢幻

1

準々決勝が終わり、ピットから降りる。周りから拍手で出迎えられた時、飛鳥は嫌な思いはしなかった。むしろ、どこかそばゆい感覚だ。

簪の表情もいつもよりも柔らかく、顔にこそほとんど出ていないが嬉しそうだ。やはり勝って嬉しくないというわけではない。勝っても気持ちがいいと感じられないものは確かにあるが……。

二人は上着を羽織、整備室へと向かう。少し簪の歩くスピードが早いのはどうしてだろうか。飛鳥は少し、疑問を感じていた。

「二人とも、おつかれ」

既に制服姿に戻っていた本音が両手を上げて飛鳥と簪の二人を出迎えてくれた。すぐに簪から打鉄式式を受け取ると調整に入る。

「すぐに調整するから」

「ゴメンね、本音」

「疲れてるところ、悪いな」

「別にいいよ、もうまんたうい」

その笑顔が浮かぶ顔には、疲れなど一点も無かった。それでも、感謝と申し訳なさが二人の胸にあった。

「それじゃあ、ちょっとそこらへん歩いてるよ。じっとしてられな

いから」

「分かった」

「それじゃあ、時間近くなったらまた来る」

「りょくかい」

だぼだぼの袖を見せながら、敬礼をする本音。そんな彼女のかわいらしい動作を見て小さく笑みを零し、整備室を後にした。

2

扉が閉まり、飛鳥の周りには誰もいなくなった。小さくため息をつき、一歩足を踏み出した。

すると突然、どこからか人の気配を感じた。悪意のあるそれではなく、こちらを見ている、ただそれだけのもの。

一体何なのだと思いつつ、大体のその相手を予想しながら歩を進める。その気配は歩いている間も近づきつつ遠のいている。まるでこちらから話しかけるのを待っているようだ。

——気配の数は一つ。でも、二人いるっていうのは分かる。

一人は完全に気配を消している。だが、もう一人は駄々漏れである。その気配の流れがもう一人が隣に居ることを示していた。

大きな音が三回。冷たい飲み物を購入する。取り出し口からその三本の内日本を取り出し、後ろに向かって放り投げる。

「ほっ」

「きゃっ！ つめたっ！」

一人はキャッチし、一人は額にぶつけたらしい。振り返らずともその声でどういう状態なのか、そして、その声の主が分かる。

「何やってんだよ——」

乾いた蓋を開ける音が聞こえる。

「楯無に薫子」

そこには手に取ったジュースに口を付ける更識楯無と、額にそれをぶつけて赤くなったところをさすっている黛薫子の姿があった。

やはりというのか、飛鳥はそんな二人をジト目で見る。その視線を受けた二人は苦笑いを浮かべる。当然こうなることを予期していたようだ。

「良く分かったね、アツくん。それと、ジュースありがとう」

「うーっ。痛い」

「はぁ、それで？」

一体何のようなのだと飛鳥が尋ねる。すると回復した薫子が、どこからともなくペンと紙を取り出しインタビューの状態を取る。

「いやー、飛鳥くん。ベスト4、本当におめでとう」

「あー、まぁ。なんだ？ どうも」

何と言えいいのか分からず、とりあえずはお礼を返す。それにしても近い。二人はおそらく準決勝を待っているためかISスーツを着ている。ボディーラインが丸分かりであるそれ。年頃の男子で

ある飛鳥にとって、それは刺激的すぎる。

「・・・・・・・・」

顔が熱くなる。それを悟られたくなく、顔を横に背ける。怪訝そうな表情で見ていた薫子も、その理由に気づいたのかにやりと笑う。

それは楯無も同じく。とはいえ、空気を読めないほど、二人はおろかではない。顔に出すだけで、後々のネタにでもしてやろうかと思うくらいだ。

「本当はベスト4に残ったの感想を聞きたかったんだけどね」

映るモニターを見ると、彼女たちの試合が近いことを示していた。すると突然、シャッター音が飛鳥の耳に入ってきた。

どこから取り出したのか分からないが、薫子が飛鳥の表情をカメラに収めていたのだ。

「そろそろ試合だし。そうはしてられないから、写真だけ貰っておくね」

「はぁ、変なのに使うなよな・・・・・・・・」

綺麗な笑みを浮かべる薫子であるが、それをどんなものに利用するかは全く想像がつかない。新聞部の彼女が捏造などはしないだろうとは思いたい・・・・・・・・

「写真は貰ったし、ぜひとも優勝したときのインタビューが欲しいね」

「まぁ、頑張るさ。もちろん」

「そうそう、その意気。たちちゃん、私、先に行ってるね」

「あ、うん。分かったわ」

誇らしげに愛用のカメラを見せつけながら、楯無に一言残してこの場を去る。まるで二人の考えていることを判ってとった行動のようにも見て取れた。そんな彼女に内心感謝しつつ、隣に立ち、飲みかけの缶を持っている楯無を見る。

彼女が今、何を考えているのかはある程度は予想できた。逆も然り、楯無もまた、飛鳥が何を考えているかを、ある程度理解している。

「なあ・・・・・・・・」

「ねえ・・・・・・・・」

同時だった。まるでシンクロするように、そうすると決めていたと思うくらいにぴったりと重なった。

「あ、悪い」

「えっ！？ 別にいいよ。ほら、アツくん、どうしたのかな？ おねーさんに言ってみなよ」

「楯無が、いや、櫛花が先に言えよ」

ここにいるのはただ二人だけ。そういう時だけは、楯無は自身の真名を飛鳥に口にすることを許すしていた。彼女の名前を知っているのは本当に少ない。呼べる者だってそうそういない。

この時間だけの独占。そんな感情が無意識下にあることを、飛鳥は知らない。

「うん、とりあえず、ベスト4は順当って感じね」

「まあ、な。櫛花だって、当然の結果だろ？　もちろん優勝も」
「モチ」

サムズアップ——

その笑みは自信で満ち溢れていた。気の緩みも無く、自身の実力に信頼を置き、パートナーに信頼を置いている。そんな風にその仕事と笑みから読み取れた。

「それと——簪ちゃんのことなんだけど」

やはりか、というのが飛鳥の思いだ。今はやや不仲であっても、彼女たちは姉妹なのだ。姉が妹のことを心配しないはずが無い。そこまで修復不可能というわけではない。ISたちだって、それを望んでいるはずだ。だって、あの時彼女たちは、本来の二人の姿だと、飛鳥は思えたから。

「ああ……」

楯無が心配していること。それは彼女が無理をしていないか、ということだ。飛鳥は深くまでは知らない。しかし、楯無は簪が飛鳥とペアを組むために今日までかなり無理をしていたことを知っていた。

彼女自身の身体のこと、そして、急ピッチで戦える状態にまで持ってきた打鉄式式のこと。

「あの子ちょっと無理しちゃってるから。色々ね……」
「うん、それは、分かってる」

前日の彼女の目にはものすごい隈ができていたのを見た。相当無理をしていたのを知っている。だから、その日は無理やりにでも寝かせた。体調が万全ではない状態では、とてもじゃないが戦わせられない。

「あいつがどうして俺にペアを組んで欲しいって言ったのかは分からない」

「あ、アツくん……」

飛鳥からすれば、どうしてそんな呆れた表情をしているのかと思う。とはいえあまり深くは追求せず、言葉を続ける。

「それでも、あいつは優勝したいって言った。それ以外にも理由はあるだろうけど、何より一緒に組んで欲しいって、その言葉を、無碍にできなかった」

「そっか」

どこか安心したような表情をしている。妹を心配しているのは、姉である櫛花だけでなく、飛鳥や、虚、本音も同じなのだ。そして一緒にペアを組み、支え合っている二人。その戦いも見ていた。まるで息のあった二人の舞は彼女をも魅了していた。

——これは任せて正解かな。

そう確信を持って言えた。飛鳥なら、簪のことを任せてもらえる。お互いに依存するのではなく、支えあうことでいる二人。自分の心配は杞憂だったと思うのだ。

フツと小さく笑みを零すや否や、櫛花はくるりと背を向けてピットの方へと足を向ける。

「安心したよ。最後まで簪ちゃんのこと、よろしくね、アツくん」
「ああ、分かってる！」

サムズアップ——

「よろしい」

笑みを浮かべ、その顔を更識櫛花から更識楯無のそれへと変える。
飛鳥もそれ以上は何も言わない。唯、胸の中では頑張れ、そう言う
だけだ——

3

「準決勝・……、一夏と篠ノ之か」

「そうだね・……」

織斑一夏と篠ノ之箒。その二人は飛鳥たちにとってそれぞれ思う
ものがあつた。

飛鳥にとっては篠ノ之束の妹である箒。箒が彼女と繋がっている
以上、あまりいい印象が持てない。どうしても、篠ノ之の妹という
先入観が強いからだ。それに、クラス対抗戦の時のこともある。彼
女はどうしても後先考えない行動をとる性格。それは飛鳥にもある
ことであるが、彼女の場合は周りが見えなくなる。それに、行動の
理由が自分の都合であるから、尚さらタチが悪かったりする。

簪にとって、一夏は自信の愛機『打鉄式』が未だに、未完成で
ある原因である。彼がそのことを知らないから問い詰めることもで
きないが、無知というのは恐ろしいものだ。

それを力として与えられ、ただ玩具を与えられた子供のように、ゲームの中の新しい武器を得た勇者のようにそれを振るっている。自身の手にした力の裏で、誰かが苦しんでいることを、必死になっていることを彼は知らない。

そういう私情を挟むわけにはいかない。胸のうちに仕舞っておこう。そう思う二人。最初に口を開いたのは――簪だった。

「今は、集中しよう？ 準決勝に」

「あ、ああ」

意外だった。何か言わないといけないと考えている矢先に、彼女が口を開いたからだ。とはいえ、落ち着いている様子を見て、飛鳥も深呼吸をして、もやもやを取り払おうとした。

「確かに色々と思うこともあるけど、今は今」

「それはそれ、か。分かってるさ」

“篠ノ之”

それだけでも怒りが湧いてくる。まるで烙印のようなものだ。飛鳥はそれに、今も苦しめられている。それを分かっている簪だからこそ、真っ先に口を開けたのかもしれない。

「なら作戦は」

「織斑くんを先に倒したほうが良い。彼の機体――白式の単一能力は厄介だから」

「それをうまく利用できれば、なおさらいいか。なら、あれで行くか」

「良いの？ 切り札なのに」

「本命は隠すさ。あれは、決勝であいつに使う」

心配して聞いてきた簪に対して、穏やかな笑みを浮かべながら言う。丁度ISの検査も終わり、二人の元へと戻ってくる専用機。

「時間です、そろそろ会場へ」

係りの教師がそう告げる。二人は返事を返し、ピットへと向かう。それぞれ機体を起動させ、装甲を纏う。鉄色に染まるインパルスがそこにいる。

ゆつくりとカタパルトに脚部を固定させた。今は瞑っている状態かもしれないインパルスの双眼から飛鳥はアリーナを見ている。

———いる。

一夏と箒の二人が、それぞれ白式と打鉄を起動させ、アリーナ中央にいるのが見える。ここまで来たのは彼らの純粋な力だろうか、それとも思いの込められたものだろうか。

だが、飛鳥にはそんなこと、関係ない。

———今やるべきこと。それは！

簪を守り、そして、決勝に行くために勝つ。唯、それだけ。

発進許可の赤いランプが青へと変わる。キッと双眼を青空の下にあるアリーナの方へと向ける。その想いを宣誓するが如く、飛鳥はコールする。

「紅月飛鳥、インパルス。行きます!」

4

『それでは紅月飛鳥、更識簪ペア対織斑一夏、篠ノ之箒ペアの試合を開始します』

おそらく今年の学年別トーナメントにおいて、最も注目されている試合なのではないだろうか。

片や世界において唯一男でISを使える織斑一夏。片やそんな世界に対してMSという未知の兵器を持って喧嘩を売りに来た紅月飛鳥。

その二人がアリーナ中央にて向かい合っている。表情は一方的に飛鳥が見えているというもの。

「あと一つだぜ。悪いが、今回は俺が勝つ」

気合十分にそういうは一夏。そういう言葉を言う理由として、決勝にて既に彼女が待っているからだろう。

“ラウラ・ボーデヴィツヒ”

一夏にとっては姉である知冬と大きな関わりを持つ少女。彼女が姉に対してどんな感情を向けているかは知っている。そして、一夏自身に対して、どんな感情を向けているかも、自覚しているつもりだ。

それは一夏にとっても戒めのようなものだ。あれがあったからこそ、力を求めた。もう姉に迷惑をかけたくないと思った。

そして、その問題は一夏自身の問題でもあり、織斑の問題だ。決勝に行かなければそれをどうすることもできないということは分かっている。だからこそ、目の前にいる二人を倒さなければいけなかった。

試合開始まであと、5，4，3，2――1・・・・・・、そして、0となった。

ブザーが鳴り響く。飛鳥はすばやくフォースシルエットを選び出し、それを粒子から実体へと変換する。センサーが飛び出し、背面とドッキングする。その瞬間、鉄色の装甲が鮮やかなトリコロールへと変わる。もう何度目かの歓声。そして、左腕のABシールドが上下に展開する。

「簪！ 作戦通りに！」

「うん！」

トップスピード。飛鳥が腰にあったライフルを取ると、一夏と箒を散開させるべく連射する。

「ちっ！」

「くっ！」

二人はそれを回避するべく動く。一夏としては零落白夜を使えるが、それではすぐに落とされてしまう。一撃必殺で決める時だけに使おう、そう二人で決めていた。

散開した一夏の目の前に、突然現れたのは夢現を構えた簪だった。振り下ろされる斬撃を雪片式型にて受け止める。一夏とて嘗ては全国優勝をした簪にも勝る剣術を持っていた。その腕は怠けていたために落ちていたが、それでも少しづつそれを取り戻しつつあった。そのため、近接戦ではそうそう負ける気はしていない。

受け止めたそれを、刀身で流し、間合いに踏み込む。

一刀両断――

苦い表情を浮かべ、後方にスラスタを吹かして後退する。だが、その切っ先が装甲に掠り、多少なりともダメージを与える。

そこに向かっていく簪。打鉄の近接ブレードを両手で構え、気合の籠った声を上げてくる。

「一夏、今加勢を――」

「させるか！」

「っ！」

二人が戦闘を繰り返しているところに、援護射撃をしていた飛鳥が簪の接近に気づき、そのルートを遮断すべく、弾幕を張る。とっさの判断で回避したが、動きが止まる。

「紅月っ！」

複雑な心境だ。未だ飛鳥に対して負い目を感じている簪。しかし、今この戦いにおいて、そんな感情を持つてはいけない。そうしたが最後、待っているのは敗北だけだ。

——それだけは、絶対にならん！

箒のこのトーナメントに対する思い入れは強かった。それは優勝すれば一夏と付き合えるという宣言を一夏自身に申し入れていたからだ。それに対して一夏は受け入れるということを言った。

やや無理やり感があつたかもしれない。それでも、鈍感な彼と、所謂恋人になるにはそういうことも必要なのだと思った。

いつの間にか優勝者が付き合えるということになっていたが、話しは簡単だ、箒自身が優勝してしまえばそれで問題はない、そう思っていた。だが、そのためへの関門が、今前に立ちふさがっている。

一夏の加勢に行きたいが、ビームライフルが矢のように打鉄に襲いかかる。一夏の持つ雪片式型とは違って、打鉄の近接ブレードは純粋な金属質。エネルギー武装を無効化させるような性能は持っていない。

そのために着弾するたびダメージが蓄積していく。レーザーよりも威力の高いビーム。打鉄のシールドエネルギーが一気に持つていられる。

「負けるかあああ！」

そう負けれられないのだ。愛するものの隣に立つために。愛するものを奪われないために。それは独占欲——

一夏に対して無数のビームを撃ち込んでいた飛鳥に向かって、刀剣を構えて突進する。それに気づいた飛鳥。C I W Sを撃ち込み、牽制する。

それを、見切る。見切って一気に接近する。一夏と一緒になら、何でもできそうな気がした。箒にとっては、それが確信めいたものでもあった。

「はあああ！」

「ちっ！」

飛鳥は振り下ろされる刀剣に対して、咄嗟に左手に掴んだビームサーベルにて受け止める。激しい閃光がお互いの視界を遮る。

「私は、負けない！」

「それは、こっちのセリフだ！　こんのおおお！」

左切り上げの要領で箒に切りかかる。それを近接ブレードで受け止める。後退してはぶつかり合い、お互いに視線をぶつけ合う。クルクルとアリーナを回りながら二人は交錯し合い、火花を散らせる。

「それでも全国優勝者なのでな」

「それが——」

「嘗められては、困る！」

「どうした！」

気合一闪——

一刀両断——

互いの想いが閃光となって会場を染め上げる。負けられない。それぞれに違った理由が存在する。

突然アラートが鳴る。一体何かとハイパーセンサーで見ると、簀との斬り合いを止め、こちらに向かってくる一夏の姿があった。

『飛鳥！』

「分かってる！」

飛鳥は右手のビームライフルを打ち込む。次々と撃ち込まれるそれに對して、一夏は単一能力である零落白夜を起動させ、無効化しつつ飛び込む。

「簀！」

「っ！ 一夏！」

潜り込まれる。挟み込むようにして、二人がそれぞれ刀剣を振り下ろしてきた。簀の攻撃に対してはビームサーベルで、一夏の攻撃をABシールドで受け止める。押し込まれつつあったが、力任せに振り払い、両者を蹴り飛ばす。

「くそっ！」

そう毒づく一夏に向かってトップスピード、瞬時加速にて距離を縮める。慌てて迎え撃とうと刀剣を構える。

一夏にとってエネルギー武装は危険だが、対処方法が無いわけではない。零落白夜を使用すれば、それは何とかなる。だが、代わりにシールドエネルギーを半端ではない量を消費してしまう。それだけは無駄遣いにはできない。ただでさえ、この試合までも被弾の数は多かったのだから。

「近接戦闘なら負けないぜ！」

自信ありげに宣言し、鏢迫り合いに持ち込む。必死の表情が伺える。一夏もこのトーナメントに入れ込むだけの想いがあるのだ。

一旦離れ、CIWSを撃ち込み、牽制と、接近を許さない程度に距離を保つ。一夏もスラスターを吹かせ、それを回避していく。地面を抉る銃弾が煙を舞い上がらせる。

引き離されつつある一夏。飛び込むこともできるが、それは自殺行為だと分かっていた。

機体性能は互角。だが、乗り手が違う。悔しいが、一夏は自身の実力が全く届いていないことを感じ取っていた。

自信と飛鳥の攻撃の可能範囲がギリギリであることを感じる。一歩でも間違いを犯せば一刀両断される。それだけの危険性は分かっているつもりだった。だが、長引けばはつきり言ってこちらには勝ち目はない。

しかし、向こうとて銃弾の量は無限ではない。そう思った瞬間に、その攻撃が止む。

———今だ！

虎穴にいらずんば虎児を得ず。例えそれが罠だとしても、一撃を入れれば勝てる。一夏は習得していた瞬時加速を使い、一気に間合いに入り込む。

———ここだ！

雪片を振り上げ、切りかかろうとした、その時――

「っ！」

突然片方のマニピュレーターを撃ち抜く緑色の軌跡が走った。一夏は雪片を手放しはしなかったが、片手、左手はもはや使い物にはならない状態だった。一体誰かと視線を向ける。

そこにいたのは、持っているはずの無い、ビームライフルを構え、こちらに銃口を向けている簪であった。

「まさか、使用許可を出していたってのかよ!？」

「サンキュ、簪！」

「うん！ このまま一気に――」

「「畳み掛ける!」」

右腕の手首辺りから射出されたワイヤーブレード。それが一夏のボロボロになった左腕に撒きつく。しまったと表情を見せるが、既に掴まった後、スラスターを吹かせ、全力でそれを振り回す飛鳥。投げ飛ばされた先には夢現を構える簪が見えた。

横に寝かせるようにして薙刀を構える。スウッと息を吸い、集中力を高める。勢いに振り回され、一夏は未だ体勢を立て直すことも、防御体勢を取ることすらままならない。

「セイっ！」

居合一閃――

寸分狂いなく振り切られたその斬撃が一夏の胴部に叩き込まれ、

地上をバウンドさせながら吹き飛ばした。それを見て箒が慌てて簪に飛び掛る。

だが、それは冷静さからの判断ではなく、一夏が吹き飛ばされたことからの一瞬の怒りからだった。

——常に冷静に……。

それは彼女が裏の人間として生まれてから、常に言われてきたこと。以下に実力があるものであると、怒りに任せたそれほど読みやすいものは無い。時折逆の場合もあるが、それは珍しい部類に入ろう。

真っ直ぐ、一直線すぎる箒の動きに対して、寸分狂いなく、右手に構えるビームライフルを撃ち込んでいく。次々と装甲を傷つけていくが、それをお構い無しに近接ブレードを振り下ろしてきた。あまり激しい動きができない打鉄式。これ以上の激しい動きは機体に大きな負荷をかける。

「よくもおおお！」

「っ！」

咄嗟にライフルを盾を翳すかのように両手で構え、その攻撃を受け止める。徐々に輝が入るライフル。その爆発がお互いの距離をとるのに一役買う。とはいえ、簪の打鉄式もまた、ビームライフルの使用でいつも以上にエネルギーの消費が激しい。

隣に立った飛鳥を見る。おそらく次の攻撃で決まると、どこか予言めいた感覚を感じていた——

何故だ、何故だ！　それが篠ノ之箒の胸中。隣に立つ一夏ともども満身創痍。このままでは勝てるわけも無い。

握り締める刀剣が怒りと不安に震える。このままでは一夏と付き合うこともできない。更には誰かに一夏を奪われるかもしれない。

それから来る恐怖とそうはしたくないという独占欲が彼女を更に焦らせ、冷静さを奪っていく。

どうする。もはやろくに思考のできない頭で考える。ただ出てくる答えは目の前の敵を倒すこと。自分の恋路を邪魔する敵を倒すことだった。

飛鳥と簪に向けられる歓声が耳障りに思えてならない。苛立ちが更に蓄積していく。

——どうする。奴らを倒すには……。

限界である自身と一夏に出来ること。それはほとんど残されていない——

どうする、どうする！？　織斑一夏は隣に立つ箒同様に焦っていた。彼女の思いとは別に、このままでは決勝に行き、自身の抱えている問題を解決することができない、と。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。彼女が姉の千冬をまるで神と崇めるよ

うに見ているのは知っている。そして、彼女が神として見ている姉の栄光を汚したのは紛れもなく、一夏自身だと自覚している。

したくてそうしたわけではない。姉も気にするなと言ってくれた。だが、本当はどうだったのだろうか。一夏には分からない。知りたいが、それはそれで怖いのだ。

慌てて頭を振る。今はそういうことを考えているときではない。

「箒、エネルギーの方はどうだ？」

「かなり厳しい。一夏の方は？」

「零落白夜が後一回使えるかどうかだ。見た感じ、飛鳥のパートナーの彼女、かなりエネルギーの方が厳しそうだ」

「なら、紅月の方を潰せば——」

「勝機はまだあるかもしれない」

真正面からの攻撃は不可能。なら、隙を作り出すしかない。二人は頷き合う。目の前にいるそれぞれの道を遮るように立つ者を倒すために——

7

二人の剣撃が飛鳥を襲う。もはや大きな動きはできない簪。割つて入り、反撃するも、致命的な一打にはならない。

——このまま長引くのは……。

何度目かの鏖迫り合いをしながら、一夏はそう毒付く。まるで針でつつくようなダメージが蓄積していく。激しい加速は不可だ。

——どう来る？ 一氣に決めることもできるけど……。

相手だって馬鹿じゃない。直線的な戦いしかできないかもしれないが、それでも一瞬の気の緩みや、攻撃の遅さが全てを決める。

一夏が剣を打ち込んだと思ったら、今度は箒と攻撃パターンは単調だが、そこから流れてくる思いというものは汲み取れた。

何が何でも勝たなければならない。それが二人の強い思い。それがここまで試合を長引かせているのかもしれない。

——お前たちの思いも、分かるけど……。

突然の爆発。それは一夏の背面からだった。突然の衝撃で前につんのめる。一体何が起きたのかわからないと言う表情だ。

ハイパーセンサーに映るはビームサーベルを両手に構える飛鳥の姿。そして、飛鳥が切り裂いたのは片方のウイングスラスターだった。煙を上げる白式のスラスター。

「な、何が……？」

純粹な疑問。会場は突然のことに啞然とした表情から歓声へと変わる。

「き、貴様ああ！」

体勢を崩した一夏を見て、箒は刀剣を構えて突撃する。だが、横から現れた簪が夢現にて斬撃を放ち、箒をそのルートから離れさせる。

「これ以上は……」

「分かった、決める！」

打鉄式もエネルギーが危険域、からゼロへと変わる。飛鳥は今回の作戦にかなりリスクがあったことを反省する。本来ならもう勝負はついていてもおかしくなかった。二人がそれほどにも思いが強かったのだろう。様々なことが頭に浮かび、そして、飛鳥は腹を括る。

いつの間にか、一夏と箒が挟み撃ちのようにして佇んでいるのが見えた。

一体どれくらいの時間が経っただろうか。十秒か、二十秒か。はたまたそれ以上か。

お互いに動かない。誰も固唾を飲んでそれを見ていた。そして、その沈黙は破られた。

「「はあああああ！」」

刀剣を構える二人。一夏に関してはその機体が白から金色に変わる。つまりは最後の零落白夜。

迫る二人の機体。勝負は一瞬。集中力を限界まで高める。限界に達した集中力が齎すそれ。ハイパーセンサーとの併用にて成せる業。

勝利に手を伸ばすが如く、二人はその刀身を振り下ろす。飛鳥が何もしてこないことに訝しげな表情を一瞬見せるが、それでも迷いのない、澄んだ剣撃を打ち込んだ。

それが確かに飛鳥に、フォースインパルスに打ち込まれた――

だが、何故か二人は咄然とした表情を崩せなかった。そして、見た。自分たちのシールドエネルギーが既にゼロとなっていることを。更に、目の前で変化が見えた。自分たちの剣が、飛鳥を、フォースインパルスを三枚に切り裂いていることを。お互いの刀剣が、それぞれの装甲を切り裂いていることを、この現状を受け入れられないという目をして見ていた。

「えっ………?」

「ど、どういう………?」

ハイパーセンサーからの情報がモニターに映る。二人の頭上に、見下ろすようにして立っている飛鳥の姿があった。

フォースインパルスの単一能力が発動していたのだ。

二人からISが強制的に解除される。雌雄が決した今、会場は割れんばかりの歓声と拍手に包まれていた。しかし、それらであっても、二人を現実に戻すことはできなかった………。

負けた。それが二人にとっては最悪の終わりだったのだから――

PHASE 43 Fantasy 夢幻 (後書き)

ED3↓RIVER>石井竜也<

如何でしたでしょうか？

ご感想をいただけると嬉しいです。

今後ともよろしく願います。

次回予告↓BGM『明日への橋』↓

最後の戦い

想いと想い

力と力がぶつかり合う

どちらも正しく、どちらも間違っている

共に分かり合うことなど、できるのだろうか

次回 Infinite・Stratos 怒れる瞳 　PHAS
E44 Longimg 憧れ↓

銀兎は夢の中で幻と踊り狂う――

PHASE 4 4 Longing 憧れ (前書き)

いつもご感想と閲覧ありがとうございます。

ご感想をいただけると作者のやる気に繋がりますので、どうかよろしく願います。

それでは本編スタートです。いよいよ対ラウラ戦の開始。一体どのような運命を辿っていくのか――

OP 3 ↓ 僕たちの行方 > 高橋瞳 <

PHASE 44 Longing 憧れ

1

力。それはラウラ・ボーデヴィツヒにとって己の存在意義だ。過去も、今も、そして、未来もきつと。

だが、それでいいと思っている。力がないことを彼女は極端に恐れている。それはまた無能扱いに戻されるのが怖いからだ。

仲が良かったわけではない同僚から見下される毎日。それでまるで耳にこびりついた念仏のように、起きている時も、寝ている時も離れることが無かった。

気が狂いそうだった。力がないことが、これほど自分を惨めにするのかと。その時の彼女の胸にあったのは、ただ純粋な力への渴望だった。

それからどれくらいが経っただろうか。ある日突然現れた人物。彼女がラウラのその後をすべて変えたと言ってもいいだろう。

“織斑千冬”

かの世界最強のIS操縦者といわれる彼女が、ラウラの部隊にやって来たのだ。最初は信じられなかった。それと同時に彼女に嫉妬した。圧倒的な力を持つ千冬と何も力のないラウラ。悔しかったのだ。自分が手の届かない力があることが……。

初めは今と違って反抗的な態度のほうが多かった。しかし、彼女

はそんなことを歯牙にもかけず、厳しい態度を崩すことはなかった。ある日のことだった。いつものように、全く結果の出せないで終わった時のことだ。突然彼女が目の前に立っていたのだ。

その時の状態は、まさに上からラウラを見下しているようなものだった。思わず頭に血が上るような感じがした。教官だからといって、いつまでも我慢できるほど、ラウラの心は発達していなかった。

もしその時、千冬が言葉を違えていたら、別の運命になっていたのではないだろうか。

『私が、お前をもう一度トップに戻してやる』
『えっ？』

まさにその言葉がラウラの運命を変えたのだ。

それからどれだけ厳しい訓練にも付いていった。部隊の中で、一番頑張っていたのは、その時はラウラだろう。死に物狂いで千冬の教導に付いていった。泣きたい時もあった、止めたいと思った時もあった。それでも、わずかに見えた光を手繰り寄せようと必死でもがいた。そして、確かにそれを手にしたのだ。

「あ、あの、ボーデヴィツヒさん？」

「っ！　なんだ？」

「そ、そろそろ決勝なんだけど・・・」

「分かった、すぐに行く」

突然聞こえてきたのはペアを組んでいる一般生徒。クジで決められただけの、その時ばかりのパートナー。とはいえ、ラウラは彼女

のことなど、いないも同然に見ていた。簡単なこと、ここまで彼女一人で勝ちあがってきたのだから。

立ち上がり、鏡を見る。そこには赤い瞳と金色の瞳があった。その金色の瞳を隠すように、部隊で使用している眼帯を装着する。

モニターに映る、最後の試合——一年生による決勝。

“紅月飛鳥・更識簪対ラウラ・ボーデヴィツヒ・一般生徒A”

思わず舌打ちを零す。勝ち上がってきたのは織斑一夏ではなく、紅月飛鳥。これでは復讐を果たせないではないか。写真で映る飛鳥のことを睨みつけるラウラ。

一夏のことを殺すつもりでいた。尊敬する千冬の弟として、認められない、認めなくなかった。第二回モンド・グロッソ、あれは千冬が二連覇という栄光を手にするはずだったのだ。それなのに、一夏が誘拐され、その当時のドイツ軍の協力を得て無事に救出できた。

確かに千冬にとっては優勝よりも、唯一の血が繋がった存在である一夏の方が大切だったのだろう。だが、ラウラからすればそんなことは関係あらず。むしろ一夏存在は邪魔だったのだ。

一夏がいなかったら千冬は帰ることはなかった。この学園の生徒たちが無能だと知ればきつと戻ってきてくれる。そういう思いがあった。そして、圧倒的な力で優勝すれば自分をもっと認めてくれる。それは思いというよりも、もはや狂気にも似たものであった。

「教官、あなたは私が勝てば褒めてくださいますか？ ドイツに戻ってきてくれますか？」

ふらふらと休憩室から出て行く。待機状態のISが怪しい光を放っていた――

2

飛鳥はゆっくりと眼を開ける。その先にいるのは整備室で調整をしている簪と本音の姿。少し寝すぎただろうか、思いつきり伸びをして、身体を伸ばす。

「あ、アーちゃん。おはよ〜」

「ん？ ああ。それで、打鉄式の方は、どうなんだよ？」

「うん・・・・・・」

「？」

簪が少し顔を伏せながら言う。それが意味すること、深くは分からないが、少し無理をさせたのだろうか。あまりいいものではないと、飛鳥は感じていた。

「どうなんだ？」

「あ〜う〜、それはね〜」

本音に尋ねてみる。やはり未完成の状態、無理やり戦闘が可能な状態に持ってきたために、ソフトからハードな面に関して負荷が大きく積み上がりすぎたようだ。

思わず申しわけなさそうな表情と共に、ごめんという言葉を呟く。その言葉を言ったとて、何も変わらない、簪のためになるわけでもない。

「俺がもつと……」

「別にいい。これは私の責任」

「でも！」

「飛鳥！」

「っ！」

突然叫ぶ簪。思わず目を見開き、驚き、固まってしまう。そんな飛鳥を見つめながら、ゆっくりと口を開く。

「私は別にいいって言ってる。だから、飛鳥が気に病む必要はないの」

胸に手を当て、言葉を紡ぐ。

「一緒に戦えたことは嬉しい。ここまでこれたのももちろん」

小さく笑みを浮かべながら言う。

「だからね、そうやって言うのはやめてほしい。そう言われると、私も辛いから」

「あ、うん」

自分が言ってしまったことを後悔する。なら、今自分が何をしてあげられるのか。何をするべきなのか。

それはもう分かっているはず。そう、とてもシンプルなことなのだから。拳を作り、気合を入れるような仕草をする。

「優勝しよう。最初に約束したように、俺達が」
「うん！」

自分に出来ることは、最低限簪に無理なことをさせないようにカバーすること。そして、ラウラ・ボーデヴィツヒの真の思いというものを knowing すること。何故そこまで力を求めるのか。

彼女の姿もまた、I Fの自分の姿を見ているようにしか見えなかったのだ――

3

飛鳥たちはアリーナへと入場していた。作戦は簡単。まずはラウラのペアの女子生徒を倒し、二対一へと持ち込むこと。戦いを見ている、ペアの彼女はそれほどの実力ではない。万が一ということもあるが、まずはすぐにけりをつけるつもりでいた。

「来たのは貴様らか……」

ラウラがそう言いつつ、苦々しげな表情で二人を見る。それは一夏を破ったからであろうか。おそらくはそれであっているだろう、そう飛鳥は思った。

「おかげで私の計算がすべて狂ったぞ」

「それがどうしたって言うんだよ。みすみす誰かが殺されるのを指を咥えて見ていろって言うのか。ふざけるな！」

叫ぶ飛鳥の言葉を聞き、更に不愉快そうな色が濃くなる。彼女にとって、織斑一夏が存在とはそれほどまでのものなのだ。良い意味ではなく、悪い意味でだが。

「なら貴様は認めるというのか、織斑一夏が存在というものを」

まるで神とは真逆の悪魔を言うような言い草だ。ここまでくれば狂信者としてもいいのかもしれない。

「認める認めないと言われれば、認める」

「っ！」

その言葉に反応を見せるのが分かった。

飛鳥には一夏の存在を認めないという理由はない。この学園の仲での唯二人の男子生徒のうち一人であり、クラスメイト、話し友達という存在。

「俺には、あいつの存在を否定する理由は——ない」

気に食わないところもある。相容れないところもある。それでもそれは、人間だから仕方のないこと。

「確かにムカつくけど、お前のように、考えない」

「理解、不能だな」

「それはこっちのセリフだ。俺はお前の考え自体が理解不能だよ」

目を閉じ、静かに語るラウラ。そこには若干の呆れというのが混じっていた。もしかすると、自分に賛同してくれるのではないかとも思っていたのだろうか。それとも、飛鳥の考えていることが、彼女にとってはいくらないということなのだろうか。どちらにせよ、彼女とはぶつかり合う以外はなさそうだ。

お前——ラウラの考え。それは力こそすべて、というものだ。受け入れ難いそれ、否定してしまいたい考え。だが、それをすぐに

できる飛鳥ではなかった。どこかでそれを認めている自分がいる。そう思ったのだ。

全てを失い、力を求めた。それが白騎士事件後の飛鳥。それ以降、守ということを愚直にまで自らの使命のようにも感じていた。

守らなければいけない。それはまるで自身にかけている呪いのようなもの。それは飛鳥を蝕み続け、力を欲し続けている。あの時も、今も、そして、これからも……。

力だけでも……。圧倒的な力のあった白騎士。だが、彼女は一体何を守ったというのだ。篠ノ之束の名声か？　だとしたらその影で幾多もの命が淘汰されている。それが何を意味するか。意味することを考えると、結局何も守れていない。

想いだけでも……。守りたい、守ってみせる、守るね……。言葉で言うことは簡単だ。しかし、その結果はどうだったか。飛鳥は全てを失った。家族を、夢を……。

力だけでも、想いだけでも……。

「そうか、なら仕方がない。貴様を倒し——」

そういうと共に武器を構える。戦闘体制をとり、試合開始のカウントを待つ。

「もう一度あの頃を取り戻す！　必ずな！」

試合開始のブザーが鳴り響いた——

試合開始と共に飛鳥の方へと突進してくるラウラ。その速さは目視が不可能であり、ハイパーセンサーがあつてようやく把握できるもの。そう、ラウラは瞬時加速を使いて間合いを詰めてきたのだ。

振り下ろされるプラズマ手刀。喉元を切り裂かんとするそれが肉食獣の如く唸りを上げる。丁度換装を終え、鉄色の装甲が赤と白のツートンカラーへと変わっていく。対艦刀を振り上げるようにして、それを受け止める飛鳥。ソードインパルスの武装、レーザー対艦刀『エクスカリバー』が光を瞬かせる。

「こいつっ！」

振り払えないことにパワー負けをしていることを知る。思わず舌打ちをするラウラであるが、パワーで勝る飛鳥が対艦刀を力任せに振り上げた。

それによって後方に吹き飛ばされるラウラであるが難なく体勢を立て直し、宙に佇む。

「むっ！」

下を見下ろした瞬間、ラウラに向かって緑色のビームが次々と放たれた。それを寸でのところで回避する。下には左手にビームライフルを握り締まる飛鳥の姿がある。更に離れたところでは圧倒的な実力で女子生徒を攻撃する簪の姿。

——やはりこうなるか。

ラウラは胸中で舌打ちをする。離れたところでもはや絶望的なところまでエネルギーを削られた同じタッグを組んでいる女子生徒の姿が見える。だが、ラウラにとって彼女というのはいてもいなくても同じであった。

試合に出られないのは流石に困るということで強制的なくじ引きで決まったわけであるが、ペアを組む彼女はほとんど初心者に近い。ラウラにとっては相手が無駄なエネルギーを削るためのいい駒くらいにしか見ていないが、決勝にも来て何もできずにやられる彼女にしてみればとんでもないことである、

一途の希望でこちらを何度も見ているが、ラウラの冷たい視線がそれを切り捨てる。自分一人で勝ってみせる。そう、織斑千冬が最強であるのは力があるからと思っているからこそ、このくらいの状況、乗り越えられずして彼女に認めてもらえるはずはないと思っていた。

——役立たずめ！ まあい、むしろ動きやすくて好都合だ。

カマイタチのような連撃が女子生徒に打ち込まれた。巧みな薙刀の操作で一気に勝負をつけた。これに勝つには飛鳥に無駄なエネルギーは使わせないこと、というように簪は思っていた。換装はできるが、その度に大きな隙ができる。それをラウラが見逃すはずはない、そう思っていた。

「ナイス、簪！」

「ありがと」

モニターに映る飛鳥が笑みを浮かべてそう言う。簪も小さく笑みを浮かべ、そう答える。横に並ぶようにして地上に立つ二人。ゆっ

くりと宙から降りてくるラウラ。その表情には今だ一寸の敗北の色は見えない。彼女の脳裏にあるのはただ勝利のみ。圧倒的な勝利にて、自身の望みを叶える。

そのために――

「ここからが」

「第二ラウンドだ！」

三人が一斉にアリーナ中央へと突進を始めた――

5

教師他、特別なことがない限り生徒は入ることはできない管制室にて千冬はモニターを通じて決勝の模様を見ていた。

――ラウラ、お前は相変わらず、か……。

「凄いですねー、紅月くんも、更識さんも、ボーデヴィツヒさんも。やはり今年の一年生はレベルが高いです」

「そう、だな」

物思いに耽っていたためか、真耶の言葉には思わず詰まった感じに返答してしまう。それについては何も言ってこなかったので、ほつとする。

「あの二人に対してボーデヴィツヒさん、ただ一人で互角に戦ってますね。流石は織斑先生が教えた生徒さんですね。あ、軍人さんでしたね」

「まあ、な。とはいえ――」

「ん？ 織斑先生？ どうしました？」
「ん？ ああ、何でもなし。すまないな、山田くん」

いつもの千冬らしくないなと思った真耶が尋ねる。対する千冬は少し考え込んでいるような表情を見せながら何でもないと告げる。とてもそうは思えないのだが、あまり詮索しても意味はないと判断し、それ以上は尋ねずにそうですかというにやめた。

会話が途切れ、それぞれ作業に戻る。とは言っても管制室にて監視をしているくらいなのであるが。

千冬は黙ってラウラの事を見ている。あの頃と何も変わっていない。いな、彼女にはそれ以外に縋るものがないのかもしれないと思った。

——相変わらず力こそが強さと思っているようだな、ラウラ。

千冬は自身が初めてドイツへと教官として向かった時から、ラウラは力に飢えていたと記憶している。

教導している時も何度も伝えてきたつもりだった。力だけが、そのものの強さを決めるのではない、ということ。

力だけでは何もできない。解決させられることは本当に少ない。そして、それを何気無しに振るうことは、それはただの暴力でしかない。

それをしてしまったばかりだというのに、彼女は反省した様子は皆無である。

『ラウラ、何故あのようなことをした』

『教官、教官だって分かっておられる筈です。いくら候補生だからといってあの程度……、あの程度の者たちに、教官は勿体無い！』

『ラウラ、頼むから私の話を——』

『どうか教官！ もう一度我がドイツでその手腕を——』

『ラウラ・ボーデヴィツヒ！』

『っ！』

——ラウラは全く私の話を聞こうとしてくれなかった……。彼女の目には一体何が映っていたのだ。私か？ ならどんな私が……。

千冬はラウラからセシリアと鈴に対して模擬戦の領域を遥かに超える行為を行ったことに対して尋問するために会議室へと呼んでいたのだ。だが、先ほどから話は平行線。決して交わることはなく、ただただ時間だけが経っていく。

ラウラが千冬を見る目はあの頃から変わっていない。ただただ子どもが憧れの人に会った時に見せる、キラキラとした羨望の瞳だ。それはこそばゆく、それと同時に千冬の不安を掻き立てるものだった。

まるで純粹無垢な子どもの瞳であるのに、その瞳の奥にあるのは濁った何か。それが一体何なのか、千冬には分からない。

『もう一度聞く……、何故オルコットと鳳に対してあのようなことをした。お前が自身の立場を知っていれば分かっていることだろう』
『教官は……、あれしきのことで、尋問するのですか？』

『ラウラ、私は——』

『きっと教官は疲れているのです。私がここに来るまでに色々あったというのを聞いています。詳しくは分かりませんが、きっとそ

れが原因です。また日を改めて――』

去って行くラウラ。呆然として、彼女の去っていく後姿を見送ることしかできなかった。確かに始めてあったときよりはたくましくなった印象がある。だが、まだ本当の力というのを彼女は知らない。伝えなければいけないというのに、どうしてもできないでいた。

あの時、どうして彼女を呼び止めることができなかったのだろうか――

6

ワイヤーブレードがそれぞれに二本ずつ、計四本が射出された。複雑な起動を描きながら二人に迫る。

二人はそれぞれスラスターを微調整してそれらを回避し続ける。その時飛鳥の足元に何かが着弾し、破裂する。

大型レールカノンが炸裂しており、砲口から煙が出ている。逃げるのは性に合わないということで攻めに転じる飛鳥。両手に構えられたシャイニングエッジビームブーメランが投擲され、ワイヤーブレードを切り裂く。それと同時にソードシルエットを解除し、フォースシルエットに換装する。装甲の色が赤と白のツートンから、トリコロールカラーへと変わり、ABシールドが上下に展開した。

肩部にある突起を掴み、スラスターを吹かせる。全四門のバーニアが火を噴いたようにして加速する。一気に間合いに入る飛鳥がビームサーベルを振り下ろすと、ラウラが瞬時に展開したプラズマブレードにてそれを受け止める。

お互いに睨み合うようにして鏢迫り合いになる。その時突然大きな動きがあったと思ったら、大型レールカノンがゆっくりとこちらに照準を合わせていた。危険を知らせるアラートが鳴る。咄嗟に飛びのけ、シールドを翳す。それと同時に火を噴いたレールカノン。銃弾が飛鳥を守るシールドに次々と着弾していき、爆発する。

爆発が煙を生み、飛鳥とラウラの両者の間を遮る。飛鳥からすれば何とか煙から出る必要はあるが、ラウラとしてはこれで少しは時間が稼げる。もう二本残っていたワイヤーブレードが今も簪を攻め立てる。

「きゃっ！」

「何！？ 簪！」

簪の小さな悲鳴が聞こえたために、さっと飛鳥の頭が冷える。それと同時にフルスピードで煙を突き破り、外へと脱出する。そこにはワイヤーブレード煮から娶られる簪の姿があった。

「こいつ！」

「負けない！」

ワイヤーブレードが絡まっているために活動範囲が狭まっているが、ラウラのプラズマブレードを夢現にて何とか捌かんとしていた。

しかし、世代が一つ違うだけでも性能というものが違っている。更に簪の打鉄式は未だ未完成。更にここまでの戦いで、やはり不具合が生じていた。徐々にその装甲に傷がついてくるのはおかしくない。

「たかが未完成の欠陥第二世代でこの私と戦おうだなんて、片腹痛

アンティーク

いな！」

振り切られたプラズマブレードが装甲を大きく削り、それと共にエネルギーも奪っていく。悔しそうな表情を向けながら、夢現にて反撃する。

「こいつ！」

ラウラが寸での所でその反撃の斬撃を回避することに成功する。

——死んでない、まだ目が……。

「負けない！ 世代なんて、性能だなんて関係ないことを——」

そして、自分だってできるのだと。姉には及ばなくても、彼女ができたことくらい、自分だってできるのだと。それを——

「証明してみせる！」

「負け犬が、くだらない！ 中古品は大人しくスクラップにでもされろ！」

そう言って右手を翳す。反応して離脱しようとした簪であるが時既に遅し。すでに起動させられていたA I Cによって動けなくなる。

「散れ」

そう宣言して、ゆっくりと破壊の鉄槌を構える。大型レールカノンの砲口が鈍い光を放ちながら、簪に向けられる。

「くっ！」

必死に動かそうとするもそれは叶わない。

やられる！　そう思った瞬間その二人の間を切り裂くようにして緑色のビームが飛来する。

「ちっ！　邪魔が入ったか！」

突然のアラート音に咄嗟にA I Cを解除して飛びのいたラウラであるが、苦々しげな視線を別の方向へと向ける。そう、こちらに向かってライフルの銃口を向けている飛鳥に対して。

「簪！」

「だいじょうぶ」

そこから離脱することに成功する。

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー

“A I C”

一対一では対象物の動きを完全に停止させることが出来る。だが、それも無敵ではなく、弱点があった。それはA I Cを発動させ、対象物を停止させているとき、その対象物に対して意識を集中させておかなければ効果が持続しないというものだ。

ただ僅かな音や衝撃でさえも、一瞬でも意識をそちらに向けた瞬間、その鎖は解き放たれる。最強であっても、無敵ではない。弱点があるからこそ、それを打ち破るべく、飛鳥と簪はペアを組んでいる。

「私は、一人じゃない！」

隣にいる飛鳥。背中を支えてくれている。だから、A I Cに捕まってもやられるという気はしなかった。

負けない！ 負ける気などサラサラないラウラであるが、どうしたわけか、目の前の簪を見ていて、勝利が霞んで見える。戸惑いを悟られまいとして、ワイヤーブレードを破壊された二本のほかの四本を射出する。

「散開！」

飛鳥の言葉に簪と分かれる。スラスターを吹かせて加速しつつビームライフルで牽制する。ラウラも回避行動をとりながらジグザグに動いて、回避しきれないのはプラズマブレードで相殺する。

その背後から危険を知らせるアラートが鳴る。

——しまった！

瞬時加速を使い、一気に背後に回った簪。ラウラの意識が飛鳥に向いている間に一気に距離を縮め、潜り込んでいた。

ハイパーセンサーに映る薙刀を振り下ろす簪の姿。ラウラは咄嗟にA I Cを使うかと考えたが、驟雨のようなビームが襲うために集中できない。内心で舌打ちをしつつ、瞬時加速を使ってそこを離脱する。

「こいつっ！」

アンティークである第二世代如きに背後を取られたことをラウラにとっては屈辱以外の何物でもなかった。頭が沸騰するほどに怒り

狂う。

自分の力が負けないわけがない。高々二人くらい、蹴散らしてやる。怒り狂うラウラの頭に浮かぶのは、唯二人を叩き潰すだけ。ここまでコケにされたのは初めてだ。

ワイヤーブレードが再び射出される。

一閃――

夢現とビームサーベルが軌跡を描いてそれらを切り裂く。思わず戸惑いの色を見せる。それを見逃さずに二人が接近して、刃を振り下ろそうとした。

「あ、あれ？」

次に困惑の声を上げたのは簪の方だった。打鉄式式のモニターに映る『エラー』という文字。サアツと血の気が引いていくの感じた。

ここに来ての故障。焦る簪の方に意識を向ける飛鳥。それが二人にとって初めて見せた大きな隙。それを見逃すわけのないラウラ。残っていたワイヤーブレードを簪の方に向けると、遠心力を使い、飛鳥に衝突させる。

「ぐっ！」

「きゃっ！」

衝突する衝撃が二人を襲う。共にエネルギーが減るが、簪の方の消費が大きい。ここに来て、VPS装甲の物理攻撃に対する耐性が仇となっていた。更に衝撃による消費で止まらない。何が原因なの

か、打鉄式式のシールドエネルギーの減少が止まらないのだ。

焦る簪。二人はそれに気を取られていたために、まだ打鉄式式の脚部にワイヤーブレードが絡まっていることに気づけていなかった。

「ふん、何を二人でコソコソと！」

思いつきり引つ張ると簪がそれに引きずられる形でラウラの方へと連れて行かれる。

「簪！」

突然目の前から姿を消したことを見て、ハッとして意識を戻す飛鳥。しかし、あまりに動くのが遅かった。

——一体何が起きたんだよ！？

そういくら考えても分かるわけがない。しかし、何かしらの故障があったことは確かだ。もともと未完成であった打鉄式式。ここへ来て無理が重なり、それが一気に故障という形で影響が出てしまったのかもしれない。

だが、シールドエネルギーの減少が止まらないのはまずい。このまま攻撃を受け続ければ、数発でISが解除される。今のラウラを見ていれば、そんなときも無慈悲に攻撃してくる可能性が高い。問い詰めてもこう言うだろう——

“そこにいたのが悪い”

最悪の未来を予想していた飛鳥。その間にもラウラは動きを止め

ない。目前まで引きずってきた簪に向かって、プラズマブレードを展開するとその装甲にまるで気に入らない何かを必死に叩き潰すようにして攻撃を続ける。

衝撃が体を蝕み、苦痛に顔を歪める簪。シールドエネルギーと共にISの装甲が徐々に破壊されていく。所々ISスーツがむき出しになっているところもある。これ以上ダメージを蓄積させれば未完成の打鉄式だ。取り返しをつかないことになる。

「やめろおおお！」

スラスターを全開に、飛鳥はその光刃を片手に二人に接近した――

6

一方的な暴力が目前で繰り広げられる。これはまるであの時のダイジェストを見ているようなものだ。

始まる前に言ったはずだ――守ると。

一体自分は何をしている。ここでただ見ているだけなのか。またあのときのようにただ何もできずにいるのか。

――違う！ 俺は、俺は！

あの時から確かに強くなった。だから、今度こそ大切な者を――守りたい。

「これで――」

既に限界に達している簪と打鉄式式に対して無慈悲にも大型レールカノンを構える。A I Cも何も使っていないが、簪には既に逃げるだけの体力も残っていない。

砲口に光が集まる。今度こそやられる。だが、どこかで大丈夫だ
という思いがあった。

ラウラの言葉を遮るようにして大型レールカノンが銃身が切り裂かれたために、発射寸前だった中で爆発が起きる。その余波がそこにいた三人を襲う。

「ちっ！」

その余波と煙で視界が遮られる。とはいえハイパーセンサーにて向こうに二人がいることだけは分かっていた。

対する飛鳥はその腕の仲に簪を抱えながらも後退していた。残りエネルギーは50もないという絶望的なもの。それが40、30と今も減少が続けている。このままではI Sが解除され、彼女が危険にさらされる。この状態で絶対防御が発動するかどうかも怪しいところ。もしものことがあったらと考え、慌ててピットのほうへと向かう。簪だけでも棄権させるために。

「させると思うか？」

「ちっ！」

煙の中から現れたラウラ。残っていたワイヤーブレードがしつこく二人のことを追いかける。捕まえるというよりも、その場に止まらせるのを目的としてるようだ。

「貴様らはここで倒す！」

「こいつっ！」

飛鳥はビームライフルを咄嗟に構えるが、鷹が獲物を射止めるが如く高速で飛来したワイヤーブレードがライフルを射抜き、爆散させる。小爆発が打鉄式式のエネルギーを食いつくし、絶対防御が発動することなく、簪からISが解除された。

一瞬で目前まで迫るラウラ。瞬時加速を使って間合いに入ったのだ。そして、右手を翳す。それと共に飛鳥の動きが完全に静止する。観客席からは悲鳴と歓声が飛び交う。

AICが発動し、飛鳥は動きを止められ、背筋に嫌な汗が流れる。必死に動かそうとするも、それは徒労に終わる。

ラウラが両手にプラズマブレードを構える。それが振り下ろされ、バーニアスラスタの主翼を切り裂く。それだけで刃ほとんどダメージはないが、これは見せしめだ。

自分には誰も敵わない。圧倒的な力を見せ付け、ドイツのすばらしさを示し、何より自分が強いということを、誰よりも千冬に見てもらいたかった。そして、褒めてもらいたかった。

プラズマブレードが振り下ろされる。その進行先には簪もいる。

——まずい！

何とかしないと思う飛鳥であるが、AICによって動きが取れない。ゆっくりとその熱刃が近づく。

「まずは一人！」

「させて、たまるかよおお！」

「っ！」

そう叫ぶや否や、虚空から何かが飛来する。ラウラにアラート音が聞こえる。ハイパーセンサーで見つけたそれ。換装したときに離れていたソードシルエットがスラスターを吹かして、それ単機でこちらに向かって飛来していたのだ。そのレーザー対艦刀『エクスカリバー』にもレーザー刃が展開され、振り下ろされたプラズマブレードと飛鳥たちの間に割って入り、盾となる。

すさまじい衝撃とスパークが双方の間で起きる。思わずその光に集中力をそがれたラウラ。A I Cが解除され、自由になった飛鳥はそのまま弾き飛ばされつつあったソードシルエットのシャイニングエッジビームブーメランを掴むや否や、ラウラに向けて投擲した。

難なくプラズマブレードでそれを弾き飛ばすものの、それに気を取られている隙に、飛鳥はピット方向へと向かう。

「逃がすか！」

瞬時加速で追いかける。付かず離れずの距離を保つがこのままではまずいと思う飛鳥。咄嗟に身体を捻り、C I W Sにて牽制する。それによって動きが一瞬止まるラウラ。その隙を付き、簪を地面に下ろし、自身はトップスピードでラウラへと接近する。

「ふっ！ 馬鹿め！」

ゆっくりと上げるは右手。その仕草は彼女がA I Cを使用するこ

とを意味している。そう何度も同じ手は喰らわない。ただでさえ、それを使いますよと言っているようなものなのだから。

「このままじゃマズイ！」

簪をピットまで安全に連れて行く必要がある。守るべきものを背中中で感じている今だからこそ力を発揮しなければいけない。

「一気に片をつけてやる！」

左腕に装備されているABシールドを投げ捨て、左手にもビームサーベルを構える飛鳥。逆刃に構えられた両光刃が光を放つ。

「AICの前には敵は——いない！」

「想いが無い力を振りかざして！ それに意味があると思っているのかよ！」

四基のバーニアスラスタが爆発的な加速を見せる。

“二重瞬時加速”

そのGに耐えながらも飛鳥は接近する。いくら早くても動きは直線。ラウラにとって、それをとめることは容易であった。

「力無き者が考えることなど、妄想にすぎん！」

「なら！ あんたみたいな想い無き者が振るう力なんて、暴力に過ぎないんだよ！」

全てが飛鳥自身に当てはまること。大切な者を守りたいと思っていたこと。絶望し、力をひたすらに求めた。だが、そのどちらにも

偏らなかったのは、守りたいという者たちがいたから。彼女たちが、それを教えてくれたから。

だからこそ、ぶつかり合う。飛鳥には、ラウラの想いを理解できつつも、納得、認めることはできないから。

「あんたの力が示すものは一体何なんだ！ 意味するものは何なんだ！」

「力こそ私の存在意義！」

「何だよそれ……、意味が分からない！」

「理解されたいとも思わない。それしかないのだ、私には！」

疑問だけが飛鳥の頭にあった。何故彼女はそういう考えしかできないのだと。軍人だからといって、それだけに拘る者というのは少ないと飛鳥は思っていた。多かれ少なかれ、それ以外にも何かを求めるものがあるはずだ。

だが、ラウラの言葉を聞いていると、まるで自分は戦うための道具でしかないと言っているようにしか思えなかった。強くならなければいけない。一体彼女は何者なのかと。

「貴様に何が分かる！」

「っ！」

唐突にラウラが叫ぶ。そこには悲痛な思いというものが初めて込められていたように思う。

「戦うために生み出され、戦うための術だけを教え込まれ、実力を発揮できないからといってゴミのように扱われる！ その辛さが、苦しみが貴様に分かるか！」

「な、何なんだよ、それ……」

彼女の口から吐き出されるのは今の候補生という輝かしい肩書きを持っている彼女にはに使わないものだった。戦うために生み出されるとは一体なんだ？ 戦うための術だけを教え込まれたとは一体なんだ？ 実力がないものはゴミ扱いとは一体なんだ？ それらはまるで――

「人のすることじゃない！ 何なんだよ、それは！」

裏家系である更識や布仏と知り合い出会っても、全てを知っているわけではない。ただそういう者たちもいるのだというくらいだろうか。世界にある全ての闇を知ることが、飛鳥にはできない。

その知らなかった闇が、今こうして人の形で飛鳥の前にいた。

「アンタにはないのかよ！ こうしたい、こうなりたい、これを見たい、これを感じたい、これを食べたい、これを知りたい……・、そういう願望というものが！」

「くだらない」

「なっ！？」

飛鳥の言葉を唯一言で切り捨てた。それだけで十分だった。飛鳥はそれを聞き、唯啞然としている。彼女のその言葉に、躊躇というものがあったからだ。

「そんなこと、下等な者たちがすること。私はただ力があればいい。戦う者として、兵士として……」

「あんたはそれでいいのかよ！ それがあんたの本心なのかよ！」

「しつこいな。私はそれでいい。力以外に何が必要か！」

「そんな人形のような生き方、それでいいのかよ、あんたは！」

しつこくも叫ぶ飛鳥。イライラの溜まるラウラ。話しは平行線を辿る一方である。もはやぶつかり合うことでしか解決できないのだろうか。

「いい加減耳が痛い……。貴様を倒し、ドイツが優れていることを証明し、そして――」

やはりかと思った。彼女のここに來た理由。確かにそれはドイツの新型の第三世代の機体のデータ取りもあっただろう。それ以外に他国よりもそれが優れていることを証明し、国の地位を上げるという思惑があった。それはあくまでも国の考え、そして、彼女にはまた別の思いがあった。

織斑千冬をドイツに連れ戻すということ。数年前に一度だけ彼女がドイツのラウラが所属していた部隊に來ていた。その理由は第二回モンド・グロッソでドイツの情報があったから織斑一夏が救出で來たということのためだった。

彼女がいたから今のラウラがいるといっても過言ではない。そんな千冬が何故こんなところで教師をしているのか。それがラウラには理解できなかった。彼女はこんなところで納まるような器ではない。もっとそのスペックを発揮できるところにいるべきなのだ。一方的な思いであるが、それだけは譲れなかった。

「教官をドイツに連れて帰る！　こんなところにいるべき方ではないから！」

「どうでもいいけど、それはあんたの一方的な押し付けだ！　あいつの想いを汲み取ったことがあるのかよ！」

「教官をあいっ呼ばわりだと……、今までは我慢していたが、もうこれ以上は無理だ、お前を——殺す！」

「そうかよ。ならあんたは俺が倒すんだ！ 今日、ここで！」

そうしてお互いが光刃を構え、飛び出していった。

単一能力——夢幻。

銀兎は夢の中で幻と踊り狂う——

PHASE 4 4 Longing 憧れ (後書き)

ED3↓RIVER>石井竜也<

如何でしたでしょうか？ ご感想をいただけると嬉しいです。

今後ともよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8276w/>

Infinite・S・Destiny～怒れる瞳～

2011年12月7日00時54分発行